



日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズムー中国語との比較対照と合わせてー

陳, 奕廷

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6363号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006363>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

平成 27 年 3 月 25 日

日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズム

—中国語との比較対照と合わせて—

学籍番号 : 109L202L

氏 名 : 陳 奕廷

所 属 : 神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 松本 曜 教授

(副) 岸本 秀樹 教授

(副) 鈴木 義和 教授

目 次

第 1 章 序論.....	1
1.1 研究対象.....	1
1.2 研究目的.....	7
1.3 使用データ.....	12
1.4 本論文の構成.....	14
第 2 章 先行研究.....	17
2.1 日本語語彙的複合動詞における一般的な結合制約.....	17
2.1.1 先行研究における複合動詞の形成メカニズム.....	17
2.1.2 他動性調和の原則.....	19
2.1.3 主語一致の原則.....	21
2.2 日本語語彙的複合動詞における意味的な制約.....	22
2.3 中国語複合動詞における一般的な結合制約.....	23
2.4 先行研究における意味構造.....	25
2.4.1 語彙概念構造(LCS).....	25
2.4.2 クオリア構造.....	28
2.5 まとめ.....	32
第 3 章 理論的背景.....	34

3.1	コンストラクションとコンストラクション形態論	35
3.1.1	コンストラクション	35
3.1.2	コンストラクションの形式についての再考	39
3.1.3	語レベルのコンストラクション	42
3.1.4	階層的レキシコン	45
3.2	フレーム意味論	48
3.2.1	百科事典的知識	49
3.2.2	フレーム	53
3.2.3	本論文におけるフレーム	60
3.3	文化と言語	65
3.3.1	文化の違いに起因する言語の違い	66
3.4	まとめ	70
第 4 章	コンストラクションに基づく複合動詞の考察	71
4.1	コンストラクションを用いた日本語複合動詞の先行研究	74
4.1.1	野田 (2009)	74
4.1.2	松本 (2011), Matsumoto (2012)	76
4.1.3	個別動詞レベルのコンストラクションの必要性	78
4.2	日本語語彙的複合動詞の階層的スキーマネットワーク	79
4.3	日本語語彙的複合動詞の認知的な動機付け	83
4.3.1	複合事象を表す日本語語彙的複合動詞の認知的な動機付け	84
4.3.1.1	因果関係	85
4.3.1.1.1	原因—結果型	87

4.3.1.1.2 手段—目的型.....	88
4.3.1.1.3 背景—具現型.....	90
4.3.1.2 因果関係による必然的な共起性.....	91
4.3.1.2.1 様態—移動型.....	93
4.3.1.2.1.1 共通原因様態型.....	94
4.3.1.2.1.2 共通目的様態型.....	96
4.3.1.2.2 同時発生型.....	99
4.3.1.2.2.1 共通原因事象型.....	101
4.3.1.2.2.2 共通目的事象型.....	102
4.3.2 並列関係.....	104
4.4 日本語語彙的複合動詞におけるコンストラクショナルイディオム.....	105
4.4.1 コンストラクショナルイディオムと複合動詞の生産性.....	106
4.4.2 コンストラクショナルイディオムと拘束意味.....	109
4.5 個々の日本語語彙的複合動詞における全体的な性質.....	110
4.5.1 形式の面における全体的な性質.....	111
4.5.2 意味の面における全体的な性質.....	120
4.5.2.1 合成性と分析性を失っている例.....	121
4.5.2.2 分析的だが合成性を失っている例.....	122
4.5.2.3 特定のコンテキストの定着.....	131
4.6 レキシコンにおける語彙の競合.....	132
4.7 まとめ.....	134
第5章 意味フレームに基づく複合動詞の考察.....	136

5.1 フレームを用いた複合語の先行研究.....	139
5.2 意味フレームレベルの制約.....	140
5.2.1 動詞の意味フレームと複合動詞の意味的な結合制約.....	141
5.2.2 意味フレームに基づく複合動詞の結合制限と類義表現の使い分け	
—「～おとす」「～もらす」「～のがす」を例に—.....	150
5.2.2.1 組み合わせの制限.....	151
5.2.2.1.1 「～おとす」.....	153
5.2.2.1.2 「～もらす」.....	155
5.2.2.1.3 「～のがす」.....	157
5.2.3 複合動詞における多義語の解釈—「～取る」を例に—.....	159
5.3 背景フレームとフレーム要素の役割.....	163
5.3.1 複合動詞と背景フレーム—〈競争〉フレームと「勝つ」を例に—.....	163
5.3.2 背景フレームと文化.....	171
5.3.2.1 異なる文化に基づく複合動詞の違い.....	171
5.3.2.1.1 異なる社会における複合動詞の違い.....	171
5.3.2.1.2 異なるコミュニティにおける複合動詞の違い.....	172
5.3.2.2 文化の変遷に基づく複合動詞の産出と衰退.....	177
5.3.3 意味形成に関わる事象参与者.....	178
5.3.4 V1 と V2 の指す対象が異なる場合の意味形成.....	181
5.4 事象参与者と項.....	188
5.4.1 先行研究の問題点.....	188
5.4.2 事象参与者の合成に基づく一般的な項形成.....	189

5.4.3 事象参与者同士が合成されることで、動詞が独立して使われるときよりも 項への制約がきつくなる場合	192
5.4.4 事象参与者同士が合成されることで、動詞が独立して用いられるときと異 なる項が実現する場合	195
5.5 複合動詞の適格性	200
5.5.1 影山 (1993) における「レキシコンへの登録」説	200
5.5.2 使用頻度に基づく「耳馴染み度」	201
5.6 まとめ	203
第 6 章 主語不一致型複合動詞の形成メカニズム	204
6.1 自動詞化	205
6.1.1 複合動詞の自動詞化についての先行研究	206
6.1.2 プロファイルシフトと痕跡的認知による自動詞化	209
6.1.2.1 プロファイルシフト	209
6.1.2.2 痕跡的認知	212
6.2 他動詞化	216
6.3 アナロジー	219
6.4 メトニミー	220
6.5 まとめ	221
第 7 章 中国語複合動詞についてのフレーム・コンストラクション的考察	222
7.1 コンストラクション形態論から見た中国語複合動詞	222

7.1.1 中国語複合動詞の階層的スキーマネットワーク.....	222
7.1.2 中国語複合動詞をコンストラクションとして見なす根拠.....	227
7.2 フレーム意味論から見た中国語複合動詞.....	233
7.2.1 フレーム参与者共有の原則.....	233
7.2.2 中国語複合動詞の自他交替.....	236
7.3 まとめ.....	240
第 8 章 主語一致の原則の有無と日中両言語の違い.....	241
8.1 日中両言語の違い.....	241
8.1.1 非意図的な使役事象と意味の曖昧性.....	241
8.1.2 主語一致の原則の有無.....	243
8.2 タルミーの提起した問題に対する答え.....	250
8.3 まとめ.....	251
第 9 章 結論.....	252
9.1 本研究のまとめ.....	252
9.2 本研究の意義.....	254
9.3 今後の課題.....	255
参考文献.....	256
Appendix.....	276

表記・略語

表記

- () : 補足説明, 必須ではないもの, 訳
- 「 」 : 日本語における強調, 用語, 引用
- “ ” : 日本語以外における強調, 用語, 引用
- 『 』 : データベース, 書名
- < > : 日本語における意味
- ‘ ’ : 日本語以外における意味
- [] : コンストラクション(先行研究における LCS)
- 〈 〉 : 背景フレーム
- 【 】 : フレーム要素
- // : 音素表記
- * : 完全に容認されない表現
- ?? : 容認度がかなり低い表現
- ? : 容認度が低い表現
- # : 本来意図する意味ではない意味で使われている表現

略語

Ag=動作主, Th=主題, Subj=主語, Obj=目的語, Obl=斜格, GEN=属格, PST=過去, PASS=受動, BA=中国語において目的語を導くマーカー, REN=連用形, E=イベント, T=イベントの発生時間, SIMP=単純和語動詞, INT=自動詞, TR=他動詞, AGT=意志的な動詞, CHG=変化を表す動詞, CAUS.CHG=使役変化動詞, MAN=様態動詞, MOT=移動動詞.

謝辞

本論文は、筆者が神戸大学人文学研究科博士課程後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。多くの人の支えがあったからこそ、本論文を書き上げることができました。ここでご支援とご指導を賜った方々に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

まず、指導教員である松本曜先生には多くの面においてサポートをしていただきました。日頃からゼミなどにおいて、研究についてのアドバイスをして下さいました。この論文はこうした先生との議論の中で生まれたものと言っても過言ではありません。このような研究に関する議論を通じて、研究者としてのかけがえの無い財産となった論理的な思考力を、自然と身につけることができました。ほかにも、研究と真摯に向き合う姿勢、研究者のあるべき姿、そして、教育者としての一面も大変勉強になりました。なにより純粋な研究の楽しさを教えてくれたことに深く感謝しています。

副指導教員、そして博士論文の審査委員を担当していただいた岸本秀樹先生と鈴木義和先生、また同じく審査委員を引き受けて下さった田中真一先生にも、公開審査などの発表の度に、多くの有益なコメントをいただきました。先生方はそれぞれ専門が異なりますが、違った視点から、私自身では気付かないような論文の問題点を指摘していただいたことに感謝します。

外部の審査委員として来て下さった大阪大学の由本陽子先生にも、論文審査だけではなく、国立国語研究所の発表会や日本言語学会、関西言語学会の大会発表の際にも、貴重なコメントをいくつもいただきました。複合動詞研究の第一人者であるにもかかわらず、若輩者である私に色々とお話をして下さいましたことに感謝の意を申し上げます。

神戸大学言語学研究室の先輩の方々にもお世話になりました。大阪大学の秋田喜美先生には度々研究についての貴重な助言をいただき、学術誌に投稿する論文を見ていただいた時も、とても丁寧にコメントして下さいました。夏海燕氏と游韋倫氏、史春花氏は研究室の先輩ではありますが、公私にわたって、三年間共に支え合ってきた戦友だと感じています。私が日本で初めて学会発表したのも、先輩方に日本言語学会のワークショップに誘われたのが始まりでした。この後の多くの研究発表へと繋がる最初のきっかけを作ってくれたことに感謝の気持ちを伝えたいです。

国内外の学会で発表した際にも、多くの方々からコメントやご指摘をいただきました。全ての方を列挙することはできませんが、この論文がそれらのコメントを反映したものであることを祈ります。

また、台湾大学に在籍していた際に、認知言語学という領域に導いて下さった謝豊地正枝先生にも感謝したいです。先生の認知言語学の授業を受講していなければ、私はきっと博士課程には進んでいなかったと思います。卒業してからも、私のことを気遣って下さって、親身になって色々とアドバイスをしてくれたことに御礼を申し上げます。

そして、生前に残念ながらお会いすることは叶わなかったが、この論文に多大な影響を与えた偉大な言語学者である Charles J. Fillmore 先生にも感謝します。この論文を通じてフィルモア先生の見解の明を示すこと、そして、「コンストラクション」と「フレーム」という二本柱の言語理論を広めることができたら幸いです。

最後に、言語学者になるという夢を追いかけることを応援してくれた家族にも、心から感謝しています。落ち込んだ時や研究に行き詰まった時、家族の精神的な支えで立ち直ることができました。色々と苦勞をかけたが、この論文がその恩に報いるものであることを願っています。

なお、本研究は JSPS 特別研究員奨励費受付番号 1964 の助成を受けたものです。研究に専念できるように、経済的に支援して下さいました日本学術振興会に感謝致します。本論文の不備は全て筆者の責任です。

2015 年 3 月 陳奕廷

第1章 序論

1.1 研究対象

日本語には二つの動詞を「組み合わせる」ことで作られた「複合動詞」というものが多く存在している。複合動詞はこの「組み合わせる」のように、前項動詞 V1 がいわゆる連用形の形を取り、後項動詞 V2 と結合するものであり、二つの事象(event)が一つの複合事象として認識されることを表す。同じように、中国語¹にも「推倒 *tuī-dǎo* (push-fall)」や「流動 *liú-dòng* (flow-move)」などのような、[V-V]_v型の複合動詞が多く存在する。本論文は主に日本語の複合動詞を分析の中心に据えるものであるが、中国語の複合動詞も折にふれながら、両者を比較することで、その共通点と相違点も指摘する。日本語と中国語という、共に[V-V]_v型の複合動詞が多く存在している両言語を取り上げて分析することで、本研究が想定する複合動詞の形成メカニズムが通言語的なものであるかどうかを確かめることができる。また、複合動詞の形成に存在している制約が普遍的なものなのか、それとも言語固有のものなのかを明らかにすることができると考えられる。

研究対象となる複合動詞だが、日本語の場合は「切り倒す」や「走り疲れる」、「舞い落ちる」などいわゆる「語彙的複合動詞」を対象とする。「書き忘れる」や「走り始める」などのように、V1 と V2 が補文関係にある「統語的複合動詞」は、その意味が完全に透明かつ合成的であり、高い生産性を有する。このような意味の透明性と高い生産性を持つ統語的複合動詞は、典型的な語よりむしろ文や句に近いので、本研究の考察の対象から外す(影山 1993: 77-79 を参照)。

語彙的複合動詞と統語的複合動詞について、影山 (1993) では次のようなテストを用いて両者の違いを示している。

まずは複合動詞における V1 を代用形の「そうする」で表せられるかどうかというテストがある。これは「語(複合語を含む)の一部分だけが文中の照応に参加することは

¹ 本稿での分析対象としての中国語は中国の北方方言に基づく現代の共通語(標準語)として、台湾で使われている「国語」のことを指す。

きない」という「語彙照応の制約」に基づくもので、一つの語であれば、その内部に代名詞を含めることができない。(1)のように、語彙的複合動詞ではV1を「そうする」で代用できないのに対し、統語的複合動詞は「そうする」でV1を代用できる。

(1) 代用形「そうする」

a. 語彙的複合動詞

遊び暮らす→*そうし暮らす, 押し開ける→*そうし開ける,
 追い払う→*そうし払う, 仕舞い込む→*そうし込む,
 見落とす→*そうし落とす, 泣き叫ぶ→*そうし叫ぶ

b. 統語的複合動詞

調べ終わる→そうし終わる, しゃべりまくる→そうしまくる,
 食べ過ぎる→そうし過ぎる, 出し忘れる→そうし忘れる

次に、「お飲みになる」のような主語尊敬表現を用いて、V1のみの尊敬語化が可能かどうかを見るテストがある。

(2) 主語尊敬語

a. 語彙的複合動詞

ノートに書き込む→*お書きになり込む
 手紙を受け取る→*お受けになり取る
 泣き叫ぶ→*お泣きになり叫ぶ

b. 統語的複合動詞

歌い始める→お歌いになり始める
 しゃべり続ける→おしゃべりになり続ける
 電車に乗り損ねる→お乗りになり損ねる

3つ目のテストとして、V1のみを受身形にできるかどうかというものがある。

(3) 受身形

a. 語彙的複合動詞

書き込む→*書かれ込む, 押し開ける→*押され開く

b. 統語的複合動詞

呼び始める→呼ばれ始める, 愛し続ける→愛され続ける

4つ目のテストはV1を同義的なサ変動詞と置き換えられるかどうか, というものである。影山(1993:88)によると, 「雑談する」というようなサ変動詞は深層構造においては「雑談をする」というような句を構成しているため, 語彙的複合動詞の中には生じ得ないという。

(4) サ変動詞

a. 語彙的複合動詞

貼り付ける→*接着し付ける, 跳び越す→*ジャンプし越す,

吸い取る→*吸引し取る, 沸き立つ→*沸騰し立つ

b. 統語的複合動詞

見続ける→見物し続ける, 弱りきる→衰弱しきる,

調べ尽くす→調査し尽くす, 手紙を出し忘れる→投函し忘れる

5つ目のテストに, 「飲みに飲む, 走りに走る」のような重複構文を用いたものがある。影山(1993)が主張するには, 動詞重複は統語部門で起こるため, 統語的複合動詞はV1に動詞重複を許すことができるという。

(5) 重複構文

a. 語彙的複合動詞

*行方不明の子供を探しに探し歩いた。

*トーナメントを勝ちに勝ち抜いた。

*子供たちに愛情を注ぎに注ぎ込んだ。

*敵を待ちに待ち構えた。

b. 統語的複合動詞

大臣はそれをひた隠しに隠し続けた。

彼女は結婚問題で苦しみに苦しみ抜いた。

選手達は、公式戦の開幕を控えて、走りに走り込んだ。

鍛えに鍛え抜かれた身体。

その日は運がつきにつきまくった。

影山 (1993) では以上のようなテストに基づいて、語彙的複合動詞と統語的複合動詞はそれぞれ語彙部門と統語部門で形成されたものだと主張した。しかし、影山 (2012) においては、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いは、必ずしも語形成が起こる部門 (module) の違いと見なくてもよいと主張を変更している。そして、語彙的複合動詞では、形態的緊密性 (lexical integrity) が成立するのに対し、統語的複合動詞では、形態的緊密性が成立しない、と述べている²。

上述のような語彙的複合動詞と統語的複合動詞の形態的緊密性の違いから、本研究は語彙的複合動詞だけを扱う。そして、本研究では日本語の語彙的複合動詞を以下のようなタイプに分ける。

(6) a. 原因—結果型

例：溶け落ちる、飛び下りる、立ち上がる、浮かび上がる、走り疲れる など

b. 手段—目的型

例：切り倒す、打ち壊す、抜き取る、洗い取る、削り取る、投げ入れる など

c. 背景—具現型

例：見落とす、聞き漏らす、見逃す、取りこぼす、食べ残す、売れ残る など

d. 様態—移動型

例：舞い落ちる、漂い出る、転げ落ちる、流れ下る、はしゃぎ回る など

² 影山 (2012) では語彙的複合動詞と統語的複合動詞を区別するもう一つのテストとして、V1 にイディオムを取れるかどうか、というものを挙げている。統語的複合動詞の V2 は句を選択するため、前項はイディオムでもよい(「油を売り始めた」<油を売る(=サボる)、ということをはじめた>)。それに対して、語彙的 V2 は語彙範疇(V)を選択するから、イディオムを入れると、文字通りの意味にしかならないという(「#油を売り渋った」)。

e. 同時発生型

例：泣き叫ぶ，怒り悲しむ，忌み嫌う，弾き語る，炒め煮る，支え励ます など

f. 並列関係型

例：飛び跳ねる，遊び戯れる，責めさいなむ，抱き抱える，好き好む など

g. 比喩的様態型

例：咲きこぼれる，咲き誇る，咲き狂う，踊り狂う，書き流す，書き殴る など

h. 事象対象型

例：生き急ぐ，死に急ぐ，売り渋る，下げ渋る，出し渋る，出し惜しむ など

i. V1 接頭辞化型

例：取り調べる，取り繕う，取り壊す，差し控える，差し押さえる など

j. V2 補助動詞型

例：褒めちぎる，恥じ入る，乗り切る，乗りかかる，舐め回す，責め立てる など

k. 一語型

例：出会う，出かける，出くわす，取り締まる，似合う，見つかる など

これらのタイプの中で、タイプ a から f については、第四章で詳しく見ていく。V2 が補助動詞的に V1 を修飾しているもの、V1 の本来の単独動詞としての意味が希薄化し、接頭辞的になっているもの、一語化しているものは、その構成要素の意味が本動詞の意味用法から変化しているため、V1 と V2 の意味関係が明らかではない。また、松本 (1998) で取り上げられている「咲き狂う」や「書き殴る」のような、V2 が比喩的な様態として V1 を修飾しているものなども、メタファー(Lakoff & Johnson 1980, Lakoff 1987 などを参照)という特殊な認知的メカニズムによって形成されたものであると思われる。「死に急ぐ」「売り渋る」などのように、V2 が V1 の表す事象を項に取る、事象対象型のものもあるが、統語的複合動詞に近いので、本研究では扱わないことにする。

一方、中国語の場合は「推倒 *tuī-dǎo* (push-fall)」のような V1 と V2 が「原因—結果」の意味関係にあるものや「刺殺 *cì-shā* (stab-kill)」のような「手段—目的」型、「流動 *liú-dòng* (flow-move)」のような「様態—移動」型などをまとめて複合動詞として扱う。本研究で検討する中国語の複合動詞は以下のタイプがある。

(7) a. 原因—結果型

例：崩落 *bēng-luò* (collapse-fall) ‘崩れ落ちる’, 走累 *zǒu-lèi* (walk-get.tired) ‘歩き疲れる’, 刺死 *cì-sǐ* (stab-die) ‘刺し殺す’, 打壞 *dǎ-huài* (hit-be.broken) ‘打ち壊す’ など

b. 手段—目的型

例：刺殺 *cì-shā* (stab-kill) ‘刺し殺す’, 砍殺 *kǎn-shā* (slash-kill) ‘斬り殺す’, 射殺 *shè-shā* (shoot-kill) ‘撃ち殺す’, 偷取 *tōu-qǔ* (steal-get) ‘盗み取る’ など

c. 背景—具現型

例：聽漏 *tīng-lòu* (hear-leak) ‘聞き漏らす’, 寫漏 *xiě-lòu* (write-leak) ‘書き漏らす’, 賣剩 *mài-shèng* (sell-remain) ‘売れ残る’, 吃剩 *chī-shèng* (eat-remain) ‘食べ残す’ など

d. 様態—移動型

例：舞動 *wǔ-dòng* (dance-move) ‘舞いながら動く’, 流動 *liú-dòng* (flow-move) ‘流れながら動く’, 滑落 *huá-luò* (slip-fall) ‘滑り落ちる’, 滾落 *gǔn-luò* (roll-fall) ‘転がり落ちる’ など

e. 同時発生型

例：哭鬧 *kū-nào* (cry-peevisish) ‘泣きながらぐずる’, 啜泣 *chuò-qì* (sob-cry) ‘すすり泣く’, 閃亮 *shǎn-liàng* (glitter-flash) ‘光り輝く’, 哀泣 *āi-qì* (feel.sad-cry) ‘悲しみながら泣く’ など

f. 類義関係型

例：蹦跳 *bèng-tiào* (jump-jump), 踩踏 *cǎi-tà* (step.on-step.on), 購買 *gòu-mǎi* (buy-buy), 議論 *yì-lùn* (discuss-discuss), 幫助 *bāng-zhù* (help-help), 掉落 *diào-luò* (fall-fall) など

g. 反義関係型

例：買賣 *mǎi-mài* (buy-sale) ‘売買する’, 呼吸 *hū-xī* (breathe.out-breathe.in) ‘呼吸する’, 伸縮 *shēn-suō* (extend-shrink) ‘伸縮する’, 往返 *wǎng-fǎn* (go.toward-go.back) ‘往復する’, 進出 *jìn-chū* (enter-exit) ‘出入りする’ など

これらのタイプについては第七章で見ていくが、中国語の複合動詞は反義語に基づく

並列関係の複合動詞が存在するという違いがある以外には、基本的に日本語語彙的複合動詞と同じタイプを有している。

従来、中国語の「原因－結果」型の[V-V]_vは動補構造(朱 1982, 今井 1985, 楊明 2009 など), または結果構文(石村 2000 など)と呼ばれることもあるが, 本研究は Li (1990), Cheng & Huang (1994), Packard (2000), Her (2007), Ceccagno & Basciano (2009), Lee & Ackerman (2011) らと同様, 結果複合動詞(resultative compounds)という一つの語として扱う。

もともと, 本研究においては中国語の[V-V]_vが一つの語であるかどうかにかかわらず, 第七章で述べるように, 日本語語彙的複合動詞と同じように「コンストラクション」であると考える。そのため, 日本語と中国語の V-V を同じレベルで扱うことに問題はないと考える。中国語の[V-V]_vが一つの語, またはコンストラクションである, という根拠については第七章で詳しく述べる。

1.2 研究目的

本研究は日本語と中国語の複合動詞がどのようにして形成されるのか, そのメカニズムの全体像を明らかにするのが目的である。具体的には従来の合成的なアプローチに対して, 全体的なアプローチからの観点も加え, 三つの異なるレベルから考察を加えることで, 複合動詞の形成メカニズムを明らかにしていく。この三つのレベルとは, 1) コンストラクションのレベル, 2) 意味フレームのレベル, 3) 慣習化のレベル, である。

- 1) 言語によって異なる可能性のある, 複合事象スキーマのテンプレート(コンストラクション)が存在し, このテンプレートに動詞を当てはめることで複合動詞が形成される。**(コンストラクションのレベル)**
- 2) テンプレートに当てはめられた二つの動詞は, 一つの整合性を保った「意味フレーム(本研究が用いる, 語の意味構造)」を構成する必要がある。**(意味フレームのレベル)**

3) 複合動詞は言語社会の多くの成員に認められることで定着し、慣習化が進む。(慣習化のレベル)

下の図のような 2 ピースのジグソーパズルを組み合わせることを参考にして考えると分かりやすい。

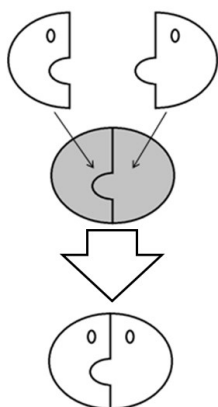


図 1-1 複合動詞の形成

- ①組み合わせるときにまず二つのパズルのピースはそれぞれが額の型に合っていないなければならない。(意味関係のテンプレートが要求する動詞の型に V1 と V2 の形が適合しなければならない)
- ②そして、形が合うものを当てはめた後は二つのパズルピースの絵柄が一つの意味のある絵柄として統合される必要がある。(V1 と V2 は一つの整合性の取れた意味フレームを構成する必要がある)
- ③パズル全体の絵柄は一つの記号として複数の人々に認識され、使用されることで、特定の意味を帯びる場合がある。(複合動詞は言語社会に定着することで慣習化され、構成要素の意味が分析できなくなったり、構成要素にない意味が生じたりする場合もある)

従来の合成的なアプローチでは、構成体の全体の意味はその構成要素の意味の総和に還元でき、構成要素から全体の意味が予測できると考えることが多かった。しかし、例えば「切り倒す」などにおいて、その意味は<x を切ることによって x を倒す>であるが、下線部の意味は構成要素に存在していないものである。このように、合成的なアプローチでは、なぜ複合動詞が特定の型(「切り倒す」の場合は手段一目的型)においてある特定の意味が生じるのか、ということの説明できないため、形式自体に意味があるというコンストラクションの概念を導入する必要がある。これは全ての複合動詞の意味がその構成要素から導き出せないという主張ではなく、合成的(compositional)と全体的(holistic)という二つの理解の方法が存在し、複合語の意味の透明性や慣習化の度合いによって異なる理解方式を取る。例えば、「持て成す」という複合動詞は構成要素の「持てる」と「成す」から合成的に解釈することができず、一語化しているものであり、「持て成す」は複合動詞全体がひとまとまりとして、ある意味と対応している。一方、「い

じめ殺す」のような初めて聞くものは、その意味的な透明性が高いため、構成要素から合成的に全体の意味を作り出すことができる。そして、「持て成す」と「いじめ殺す」の中間に位置するものとして、「切り倒す」や「叩き潰す」のようなものは、意味的に透明であり、合成的に解釈することが可能だが、一定以上の使用頻度があるため、第四章で述べるように、自動化(automation)というメカニズムによって、ひとまとまりとして記憶されていると思われる。このように、合成的と全体的という二つの理解方法は、はっきりとした境界線があるわけではなく連続体を成すと考える。

また、第二章で述べるように、従来の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)に基づくアプローチにおいては、我々人間が持っている文化や社会、世界についての知識を意味から排除し、統語現象において違いが見られる(grammatically relevant)意味性質、いわゆる中核的意味(core meaning)しか語の意味構造に含めなかった(Levin & Rappaport Hovav 2011 など)。しかし、複合動詞の結合可能な組み合わせとその意味形成について適切な説明を与えるには、背景的知識など豊富な百科事典的知識を含む意味フレームという豊かな意味構造が必要である。

本研究は共にスキーマ的な思考方式であるコンストラクションとフレームを取り入れ、さらに両者を組み合わせることで、複合動詞の形成プロセスとメカニズムを明らかにする。本研究におけるスキーマとは実際に体験した複数の事例からその共通点を知覚し、一般化した認知的な表象である。

A schema can be defined as a cognitive representation comprising a generalization over perceived similarities among instances of usage.

(Kemmer & Barlow 2000: xxiii)

例えば、我々は“John wiped the table clean”や“Mary painted her room red”などの事例にいくつも接することで、これらの事例には [X V Y Z]という抽象的な形式に対応する‘X causes Y to become Z’という共通の意味があると一般化することができる。これはカテゴリー化という認知能力によるものである。第三章で詳しく説明するが、このような(抽象的な)形式と意味のペアリングを、Goldberg (1995) などでは「コンストラクション」と呼んでいる。しかし、これは同時に複数の事例の一般化でもあるため、スキーマとし

でも捉えられる。

また、第三章で取り上げる、語の背景にある知識構造としてのフレーム(frame, Fillmore 1977, 1982, 1985a など)という概念も、複数の事例からその共通点を一般化によって抽出した知識の図式であるため、スキーマの一つである。フレームの実在性を示す例として、次の文章がどのような場面を表しているのかを想像してみよう。

彼は扉が閉まるギリギリの所で駆け込んで、ホッと一息ついていたが、すぐに周囲の女性たちの刺すような視線に気付いて、「うわ、やってしまった・・・」と心のなかでつぶやいた。

この文章で描写しているのはどのような状況だろうか。恐らく同じ経験をしたことがある人ならすぐにその情景を思い浮かべることができると思うが、これはうっかり女性専用車両に乗り込んでしまった男性の話である。文章の中には「電車」や「駅」、「ホーム」などの語は一つも出てこないが、日本の電車の仕組み、そして女性専用車両についての知識を持つ人であれば自動的に語られていない文脈を「補完」して理解することができる。このように、我々の言語理解は多くの背景的な知識によって支えられており、このような背景的な知識を図式化したものがフレームである。フレームは我々が自身の経験を通して、または間接的に得た知識に基づいて、一般化したものであるため、スキーマでもある。

上述のように、コンストラクションとフレームは共にスキーマとして考えられる。頻出するパターンをスキーマ化して保存することで、再度そのパターンに遭遇した時にスキーマを呼び起こすことで、処理する情報を減らすことができ、これから起こりうることを予測し、対応することが可能となる。また、保存したスキーマに基づいて、新たなパターンを生成することができるようになる。

我々人間の思考がスキーマに基づくことは認知科学の研究によって支持される。Barsalou (2003) や Yeh & Barsalou (2006) などによると、概念は独立して保存されるのではなく、それが存在・発生する状況において記憶される。そして、その概念が使われるときに、その背景にある状況も一緒に呼び起こされるという。また、Yeh & Barsalou (2006) が述べているように、特定の物事はある一定の状況において現れやすいため、この相関

関係を利用することで処理する情報を制限し効率を高めることができる。認知系統は記憶の中にある全ての状況を検索するのではなく、現在の状況と関連のある知識だけに焦点を当てる。状況を特定することで現れうる物事を制限し、反対に物事を特定することでこれから起こるであろう状況を推測できると考えられる。

以上のように、本研究の特徴は、第一に、複合動詞における V1 と V2 の結合を外界や文化についての知識を豊富に含む意味フレームの合成として考えることによって、複合動詞の結合制約や意味形成などを説明するという点にある。第二に、複合動詞をコンストラクションとして捉えることで、構成要素からは予測できない意味を説明することである。

本研究は「認知的妥当性の重視」と「言語表現の一般化の重視」という二点を同時に確立させるという点において従来の研究と大きく異なる。また、人間の一般的な認知能力の観点から複合動詞を捉えることで、複合(compounding)という言語現象一般にも理論的貢献を行うことを目的とする。特に、複合動詞として結合できる V1 と V2 は特定の関係性にあることが知られており、「*走り転ぶ」のように、単に時間的に連続して起こった二つの事象は複合動詞化できず、「走って転ぶ」のようにテ形を用いて表現する。このように、複合動詞の形成には人間の二つの事象に対する関連付けが関わってくる。そのため、複合動詞を研究することは、人間がどのような事象を複合事象として認識できるかということをはっきりとすることでもある。そして、「人間にとっての因果関係とは何か」という哲学的にも認知科学的にも大きな難問を解き明かすことに繋がることを期待できる。

加えて、本研究は日本語と中国語の対照的な研究を通じて、Talmy (2000) において提起された

- 1) 言語にとって単一の統合された事象として働くものと、知覚や一般認知における単一の事象との間にどのような関係があるか、
- 2) 言語表現のために二つの事象を一つに概念統合するために欠かせない要因は厳密には何か、
- 3) どのタイプの複合事象がそのような概念統合を受けられるかについて言語間でどのような違いがあるか、

という問題点について、複合動詞という言語現象から検討を行う。

1.3 使用データ

本研究で検討する複合動詞は基本的に『日本語複合動詞リスト』にあるものを対象にしている。『日本語複合動詞リスト』とは『Web データに基づく複合動詞用例データベース(以降『複合動詞用例データベース』)』に収録されている日本語の語彙的複合動詞をリスト化したものである。このデータベースは国立国語研究所の山口昌也氏によって開発された、ウェブのデータから機械的に構築するというものであり、ウェブ上で一定量の用例を取得できる場合に限り、収録している。その収集方法は以下のようである³。

(8) 『複合動詞用例データベース』の構築手順(山口 2013)

- i. まず、複合動詞の構成要素になりやすい、「種」となる構成動詞(「種動詞」)を用意する。種動詞は『複合動詞資料集』(野村・石井 1987)から上位 10 語を選択した。
- ii. 次に、Baroni らの方法(Baroni et al. 2009)を応用して、種動詞に対する Web コーパスを構築する。具体的には、種動詞とランダムな語のペアをキーとして、Web 検索エンジンに与え、得られた URL の Web ページをダウンロードする。ランダムな語をキーに加えているのは、収集する Web ページの偏りを防ぐためである。種動詞は、終止形、連用形の 2 種類用意する。そして、それぞれ 5000 ページずつ収集し、それぞれ独立した Web コーパスとする。終止形で検索するのは、種動詞を後項に持つ複合動詞を発見するため、連用形で検索するのは、前項に種動詞を持つ複合動詞を発見するためである。
- iii. 構築した Web コーパスを形態素解析したのち、「動詞(連用形)+動詞」の並びを

³ ただし、この収集方法では「馳せ参じる」のように、構成要素がほかの複合動詞に現れないような動詞のペアや、「うっちゃる(「うちやる」の音変化)」のようなほかの複合動詞においては見られない特殊な語形のペアは検索でピックアップされない。本研究ではこのような複合動詞用例データベースの検索方法では引っかけられないものについて、ウェブ検索(複合動詞用例データベースと同様に Google 検索を用いた)した結果の用例数が 50 例以上あった「馳せ参じる」「うっちゃる」「ふんだくる」「ぼったくる」を分析対象に加えている。

複合動詞候補として，頻度を計測する。

- iv. 得られた複合動詞候補のうち，頻度 5 以上のものを目視で確認し，複合動詞であれば，複合動詞リストに追加する。
- v. 複合動詞リスト中の複合動詞の Web コーパスを作成する。収集する Web ページは，2000 ページである。それぞれの Web コーパスを形態素解析し，当該の複合動詞を含む文を抽出する。抽出した文は，格解析，および，同一文削除などのクリーニングをしたのち，用例データベースに追加する。ただし，格要素を一つ以上持つ用例が 50 例未満の場合は，登録しない。また，登録した場合は，その構成動詞の用例も用例データベースに登録する。
- vi. v.の複合動詞リスト中の複合動詞の構成動詞のうち，種動詞でないほうの構成動詞を種動詞として，(i)～(vi)を繰り返す。

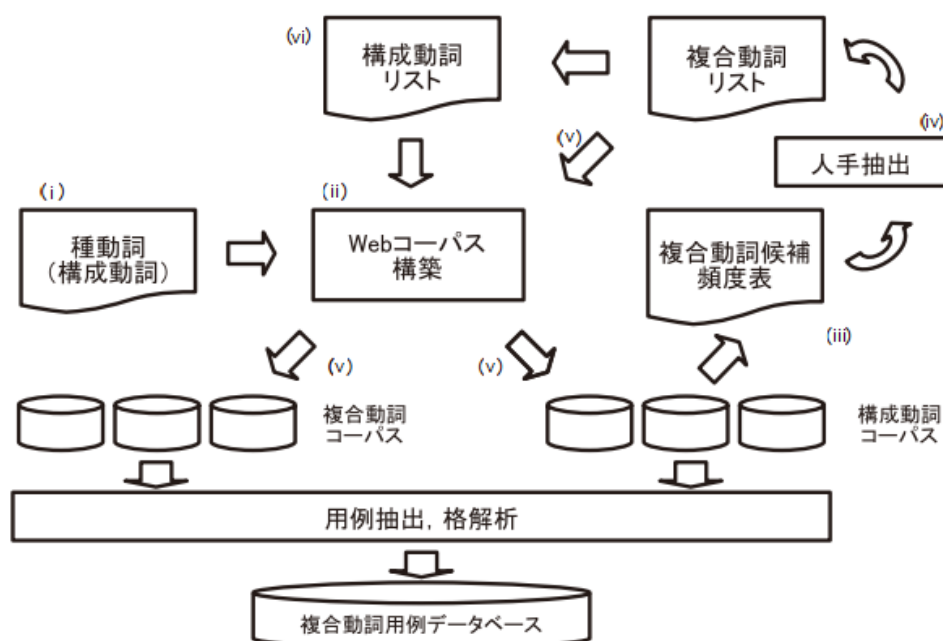


図 1-2 複合動詞用例データベースの構築方法(山口 2013: 63)

複合動詞データベースを用いる利点は主に、1) 収集方法が客観的であること、2) 複合動詞の数が多いこと、3) 複合動詞の用例数が示されていること、4) 格要素の情報が付与されていること、という4点が挙げられる。同じように複合動詞の例を集めたデータベースとして、近年国立国語研究所が開発した『複合動詞レキシコン』(<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp>)がある。しかし、『複合動詞レキシコン』客観的な方法で収集したものではなく、辞書や先行研究にあったものを研究者の判断によって収録している。また、収録語数も「複合動詞用例データベース」が3514語あるのに対し、2759語しかなく、格要素の情報も付与されていない。そのため、本研究は「複合動詞用例データベース」を用いる。このデータベースを用いることで、実際にどのような複合動詞が使用されているのかを知ることができ、複合動詞の研究を、従来の分析者の語感に頼っていたものから、より言語使用の実態に即したものと発展できると考えられる。

1.4 本論文の構成

本論文は、本章を含めて九章から構成される。第一章は序論として、研究の対象や目的、使用するデータについて述べた。

第二章では、2.1において日本語語彙的複合動詞の一般的な結合制約に関連する先行研究を紹介し、併せてその問題点指摘する。2.2では日本語語彙的複合動詞の意味的な制約について見る。2.3においては中国語の一般的な結合制約を取り上げる。そして、2.4にて先行研究で用いられている意味構造について検討し、百科事典的知識及び背景知識を含む「意味フレーム」という意味構造を用いる必要があることを示す。2.5で第二章をまとめる。

第三章にて、本研究が用いる理論的枠組である「コンストラクション形態論」と「フレーム意味論」についてそれぞれ3.1と3.2で紹介し、3.3ではEnfield (2000, 2002)で論じられている言語と文化の関わり、そして、「文化的表象」という概念について説明する。3.4で三章の概要を述べる。

第四章においては、複合動詞のコンストラクションレベルの制限に関わる問題点について見ていく。複合動詞を形式と意味のペアリングであるコンストラクション(Goldberg 1995)として見なすことで、複合動詞の合成的な性質と非合成的な性質を一つの理論モ

デルで説明できるようになることを示す。まず4.1においてコンストラクションという概念を用いた複合動詞の先行研究について取り上げる。4.2ではコンストラクション形態論を用いて、日本語の語彙的複合動詞を階層的なスキーマネットワークという形で示す。4.3は複合動詞におけるV1とV2の間に見られる限定された意味関係がどのような認知的な動機付けに支えられているのかを検討する。4.4はコンストラクション的イデオムという概念を取り入れることで、複合動詞の合成的な性質及び「拘束意味」という現象を説明できると主張する。4.5においては、複合動詞に見られる様々な全体的な性質について検討し、コンストラクション形態論の枠組みから説明を与える。4.6では、レキシコンにおける「語彙の競合」という現象に注目し、複合動詞がひとまとまりとしてレキシコンに登録されていると考える必要があることを述べる。4.7は複合動詞の適格性について「耳馴染み度」という概念を取り入れて説明する。4.8にて、四章のまとめを行う。

第五章では複合動詞の意味構造として、豊富な百科事典的知識を含む「意味フレーム」を用いて分析を進める。5.1において、フレームを用いた複合語の先行研究を紹介する。5.2では動詞の意味フレームと複合動詞における結合制限について述べる。5.2.1で本研究が主張する複合動詞の意味的な結合制約を説明する。5.2.2は意味フレームを用いることで複合動詞の結合制限や類義表現の使い分けを説明できることを示すために、〈ある対象を捉えることに失敗する〉ことを表す「～おとす」「～もらす」「～のがす」を一つの事例研究として示す。5.2.3で、複合動詞における多義語の解釈という問題について、「～取る」を例に説明する。5.3において、複合動詞における背景的な知識の必要性を示すために、5.3.1で「勝つ」とそれが喚起する〈競争〉フレームを例に論じる。背景フレームは文化に基づくものであり、このような背景フレームと文化との関わりについては5.3.2で検討する。5.3.3で複合動詞の意味形成において、「事象参与者」という項として実現されるとは限らないフレーム要素が関わることを示し、5.3.4では「(卵を)割り入れる」という表現を元に、複合動詞の動的な意味形成のプロセスを見ていく。5.4にて、複合動詞の意味形成には項以外の意味要素が関わってくることを示し、意味フレームにおける事象参与者というフレーム要素を用いることで説明する。5.5で複合動詞の適格性について、「耳馴染み度」という概念を取り入れることで説明できることを示す。最後に5.6にて本章のまとめを行う。

第六章は日本語語彙的複合動詞において、いわゆる「主語一致の原則」に反する例について分析する。そしてこれらの例が異なる認知的な動機付けによって形成されたものであると主張する。6.1 で説明する「プロファイルシフト」と「痕跡的認知」に基づく自動詞化、そして、6.2 で取り上げる「使役化」に基づく他動詞化が主語不一致型複合動詞の主な形成メカニズムで、他にも6.3の「アナロジー」や6.4の「メトニミー」がある。6.5において六章のまとめを行う。

第七章は中国語複合動詞について、日本語複合動詞の分析に用いたフレーム・コンストラクション的なアプローチで考察を加える。7.1 では、コンストラクション形態論的なアプローチを中国語複合動詞の分析に適用し、中国語複合動詞の全体像を日本語と同様、階層的なスキーマネットワークとして示す。そして、中国語複合動詞に見られる全体的な性質について検討し、中国語複合動詞をコンストラクションとして見なす根拠について述べる。7.2 ではフレーム意味論を用いることで、中国語複合動詞の結合制約として「フレーム参与者共有の原則」というものを立てることができること、そして、中国語複合動詞に見られる自他交替という現象を説明できるようになることを示す。

第八章では、8.1 にて、日本語と中国語の複合動詞の違いについて、主に複合事象のタイプの違いと主語一致の原則の有無を中心に論じる。8.2 では Talmy (2000) が提起した複合事象に関する問題について、本研究で得た知見に基づいて回答する。8.3 で八章を要約する。

最後に、第九章では、まとめとして、9.1 で本論文の分析によって解明されたことを総括し、論文全体の結論を示す。そして、9.2 において本研究の意義について述べ、9.3 では今後の課題を提起する。

第2章 先行研究

本章では日本語と中国語の複合動詞についての先行研究を概観し、その問題点を指摘する。具体的には2.1で日本語の複合動詞の一般的な結合制約として提案された「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」を順に取り上げて検討し、2.2では日本語語彙的複合動詞における意味的な制約を見ていく。2.3においては、中国語の複合動詞の一般的な結合制約である「時間順序の原則」について検討を加える。そして、2.4で先行研究が用いている意味構造を対象に検討し、どのような問題点や課題が残されているのかを示す。2.5で本章のまとめを行う。

2.1 日本語語彙的複合動詞における一般的な結合制約

従来の日本語の複合動詞の体系的な研究は、結合条件についての研究(影山 1993, Matsumoto 1996a, 影山・由本 1997, 松本 1998, 何 2010)や、分類についての研究(長嶋 1976, 寺村 1984)などがある。この中で、一般的な結合制約として、影山 (1993) の「他動性調和の原則」と由本 (1996), 松本 (1998) の「主語一致の原則」が提案されている。このような複合動詞の一般的な結合制約について説明する前に、影山 (1993) 及び由本 (1996), Matsumoto (1996a), 松本 (1998) が主張する複合動詞の形成メカニズムについて述べる必要がある。

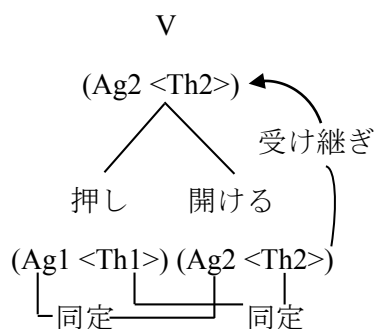
2.1.1 先行研究における複合動詞の形成メカニズム

影山 (1993) は、複合動詞の形成が項構造⁴(argument structure)のレベルにおいて行

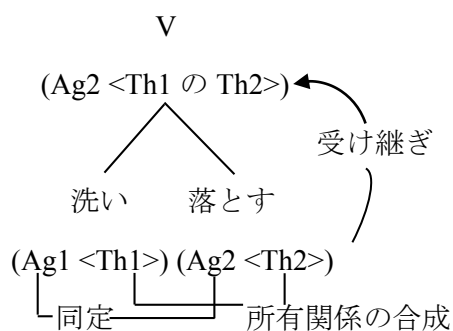
⁴ 項とはある語の意味を完成させるために必要な要素のことで、例えば、「入れる」という動詞が表す事態を記述するには「太郎がボールを箱に入れた」というように、「動作主」と「対象」、そして「着点」という三つの項が必要である。この項の情報を表示した項構造は意味と文法の間にあるインターフェイスであると言われている(Grimshaw 1990, Alsina 1996, Rappaport Hovav & Levin 1998 を参照)。

われると主張している⁵。具体的は、V1 と V2 の項構造が「相対化右側主要部の規則 (Lieber 1980, Kageyama 1982, Selkirk 1982, Di Sciullo & Williams 1987)」に基づいて合成されることで、全体の項構造が決定され、そして、複合動詞が形成される、と述べている。相対化右側主要部の規則とは、複合語の左側の要素と右側の要素が同じ種類の項を持つ場合は右側を優先するが、右側がないものを左側が持っている場合は、左側のその情報も複合語全体に引き継がれる、というものである。この相対化右側主要部の規則に基づいて、複合動詞における項構造の合成には次のような3つのタイプが考えられるという (影山 1993: 106-107)。

(1) a. 主要部からの受け継ぎのみ：「ドアを押し開ける」⁶



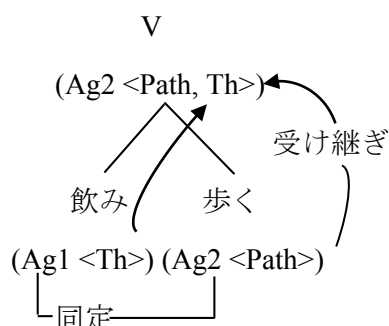
b. 主要部からの受け継ぎと所有関係の合成：「服の汚れを洗い落とす」



⁵ 「～込む」「～去る」「～出す」については、語彙概念構造のレベルで形成されるとしている。

⁶ Ag は Agent(動作主)で、Th は Theme(主題)である。< >の中で表示された項を内項(internal argument)といい、その外側に表示された項を外項(external argument)という。

c. 主要部と非主要部からの受け継ぎ：「夜の街を酒を飲み歩く」



そして、日本語の語彙的複合動詞は「他動性調和の原則」に基づいて、項構造のレベルで形成されると主張している。

これに対して、由本 (1996, 2005), Matsumoto (1996a), 松本 (1998) は、複合動詞が項構造のレベルではなく、意味構造のレベルで形成されると考えている。このような考えから、松本 (1998), 由本 (2005) では、複合動詞にはその合成パターン別に想定される意味的制約と、全てのパターンに共通に適用される「主語一致の原則」があるとしている⁷。次節より、「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」を順に見ていく。

2.1.2 他動性調和の原則

前節で見たように、影山 (1993) は、複合動詞の形成が項構造において行われると考え、そして、複合動詞における V1 と V2 の組み合わせは「他動性調和の原則」によって説明できると主張した。「他動性調和の原則」とは複合動詞は外項を取る動詞(他動詞と非能格自動詞)同士か、外項を取らない動詞(非対格自動詞)同士によって作られるという制約である。

影山 (1993) が用いている項構造の表示法は(2)のようである。

(2) 食べる：(Agent <Theme>)

⁷ 由本 (1996) では「主語一致の原則」のほかに、V1 を意味的主要部とする「晴れ渡る」や「見落とす」などを説明するために、主要部の格素性が浸透の原理によって複合動詞に受け継がれる、という原則を想定している。その問題点については松本 (1998: 76-77) を参照。

そして、動詞はその項構造によって、次のように三つの種類に分けることができるという。

- (3) a. 他動詞 : (Agent <Theme>)
 b. 非能格自動詞 : (Agent < >)
 c. 非対格自動詞 : (<Theme>)

非能格自動詞とは主語の意図的な動作・行動を意味する動詞と、人間の生理的な活動を意味する動詞である。一方、非対格自動詞は、主に状態や位置が変化するものを主語に取る動詞で、これらの主語は自分の意思で動作するのではなく、自然に何らかの変化を被るものを指す(影山 1996: 21)。

影山 (1993) によれば、この他動性調和の原則によって、(4)が示すように、他動詞＋他動詞、非能格自動詞＋非能格自動詞、非対格自動詞＋非対格自動詞、そして他動詞と非能格自動詞が混在した組み合わせが存在するのに対し、その他の組み合わせが存在しないことを説明できるという。

(4) a. 他動詞＋他動詞

例：買い取る，追い払う，射抜く，突き倒す，叩き落とす，吹き消す など

b. 非能格＋非能格

例：言い寄る，這い寄る，駆け寄る，歩み寄る，飛び降りる，駆け降りる など

c. 他動詞＋非能格

例：探し回る，買い回る，荒し回る，嘆き暮す，待ち暮らす，待ち構える など

d. 非能格＋他動詞

例：泣きはらす，微笑み返す，伏し拝む，笑い飛ばす，乗り換える など

e. 非対格＋非対格

例：滑り落ちる，転がり落ちる，崩れ落ちる，張り裂ける，生まれ変わる など

f. 他動詞＋非対格

例：*洗い落ちる，*拭い落ちる，*切り落ちる，*打ち壊れる，*切り倒れる など

g. 非対格＋他動詞

例：*売れ飛ばす，*揺れ起こす，*揺れ落とす，*あきれ返す，*崩れ落とす など

h. 非能格＋非対格

例：*走り落ちる，*跳び落ちる，*泣き腫れる，*走りころぶ など

i. 非対格＋非能格

例：*明け暮らす，*倒れ暮らす，*痛み暮らす，*転び降りる，*崩れ降りる など

ただし、松本 (1998) によると、他動性調和の原則に反する複合動詞として、非能格＋非対格の「走り疲れる」「歩き疲れる」「遊び疲れる」「泳ぎ疲れる」「走りくたびれる」「泣き濡れる」、そして他動詞＋非対格の「待ちくたびれる」「飲み潰れる」「聞き惚れる」「読み疲れる」などが存在している。また、非対格自動詞と非能格自動詞を明確に区別するのが難しいことも他動性調和の原則の問題点として指摘されている(松本 1998: 39-50 を参照)。

2.1.3 主語一致の原則

上述のように、他動性調和の原則はいくつかの問題点があるため、それよりも緩い制約として「主語一致の原則」が存在すると主張されている(由本 1996, 松本 1998)。主語一致の原則とは、二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者(通例、主語として実現する意味的項)が同一物を指さなければならない、というものである(松本 1998 : 72)。

「花火が打ちあがった」や「突き出た半島」における「打ちあがる」や「突き出る」などは V1 と V2 の主語が異なるため主語一致の原則に反する例として挙げられるが、これらの主語不一致型複合動詞は主語一致原則に合致する複合動詞「打ち上げる」や「突き出す」に基づいて形成されたと考えられる(松本 1998: 73-74)。

このように、主語一致の原則は一部例外となるものが存在するが、確かに日本語複合動詞における一般的な結合制約だと考えられる。他動性調和の原則より緩い制約である主語一致の原則を立てることで、「*洗い落ちる」「*打ち壊れる」「*揺れ起こす」「*崩れ落とす」などのような V1 と V2 の主語が異なるものを排除できる一方、他動性調和の原則では排除されてしまう「走り疲れる」「読み疲れる」のような組み合わせは、

主語が一致するため成立できると説明できる。

ただし、この主語一致の原則は日本語の語彙的複合動詞に対しての制約であり、普遍的な制約として考えられたものではない。よく知られているように、中国語の結果複合動詞(resultative compounds)には主語一致の原則が適用されない。例えば、<何かを打つことでそれを壊す>ということを表す場合、日本語は V1 と V2 の主語が一致する「打ち壊す」という複合動詞を用いる。しかし、中国語では日本語の「打つ」+「壊れる」に相当する「打壞 *dǎ-huài*」という複合動詞を用いる。この場合、V2 の主語は V1 の目的語に当たるものであり、V1 と V2 の主語は一致しない。ここで一つの疑問が生じる。それは、なぜ日本語の複合動詞は主語が一致する必要があるのに対し、中国語はむしろ一致しないパタンの方が多いのか、ということである。日本語と中国語の比較を通して見えてくる「言語ごとの制限」をどのように説明するべきであろうか。

また、前述のように日本語には「打ち上がる」「突き出る」「舞い上げる」「譲り受ける」などのような主語不一致型の複合動詞がある。このような一般的な結合制限に反する例はどのような理論的モデルで説明できるのか。そして、主語不一致型複合動詞が形成される背景にはどのような動機付けが存在するのか、ということも課題として残されている。

2.2 日本語語彙的複合動詞における意味的な制約

前節で日本語の複合動詞には、主語一致の原則という一般的な結合制約が存在することをみてきたが、主語一致の原則はそれ自体ではかなり緩い制約であるため、「*走り転ぶ」や「*立ち食う」のような主語一致の原則に反していないが成立できない複合動詞の説明ができない。そのため、主語一致の原則に加えて意味的制約が必要となる(Matsumoto 1996a, 松本 1998)。

松本 (1998) は複合動詞の組み合わせは単語の意味構造において制約されており、複合動詞の前項と後項には限られた意味関係(「切り倒す」のような「手段-目的」型、「溢れ落ちる」のような「原因-結果」型、「舞い落ちる」のような「様態・付帯状況-移動」型など)しか見られないとして、複合動詞の結合は V1 と V2 がこのような特定の意味関係によって限定されると主張した。単なる連続した行為は「*引き逃げる」の

ように複合動詞化できず、「引き逃げする」のような形式([[V V]_{VN} [suru]_V]_V)で表現するのである。ここで疑問となるのは、なぜこのように、「限定された意味関係」にあるものしか複合動詞化されないのか。そして、その背景には何か共通した認知的な動機付けがないのだろうか、ということである。

「限定された意味関係」と関連して、例えば、「手段一目的」型の「切り倒す」は切ることによって倒す>という意味を表し、下線部の意味はV1にもV2にも存在していない意味である。このような意味はどのようにして生じ、どのような言語学的な説明を与えるべきなのだろうか。

複合動詞の意味の面に関連して、従来の合成的(compositional)なアプローチからでは説明できない複合動詞に見られる「全体な性質」をどのように説明するのか、という問題点もある。例えば、「取り締まる」や「割り切る」のような例は合成的にその意味を作り出せるものではない上に、V1とV2は共に分析可能性(analyzability, Langacker 1987)を失っている。「打ち解ける」「落ちぶれる」などのように一部の構成要素(下線部の要素)の意味が分析可能性を失っている例も多くある。これらの例は従来の合成的なアプローチでは例外として分析の対象から外されてきたが、このような例も問題なく扱える理論的モデルが必要である。また、複合動詞の全体的な性質として、単独動詞の場合には具体的なことにも抽象的なことにも使用できるが、複合動詞化されると抽象的なことに使用される傾向が高くなる、という現象が観察される。さらに、「{能力/*荷物}を引き出す」などにおいては、複合動詞化されると、もはや抽象的なことにしか用いられなくなる。このような具体的な意味が実現できない例は決して少なくなく、従来の合成的なアプローチでは上手く説明できない点である。

2.3 中国語複合動詞における一般的な結合制約

中国語の複合動詞に関しては、「原因—結果」型の複合動詞についての先行研究(Li & Thompson 1981, 今井 1985, Li 1990, 山口 1991, Cheng & Huang 1994, 秋山 1998, 石村 2000 など)はかなり多いが、複合動詞の全てのタイプについて論じた体系的な研究は少ない。その中で結合制約についての代表的なものはTai (1985) と張 (2003) の「時間順序の原則(Principle of Temporal Sequence)」が挙げられる。「時間順序の原則」とは、中

国語において、文における語順や、複合動詞の順序がその語が表す現実世界で起こった事象の順序と一致するという、「類像性(iconicity)⁸」に基づく原則である。

(5) 時間順序の原則は、V1V2型複合動詞の「概念構造」(conceptual structure)において、以下のような方法で作用する(戴 2006)。

(a) 前項 V1 と後項 V2 が表す概念が、異なるときは、V2 は目的または結果を表す。

(b) V2 が動作主のコントロール可能な行為である場合、V2 は目的となる出来事を表す。

(a)かつ(b)の場合→ 偷看 *tōu-kàn* 盗み見る, 搶答 *qiǎng-dā* 争って答える,
加買 *jiā-mǎi* 買い足す

(c) V2 の動作主がコントロール不可能な行為である場合、V2 は結果となる出来事を表す。

(a)かつ(c)の場合→ 哭濕 *kū-shī* 泣いた結果, { (何かを) 濡らす/濡れる }
騎累 *qí-lèi* 何かに乗った結果, { 疲れる/疲れさせる }

(d) V1 と V2 の概念がほぼ同じか、相対するか、相似する場合は、V1V2 の語順は、時間順序の原則には従わない。

e.g. 買賣 *mǎi-mài* 等位型 日本語では 売り買い, 売買

確かに「時間順序の原則」は重要な制約であると認められるが、重大な問題点として、日本語の「食べて寝る(cf. *食べ寝る)」に相当する「*吃睡 *chī-shuì* (eat-sleep)」のような、V1 と V2 の間に因果関係がなく、単に時間的順序に従うものは、複合動詞としては成立できない。

⁸ 類像性とはソシュールにおける言語の「恣意性(arbitrariness)」と対比をなす概念である。恣意性とは、ある意味とそれを表す言語の形式の対応関係が恣意的に決定されるというもので、例えば、<木>という概念は日本語では/ki/という音形で表されるのに対し、英語では/tri:/という音形を持つ。一方、ある言語表現が類像性を有するという場合は、その言語表現の形式上の何かが現実世界における何かを直接反映しているような場合である(Van Langendonck 2007 を参照)。よく挙げられる例は「ギシギシ」や「ワンワン」のようなオノマトペで、これらの言語形式の音形は現実世界の音をかなりの程度で反映しているため、類像性を有すると認められる。

2.4 先行研究における意味構造

日本語の複合動詞の形成については、主に二つのアプローチから研究されている。一つは松本 (1998) などにおいて、主要部の動詞の意味構造の中に非主要部の動詞の意味構造が、その原因、手段、様態などを表すものとして埋め込まれることで結合されるという分析である。もう一つは影山 (1996) や由本 (2005, 2008) などが用いている語彙概念構造(lexical conceptual structure, LCS)の合成としての分析である。また、近年では影山 (2005) や由本 (2012) などが LCS の代案としてクオリア構造(qualia structure, Pustejovsky 1995)という意味構造を用いることを提案している。以下において、これらの意味構造を検討し、主に「百科事典的知識」の必要性を中心に論じる。

2.4.1 語彙概念構造(LCS)

語彙概念構造(以下 LCS)は、意味構造の骨格となるテンプレートと具体的な意味内容を表す部分によって構成されている。テンプレートで意味タイプごとの一般的な性質を捉えることができ、意味内容で個々の動詞の意味解釈を表示することができる(影山 1996, 由本 2011, Levin & Rappaport Hovav 2011 などを参照)。

語彙概念構造が生み出される背景として、語彙意味論(Lexical Semantics, Levin 1985 を参照)と呼ばれる理論がある。語彙意味論とは、動詞がどのような構文を作るのか、そして、どのような文法的な性質を持っているのか、という統語論と関わる(grammatically relevant)意味性質を捉えることで、語彙の意味特性を推測するものである。

由本 (2011: 22) によると、LCS では、動詞の意味の核をなす要素として、〈使役〉や〈変化〉、〈状態〉などの意味の核をそれぞれ CAUSE, BECOME, BE といったプリミティブで抽象的な述語として表し、それらを、項を取る関数(例えば, [x CAUSE y])として用いることによって、出来事を表示している。例えば、由本 (2011) では go は[x MOVE FROM y TO z]というように表すことができる。kill のような、目的語の〈状態変化〉を引き起こす〈使役〉を表すものは(6)のように、より複雑な構造で表されることになる。

- (6) $\boxed{[x \text{ ACT ON } y]}$ CAUSE $\boxed{[y \text{ BECOME } [y \text{ BE } [\text{ AT DEAD }]]]}$
 原因 結果 (由本 2011: 24)

由本 (2011) などは、この LCS を用いて複合動詞の意味合成を記述する。例えば、「泣き落とす」のような複合動詞の場合は、(7)のように V1 と V2 の LCS が合成されることによって表される。

- (7) 泣き落とす: $[[x_i] \text{ ACT}_{\text{CRY}}]_+$

$[[x_i] \text{ ACT}_{\text{ON}} [y_i]] \text{ CAUSE } [[y_i] \text{ BECOME } [\text{ BE } [\text{ AT PERSUADED }]]]$

⇒

$\left[\begin{array}{l} [[x_i] \text{ ACT}_{\text{ON}} [y_i]] \text{ CAUSE } [[y_i] \text{ BECOME } [\text{ BE } [\text{ AT PERSUADED }]]] \\ \text{BY } [[x_i] \text{ ACT}_{\text{CRY}}] \end{array} \right]$

(由本 2011: 151)

しかし、複合動詞の分析において LCS のような簡略的な意味構造では説明できない問題点が多くあり、中でも特に重要なものとして、「意味関係の解釈」と「複合動詞の適格性」、そして「構成要素にない項の出現」という三点が挙げられる。

まず「意味関係の解釈」についてだが、複合動詞として結合できる V1 と V2 は特定の意味関係にあることが知られている(石井 1983, 寺村 1984, Tagashira & Hoff 1986, 松本 1998, 姫野 1999 など)。例えば、松本 (2011) によると、V1 が V2 の手段や様態、原因、前提的背景、対象事象(補文)を表すものや V1 と V2 が並列関係にあるものがある。我々はある複合動詞の意味を解釈する際に、一体どのような基準によって、二つの動詞の組み合わせがどの意味関係であるのかを理解しているのだろうか。由本 (2011: 158-160) では動詞の型によってある程度の判断が可能だと述べている。例えば、V1 が様態を表す解釈となるのは V2 が表す出来事が何らかの様態を特定することのできるものであり、その最も典型的なタイプは移動を表す動詞だという。また、V1 が手段を表す場合は、V2 が状態変化を含意する他動詞のものが多い。しかし、由本 (2011: 161) で指摘しているように、動詞のタイプを見るだけでは不十分で、動詞が表す出来事の典型的な目的や原因、それによって起こりうる結果や影響などの情報が必要である。由本 (2011)

では具体的に説明していないが、例えば、「食べ残す」という複合動詞は V2 が状態変化を含意する他動詞だが、＜食べることによって残す＞という手段—目的型の意味を表すものではなく、＜食べるという行為によって物体を無くし得る状態において、(そうしないで)それを存在させ続ける＞という意味を表し、本研究の背景—具現型に当たるものである。このような例は、動詞のタイプだけでは V1 と V2 の意味関係を理解するには不十分なものであると言えよう。

次に、そもそもなぜ「叩き壊す」は成立する組み合わせであるのに、「*撫で壊す」は成立できないのか、つまり、実在する複合動詞とそうでないものは何によって決まるのか、という「複合動詞の適格性」の問題点がある。LCS に含まれている情報だけでは、なぜ「叩き壊す」が存在する組み合わせで、「*撫で壊す」や「*舐め壊す」、「*吸い壊す」などが存在しないのか、ということを説明できない。「叩く」が表す動作は「壊す」が表す動作を達成する手段として認められるのに対し、「撫でる」は「壊す」の手段と成りえない。一見当たり前のようなことだが、従来の意味構造ではこの判断を支える情報が含まれていないのが現状である。

同様に、「蹴散らす」「食い散らす」「脱ぎ散らす」などにおいて、これらの V1 は＜結果として対象が散乱する＞ことは論理的に含意されておらず、単に「起こりうる」結果の一つでしかない。LCS は、論理的に含意される結果のみを含むため、なぜ「蹴散らす」「食い散らす」「脱ぎ散らす」が存在する組み合わせで、「*握り散らす」「*運び散らす」「*こすり散らす」が存在しないのかを説明できない。

また、語彙意味論は「項の実現(argument realization)」という、動詞の項が句構造においてどのようにして表されるのかということを探求することがその理論の背景にある。そのため、影山 (1996) や由本 (2005, 2008) などで用いられている LCS では付加詞として具現化するような情報は意味構造に含まれていない。しかし、複合動詞の項形成や意味形成を説明するには項の情報だけでは不十分である。例えば、次のように、複合動詞の構成要素の項ではないものが、複合動詞全体の項構造として実現する場合がある。

- (8) a. 太郎は全国のラーメン屋を {食べ歩いた/*食べた/*歩いた}。
 b. 太郎は仲間と三宮のバーを {飲み歩いた/*飲んだ/*歩いた}。

「食べ歩く」や「飲み歩く」などにおいて、複合動詞全体の項は構成要素の項としては実現しないものである。

従来の語彙意味論などのアプローチでは我々人間が持っている文化や社会、世界についての知識を意味から排除し、統語論と関わる意味性質、いわゆる中核的意味(core meaning)しか語の意味構造に含めなかった。しかし、本節で見てきたように、複合動詞の結合可能な組み合わせとその意味形成について適切な説明を与えるには、ある動詞が表す動作とそれを理解するために必要な背景知識を含む豊かな意味構造が必要である。

2.4.2 クオリア構造

以上のような LCS の問題点を受けて、由本 (2011, 2012) は、百科事典的知識や背景知識を含むとされる「クオリア構造(qualia structure)」を複合動詞の分析に用いることを提案している。クオリア構造とは、ある語彙項目の意味を最もよく説明できる、その語彙項目と関連する属性や事象の集合のことである(Pustejovsky 1995:77)。本節ではまず Pustejovsky (1995) における本来のクオリア構造について紹介し、そのあと影山 (2005) や由本 (2012) によって一部変更されたクオリア構造を検討していく。

Pustejovsky (1995) におけるクオリア構造は以下の四つの役割によって構成される。

(9) Pustejovsky (1995) におけるクオリア構造

1. CONSTITUTIVE: the relation between an object and its constituents, or proper parts.

- i. Material
- ii. Weight
- iii. Parts and component elements

2. FORMAL: That which distinguishes the object within a larger domain.

- i. Orientation
- ii. Magnitude
- iii. Shape
- iv. Dimensionality

v. Color

vi. Position

3. TELIC: Purpose and function of the object.

i. Purpose that an agent has in performing an act.

ii. Built-in function or aim which specifies certain activities.

4. AGENTIVE: Factors involved in the origin or “bringing about” of an object.

i. Creator

ii. Artifact

iii. Natural Kind

iv. Causal Chain

では, Pustejovsky (1995: 101) の *book* を例に, クオリア構造が具体的にどのように表されるのかを見てみよう。

(10) *Book* の意味構造

$$\left(\begin{array}{l} \mathbf{book} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG1} = \mathbf{x: information} \\ \text{ARG2} = \mathbf{y: phys_obj} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \mathbf{information.phys_obj_lcp} \\ \text{FORMAL} = \mathbf{hold(y, x)} \\ \text{TELIC} = \mathbf{read(e,w,x,y)} \\ \text{AGENT} = \mathbf{write(e',v,x,y)} \end{array} \right] \end{array} \right)$$

上の表記の中で, ARGSTR は項構造(argument structure)で, QUALIA がクオリア構造である。そして, lcp は lexical conceptual paradigm の略で, *book* が information と physical object の多義を持つということを表している。FORMAL は形式役割で, hold(y, x) という関数によって, 「ある物体 y が情報 x を有する」ということを表している。TELIC は目的役割

で、 $\text{read}(e,w,x,y)$ という関数によって、「動作主 w が物体 y から情報 x を読み取る」というイベント e を表す。AGENT は主体役割で、 $\text{write}(e',v,x,y)$ という関数によって、「動作主 v が情報 x を物体 y に書き込む」というイベント e' を表す。

Pustejovsky (1995) では *book* の CONSTITUTIVE(構成役割)を示していないが、小野 (2005) では次のように、 $\text{Bound_pages}(x)$ という関数により、「紙を束ねたもの」として表している。

(11) 小野 (2005:24) における *book* のクオリア構造

形式役割(物を他の物から識別する属性):
$\text{Artifact}(x) \ \& \ \text{printed_matter}(x)$
構成役割(物とそれを構成する部分の関係):
$\text{Bound_pages}(x)$
目的役割(物の目的と機能): $\text{read}(e, y, x)$
主体役割(物の起源や発生の要因): $\text{write}(e', z, x)$

(11)のように、小野 (2005) によると、*book* の形式役割は「人工物」、「印刷物」であり、構成役割は「紙を束ねたもの」、目的役割は「読むもの」、主体役割は「書かれたもの」である。これは Pustejovsky (1995) の分析とは若干異なっている。

以上は名詞の場合のクオリア構造だったが、Pustejovsky (1995) は名詞だけでなく、全ての品詞にクオリア構造を適用できると考えている。例えば、*build* という動詞の場合は、そのクオリア構造を次のように表している。

(12) 動詞(*build*)のクオリア構造⁹

create-lcp
FORMAL = exist (e2, 2)
AGENTIVE = build_act (e1, 1 , 3)

⁹ Pustejovsky (1995) における *build* の意味構造にはクオリア構造の他にイベント構造と項構造があるが、ここではクオリア構造について検討しているため、他の構造を省略して表示している。なお、クオリア構造において、四角で囲まれた数字は項構造における項を表している。

Pustejovsky が提示した上述のような動詞のクオリア構造について、影山 (2005) はそれを不明瞭で理解困難な点が多いとして、次のように規定しなおすことを提案した。

(13) 影山 (2005) における動詞のクオリア構造

- a. 形式役割＝その動詞が表す事象(eventuality)のタイプ(activity, state, process, transition)
- b. 構成役割＝その動詞の語彙概念構造(LCS) (影山 1996 で想定したような構造化された意味表示)
- c. 目的役割＝その動詞が含意する行為の目的・目標・機能
- d. 主体役割＝その動詞表現が成立するための前提(presupposition)やフレーム(場面や背景状況)

そして、近年では由本 (2012, 2013) がこのような影山 (2005) で再定義したクオリア構造を複合動詞の分析に取り入れることを提唱している。由本 (2012, 2013) におけるクオリア構造は基本的に影山 (2005) のものを踏襲しているが、一部異なるところがある。由本 (2013) では小野 (2005) の定義も含めて、表 2-1 のように三者の動詞のクオリア構造の捉え方を比較している。

表 2-1 動詞のクオリア構造の捉え方(由本 2013: 141)

	小野 (2005)	影山 (2005)	由本
形式役割	包摂関係と結果 mumble, murmur に talk 作成動詞に exist(e,x,y) を記す	activity, state, process, transition の区別	結果及び 予測する結果
構成役割	部分・全体関係 snore に sleep を記す	LCS	LCS
目的役割	(特に記載なし)	含意する目的・機能	含意する目的・機能
主体役割	原因	その表現が成立するための 前提やフレーム (lack なら本来あるという前提)	原因およびその表現が 成立するための前提

影山 (2005) や由本 (2012, 2013) のクオリア構造の定義は動詞が表す概念と関連する事象と背景的な知識を含むという点において、本研究で用いる意味フレームの概念とかなり類似している。一つ大きく異なる点として、影山 (2005) や由本 (2012, 2013) で提案されたクオリア構造においては、構成役割における意味的な項を LCS で表示するのに対し、本研究で用いる意味フレームでは意味的な項だけでなく、項として現れないものでもフレーム要素という意味要素として含む。例えば、第五章で取り上げる〈競技〉というフレームには【点差】や【成績】、【順位】などのフレーム要素があり、それぞれ「一点差で勝った」、「三対零で勝った」、「一位で勝ち上がった」における下線部のデ格として具現化される。クオリア構造ではこのような意味要素が含まれていないため、「勝つ」のデ格に現れるものがどのような意味を持つのかを説明することができない。意味フレームはこのような付加詞として具現化される意味要素も含む点で、影山 (2005) で定義したクオリア構造より豊かな構造であるといえる。

ただし、影山 (2005) や由本 (2012) は主体役割の中にフレームを含めており、仮に本研究のようなフレームを想定しているのであれば、その中に付加詞の情報をフレーム要素として表すことは可能である。しかし、両者ともフレームの内容についての説明が全くないため、どう扱っているのか不明である。例えば、由本 (2012) は「駆ける」の主体役割を $run(e_1, y)$ 、「担ぐ」を $lift_act(e_1, x_i, y_j)$ 、「寝る」を $sleep_act(e_1, y)$ 、「切る」を $cut_act(e_1, x, y)$ 、「叱る」を $scold_act(e_1, x_i, y_j)$ などとして設定しているが、それぞれのフレームの内容が何であり、どういった機能を持つのかについては触れていない(ただし、由本 (2013) でのクオリア構造は表 2-1 のように、フレームという概念を含めていない)。本研究ではクオリア構造のように、フレームという概念を意味構造の中の一部として考えるという、周辺的なものとして扱うのではなく、フレームを分析の中心に据えたアプローチを用いる。フレームを分析の中心に据えなければならない理由については、第五章で具体的な例を示しながら改めて述べる。

2.5 まとめ

本章では 2.1 において、「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」という、日本語の語彙的複合動詞の結合の制約に関する体系的な先行研究を取り上げ、残された問題点を指摘した。2.2 で日本語の語彙的複合動詞における意味的な結合制約を紹介した。2.3 では

中国語複合動詞の一般的な結合制約である「時間順序の原則」について検討を行った。そして、2.4 では先行研究で複合動詞の分析に用いられている意味構造として、影山 (1996) や由本 (2005, 2010) などにおいて用いられている語彙概念構造(LCS)を取り上げ、LCSは背景的情報を含んでいないという問題点があることを指摘した。また、LCSの代案として挙げられているクオリア構造についても取り上げ、本研究で用いる意味フレームという意味構造との違いを明らかにした。

2.1 と 2.2 で述べた「意味関係を表す意味の付加」, 「分析可能性を失っている例」, 「合成可能な意味が実現されない」, 「言語ごとの制限」, 「限定された意味関係」などの問題点については、主に第四章のコンストラクションに関するところで改めて提起し、コンストラクション及び階層的なスキーマネットワークの概念を取り入れることで説明する。「主語一致の原則に反する例」という問題点については第六章で見ていく。

2.4 において、先行研究の意味構造を検討する際に挙げた「意味関係の解釈」と「複合動詞の適格性」, そして「構成要素にない項の出現」という問題点を解決するためには、本研究で用いる意味フレームのような豊かな意味構造が必要である。第三章の理論的枠組のところ、フレーム意味論という理論的枠組について紹介し、本研究で用いる豊富な百科事典的知識を含む動詞の意味フレーム、及びそれを構成するフレーム要素という概念を定義する。その上で、第五章で意味フレームに基づいて上述の問題点を検討していく。

第3章 理論的背景

序章で述べたように、本研究は複合動詞の形成メカニズムを説明するためには、三つの異なるレベルから考える必要があると主張する。本章では、それぞれのレベルで用いられる理論的な枠組みについて紹介する。

最初に、本研究では複合動詞を作り出す際の鋳型とでもいうべき言語の型・テンプレートスキーマの一種である「コンストラクション(construction, Fillmore 1985b, 1988 など)」として捉える。複合動詞のコンストラクションに適合しない動詞の組み合わせは「*購買し取る(cf. 買い取る)」や「*削り除去する(cf. 削り落とす)」のような、和語単純動詞の組み合わせでないもの、「*叩く壊す(cf. 叩き壊す)」や「*打て上げる(cf. 打ち上げる)」のような、V1が連用形でないもの、「*倒し推す(cf. 押し倒す)」や「*立ち読む(cf. 立ち読みする)」のような、V1とV2の意味関係が日本語の語彙的複合動詞のコンストラクションに含まれていないものは、完全に容認出来ない組み合わせとなる。このようなコンストラクションという概念、及びコンストラクション形態論については3.1で述べる。

次に、複合動詞の結合制限や意味形成、項形成など様々な意味的な問題を説明するには「百科事典的知識」が必要である。そのため、本研究は「フレーム意味論(Frame Semantics, Fillmore 1977, 1982, 1985a)」という、意味論に背景的な知識構造である「フレーム」を結びつけた理論モデルを用いることで複合動詞の意味の面を捉える。3.2では、初めにフレーム意味論が重要視する百科事典的知識の必要性について検討し、次いで、フレーム意味論を用いることでどのような意味分析が可能になるのかを示すために、主に〈商取引(Commercial Event)〉フレームと〈リスク(RISK)〉フレームを取り上げて説明する。その上で、本研究で用いる「意味フレーム」と「背景フレーム」という二つの概念を定義する。

上述のようなコンストラクションレベルと意味フレームレベルの制限に適合したとしても、複合動詞として成立しない場合がある。例えば、五章で詳しく述べるが、〈ある対象を捉えることに失敗する〉ことを表す「～逃す」に「見逃す」や「聞き逃す」な

どがあるが、「見る」「聞く」と同じ知覚動詞である「嗅ぐ」は「??嗅ぎ逃す」という組み合わせの容認度が低いように、「～逃す」とは結合できない。これは「??嗅ぎ逃す」がどういう場面(フレーム)を指し示しているのかが分からないために成立できないと思われるかもしれないが、そうではない。仮に「香水の発表会でその香りを嗅ぐのを楽しみにしていたが、当日急用ができたために参加できなかった」というような背景知識があったとしても、文脈情報がないときより容認度は上がると思われるが、「?嗅ぎ逃す」が完全に容認できるものになるとは言い難い。これは、ある特定の知識を有する人にとっては容認度が上がる複合動詞だとしても、結局その言語社会において、その知識が共有されていなければ、その複合動詞が「耳馴染み」のないものとして、完全に容認されるものとはならないからだと考えられる。この問題を説明するためには、文化の影響を考える必要がある。3.3において、言語社会と文化について、主に Enfield (2000, 2002) の Lao 語に関する文化人類言語学的な研究を取り上げて、言語社会における慣習化というレベルの制限について説明する。

最後に 3.4 で本章を総括する。

3.1 コンストラクションとコンストラクション形態論

形態論とは語レベルの形式と意味の関係性を研究する言語学の一分野であるが、「コンストラクション形態論」はその名の通り、「コンストラクション」という概念が中心的な枠割を担っている形態論である。以下において、コンストラクションという概念について概観した上で、従来のルールベースのトップダウン型な形態論、そして本研究が用いる用法基盤のボトムアップ型なコンストラクション形態論とを比較しながら論を進める。

3.1.1 コンストラクション

コンストラクションという概念は言語学において長い歴史があり、特定の構文¹⁰に特

¹⁰ 本研究では後で述べるように、語も一種のコンストラクションであると考えられるため、「構文」という用語は文レベルのコンストラクションにのみ用いることにする。

定の性質が見られることは自明なことだとされていた。初期の変形文法においても、構文という概念が用いられており、構文ごとの規則や制限が設けられていた(Chomsky 1957, 1965)。しかし、八十年代に入って、Chomsky (1981, 1992) によって提唱された「原理とパラメータのアプローチ (principles and parameters approach)」が台頭するのに従って、文法的な構文は、いくつかの一般的な規則とパラメータとの相互作用の結果の付随現象(epiphenomena)でしかないとして、軽視されるようになった。

このような還元主義(Reductionism)的なアプローチに対抗する形で、構成要素や一般的な規則・パラメータでは説明できない、構文そのものの形式が意味を持つ場合があるという Construction Grammar という理論モデルが構築されるようになる(Fillmore 1985b, 1988, Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Fillmore & Kay 1993, Lakoff 1987, Goldberg 1991, 1992, 1995, Michaelis 1993 など)。中でも Goldberg (1995) は英語の様々な項構造構文 (Argument Structure Construction)を取り上げ、構文の形式そのものにある特定の意味が対応していることを明らかにし、構文という言語単位から分析することの重要性を改めて示した。

Goldberg (1995) で取り上げた二重目的語構文(Ditransitive Construction)を例に、コンストラクションという概念を認める必要があることを説明しよう。まず、構文には構成要素には見られない意味を担っている例として、(1)がある。

(1) Sally baked her sister a cake.

この例文は Sally が姉にケーキをあげるという意図を持ってケーキを焼いた、という意味にしかない。二重目的語構文そのものに‘intended transfer’という意味を認めないなら、*bake* の意味を‘X intends to cause Y to receive Z by baking’と設定しなければならなくなる。だが、*bake* のこのような転移の意味はこの特定の構文でしか現れないものであり、このようなアドホックな動詞の意味を認めるのは妥当とは言い難い。

加えて、二重目的語構文にはその参与者に対する意味的な制約がある(Goldberg 1995: 142-147)。まず、二重目的語構文は‘intended transfer’という意味を表すため、その動作主は意思的(volitional)かつ意図的(intentional)にある動作を行うものでなければならない。次の例文を見てみよう。

(2) Joe painted Sally a picture.

(2)が成立できるのは Joe が Sally に絵をあげるという意図がある場合のみで、Joe が他の誰かのために絵を書いたが、のちに Sally にその絵をあげた、という場合には使えない。同様に、(3)が成立できないのもボールの転移が Joe の意図したものと異なるからである。

(3) *Joe threw the right fielder the ball he had intended the first baseman to catch.

動作主だけでなく、受取人(Recipient)にも、対象を貰うことを望んでいる必要がある、という意味的な制約が存在する(Goldberg 1995: 146)。(4)のような例文は受取人が対象を貰うことを望んでいないため、非文となる。

(4) *Bill told Mary a story, but she wasn't listening.

このような二重目的語構文の形式と意味の対応関係は表3-1のように示すことができる。

表 3-1 Goldberg (2006) における二重目的語構文

Form	Meaning
Subj V Obj Obj ₂	X causes Y to receive Z

以上見てきたような意味的な性質や制約は、一般的な原則にも、構成要素の意味にも還元できないものである。これは二重目的語構文の[Subj V Obj Obj₂]という形式と対応している意味性質・制約だと考えるべきである。したがって、項構造構文は形式と意味のペアリングであるコンストラクションとしてレキシコンに登録されていると考えられる。次節で述べるように、*kick the bucket* のようなイディオムが持つ特異な性質や *pickpocket* などの複合語に見られる合成的でない意味も、コンストラクションの立場から説明できるようになる。

概念の組み合わせが創発的な概念を生み出すことは実際のところ遍在的な現象であり、言語外の現象では、特に新しい道具を作り出す場合に見られる。例えば、水車というものを思い浮かべてみよう。水車そのものは円形の木製構造物だが、それが流れる水と組み合わせられると、円周の周囲にあるくぼみに水が貯まることで回転する。木製の構造物は、〈円周の周囲にくぼみがあり、真ん中に軸があって回転する〉という概念に、〈流れる水〉という概念と合わさった時に、動力を生み出す装置と理解されるのである。

創発的な概念のもっと複雑な例としては、ししおどしがある。



図 3-1 ししおどし

図 3-1 のように、ししおどしを構成しているのは〈竹で出来た構造物〉と〈流れる水〉と〈石〉である。まず〈竹で出来た構造物〉と〈流れる水〉が組み合わせあって、流れる水が竹の容器に貯まることで片方が重くなり、自動的に等間隔で上下運動する装置ができる。そこにさらに〈石〉を加えると、竹の容器から水が全部出て軽くなることで下方へ動く際に、石と接触して音が出るという仕組みになる。かくして、自動的に等間隔で音を発する装置が出来上がる。このようなく自動的に等間隔で音を発する装置〉という概念は構成要素の〈竹で出来た構造物〉や〈流れる水〉、〈石〉という概念単体にはないもので、それらが全部合わさった時に創発的に現れるものである。

3.1.2 コンストラクションの形式についての再考

ここで一つの問題点が残っている。それは、コンストラクションの定義は形式と意味のペアリングであるが、二重目的語構文における[Subj V Obj Obj₂]のような文法的なカテゴリーの組み合わせを、一つの形式と見なしてよいのだろうか、ということである。

コンストラクションにおける形式がどのようなものを指すのか、という問題点について、Langacker (2005)は Goldberg (1995)や Croft (2001) における項構造構文を対象に、次のように指摘している。Langacker (2005)は図 3-2 のように、項構造構文に対応する形式について、自身が提唱する Cognitive Grammar は音韻的な構造(phonological structure)しか認めていないのに対し、Goldberg (1995) の Construction Grammar や Croft (2001) の Radical Construction Grammar においては、文法的な形式(主語や目的語など)も含むとしている。

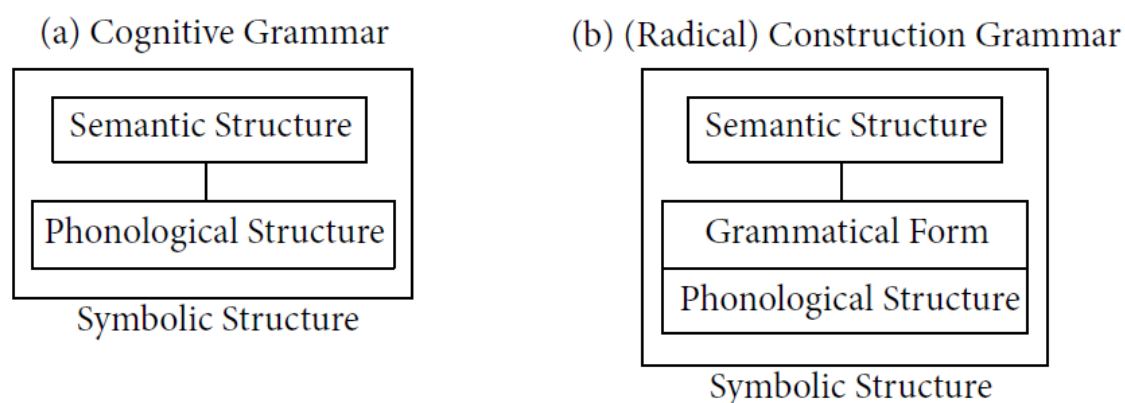


図 3-2 Cognitive Grammar と (Radical) Construction Grammar における異なる形式の概念 (Langacker 2005: 105)

その上で、文法的な形式をコンストラクションの形式とすることについて、以下のよ
うに、1) 文法的な形式は具体的な音形を持たないため、それをコンストラクションの
形式とするのは妥当ではない、そして、2) 文法を表すコンストラクションの中に文法
形式を含めるのは循環論法に陥る、という二つの問題点を指摘している。

In what sense, for instance, is categorization as a noun a matter of form? Category labels do not appear in the speech stream, and since ordinary speakers have no conscious awareness of grammatical classes or class membership, the latter can hardly be said to have a symbolizing function. There is also something less than straightforward about saying that grammar resides in constructions, defined as form-meaning pairings, and also saying that certain aspects of grammar constitute a major part of the form. (Langacker 2005: 107)

この問題点については Goldberg (2006) における使役移動構文 (Caused Motion Construction) を例に説明しよう。使役移動構文とは *sneeze the foam of the cappuccino* などのような例として具現化される構文である。

表 3-2 Goldberg (2006: 73) における使役移動構文

Form	Meaning
Subj V Obj Obl _{path/loc}	X causes Y to Move Z _{path/loc}

Goldberg (2006) は [Subj V Obj Obl_{path/loc}] が使役移動構文の形式だとしているが、斜格の経路 (path) と場所 (loc) は一定の形式を持つものとは考えにくく、あくまでも概念的なものである。

Verhagen (2009) はこの問題に対して、コンストラクションを一つの記号として捉え直すことで説明している。記号を形式と意味のペアリングとして考えた場合に、その形式には二つの側面があって、一つは記号の観察できる一面 (例えば音韻的な形式) を指しているが、もう一つの側面としては、ある直接観察できない何かを指し示す「トリガー」という役割がある。記号の形式をトリガーとして考えたときに、記号をシニフィアン (表すもの) とシニフィエ (表されるもの) のペアリングとして定義することができる。この定義において、ある意味 (または概念) を指し示すことができるのは必ずしも具体的な形式である必要はない。次の図を見てみよう。



図 3-3 ‘Protection’ という概念を表す傘 (Verhagen 2009: 135)

この図はオランダの保険会社で使われているものだが、傘という視覚的なイメージ(直接知覚可能な形式)から、<体が濡れないように雨を防ぐもの>という概念を呼び起こすが、そこからさらに<危険から身を守るもの>という概念を連想させる。抽象的な<危険から身を守るもの>という概念は直接傘という視覚的なイメージと結びついていないのではない。<危険から身を守るもの>という概念は、傘というイメージが喚起する<体が濡れないように雨を防ぐもの>という概念がトリガーとなって、呼び起こされるものである。下図のように、記号における形式と意味の対応関係は直接的なものだけでなく、ある形式によって喚起される意味が媒介として別の意味を呼び起こすという、間接的な対応関係が存在する¹¹。

¹¹ 「メトニミー」的な関係に相当する(Verhagen 2009: 139)。

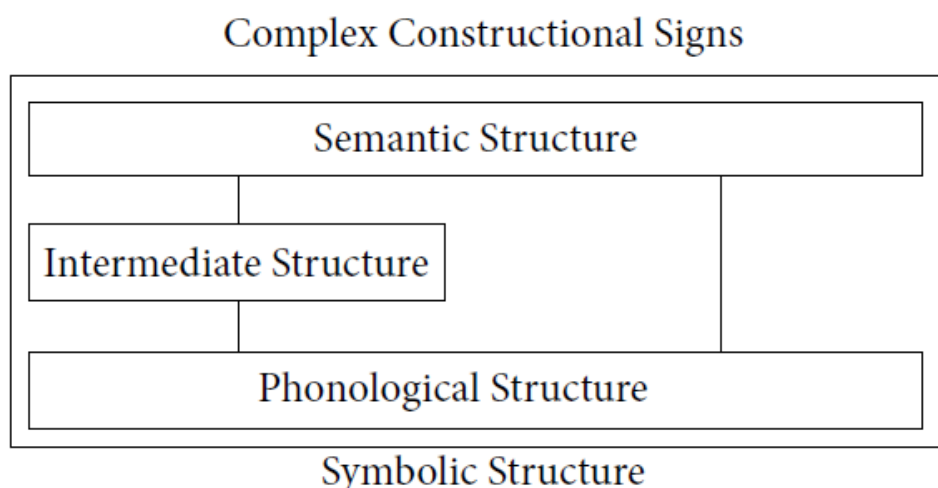


図 3-4 Verhagen (2009: 144)におけるコンストラクションの定義

Verhagen (2009) が述べているように、ある直接観察できない意味・概念を指し示すトリガーとなれるのは、具体的な形式だけではない。具体的な形式が指し示す意味・概念もまた別の意味・概念を指し示すトリガーと成り得るのである。したがって、本研究では具体的な音韻的形式だけでなく、文法的なカテゴリーなども抽象的なものではあるが形式の一つとして考える。そうすることによって、第四章で述べるように、日本語の語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別が可能になるだけでなく、V1 と V2 の特定の意味関係に対応する文法的な形式を設定することができるようになる。

3.1.3 語レベルのコンストラクション

これまで述べてきたように、コンストラクションとは意味と形式(抽象的なものも含まれる場合がある)のペアリングであり、その意味で、文だけではなく、単純語、複雑語、そしてイディオムは、共にコンストラクションとして捉えることができる(Goldberg 1995, Booij 2010)。

表 3-3 サイズと複雑さの異なる様々なコンストラクションの例 (Booij 2010: 15)

	<i>Example</i>
Word	<i>tentacle, gangster, the</i>
Word (partially filled)	<i>post-N, V-ing</i>
Complex word	<i>textbook, drive-in</i>
Idiom (filled)	<i>like a bat out of hell</i>
Idiom (partially filled)	<i>believe<one's>ears/eyes</i>
Ditransitive	Subj V Obj ₁ Obj ₂ (e.g. <i>he baked her a muffin</i>)

従来の形態論は主に二つのアプローチに分けることができる。一つは形態素ベースのアプローチで、ある複雑語(*complex word*)は形態素の合成として分析される(Lieber 1980, 1992, Selkirk 1982, Di Sciullo&Williams 1987 など)。このアプローチの問題点としては、複雑語を構成する形態素がその語以外において存在しない例が多く見られることが挙げられる。例えば、英語の *acceptable, affordable, approachable, believable, doable* のような *V-able* は、他動詞と *-able* という接尾辞が合成したものとして分析できるが、*applicable* における動詞語根 *applic-*は本来基底となる動詞 *apply* とは異なる。さらに、*amenable, ineluctable* などにおいては、基底となる動詞が存在しない(Booij 2013 を参照)。このようなものはいわゆるクランベリー型形態素(*cranberry morpheme*)と呼ばれるもので、複合語の構成要素としては存在するが、単独では用いられないものである。

形態論のもう一つのアプローチは語ベースのアプローチで、既存の語に基づいてその形態を分析するものである(Anderson 1992, Aronoff 2007 など)。Booij (2013) によると、コンストラクション形態論が用いる語ベースのアプローチでは *V-able* の語は既に存在しているものに基づいて次のように分析される。

- (5) *accept* *acceptable*,
afford *affordable*,
approach *approachable*,
believe *believable*,
do *doable*

(5)にある語を左側と右側に分けて分析すると、両者に意味的な対応関係が共通して見られることが分かる。つまり、右の列にある語は左の列の語が表す動作が実現可能であることを共通して表しているとして分析できる。そして、これらの用例における、形式と意味の対応関係に基づいて一般化することで、以下のようなスキーマを形成することができる(Booij 2013: 256)。

(6) $[VTR_i -able]_{Aj} \leftrightarrow [[CAN BE SEM_i-ed]_{property}]_j$

(TR は他動詞を表し、SEM は対応する構成要素の意味を表す)

スキーマ(6)は既存の *-able* で終わる形容詞を一般化したものであり、それらの予測可能な一般的性質を表している。*V-able* はほとんどが他動詞である。従って、コンストラクションの形式はデフォルト的には $[Vtr_i -able]_{Aj}$ である。これはあくまでデフォルトであり、少数の例外が許される。しかし、例外となるものも、その意味は他動詞的なものである。例えば、自動詞と他動詞の両方の用法を持つ多義語の *play* と *debate* はスキーマ(6)に埋め込まれると他動詞の用法を選択する。そして、*laughable* と *unlistenable* のような本来自動詞であったものに他動詞の読みを強制する。さらに、*clubbable* のように、 $[N-able]$ の場合も、スキーマ(6)によって他動詞の読みが動機付けられる。*amenable, ineluctable* のような例は、意味においてはスキーマ(6)と対応しているため、形式的に異なる下位スキーマを形成していると考えられる。

それだけでなく、スキーマ(6)に基づいて、新たに *V-able* の形容詞を作り出すプロセスを説明することができる。例えば、最近のインターネットの文化の発展から作り出された *blog* という動詞はスキーマ(6)に基づいて、*blogable* ‘worthy of being blogged’ という新たな形容詞を作り出すことができる¹²。

このようなスキーマ(6)は部分的な空きスロットがある「コンストラクション的イディオム(constructural idiom)」である(Jackendoff 2002, Booij 2009, 2010, 2013 を参照)。コンストラクション的イディオムにおける固定された要素は単独で使用されるときには

¹² 注意したいのは *blogable* がスキーマ(2)の意味から意味拡張しているという点である。*blogable* は <～することができる> という意味から <～することに値する> と意味拡張しているが、これは *readable, writable* のような場合にも見られるもので、*-able* の多義であると思われる。このような多義の場合は下位スキーマ(Boas 2003 における mini-construction を参照)を形成していると考えられる。

見られない意味を持つ場合がある。このような複合語に埋め込まれた形でしか見られない意味を「拘束意味(bound meaning)」という。例えば、オランダ語の *reuse(reus* ‘giant’ という語に linking element としての *-e* がついたもの)は複合語の前項として、名詞や形容詞と結合することで、単独で使われる際には見られない‘great’と‘very’という意味を持つ (Booij 2013: 259)。

(7) a. *reuse*-N

reuze-idee ‘great idea’

reuze-kerel ‘great guy’

reuze-mop ‘great joke’

reuze-plan ‘great plan’

b. *reuse*-A

reuze-aardig ‘very kind’

reuze-leuk ‘very nice’

reuze-gemeen ‘very nasty’

3.1.4 階層的レキシコン

コンストラクション形態論においては、スキーマとそのスキーマの具現化の関係性はデフォルト継承のメカニズムを用いることで、図 3-6 のように、階層的なレキシコンとして表すことができる。

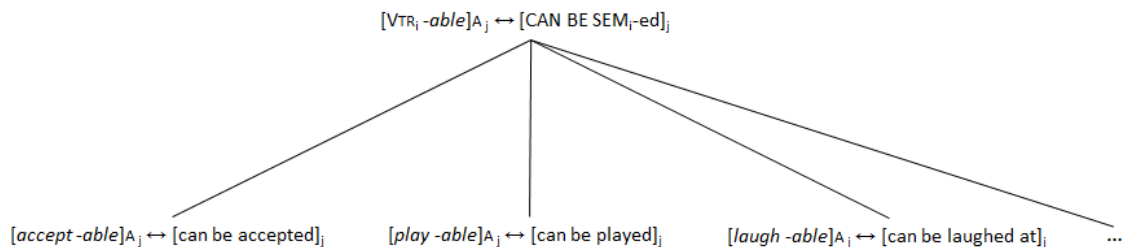


図 3-6 階層的レキシコンにおける V-able

デフォルト継承:ある語の全ての予測可能な性質は上位のスキーマ(ツリーの節点)から受け継ぐ(Booij 2012 を参照)。

デフォルト継承には二つの考え方がある。一つは不完全語彙項目記載理論(impooverished entry theory)で、これはある語彙項目の全ての予測可能な性質はその語彙項目の性質として含まず、それを支配しているスキーマや制約によって特定され、語彙項目はその上位スキーマから継承という形でその性質を受け継ぐ、というものである。もう一つの考え方は完全語彙項目記載理論(full entry theory)で、語彙項目は全ての性質がそれ自身のもので特定されているというものである(Jackendoff 1975 も参照)。そして、継承は非独立(予測可能)な情報がどれほどあるのかを計算するためのメカニズムであるという。コンストラクション形態論においては後者の完全語彙項目記載理論の考え方を取る。なぜなら、抽象的なスキーマは実際に登録された複合語に基づいて形成されるからである。加えて、抽象的なスキーマを形成すると元々登録されてあった複合語の性質が消去されることを証明するものは何もない(Booij 2010 を参照)。

デフォルト継承はあくまでデフォルトの場合の継承であり、それと異なる特異な性質を持つ下位ケースの存在を拒むものではない。例えば、*V-able* の形容詞の性質は基本的にスキーマ(6)によって捉えられるが、そのほかに、1) *agreeable* のように、他動詞ではないが前置詞を伴って対象を要求する *agree* から派生したもの、2) *applicable* のような本来の動詞の形 *apply* ではない形を含むもの、3) *clubbable* のように、元になっているのが名詞であるもの、さらには4) *amenable*, *ineluctable* などのように、ベースとなる語が存在しないものもある。これらの例はそれぞれ一つの下位スキーマを形成しており、一つの個別語レベルのコンストラクションと見なすことができる(Croft 2003, 2012 の *verb-specific construction* を参照¹³)。

このように、存在する *-able* 形容詞とそのスキーマの両方を特定することで、ルール／リストの誤謬(Rule/List Fallacy)を回避することができる。

¹³ 加えて、Boas (2003) が主張した *mini-construction* という概念のように、ある語に複数の意味(多義)がある場合は、個々の意味でそれぞれがその語の下位のコンストラクションを形成していると考えられる。

ルール／リストの誤謬¹⁴：

ルール(文法規則)によって予測できるものはリスト(レキシコンに登録)する
 必要がないという誤った仮定。 (Langacker 1987: 29, 42)

コンストラクション形態論において、リストすることは言語的に慣習化されたものを特定することであり、抽象的なスキーマは文法の生成能力を表している。用法基盤モデル(usage-based model, Langacker 1987, Bybee 1985, 2006, Barlow & Kemmer 2000, Tomasello 2003 などを参照)の考え方では、全ての言語単位(linguistic units)は実際の用例に基づいて生まれたものとされる。言語話者は実際に見聞きした複合語の用例とそれが使用された際のコンテキストなどの情報をカテゴリー化(categorization)し、そこから抽象化されたスキーマを抽出するのである(schematization)。

ここで一つ問題になるのが、経済性という視点から考えると、どうせ全てがレキシコンに登録されるのなら、なぜスキーマの存在が必要なのか、ということである。スキーマの必要性を支持する証拠の一つとして、スキーマに基づく生産的な語形成のプロセスを説明できるという点が挙げられる。スキーマは単に既存の語の一般化だけでなく、生産的な語形成に用いることができる(例：*blogable*, *skypable*)。また、スキーマの心理的実在性は、実験で子供が複数の複合語から抽象的なパターンを発見し生産的に使用できることによっても証明されている(Mos 2010)。関連して、この問題点について、Jackendoff (2011b) はたとえ全てが登録されるにしても、スキーマのように一般化を行うことはある意味経済的であり、これはレキシコンのエントロピー、またはレキシコンの内部的な整合性と関連がある。そして、この問題を解決することで人間の記憶についてもより深い理解が得られるだろうと述べている。つまり、レキシコンに登録されたとしても、実際にそれを運用するに際してはある程度整理された形のほうが効率がいいと考えられる。Booij (2012) はこの問題をスキーマによる「動機づけ(motivation)」として説明している。スキーマの動機づけとは、全ての語彙項目はそれを支配しているスキーマによって、その形式と意味の結びつきが動機づけられているというものである。これによって従来恣意的なものとしてきた形式と意味の結びつきは、スキーマの動機づけによって

¹⁴ この仮定を支持する説としては、英語の動詞の過去形は一部のイレギュラーなものだけがレキシコンに登録され、通常の過去形は規則によってその場で作り出されるという Pinker (1999) の説などがある。言語の冗長性の問題については Jackendoff (2011a) を参照。

予測可能なものとなり、記憶の負担を軽減することになるという。このように、Booij (2012) では継承という概念を動機づけという概念に捉え直すことで、完全語彙項目記載理論と継承という二つの概念の間の矛盾を解消しようとしている。

本研究では第四章において、コンストラクション、コンストラクション的イディオム、階層的なレキシコン、デフォルト継承といったコンストラクション形態論における概念を用いて、複合動詞を階層的なスキーマネットワークで表し、それに基づいて分析を進めていく。

3.2 フレーム意味論

フレームとは、コンストラクションと同じく Charles J. Fillmore によって考え出され、コンストラクションと密接に関係した概念である。

For a long time I've assumed that Frame Semantics and Construction Grammar
somehow belong together... (Fillmore 2009)

Fillmore はその有名な‘The case for case’ (Fillmore 1968) という論文の中で、動詞が取る項の意味的な役割の関係を「深層格(deep structure case)」として定義し、動詞が選択する深層格によって形成される「格フレーム(case frame)」に基づいて文を分析する必要があると主張した。この格フレームに基づいて文を分析するという考え方は、「格文法(case grammar)」と呼ばれ、生成文法における θ 理論(Chomsky 1981)や項構造(argument structure, Grimshaw 1990 を参照)という概念、自然言語処理などにも多大な影響を与えた。格フレームという考え方には、文法的な構文としての「コンストラクション」と、意味役割の構造である「意味フレーム」という概念の原型が既に含まれていた。Petrucci (2014) が述べているように、Fillmore にとって、構文文法とフレーム意味論は当初から相互に補完し合う、対となった理論として生み出されたもので、二つは切り離せない概念である。

This work suggests that Frame Semantics and Construction Grammar are more
thansister-theories; indeed, the two are sororal twins, virtually born at the same

time, growingtogether side-by-side, each contributing to the other's development,
and ultimately alwaysbound together. (Petrucek 2014: 201)

このようなコンストラクションとフレームの親和性から, Goldberg (1995, 2006), Croft (2001) においてもコンストラクションの意味的な側面を捉えるのにフレーム意味論を取り入れる必要があると主張している。以下では 3.2.1 節でフレーム意味論が重視する百科事典的知識の必要性について論じ, 3.2.2 節でフレームという概念, 及びそれをどのように意味分析に応用するのか, ということを実験研究における具体的な分析例を用いて説明する。

3.2.1 百科事典的知識

フレーム意味論において, ある語の意味は日常の活動を通じて形成された経験, 習慣などを背景として理解されるものである(Fillmore 1982)。つまり, 意味は独立しているものではなく, 背景状況(background situation)や関連する概念と共に喚起されるのである。このような知識を総称して「百科事典的知識」という。百科事典的知識とは専門的な科学知識ではなく, ある社会に属している人間が一般的に持っている, ある物事と関連する「現実世界についての知識(real-world knowledge)」や「社会文化的知識(sociocultural knowledge)」, 「一般的な常識(common-sense knowledge)」, そして, その物事を理解するために必要な「背景知識(background knowledge)」を包括する用語である(Evans 2009: 17)。

このような百科事典的知識を語の意味として含めるかどうかについては研究者の間で意見が分かれており, 有名な論争として, *Cognitive Linguistics* 誌における Taylor (1996) と Jackendoff (1996) の *run* と *jog* についての議論がある。

この論争の背景として, Jackendoff (1990) では意味の表示として, 概念構造(conceptual structure)と 3D モデルを用いることを提案し, 例として, *run* と *jog* は同じ概念構造を持つ主体移動の表現で, 二つの語の違いは 3D モデルにおける具体的な移動のイメージの違いだけであると主張した。これに対し, Taylor (1996) は *run* と *jog* について, 文化や現実世界についての知識が多く言語事実として二つの語の違いとして表れることを示した。Taylor (1996)によると, *jog* の意味を理解するには, 先進国の裕福な中間階級において共有されている, ある特定の健康的なライフスタイルについて理解する必要がある

るという。このような文化的知識に基づいて *run* と *jog* は異なる振る舞いを見せる。例えば、主語に対する制限として、*run* は大人でも子供でも主語になれるのに対し、*jog* の場合、幼稚園児ぐらいの子供が主語になるのは通常考えにくい。また、馬、犬、猫、ネズミなど、多くの動物でも人間と同じように *run* の主語になれるが、*jog* の主語になれる動物は人間以外に馬ぐらいしか考えられない。

さらに、*run* とは違い、*jog* は健康のために走るなのであって、競争のためではない。この百科事典的知識は(8)のような容認度の違いとして表れる。

(8) a. Bruce ran against Phil.

b. *Bruce jogged against Phil.

これに対し、Jackendoff (1996) は Taylor (1996) で挙げられている例のほとんどは統語的な違いではないため、意味として含めるべきではないと反論した。しかし、百科事典的知識は統語現象にも反映されることがわかっている。例えば、Boas (2006) は主体移動を表す *walk*, *parade*, *totter*, *stagger* を取り上げ、これらの語に関する百科事典的知識が Levin (1993) で検討されているような文法的な構文や交替現象などの様々な統語現象に反映されることを示している。ここでは、これらの語が動作主に対して持つ指定を取り上げる。*Walk* の動作主は単に足で主体移動するものであればいいのに対し、*parade* は動作主の歩きぶりと一歩一歩のステップに焦点があり、その動作主は規則的かつ目的を持った精力的な歩行をすることで他人に見られることを前提とした公的な自己表現を行うものである。*Totter* の動作主はその歩幅が通常のものとは異なり、直立の姿勢を保つことが困難である様子から、弱っている、または酔っていると推測される。*Stagger* になると、*totter* の場合よりも動作主の足元が覚束なく、バランスを保とうとするも、直立した姿勢を維持するのが著しく困難である場合を表す。

この4つの動詞の中核的意味(core meaning)は共に、動作主(Agent)が起点(Source)から経路(Path)を通して着点(Goal)に至る、というものである。これらの主体移動動詞で異なっているのは、Jackendoff (1990) の3Dモデルにおける具体的な移動のイメージである。このような動詞の中核的意味と具体的な移動のイメージの違いは、Snell-Hornby (1983) が動詞の記述力(descriptivity)を量るために提案した act nucleus と modificants という二つ

の概念の違いに相当する。*Walk* の場合、その *modifiers* は<足を使う>や<直立の姿勢を取る>のようなものしかないが、*parade*, *totter*, *stagger* はより多くの情報が *modifiers* に含まれている。Boas (2006) によると、このような中核的意味ではない情報によって、*walk* とほかの動詞の文法的な振る舞いが異なってくる。

まず、これら4つの動詞は全て主体移動を表すが、共に経路を表す前置詞句との共起が可能である。そして、共に同形の名詞を持っている。

(9) a. Gerry {walked/paraded/staggered/tottered}.

b. Gerry {walked/paraded/staggered/tottered} down the street.

(10) a walk, a parade, a stagger, a totter

しかし、結果構文と使役移動構文になると、4つの動詞の容認度が変わってくる。

(11) a. Cathy {walked/?paraded/*staggered/*tottered} herself to exhaustion.

b. Cathy {walked/*paraded/*staggered/*tottered} Pat off the street.

結果構文の(11)では *walk* だけ容認可能で、*parade* は少し容認度が落ち、*stagger* と *totter* は容認出来ない表現となる。使役移動構文の(11)は同様に *walk* だけ容認でき、他の3つは容認できない表現である。

次に、場所格前置詞脱落の交替現象(*locative preposition drop alternation*, Levin 1993: 43-44 を参照)を見てみると、*walk* と *parade* はこの交替現象に参加するのに対し、*stagger* と *totter* はこのような交替が起こらない。

(12) a. Julia {walked/paraded/staggered/tottered} across the town.

b. Julia {walked/paraded/*staggered/*tottered} the town.

また、意思的な有生物である *Causee* が *Causer* によって誘導された結果、ある動作を行うという誘導行為の交替現象(*induced action alternation*, Levin 1993: 31)について見る

と、先ほどの場所格前置詞脱落の交替現象と同様に、*walk* と *parade* しか交替が起こらない。

(13) a. Claire {walked/paraded/*staggered/*tottered} the dog down the street.

b. The dog {walked/paraded/staggered/tottered} down the street.

最後に、形容詞的受動分詞(adjectival passive participles, Levin 1993: 86-87)では、*walk* だけが可能で、*parade* はかなり落ち着きが悪く、*stagger* と *totter* は容認されない。

(14) the {walked/??paraded/*staggered/*tottered} dog

このような文法的な違いは表 3-4 にまとめられる。

表 3-4 *walk, parade, stagger, totter* の文法的な分布 (Boas 2006: 144)

	<i>walk</i>	<i>parade</i>	<i>stagger</i>	<i>totter</i>
Location PP	+	+	+	+
Zero-related Nominal	+	+	+	+
Resultative Construction	+	?	-	-
Caused-motion Construction	+	-	-	-
Preposition Drop Alternation	+	+	-	-
Induced Action Alternation	+	+	-	-
Adjectival Passive Participle	+	??	-	-

以上のように、*walk* のような動詞の記述力が低いもの、つまり *modifiers* による指定が少ないものは比較的自由に様々な構文に現れるのに対し、*parade, stagger, totter* のような *modifiers* による指定が多いものは現れることができる構文に制限がある。このことから、Boas (2006) は、動詞の文法的な振る舞いを説明するには中核的意味だけではなく、具体的な移動のイメージや、動作主の状態などの情報を含む、粒度の細かい意味表示を用いる必要があると主張している。第五章で論じるように、複合動詞の意味

形成における多くの問題点を説明するにもこのような百科事典的知識が必要である。

3.2.2 フレーム

本研究は語の意味を捉えるために、豊富な百科事典的知識を含む「フレーム」という概念に基づくフレーム意味論という理論モデルを用いる。フレームとはある概念を理解するために必要な背景情報を含む図式化された知識構造である。そして、フレームは人がどのように自身の経験を知覚し、記憶し、推論するのか、ということにおいて大きな役割を果たしている。例えば、図 3-7 のように、「弧」や「弦」、「半径」、「直径」という語を理解するためには「円」という背景(background, または Langacker 1987 などにおける base)が必要であり、これらの語はそれぞれ同じ背景(円)の異なる部分(太線で表されている部分)を前景化(profile)している。

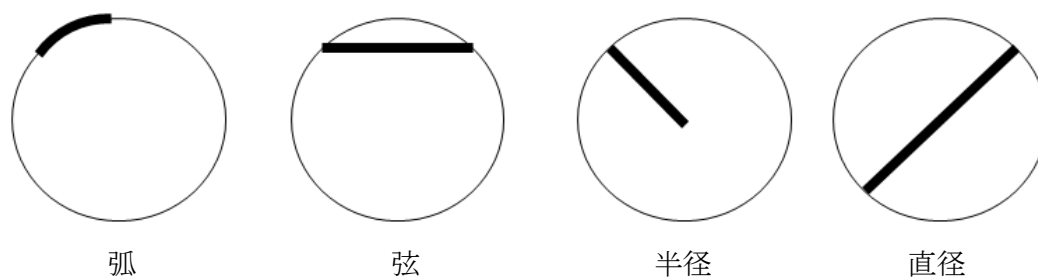


図 3-7 同じ背景(円)に基づく異なるプロフィール

背景状況の重要性は近年の認知科学の研究によって支持されている。それらの研究によると、概念は独立して保存されるのではなく、それが存在・発生する状況において記憶され、概念が使用されるときには、その背景にある状況も一緒に呼び起こされるという(Barsalou 2003, Yeh & Barsalou 2006, Simons et al. 2008 など)。

従来の生成文法や語彙意味論などのアプローチでは「経済性」が重視され、統語現象に反映されない情報は「冗長(redundant)」なものとして軽視されてきた。しかし、「効率性」という観点から考えると、冗長な情報によってこそ、その時々状況に基づいて、理論上無限にある可能性の中から起こりうることを予測・制限することが可能となる。人工知能の分野においてよく知られている「フレーム問題」というものがあるが、それは人工知能がある課題を遂行するに当たって、無限に起こりうる出来事の連鎖を計算することは不可能で、「関連する」事項に限定し

て処理を行う必要があるが、その際どのようにして「関連する」事項を決定するのかが問題となるというものだ(Dennett 1984 を参照)。この「フレーム問題」は、概念というものがその背景状況と共に記憶・喚起されると考えることで解決できると考えられている(Clancey 1997, Wheeler 2008 など)。概念は独立して保存されるのではなく、それが存在・発生する状況において記憶される。そして、その概念が使われるときに、その背景にある状況も一緒に呼び起こされる。実際の状況の中で概念を形成していくことで、概念とその背景状況が関連付けられる。そして、ある状況に遭遇したときにはそれと関連する概念が自然に喚起され、それによって我々はフレーム問題を解決していると思われる。特定の物事はある一定の状況において現れやすいため、この相関関係を利用することで処理する情報を制限し効率を高めることができる。認知システムは記憶の中にある全ての状況を検索するのではなく、現在の状況と関連のある知識だけに焦点を当てる。状況を特定することで現れうる物事を制限し、反対に物事を特定することでこれから起こるであろう状況を制限できると言われている(Yeh & Barsalou 2006: 350)。

このように、フレームはある概念が存在・発生する状況そのものに関する詳細な情報を含むだけでなく、その状況がどのような原因によって引き起こされたものなのか、そして、その状況によってどのような結果がもたらされるのか、という情報もフレームによって関連付けられていると考えられる。

Fillmore(1977)はこのようなフレームという概念を語の意味分析に取り入れる必要があると主張した。それによると、*buy, sell, pay, cost, charge* などの語は同じ〈商取引(commercial event)〉のフレームを喚起する。

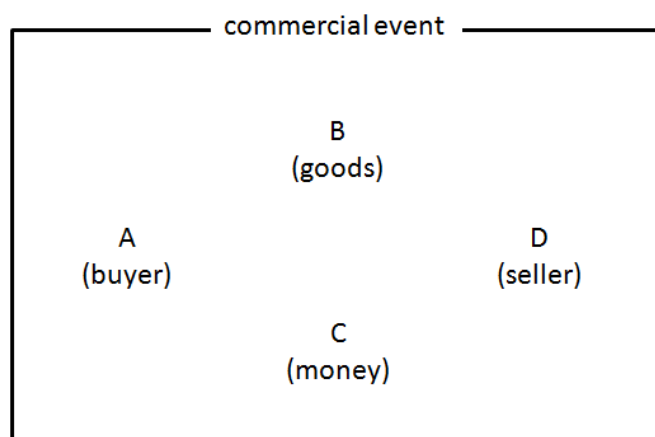


図 3-8 〈商取引〉フレームにおける参与者(Fillmore 1977: 104)

図 3-8 は〈商取引〉フレームにおける参与者を表したものである。そして、*buy*, *sell*, *pay*, *cost*, *charge* などは〈商取引〉のフレームの異なる部分(関係性)をプロファイルしている。図 3-9 のように *buy* は A(買い手)が B(品物)に対する動作をプロファイルしているが、C(お金)と D(売り手)との関連性も背景に含まれる。一方、*sell* は D(売り手)が B(品物)に対する動作をプロファイルし、A(買い手)と C(お金)が背景となる¹⁵。

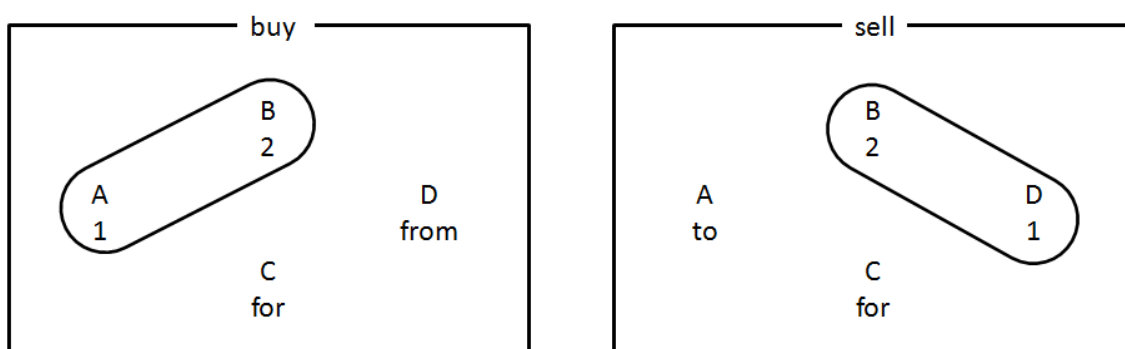


図 3-9 *buy* と *sell* の異なるプロファイル(Fillmore 1977: 106)

図 3-9 の数字は文法的な関係(主語と目的語)を表し、4 つのフレーム要素の内、囲まれているのがプロファイルされている中心的フレーム要素である。プロファイルされていない周辺のフレーム要素は前置詞を伴って動詞と共起することができる。

〈商取引〉フレームはいくつかの段階に分けることができ、このような「スクリプト」的な知識を図式したのが図 3-10 である。

¹⁵ 〈商取引〉フレームに基づく日本語動詞の項実現については Croft et al. (2001) を参照。

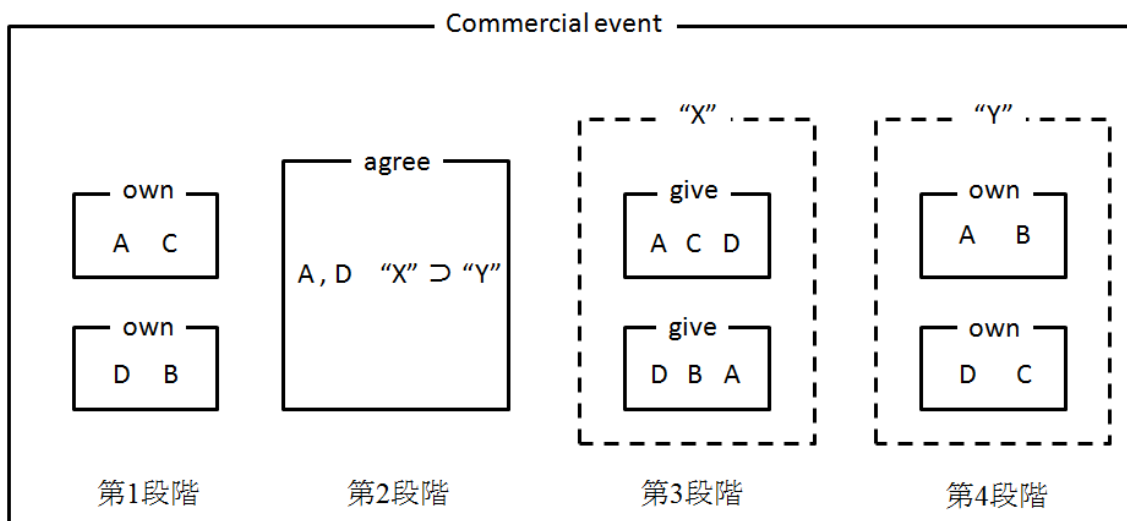


図 3-10 〈商取引〉フレームにおける 4 つの段階

まず、第 1 段階では買い手(A)がお金(C)を所持しており、売り手(D)は商品(B)を保有している。第 2 段階において、買い手と売り手は X が実現したら Y が行われるということに合意する。第 3 段階は X であり、買い手がお金を売り手に渡して、売り手が商品を買手に渡すということを表す。最後に、第 4 段階 Y は買い手が商品を保有し、売り手がお金を所有することを表している。buy, sell, pay, cost, charge などの語を理解するためには、このような複雑な商取引に関する背景知識が必要となる。

フレームの分析をさらに発展させた実証的な研究の一例として、Fillmore & Atkins (1992) はコーパスを用いて英語の risk という語の意味を詳細に分析し、risk を理解するにはその背景にある〈リスク〉フレームに含まれている豊富な知識が必要であることを示した。ここでは Hasegawa et.al (2006) で用いられている〈リスク〉フレームを例に、フレームベースの意味分析の利点を示したい。

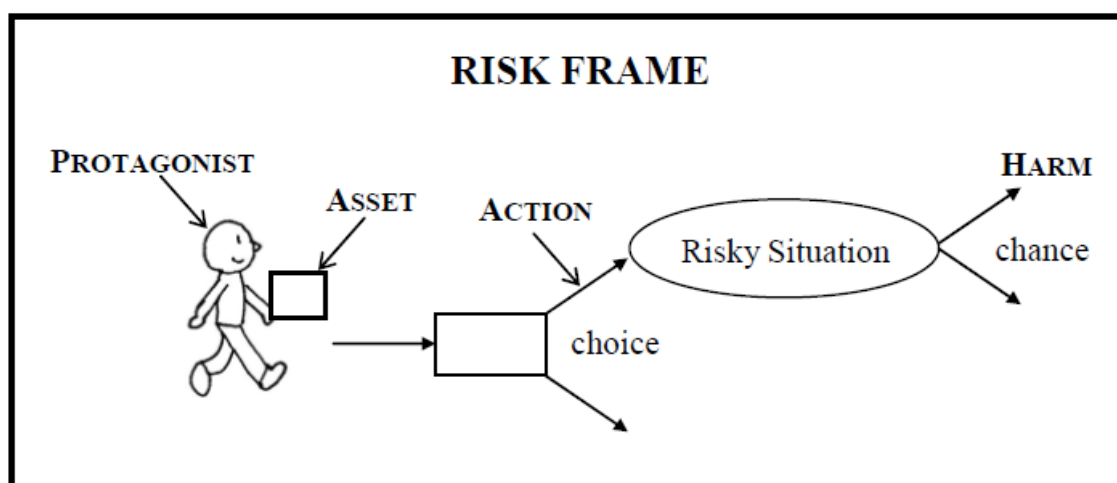


図 3-11 〈リスク〉フレーム(Hasegawa et. al 2006: 2)

Hasegawa et.al (2006)によると、〈リスク〉フレームは図 3-11 のように示すことができ、〈リスク〉フレームを構成する意味要素である「フレーム要素(frame elements, FEs)」, 及び「背景知識(background knowledge)」は次のようなものがあるという。

(15) 〈リスク〉フレームのフレーム要素

Action: Protagonist の行為で、Harm を招く可能性を潜在的に持つもの(例：ジャングルへと旅する、暗闇の中で泳ぐ、など)

Asset:Protagonist が所持する価値のあるもので、ある場面で危険にさらされる可能性があるもの(例：健康、収入、など)

Harm: Protagonist に起こりうる、望ましくない出来事(例：感染、失業、など)

Protagonist:ある Harm を招く可能性のある動作を行う人

(16) 〈リスク〉フレームの背景知識

Chance: 未来に関する不確定性

Choice:Protagonist がある Action を行うかどうかの決定

Risky Situation: Asset がリスクにさらされる状態

これを踏まえて、図 3-11 を説明すると、〈リスク〉フレームとはある【Protagonist】が自身の所有する【Asset】をかけて、ある【Harm】をもたらす危険性を孕んだ【Action】を行うかどうか選択し、そ

の結果, 【Harm】が【Protagonist】に起こるかもしれない, という状況を表すものである。

意味分析にフレームという概念を取り入れることで, 従来明らかにされていない *risk* という語に関するいくつもの新事実が見えてくる。その中から一部紹介すると, まず, (17)のように *risk* が取る目的語には意味的な性質が異なる複数のものに分けられることが分かった。

- (17) a. He risked death. (目的語:【Harm】)
 b. He risked a trip into the jungle. (目的語:【Action】)
 c. He risked his inheritance. (目的語:【Asset】)

加えて, フレームを用いることで, 従来の項構造では捉えることができなかった, *risk* と文中で共起する要素の意味を分析できるようになる。(18)のような文は図3-12のように, 〈リスク〉フレームのフレーム要素が具現化したものと捉えられる。

(18) She *risked* her life by telling FBI the story.

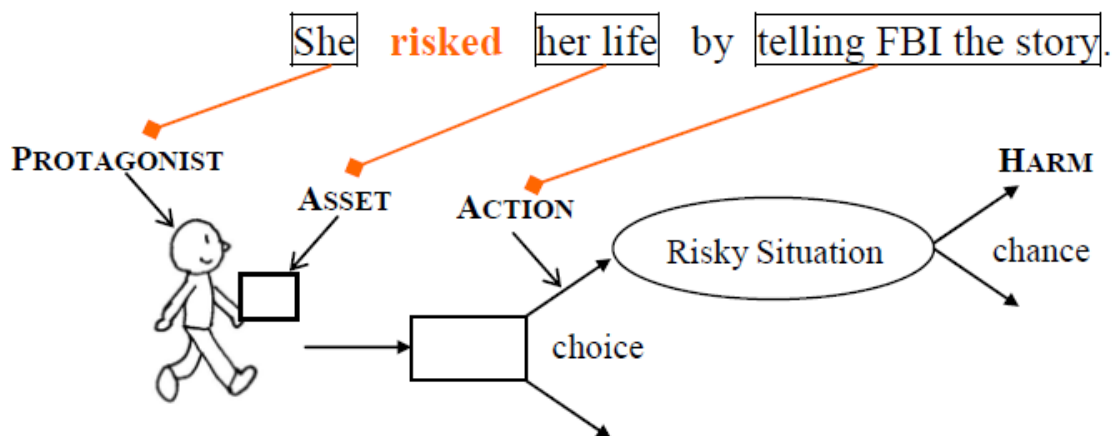


図3-12 〈リスク〉フレームのフレーム要素の具現化 (Hasegawa et. al 2006: 3)

(18)の文において, *by-phrase* で表しているものは, *risk* の項ではなく, 付加詞に当たるものである。そのため, *risk* の項構造からでは *tell FBI the story* がどういう意味的な役割を担っているのかを説明できない。

同様に, (19)のような[RISKNP_{Asset} Prep-NP_{Action}]という構文において, *in* や *on* を伴って前置

詞句で表されるものは、フレーム要素の【Action】を表しているが、これも項では捉えられないものである(Fillmore & Atkins 1992: 87 を参照)。

- (19) a. [He]_{Actor} was being asked to risk [his good name]_{Asset} on [the battlefield of politics]_{Action}.
 b. [Others]_{Actor} had risked [all]_{Asset} in [the war]_{Action}.
 c. It would be foolhardy to risk [human lives]_{Asset} in [the initial space flights]_{Action}.

このように、意味分析にフレームという背景的な知識を含む意味構造を用いることで、従来の意味論では捉えることのできなかつた語の意味性質、そして、語とその共起要素との関わりが見えてくるようになることがわかる。本研究では、フレーム意味論及びフレームという概念を取り入れることで複合動詞の意味の面における様々な問題を説明することができるようになると思える。

以上の *risk* のような分析を、より体系的・実証的な大規模プロジェクトとして実践したのが、Fillmore を代表としてバークレーの ICSI(International Computer Science Institute)において行われている FrameNet プロジェクト(<https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/>)である。FrameNet はコンピュータを用いた電子辞書編集プロジェクトで、英語語彙における関連した意味的・文法的な性質に関する情報を大規模な電子コーパス(主として British National Corpus)から抽出し、ウェブ上で公開しているものである(Fillmore, Johnson & Petruck 2003)。

藤井・小原 (2003) ではこのような FrameNet の言語学的意義について述べられており、その中で特に重要なものに、以下の二つがある。

第一に、語彙項目が想起する背景的知識の構造を、語彙の意味分析の中でどう扱いどう記述していくかに関する具体的な方法が提案されたこと。そして、具体的なフレーム及びフレーム要素の認定・それらの言語形式による具現のされ方・それら相互の関連付けなどを、具体的に表示し吟味していくことができるようになったことである。

第二に、「フレーム」というレベルで「フレーム要素」を浮き彫りにすることの意義である。フレーム意味論は、Fillmore 自身の先行理論である格文法(Case Grammar)を背景に生み出された。格文法における「格(case)」や一般的な統語

理論におけるいわゆる「意味役割」がより抽象的なレベルでの項要素であるのに比べ、フレーム意味論・フレームネットにおけるフレーム要素は、個々のフレームによって定義付けられる要素である。しかし、個々の語彙項目によって個別に設定される要素ではない。両者の中間に位置付けられるレベルでの要素、すなわち、概念的繋がりをもつある一連の語彙群が活性化する同一の背景的スキーマとしてのフレームの要素である。
(藤井・小原 2003: 376)

本研究では次節で述べるように、FrameNet という、フレームのデータベースに基づいて、「意味フレーム」という語の意味構造を定義する。

3.2.3 本論文におけるフレーム

本研究では、フレームに、意味フレームと背景フレームの二つを設定する¹⁶。まず、Goldberg(2010: 40)に従って意味フレームを以下のように定義する。

(20) ある語の意味フレーム: 語の意味あるいは語が喚起するものであり、一つの文化的表象¹⁷を構成する。プロファイル(前景化されている部分)とベースに分けることができる。

- 1) プロファイル: 語が指し示すもの
- 2) ベース: 語を理解するための前提知識

このような意味フレームは、「背景フレーム(背景状況)」に基づいて設定される。本研究における背景フレームは Petrucci (1996) が述べているような、話者の経験に基づいて、現実世界の

¹⁶ Fillmore& Baker (2010), Fillmore (2010) において “cognitive frame” と “linguistic frame” という二つのフレームを区別している。この二つは共に背景的な知識のフレームだが、linguistic frame はある言語形式(レキシコンにリストされているもの)と結びついているものであるのに対し、cognitive frame は言語形式とは直接結びついていないものを指す。本研究における背景フレームは全て言語形式と結びついているため、linguistic frame である。一方、本研究における意味フレームは、語の意味であり、Fillmore& Baker (2010)では語の意味をそれが喚起するフレームのプロファイルとして捉えている。本研究の意味フレームはそのようなプロファイルの関係を一つのフレーム的な構造として明示したものであり、FrameNet で用いられている語の意味構造 lexical entry に相当するものである。

¹⁷ Goldberg (2010) における cultural unit とは Enfield (2002) における cultural representation(文化的表象)のことを指す。詳細は 3.3 を参照。

事象をスキーマ化したものである。

[W]ord meaning is characterized in terms of experience-based schematizations of the speaker's world. (Petrucci 1996: 3)

つまり、一つの語は異なる背景フレーム(背景状況)において、異なる意味で使われる。例えば、「打つ」という動詞は「囚人を鞭で打つ」という場合においては、〈危害〉という背景フレームを喚起し、〈【加害者】が【被害者】に【手あるいは手に持った道具】で衝撃を与えることでダメージを加える〉という意味を表すが、「太鼓を打つ」においては〈演奏〉フレームを喚起し、〈【演奏者】が【楽器】に【手あるいは手に持った道具】で衝撃を与えることで音を出す〉という意味を表すようになる。意味フレームと背景フレームの二つの概念は混同しやすいが、意味フレームがある語の意味を表すのに対し、背景フレームは〈商取引〉フレームのような、ある背景状況を表すものであり、二つは異なる概念である¹⁸。

例えば、FrameNetでは、*hit*という語が〈衝撃(Impact)〉というフレーム(本稿における背景フレーム)を喚起する場合に、以下のような lexical entry(本稿における意味フレーム)を持つとしている¹⁹。

(21) 〈衝撃〉フレームに対応する *hit* の lexical entry

Lexical Entry *hit.v*

Frame: Impact

Definition: (of a moving object or body) come into contact with (someone or something stationary) quickly and forcefully.

The Frame Elements for this word sense are: Depictive, Force, Impactee, Impactor, Manner, Place, Result, Subregion, Time

しかし、異なる〈攻撃(Attack)〉フレームを喚起する場合に、以下のような異なる lexical entry を

¹⁸ 背景状況(background situation)の心理的実在性と重要性については Yeh & Barsalou (2006) を参照。

¹⁹ FrameNet の lexical entry はほかにもフレーム要素の文法的な具現化パターンや結合価パターンが含まれているが、ここでは省略して表示している。

持つ。

(22) 〈攻撃〉フレームに対応する *hit* の lexical entry

Lexical Entry *hit.v*

Frame: Attack

Definition: to strike.

The Frame Elements for this word sense are: Assailant, Containing_event, Manner, Time, Victim, Weapon

〈攻撃〉フレームのような背景フレームは、*hit* 以外にも *strike* や *attack*, *assault* など、複数の語と対応しているが、意味フレームは語の意味構造であるため、一つの意味フレームは一つの語としか対応していない。

加えて、意味フレームの場合は導入された背景フレームによって内容を変えることができるため、ある語はそれが直接喚起するフレームでなくても、他の語によって喚起されたフレームに基づいて通常とは異なる意味として理解される場合がある。例として、Kay (1996: 112) は次のような例文を挙げている。

(23) *Sybil had Sidney fall off the couch.

この文において、*have* は補語となる動詞に動作主的な主語を取ることを要求するが、*fall* の主語は動作主を表すことができないため通常は容認出来ない文になる。しかし、〈演技指導〉という背景フレームを導入することで(23)は Sybil が舞台監督で、Sidney に自然にソファーから落ちたように演技させた、というように、解釈可能な文となる。このように、語の意味は背景フレームによって決定される、または書き換えられるものである²⁰。

背景フレームと意味フレームの関係を先行研究で取り上げたクオリア構造に置き換えて考えると、クオリア構造の「主体役割」を構成する「背景フレーム」の違いによって、他の三つの役

²⁰ 近年の生成語彙意味論は *type introduction* という、新しい情報を意味構造に書き加える操作を加えることで *opened a wine* のような例を説明しようとしている(Pustejovsky & Jezek 2008: 203-204)。しかし、*type introduction* は本来のタイプのオントロジーと矛盾しない限りにおいて、書き加えるというものであり、背景フレームのように語の意味構造を決定する(書き換える)ものではない。

割,さらには項構造までも異なってくるということである。すなわち,「背景フレーム」は意味構造の一部(主体役割)であるというよりは,ある語がどういう意味構造を持つのかは,「背景フレーム」によって決まると考えるべきである。

ここまで述べてきたように,ある語の意味を表すのが意味フレームであるが,それを構成する意味要素をフレーム要素(frame elements, FEs)という。そして,本研究は動詞の場合には以下のものがフレーム要素として含まれると考える。

(24) 動詞のフレーム要素²¹:

- 1) 動詞の表すイベントへの参与者(項として現れないものも含む。後述するように「泣く」は【経験主体】以外に【目】や【涙】も事象参与者に含まれる)
- 2) 動作と関連する事象:状態変化を表す動作を引き起こす【原因】;動作がもたらす【結果】;状態・位置変化の使役を表す動作を達成する【手段】;意図的な動作を行う【目的】と【理由】,及びその際の【感情】と【感覚】;動作が行われる際の【様態】;動作が行われる【前提的背景】;動作と共に起こる【共起事象】;動作に伴う【付随音】

動詞の意味フレームはこのようなフレーム要素と,その動詞が表す中心事象²²(例えば,「割る」という動詞が表す中心事象は【行為者】が【全体的な対象】に衝撃を加えて分解する)が含まれる。

フレーム要素はプロファイルされている中心的フレーム要素(core FEs)とベースとなる周辺のフレーム要素(peripheral FEs)に分けることができ,動詞の関連事象は周辺のフレーム要素で背景であると考え。事象参与者にも中心的・周辺のという区別があり,中心的な事象参与者は動詞が指し示すイベントを表すために必要な要素を指し,周辺の事象参与者はそのベースとなる要素を指す。

例として「泣く」を考えてみよう。「泣く」はある人が目から涙を出すことを表す,その背景には様々な関連する事項がある。なぜ泣くのか,どうやって泣くのか,泣くとどういふ結果が起こるの

²¹ ここでの動作や事象参与者,関連事象は全て典型的なものを指している。例えば,「泣く」ことでしゃっくりを引き起こすことがあるとしても,典型的な結果ではないため,「泣く」の関連事象には含まれないと考える。

²² 松本(2011)が提案しているように,動作をイメージスキーマ(Langacker 1987, 1991)で表すことで,参与者の間のエネルギーの流れなどを明示することができるが,本稿は文章によって動作を記述し,参与者を action chain(Langacker 1991)に従って並べる。

か、などである。これは多種多様であるが、決して何でもありというわけではなく、限定的なものである。たとえば、悲しんだり喜んだりして泣くことはあっても、驚いて泣くことは通常考えられない。泣いたために涙で頬が濡れたり、鼻水が出たり、目が腫れたりするが、髪の毛が縮れたり、汗をかいたり、吐いたりすることはない。このように判断できるのは、泣くという行為の周辺的事象に関する知識を私たちが持っていることを示す。

このような考察から、デフォルトとして喚起される〈感情刺激〉という背景フレームの場合の「泣く」の意味フレームは表 3-5 のように示すことができる²³。

表 3-5 「泣く」の意味フレーム

[naku] _v 背景フレーム: 〈感情刺激〉フレーム	
中心 事象	ある【刺激】によって【経験主体】が【涙】を出す
事象 参与者	<p>【経験主体】: ある【刺激】によって涙を出す人。</p> <p>【刺激】: 【経験主体】のある感情引き起こすもの。</p> <p>【涙】: ある【刺激】によって【経験主体】の【目】から出る液体。</p> <p>【目】: 【涙】を出す【経験主体】の身体部位。</p> <p>【周りの人】: 【経験主体】が【涙】を出すのを見ている周囲の人。</p> <p>(【頬】)</p> <p>(【鼻】)</p>
関連 事象	<p>原因 (ある【刺激】によって【経験主体】が強い悲しみを感じる; ある【刺激】によって【経験主体】が強い喜びを感じる;…)</p> <p>様態 (静かに; 激しく; 体を震わせて; 狂ったように;…)</p> <p>目的 (つらいことを忘れるため; 演技のため;…)</p> <p>結果 (【周りの人】に影響を与える; 【経験主体】が疲れる; 【経験主体】の【目】が腫れる; 【涙】で【頬】などが濡れる; すっきりする;…)</p>

²³ 【】は事象参与者を表す。事象参与者の中で項として実現するものは太字で表す。背景フレームの設定は基本的に FrameNet を参考に設定するが、対応できるフレームがない場合は筆者の設定に基づく。なお、紙幅のため下位事象は一部省略して表示する。

	共起事象 (叫びながら;喘ぎながら;【鼻】をすすりながら;…)
	⋮

ここでいう、関連事象は、原因や様態として、一般的に想定しうるすべてのケースを含んでいる。そこには、典型的なものから周辺のなものまで様々である。事象参与者として含まれる【目】は〈顔〉のフレームを喚起するので、「泣く」の事象参与者には【頬】や【鼻】なども間接的に含まれる。また、泣くことは、見ている人に大きな影響を与えるため、【周りの人】という周辺の事象参与者が含まれる。注意したいのは、関連事象に何が含まれるかについては個人差がありうる、ということである。例えば、演劇など、芝居をする人においては、「泣く」の関連事象の【目的】に、(演技のため)という、一般の人の知識にはないものが含まれるであろう。

3.3 文化と言語

3.2 節で述べたように、我々の思考はフレームという認知的なスキーマに基づいている。このような認知的なスキーマは私的なものである場合がある。例えば、パンというものについて、一般的な人が持っている認知的なスキーマには、それが食べ物であることや、どういう種類があるのか、そして、トーストして食べたり、ジャムを塗って食べたり、という食べ方についての知識が含まれると思われる。しかし、小麦アレルギーがある人にとって、パンというものは、食べたら生命に危険を及ぼすものという知識がパンという概念に強く結びついている。場合によっては、その人達にとって、パンは毒キノコやふぐなどと同じ「危険な食べ物」というカテゴリーに分類されるかもしれない。このような私的な認知的スキーマを「私的表象(private representation, Enfield 2000)」という。

I assume that people carry private representations; thoughts, concepts, and sense/sensorimotor images (in many possible forms) that are structured, and can be recalled and privately manipulated. (Enfield 2000: 37)

そして、ある言語社会のメンバーに共有されている私的表象を「文化的表象(cultural representation, Enfield 2000)」という。文化的表象とは相互に共有され、また互いに共有されて

いることを前提とし、さらに、互いに共有されていることを前提としていることを前提とするものである。

p is a cultural representation *if and only if* p is a private representation, *and* p is carried by both x and y, *and* both x and y assume the other carries the private representation p, *and* both x and y both assume they themselves are assumed by the other to carry the private representation. (Enfield 2000: 45)

同様に、言語もコンストラクションという言語的なスキーマに基づいているが、コンストラクションも私的なものの場合がある。家族の間だけで使っている特別な言い方などがそうで、例えば、絆創膏を「ペタン」といったり、スクランブルエッグを「ごちゃごちゃ卵」といったりする家族があれば、その「ペタン」や「ごちゃごちゃ卵」は私的なコンストラクションである。

このように、文化とはある言語社会的なメンバーの間で相互に共有されている認知的なスキーマの集合であり、言語はある言語社会的なメンバーの間で相互に共有されている言語的なスキーマの集合である、と言えるだろう。Enfield (2002) が述べているように、言語と文化とは共により広い概念スキーマの中の一部のものであると考えられる。文化も言語も同様に、相互に共有され、また互いに共有されていることを前提とし、さらに、互いに共有されていることを前提としていることを前提とするものである(D'Andrade 1987 を参照)。

3.3.1 文化の違いに起因する言語の違い

前節で述べたように、言語と文化は密接な関係にある。そのため、文化の違いによって言語表現に違いが生まれる。

Enfield (2002) は社会における文化の違いについて、図 3-13 を用いてラオ(Lao)族とオーストラリアの人々の言語形式を比較した。その方法としては被験者に図を見せてそれを言語で表現してもらおうというものである。

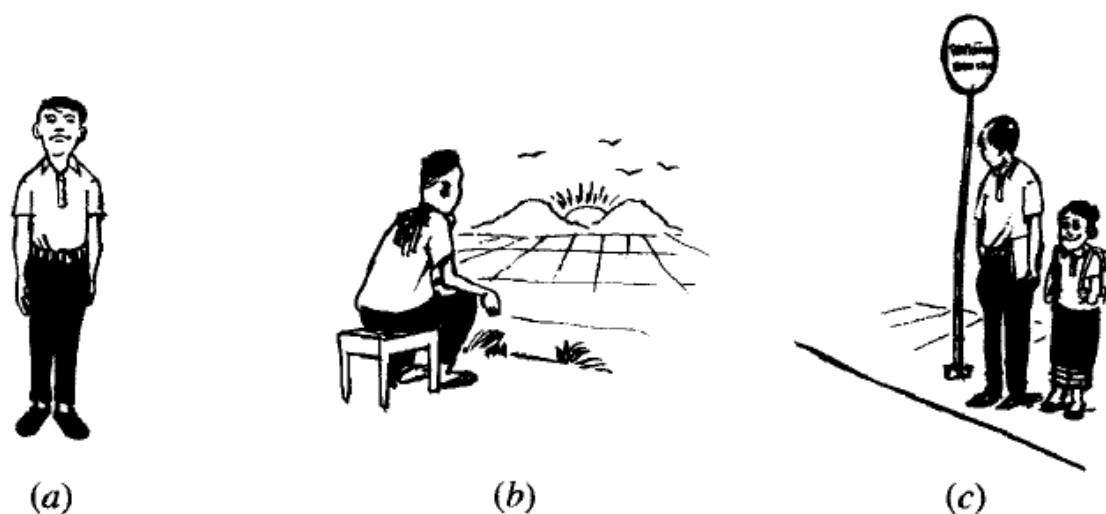


図 3-13 文化に影響される事象の言語化 (Enfield 2002: 234)

図 3-13a について、ラオ族の人々はそれを *jùn³ kong³* ‘stand straight’ と表現する。ラオ族にとって、このような直立不動の姿勢の絵が表す概念は、彼らが学校などで体験したことがある、よく知られているものである。一方、オーストラリア人はというと、図 3-13a について *standing to attention* というような表現を用いることはない。これはオーストラリアの文化では *standing to attention* という場合は、ユニフォームを着たり、足をもっとピシッと揃えたりする必要があるからだ。一方、図 3-13b と 3-13c の場合は逆に、オーストラリア人にとってはかなり確立された ‘watching the sunset/sunrise’ と ‘waiting for a bus’ という概念を表しているが、ラオ族にとってこのような場面は馴染みがないものである。そのため、ラオ族の答えはバラバラで、図 3-13b に対して、火を起こしている場面であるとか、自分の土地を眺めているところとか、自然を楽しんでいるところとかと表現した。図 3-13c については道を横切ろうとしていると表現した人や、身長を測っていると表現した人もいたという。

このような文化に基づく言語表現の選択についてより深く知るため、Enfield (2002) はラオ語の付随姿勢構文 (associated posture constructions) について、ある文を被験者に見せて、その容認度を判断してもらうという方法と、前述のような絵を提示して言語化してもらうという二つの方法で調査を行った。この調査はいくつかの場面を対象に、座っている、立っている、横たわっている、という三つの姿勢を組み合わせたものである。例えば、ラオ族の社会において、*lanaat*⁴ という楽器を演奏するというのは、確立された

文化的表象である。この *lanaat*⁴ の演奏という場面を三つの姿勢と組み合わせることで、座って *lanaat*⁴ を演奏する、立って *lanaat*⁴ を演奏する、横たわって *lanaat*⁴ を演奏する、という三つの絵ができる。まず、基本的な前提知識として、*lanaat*⁴ は図 3-14 のように通常座って演奏するものである。よって、ラオ族の人々は *lanaat*⁴ を演奏することを思い浮かべるときは、通常座って演奏するというのがデフォルトとして想起される。



図 3-14 *lanaat*⁴ の演奏 (Enfield 2002: 247)

それに対し、図 3-15 の a と b はそれぞれ立って *lanaat*⁴ を演奏しているところと、横たわって *lanaat*⁴ を演奏しているところを表している。



(a)



(b)

図 3-15 (立って／横たわって) *lanaat*⁴ を演奏する (Enfield 2002: 248)

Enfield (2002) では最初に図を提示せずに、ラオ族の被験者に次のような例文の容認

度を判断してもらった。

- (25) a. *tii*³ *lanaat*⁴
 hit *lanaat*
 ‘play the *lanaat*⁴’
- b. *nang*¹ *tii*³ *lanaat*⁴
 sit hit *lanaat*
 ‘play the *lanaat*⁴ sitting’
- c. *?jùùn*³ *tii*³ *lanaat*⁴
 stand hit *lanaat*
 ‘play the *lanaat*⁴ standing’
- d. *?nòòn*² *tii*³ *lanaat*⁴
 lie hit *lanaat*
 ‘play the *lanaat*⁴ lying down’

すると、(25)の a と b は問題なく容認されるのに対し、c は容認度が少し落ち、d になると容認されなくなる。これはラオ族の文化の中に、*lanaat*⁴ という楽器は座って演奏するものであり、通常立って、または横たわって演奏することはないからである。

次に、被験者に図 3-14 と 3-15 を見せて、それを言葉で描写させると、先ほどのテストと大きく異なる結果が得られた。イラストが提供する情報によって、*lanaat*⁴ を立って／横たわって演奏するということがどういう場面であるのかがはっきりと思い浮かべることができるようになる。それによって、図 3-14 を自然に(25)の c と d のように表現するのである。

以上見てきたように、ある言語形式がその言語社会において成立するには、言語形式が指し示す概念が言語社会において、確立された文化的表象である必要がある。「?嗅ぎ逃す」が表す「楽しみにしていた香水の発表会に参加し損ねて、嗅ぐことができなかつた」のような概念は私的表象としては存在しうるが、日本において確立された文化的表象ではないため、「?嗅ぎ逃す」の容認度が低いのである。他にも文化や社会によって複合動詞が異なってくる場合があり、そのような現象は第五章でまとめて検討する。

3.4 まとめ

本章において、本研究が主張する複合動詞の形成メカニズムを説明するのに必要なコンストラクションのレベル、意味フレームのレベル、そして慣習化のレベルに対して用いられる理論的枠組について説明した。3.1 ではコンストラクションレベルの分析に必要なコンストラクションという概念、及びコンストラクション形態論を紹介した。3.2 では意味フレームのレベルで用いられるフレーム意味論について検討した。そして、3.3 で言語社会における慣習化のレベルの制限を考える上で必要となる文化的表象という概念を取り上げた。

次章より、上述のような理論的枠組に基づいて、日本語と中国語の複合動詞を具体的に分析していく。

第4章 コンストラクションに基づく複合動詞 の考察

本研究は複合動詞を形式と意味を併せ持ち、かつ構成要素 V1 と V2 の総和からは予測できない意味(例:「手段—目的」型における BY の意味など)を持つため、一つのコンストラクションとしてみなす(野田 2009, 松本 2011, Matsumoto 2012 を参照)。そこで、本章では語をコンストラクションの一種として考えるコンストラクション形態論に基づいて、複合動詞のコンストラクション的な性質を考察する。

「切り倒す」を例に、コンストラクション形態論の考え方を説明すると、複合動詞は(1)のように、構成要素から合成的に作られるのではなく、(2)のように、ある形式と意味のペアリングとして、既に存在しているものだと考える。

(1) 切る+倒す → [切り倒す]_V

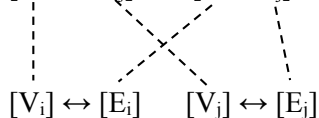
$$V_i+V_j \rightarrow [V_{i-REN-V_j}]_V \quad (\text{REN: 連用形})$$

(2) [切り倒す]_V ↔ [切ることによって倒す]

$$[V_{i-REN-V_j}]_V \leftrightarrow [E_i \text{ BY } E_j]$$

複合動詞というゲシュタルト的な複合体において、部分はその全体によって規定されていると考える。例えば、「落ち着く」という語は、構成要素から合成的に<精神状態が安定する>という全体の意味を作り出すことはできないが、(3)における点線が表すような形式的・意味的な一致性に基づいて、全体の意味から構成要素がどのような意味を担っているのかを理解することは可能である。

(3) $[V_{i-REN-V_j}]_V \leftrightarrow [E_i R E_j]$ (R: 意味関係)



そして、(4)のように、既存の複数の語の意味と形式の対応関係は、 $[V_{i-TR-V_j-TR}]_V \leftrightarrow [E_j-CAUS.CHG BY E_i-AGT]$ のような抽象的なスキーマによって捉えられる。そうすることによって、構成要素の意味関係(「手段—目的」型におけるBYの意味など)を表すRのような、構成要素に存在していない意味を、コンストラクションの形式(手段型の場合は $[V_{i-TR-V_j-TR}]_V$)が持っている意味だと考えることができる。

(4) [切り倒す] ↔ [切ることによって倒す]
 [押し潰す] ↔ [押すことによって潰す]
 [叩き壊す] ↔ [叩くことによって壊す]
 [盗み取る] ↔ [盗むことによって取る]
 [刺し殺す] ↔ [刺すことによって殺す]
 ⋮ ⋮
 $[V_{i-TR-V_j-TR}]_V \leftrightarrow [E_j-CAUS.CHG BY E_i-AGT]$

由本 (1996, 2005, 2011), 影山・由本 (1997) において、複合動詞のテンプレートとして、「切り倒す」のような手段型を[[LCS2] BY [LCS1]], 「すすり泣く」のような付帯状況型を[[LCS2] WHILE [LCS1]]として表示しているが、このようなテンプレートは特定の形態素と結びついているというよりは、 $[V-V]_V$ という形式と結びついている。そのため、このようなテンプレートは事実上コンストラクションを認めているものである。

本章では前半において、日本語の語彙的複合動詞における様々な非合成的・非分析的な性質を取り上げて考察し、これらの性質は従来の合成的なアプローチでは上手く説明できないことを示す。そして、コンストラクション形態論という理論モデルを取り入れることで、語彙的複合動詞における「合成的(compositional)」と「全体的(holistic)」という二つの側面を同時に捉えることができると主張する。加えて、「用法基盤モデル」の観点から日本語の複合動詞における非合成な性質について、使用頻度との相関から検討

する。それに基づいて、レキシコンはルールベースのトップダウン型ではなく、実際の用例を一般化することで抽象的なスキーマを作り上げていく用例ベースのボトムアップ型が妥当であると論じる。

従来の還元主義的な考えでは、構成体の全体の意味はその構成要素の意味の総合に還元でき、構成要素から全体の意味が予測できると主張されていた。影山 (1996), 由本 (2005, 2008) などの先行研究では複合動詞を語彙概念構造(LCS)の合成として分析されてきた。例えば、前述のように、「切り倒す」のような、V1がV2の使役事象を達成する手段を表すタイプは[[LCS2] BY [LCS1]]という意味構造を持つと分析されている。

複合動詞に合成的な一面があることは確かである。なぜなら、我々は初めて聞く複合動詞でも、「いじめ殺す」のように、その意味の透明性が高ければ合成的にその意味を問題なく導き出すことができる。本研究はこのような複合動詞の合成性や生産性について、トップダウン的に説明するのではなく、実際の用例からボトムアップ的に形成されたコンストラクション的イディオムに基づいて新しい複合動詞を産出すると考える。加えて、複合動詞には前項動詞 V1 と後項動詞 V2 の意味の組み合わせからでは説明できない全体的な意味が存在する。そのため、コンストラクションという概念が必要となる。

日本語複合動詞の先行研究において、その全体的な性質を指摘したものに石井 (2007) や野田 (2009), 松本 (2011), Matsumoto (2012) などがある。石井 (2007) は要素のくみあわせからは導くことのできない「ひとまとまり性(特殊化された慣習的な、ひとまとまり的な意味)」を認めることができると指摘した。野田 (2009) と松本 (2011), Matsumoto (2012) はコンストラクションの観点から複合動詞の全体的な性質について指摘しているが、これらの先行研究については 4.1 で詳しく述べることにする。4.2 では、日本語の語彙的複合動詞の全体像を階層的なスキーマネットワークとして示す。4.3 にて、日本語語彙的複合動詞の意味関係のタイプの認知的な動機付けについて考察する。4.4 において、コンストラクション形態論におけるコンストラクション的イディオム (Constructional Idiom) という概念に基づいて、複合動詞の合成的と非合成的な性質を説明できることを示す。加えて、複合動詞に見られる「拘束意味」についても説明する。4.5 では「コンストラクション」複合動詞における全体的な性質について、形式の面と意味の面の両方から論じる。形式の面については「拘束形態素」を含む複合動詞を例に論じ、意味の面については「用法基盤モデル」の観点から、複合動詞の全体的な意味性質を検

討する。4.6 ではレキシコンにおける語彙の競合現象を指摘し、合成的な複合動詞であっても、ひとまとまりとしてレキシコンに登録されている必要があると主張する。最後に4.7にてまとめを行う。

4.1 コンストラクションを用いた日本語複合動詞の先行研究

コンストラクションを用いて日本語複合動詞を分析した先行研究に野田 (2009) と松本 (2011), Matsumoto (2012) がある。これらの先行研究においては、複合動詞を構成要素の単純な総和ではなく、構成要素に還元できない意味を有する独立したゲシュタルト的な複合体として捉えている。本研究もこの考え方に従う。

4.1.1 野田 (2009)

野田 (2009) は分析可能性の高い複合動詞を対象として、個々の複合動詞の意味を分析し、そこからボトムアップ的に抽出した(現代日本語において確立していると考えられる)13の構文的意味を提示している。

(5) 野田 (2009) における複合動詞の構文的意味

構文的意味①：＜移動主体が、ある動き V1 を伴い、ある移動 V2 を実現する＞

(例：「駆け上がる」)

構文的意味②：＜移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為

V1 を、反復的もしくは(長期)継続的に伴い、ある移動 V2 を実現する＞ (例：「売り歩く」)

構文的意味③：＜移動主体が、ある行為もしくは状態変化 V1 を伴い、かつその行為もしくは状態変化 V1 の結果として、ある移動 V2 を実現する＞

(例：「焼け落ちる」)

構文的意味④：＜変化主体が、ある行為もしくは状態変化 V1 の結果として、ある状態変化 V2 を実現する＞ (例：「歩き疲れる」)

構文的意味⑤：＜変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じる、

ある動き V1 の結果として、ある変化 V2 を実現する>

(例：「突き刺さる」)

構文的意味⑥：<使役行為者が、ある行為 V1 により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為 V2 を実現させる> (例：「打ち上げる」)

構文的意味⑦：<主体が、ほぼ同時に、ある事態 V1 及び別の事態 V2 を実現する> (例：「光り輝く」)

構文的意味⑧：<主体が、ある事態 V1 を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態 V2 として実現する> (例：「晴れ渡る」)

構文的意味⑨：<主体が、本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべきある事態 V1 を、未遂・不成立に終える V2> (例：「{食べ}残す」)

構文的意味⑩：<主体が、ある事態 V1 を、ある期間もしくは習慣的に継続する V2> (例：「{走り}続ける」)

構文的意味⑪：<複数の主体が、ある事態 V1 を、同時もしくは交互に（ある期間）継続する V2> (例：「{話し}合う」)

構文的意味⑫：<主体が、ある事態 V1 を始動する V2> (例：「{食べ}始める」)

構文的意味⑬：<主体が、ある事態 V1 を完了・完遂する V2>
(例：「{歌い}終わる」)

例えば、「駆け上がる」「飛び下りる」「走り回る」などには共通した意味特徴が見られ、これらの複合動詞からボトムアップ的に<移動主体が、ある動き V1 を伴い、ある移動 V2 を実現する>という構文的意味①を抽出でき、「打ち上げる」「切り倒す」「叩き壊す」などからは<使役行為者が、ある行為 V1 により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為 V2 を実現させる>という構文的意味⑥を抽出できる、というように分析している。このような構文的意味は、構成要素の合成という観点からでは説明できないものであり、複合動詞をコンストラクションとして認める必要があることを示している。

野田 (2009) はさらに、これらの構文的意味の相互関係をメタファーやメトニミーのような比喩に基づく拡張として捉える。それによって、複合動詞全体を図 4-1 のような複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークとして示している。

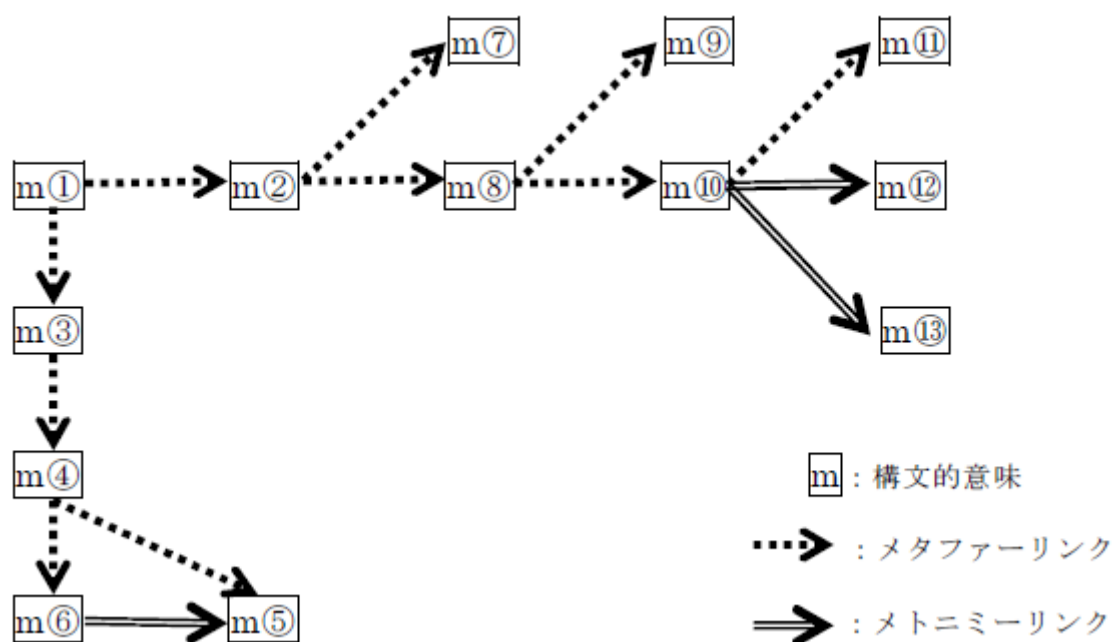


図 4-1 複合動詞における構文的多義ネットワーク

野田 (2009) では、複合動詞の意味的な連続性を捉えるために、「駆け上がる」「打ち上げる」のような語彙的複合動詞と「走り続ける」「食べ始める」のような統語的複合動詞を連続的なものとして、まとめて扱っているが、本研究では両者の形態的・概念的な違いから、両者を区別し、語彙的複合動詞だけを扱う。

4.1.2 松本 (2011), Matsumoto (2012)

松本 (2011) や Matsumoto (2012) は日本語複合動詞をコンストラクション形態論の観点から分析し、複層的な制約が必要だとして、主語一致のスーパー(上位)スキーマと意味関係のスキーマを中心に、日本語の語彙的複合動詞を階層的スキーマネットワークで示している。

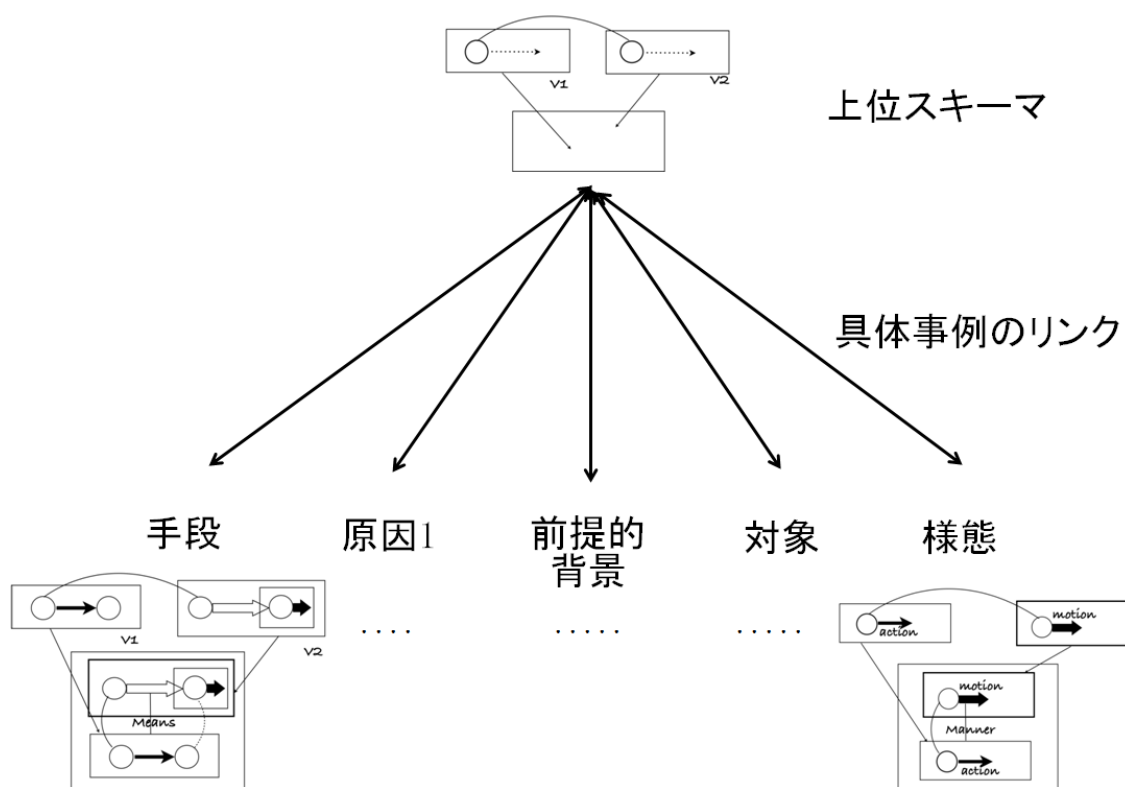


図 4-2 松本 (2011) における日本語語彙的複合動詞の階層的スキーマネットワーク

松本 (2011) によると、複合動詞は、その構成要素のみから予測されない意味を持つ。複合動詞の V1 と V2 は原因—結果、手段—目的などの特定の意味関係にあり、複合動詞の意味にはこのような意味関係を表す意味が含まれている。例えば、手段型の動詞は <V2 BY V1> という意味を表す。ところが、BY のような意味関係は、特定の構成要素と結びついておらず、複合動詞というコンストラクションの意味であると言える。そのため、原因—結果、手段—目的のような V1 と V2 の意味関係を複合動詞のイベントスキーマとして捉えられる。複合動詞の意味に BY のような意味関係を表す意味が含まれているというのは、二つ(またはそれ以上)の意味・概念を組み合わせることで、構成要素にない意味・概念が生じるということである。このことは、前章で見た。

そして、松本 (2011) は日本語の語彙的複合動詞で認可される主要イベントスキーマのスーパースキーマ(一般的な上位スキーマ)として、主語一致のスキーマが存在する、としている。しかし、主語一致のスキーマに適合すれば複合動詞として成立するわけではない。

(6) 主語が一致するが複合動詞として成立しないもの(Matsumoto 2011)

a. V1 が V2 の付帯状況(付随姿勢)

立ち食いする→*立ち食う

立ち読みする→*立ち読む

b. 連続的行為

ひき逃げする→*ひき逃げる

c. 反復的行為

上がり下がりする→*上がり下がる

行き来する→*行き来る

(6)のように、主語が一致しても複合動詞として成立できるわけではないため、図 4-1 のような下位スキーマのリストが必要である。

また、「打ち上がる」や「舞い上げる」のような主語が一致しないものは、主要イベントスキーマの派生スキーマと考えられるが、派生スキーマでないものは主語が一致する必要があるため、日本語語彙的複合動詞の一般化を捉えるため上位スキーマも必要であるという。

4.1.3 個別動詞レベルのコンストラクションの必要性

本節で見てきたように、コンストラクションを用いた先行研究においては、具体例から一般化された抽象的なスキーマを中心に検討している。しかし、本研究では慣習化の影響を考慮し、構成要素から予測できない性質を持つ具体例の一部(「取り締まる」「立ち会う」「引き出す」「言い渡す」など)についても、個別動詞レベルのコンストラクションと見なす必要があると主張する。このような構成要素の合成という観点からでは説明できない複合動詞の全体的な性質については 4.4 節で詳しく検討する。

Chomsky (1970) や Halle (1973) などにおいても、語彙的な語形成過程によって形成された output は、何らかの形で辞書(レキシコン)に登録されると考えられている。影山 (1993: 355) においても、語彙部門における語形成は活発なものから不活発なものまで様々な段階が存在するが、最も活発なものでも、その派生結果は辞書に登録されている

と述べている。この点では、これらの研究も本質的にコンストラクション形態論と共通するものである。

Langacker (1987: 57) などが主張しているように、コンストラクションの考え方では、言語は「慣習的な言語的単位の構造化された目録(a structured inventory of conventional linguistic units)」であるため、個別の動詞も抽象的なスキーマも同じコンストラクションと認められる。コンストラクションという共通の概念として見なすことで、個別動詞レベルのコンストラクションとコンストラクション的イディオム、そしてさらに抽象的な意味関係のコンストラクションや主語一致のコンストラクションとの連続性を捉えることができるのである。

4.2 日本語語彙的複合動詞の階層的スキーマネットワーク

本研究は松本 (2011) や Matsumoto (2012) に基づき、日本語の語彙的複合動詞を意味タイプごとの階層的なスキーマネットワークで表す。その上で、特定の意味タイプの組み合わせによって生じる意味関係、そして、その意味関係と対応する特定の(文法的な)形式は何か、という情報をスキーマに加え、さらに、スーパースキーマの性質に合致しないものを下位スキーマとして認めることで、日本語語彙的複合動詞の全体像を図 4-3 のような階層的スキーマネットワークで表す²⁴。

²⁴ 分析的でないものや一語化しているもの、V2 が補助動詞化しているものなどは個別動詞レベルのコンストラクション、またはコンストラクション的イディオムであると考えられ、図 4-3 の意味タイプに基づくスキーマネットワークには含めない。また、松本 (1998) で取り上げられている「咲き狂う」や「書き殴る」のような、V2 が比喩的な様態として V1 を修飾しているものなども、メタファー(Lakoff & Johnson 1980, Lakoff 1987 などを参照)という特殊な認知的なメカニズムによって形成されたものであると思われるため、ここでは扱わない。

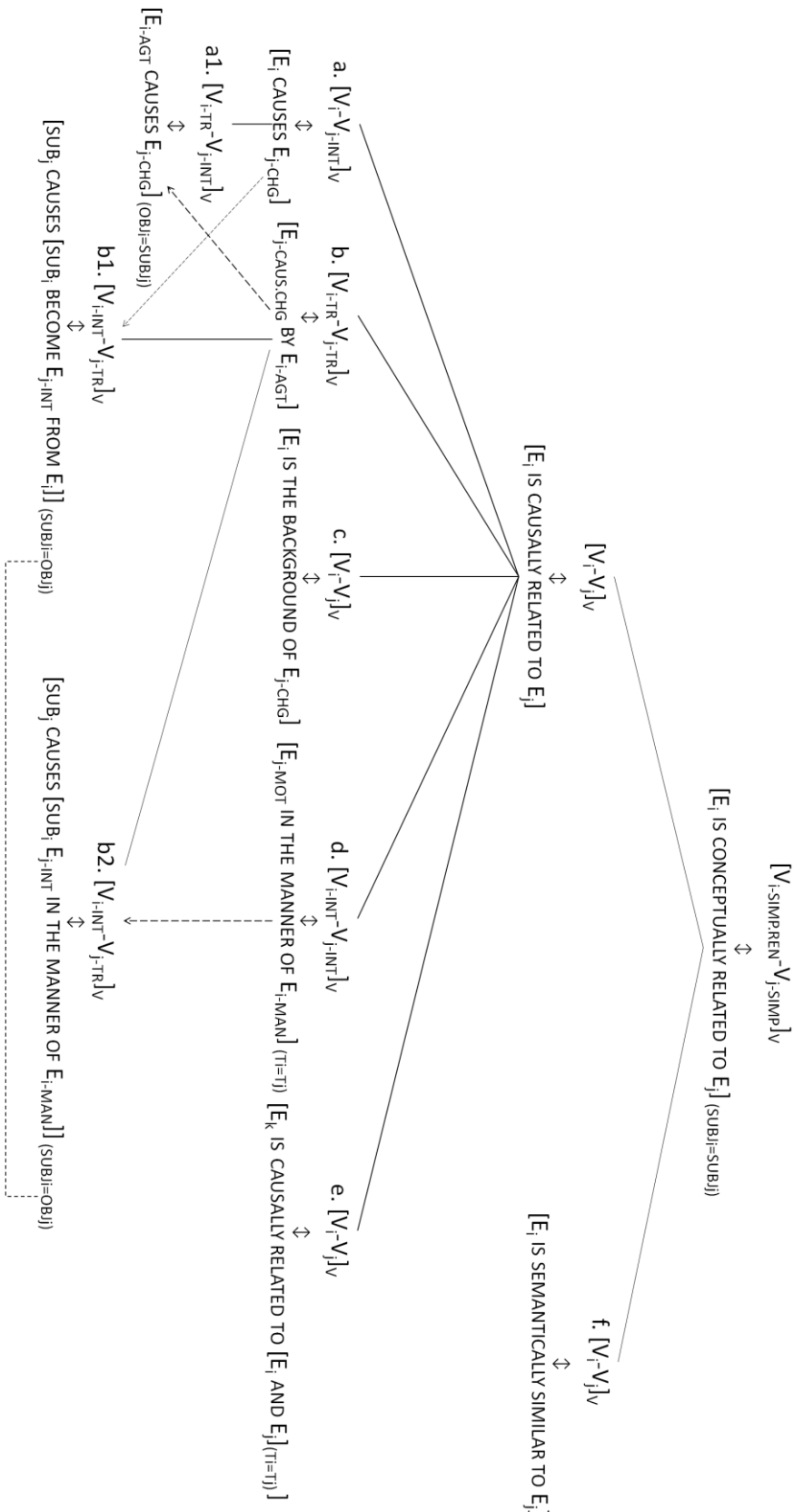


図4-3 日本語語彙的複合動詞の階層的スキーマネットワーク

(SIMP=単純和語動詞, REN=連用形, SUBJ=主語, OBJ=目的語, E=イベント, T=イベントの発生時間, INT=自動詞, TR=他動詞, AGT=意志的な動詞, CHG=変化を表す動詞, CAUS.CHG=使役変化動詞, MAN=様態動詞, MOT=移動動詞, \updownarrow =形式と意味の対応関係, 矢印の点線=派生関係, 点線=下位スキーマ間の意味的な対応関係)

図 4-3 の一番上に位置する $[V_i\text{-SIMP.REN-V}_j\text{-SIMP}]_V \leftrightarrow [E_i \text{ IS CONCEPTUALLY RELATED TO } E_j]$ (SUBJ_i=SUBJ_j) は日本語語彙的複合動詞のスーパースキーマに相当するもので、形式としては、和語単純動詞 V_i の連用形と和語単純動詞 V_j の組み合わせで、中高型の複合動詞アクセントを有する(窪菌・大田 1998 を参照)、というものである²⁵。この形式に対応する意味は、 V_i が表すイベント E_i と V_j の表すイベント E_j に概念的な関連性がある、というもので、 V_i と V_j の主語が一致する必要がある。そして、このスーパースキーマの下には大きく二つの異なるタイプに分けられる。一つは E_i と E_j が因果関係にあるもので、もう一つは E_i と E_j が意味的に類似しているものである。この二つのタイプはその成立の認知的な動機付けが根本的に異なっている。

また、図 4-3 においては、a. 原因—結果型と b. 手段—目的型のように、さらに下位スキーマが存在する場合がある。a. 原因—結果型の下位スキーマには、「打ち上げる」のような手段型の複合動詞に基づいて「自動詞化」というプロセスによって作られたと考えられる V_i と V_j の主語が一致しない「打ち上がる」のようなものがある。デフォルト継承の考えでは、下位スキーマは必ずしも上位スキーマの全ての特性を継承するという必要はなく、特異な性質を持つ場合は、その下位スキーマ固有の性質としてレキシコンに登録すればよい。「打ち上がる」のようなものは a. 原因—結果型の下位スキーマ a1 として捉えられる。同様に、「酔い潰れる」のような原因型複合動詞と「舞い上がる」

²⁵ 語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いについてだが、語彙的複合動詞が図 4-3 のように $[V-V]_V$ という形式を持つのに対し、統語的複合動詞は補文構造を取り、後項動詞は前項動詞を主要部とする節を項として選択する。例えば、語彙的複合動詞である「書き上げる」は、「太郎が小説を書き上げた」という場合において、V2「上げる」は<対象を完成させる>という意味で、その項は主語となる「太郎」と目的語となる「論文」である。一方、統語的複合動詞の「書き終える」は「太郎が論文を書き終えた」という場合に、V2「終える」の主語は「太郎」だが、もう一つの項は「論文」ではなく、「太郎が小説を書く」という節であり、<太郎が[太郎が小説を書くこと]を完了させた>という意味を表す(影山 2012 を参照)。ただし、語彙的複合動詞の中にも一部「死に急ぐ」「売り渋る」などのような V1 が表す事象を項として取るものがある。このようなものは図 4-3 には含めていない。

のような様態型複合動詞に基づいて、「他動詞化」というメカニズムによって形成されたと考えられる「酔い潰す」「舞い上げる」が存在する。この二つの主語不一致型のタイプはそれぞれ b. 手段—目的型の下位スキーマ b1 と b2 に相当する。そして、下位スキーマ b1 と b2 は V1 の主語と V2 の目的語が同一物を指す、という項の同定関係が存在する。このような主語不一致型の複合動詞がどのような条件において、どのようなメカニズムによって形成されるのか、ということについては第七章で詳しく検討する。

図 4-3 は日本語語彙的複合動詞のスーパースキーマと、各意味関係のタイプのスキーマを表したものだが、実際はさらに複雑な階層構造を持つ。図 4-4 を例に説明すると、階層構造の一番上には $[V_i\text{-SIMP REN-}V_j\text{-SIMP}]_{V\leftrightarrow}[E_i \text{ IS CONCEPTUALLY RELATED TO } E_j]_{(\text{SUBJ}_i=\text{SUBJ}_j)}$ というスーパースキーマがあり、その下に意味関係のスキーマ $[V_i\text{-}V_j]_{V\leftrightarrow}[E_i \text{ IS CAUSALLY RELATED TO } E_j]$ 、またその下に、意味関係の下位スキーマである手段型 $[V_i\text{-TR-}V_j\text{-TR}]_{V\leftrightarrow}[E_j\text{-CAUS.CHG BY } E_i\text{-AGT}]$ がある。さらに、手段型の下位スキーマとして、V1 が空きスロットで、V2 が「取る」という動詞に固定されている $[V_i\text{-TR-toru}]_{V\leftrightarrow}[E_{\text{get/remove}} \text{ BY } E_i\text{-AGT}]$ というコンストラクション的イディオムがある。一番下の階層においては、「乗っ取る」のように、合成的に全体の意味を作り出すことができないため、ひとまとまりとしてレキシコンに登録されていると考えなければならないものがある。本研究はこのような非合成的なものを個別動詞レベルのコンストラクション $[not\text{-toru}]_{V\leftrightarrow}[\text{take over}]$ で捉える。

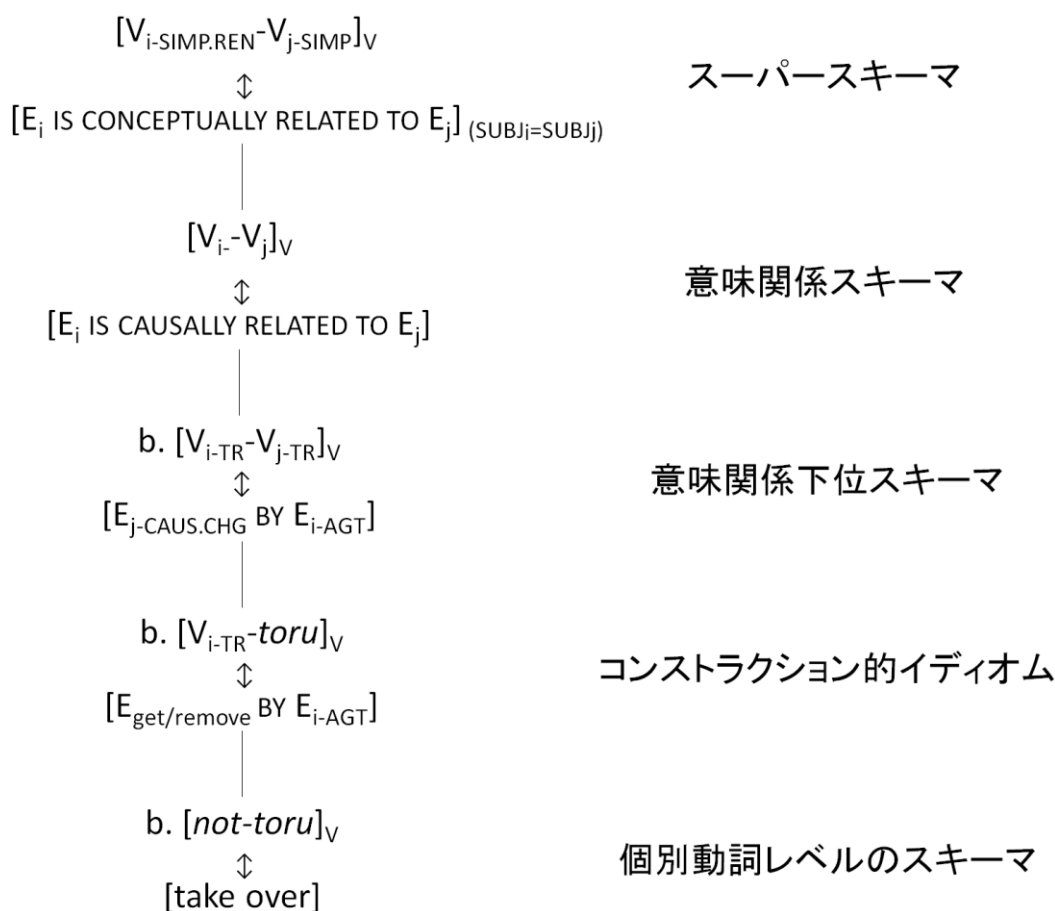


図 4-4 日本語語彙的複合動詞の階層性

以下において、4.3 で意味関係のスキーマ及びその下位スキーマの認知的な動機付けについて検討し、4.4 では複合動詞のコンストラクション的イディオムを考察する。4.5 では個別動詞レベルのコンストラクションとして見なす必要がある非分析的・非合成的な性質を有する複合動詞を見ていく。

4.3 日本語語彙的複合動詞の認知的な動機付け

日本語語彙的複合動詞には、V1とV2の意味関係に基づいて、「溶け落ちる」「飛び下りる」のような原因—結果型、「叩き壊す」「切り倒す」のような手段—目的型、「見落とす」「聞き漏らす」のような背景—具現型、「舞い落ちる」「漂い出る」のような様態—移動型、「泣き叫ぶ」「怒り悲しむ」のような同時発生型、そして「抱き抱える」のような並列関係型がある。しかし、なぜこのような意味関係にある二つの動詞が複合動詞として成立するのか、ということについてはま

だ問題点として残っている。

この問題点を検討するべく、本節では複合動詞が表している複合的な事象の本質を考察し、二つの動詞が結合して一つの複合事象を表すことができるのは、何らかの「因果関係」が必要だと考える。具体的には、「因果関係」に基づくもの(「切り倒す」、「溶け落ちる」など)、そして、「因果関係による必然的な共起性」に基づくもの(「舞い落ちる」、「泣き叫ぶ」など)というように、大きく二つのタイプに分かれると考える。これらの複合事象を表すタイプについては4.3.1で検討する。「抱き抱える」、「飛び跳ねる」のようなV1とV2の意味的な類似性に基づいて形成された並列関係型のもは、本質的に複合事象ではなく、単一の事象である。そのため、複合事象を表すタイプと区別して4.3.2で扱う。

4.3.1 複合事象を表す日本語語彙的複合動詞の認知的な動機付け

「因果関係」と「因果関係による必然的な共起性」という二つのタイプは、それぞれ異なる認知メカニズムによってV1とV2の表す動的な概念が一つの事象として認識され、言語的に統合された複合動詞という形で表現されるようになる。

Matsumoto (1996) では、「決定的使役の条件(Determinative Causation Condition)」と「同時性の条件(Coextensiveness)」という条件を設けている。

- (i) Determinative Causation Condition: one of the component event must be the only crucial cause of the other; or
- (ii) Coextensiveness Condition: the main component event must be temporally coextensive with 1) the subordinate component event itself, or 2) its result or effect, or 3) an intention to execute or actualize it. (Matsumoto 1996: 269)

この中で、本研究が主張する条件と一つ大きく異なるのは、「同時性の条件」が同時性だけを成立の条件としているのに対し、本研究の「因果関係による必然的な共起性」というものは、「同時性」に加え「因果関係」も必要となる、という条件である。例えば、<笑いながら歩く>という意味で、「*笑い歩く」とは言えないように、同時性という条件だけを満たしても複合動詞としては成立できない。そのため、あとで説明するように、何らかの因果関係に基づいてV1とV2

の表す事象が同時に生じる、という必然的な共起性が必要なのである。

Kaufmann (1995), Wunderlich (1997), Kaufmann & Wunderlich (1998), Gamerschlag (2000) などにおいて主張されている“COHERENCE”という概念も、因果関係または同時性が必要だという制約である。

COHERENCE.

Subevents encoded by the predicates of a decomposed SF structure must be contemporaneously or causally connected. (Kaufmann & Wunderlich 1998: 6)

しかし、これも Matsumoto (1996) の「同時性」と同じように、「*笑い歩く」のようなものを排除できないため、本研究が主張する「因果関係による必然的な共起性」という条件が必要となる。

以下において、「因果関係」と「因果関係による必然的な共起性」という二つの概念に基づく各意味関係のタイプを論じていく。その際に、従来の分類との違いも併せて示す。

複合動詞が表す複合事象の認知的な動機付けは「原因—結果」「手段—目的」「背景—具現」のような「因果関係」に基づくタイプと、「様態—移動」「同時発生」のような「因果関係による必然的な共起性」に基づくタイプに分けられる。「様態—移動」と「同時発生」の場合はさらにその因果関係のタイプによってそれぞれ二つの下位スキーマが存在する。

以下では、4.3.1.1 において因果関係に基づくタイプを検討し、4.3.1.2 で因果関係による必然的な共起性のタイプを見ていく。

4.3.1.1 因果関係

まず、因果関係とは何か、ということについてだが、Talmy (2000) によると、因果関係は事象と事象の関係であり、結果となる事象は原因となる事象が起こったことによって初めて成立するものでなければならない。また、近年の認知科学と脳科学の研究によると、我々は絶えず因果関係のシミュレーションを行っており、結果をシミュレートする能力と、原因を推論する能力があると言われている(Patterson & Barbey 2011)。

In particular situations, then, we can call up from memory, or generate “on the fly”,

simulations of an actual or potential causal scenario and “run” the simulation so as to generate an array of possible developments of that situation and anticipate possible responses to it. Or we can envision possible antecedent scenarios that might have caused, and might explain, a given situation. (Patterson & Barbey 2011: 15)

因果関係は時間の順序と関連し、先に起こったことが原因でその次に起こるのが結果である(Radvansky & Zacks 2010)。二つの異なる時間に起こった動作は因果関係がある場合を除いて異なる事象と見なされる(Shipley 2008)。一方、因果関係にある二つの情報は同じ事象として見なされやすく(Zacks et al. 2009)、因果関係にある情報はそうでないものよりエンコードされやすいことが分かっている(Radvansky & Zacks 2010)。これは、我々が因果関係にある二つの事象を共起的に何度も経験することで、二つの事象に結びつきが生じ、一方の事象だけでももう一方の事象が自動的に喚起されるようになるからだという(Barbey & Patterson 2011)。

[A]s a causal event is experienced repeatedly, its simulated components and the causal relationships linking them increase in potency. Thus when one component is perceived initially, these strong associations complete the pattern automatically, supporting inferences about the underlying cause(s) and their resulting effect(s).

(Barbey & Patterson 2011:2-3)

このように、因果関係にある二つの事象は同時的に知覚されないが、その二つの事象の偶然的でない強い共起性から単一の(複合)事象として経験されるようになる。

さて、因果関係に基づく複合動詞には三つのサブタイプが存在する。原因—結果型と手段—目的型、そして、先行研究では背景的情報(松本 1998)または補文の一部(由本 2011)とされていた背景—具現型がある。

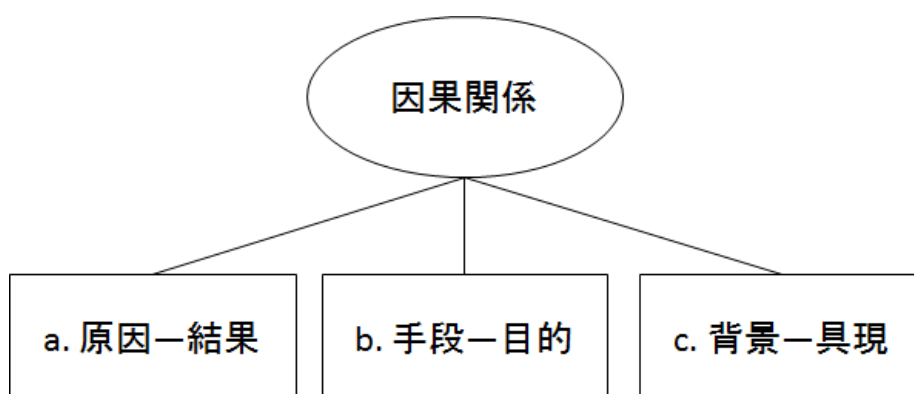


図 4-5 因果関係に動機付けられた複合事象のタイプ

以下において、各タイプを順番に見ていく。

4.3.1.1.1 原因—結果型

まず、タイプ a の原因—結果型だが、このタイプは V1 が表している事象である E1 が原因となって、V2 の表す E2 という事象が結果として引き起こされる、という因果関係にある。そして、 $[V_i-V_j\text{-INT}]_V \leftrightarrow [E_i \text{ CAUSE } E_j\text{-CHG}]$ というコンストラクションで捉えることができ、V1 は特定の形式を持たず(日本語の場合、和語単純動詞の連用形であることは上位のスキーマから受け継いでいる)、V2 は自動詞という形式を持つ。

(7) a. 足が床を離れ、身体が浮きあがる。

(BCCWJ 宮部みゆき 『ブレイブ・ストーリー』)

b. 優越感を漂わせるあの笑顔を、南の島で見飽きるほど見せられたのだ。

(BCCWJ 鎌田敏夫 『Body & money』)

タイプ a の原因—結果型は「V1 した結果 V2」と言い換えられ、全 3514 語ある『日本語語彙的複合動詞リスト』の中で 588 語あり、全体の 16.73%を占めている。

(8) a. 原因—結果型²⁶:

溶け落ちる, 焼け落ちる, 跳び下りる, 立ち上がる, 浮かび上がる, 浮き出る, 湧き出る,
流れ着く, 崩れ落ちる, 巻き戻る, すり減る, 思い浮かぶ, 読み飽きる, 走り疲れる など

V1 と V2 が表している二つの事象 E1 と E2 は実際に起こる際に, E1 と E2 が同時に起こる「立ち上がる」などもあるが, E2 が E1 に先行して起こることはない。そのため, 時間的な順序に従って, 時間的に先に起こる事象を V1 とし, あとに起こる事象を V2 とする, という時間的な類似性(iconicity)の関係が見られる。

4.3.1.1.2 手段—目的型

次に, タイプ b の手段—目的型は, V1 が V2 の表す目的を達成する手段を表すものである。このタイプは $[V_i\text{-TR}-V_j\text{-TR}]_V \leftrightarrow [E_j\text{-CAUS.CHG BY } E_i\text{-AGT}]$ というコンストラクションで表すことができる。E_iが動作主的なイベントで, E_jが使役状態変化のイベントである場合は, $[E_j \text{ BY } E_i]$ という手段—目的の意味関係として解釈され, (9)の「叩き壊す」「切り倒す」のように, V_iも V_jも他動詞である²⁷。

(9) a. 吉川は, 怒りのあまり, 刃引剣で柱や壁を叩き壊していく。

(BCCWJ 宮本昌孝 『夕立太平記』)

b. のこぎりを出してきて, 木を一本切り倒し, 木でじつに器用に若い娘の姿を作り出したんです。

(BCCWJ 小沢俊夫編 『世界の民話』)

この手段型のタイプは「V1(する)ことによって V2」と言い換えられる。手段型の『日本語複合動詞リスト』において 1732 語存在しており, 最も数が多く(全体の 49.29%), 生産性の高いタイプである。

²⁶ ここに挙げている複合動詞の例は全て『日本語複合動詞リスト』に収録されているものである。他の例は Appendix を参照。

²⁷ 「泣き落とす」は V1 が自動詞だが, <泣くことで相手に承諾させる>という意味を表し, 手段型である。この場合は手段型の個別動詞レベルの下位スキーマを形成していると考えられる。また, 「泣き落とす」においては, 「泣く」は目的語を取らないが, 意味的に泣くことで対象に働きかけるという点において他動詞と共通性がある。

(10) b. 手段—目的型:

切り倒す, 打ち壊す, 抜き取る, 洗い取る, 削り取る, 投げ入れる, 突き刺す, 引き離す,
拾い上げる, 打ち上げる, 押し上げる, 引き立てる, 叩き落とす, 叩き潰す など

手段型は原因型と同じで, 実際の事象が発生する順序を考えると, 目的となる出来事が手段となる出来事に先行することはない, 二つの出来事には時間的な順序がある。そのため, 手段型も時間順序の類像性に従う。

従来の研究において, 複合動詞は V1 が V2 の手段を表すものと V1 が V2 の原因を表すもので区別されてきたが, 手段型と原因型は共に因果関係にある二つの事象が一つに統合されたものであると考えられる。これは Talmy (2000: 509) が述べているように, 動作主的な使役事象も因果関係の一つとして考えられるからである。例えば, 「私がカタツムリを殺した」という文において, 「殺す」という語を用いることが適切かどうかは, カタツムリがどうなったか, ということが重要であり, 私が何をしたのかは重要ではない。私が手でカタツムリを叩いたとしても, カタツムリが死ななければ, 「殺す」という語を用いるのは適切ではないのだ。そのため, *I killed the snail* 「私がカタツムリを殺した」という文は以下のように概念的に分解することが可能である。

(11) *I killed the snail* の概念的分解 (Talmy 2000: 512)

The snail died	as a result of
my hand hitting it	as a result of
my willing on my hand	

つまり, 「殺す」のように, ある動作主的な使役事象においては, 結果事象が起こったかどうか, ということが重要であるため, 手段と目的の関係は因果関係の事象として考えられる。

手段—目的型の周辺的なものとして, 「割り入れる」のようなものがある。「割り入れる」という事象において, V2 は V1 の目的であるが, V1 は V2 の手段となる事象ではない。「割る」という事象は「入れる」という目的事象を達成するための準備事象に相当するものである。このようなものは, V1 は厳密には V2 の手段ではないが, 手段—目的型との類似性から, 本研究では手段—目的型の周辺的なタイプ b1. 準備事象—目的型として扱う。この「割り入れる」については, 5.3.4 でまた取り上げる。

4.3.1.1.3 背景—具現型

この背景—具現というタイプは、V2 という状態変化が起こる背景として V1 が表す事象がある、というものだ。背景型のコンストラクションは $[V_i-V_j]_V \leftrightarrow [E_i \text{ IS THE BACKGROUND OF } E_j\text{-CHG}]_E$ である。この場合、「見落とす」「売れ残る」のように、 V_i と V_j は他動詞でも自動詞でもあり得る。

- (12) a. ひたすら走り続けているような暮らしの中では、本当に必要なものを見落してしまうことがある。 (BCCWJ 雨宮榮一 『家族とどう生きてらよいか』)
 b. 高度成長期のように、需要が常に供給を上回っているときには、それでも製品が売れ残ることは多くありませんでした。 (BCCWJ 遠藤功 『企業経営入門』)

タイプ c の背景—具現型は「V1 という背景において V2」と言い換えられ、全部で 64 語 (1.82%)のみであった。

(13) c. 背景—具現型

見落とす、見失う、聞き漏らす、見逃す、聞き逃す、買い逃がす、取りこぼす、言い残す、書き残す、食べ残す、取り残す、やり残す、焼け残る、溶け残る など

「溶け残る」のような背景型において、「残る」という結果事象は「溶ける」という背景事象において生じるものであり、V1 は V2 が起こる背景、V2 は V1 という背景における、ある事象の具現を表している。では、なぜ V1 の「溶ける」は原因ではなく、背景であるかという点、V2「残る」が表す結果事象を直接引き起こすのは「溶ける」という事象ではなく、「溶ける」という事象において氷が溶けることを阻止する何らかの要因である。例えば、「温度の低下」という要因こそが、V2「残る」の直接の原因である。「氷が溶ける」ということが原因となって引き起こされる結果は「氷が無くなる」ことであり、「氷が残る」ことではない。この場合、V1「溶ける」が表す事象は V2「残る」という結果を引き起こした原因ではなく、それが起こるための背景条件である。そのため、「溶ける」と「残る」は厳密には因果関係ではない。しかし、V2 の表す E2 は必ず V1 の表す E1 という背景において生じるものであり、直接の原因ではないが、E1 と E2 は強い共起性を持っている。加えて、この背景型は V2 がある状態変化を表している点で、因果関係のタイプと共

通性が見られる。このような特性から、背景型は因果関係に近いものとして考えられる。

由本 (2008, 2011) においては、「見落とす」のような「～落とす」を [x_i FAIL IN [Event(z)]] という LCS で表される。この場合、V2「落とす」は V1 が表す事象に失敗するという意味を表し、V2「落とす」は V1 が表す事象を項として取るため、補文関係にあると考えられている。本研究では松本 (1998) と同様に、「～落とす」は<動作主が何かを捕獲しようとしていることを背景として、それを逸してしまう>ということを表すものだと考える。そのため、「見落とす」などは補文関係のように、事象を項に取るのではなく、捕獲の際に逸した対象を項として取るものだと考える。「～落とす」のような背景—具現型については、5.2 で詳しく検討する。

以上で因果関係という共通の認知的な動機付けがある三つのタイプを見てきたが、複合動詞が因果関係に基づいて成立するには、一方の動的プロセスによってもう一方の何らかの変化を伴う動的プロセスが発生する場合に限られる。加えて、二つの動的プロセスに共通する参加者が存在する必要がある(Matsumoto 1996a: 230-231, Talmy 2000: 485)。

4.3.1.2 因果関係による必然的な共起性

前節では因果関係に基づくタイプについて検討してきたが、本節ではそれとは異なる「因果関係による必然的な共起性」に基づくタイプを見ていく。このタイプの複合的な事象が成立するのは、それを構成する二つの動的プロセスが偶然同じ時間に発生したのではなく、ある「必然的な共起性²⁸」により、二つの動的プロセスが同じ場所で同じモノに同時に起こり、認知主体によって、同時に知覚されることに基づいている。前述のように、Matsumoto (1996a) と Gamerschlag (2000) では「同時性」を日本語複合動詞が成立するための条件の一つとして挙げているが、因果関係がなく、単に同時に起こった二つの事象は「*笑い歩く(笑いながら歩くという意味で)」や「*考え走る(考えながら走るという意味で)」*歌い洗う(鼻歌を歌いながら洗うという意味で)」「*立ち読む(cf. 立ち読みする)」「*立ち食う(cf. 立ち食いする)」などのように複合動詞としては成立しない。

²⁸ ここで言う必然的とは、客観的な必然性ではなく、認知主体にとっての必然性である。認知主体にとっての必然性は David (2003[1739]) が「因果的必然性(necessary connexion)」について述べているように、2つの事象が同時に起きることを、ある者が観察することによって、その者に生じる単なる主観的な印象であり、蓋然性にすぎないものである。

本研究はこのように、同時性以外に、V1 と V2 には何かしらの因果関係による必然的な共起性が必要であると考え、従来の「同時性」というアプローチからでは排除できなかった「*笑い歩く」や「*考え走る」「*歌い洗う」「*立ち読む」「*立ち食う」を説明できるようになる。これらの因果関係についてはあとで詳しく見ていく。

このタイプに含まれる日本語語彙的複合動詞は、従来様態型だとされていた「駆け登る、駆け降りる、舞い降りる、滑り降りる、駆け上がる、歩きまわる、舞い落ちる、舞い上がる」など、そして、「並列型」だと言われてきたものの中で、類義関係ではないと思われる「泣き叫ぶ、泣き暴れる、泣き騒ぐ、すすり泣く、愛し慈しむ、恋い慕う、光り輝く、笑いはしゃぐ、悩み苦しむ、思い悩む」などがある。本研究ではこの二つのタイプをそれぞれ「様態—移動型」と「同時発生型」とする。「様態—移動型」と「同時発生型」は共に V1 と V2 が表している動的プロセスがある因果関係に基づいて同時に発生・知覚されるため、同じ「因果関係による必然的な共起性」というタイプであると考えることができる。

因果関係による必然的な共起性というタイプは、単一の時間的な区切りの中で起こった一つの複合事象を分析的に捉えて言語的に表現したものであると考えられる。例えば、「(木の葉が)舞い落ちる」が表しているのは、木の葉がひらひらと下方へ移動することである。V1「舞う」という動詞が表している「ひらひらと」という様態は下方移動する際の様態であり、移動とそれに付随する様態は同時に起こるものであり、同時に知覚される。「舞い落ちる」は、木の葉がひらひらと落ちることを認識し、その特徴的な様態を表現するために、分析的に様態と移動を別々の動詞で表したのである。「泣き叫ぶ」も同様で、「泣いたから叫ぶ」のではなく、「(何らかの刺激により)泣きながら叫ぶ」ことであり、「泣く」という動的プロセスと「叫ぶ」という動的プロセスは同時に知覚される。「泣き叫ぶ」では、泣きながら叫んでいることを分析的に二つの動詞で表している。そのため、このタイプに属するものは「V1 ながら V2」と言い換えられる。

同時発生タイプは因果関係による必然的な共起性に動機付けられており、「様態—移動型」と「同時発生型」という二つのサブタイプに分けられると述べたが、「様態—移動型」はさらに「共通原因様態」と「共通目的様態」という二つのサブタイプに分けることができ、同様に「同時発生型」も「共通原因事象」「共通目的事象」の二つのサブタイプに分けられる。

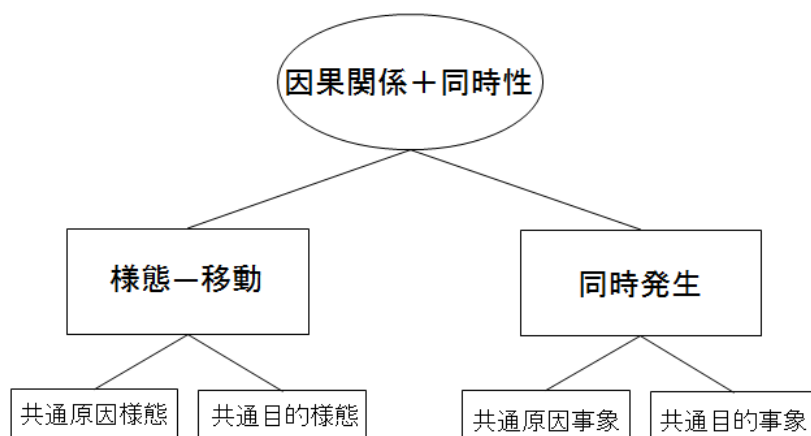


図 4-6 「因果関係による必然的な共起性」に動機付けられた複合事象のタイプ

次節より、「因果関係による必然的な共起性」の各タイプを見ていく。

4.3.1.2.1 様態—移動型

様態—移動型のコンストラクションは $[V_i\text{-INT}-V_j\text{-INT}]_{V\leftrightarrow}[E_j\text{-MOT IN A MANNER OF } E_i\text{-MAN}]_{(T_i=T_j)}$ であり、 V_1 と V_2 は共に自動詞で、 V_1 は V_2 が表す移動事象の際の様態を表している。 E_i が様態を表すイベントで、 E_j が主体移動のイベントである。そして、このタイプ d の様態—移動型は全部で 147 語(4.18%)ある。様態—移動型は、(14)における「舞い落ちる」「転がり落ちる」のように、 V_i と V_j は共に自動詞である。

(14) a. あたりには芳香が漂い、花びらがひらひらと舞い落ちて、えもいわれぬ光景である。
(BCCWJ 楠山春樹 『老子のことば』)

b. 小指の先ほどの大きさの瓦の破片が屋根を転がり落ちた。

(BCCWJ 雑賀礼史 『リアルバウトハイスクール』)

ここで注意したいのは、日本語複合動詞で従来様態型だと言われていたものの中には、同時性という観点から見ると、様態型ではなく、因果関係の原因—結果型だとすべきものがある。例えば、「飛び上がる、飛び出る、流れ出る」などは V_1 が移動の様態を表しているとも考えられるが、これらの複合動詞における二つの事象は同時的に知覚され

るのではなく、時間的順序がある。そのため、例えば「カエルが箱から飛び出た」を言い換えるときには、「カエルが箱から飛んで出た」と言えるのに対し、「カエルが箱から飛びながら出た」とは言えない。「飛び上がる、飛び出る、流れ出る」などにおいては、V1という事象が起こったことでV2という事象が発生したのであり、その点において、「舞い落ちる」などとは違い、因果関係に基づくものであると考えられる。

前述したように、様態—移動型には「共通原因様態」「共通目的様態」という二つのサブタイプがある。以下において各サブタイプについて説明する。

4.3.1.2.1.1 共通原因様態型

まず、「共通原因様態」というタイプだが、このタイプには以下のようなものがある。

(15) d1. 共通原因様態型：

舞い落ちる、舞い上がる、舞い散る、舞い込む、舞い飛ぶ、滑り落ちる、流れ出る、漂い出る、転がり込む、転がり落ちる、流れ下る、はしゃぎ回る、逃げ回る など

共通原因様態型は(16)と(17)のように、V1とV2の表している事象がある共通の原因によって引き起こされたものである。

(16) 太郎はバランスを崩したために{滑った／落ちた／滑り落ちた}。

(17) 落ち葉は風に吹かれたことで{舞った／上がった／舞い上がった}。

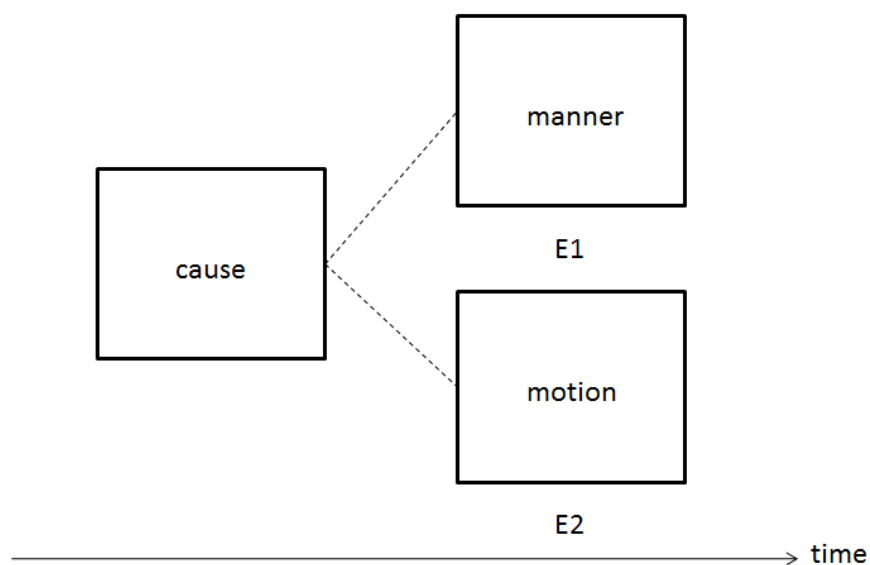


図 4-7 共通原因様態型における事象の時間順序と意味関係

図 4-7 が示すように、このタイプは、ある共通の原因によって、V1 と V2 の表す事象が必然的な共起性を持つことになり、一つの複合事象として認識されるようになると考えられる。

この共通原因様態型には周辺的なものとして、V1-V2 全体が表す移動事象が一つの特定の原因によって引き起こされる、というのがある。

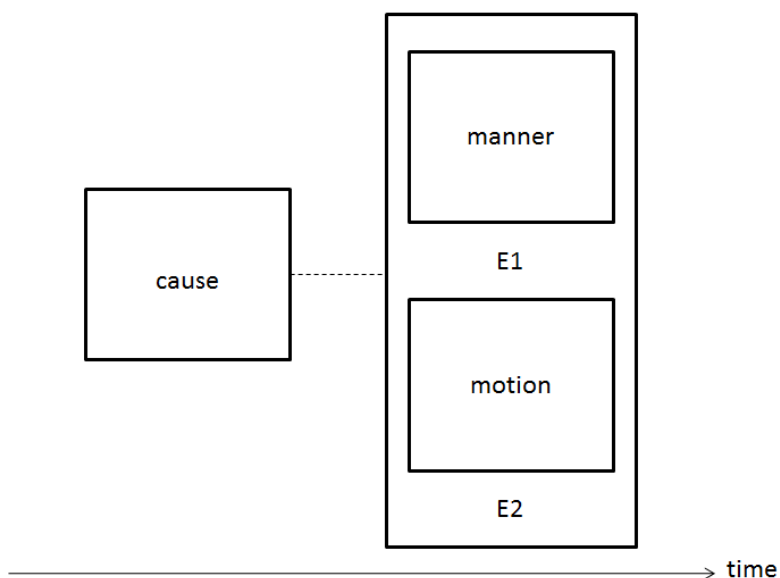


図 4-8 [V1-V2]_v全体と対応する共通原因様態型における事象の時間順序と意味関係

(18) [V1-V2]_v全体と対応する共通原因様態型：

さまよい歩く，浮かれ歩く，暴れ回る，群れ飛ぶ，群れ泳ぐ，群れ立つ，燃え移る
など

通常の共通原因様態の場合は，V1 と V2 が同じ原因を共有していたが，この周地的なものは，(19)のように，[V1-V2]_v全体が表す事象が特定の原因を持っている。

(19) いいことがあったので{浮かれた／??歩いた／浮かれ歩いた}。

また，(20)の「群れ飛ぶ」や「群れ泳ぐ」「群れ立つ」のような複合動詞があるが，これらの例は群れて移動するという動物の習性に基づくものであり，[V1-V2]_v全体が「本能」という特定の原因に基づいている²⁹。

(20) 鳥は，仲間に紛れることで捕食者に狙われる確率を下げる，という本能から{群れる／??飛ぶ／群れ飛ぶ}。

4.3.1.2.1.2 共通目的様態

次に，共通目的様態というタイプがある。このタイプはある共通の目的のために，V1 の表す様態と V2 の表す移動を行った，というものである。

(21) d2. 共通目的様態型：

泳ぎ回る，走り回る，駆け回る，歩き回る，飛び回る，駆け上がる，駆け下りる，
駆け寄る，駆け回る，見回る，走り寄る，攻め上がる，持ち寄る など

²⁹ 動物が群れ行動を行うのは，群れを作ることで一つの大きな個体であるかのように捕食者を幻惑し，また群れの中にいることで捕食される可能性を低くする希釈効果などにより捕食者を回避することと，摂餌の効率を高めることが挙げられる。またサケ科魚類では大群の形成により母川へ回帰する確率が高まることが知られている(上田 1990, 有元 2007)。本論文では本能を動物の意志とは関係なく働くものとして考えているが，もし動物が意思的に群れ行動を行っていると考えれば，あとで述べる「特定目的様態型」となる。

共通目的様態のタイプは(22)と(23)のように、V1 と V2 の表す事象がある共通の目的を持っている。

(22) 金魚は、散らばった餌を食べるために、水槽の中を{泳いだ／回った／泳ぎ回った}。

(23) 学校に不審者がいないか確認するために、あたりを{見た／回った／見回った}。

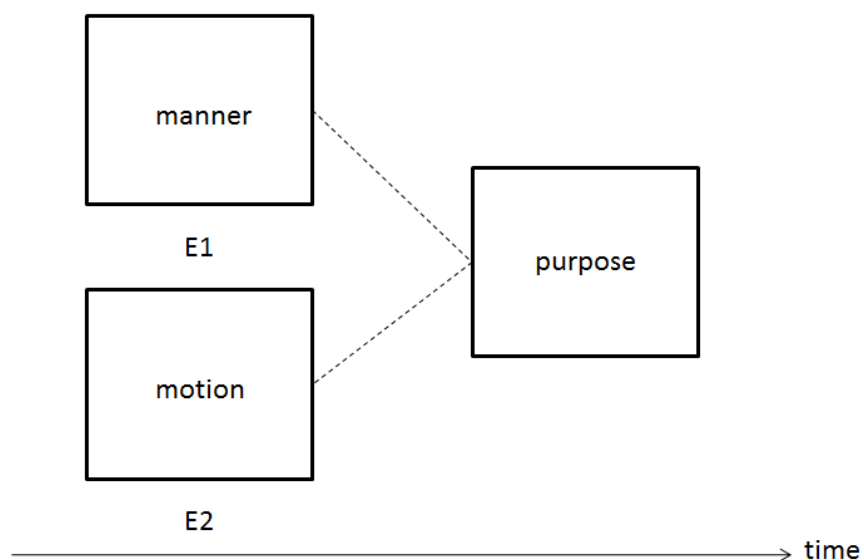


図 4-9 共通目的様態型における事象の時間順序と意味関係

では、なぜ同じ目的を持つ二つの事象が複合事象として認識されるのかというと、それは我々の行動というものが本来目的志向であり、同じ目的を持っている限りにおいて、一つの事象として認識されるからである。

They (Events) are directed toward a goal; the goal of a wedding is to formalize a union,
and the goal of breakfast is to sate one's hunger. (Zack et al. 2007: 273)

例えば、キリスト教式の結婚式は細かく分けると、「参列者着席」→「新郎入場」→「新婦入場」→「新婦の引渡し」→「聖歌(賛美歌)斉唱」→「聖書朗読, 祈祷」→「結婚の誓い」→「結婚指輪交換」→「誓いのキス」→「結婚の宣言」→「結婚証明書に署名」→「聖歌(賛美歌)斉唱」→「新郎新婦退場」という複数の事象から構成されているが、これらの事象は共に「結婚する」と

いう共通の目的を持っているため、一つの事象として認識されるのである。

反対に、ある本来の目的から別の新しい目的へと変わると、そこに事象の境界線が生じやすいことも分かっている。

Viewers tend to identify event boundaries at points of change in the stimulus, ranging from physical changes, such as changes in the movements of the actors, to conceptual changes, such as changes in goals or causes. (Kurby & Zacks 2008: 72)

このように、事象の分節化(Event Segmentation)においては、目的というものが大きな役割を担っているため、同じ目的を持つ複数の事象は同一の事象の一部として統合されやすいのである。

共通目的様態型にも、周辺的なものとして、[V1-V2]_v全体が表す移動事象が一つの特定の目的のために行われる、というものである。

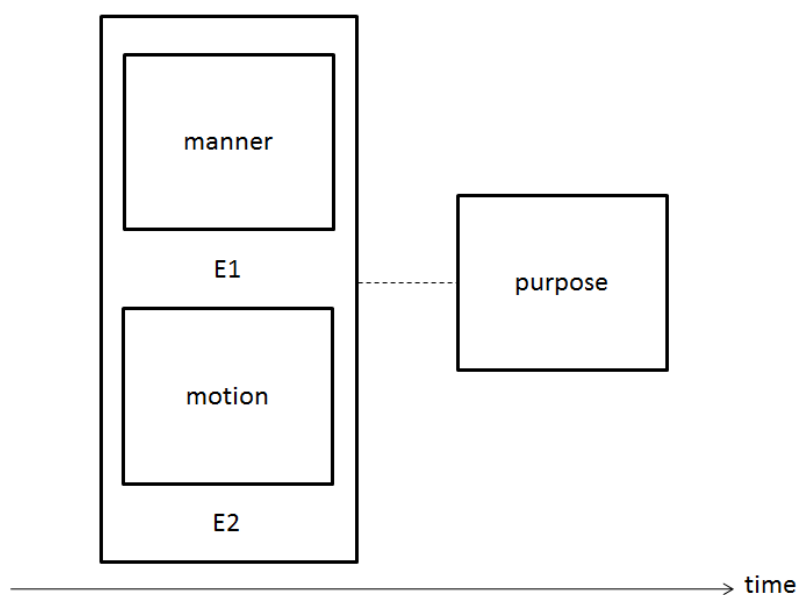


図 4-10 [V1-V2]_v全体と対応する共通目的様態型における事象の時間順序と意味関係

(24) [V1-V2]_v全体と対応する共通原因様態型：

持ち歩く, 連れ歩く, 持ち帰る, 持ち回る, 連れ帰る, 踊り歩く, 寝転がる, 寝転ぶ など

この周延的な場合は(25)と(26)のように、V1-V2 全体として表す事象がある特定の目的を持っている。

(25) いつでも作業ができるように{(パソコンを)持つ／??歩く／(パソコンを)持ち歩く}。

(26) リラックスするために{寝る／??転ぶ／寝転ぶ}。

以上で様態—移動型における因果関係の二つのタイプを見てきたが、これらの因果関係のどれかにあてはまらないものは、様態—移動型の複合動詞として成立できない。このような因果関係を想定することで、例えば、「*笑い歩く」や「*考え走る」のようなものは V1 と V2 に共通の原因や目的がなく、V1-V2 に対応する特定の原因や目的もないため成立できない、と説明できるようになる。

4.3.1.2.2 同時発生型

4.3.1.2.1 で様態—移動型について見てきたが、因果関係による必然的な共起性のもう一つのタイプとして、「同時発生型」がある。同時発生型は $[V_i-V_j]_{V \leftrightarrow} [E_k \text{ CAUSES } [E_i \text{ AND } E_j]_{(T_i=T_j)}]$ というコンストラクションによって表すことができ、V1 と V2 は同時に起こる二つの動的プロセスを表すものである。タイプ e の同時発生型は全部で 126 語(3.59%)ある。(27)の「泣き叫ぶ」や「恋い慕う」のように、V1 と V2 は同時に起こった二つの動的プロセスである。

(27) a. 待って、待ってとわたしは泣き叫んだ。(BCCWJ 篠田真由美 『龍の黙示録』)

b. その辞世には年のせいか親を恋い慕う心が現われている。

(BCCWJ 森川哲郎 『幕末暗殺史』)

従来の研究において、「泣き叫ぶ」や「恋い慕う」などは、「舞い踊る」や「抱き抱える」などと共に、V1 と V2 の意味的な類似性に基づく「並列関係」によって形成されたものであると考えられていた(影山 1993, Fukushima 2005, Lieber 2009, 由本 2011 などにおける並列型 “coordinate compounds”, 及び Matsumoto 1996a における “pair compounds”)。しかし、本研究

では「舞い踊る」や「抱き抱える」などのように、その複合動詞が本質的に単一の事象を表している場合を先行研究と同様に「並列関係型」とするが、「泣き叫ぶ」や「恋い慕う」などのように二つの事象を一つの複合事象として表していると思われる場合は「同時発生型」として見なし、両者を区別する。

4.3.1.3 で述べるように、並列関係(Coordination)というのは複合名詞などによく見られる複合のメカニズムの一つで、二つの語が類似の概念を表している場合に複合語として成立できるというものである。日本語において並列関係に基づいて形成された複合動詞は「舞い踊る」「抱き抱える」「飛び跳ねる」などがあり、これらの複合動詞の V1 と V2 は本質的には同じ事象を表している。

しかし、「泣き叫ぶ、笑いはしゃぐ、嘆き悲しむ、すすり泣く、思い悩む」などにおいて、V1 と V2 は概念的には近いが、本質的には二つの異なる事象を表している。並列関係型と同時発生型の違いは(28)のような「V1 ながら V2」と言い換えられるかどうかで確認できる³⁰。

(28) a. 並列関係型

舞い踊る ??舞いながら踊る
抱き抱える ??抱きながら抱える
好き好む ??好きながら好む
飛び跳ねる ??飛びながら跳ねる

b. 同時発生型

泣き叫ぶ 泣きながら叫ぶ
笑いはしゃぐ 笑いながらはしゃぐ
嘆き悲しむ 嘆きながら悲しむ
すすり泣く すすりながら泣く
思い悩む 思いながら悩む

³⁰ 「忌み嫌う」における V1「忌む」のように、複合動詞の構成要素が単独で使用されない場合は「*忌みながら嫌う」と言い換えられないが、概念的に考えると、「忌む」は<不吉なものとして避ける>という意味を表しており、「不吉なものとして避けながら嫌う」というふうに言い換えられる。ここでの分類は概念的なものであるため、「忌み嫌う」のようなものは同時発生型だと考える。

このように、従来並列型だとされていたものの中には、「同時発生型」として考えたほうが適切であるものが存在する。

同時発生型はその因果関係の違いによって「共通原因事象」「共通目的事象」という二つのサブタイプに分けられる。

4.3.1.2.2.1 共通原因事象型

では、まずは最初のサブタイプである「共通原因事象」について見てみよう。

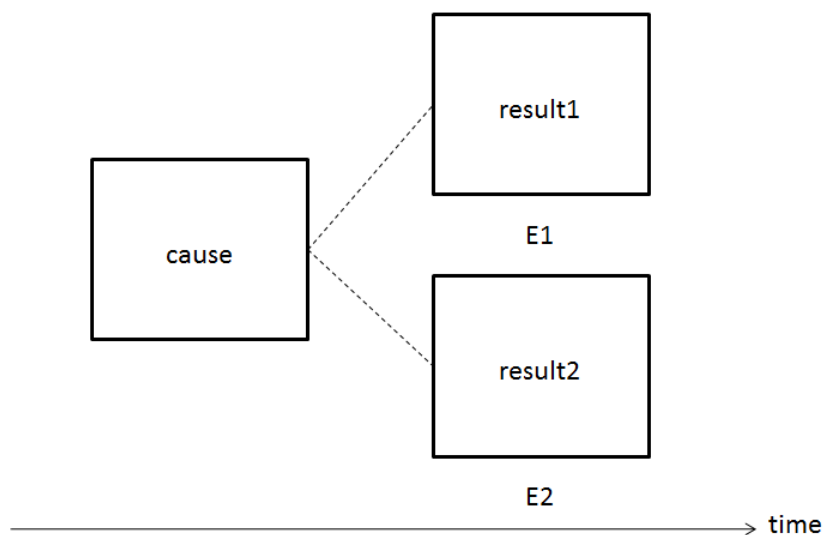


図 4-11 共通原因事象型における事象の時間順序と意味関係

(29) e1. 共通原因事象型:

泣き叫ぶ, 怒り悲しむ, 忌み嫌う, 生い茂る, 待ち望む, 鳴り響く, 光り輝く, 逃げ惑う,
 思い悩む, 嘆き悲しむ, すずり泣く, 泣き喚く, もがき苦しむ, 笑い転げる, 悩み苦しむ
 など

共通原因事象型は(30)と(31)のように、ある共通の原因によって V1 と V2 が表す事象が同時に起こるというものである。

(30) ショッキングな出来事があったため {泣いた / 叫んだ / 泣き叫んだ}。

(31) 借金のせいで{悩む／苦しむ／悩み苦しむ}。

このタイプにも周縁的なものとして, (32)と(33)のように[V1-V2]_v 全体がある共通の原因を持っているものがある。

(32) 宝くじに当たったため毎日{遊ぶ／??暮らす／遊び暮らす}ようになった。

(33) 通勤の途中で忘れ物を思い出して{??立った／止まった／立ち止まった}。

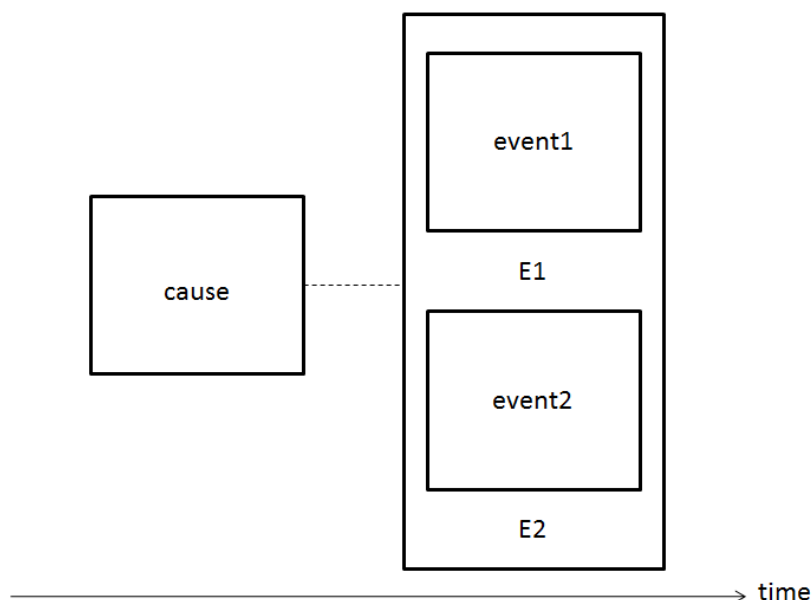


図 4-12 [V1-V2]_v 全体と対応する共通原因事象型における事象の時間順序と意味関係

(34) [V1-V2]_v 全体と対応する共通原因事象型:

立ち止まる, 立ちすくむ, 生まれ持つ, 群れ咲く, 群がり咲く, 遊び暮らす, 泣き暮らす, 嘆き暮らす, 忍び泣く など

4.3.1.2.2.2 共通目的事象

次に, 同時発生型の 2 つ目のサブタイプとして「共通目的事象」というものがある。このタイプは V1 と V2 の表す事象がある共通の目的のために行われるものである。

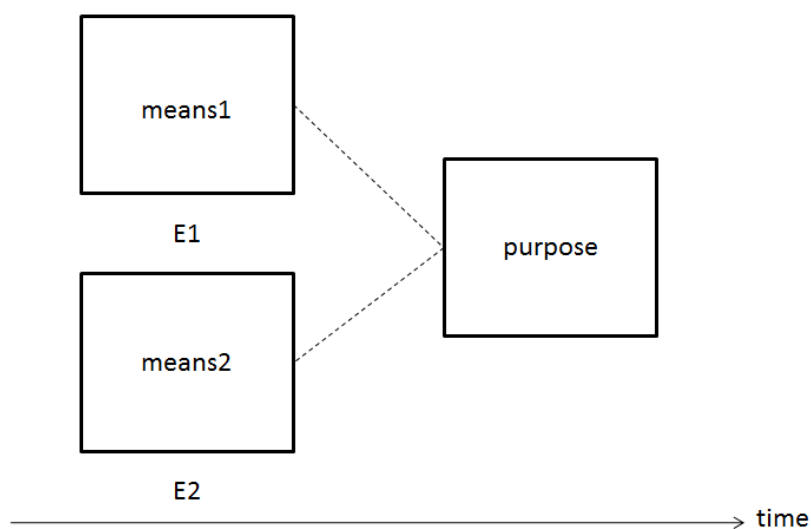


図 4-13 共通目的事象型における事象の時間順序と意味関係

(35) e2. 共通目的事象型:

混ぜこねる, 弾き語る, 焼き揚げる, 支え励ます, 尋ね求める, 待ち伏せる, 泣きすがる,
願い求める, 捧げ持つ, 飲み騒ぐ, 祈り願う, 伏し拝む, 慰め励ます, 覗き見る など

共通目的事象型は(36)と(37)のように, V1 と V2 がある共通した目的を持っている。

(36) 中の様子を伺うために{覗く／見る／覗き見る}。

(37) ハンバーグを作るために素材をよく{混ぜる／こねる／混ぜこねる}。

このタイプも周縁的なものとして, (38)と(39)のように, [V1-V2]_v 全体がある共通の目的を持つ, というものがある。

(38) 護身のためにナイフを{?隠す／持つ／隠し持つ}。

(39) 愛する人と再会するために{待つ／??暮らす／待ち暮らす}。

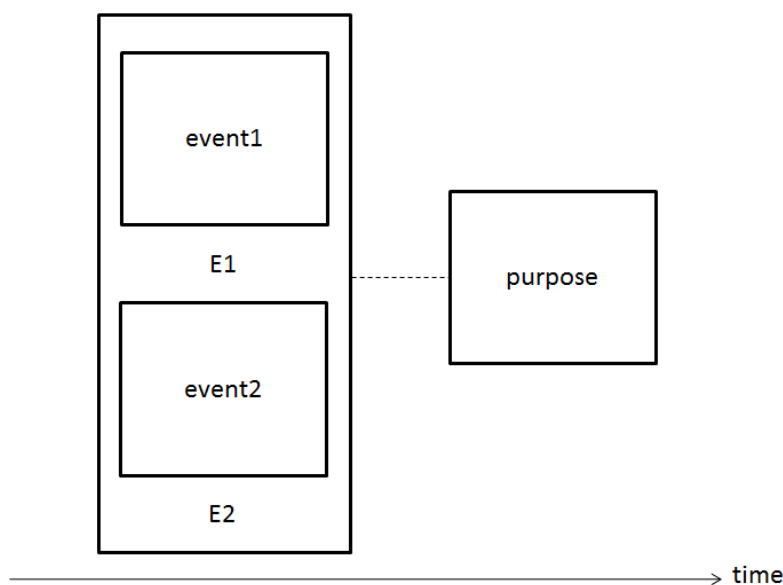


図 4-14 [V1-V2]_v全体と対応する共通目的事象型における事象の時間順序と意味関係

しかし、この周辺的なタイプはかなり少なく、以下の 5 語しかなかった。そのため、基本的にはこのパターンは許されていないと考えられる。

(40) [V1-V2]_v全体と対応する共通目的事象型:

隠し持つ、隠れ住む、眺め暮らす、待ち暮らす、忍び会う。

以上において、同時発生型における二つの因果関係のタイプを見てきたが、これらの因果関係が存在しない例は「*歌い洗う」「*立ち読む」「*立ち食う」のように複合動詞として成立できない。

4.3.2 並列関係

日本語語彙的複合動詞には因果関係に基づくもののほかに、 E_i と E_j の意味的な類似性に基づくものとして、タイプ f の並列関係型がある。同義語の組み合わせの場合は $[V_i-V_j]_v \leftrightarrow [E_i \text{ IS SEMANTICALLY SIMILAR TO } E_j]$ というコンストラクションで表され、 V_1 と V_2 が表す事象には全般的な類似性が見られる。

例えば、「飛び跳ねる」において、「飛ぶ」と「跳ねる」という二つの動詞が表す事象

は、共に足を使う上方への瞬間的な主体移動であり、両者は多くの点で類似している。このような類似性に基づく並列関係によって、V1「飛ぶ」とV2「跳ねる」が結合したのだと思われる。このように、同時発生型は二つの動詞が表す事象における因果関係と同時性に基づいて形成されたものであるのに対し、並列関係型は二つの動詞の意味における概念的な類似性に基づくものである。そのため、並列関係型は本質的に単一の事象であり、V1とV2の間に時間的な関係はない。(41)の「飛び跳ねる」や「恐れおののく」などのような類義語の組み合わせのものがこのタイプに該当する³¹。

- (41) a. 目の前の路面で、ガラスの破片が飛び跳ねる。(BCCWJ 乙一 『失はれる物語』)
 b. 平家敗北の報が都へ伝わると、京中の人々はおそれおののいた。
 (BCCWJ 安西篤子 『義経の母』)

この並列関係型はある動的プロセスの反復性(repetitiveness)と強度(intensity)を表すために、二つの類似した意味を持つ動詞を組み合わせたものである(Matsumoto 1996a: 198)。しかし、このタイプは日本語においてはあまり確立されておらず、全部で27語(0.77%)しかない。

(42) f. 並列関係型:

遊び興じる, 遊び戯れる, 戯れ遊ぶ, 打ち叩く, 恨み憎む, 恐れおののく, 隠れ潜む,
 肥え太る, 好き好む, 責めさいなむ, 抱き抱える, 努め励む, 照り輝く, 飛び跳ねる など

4.4 日本語語彙的複合動詞におけるコンストラクション的イディオム

4.3 で意味関係のスキーマという抽象的なコンストラクションについて検討してきたが、本節ではより具体的なレベルに属するコンストラクション的イディオムを考察する。第三章で取り上げた[VTR_i -able]_{Aj} ↔ [[CAN BE SEM_i-ed]_{property}]_jのような部分的に空きスロットのあるスキーマをコンストラクション的イディオム(constructional idiom)という。コンストラクション的イディオムを取り入れることで、生産的に新しい複合動詞を作る

³¹ 「付け外す」という反義語の組み合わせと思われる複合動詞があるが、その頻度は90しかなく、「付け外し」からの逆形成だと思われる。

ことができるという、複合動詞の合成的な性質、及び、拘束意味(bound meaning)に見られる非合成的な性質を説明できるようになる。4.4.1 において、複合動詞の生産性を検討し、4.4.2 で拘束意味について検討する。

4.4.1 コンストラクション的イディオムと複合動詞の生産性

語彙的複合動詞は完全に生産的ではないが、中には一部生産性の高いものがある。例えば、近年、中高生がいじめによって自殺するという事件が度々起きており、それによって「いじめ殺す」という複合動詞が作られたと考えられる。この「いじめ殺す」に見られる複合動詞の生産的な一面は、[V-殺す]_vというコンストラクション的イディオムの空きスロットに、適合する動詞を埋め込むことで新しい複合動詞を作り出すと考えることができる。同様に、レキシコンに登録されている「拭き取る」「削り取る」「剥ぎ取る」「切り取る」など様々なく除去する>という意味を表す複合動詞から[V-取る]_vというコンストラクション的イディオムを作り、その空きスロットに意味的に適合する動詞を埋め込むことで、美容整形などにおいて、レーザーでシミを照射することでそれを除去することを表す「焼き取る」という複合動詞を新たに作ることができる。[V-殺す]_vや[V-取る]_vは比較的高い生産性を有するが、これは[V-殺す]_vや[V-取る]_vが高いタイプ頻度を持つからである(Baayen 2003, Barðdal 2008, 2011, Hay & Baayen 2005 を参照)。

複合動詞を新しく作る場合は、コンストラクション的イディオムを用いるという方法のほかに、4.2 で見たような[V_{i-TR}-V_{j-TR}]_v↔[E_{j-CAUS.CHG} by E_{i-AGT}]_vのような抽象的な意味関係のコンストラクションに、意味的に適合する動詞を埋め込むことで作る、という可能性もある。しかし、以下に述べるいくつかの理由によって、抽象的な意味関係のコンストラクションではなく、コンストラクション的イディオムを用いている可能性が高い。

まず、意味的に成立可能なものでも、それに対応するタイプ頻度の高いコンストラクション的イディオムがなければ成立できない、という現象が見られる。例えば、<言葉巧みに言うことで相手を惑わして騙す>という複合事象があるが、「*言い惑わす」「*言い騙す」「*言い欺く」「*言い誑かす」は全て存在しない。これは「～惑わす」「～騙す」「～欺く」「～誑かす」という複合動詞が存在していないからだと考えられる。反対に、<いじめることによって相手を殺す>という複合事象は前述のように「いじめ殺す」で

表すことができる。これは「～殺す」が高いタイプ頻度を有するからだと思われる。

また、類義表現において、タイプ頻度の高いものが選択される、という現象がある。前述の「焼き取る」がその例である。〈対象を除去する〉という意味を表す複合動詞のV2には、「～取る」「～落とす」「～消す」などがある。「～取る」「～落とす」「～消す」は完全に同じ意味を持っているわけではなく、意味的な棲み分けが見られる。まず、「拭い取る」や「拭き取る」のように、「～取る」は〈対象を除去する〉という意味を表しているが、その背景的な情報として、除去した対象が動作主のコントロール可能な所に留まる必要がある。そのため、除去した対象が動作主のコントロール下にないものは「*はたき取る」「*払い取る」のように成立しない。それに対し、「～落とす」は「はたき落とす」や「払い落とす」のように、〈何かの表面に付着している対象を除去する〉という意味を表すが、背景的な情報として、除去した対象は通常下方へ落下する、という情報が含まれる。それによって、除去した対象が通常下方へ移動しない場合は、「*拭い落とす」「*拭き落とす」のように容認出来ない。そして、「～消す」は「吹き消す」「踏み消す」のように、火などを〈消滅させる〉ことを表している。そのため、対象が消失しない場合は「*拭い消す」「*拭き消す」「*はたき消す」「*払い消す」のように成立できない。〈レーザーでシミを照射して熱することでそれを除去する〉という複合事象の場合、除去される対象であるシミは消失するため、本来ならば「～消す」を用いて表現することが可能であるはずだが、『複合動詞用例データベース』を見ると、「*焼き消す」という複合動詞は存在していない。その代わりに「焼き取る」と「焼き落とす」が用いられている。これは、「～取る」「～落とす」「～消す」のタイプ頻度の違いによるものだと考えられる。『複合動詞用例データベース』において、〈対象を除去する〉を表すことができる「～取る」のタイプ頻度は29、「～落とす」は18あるのに対し、「～消す」は6しかない。

表 4-1 〈除去する〉を表す「～取る」「～落とす」「～消す」のタイプ頻度

「～取る」	「～落とす」	「～消す」
拭き取る	洗い落とす	打ち消す
拭い取る	搔き落とす	搔き消す
掃き取る	刈り落とす	吹き消す

第4章 コンストラクションに基づく複合動詞の考察

焼き取る	切り落とす	踏み消す
切り取る	削り落とす	塗り消す
削り取る	こすり落とす	もみ消す
そぎ取る	すり落とす	
えぐり取る	削ぎ落とす	
折り取る	剃り落とす	
破り取る	叩き落とす	
ちぎり取る	流し落とす	
剥がし取る	剥ぎ落とす	
剥ぎ取る	弾き落とす	
抜き取る	はたき落とす	
むしり取る	払い落とす	
もぎ取る	吹き落とす	
摘み取る	磨き落とす	
こし取る	焼き落とす	
こすり取る		
絞り取る		
すくい取る		
擦り取る		
抱き取る		
舐め取る		
掘り取る		
巻き取る		
搔き取る		
絡み取る		
移し取る		
計 29 語	計 18 語	計 6 語

このように、タイプ頻度の低い「～消す」は生産的なコンストラクション的イディオ

ムを形成していないと考えられる。そのため、本来「～取る」が要求する<除去した対象が動作主のコントロール可能な所に留まる必要がある>という背景的な情報と矛盾が生じるにも関わらず、「*焼き消す」ではなく「焼き取る」を用いるのである。加えて、「焼き取る」のトークン頻度が145で、「焼き落とす」の121より若干高いことも、「～取る」と「～落とす」のタイプ頻度の違いを反映している(「～取る」については五章で再度取り上げる)。

4.4.2 コンストラクション的イディオムと拘束意味

前節ではコンストラクション的イディオムに基づいて、新しい複合動詞を作り出すことができる」と述べたが、本節では、コンストラクション的イディオムによって、複合動詞の非合成的な性質である拘束意味を説明する。

3.1.3 で、コンストラクション的イディオムにおいて固定された要素が、単独では見られない意味を持つという、「拘束意味(bound meaning)」について触れた。複合動詞にもこのような拘束意味を持つコンストラクション的イディオムが見られる。例えば、「見落とす」「聞き落とす」におけるV2「落とす」は本動詞には見られない<情報を捉えることに失敗する>という意味を持つ(cf. 「重要な問題を{見落としたり/*落としたり}」)。同様に、「焼き上げる」「書き上げる」などにおける<あるものを完成させる>という意味や「追い上げる」における<対象に接近する>という意味を表すV2「上げる」, 「飛び出す」「流れ出す」などにおける<障害と感ぜられるような境界を越えて外側に出る>意味を持つV2「出す」(松本 2009 を参照)などは、全て単独動詞では見られない拘束意味である。

拘束意味を持つV2は本来の単独動詞としての機能を失い、V1を修飾するという補助的な機能になっている場合が多く見られる。例えば、「澄み切る」「困り切る」などにおける<V1の表す状態が限界に達している>という意味を持つV2「切る」や、「生き抜く」「走り抜く」などにおける<V1の表す事象を最後まで行う>という意味のV2「抜く」などは、「V1でV2」や「V1ながらV2」というふうには言い換えられず、V2はV1を補助的に修飾しているものである。このようなものは「生き抜く」や「走り抜く」などのような実際の用例からボトムアップ的に抽出した[V-抜く]_vというようなコンスト

ラクション的イディオムとして捉えることができる。

反対に、V2ではなく、V1が本来の単独動詞としての意味を希薄化させ、接頭辞的になっているものもある。「打ち震える」「打ち続く」などにおけるV1「打つ」や「取り囲む」「取り調べる」などにおけるV1「取る」は本来の物理的な動作としての意味がなくなり、V2の意味を強めるに留まっているという点、そして、V1という決まった位置にしか現れないという点において、接頭辞的である。接頭辞「的」だというのは、これらは接辞と違って、ある語彙素と結びついている拘束形態素だからである(Booij 2010 や 史 2014 における affixoid という概念についても参照)。V1の「打つ」や「取る」などは、部分的な生産性しか持たない。V1を強調する意味で「*打ち荒れる」「*打ち乱れる」「*取り荒らす」「*取り汚す」などは存在しない。本研究ではこのようなV1の意味が希薄化したものを、V1にV2を組み合わせる、というような合成的なアプローチではなく、用例に基づいてボトムアップ的に [打ち-V]_v や [取り-V]_v というコンストラクション的イディオムが形成されると考えることで、その限定的な生産性を説明できる。

また、コンストラクション的イディオムの中には、固定されている要素が拘束形態素である [ひっ-V]_v, [繰り-V]_v, [V-入る]_v, [V-込む]_v がある。これらについては次節で検討する。

4.5 個々の日本語語彙的複合動詞における全体的な性質

前述のように、従来の日本語語彙的複合動詞の形成は主に構成要素であるV1とV2の合成として分析されてきた。しかし、これらの合成的な研究は言語変化及び慣習化を考慮していないという問題点が存在する。複合動詞には、「落ち着く」などのように、合成的に全体の意味を導き出すことができない例が多くあり、ゲシュタルト的な複合体として捉える必要がある(石井 2007, 野田 2007 を参照)。複合語はそれが非合成的な性質を有する場合や、高頻度で使用されるときには、自動化(automation)によって、一つのまとまり(chunk)として記憶されると考えられる(Bybee 2006 などを参照)。

このようなまとまりを示す性質は様々な面において観察されるが、以下においては4.5.1で複合動詞の形式の面における全体的な性質について検討し、4.5.2では意味の面における全体的な性質について見る。

『日本語複合動詞リスト』全 3514 語の中で、このような全体的な性質を持つものは全部合わせると 806 語にも上り、全体のおよそ 23%を占めている。これは決して無視できる数字ではないため、従来の研究のように、例外として扱うのではなく、合成的な例とともに扱うことのできる理論的枠組が必要である。次節より、コンストラクション形態論を用いることで複合動詞の全体的な性質を説明できることを示す。

4.5.1 形式の面における全体的な性質

第三章で、複合語には複合語に埋め込まれた形以外では単独で存在しない拘束形態素がある場合があり、それを説明するにはコンストラクション形態論の概念を用いる必要があると論じたが、複合動詞においても同様の分析が適用できる。例えば、表 4-2 は、複合動詞でしか使われない動詞や動詞語形を示したものである。「思し召す」や「褒めそやす」などのように、現代日本語では単独で使用されない動詞、及び、「引っ張る」や「ひん曲げる」、「引っこ抜く」などのように、V1 が本動詞と思われる動詞の連用形ではないばかりか、単独で使われるときには見られない語形を示している。このような拘束形態素は日本語の語彙的複合動詞に多く存在している。

表 4-2 複合動詞における拘束形態素(計 536 語)

出現位置	拘束形態素 (特殊語形)	拘束形態素を含む複合動詞	合計 (例)
V1	忌み-	忌み嫌う	1
	生い-	生い茂る	1
	思す-	思し召す	1
	駆けずり-	駆けずり回る	1
	囲い-	囲い込む	1
	かち-	かち合う	1
	(かつ-)	かっぱらう	1
	かなぐり-	かなぐり捨てる	1
	かぶり-	かぶりつく	1

くり-	くり抜く	1
こじ-	こじ開ける	1
こびり-	こびりつく	1
さらけ-	さらけ出す	1
しがみ-	しがみつく	1
しけ-	しけ込む	1
支-	支払う	1
しゃくり-	しゃくりあげる	1
洒落-	洒落込む	1
知れ-	知れ渡る	1
透き-	透き通る	1
せき-	せき止める	1
せっ-	せつつく	1
せめぎ-	せめぎ合う	1
反っくり-	反っくり返る	1
たくし-	たくし上げる	1
たぐり-	たぐり寄せる	1
猛り-	猛り立つ	1
つい-	つえばむ	1
でっち-	でっち上げる	1
(出っ-)	出っ張る	1
なし-	なし崩す	1
並み-	並み居る	1
煮えくり-	煮えくり返る	1
にじり-	にじり寄る	1
(抜きん-)	抜きん出る	1
のけ-	のけぞる	1
のめり-	のめり込む	1

はやし-	はやし立てる	1
干-	干上がる	1
(引っこ-)	引っこ抜く	1
ひねくり-	ひねくり回す	1
ひれ-	ひれ伏す	1
ぶり-	ぶり返す	1
(振る-)	振る舞う	1
ふんぞり-	ふんぞり返る	1
ふん-	ふんだくる	1
ぼっ-	ぼったくる	1
へし-	へし折る	1
へばり-	へばりつく	1
まかり-	まかり通る	1
まくし-	まくし立てる	1
まとわり-	まとわりつく	1
むしゃぶり-	むしゃぶりつく	1
むせび-	むせび泣く	1
滅-	滅入る	1
めり-	めり込む	1
もぎ-	もぎ取る	1
守り-	守り立てる	1
(揺さ-)	揺さぶる	1
(揺す-)	揺すぶる	1
(寄-)	寄越す	1
揺り-	揺り動かす, 揺り起こす	2
すげ-	すげ替える, すげ変わる	2
(くっ-)	くっつく, くっつける	2
急き-	急き込む, 急き立てる	2

第4章 コンストラクションに基づく複合動詞の考察

はみ-	はみ出す, はみ出る	2
持て-	持て余す, 持て成す	2
えり-	選りすぐる, 選り分ける	2
おびき-	おびき出す, おびき寄せる	2
(かい-)	かい出す, かいつまむ	2
なぎ-	なぎ倒す, なぎ払う	2
ひっくり-	ひっくり返す, ひっくり返る	2
より-	選り出す, 選り抜く	2
ねじ-	ねじ伏せる, ねじ曲がる, ねじ曲げる	3
(吹っ-)	吹っかける, 吹っ切れる, 吹っ飛ぶ	3
分かち-	分かち合う, 分かち与える, 分かち持つ	3
入り-	入り浸る, 入り混じる, 入り交じる, 入り乱れる	4
のし-	のし上がる, のし上げる, のし歩く, のしかかる	4
ずり-	ずりあがる, ずり上げる, ずり落ちる, ずり下ろす, ずり下がる	5
仕-	仕上げる, 仕掛ける, 仕込む, 仕立てる, 仕留める, 仕向ける, 仕分ける	7
(突っ-)	突っかかる, 突っかける, 突っ切る, 突っ込む, 突っ立つ, 突っ走る, 突っ撥ねる, 突っ張る	8
召し-	召し上がる, 召し上げる, 召し抱える, 召し出す, 召し使う, 召し捕る, 召し取る, 召し寄せる	8
(引っ-)	引っかかる, 引っ搔く, 引っかける, 引っ被る, ひっくるめる, 引っ越す, 引っ込む, 引っ込める, 引っさげる, ひったくる, ひつつく, ひっぱたく, 引っ張る	13
繰り-	繰り上がる, 繰り上げる, 繰り合わせる, 繰り入れる, 繰り返す, 繰り替える, 繰り越す, 繰り込む, 繰り下がる, 繰り下げる, 繰り出す, 繰り延べる,	16

		繰り広がる, 繰り広げる, 繰り回す, 繰り戻す	
V2	-ふためく	慌てふためく	1
	-ほうける	遊びほうける	1
	-ぼれる	老いぼれる	1
	-習わす	言い習わす	1
	-ふらす	言いふらす	1
	-ながらえる	生きながらえる	1
	-ひしぐ	打ちひしぐ	1
	-召す	思し召す	1
	-延べる	繰り延べる	1
	-はだかる	立ちはだかる	1
	-こくる	黙りこくる	1
	-はむ	ついばむ	1
	-古す	使い古す	1
	-くわす	出くわす	1
	-じゃくる	泣きじゃくる	1
	-すかす	なだめすかす	1
	-そべる	寝そべる	1
	-支える	差し支える	1
	-つくばる	這いつくばる	1
	-巡らす	張り巡らす	1
	-連れる	引き連れる	1
	-痴れる	酔い痴れる	1
	-すぐる	選りすぐる	1
-すさぶ	吹きすさぶ	1	
-まける	ぶちまける	1	
-にじる	踏みにじる	1	
-しきる	降りしきる	1	

第4章 コンストラクションに基づく複合動詞の考察

-しめる	煮しめる	1
-そやす	褒めそやす	1
-わびる	待ちわびる	1
-透く	見え透く	1
-くびる	見くびる	1
-びらかす	見せびらかす	1
-初める	見初める	1
-とれる	見とれる	1
-まがう	見まがう	1
-囃す	持て囃す	1
-なます	焼きなます	1
-退く	立ち退く, 飛び退く	2
-交う	行き交う, 飛び交う	2
-こける	眠りこける, 笑いこける	2
-さす	言いさす, 読みさす	2
-あぐむ	打ちあぐむ, 攻めあぐむ	2
-のめす	打ちのめす, 叩きのめす	2
-盛る	出盛る, 燃え盛る	2
-たくる	ひったくる, ふんだくる, ぼったくる	3
-おおせる	隠しおおせる, 逃げおおせる, やりおおせる	3
-つかる	言いつかる, 仰せつかる, 見つかる	3
-あぐねる	打ちあぐねる, 考えあぐねる, 攻めあぐねる	3
-こがれる	思い焦がれる, 恋い焦がれる, 待ち焦がれる	3
-そびれる	言いそびれる, 行きそびれる, 買いそびれる, 見そびれる	4
-違える	思い違える, 掛け違える, 聞き違える, 差し違える, 取り違える, 寝違える, 履き違える, 踏み違える, 見違える, 読み違える	10

<p>-入る³²</p>	<p>開け入る, 歩み入る, 痛み入る, 討ち入る, 押し入る, 恐れ入る, 落ち入る, 驚き入る, 思い入る, 折り入る, 駆け入る, 感じ入る, 消え入る, 聴き入る, 聞き入る, 食い入る, くぐり入る, 込み入る, 差し入る, 忍び入る, 染み入る, 進み入る, 攻め入る, 絶え入る, 立ち入る, 突き入る, 付け入る, 溶け入る, 飛び入る, 取り入る, 眺め入る, 流れ入る, 泣き入る, 寝入る, 乗り入る, 這い入る, 恥じ入る, 引き入る, 吹き入る, 踏み入る, 見入る, 滅入る, 分け入る, 詫び入る, 割り入る</p>	<p>45</p>
<p>-込む</p>	<p>上がり込む, 遊び込む, 当て込む, 暴れ込む, 編み込む, 洗い込む, 合わせ込む, 生け込む, 射込む, 鑄込む, 入れ込む, 植え込む, 歌い込む, 撃ち込む, 打ち込む, 写し込む, 写り込む, 埋まり込む, 埋め込む, 売り込む, 描き込む, えぐり込む, 追い込む, 老い込む, 覆い込む, 送り込む, 押さえ込む, 抑え込む, 教え込む, 押し込む, 落ち込む, 落とし込む, 躍り込む, 踊り込む, 覚え込む, 思い込む, 泳ぎ込む, 織り込む, 折り込む, 折れ込む, 飼い込む, 買い込む, 抱え込む, かがみ込む, 書き込む, 搔き込む, 隠し込む, 掛け込む, 駆け込む, 囲い込む, 囲み込む, 貸し込む, 担ぎ込む, 噛み込む, 刈り込む, 枯れ込む, 考え込む, 気負い込む, 聴き込む, 聞き込む, 着込む, 刻み込む, 鍛え込む, 決め込む, 斬り込む, 切り込む, 切れ込む, 食い込む, 崩れ込む, 汲み込む, 組み込む, 食らい込む, 繰り込む, くるみ込む, くわえ込む, 消し込む, 削り込む, 蹴り込む, 転がり込む, 転げ込む, 刺さり込む, 差し込む,</p>	<p>251</p>

³² 「気に入る」「日の入り」「果汁入りのジュース」「飛んで火に入る夏の虫」などのイディオム的な表現にも「いる」という語形が見られるが、これも「いる」がイディオムに埋め込まれたため、現代日本語に生き残ったものだと考えられる。

	<p>誘い込む, 敷き込む, 仕込む, 沈み込む, 沈め込む, 忍び込む, 絞り込む, 仕舞い込む, 染み込む, 絞め込む, 締め込む, 閉め込む, しゃがみ込む, しゃれ込む, 洒落込む, 信じ込む, 吸い込む, すすり込む, 滑り込む, 住み込む, 刷り込む, 擦り込む, 座り込む, ずれ込む, 背負い込む, 咳き込む, 急き込む, 攻め込む, 注ぎ込む, 剃り込む, 倒し込む, 倒れ込む, 炊き込む, 叩き込む, 畳み込む, 立ち込む, 建て込む, 立て込む, 頼み込む, 食べ込む, 貯め込む, 溜め込む, たらし込む, 垂れ込む, 抱き込む, 騙し込む, 黙り込む, 散り込む, 使い込む, 突き込む, つぎ込む, 作り込む, 創り込む, 造り込む, 漬け込む, 付け込む, 突っ込む, 包み込む, つなぎ込む, 積み込む, 詰め込む, 吊り込む, 釣り込む, 連れ込む, 照り込む, 溶かし込む, 解け込む, 溶け込む, 綴じ込む, 跳び込む, 飛び込む, 泊まり込む, 採り込む, 取り込む, 摂り込む, 怒鳴り込む, 流し込む, 流れ込む, 泣き込む, 殴り込む, 投げ込む, なだれ込む, 悩み込む, 鳴らし込む, 握り込む, 逃げ込む, 煮込む, 縫い込む, 塗り込む, 寝かし込む, 寝込む, ねじり込む, 粘り込む, 眠り込む, 練り込む, 覗き込む, 飲み込む, のめり込む, 乗り込む, 這い込む, 入り込む, 掃き込む, 履き込む, 運び込む, 挟み込む, 走り込む, はたき込む, 話し込む, はまり込む, はめ込む, 払い込む, 張り込む, 貼り込む, 冷え込む, 引き込む, 弾き込む, 引きずり込む, 浸り込む, 引っ込む, 引っ張り込む, ひねり込む, 封じ込む, 拭き込む, 吹き込む, 含み込む, 老け込む, 塞ぎ込む, 伏せ込む, 踏み込む, 降り込む, 振り込む, 触れ込む, へたり込む, 放り込む, 掘り込む, 彫り込む, 惚れ込む, 舞い込む, 曲がり込む, 巻き込む, 紛れ込む,</p>	
--	--	--

	負け込む, 曲げ込む, 混ざり込む, 混じり込む, 混ぜ込む, 招き込む, 迷い込む, 丸め込む, 回し込む, 回り込む, 磨き込む, 見込む, むせ込む, めかし込む, めり込む, 申し込む, 潜り込む, 持ち込む, もつれ込む, 揉み込む, 盛り込む, 漏れ込む, 焼き込む, やり込む, 呼び込む, 詠み込む, 読み込む, 割り込む	
--	--	--

斎藤 (1992) では V1 が「引く」の複合動詞について分析しており、「引く」が複合動詞の V1 に埋め込まれた際の具体的な形式が「ひき」、「ひっ」、「ひん」、「ひっこ」という四種類があることについて、形態素を記述の基礎とする従来の形態論の立場から、これらの形式をどのように位置付けて扱うべきかが大きな問題点として残ると述べている。表 4-2 にある複合動詞の拘束形態素は単独では存在しないため、それ自体を語彙項目とは見なせない。また、「慌てふためく」や「黙りこくる」、「立ちはだかる」などにおいて、「ふためく」「こくる」「はだかる」などのような構成要素はこの特定の複合動詞にだけ見られるものである。このように、「込む」や「入る」など一部のものを除いて、拘束形態素の多くは結合できる動詞が極めて限られており、生産性がない。加えて、「～込む」は日本語語彙的複合動詞の中で最もタイプ頻度の高い V2 であるが、拘束形態素である。「～込む」のようなものをどう扱うのか、ということも問題となる。

コンストラクション形態論の観点から見ると、複合動詞はそれ自体が一つのコンストラクションとしてレキシコンに登録される。「おびく」や「そやす」など、かつて存在していた語は現代日本語では単独で使われなくなったが、「おびき出す」や「褒めそやす」などのように、複合動詞に埋め込まれた形で現代に生き残ったと考えることができる。同じように、「ひっ」、「ひん」、「ひっこ」という接頭辞が存在すると考えるよりも、「引っ張る」や「ひん剥く」、「引っこ抜く」などが[V1-V2]_vとしてそのままレキシコンに登録されていると考えるほうが妥当である。ひとまとまりとしてレキシコンに登録されていることによって、「引っ張る」や「ひん曲げる」、「引っこ抜く」の全体的な意味から、下線部と本動詞の「引く」が関連付けられる³³。V2「込む」や「入る」などのよ

³³ Akita (2012), 史 (2013) によると、V1 が音便形の複合動詞は非正式／ぞんざいに表現するという文体的性質など、合成的に説明できない性質を有する。

うな高いタイプ頻度があるものに関しては、[V-込む]_vや[V-入る]_vのようなコンストラクション的イディオムとしてレキシコンに登録されていると考えることができる。

4.5.2 意味の面における全体的な性質

複合動詞のひとまとまり性を示す性質は意味の面においても観察される。以下においては「合成性 (compositionality)」と「分析性 (analyzability)」という二つの概念に基づいて複合動詞の意味の面における全体的な性質を検討していく。

Langacker (1987) が述べているように、合成性と分析性という二つの概念は区別して考える必要がある。

Compositionality refers to the degree of regularity in the assembly of a composite structure out of smaller components. It is to be distinguished from analyzability, which pertains instead to the extent to which speakers are cognizant (at some level of processing) of the contribution that individual component structures make to the composite whole. (Langacker 1987: 457)

「取り締まる」のようなものは V1 と V2 の意味からアルゴリズム的に構築できるものではないため、合成性はなく、全体の意味から V1 と V2 の意味を理解するのも困難であるため、分析性も失われている。一方、「(気持ち)押し殺す」などは全体の意味から構成要素の意味を理解することができるため、分析的ではある。しかし、「??虫を押し殺す」の容認度が低いことから分かるように、「押し殺す」は単に V1 と V2 の意味を合成したものではない。したがって、「押し殺す」は、分析性はあるが合成性のない例だと言える。分析性があるものの中には「({事件/煙草} を)もみ消す」のように合成的なものも、「({??虫/気持ち} を)押し殺す」のような非合成的なものもある。それに対し、分析性がないものは必然的に合成性がないということになる。

以下では、4.5.2.1 にて合成性と分析性を失っている例、4.5.2.2 で分析的だが合成性を失っている例を取りあげて検討し、4.5.2.3 では特定の文脈が語に定着するという語用論的な現象を見ていく。

4.5.2.1 合成性と分析性を失っている例

複合動詞には「取り締まる」や「もてなす」のように、全体の意味を V1 と V2 の意味に還元できないものが少なからず存在している。このような例は合成的に全体の意味を導き出すことができないだけでなく、分析性も失っており、[V1-V2]_v 全体としてレキシコンに登録されていると考えなければならない。

分析的でないものには二種類ある。一つは(43)のように構成要素の一部がどういう意味的な役割を担っているのか認識できないため、分析できないものである。もう一つは(44)のように V1, V2 共にどういう意味的な役割を担っているのか認識できないものである。

(43) 下線部の構成要素がどういう意味的な役割を担っているのか認識できない例³⁴

あふれかえる, ありつく, ありふれる, 慌てふためく, 言いつかる, 言い張る, いがみ合う, 居直る, 入り組む, 入れ上げる, 打ち沈む, 打ち解ける, 打ち震える, 追い上げる, 追いかける, 老いぼれる, 押し黙る, 落ち合う, 落ちぶれる, 落ち延びる, 買い被る, かけ離れる, 掛け持つ, 食い止める, 存じ上げる, 通りすがる, 引っかかる, 引っかける, 待ち侘びる, 酔いしれる, 酔っ払う, 隠しおおせる, かなぐり捨てる, 出くわす, にじり寄る, のけ反る, のし上がる, のしかかる, まかり通る, 駆り立てる, 決めつける, 切り上げる, 切り返す, 食い違う, 差し押さえる, 差し控える, 詰めかける, 出かける, 問い合わせる, 取り掛かる, 取り囲む, 取り交わす, 取り決める, 取り組む, 取り消す, 取り壊す, 取り下げる, 取り仕切る, 取り調べる, 取り立てる, 取り繕う, 取り潰す, 取り巻く, 取り乱す, 成り済ます, ひっくり返る, ひっくり返す, 開き直る, 吹っ切れる, ぶちまける, 踏みにじる, ぶりかえす, へし折る, 褒めそやす, 舞い戻る, まくし立てる, 見限る, 見切る, 見せびらかす, 見積もる, 見舞う, むしゃぶりつく, 滅入る, めり込む, 持て囃す, やっつける,

³⁴ 分析的かどうかは絶対的な基準ではなく、個人差がある。例えば、「食い止める」は縄状のものがめり込む意味で「食う」を理解できる人なら、分析が可能となると思われる。

やり過ごす など

(44) V1, V2 共にどういう意味的な役割を担っているのか認識できない例

かっぱらう, 引っ越す, 取り締まる, 押しかける, 折り入る, 取り持つ, もてなす,
割り切る, 立て込む, 振る舞う, 見立てる, やり込める など

コンストラクショナルな考え方では, 複雑語でもそれ自体が構成要素から予測不可能な性質を持つ場合や, 使用頻度が高いときには, 一つのコンストラクションとしてレキシコンに登録される。

4.5.2.2 分析的だが合成性を失っている例

分析的でない例のほかにも, 分析的だが合成性を失っている例が存在する。例えば, 「立ち会う」や「落ち着く」などがそうである。これらの複合動詞の全体の意味は後述するように, 構成要素の V1 と V2 からアルゴリズム的に導き出すことはできないが, 全体の意味から V1 と V2 の果たす意味的な役割を理解することは可能である(複合語における合成性と分析性については Coulson 2001: 159-161 を参照)。「立ち会う」とは, 誰かが何かを行う特別な場に「立ち」それを見届けることである。そして, その場には他の誰かがいることが前提となっており, その意味で誰かと「会う」のだと理解される。同じように, 「落ち着く」は<精神状態が安定する>という意味だが, 何かが「落ちて」地面に「着く」と, 最終的には動きが止まり安定することからメタファー的にその意味を理解することができる(cf. Lindstromberg 2010: Ch. 16)。

従来, 合成的ではない例としては「取り締まる」のような分析的ではない例を挙げるが多かったが, 本研究では, 「立ち会う」「落ち着く」「引き立てる」「押し殺す」などの分析的な例も, 合成的でない例だと考える。このような例は日本語の語彙的複合動詞に多く存在しており, 「引き立てる」や「押し殺す」のように抽象的な意味でのみ用いられるもの(表 4-3), そして, 「立ち会う」や「落ち着く」のように, 特定の意味解釈のみを許すもの(表 4-4)に分けられる。これらの複合動詞データベースにおける用例数も合わせて示す。

表 4-3 抽象的な意味でのみ用いられる例(計 50 語)

複合動詞	用例数	例文
当てつける	438	{自分の無能さ/*ダーツ} を当てつける。
当てはまる	2148	彼の異常行動は認知症の症状に当てはまる。 ??パネルが枠に当てはまる。
歩み寄る	1651	{相手/*コンビニ} に歩み寄る。
打ち切る	2472	{契約/*頭} を打ち切る。
打ち消す	1859	{不安/*照明} を打ち消す。
埋め合わせる	1327	{損失/*壁の隙間} を埋め合わせる。
押し殺す	1538	{気持ち/*虫} を押し殺す。
押し進める	1415	{計画/*台車} を押し進める。
押し通す	1528	{主張/*排水管} を押し通す。
落ち入る	1120	{錯覚/*穴} に落ち入る。
落ちこぼれる	1274	{生徒/*水滴} が落ちこぼれる。
落ち込む	3279	気持ちが落ち込む。 *穴に落ち込む。
落ち着く	3063	心が落ち着く。 *風に飛ばされた洗濯物が地面に落ち着いた。
落ち着ける	1764	{心を/*地面に} 落ち着ける。
かいつまむ	495	{要点/*石} をかいつまむ。
食い下がる	1337	太郎は必死に食い下がった。 ??警察犬は犯人に飛びついて食い下がった。
振り返く	1396	{前首相/*桜} が振り返いた。
繰り広げる	1729	{戦い/*糸} を繰り広げる。
こき下ろす	1479	{ライバル製品/*稲} をこき下ろす。
締め切る	2589	{募集/*頸動脈} を締め切る。
擦り寄る	1501	{権力/*壁} に擦り寄る。
出し抜く	1508	{ライバル/*棒} を出し抜く。

第4章 コンストラクションに基づく複合動詞の考察

畳み掛ける	1133	{質問/*シート} を畳み掛ける。
立ち上げる	3143	{事業/*棒} を立ち上げる。
立て替える	1925	{借金/*棒} を立て替える。
突き詰める	1321	失敗の原因を突き詰める。 *隙間を綿で突き詰める。
突き止める	2039	犯人の居場所を突き止める。 *泳いでいる魚をモリで突き止める。
積み立てる	2225	{退職金/??レンガ} を積み立てる。
貫き通す	1541	{信念/*心臓} を貫き通す。
照らし合わせる	1528	{結果/??鏡} を照らし合わせる。
取り崩す	2245	{貯金/*積み木} を取り崩す。
寝返る	1683	敵に寝返る。 *彼は眠れずにベッドの上で何度も寝返った。
張り切る	1731	彼は勝負事になると俄然張り切る。 *ワイヤーを張り切る。
引き起こす	2860	{問題/*倒木} を引き起こす。
引き出す	2742	生徒からやる気を引き出す。 ??タンスから荷物を引き出す。
引き立てる	1781	{味/*倒れた柱} を引き立てる。
引き取る	3540	家族に見守られて、息を引き取った。 *縄をぐいと引き取った。
引き分ける	1920	ホームでライバルチームと引き分けた。 *動線を引き分ける。
ふっかける	1541	{値段/??息} をふっかける。
踏み切る	2554	値上げに踏み切る。 *アキレス腱を踏み切る。
振り込む	3384	{お金/*バット} を振り込む。
振り絞る	1457	{声/*タオル} を振り絞る。

見合う	2023	仕入れコストに見合う価格で販売する。 *二人はしばらくの間お互いを見合った。
向き合う	2789	現実と向き合う。 ?? 電車で対面の席に座った二人はしばらくの間無言で向き合った。
持ち上がる	1803	{問題/*荷物} が持ち上がる。
持ちかける	1841	{投資/*タオル} を持ちかける。
盛り上げる	2395	{合コン/??土} を盛り上げる。
盛り返す	1442	{勢力/*土} を盛り返す。
渡り合う	1513	世界の強豪と互角に渡り合う。 *二人は川を渡り合った。
割り出す	2042	{犯人/*クルミ} を割り出す。

表 4-4 特定の意味以外の解釈は成立しない例(計 47 語)

複合動詞	用例数	例文
言い立てる	1420	{ありもしないこと/*目標} を言い立てる。
言いつける	438	{用事/*条件} を言いつける。
言い寄る	1522	好きな子に言い寄る。 *役所に文句を言い寄る。
言い渡す	2014	{判決/*文句} を言い渡す。
居座る	1805	友達の家に住居する。 *一分間ベンチに住居した。
落ち合う	1617	{現地で/*崖から} 落ち合った。
思い込む	3303	自分が正しいと思込む。 *家族のことを思い込む。
思い知る	1870	{自分の限界/*答え} を思い知る。
思い詰める	1407	{人生/*内容} を思い詰める。
降り立つ	1744	彼は転勤で初めての地に降り立った。

第4章 コンストラクションに基づく複合動詞の考察

		*毎日バスに乗って自宅の前に降り立つ。
食い込む	2344	バッグが肩に食い込む。 *食べ物を胃に食い込む。
買い付ける	1971	フランスからワインを買い付ける。 *エアコンをリビングに買い付けた。
噛み合う	2405	{話/?野良犬} が噛み合った。
こき使う	1340	{部下/*槍} をこき使う。
差し入れる	528	ケーキを差し入れる。 *目薬を一滴差し入れる。
差し向ける	1517	{助けの手/?傘} を差し向ける。
立ち会う	2076	妻の出産に立ち会った。 *出先で偶然友人に立ち会った。
立ち寄る	1993	{銀行/*壁際} に立ち寄る。
食べ歩く	1467	全国のラーメン屋を食べ歩く。 *買ったばかりのアイスを食べ歩く。
使い回す	1664	{部品/*腕} を使いまわす。
付き合う	7408	{二人/*条件} は付き合った。
連れ込む	2044	彼女を部屋に連れ込んだ。 *妻をレストランに連れ込んだ。
連れ添う	1380	{病弱な夫/*飼い犬} と連れ添う。
出会う	5011	{運命の人/*被害} に出会う。
出直す	978	一から出直す。 *忘れ物をしたため、家を出直した。
出回る	2869	{インターネット/*道} に出回る。
出向く	2574	{裁判所/*良い方向} に出向いた。
出戻る	1936	離婚して実家に出戻る。 *忘れ物を取りに部屋へ出戻る。
取り寄せる	2018	他大学から資料を取り寄せる。

		*テーブルの上にあるリモコンを取り寄せる。
成り上がる	1336	{社長/*高校生}に成り上がる。
似合う	9115	{雰囲気/*親}に似合う。
寝込む	1629	風を引いて家で寝込んだ。 *布団に寝込む。
寝違える	1498	{首/*ベッド}を寝違える。
乗っ取る	2393	{会社/*自転車}を乗っ取る。
飲み歩く	1351	銀座のバーを飲み歩く。 *買ったばかりのジュースを飲み歩く。
引き合わせる	1515	{友人/*扉}を引き合わせる。
引き渡す	2303	{犯人/*縄}を引き渡す。
振り当てる	1056	{番号/*バット}を振り当てる。
振り付ける	556	{曲/*塩}を振り付ける。
触れ回る	1184	{周囲の人/*各地の文化}に触れ回る。
葬り去る	1388	{敵/*亡くなった父}を葬り去る。
見かける	2544	{不審者/*太陽}を見かける。
申し込む	5039	{決闘/*お礼}を申し込む。
持ち寄る	1687	{手料理/*不満}を持ち寄る。
呼びかける	3246	{協力/*名前}を呼びかける。
呼び込む	2137	客を店に呼びこむ。 *犬を家に呼びこむ。
割り込む	1588	{平均/*お皿}を割り込む。

表 4-3 にある例のように、抽象的な意味でしか用いられないという、複合動詞化に伴って起こる「意味の抽象化」とでも言うべき現象には程度性が見られる。例えば、『複合動詞データベース』を検索すると、「洗い出す」や「突き動かす」などは、複合動詞化されると、抽象的な意味で使用される傾向が高いが、まだ具体的な意味でも使われている(「洗い出す」は目的語を取る 950 例の中で具体的な目的語は「石」や「汚れ」などの 21 例のみ；「突き動かす」は 838 例中、「腰」や「粒子」など 27 例)。一方、「{味/*

倒れた柱}を引き立てる」や「{気持ち/*虫}を押し殺す」などにおいては、複合動詞化されると、もはや抽象的な意味でしか使われなくなる。

次に、表 4-4 のような例は、抽象的な意味でのみ使われるという制限を持たないが、ある特定の意味以外の解釈は成立しない。「言い渡す」を例に説明すると、もしこの複合動詞が合成的に形成されたものだとしたら、「*太郎は{情報/秘密/予定}を友人に言い渡した」というように言えてもいいはずなのに、「言い渡す」はもっぱら判決やリストラ、処分などのような公的な処置の場面で用いられ、V1 と V2 から合成可能な、他の意味は成立しない。同様に、「*道端で偶然友人に立ち会った」や「*忘れ物を取りに家に出戻った」とは言えず、これらの複合動詞は特定の場面(本研究で言うところのフレーム)と結びついている。

表 4-3 にあるものは本来具体的なことにも抽象的なことにも使えるという、程度性があるものであるのに対し、表 4-4 のものはどちらかと言えば最初からある特定の複合事象を表すために二つの動詞を選んで複合動詞を作ったと思われる。例えば、「言い寄る」は初めから求愛行為を表すために、求愛行為を最もよく表すことができる、何か甘い言葉を「言う」ことと、想っている人のそばに「寄る」ということから「言う」と「寄る」を選んで複合動詞化したと思われる。

このように、本来ならば合成可能な意味が成立しない、という特異な性質も合成的なアプローチからは説明できず、複合動詞(または複合語)が全体として持っている性質だと考える必要がある。表 4-3 と表 4-4 のような例は個別動詞レベルのコンストラクションとして考えられる³⁵。

複合動詞に見られるこのような非合成的な性質について、図 4-16 が示すように、複合動詞の産出と理解から説明しよう。

³⁵ 非合成的なものには、複合動詞全体の項が構成要素の項ではないものも見られる。例えば、「ラーメン屋を{*食べる/*歩く/食べ歩く}」「バーを{*飲む/*歩く/飲み歩く}」「夫と{*連れる/*沿う/連れ添う}」「掃除を{*言う/*つける/言いつける}」のように、これらの例は複合動詞全体の項構造が構成要素の項から作られるとする影山 (1993) や Fukushima (2005) などの説では説明できないものである。この問題は 5.4 節で改めて検討する。

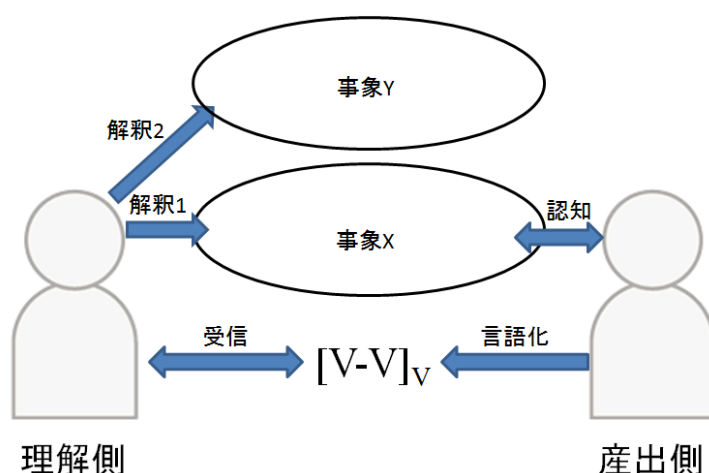


図 4-16 複合動詞における産出と理解

複合動詞の産出と理解において、産出側はある事象 X を認知して、「手段—目的」「原因—結果」などのような複合動詞のスキーマに合致するように二つの動詞を選んで言語化する(あるいは既に産出者のメンタルレキシコンに事象 X に対応する複合動詞がある場合はその複合動詞をそのまま用いる)。理解側はその複合動詞を受信し、自身のメンタルレキシコンから検索し、もし既に登録されているものであれば問題なく産出側が伝達しようとした事象 X を復元できる。しかし、複合動詞の場合は単純語と違って、受信者のメンタルレキシコンにその複合動詞が存在していない場合でも、構成要素となる動詞が語彙項目として既にレキシコンに登録されている場合には、構成要素の二つの動詞の意味とその意味関係に基づいて、全体の意味を合成的に解釈することが可能である(例:「折り殺す」)。その場合、理解側は必ず元の事象 X を復元できるとは限らず、ほかの合成可能な解釈によって、産出者の本来の伝達意図とは異なる事象 Y を誤って復元する可能性がある。これは複合動詞に限った話ではなく、複合語全般やイディオムにも言えることである。

さらに、用法基盤モデルの観点から考えると、言語社会の共通認識としてこのような意味変化が成立しているのは Bybee (2007, 2013) が述べているように、高い使用頻度によって支えられていると考えられる。「引き立てる」全 1781 例や「押し通す」全 1528 例などは使用頻度が高く、その特異な性質が言語社会のメンバーに共有されていると考えられる。対して、「引き破る」全 323 例や「押し沈める」全 144 例などのような低頻度のものにはこのような意味変化が見られない。これは、使用頻度が低いものだと言語

社会の共通認識として何らかの特異な性質を保持することはできないからだと思われる。

複合動詞データベースにおける全ての複合動詞の用例数の平均値は 1086.16 であるのに対し、表 4-3 と表 4-4 の複合動詞の用例数の平均は 2081 である。また、複合動詞全 3514 語を頻度順に並べて、頻度の高いグループと頻度の低いグループ(各グループ 1757 語)に分けると、高頻度グループにおける非合成的な複合動詞は 91 あるのに対し、低頻度のグループのほうは 6 語しかなく、非合成的な複合動詞は有意に高頻度であることが分かった($X^2(2) = 76.599, p < .001$)。

このことから、合成可能な意味が成立していない非合成的な例は、高い使用頻度によって支えられていることが伺える。表 4-3 と表 4-4 の中には、全ての複合動詞の平均値より下回っているものがあるが、その中の「当てつける」「言いつける」「差し入れる」「振り付ける」は、それぞれに対応する非常に確立された[V-V]_N(「言いつけ」「差し入れ」「振り付け」)の意味によって支えられていると思われる。「出直す」もやや平均値より低く、「出直し」という対応する[V-V]_Nを持っているが、「出直し」が「出直す」より確立されているとは言いがたい。また、「かいつまむ」は複合動詞データベースでは用例数が少なく、対応する[V-V]_Nも持たないが、これは複合動詞データベースが動詞の終止形と連用形を中心に収録しているためだと思われる。BCCWJ で検索してみると「かいつまむ」は 83 例あったが、全て「かいつまんで」というテ形で用いられていた³⁶。しかし、複合動詞データベースには「かいつまんで」という形が数例しか無く、ほとんどが「かいつまむ」という、終止形の例である。ただし、テ形という特殊語形の収録漏れを加味しても「かいつまむ」の用例数は平均より下回ると思われるため、「出直す」と併せて、さらなる考察が必要である。

このように、使用頻度の観点から見ると、「出直す」と「かいつまむ」という例外のように思われるものもあるが、全体の傾向としては非合成的なグループのほうが高頻度であることがはっきり現れている。したがって、複合動詞は少なくとも全体的な性質を有するものは、[V1-V2]_vとしてレキシコンに登録されている必要があり、その使用頻度

³⁶ ある特定の形でのみ用いられるというのはしばしば見られる現象で、他にも、もっぱら「飽き足りず」などのように否定形で用いられる「飽き足りる」や「食い入るように」という形で使われる「食い入る」などがある。このような特定の形でしか使われないということもコンストラクションの情報として保存する必要がある。

についての情報も保存されていると考えるのが妥当である。

4.5.2.3 特定のコンテキストの定着

これは、語用論の面において見られる現象だが、例えば、「押し倒す」のような例は、本来は単なる物理的な動作を表すものだったが、性的なコンテキストでの使用頻度が高いため(複合動詞データベースにおいて、目的語を取る 250 例中 184 例 [73.6%] が性的な意味を持つ)、「私はいきなり彼に押し倒された」のように、特定のコンテキストがない場合でも性的な意味を喚起し得る。「押し倒す」のこのような性的なコンテキストでの使用は特に若い世代に多く見られ、次のように用いられている。

(45) 女性だって、男性のちょっとした仕草やシチュエーションにときめいて、「この人なら押し倒されてもいい!」と思うことはあります。

(<http://news.mynavi.jp/articles/2014/06/05/moe2/>)

(46) 男性が思わず彼女を押し倒したくなった誘い方を聞きました。

(<http://woman.mynavi.jp/article/140427-48/>)

Bybee (2010) が述べているように、ある言語表現は特定のコンテキストにおいて頻繁に使用されることで、コンテキストの意味がその言語表現と結びつくことがある。

[F]or semantic or pragmatic shifts, repetition within certain contexts leads to new associations of the expression with a meaning ... (Bybee 2010: 50)

「押し倒す」のようなものはまだ合成的な意味を維持しており、何かを押すことでそれを倒すという動作であれば場面を問わず使用することができる。この点において、「押し倒す」は「突き動かす」や「洗い出す」などに近いが、「突き動かす」や「洗い出す」などは具体的な意味に対し抽象的な意味が優勢であるのに対し、「押し倒す」は多くの場面の中で、ある特定な場面において頻繁に用いられるものだと思われる。「押し倒す」

は特定の場面との結びつきという意味では表 4-4 の「言い寄る」と似ている。しかし、前述したように、「言い寄る」などは最初からある特定の場面を表すために作られたものと思われるのに対し、「押し倒す」は単に＜何かを押すことで倒す＞という物理的な動作を表すだけのもので、特定の場面を表すために作られたものではないと思われる。また、「言い寄る」などは特定のフレームと結びついており、意味の変化が生じている。それに対し、「押し倒す」は特定のフレームに限定されるというほどの強い制限はなく、特にコンテキストが指定されていない場合にデフォルトの場面として性的なコンテキストが強く喚起されるというのに留まっている。この点において特定のコンテキストの定着というのは語用論的な性質であると考えべきである。

このような特定のコンテキストの定着も、それぞれの複合動詞に固有の非合成的な性質であり、個別動詞レベルのコンストラクションが有する特異な性質として考えるべきである。

4.6 レキシコンにおける語彙の競合

前節では全体的な性質を有する複合動詞について見てきたが、ここでは合成的な複合動詞でも使用頻度が高いものは一つのまとまりとしてレキシコンに登録されていることを支持する「語彙の競合(competition, Aronoff 1976, 2013, Aronoff & Lindsay 2014, Clark 1987, Caballero & Inkelas 2013 を参照)」という現象を取りあげる。

Matsumoto (2011) が指摘したように、複合動詞の可能な結合パターンは「語彙的経済性の原則 (the principle of lexical economy)」によって制限されている。語彙的経済性の原理はある語形がよりイレギュラーな、あるいはよりシンプルな形式と同じ意味である場合は、不必要なものとして排除される、というものであり(cf. *goed (=went), *pale red (=pink)), 形態論においてよく知られた現象である(Aronoff 1976, Clark 1987, Kiparsky 2005 など)。複合動詞の場合は同じ意味を持つ単純動詞、あるいは「より確立された(more fixed)」複合動詞によってブロックされるという。例えば、「*駆け入る」はより確立された「駆け込む」によって、また、「走り上がる」は「駆け上がる」によってブロックされる、というものである。Matsumoto (2011) はさらに、「*歩き上がる」が存在しないのも、人間にとって歩くことが普通の移動方法であることから、単純動詞「上がる」が歩

く場合に使われることが多く、そのために「*歩き上がる」がブロックされるとしている。

このように、本来ならば意味的にも形式的にも成立可能な語が既存な語によってブロックされるというのは語彙の競合によるものである。そして、語彙の競合が起こるのは複合動詞が一つのまとまりとしてその使用頻度の情報と共にレキシコンに保存されていることを示している。例えば、先の「*走り上がる」の説明は、「駆け上がる」がひとまとまりとしてレキシコンに登録されていないと説明できない。単独動詞で考えると、BCCWJでの「駆ける」の用例数は765であるのに対し、「走る」は14549例もあり、単独動詞ではむしろ「走る」のほうが遥かに使用頻度が高い。しかし、「走り抜く」「走り出る」が存在するのに「*駆け抜く」「*駆け出る」は存在しなかったり、「駆けつける」「駆けのぼる」があるのに「*走りつける」「*走りのぼる」はなかったりする。複合動詞におけるこのような不規則な分布は単独動詞の合成という観点からでも、前項動詞としての使用頻度の差という観点からでも説明できず³⁷、最初からひとまとまりとして複合動詞全体が使用頻度と共に記憶されていると考えなければならない³⁸。

以上のような例は語彙的経済性の原則に基づいて説明することが可能であるが、それでは説明できない例が存在する。例えば、「走り回る」と「駆け回る」、「走り抜ける」と「駆け抜ける」、「走り去る」と「駆け去る」、「走り寄る」と「駆け寄る」のような例は「走り～」と「駆け～」というパターンが両方同時に存在するため、語彙的経済性の原則では説明できない。このような現象は一定以上の頻度があるものは、合成的なものを含めて、全てレキシコンに登録されるという、完全語彙項目記載理論(full entry theory)型のレキシコンを支持している。

松本 (2011) が述べているように、『日本語語彙大系』では2353語の単純動詞があるとされているため、理論上では500万以上(2353*2352)の複合動詞が存在するという

³⁷ もしかしたら、「走る」と「駆ける」の細かな意味の違いからこのような使い分けが生じている可能性もあるが、それでも言語話者がオンラインで「走る」と「駆ける」の意味の違いを判断して使い分けしているとは考えにくく、通時的な言語使用の中で徐々に形成された使い分けである。そのため、「走り～」と「駆け～」の複合動詞(一定の頻度があるもの)はひとまとまりとしてレキシコンに登録されていると考えなければならない。

³⁸ 使用頻度の高い語のほうがより早く知覚されるという「語彙頻度効果(word frequency effect)」も頻度情報が保存されていることを支持している(Grainger & Jacobs 1996, McClelland & Rumelhart 1981 など)。

ことになるが、実際には数千の複合動詞しか存在していない。このように考えると、存在しない語を規則で排除するよりも、実際にあるものをレキシコンに登録したほうが合理的だと言える。例えば、何かを除去することを表す「*(シミを)焼き消す」「*(キズを)磨き消す」「*(火を)叩き消す」「*(雪を)溶かし消す」「*(ロウソクを)振り消す」「*(汚れを)こすり消す」「*(汚れを)削り消す」は全て存在しない組み合わせだが、これらを全て排除できる規則があるとは考えにくい。

以上のように、複合動詞というものは全体的な性質を有するものだけでなく、合成的なものであっても、一定の頻度があるものはひとまとまりとしてレキシコンに登録されていると考えるのが妥当である。

4.7 まとめ

本章では、コンストラクション形態論のアプローチから、複合動詞を語レベルのコンストラクションとして考え、日本語の語彙的複合動詞の全体像を階層的スキーマネットワークで捉えることができることを示した。複合動詞に見られる全体的な性質については個別動詞レベルのコンストラクションの固有の性質として考えることで説明でき、生産的に語を創出できるという合成的な一面は、部分的な空きスロットのあるコンストラクション的イディオムに意味的に適合する動詞を当てはめることで新しい複合動詞を作り出すと説明できる。さらに、松本 (2011), Matsumoto (2012) と同様に、複合動詞の意味関係をコンストラクションとして見なし、日本語複合動詞における一般的な結合制約である主語一致の原則を日本語複合動詞の階層的スキーマネットワークの最上位に位置するスーパースキーマとし、それに反するものは下位スキーマを形成していると考ええる。そして、意味関係のコンストラクションの認知的な動機付けについて考察し、従来分類とは異なる「因果関係」、「因果関係に基づく必然的な共起性」、「並列関係」という3つのタイプがあることを主張した。これによって、従来の「同時性」という制約では排除できなかった「*笑い歩く」「*立ち読む」「*立ち食う」などの例をふるい落とすことが可能になった。

加えて、本研究は V1 や V2 が単独で使用される時には見られない様々な全体的な性質について見てきた。このような複合動詞の存在は、我々が複合語を産出・理解する際

に、合成的と全体的という二つの異なるストラテジーを意味の透明性や慣習化の程度によって使い分けていることを示唆している。

これは全ての複合動詞の意味がその構成要素から導き出せないという主張ではなく、合成的と全体的という二つの理解の方法が存在し、複合語の意味の透明性や慣習化の度合いによって異なる理解方式を取る。そして、両者ははっきりとした境界線があるわけではなく連続体を成すと考える。重要なのはトップダウン型のレキシコンでは全体的な性質が説明できないのに対し、ボトムアップ型のほうは全体的な性質も合成的な性質も問題なく説明できるということである。このことから、多くの従来の研究のように、inputから合成的に複合動詞を作るのではなく、コンストラクション形態論に代表されるoutput-orientedなアプローチから分析するというパラダイムシフトが必要である。

第5章 意味フレームに基づく複合動詞の考察*

本章ではフレーム意味論(Fillmore 1977, 1982, 1985a, Fillmore & Baker 2010, Goldberg 2010 など)に基づき、動詞の意味構造として豊富な百科事典的知識を含む「意味フレーム」を設定する。そして、[V1-V2]_v型の語彙的複合動詞は分析的でない例も含めて、全て一つの「意味フレーム」を喚起し、その中で、分析的な例はV1とV2の表している事象が整合性の取れた形でその「意味フレーム」を構成している必要がある、という意味的な制約があると主張する。これは構成要素のV1とV2から全体の意味フレームが作られるという主張ではない。意味的に透明な複合動詞は構成要素から合成的に全体の意味を作り出すことが可能だが、全体的な性質を有するものや頻度の高いものは複合動詞全体が既にある意味フレームと結びついている。そして、V1とV2が全体の意味フレームを構成していると理解できるときに、複合動詞が分析的であると言える。

意味フレームという概念を用いることで、主に以下の4つの問題点を解決するのが本章の目的である。

1) 複合動詞の適格性

「叩き壊す」と「*撫で壊す」の容認度の違いはどこから来るのか、そして、言語学的にどのように説明するべきなのか。

2) 意味関係の選択

複合動詞として結合できるV1とV2は特定の意味関係にあることが知られているが、二つの動詞の組み合わせは、どうして特定の意味関係でのみ可能になるのか？

3) 複合動詞における多義語の解釈

複合動詞のV2が、〈取得する〉と〈除去する〉の両義を持つ「取る」のように、多義語であった場合に、どの意味で複合動詞として成立するのか。

* 本章の一部は陳 (2012, 2013, 2014a), Chen (2014, to appear) を加筆修正したものである。

4) 構成要素にない項の出現

「ラーメン屋を{食べ歩く/*食べる/*歩く}」において、構成要素の項ではないものが複合動詞全体の項として実現している。これをどう説明するのか。

本研究は、上述のような疑問を中心とする、複合動詞における様々な問題点を解決するためには、意味フレームが必要であると主張する。

本研究は動詞の意味フレームに、動詞が表す行為と関連する事象(様態, 結果, 手段, 原因, 前提的背景, 目的など)を含めることにより、複合動詞を形成する V1 と V2 の意味フレームの間に存在する意味的な一致性を捉えられると考える。第三章で述べたように、近年の認知科学の研究によって、概念というものは独立して保存されるのではなく、それが存在・発生する状況において記憶され、概念が使用されるときには、その背景にある状況も一緒に呼び起こされるということが分かっている(Barsalou 2003, Yeh & Barsalou 2006, Simons et al. 2008 など)。関連事象はこのような「状況的認知(situated cognition)」によって動詞が表す概念と結びついていると考えられる。

動詞の意味にそれが表す行為と関連する事象が結びついている、ということについて詳しく見ていくために、(1)を例に説明しよう。

- (1) a. _____ ために節約する。
 b. _____ によって節約する。

(1)は「節約する」という動詞を用いた文だが、その空欄の部分にどのようなものが入るのかを考えてみると、(1a)は「学費を払う」または「ローンを返済する」、「海外旅行に行く」、「車を買換える」などが思い浮かぶだろう。(1b)については、「光熱費を減らすこと」や「自炊すること」、「保険料を見直すこと」などが想定できる。(1a)は関連事象の【目的】であり、(1b)は関連事象の【手段】である。このような関連事象の中に、実際どのような情報が含まれるのかは個人差がある。例えば、タバコを吸う人であれば(1b)に「タバコの量を減らすこと」という節約方法を思い浮かべるかもしれない。しかし、同じ社会に属するメンバーであれば、関連事象に関する情報の大部分は共通していると考えられる。重要なのは、このような関連事象は無制限に何でも含まれるわけでは

ない。「??歩くために節約する」や「??泣くために節約する」、「??自炊するために節約する」とは言えず、「??泳ぐことによって節約する」や「??笑うことによって節約する」、「??喫煙することによって節約する」とも言えないように、ある動詞と結びつくことのできる関連事象には制限がある。動詞の表す概念とその関連事象が何らかの形で結びついていると考えなければ、このような現象を説明できない。5.2 で説明するように、本研究はこのような関連事象が動詞の意味構造に含まれていると考えることで、複合動詞の意味フレームの整合性を説明できる。

また、従来の研究では、特定の複合動詞が成立しているかどうかを議論する傾向があったが、本研究では複合動詞が成立しているかどうかということよりも、どのような場面であれば(どのような背景フレームがあれば)成立できるのかについて考察する。第四章で見てきたようなコンストラクショナルな制約によって、完全に成立できないと判断されるものもあるが、適格性の判断にかかわる問題の多くは意味的なもので、容認されるか容認されないか、という二分法的なものではなく、容認度の高いものから容認度の低いものまでの連続的な適格性があると考えられる。

本章では、5.1 において、フレームを用いて複合語を分析した先行研究を紹介する。5.2 では、複合動詞の意味フレームレベルの制約について見る。5.2.1 で本研究が主張する複合動詞の意味的な結合制約について述べる。5.2.2 は意味フレームを用いることで複合動詞の結合制限や類義表現の使い分けを説明できることを示すために、<ある対象を捉えることに失敗する>ことを表す「～おとす」「～もらす」「～のがす」を一つの事例研究として示す。5.2.3 で、複合動詞における多義語の解釈という問題について、「～取る」を例に説明する。5.3 において、背景フレームとフレーム要素の果たす役割について述べる。5.3.1 では複合動詞における背景フレームの重要性を示すために、「勝つ」が喚起する「〈競技〉フレーム」に基づいて分析を行う。背景フレームは文化に基づくものであり、このような背景フレームと文化との関わりについては5.3.2 で検討する。5.3.3 で複合動詞の意味形成において、「事象参与者」という項として実現されるとは限らないフレーム要素が関わることを示し、5.3.4 では「(卵を)割り入れる」という表現を元に、複合動詞の動的な意味形成のプロセスを見ていく。5.4 においては複合動詞の項形成の問題について、フレーム要素を分析のツールとして用いることで説明する。5.5 で、複合動詞の適格性について、「耳馴染み度」という概念を取り入れることで説明す

る。最後に 5.6 にて本章のまとめを行う。

5.1 フレームを用いた複合語の先行研究

本章では意味フレームという豊かな意味構造によって複合動詞の意味の面における様々な問題点を解決できることを示すことが目的であるが、フレームのような概念を用いて複合語を分析するという試みは Ryder (1994) に既に見られる。Ryder (1994) は複合語の産出と理解のためには二つの語が一つの共通するスキーマ(ここではフレームやスクリプト(script)と同様に知識の構造を指す)を持つ必要があると主張した。

[W]e can say in order to establish a connection between component structures, it must be possible to establish a correspondence between a schema connected with each of the two structures, as in the two nouns in a noun-noun compound. (Ryder 1994: 72)

例えば, *tiger hunter* という複合名詞は二つの構成要素に共通するハンティングという事象スキーマ(事象フレーム)によって「虎を狩るハンター」として理解されることもあれば, 共通する特徴スキーマ(特徴フレーム)によって「虎のように凶暴なハンター」としても理解されうるという(Ryder 1994: 79)。

関連して, Lanneau (2014) は英語の新奇な複合名詞の解釈には, ある特定の背景的な知識が大きく関わることを実験的な手法で証明した。その実験とは, *crab shirt* という耳慣れない複合名詞の意味が何であるのかを被検者に問うというものである。実験ではまず被検者をそれぞれ人間グループ, ペンギングループ, ロブスターグループと名付けた3つのグループに分けた。各グループの被検者には *crab shirt* という語を提示する前に, 予め *Michael* と *Alice* という登場人物の日常生活に関する文章を読んでもらう。この文章はグループ間で基本的に共通しているが, グループごとに一部の表現が異なっている。例えば, “*Michael and Alice are _____*” という文の下線部だが, 人間グループは“*good friends*”が入るのに対し, ペンギングループは“*two penguins*”で, ロブスターグループでは“*two lobsters*”である。また, 人間グループでは“*Michael and Alice work near the bay*”という文は, ロブスターグループでは“*Michael and Alice work in the bay*”となるように, そ

それぞれのグループごとに、異なる生物の生活として解釈されるように工夫した文を読んでもらう。このような背景的な知識を被検者に与えた後に、*crab shirt* が何を意味するのかを聞いた。すると、結果として、*crab shirt* を「カニが着ているシャツ」として解釈した人の比率に大きな違いが見られた。「カニが着ているシャツ」と解釈した被検者は、人間グループが 28 人中 0 人であったのに対し、ペンギングループは 4/29 でロブスターグループは 11/32 であった。この研究は概念ブレンディング理論(Conceptual Blending, Fauconnier & Turner 1998, 2002, Coulson 2001 を参照)を実証的にサポートするために行われたものだが、複合名詞の解釈において背景的な知識が大きく関与していることを示している点において、フレーム意味論を支持するものでもある。

以上は複合名詞についての話であるが、複合動詞も同じように考えることが可能である。例えば、Goldberg (2010) は複数の事象が一つの動詞として表現されるには、それらの事象が一つの整合性のある意味フレーム(ある語の意味あるいはその語が喚起するもの)を構成する必要があると主張した。

[T]he only constraint on the combination of events designated by a single verb is that the events must constitute a coherent semantic frame. (Goldberg 2010: 39)

この主張は単一の動詞についてのものであるため、複合動詞には言及していないが、本研究は複合動詞においても同様の制限が存在すると考える³⁹。すなわち、複合動詞として成立するには、V1 と V2 が一つの整合性のある意味フレームを構成する必要がある、ということである。

5.2 意味フレームレベルの制約

³⁹ ただし、複合動詞の場合は意味フレームによる制約が唯一の意味的な制約ではなく、語彙的経済性(lexical economy)によっても制約を受ける。Matsumoto (2011) が述べているように、複合動詞は同じ意味を表す単一動詞、もしくはより確立された複合動詞によってブロックされる。例えば、「*歩き上がる」という複合動詞は「上がる」という単一動詞によって排除され、「*駆け入る」もより確立された「駆け込む」によって排除される。また、語彙的複合動詞の意味フレームは V1 と V2 から常に合成的(compositional)に導き出せるわけではなく、「落ち着く」などの意味的に不透明な複合動詞は[V1-V2]_vという複合動詞全体で、ある意味フレームと結びついている。

5.2.1 動詞の意味フレームと複合動詞の意味的な結合制約

本研究では動詞の意味フレームに基づいて、語彙的複合動詞には以下のような意味的な制約があると主張する。

(2) 語彙的複合動詞の意味的な制約

- 1) 複合動詞の意味関係のコンストラクション(「原因—結果」型, 「手段—目的」型, 「様態—移動」型など)によって指定される V1 と V2 の意味フレームの関連事象の間に、意味的な一致性がなければならない。
- 2) V1 の V2 の意味フレームにおいて、不整合が生じてはならない。

意味的な一致性が必要であるということ、そして、不整合が生じてはならないということは、両方複合動詞が成立するための必要条件である。本節においては、まず複合動詞における意味的な一致性とは何か、ということについて説明する。意味的な制約の中で、意味的な一致性という条件を満たしても、V1 と V2 の意味フレームの間に何らかの不整合が生じる場合は複合動詞として成立できないが、この点については次節で取り上げることにする。

動詞の関連事象には【原因】、【結果】、【手段】、【目的】、【理由】、【前提的背景】、【様態】、【感情】、【感覚】、【付随音】など、多くのものが含まれるが、V1 と V2 の関連事象の間に意味的な一致性があれば複合動詞として成立するというわけではない。前述のように、複合動詞の V1 と V2 の意味関係は「手段—目的」型, 「原因—結果」型などに限られており、本研究でいう意味的な一致性はこのような特定の意味関係によって指定されている。意味的な一致性がどの関連事象で見られるのかは、V1 と V2 の動詞の型によって、ある程度決まってくる。

例えば、(3)のような「叩き壊す」について考えよう。

- (3) 吉川は、怒りのあまり、刃引剣で柱や壁を叩き壊していく。

(BCCWJ 宮本昌孝 『夕立太平記』)

「叩き壊す」はその形式([他動詞-他動詞]_V)から、手段-目的型のコンストラクション[V_{i-TR}-V_{j-TR}]_V↔[E_j BY E_i]と判断される⁴⁰。そのため、手段-目的型のコンストラクションが指定する特定の意味的な一致性があるかどうか鍵になってくる。手段-目的型は、表5-1のように、V1の【目的】とV2の中心事象、そして、V2の【手段】とV1の中心事象において意味的な一致性がなければならない、という指定を持つ(表における網掛けになっている部分と四角で囲まれている部分は意味的な一致性があるところを表している)。

表5-1 手段-目的型が要求するV1とV2の意味的一致性

	V1	V2
中心事象
事象参与者	【...】;【...】;【...】;【...】;...	【...】;【...】;【...】;【...】;...
関連事象	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">目的</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">(.....;</div> <div style="margin-right: 5px;">.....;</div> <div style="margin-right: 5px;">.....;</div> <div style="margin-right: 5px;">.....;...)</div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">⋮</div>	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 5px;">手段</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-right: 5px;">(.....;</div> <div style="margin-right: 5px;">.....;</div> <div style="margin-right: 5px;">.....;</div> <div style="margin-right: 5px;">.....;...)</div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">⋮</div>

V1「叩く」は、関連事象の【目的】として、(【対象】を破壊するため)や(【対象】を变形させるため)などが含まれているが、〈破壊〉という背景フレームにおいては、(【対象】を破壊するため)という要素が喚起される。これは、V2「壊す」の中心事象と一致している。一方、V2「壊す」のフレーム要素の関連事象【手段】にも様々な情報が含まれているが、その中の一つに(【対象】に打撃を与えること)という要素が含まれる。これはV1「叩く」の中心事象と意味的に一致している。したがって、表5-2のように、「叩き壊す」は、〈破壊〉フレームという背景フレームにおいて、意味的な一致性が見られるため、複合動詞全体として整合性の取れた意味フレームを構築している。さらに、この意味フレームは手段のスキーマと一致する。

⁴⁰ 第三章で検討したように、自動詞や他動詞のような文法的なカテゴリーも抽象的なものではあるが、形式として捉えられる。

表 5-2 「叩き壊す」の意味フレーム

[tataki _{i-TR} -kowasu _{j-TR}] _V ↔[E _j BY E _i] 背景フレーム：〈破壊〉フレーム	
中心 事象	【行為者】が【道具(手)】を用いて【対象】に打撃を与える_{v1} ことによつて【対象】の機能を失わせる_{v2}
事象 参与者	【行為者】: 【対象】に対して意図的な破壊行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【対象】: 【行為者】の働きかけを受けて本来の機能を失うもの。 【道具(手)】: 【行為者】が【対象】の機能を失わせるために用いる手または手に持つもの。
関連 事象	目的 (【行為者】の怒りを発散するため;【対象】に入っている内容物を取り出すため;…) 前提的背景 (【対象】は何かの性能を持っている;…) 結果 (【対象】の機能が失われる;…) 理由 (【行為者】に何か不満があったから;…) ⋮
	V1「叩く」
中心 事象	【行為者】が【道具(手)】を用いて【対象】に打撃を与える
事象 参与者	【行為者】: 【対象】に対して意図的な破壊行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【対象】: 【行為者】の働きかけを受けるもの。 【道具(手)】: 【行為者】が【対象】に働きかける際に用いる手または手に持つもの。
	V2「壊す」
中心 事象	【行為者】が【道具】を用いて【対象】の本来持っていた性能を失わせる
事象 参与者	【行為者】: 【対象】に対して意図的な破壊行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【対象】: 【行為者】の働きかけを受けて本来の機能を失うもの。 【道具(手)】: 【行為者】が【対象】の機能を失わせるために用いる手または手に持つもの。

関連 事象	目的 (【対象】を破壊するた め;【対象】を変形させ するため;…) :	手段 (【対象】に打撃を与えること で;【対象】に圧力を与える ことで;…) :
----------	---	---

「叩く」は【目的】として様々な事象を含むが、V2「壊す」の中心事象と一致しているものがリストに含まれていれば、意味的な一致性がある。また、「壊す」は【手段】として様々な事象を含むが、V1「叩く」の中心事象と一致するものがリストに含まれていれば、意味的な一致性がある、ということになる。

一方、「*撫で壊す」においては、「撫でる」が【目的】として(【対象】を破壊するため)というのを含まないと思われるため、このような意味的な一致性が存在しない。したがって、この複合動詞は成立できない。

意味フレームにおける関連事象にどのような情報が含まれているかはある程度個人差が存在し、その差によって複合動詞に対する容認度が異なる場合がある。例えば、「?舐め落とす」はある特定の知識を有する人でなければ、落とすこと的手段として舐めるという状況(「舐め落とす」が整合的となる背景フレーム)を思い浮かべることが難しいため、意味フレームにおいて整合的な意味的一致性がなく、容認度は低い。しかし、もし馬や牛が子供を産んだあとに、子供の体が冷えてしまわないように、すぐにその子供の体について羊水などを舐めて取り除くという習性があることを知っていれば、「体について羊水を舐め落とす」というように使用することが可能となる。このように、ある人にとっては容認度が低い複合動詞であっても、特定の背景的な知識を有する人なら容認度の高いものとして成立できる。新しい背景的な知識によって動詞の表す概念の関連事象が追加され、そして複合動詞の容認度が上がるのである。このことにおいても、関連事象の実在性を見ることができる(背景フレームについては 5.3 で詳しく説明する)。

第二章の先行研究のところ、従来の LCS には動詞が指し示す動作や論理的に含意する結果しか意味構造に含まれていないため、「～散らす」などの結合制限を説明することができない、と述べた。それに対し、本研究では次のように説明される。「～散らす」と共起するのは、関連事象の【目的】の一つとして、「散らす」の中心事象が含まれている動詞である。関連事象の【結果】や【目的】などは典型的に起こりうることで

あればよい。(4)の「蹴散らす」については以下のように考えられる。

(4) 川床の砂利を蹴ちらし暴れた。 (BCCWJ 鎌田敏夫『新・里見八犬伝』)

「蹴る」はその目的の一つとして、対象を散乱させることを含んでいる。また、「蹴る」の中心事象も、「散らす」の手段の一つに挙げられる。つまり、「蹴散らす」などが成立できるのは、表5-3のように整合的な意味的一致性が存在するからである⁴¹。

表5-3 「蹴散らす」の意味フレーム

[ke _i -TR-tirasu _j -TR] _V ↔[E _j BY E _i] 背景フレーム：〈散乱〉フレーム							
中心 事象	<u>【行為者】が【足】で【全体的な対象】に衝撃を与える_{v1}ことによって【全体的な対象】を散乱させる_{v2}</u>						
事象 参与者	<p>【行為者】：【全体的な対象】に対して意図的に散乱させる行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【全体的な対象】：本来はまとまった状態にあるが、【行為者】の働きかけを受けて分解するもの。</p> <p>【全体の一部】：【行為者】の働きかけによって【全体的な対象】が分解されたあとのもの。</p> <p>【足】：動物や人の、胴体から分かれ、体を支えたり歩行に使ったりする身体部位。</p>						
関連 事象	<p>前提的背景 (【全体的な対象】がまとまった状態にある；…)</p> <p>目的 (鬱憤を晴らすため；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>						
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">V1 「蹴る」</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">V2 「散らす」</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">中心</td> <td style="text-align: center;"> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;"><u>【行為者】が【足】で【対象】に衝</u></td> <td style="width: 50%; text-align: center;"><u>【行為者】が【全体的な対象】を散</u></td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	V1 「蹴る」	V2 「散らす」	中心	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;"><u>【行為者】が【足】で【対象】に衝</u></td> <td style="width: 50%; text-align: center;"><u>【行為者】が【全体的な対象】を散</u></td> </tr> </table>	<u>【行為者】が【足】で【対象】に衝</u>	<u>【行為者】が【全体的な対象】を散</u>
V1 「蹴る」	V2 「散らす」						
中心	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;"><u>【行為者】が【足】で【対象】に衝</u></td> <td style="width: 50%; text-align: center;"><u>【行為者】が【全体的な対象】を散</u></td> </tr> </table>	<u>【行為者】が【足】で【対象】に衝</u>	<u>【行為者】が【全体的な対象】を散</u>				
<u>【行為者】が【足】で【対象】に衝</u>	<u>【行為者】が【全体的な対象】を散</u>						

⁴¹ 「戦車が敵を蹴散らした」のように、〈追い払って散り散りにする〉という意味もあるが、ここでは「川床の砂利を蹴散らした」のように、実際に蹴るという動作によって何かを散乱させる意味について分析する。

事象	撃を与える	乱させる
事象 参与者	【行為者】:【対象】に対して意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【対象】:【行為者】の働きかけを受けけるもの。 【足】:動物や人の、胴体から分かれ、体を支えたり歩行に使ったりする身体部位。	【行為者】:【全体的な対象】に対して意図的に散乱させる行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【全体的な対象】:本来はまとまった状態にあるが、【行為者】の働きかけを受けて分解するもの。
関連 事象	目的 (【対象】を散乱させる;【対象】を破壊させる;…) 理由 (不満があったため;…) : :	手段 (【全体的な対象】に【足】で衝撃を与えることで; 【全体的な対象】をばらまくことで;…) 前提的 (【全体的な対象】がまとまった状態にある;…) : :

一方、「*握り散らす」、「*運び散らす」などが成立できないのは、それぞれの【目的】、【手段】の関連事象と中心的事象の間に整合的な意味的一致性がないからだと説明できる。意味的一致性がない、あるいは意味フレームにおいて不整合が生じる場合は複合動詞として結合できない⁴²。

先に指摘したように、V1「こする」はV2「つける」ともV2「落とす」とも結合できる。

⁴² 分析的でない例は V1V2 が一つの全体として個別動詞レベルのコンストラクションとして成立するため、この制限を受けない。逆に言えば、全体が一つの個別動詞レベルのコンストラクションとして成立していないものは、この制限に適合しなければ複合動詞として結合できない。

- (5) a. 指でペンキを壁にこすりつけた。
 b. 指でペンキを壁からこすり落とした。

(これらは、指で壁をこすって、ペンキを付けた、あるいは指で壁をこすってペンキを落とした、の意味である。) このことについても意味フレームから説明できる。「こすりつける」の場合は〈付着〉という背景フレームをにおいて、V1「こする」とV2「つける」が表5-4のような意味的な一致性がある。

表5-4 「こすりつける」の意味フレーム⁴³

[kosuri _i -TR-tukeru _j -TR] _{V↔} [E _j BY E _i] 背景フレーム：〈付着〉フレーム							
中心 事象	<u>【行為者】が【対象A】で【表面】に圧力をかけて摩擦する_{v1}</u> ことによつて <u>【対象B】を【表面】に付着させる_{v2}</u>						
事象 参与者	<p>【行為者】:【対象A】に対して意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象A】:【行為者】が直接働きかけるもの。</p> <p>【対象B】:【表面】に付着するもの。</p> <p>【表面】:【行為者】が【対象A】に働きかけることで、【対象B】が付着する面。</p>						
関連 事象	<p>目的 (嫌がらせをするため; …)</p> <p>前提的背景 (【対象A】と【対象B】は同一物であるか、【対象A】の一部として【対象B】がある; …)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>						
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%; text-align: center;">V1「こする」</th> <th style="width: 50%; text-align: center;">V2「つける」</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">中心 事象</td> <td style="text-align: center;">中心 事象</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">事象</td> <td style="text-align: center;">事象</td> </tr> </tbody> </table>	V1「こする」	V2「つける」	中心 事象	中心 事象	事象	事象
V1「こする」	V2「つける」						
中心 事象	中心 事象						
事象	事象						
中心 事象	<u>【行為者】が【対象A】で【表面】に圧力をかけて摩擦する</u>						
中心 事象	<u>【行為者】が【対象B】を【着点】に付着させる</u>						
事象	【行為者】:【対象A】に対して意図						
事象	【行為者】:【対象B】を【着点】に						

⁴³ 二章で述べた影山 (1993) の所有関係の合成(「洗い落とす」において全体の項が<Th1のTh2>になるというもの)についても、「こすりつける」の意味フレームのように、意味フレームの中の情報として示すことができる。

参与者	<p>的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象 A】: 【行為者】 が直接働きかけるもの。</p> <p>【表面】: 【行為者】 が 【対象 A】 に働きかけて接触する面。</p>	<p>付着させるため, 意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象 B】: 【表面】 に付着するもの。</p> <p>【着点】: 【行為者】 が働きかけることで, 【対象 B】 が付着する場所。</p>
関連事象	<p>目的 (【対象 A】 かその一部分をどこかに付着させる ; …)</p> <p>様態 (軽く ; 強く ; …)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>	<p>手段 (【対象 B】 か 【対象 B】 を含むもので 【表面】 に圧力をかけて摩擦することで ; 【対象 B】 を塗ることで ; …)</p> <p>様態 (丁寧に ; …)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>

一方, 「こすり落とす」は〈除去〉という背景フレームにおいて, V1「こする」とV2「落とす」が表 5-5 のように意味的な一致性が見られる。

表 5-5 「こすり落とす」の意味フレーム

<p>$[kosuri_i\text{-}TR\text{-}otosu_j\text{-}TR]_{V\leftrightarrow}[E_j\text{ }BY\text{ }E_i]$</p> <p>背景フレーム: 〈除去〉 フレーム</p>	
中心事象	<p><u>【行為者】 が 【道具】 を用いて 【表面】 に圧力をかけて摩擦する_{v1} ことで 【対象】 を 【表面】 から除去する_{v2}</u></p>
事象参与者	<p>【行為者】: 【対象】 に対して意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象】: 【行為者】 が働きかける, ある 【表面】 に付着するもの。</p> <p>【表面】: 【対象】 が付着する面。</p> <p>【道具】: 【行為者】 がある 【表面】 に付着している 【対象】 を除去するために用いるもの。</p>
関連事象	<p>目的 (【表面】 をきれいにするため ; …)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>

	V1「こする」	V2「落とす」
中心 事象	【行為者】が【道具】を用いて【表面】にある【対象】に圧力をかけて摩擦する	【行為者】が【道具】を用いて【起点】から【対象】を除去する
事象 参与者	<p>【行為者】：【対象】に対して意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象】：【行為者】が働きかける、ある【表面】に付着するもの。</p> <p>【表面】：【対象】が付着する面。</p> <p>【道具】：【行為者】がある【表面】に付着している【対象】を除去するために用いるもの。</p>	<p>【行為者】：【対象】に対して意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象】：【行為者】が働きかける、ある【起点】に位置するもの。</p> <p>【起点】：【対象】が本来位置する場所。</p> <p>【道具】：【行為者】がある【起点】に位置している【対象】を除去するために用いるもの。</p>
関連 事象	<p>目的 (【対象】をある【表面】から除去する；…)</p> <p>様態 (何度も；強く；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>	<p>手段 (【対象】に圧力をかけて摩擦することで；【対象】を洗うことで；…)</p> <p>様態 (ゆっくりと；素早く；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>

以上の複合動詞の例は全て合成的なものだったが、非合成的で分析的な複合動詞に関して言うと、まず全体に対応しているフレームが指定されていて、それに基づいて個々の動詞を解釈するという場合が多くある。例えば、「落ち着く」のような抽象的な意味にしか使わない複合動詞においては、全体が特定の概念領域の中で解釈される。このことは、フレーム意味論的には、特定の背景フレームにおいて理解されるということである。この場合は、〈興奮〉という背景フレームであり、その中で、構成要素の果たしている意味的な役割を理解することが可能となる。〈興奮〉という背景において、高ぶった感情が下がっていくことが「落ちる」ことであり、結果的に精神が安定する状態にな

ることを何かが地面に「着く」こととして理解できる。

第四章で述べたように、特定の状況についてのみ使われる「言い渡す」についても次のように考えられる。「言い渡す」はもっぱら判決やリストラ、処分などのような「公的な処置」の場面で用いられ、ほかの V1 と V2 から合成可能な意味は成立しない（「*太郎は {情報/秘密/予定} を友人に言い渡した」）。「言い渡す」は全体がひとまとまりとして〈公的な処置〉という背景フレームを持つと考えられる。

語がフレームと結びついているように、複合語の場合は全体がひとまとまりとしてあるフレームと結びついていると考えられる。

5.2.2 意味フレームに基づく複合動詞の結合制限と類義表現の使い分け

—「～おとす」「～もらす」「～のがす」を例に—

これまでは手段—目的型について見てきたが、本節では背景—具現型について検討することで、複合動詞の適格性とは何か、ということについてさらに考察を進める。背景—具現型の中でも、前項動詞V1と結合することで、ある対象を捉えることに失敗することを表すV2「～おとす」「～もらす」「～のがす」を取り上げて分析する。それによって、複合動詞の結合制限や意味形成を説明するには、動詞の表す事象に関する百科事典的知識を含む意味フレームを導入する必要があることを示す。

従来の LCS を用いた研究において、「x が y を書きもらす」は次のように分析される。

$$[[x_i] \text{ WRITE } [y_j]] + [[x_i] \text{ FAIL } [\text{IN } [\text{Event}(z)]]] \\ \Rightarrow [[x_i] \text{ FAIL } [\text{IN } [\text{Event } [x_i] \text{ WRITE } [y_j]]]] \quad (\text{由本 } 2007)$$

上記のような LCS の合成による分析では「～もらす」は $[x_i \text{ FAIL IN } [\text{Event}(z)]]$ として、事象の失敗を表す。しかし、それではなぜ「聞きもらす」が結合可能で、「*見もらす」が結合できないのか、もっと言えば「*走りもらす」、「*作りもらす」、「*選びもらす」などがなぜ結合できないのかということの説明できないと思われる。

同じように、「～おとす」は由本 (2008, 2011) によると「～もらす」と共通して $[x_i \text{ FAIL IN } [\text{Event}(z)]]$ という LCS を持つが、「見おとす」は存在する結合パターンであるのに対し、

「*見もらす」は結合できないパターンである。さらに、「～のがす」も仮に同じように[x_i FAIL IN [Event(z)]]という LCS で表されるのなら、下の例文のような意味的な違いは区別できない。

- (6) 携帯をバッグに入れていると、着信音を {聞きのがす / ??聞きもらす} ことがよくある。
- (7) 試験で「論文形式で答えるように」という回答方式の部分を {読みおとして / ??読みのがして} 箇条書きで答えてしまった。

本研究は、二つの動詞がどのように結合し、どのように意味が形成されるのか、ということについて適切な説明を与えるには豊富な百科事典的知識が必要であると考え、意味フレームに基づいて分析を進める。

例えば、先に述べた通り、「～おとす」、「～もらす」、「～のがす」は由本 (2007, 2008, 2011) が主張しているような、単にある事象の失敗を表すのではない。「～おとす」、「～もらす」、「～のがす」は共に<ある対象を捉えることに失敗する>という意味を表し、「何かを捉えようとしている」という共通の前提的背景が存在する。そのため、本研究はこれらの複合動詞を、由本 (2007, 2008, 2011) などのように、事象を項に取る補文関係型としてではなく、捕獲の際に逸した対象を項として取る背景—具現型[V_i-V_j]_v ↔ [E_i IS THE PRESUPPOSITION OF E_j-CHG]だと考える。

「聞きもらす」や「撃ちもらす」などは V1 が表している動作が「何かを捉えようとしている」という背景条件と一致するため、V1 の中心事象と V2 のフレーム要素【前提的背景】の間に意味的な一致性が生じ、複合動詞として結合できるのである。一方、「*走りもらす」、「*作りもらす」、「*選びもらす」などはこの前提的背景と一致しないため結合できない。

5.2.2.1 組み合わせの制限

前項動詞 V1 と結合し、ある対象を捉えることに失敗することを表す V2 に「～おとす」、「～

もらす」,「～のがす」があるが,どのようなV1と結合するのかは意味フレームによって制限される。これらのV2がどのようなV1と結合するのを見るために,「Webデータに基づく複合動詞用例データベース」に基づいて,その結合パターンと用例を表5-6に示す。

表5-6 「～おとす」「～もらす」「～のがす」の結合パターン

V2	結合パターン	用例数	例文
おとす	見落とす	1470	看板を <u>見落とす</u> と通り過ぎてしまいますよ。
	聞き落とす	446	大事な指示や,話しかけられた声などを <u>聞き落とす</u>
	読み落とす	271	長文で情報を <u>読み落とす</u> こともあまりありません。
	書き落とす	185	大事なことを <u>書き落とす</u> 所だった。
もらす	聞き漏らす	619	キーワードを <u>聞き漏らす</u> と正解できない。
	撃ち漏らす	235	北朝鮮がミサイルを連射すれば, <u>撃ち漏らす</u> こともあり得る
	書き漏らす	116	一番重要な情報を <u>書き漏らす</u> な!
	討ち漏らす	95	敵を <u>討ち漏らす</u> 事の無い圧倒的な速さ
	打ち漏らす	78	0.01秒間に数千発の攻撃を迎撃して17本 <u>打ち漏らす</u> くらい速さだが
のがす	買い逃す	1413	おかげで,新刊を <u>買い逃す</u> 事が無くなりました!!!
	聞き逃す	1307	バターのパチパチという音を <u>聞き逃す</u> な!
	見逃す	1277	2011年,最後の放送を <u>見逃す</u> な!
	聴き逃す	719	危うくこの意欲曲を <u>聴き逃す</u> 所だった。
	撮り逃す	578	決定的瞬間を <u>撮り逃す</u> ことなく撮影できるのだ。
	読み逃す	213	字幕が止まってくれないんで読むのに時間がかかると内容を <u>読み逃す</u> 事が多い
	食べ逃す	130	これを <u>食べ逃す</u> と,次に出会えるのは1年後ですね。
	乗り逃す	98	駅でICカードを落とすという失態をやらかし,1

			本電車を <u>乗り逃す</u> 。
	売り逃す	83	アニメやってるこの時期に <u>売り逃す</u> のはもったい なかった…

次節より、表 5-6 に基づき、「～おとす」「～もらす」「～のがす」の結合パターンを分析する。

5.2.2.1.1 「～おとす」

まず、「～おとす」は松本 (1998: 64-66) にて説明されているように、知覚情報を物体に見立てて、それを逸することを物体の捕獲の失敗に例えて表現している。我々は抽象的な情報のやりとりを日常生活上の経験基盤に基づき、具体的な物体の受け渡しに見立てて理解することがある。例えば、「相手が差し出した言葉を受け取る」、「判決を言い渡す」、「励ましの言葉をもらった」などのような表現である(Reddy 1979, Lakoff & Johnson 1980 などを参照)。そして、「～おとす」の用法に対しても、情報のやりとりは物体の受け渡しという概念として理解されていることが根底にある。それゆえ、「～おとす」は情報のやりとりの最中に、無意識的に一部の情報を脱落させたことを物体の受け渡しの時に無意識的に物体を落したことに見立てて理解するという、類似性に基づいた意味関係を示す。

表 5-6 のように、ある対象を捉えることに失敗することを表す「～おとす」と結合できる V1 に「見る」、「読む」、「書く」、「聞く」がある。この場合 V1 の意味フレームによって対象が映像や文章の内容、もしくは音声に制限されるが、これらは全て「彼の姿を捉えた」や「文章の内容をつかむ」、「音を聞き取る」のように、物体として捉えることができる。そのため、V2「落とす」の意味フレームによって対象が物体として制限されるのと矛盾しない。また、V2「落とす」の【前提的背景】(動作主が対象を入手しようとしている)と、V1「読む」の中心事象の間に意味的な一致性が見られる。そのため、V1「読む」と V2「落とす」は整合性を保った意味フレームを構成することができ、複合動詞として成立できる。例として(7)の「試験の回答方式を読みおとした」における「読みおとす」の意味フレームを表 5-7 に示す。

表 5-7 「読みおとす」の意味フレーム

[yomi-otosu] _v ↔[E _i IS THE PRESUPPOSITION OF E _j -CHG]	
背景フレーム：〈読解〉フレーム	
中心 事象	<u>【認知主体】が【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る_{v1}上で【情報】を受け取ることに失敗する_{v2}</u>
事象 参与者	<p>【認知主体】：【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る人。</p> <p>【情報】：【文字列】から【認知主体】が受け取る知識。</p> <p>【目】：【認知主体】の身体部位の一つで、ものを見るための器官。</p> <p>【文字列】：文字で構成された【情報】を含むもの。</p> <p>【視線】：【目】と見る対象を結ぶ線。</p>
関連 事象	<p>結果 (【情報】が入手できない状態になる；…)</p> <p>前提的背景 (【目】で【文字列】を視線で追うことで、【文字列】を視覚的に認知しようとしている；…)</p> <p>原因 (【認知主体】の注意力が欠けていたため；【文字列】の文字が小さかったため；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>
V1 「読む」	
V2 「おとす」	
中心 事象	<p><u>【認知主体】が【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る</u></p> <p><u>【行為者】が【対象】を受け取ることに失敗する</u></p>
事象 参与者	<p>【認知主体】：【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る人。</p> <p>【情報】：【文字列】から【認知主体】が受け取る知識。</p> <p>【目】：【認知主体】の身体部位の一つで、ものを見るための器官。</p> <p>【行為者】：【対象】を受け取ることに失敗する主体(通常は人)。</p> <p>【対象】：【行為者】が受け取るもの。</p>

	<p>【文字列】: 文字で構成された【情報】を含むもの。</p> <p>【視線】: 【目】と見る対象を結ぶ線。</p>	
関連事象	<p>前提的背景 (【文字列】は通常読み返せるため逃げない)</p> <p style="text-align: center;">:</p>	<p>前提的背景 (【行為者】が【対象】を入手しようとしている)</p> <p>結果 (【対象】が入手できない状態になる)</p> <p style="text-align: center;">:</p>

5.2.2.1.2 「～もらす」

次に、「～もらす」は情報の受け渡しを液体の受け渡しと見立てることによって、ある範囲内の全体を保持しようとして、その一部を捉え損ねるという意味である。「もらす」という動詞によって〈漏出〉という背景フレームが喚起されるため、複合動詞を構成したときに、対象が流動体として捉えられるものでなければならない。また、例文(6)の「??携帯をバッグに入れていると、着信音を聞きもらすことがよくある」の容認度が低いのは「～もらす」の関連事象に、【前提的背景】(動作主は容器の中にある流動体の全体を保持しようとしている)、というフレーム要素があることによって、範囲の中にある全てのものを捉えようとする意識が喚起され、着信音の一部を聞くことに失敗するという意味になるからだと考えられる。BCCWJで「聞きもらす」を調べてみると、次の例文のように、43件中15件の高い確率で、否定形を用いて「一言も」のような表現と共起するのはこのような全体を捉えようとする背景知識によるものと思われる。

(8) 辻静雄はそれを一言も聞きもらさないように注意して通訳した。

(BCCWJ 海老沢泰久『美味礼讃』)

(9) 生々しい堀内の話に、角田は全身を耳にして、ひとことも聴きもらすまいと努めた。

(BCCWJ 上原光晴『堀内海軍大佐の生涯』)

「～もらす」がV1と結合して、一つの整合性の取れた意味フレームを構成する例として、「聞きもらす」の意味フレームを表5-8に示す。

表5-8 「聞き漏らす」の意味フレーム

[kiki _i -morasu _j] _V ↔[E _i IS THE PRESUPPOSITION OF E _j -CHG]	
背景フレーム：〈音声の漏出〉フレーム	
中心 事象	<u>【認知主体】が【耳】で【音声】を聴覚的に認知する_{V1}上で【音声】の一部を捉えることに失敗する_{V2}</u>
事象 参与者	【認知主体】：【耳】で【音声】を聴覚的に認知する人。 【音声】：【認知主体】が【耳】で受け取るもの。 【耳】：【認知主体】の身体部位の一つで、【音声】を聞くための器官。
関連 事象	結果 (【音声】の一部が捉えられない状態になる；…) 前提的背景 (【耳】で注意を傾けることで、全ての【音声】を捉えようとしている；…) 原因 (【認知主体】の注意力が欠けていたため；…) ⋮
	V1「聞く」
中心 事象	<u>【認知主体】が【耳】で【音声】を聴覚的に認知する</u>
事象 参与者	【認知主体】：【耳】で【音声】を聴覚的に認知する人。 【音声】：【認知主体】が【耳】で受け取るもの。 【耳】：【認知主体】の身体部位の一つで、【音声】を聞くための器官。
関連 事象	前提的背景 (【音声】は通常消えてなくなるものである) 前提背景 (【行為者】は容器の中にある【流動体】の全体を保持しようとしてい
	V2「もらす」
中心 事象	<u>【行為者】が【流動体】の一部を捉えることに失敗する</u>
事象 参与者	【行為者】：【流動体】を捉えることに失敗する人。 【流動体】：液体か気体、またはそれとして認識できる抽象的なもの。
関連 事象	前提背景 (【行為者】は容器の中にある【流動体】の全体を保持しようとしてい

	…	る) 結果 (【流動体】の一部が保持できない状態になる；…) …
--	---	--

杉村 (2005) は「見る」の場合、対象となる文字や映像が一つの固まりとしてイメージされるため「見おとす」とは言えるが、液体や気体のようにすり抜けていくイメージとはならないため「*見もらす」とは言いにくいと主張している。しかし、「北朝鮮がミサイルを連射すれば、撃ち漏らすこともあり得る」のように、「～もらす」の対象はミサイルという固体の場合もあるため、上記の主張とは一見矛盾するように思われる。本研究はこれを「～おとす」の意味との棲み分けの結果であると考え、「～おとす」は「撃つ」のような V1 と結合した場合は、「ミサイルを撃ちおとす」のように、＜下方へ移動させる＞ことを表す。そのため、複数のミサイルを迎撃する際に、その一部を撃ち落とすことに失敗するという、＜対象の一部を捉えることに失敗する＞ことを表す際には曖昧性を避けるために「撃ちおとす」の代わりに「撃ちもらす」を用いる。一方、このような「～おとす」の曖昧性が生じない場合においては、「～おとす」は固体として捉えられる具体的なものに用いられ、「～もらす」は液体として捉えられるものに用いられる。「音が漏れている」と言えるように、「聞く」の対象となる音は液体や気体として認識することができるため、「聞きもらす」と言える。一方、「*映像が漏れている」とは言えないように、「見る」の対象である映像は具体的なものであるため、液体や気体として認識しにくい。そのため、「*見もらす」が容認できないのだと思われる。

5.2.2.1.3 「～のがす」

「～のがす」はその背景にある〈捕獲行動〉フレームによって、対象は捕獲者が捉えたいと思うものであり、加えて、その対象は「逃げる」もの、すなわち「捕獲できない状態になり得る」ものでなければならない、という制限が課せられる。そのため、「(逃げる)

獲物を撃ちのがした」と言えるのに対し、「*(固定された)的を撃ちのがした」とは言えない。「見のがす」と「聞きのがす」の場合は、「見る」と「聞く」の対象である映像と音声
が保存される文字と違って、消えてなくなるため、「捕獲できない状態になり得る＝逃
げる」ものとして捉えられる。一方、(7)の「??試験の回答方式を読みのがした」の容認
度が低いのは、試験の回答方式という対象が「捕獲できない状態になり得る」ものだと考
えられないからだと思われる。通常文字は静的なものであり、読み返すこともできるた
め、二度と読むことができないとはあまり考えられない。そのため、表 5-9 が示すよう
に、「試験の回答方式」が目的語となる場合において、V1「読む」の対象となる【文字
列(試験用紙)】と V2「のがす」のフレーム要素【前提的背景】の間に不整合が生じる。
それによって、V2「のがす」の【前提的背景】と V1「読む」の中心事象の間に意味的
な一貫性があるにも関わらず、「読みのがす」は容認できない表現となる。

表 5-9 「??(試験の回答方式を)読みのがす」における不整合

V1V2 「??読みのがす」		
	V1「読む」	V2「のがす」
中心 事象	【認知主体】が【目】で【文字列】 を【視線】で追うことで【情報】を 受け取る	【捕獲者】が【対象】を捉えることに 失敗する
事象 参与者	【認知主体】:【目】で【文字列】を 【視線】で追うことで【情報】を受 け取る人。 【情報】:【文字列】から【認知主体】 が受け取る知識。 【目】:【認知主体】の身体部位の一 つで、ものを見るための器官。	【捕獲者】:【対象】を捉えようとする 意思的な主体。 【対象】:【捕獲者】が捉えたい逃げる もの。

	<p>【文字列】: 文字で構成された【情報】を含む試験用紙。</p> <p>【視線】:【目】と見る対象を結ぶ線。</p>	
関連事象	<p>前提的 (【文字列】は通常読み返せるため逃げない)</p> <p>背景</p> <p>⋮</p>	<p>前提的 (【捕獲者】は【対象】を捉えようとしている； 【対象】は逃げようとしている；…)</p> <p>結果 (逃げる【対象】が捕獲不可能な状態になる)</p> <p>⋮</p>

このように、意味的な一致性があっても、V1 と V2 の意味フレームに何らかの不整合がある場合は、複合動詞として成立できないのである。

しかし、(10)のように、電光掲示板の流れていく文字や読み切りの漫画などは一度読む機会を逃してしまうと二度と読めなくなる可能性がある場合においては、表 5-9 のような不整合が生じないので、「読みのがす」と言えるようになる。

- (10) a. 電光掲示板に流れている文字を読みのがした。
- b. 今週のジャンプの読み切りの漫画を読みのがした。

以上のように、動詞が指し示す動作が同じであっても、背景状況が異なれば、喚起される背景フレームも異なり、複合動詞として成立できるかどうかが変わってくる。

5.2.3 複合動詞における多義語の解釈—「～取る」を例に—

複合動詞の適格性と関連して、本節では「奪い取る」や「洗い取る」のような V2「取る」を含む複合動詞について分析することで、複合動詞における多義語の解釈を検討する。対象となるのは『日本語複合動詞リスト』に収録されている全 65 語の「～取る」である。

「～取る」は多義語であり、大きく a. <対象を取得する>と b. <対象を除去する>という二つの意味に分けられる。

(11) a. 太郎はお年寄りからお金を騙し取った。(V2: <対象を取得する>)

b. 太郎はテーブルから汚れを拭き取った。(V2: <対象を除去する>)

そして、「～取る」は『複合動詞用例データベース』の用例から判断した V2「取る」が表す意味に基づいて、以下のように三つのグループに分けられる。

(12) 「～取る」が表す意味と、その場合の V1

a. <対象を取得する>

V1: 打つ, つかむ, 吸う, かじる, 食う, 刈る, 狩る, 召す, 受ける, 選ぶ(対象を自分のコントロール下におさめる)

攻める, 戦う, 勝つ, 奪う, 盗む, かすめる, 脅す, ゆする, せびる, 騙す, 乗る, 買う, 引く, 寝る, 迎える(対象の所有権を自分のほうに移す)

感じる, 嗅ぐ, 聞く, 見る, 読む, 書く, 学ぶ, 汲む(対象を認知的に受容する)

縫う, はかる, 写す(対象を新たに出現させて自分が利用できる状態にする)

全 36 語

b. <対象を除去する>

V1: 拭く, 拭う, 掃く, 焼く 全 4 語

c. <対象を取得する> or <対象を除去する>

V1: 切る, 削る, 削ぐ, えぐる, 折る, 破る, ちぎる, 剥がす, 剥ぐ, 抜く, むしる, もぐ, 摘む, こす, こする, 絞る, すくう, 擦る, 抱く, 舐める, 掘る, 巻く,

搔く, 絡む, 移す 全 25 語

V2 がどの意味として解釈されるかは、V1 の意味フレームとの間に、どのような意味的な一致が見られるかによって決まる。例えば、表 5-10 が示す通り、「盗み取る」にお

いて、V2「取る」が<取得する>という意味である場合には、V1の下位事象の【目的】に含まれている情報と、V2の中心事象の間に意味的な一致があり、同様に、V2の下位事象の【手段】に含まれている情報とV1の中心事象の間にも意味的な一致がある。これによって、「盗み取る」が成立している。

表5-10 「盗み取る」における意味的な一致性

	V1「盗む」	V2「取る」
中心事象	【加害者】が【起点】から【被害者】の所有する【対象】を不当に手に入れる	【行為者】が【起点】から【対象】を取得し、自分の所有物とする
事象参与者	<p>【加害者】:【起点】から【被害者】の所有する【対象】を不当に手に入れることで、【被害者】に被害を与える意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象】:【加害者】が【起点】／【被害者】から不当に手に入れるもの。</p> <p>【起点】:【対象】が位置する場所。</p> <p>【被害者】:【加害者】に自らの所有する【対象】を不当に取られることで被害を受ける人または組織。</p>	<p>【行為者】:【対象】を手に入れるという意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【対象】:【行為者】が働きかける、ある【起点】に位置するもの。</p> <p>【起点】:【対象】が本来位置する場所。</p>
関連事象	<p>目的 (【対象】を自分の所有物にするため；…)</p> <p>様態 (こっそりと；素早く；…)</p> <p>前提的 (【対象】を欲している；</p> <p>背景 【対象】は他人の所有物である；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>	<p>手段 (【対象】を盗むことで；【対象】を奪うことで；…)</p> <p>様態 (こっそりと；強引に；…)</p> <p>前提 (【対象】を欲している；</p> <p>背景 【対象】は他人の所有物である；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>

一方、V2「取る」が<除去する>を表す場合には、表5-11のように、V1「盗む」との間に意味的な一致を見いだせない。その上、V1とV2の【前提的背景】の間に不整合が生じるため、<除去する>という意味には解釈できない。

表5-11 「盗む」と除去を表す「取る」の場合

	V1「盗む」	V2「取る」
中心事象	【加害者】が【被害者】／【起点】から【対象】を不当に手に入れる	【行為者】が【起点】から【対象】を除去する
事象参与者	【加害者】：【起点】から【被害者】の所有する【対象】を不当に手に入れることで、【被害者】に被害を与える意思的な主体(通常は人)。 【対象】：【加害者】が【起点】／【被害者】から不当に手に入れるもの。 【起点】：【対象】が位置する場所。 【被害者】：【加害者】に自らの所有する【対象】を不当に取られることで被害を受ける人または組織。	【行為者】：【対象】を除去するという意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【対象】：【行為者】が働きかける、ある【起点】に位置するもの。 【起点】：【対象】が本来位置する場所。
関連事象	目的 (【対象】を自分のものにするため；…) 様態 (こっそりと；素早く；…) 前提的背景 (【対象】を欲している；…) ∴	手段 (【対象】が付着している【起点】を洗うことで；【対象】を摩擦することで；…) 様態 (ゆっくりと；素早く；…) 前提的背景 (【対象】は不要なものである；…) ∴

不整合

次は(12)における<対象を取得する>と<対象を除去する>の両方の意味で解釈できる場合について見てみよう。この場合のV1の【目的】に(対象を自分のものにするため)と(対象をある場所から取り除く)が共に含まれているため、V2「取る」は両方の意味

とも成立可能である。実際にどの意味に解釈されるかは、文全体の文脈が喚起する背景フレームによって決まる。例えば、「抜き取る」という複合動詞は、(13)のような〈窃盗〉という背景フレームでは、V1「抜く」の【目的】が(対象を自分のものにするため)となり、V2は〈取得する〉という意味に解釈される。一方、(14)のような〈魚の骨取り〉の背景フレームでは、V1「抜く」の【目的】が(対象をある場所から取り除く)となり、V2は〈除去する〉という意味になる。

(13) 白川は少し迷ってから、金を抜き取ってズボンのポケットに入れる。

(BCCWJ 村上春樹『アフターダーク』)

(14) さばは骨を抜き取り、ひと口大に切り、塩、こしょう少々をふる。

(BCCWJ NHK 科学番組部編; 並木和子監修『NHK ためしてガッテン血液サラサラ健康レシピ』)

以上のように、複合動詞における多義語の解釈は意味フレーム及び背景フレームの情報に基づいて行われると考えられる。

5.3 背景フレームとフレーム要素の役割

5.3.1 複合動詞と背景フレーム—〈競技〉フレームと「勝つ」を例に—

これまで見てきたように、複合動詞の結合制限や多義語の解釈などを説明するには、背景フレームという、ある背景状況に対する全体的な知識が必要である。ここでは〈競技〉という背景フレームを喚起する「勝つ」、及び「勝ち抜く」や「打ち勝つ」のように「勝つ」が含まれる複合動詞を対象に検討することによって、背景フレームに含まれる背景知識の必要性を詳しく検討する。

例えば、「勝ち～」には「勝ち上がる」「勝ち越す」「勝ち進む」「勝ち抜く」「勝ち残る」があるが、これらの組み合わせは勝ち負けの概念だけではなく、その背景には様々な競技や試合、トーナメント制などについての知識がある。

まず、FrameNet における *win* が喚起する *Finish_competition* というフレームを参考に

して、〈競技〉フレーム、及びそのフレーム要素を次のように定義する(BCCWJ から取った例文を〈競技〉フレームに基づいてアノテーションしたものをフレーム要素の具現化の例として示す)。

(15) 〈競技〉フレーム

定義：ある【競技(Competition)】において、ある【競技者(Competitor)】がある【競争相手(Opponent)】と争い、それぞれの【成績(Score)】に応じて、勝利してある【順位(Rank)】や【賞品(Prize)】を手に入れるか、敗北して脱落するか、引き分けるか。

表 5-12 〈競技〉フレームのフレーム要素

競技 Competition	【競技者達】がお互いに競い合う事象(トーナメント制などの場合は Competition1, Competition2... というように複数回行われる)。 例：【オセロゲーム】 Competition で勝つコツは、盤上の4つの角をとることです。
競技者 Competitor	【競技】に関与する個人。 例：四年がかりだったが、最後には【わたし】 Competitor が勝った。
競争相手 Opponent	【競技者】と競い合う個人。 例：あの時、【私】 Competitor は【祥子】 Opponent に勝ったと思った。
競技者達 Competitors	互いに競い合う複数の人。 例：【信長死後の覇権】 Prize をめぐって、【羽柴秀吉と柴田勝家】 Competitors が争った。
成績 Score	【競技】の中で計算される数的な量で、これに応じて【競技者】に与えられる【順位】や【賞品】が決まる。 例：【去年】 Time も【大分】 Competitor が【ホーム】 Place で【1-0】 Score で勝っていたんですが、【セレッソ】 Opponent が退場者を出したのに逆転負けしてしまった。

点差 Margin	<p>【競技者】と【競争相手】の【成績】の差。</p> <p>例：もしこれが【<u>二五点差</u>】_{Margin}で勝っていたのなら、運とか偶然といった皮肉な要素がない分、こんなにも大騒ぎすることはなかっただろう。</p>
順位 Rank	<p>【成績】によって決まる【競技者】の順位。</p> <p>例：【南米予選】_{Competition}を【<u>2位</u>】_{Rank}で勝ち上がってきた【エクアドル】_{Competitor}は、実は【今大会】_{Competition}のダークホースになるのではと、読んでいる。</p>
賞品 Prize	<p>【競技者】の【順位】や【成績】に応じて与えられる社会的または金銭的に価値のある物。</p> <p>例：【若づくり氏】_{Competitor}は【競輪】_{Competition}で【<u>三万円</u>】_{Prize}勝ったその足で立寄り、ほとんど競輪の話をひとりでしゃべって帰っていった。</p>
様態 Manner	<p>【競技者】や【競技】そのものの様態。</p> <p>例：【このレース】_{Competition}を【<u>あっさり</u>】_{Manner}勝った後、続く【クローバー賞 1200】_{Competition}でも【<u>2着</u>】_{Rank}したくらいだから、もともと能力は相当だったのだろう。</p>
手段 Means	<p>【競技者】が【競技】に勝利するための手段。</p> <p>例：【<u>打撃力</u>】_{Means}で勝ったような感じ</p>
場所 Place	<p>【競技】が行われる場所。</p> <p>例：【<u>日本</u>】_{Place}で勝つために、【任天堂の買収】_{Means}に照準を合わせているのだ。</p>
時間 Time	<p>【競技】が行われる時間。</p> <p>例：【<u>明日</u>】_{Time}【マエケン】_{Means}で勝ち、【<u>あさって</u>】_{Time}【ルイス】_{Means}で勝つ。</p>

このような〈競技〉フレームのフレーム要素を全て具現化した文が(16)である。

(16) 【2013年1月1日】_{Time} 【賞金一億円】_{Prize} がかかった【天皇杯】_{Competition1} の【国立競技場】_{Place} での【決勝戦】_{Competition2} に、【柏レイソル】_{Competitor} は【渡部選手のヘディング】_{Means} で【辛うじて】_{Manner} 【1-0】_{Score} という【僅差】_{Margin} で【ガンバ大阪】_{Opponent} に勝利し【全88チーム】_{Competitors} の中から【優勝】_{Rank} を手にした。

〈競技〉フレームを図示すると次のようになる。

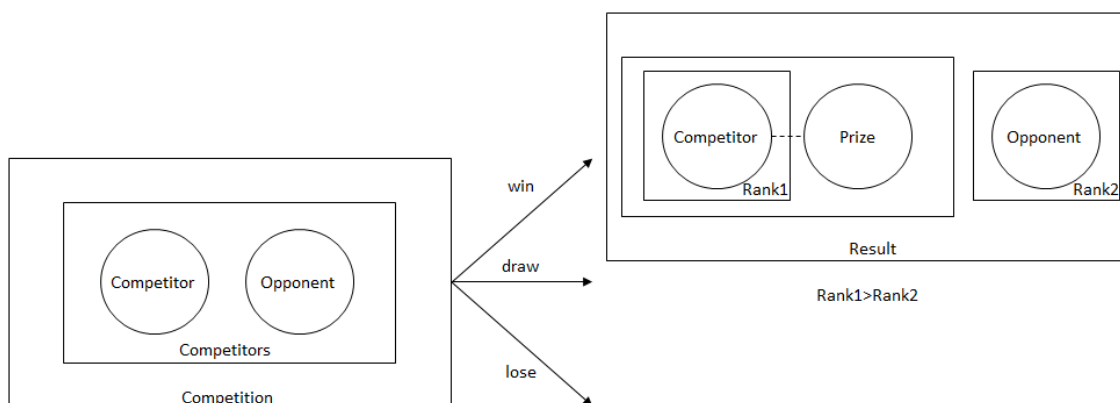


図 5-1 〈競技〉フレームのプロトタイプ⁴⁴

図 5-1 は〈競技〉フレームのプロトタイプであり、他にも様々なサブタイプが存在する。例えば、「{競馬/パチンコ/ギャンブル} に勝つ」というような場合においては、競争相手が存在する必要はなく、ある競技の仕組みそのものに勝つことでお金などの賞品を得るのである。そのため、イメージスキーマに表すと、図 5-2 のようになる。

⁴⁴ 紙幅の都合上、引き分けや負けの場合のイメージスキーマは省略する。ここでの点線は所有関係を表す。

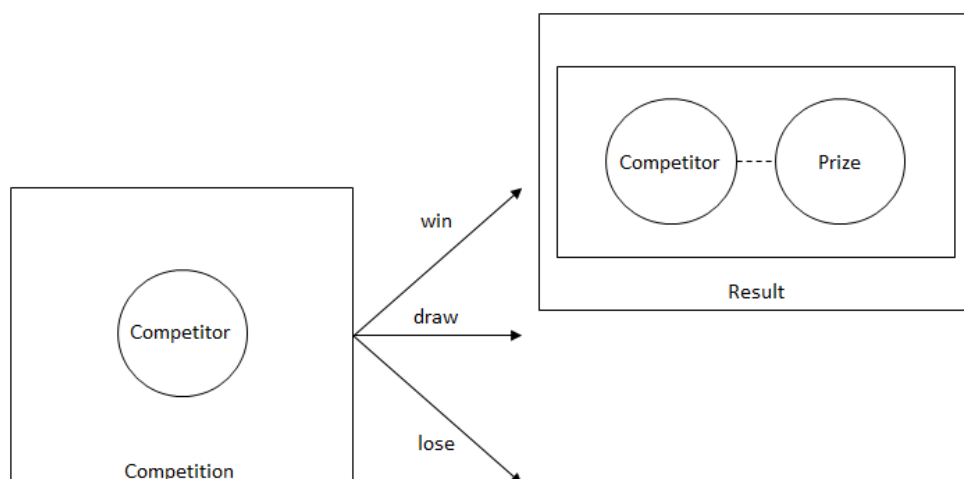


図 5-2 〈競技〉フレームのサブタイプ1(競争相手がいない場合)

「勝利する」というサ変動詞の場合は「* {競馬/パチンコ/ギャンブル} に勝利する」とは言えないように、必ず競争相手がいなければならない。「負かす」という動詞も同様に、競技者と競争相手の関係性にプロファイルがある表現で、「* {競馬/パチンコ/ギャンブル} を負かす」とは言えない。このように、「勝つ」と近い概念を表すように思われる「勝利する」や「負かす」だが、これらの語の意味的な違いは、喚起する背景フレームの違い、及び背景フレームにおけるプロファイルの違いとして捉えられる。

ここまでは単純動詞についての話だったが、複合動詞の場合はさらに複雑な背景知識が必要となる。まず、「勝つ」を含む複合動詞に「勝ち残る」や「勝ち抜く」があるが、「勝ち残る」や「勝ち抜く」のような場合は勝ち残り式の競技に勝利した場合を表しており、その背景には図 5-3 のような勝ち残り式競技についての知識がある。

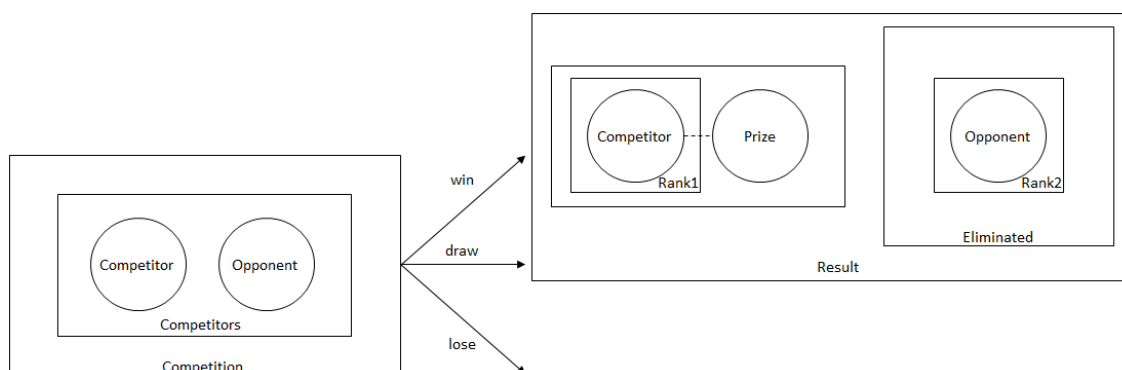


図 5-3 〈競技〉フレームのサブタイプ2(勝ち残り式)

図 5-3 が示すように、「勝ち残る」と「勝ち抜く」は勝ち残り式の競技において、勝負に負けた選手(チーム)がその時点で脱落し、勝者が決定するという、〈競技〉フレームのサブタイプ 2 のような背景知識に基づいている。

次に、「勝ち進む」においては、勝ち残り式競技に加え、複数回勝利しなければ賞品を手に入れることができないトーナメント制についての背景知識が必要である。そして、「勝ち残った」ものが次のステージに進むことを「勝ち進む」として理解している。

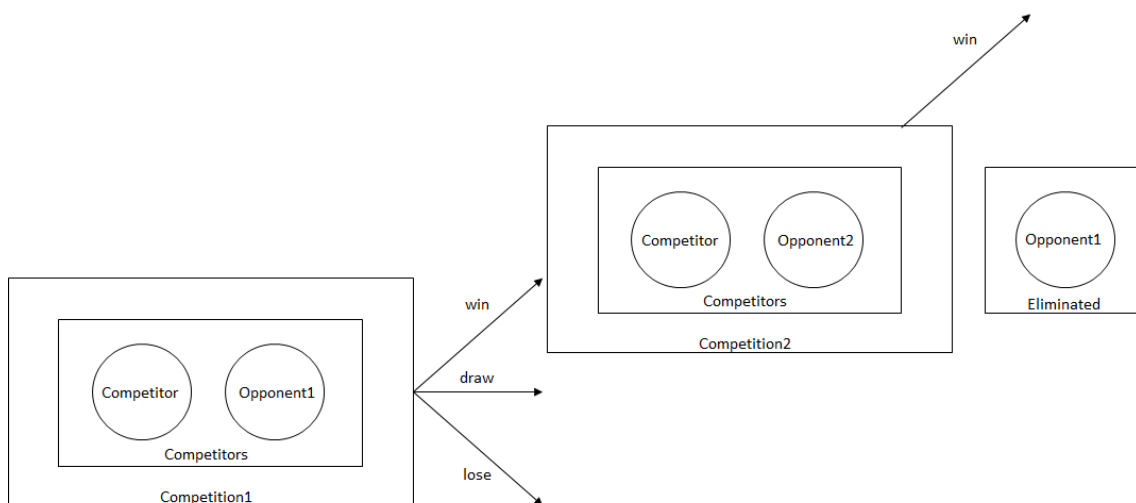


図 5-4 〈競技〉フレームのサブタイプ 3(トーナメント制)

また、競技の中には、一定の回数行われるものがある。例えば、相撲の取組は、日曜日から翌々週の日曜日までの 1 場所 15 日間で行われる。このシステムにおいて、最終的な成績は白星(勝ち)と黒星(負け)が同数になることはなく、必ず白星が黒星を上回っているか、その逆かである。「勝ち越す」という語はこのような背景知識に基づいて〈複数回の勝負の中で負けの数より勝ちの数のほうが多くなる〉ということを表すと理解される。「勝ち越す」は「押し出しで勝ち越した」「春場所で勝ち越した」「八勝七敗で勝ち越した」のように、様々な概念をデ格で表すことができる。「押し出し」はフレーム要素の【手段】で、「春場所」は【競技】、「八勝七敗」は【成績】である。興味深い例として「千秋楽で勝ち越した」や「十日目で勝ち越した」のような表現があるが、この場合「千秋楽」や「十日目」は【競技】や【時間】として理解されるのではなく、勝ち越しが決まったときの「競技の進み具合」を表している。「*11月20日で勝ち越した」

が言えないように、【時間】は「勝ち越す」のデ格としては具現化できない。また、「交流戦で勝ち越した」というとき、交流戦は【競技】を表しているが、この文は<交流戦における複数回ある競技において勝ちが負けを上回った>、というふうに理解され、千秋楽の例のように<交流戦において勝ち越しが決まった>というふうには理解されない。このように、「勝ち越す」のデ格である「千秋楽」や「十日目」は【段階】というフレーム要素が具現化したものであることがわかる。

【段階】というフレーム要素は<競技>フレームには含まれていないが、相撲のような特殊な背景フレームに見られるものである。また、【成績】、【順位】、【点差】、【賞品】のようなフレーム要素も<競技>フレームに結びついており、<競技>フレームという背景知識がなければこれらのフレーム要素を理解するのは困難である。そのため、フレーム意味論においては、主題役割(thematic roles)のような、プリミティブな意味性質に基づいて設定された一定の数の意味役割を、多種多様の状況に当てはめるのではなく、ある背景状況に基づいて意味役割を設定するのである。加えて、<競技>フレームにおけるフレーム要素の多くは項として実現されない付加詞に当たるものである。従来のLCSのような意味構造ではこのような項ではない意味要素を捉えることができなかったが、フレーム意味論では項だけでなく、付加詞として具現化する意味要素を含めて、ある動詞と文の中で共起する意味要素全体を捉えることが可能である。

最後に、「勝ち上がる」という複合動詞についてだが、これは日本の縦型のトーナメント表に基づいているものであり、横型のトーナメント表が一般的である英語圏の文化にはない表現である。日本語の文字表記は縦書きにすることができるため、縦型のトーナメント表が普及している。そのため、日本語では「勝ち上がる」という表現があるのに対し、英語の対応する表現は *win through* や *advance* であり、**win up* や **win rise* というような表現は存在しない。

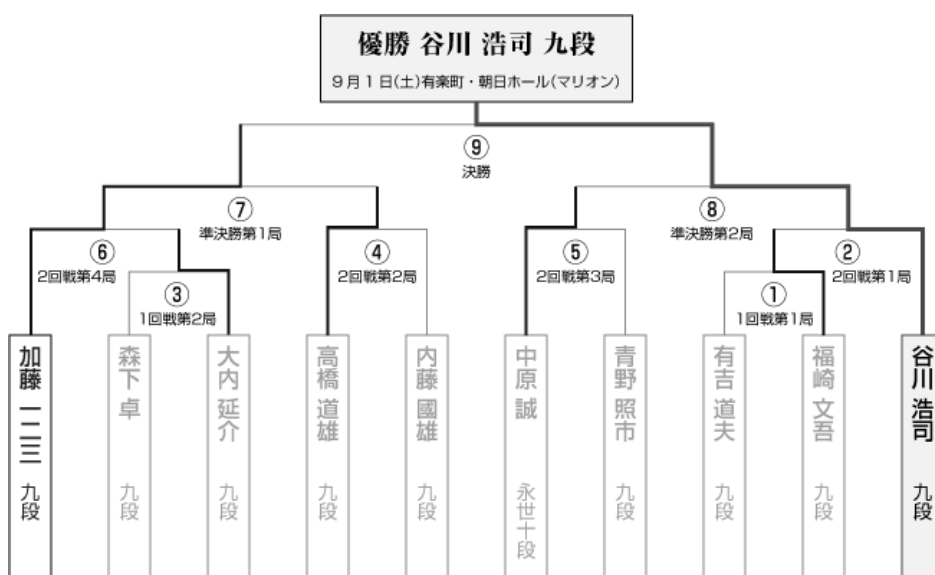


図 5-5 日本語の縦型トーナメント表

(<http://jad.fujitsu.com/event/2007/shogi/kifu.html>)

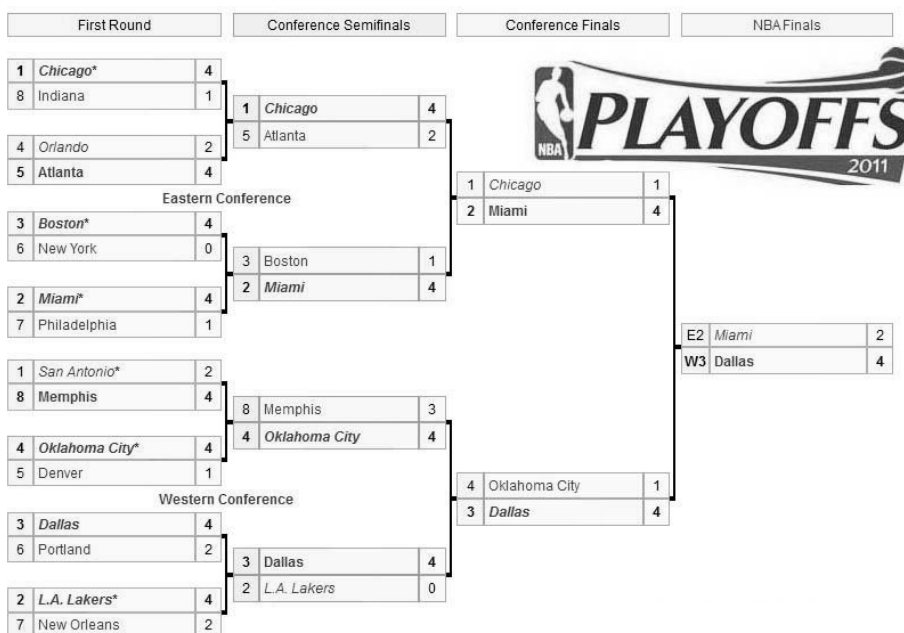


図 5-6 英語の横型トーナメント表

(http://www.nbastuffer.com/tag/The_Finals.html)

「勝ち上がる」という例のように、文化の違いは複合動詞の違いとして現れる。この点については次節で詳しく検討する。

5.3.2 背景フレームと文化

これまで意味フレームレベルの制限を見てきたが、V1 と V2 の意味フレームにおいて意味的な結びつきがあるという意味的な制約を満たしたとしても、V1-V2 が複合動詞として確立されない場合がある。例えば、5.2 で取り上げたくある逃げる対象を捉えることに失敗する＜を表す「～のがす」に関して言うと、V1 の「嗅ぐ」は「見る」や「聞く」と同様に、「逃す」が持つ「何かを捉えようとしている」という前提的背景と一致するため、V2 「のがす」の意味フレームとの間に意味的な一致性を形成できるが、「見逃す」や「聞き逃す」と違って「??嗅ぎ逃す」の容認度は低い。これは複合動詞に対応する背景フレームが、ある文化、またはコミュニティにおいて確立されているかどうかに関わってくる。そして、このような「文化的表象」は文化的慣習の違いによって違いが生じる。

5.3.2.1 異なる文化に基づく複合動詞の違い

第三章で述べたように、「??嗅ぎ逃す」は「香水の発表会でその香りを嗅ぐのを楽しみにしていたが、当日急用ができたために参加できなかった」というような背景があると、文脈情報がないときより容認度は上がると思われるが、完全に容認できるものになるとは言い難い。これは、「香水の発表会」のような、ある「私的表象」を有する人にとっては、容認度が上がる複合動詞だとしても、結局その言語社会において、その知識が一つの「文化的表象」として共有されていなければ、その複合動詞が使われることは少なく、結果的に「耳馴染み」のないものとして、完全に容認されるものとはならないからだと考えられる。このように、複合動詞として成立するかどうかは、背景フレームが「文化的表象」であるかどうかに関わってくる。以下において、異なる社会における複合動詞の違いと異なるコミュニティにおける複合動詞の違いを順番に見ていこう。

5.3.2.1.1 異なる社会における複合動詞の違い

日本語母語話者と中国語母語話者は異なる社会に属しており、その文化の違いは日本

語と中国語の複合動詞の違いにも反映されている。例えば、中国語には「跪哭 *guì-kū* (kneel-cry)」、「跪爬 *guì-pá* (kneel-crawl)」、「哭唱 *kū-chàng* (cry-sing)」という複合動詞が存在するが、これらは全て台湾の「孝女 *xiào-nǚ*」という文化的慣習に基づいてできたものである。孝女とは台湾の伝統的な葬式の際に、遺族のかわりに大げさに泣き叫ぶなどして悲しみや苦しみを表現し、死者を悼み、弔うために雇われた「泣き女」のことである。彼女らは跪きながら泣き、そしてそのまま故人の霊前まで這い進んでいく。多くの場合は悲しみを表現するために跪いて泣きながら(または泣いているふりをしながら)、節をつけて歌うのである。



図 5-7 台湾の「孝女 *xiào-nǚ* (泣き女)」文化

このような場面が文化的表象として確立している台湾の人々にとって、「跪哭 *guì-kū* (kneel-cry)」、「跪爬 *guì-pá* (kneel-crawl)」、「哭唱 *kū-chàng* (cry-sing)」は容認可能な表現であるが、日本人にとってはこのような風習がないため、「??跪き泣く」、「??跪き這う」、「??泣き歌う」の容認度は低い⁴⁵。

5.3.2.1.2 異なるコミュニティにおける複合動詞の違い

⁴⁵ 「??泣き歌う」はコンサートなどで歌手が感動して泣きながら歌うということが日本でもある程度文化的に確立されていると考えられるため、他の「??跪き泣く」や「??跪き這う」より容認度が上がる。

異なる文化を持つ言語社会で概念の言語化の仕方が異なってくることを見たが、同じ言語社会でコミュニティの違いによって、異なる複合動詞を用いる場合がある。例えば、『複合動詞用例データベース』に「萌え禿げる」という複合動詞があるが、これはネットで使われている「激しく萌える」という表現からきたものである。「激しく萌える」から「禿しく萌える」という表現が流行り、そこから「禿げ萌える」と「萌え禿げる」という表現が生まれたと考えられる。今ではそれぞれ<禿げそうなほど萌える>、<萌えすぎたために禿げる>という意味で使われている。

ほかにも同データベースには、「萌え上がる」「萌え狂う」「萌え転がる」「萌え殺す」「萌え死ぬ」「萌えたぎる」「萌え尽きる」「萌え禿げる」「萌え悶える」という複合動詞があるが、これらは全て若者の「萌え⁴⁶」の文化から生まれたものだと考えられる⁴⁷。「萌える」は通常<草木が芽を出す>という意味を表している。そのため、「萌え」の文化において、「萌える」が<ある物や人に対し、一方的で強い愛着心・情熱・欲望などの気持ちをもつ>という意味を表すことを知らなければ、これらの複合動詞を理解することはできない。このように、これらの例は特定のコミュニティの間でしか共有されていないものである。

表 5-13 「萌える」が含まれる複合動詞の用例

複合動詞	『複合動詞用例データベース』における用例
萌え上がる	ここで登場するのが眼帯した伴だったらそりゃもう <u>萌え上がる</u> のに。
萌え狂う	そんなギャップに、我々はまた <u>萌え狂う</u> のであった。
萌え転がる	あんなに見事なラストシーンを見せつけられては、もう <u>萌え転がる</u> 以外の選択肢は存在しません。
萌え殺す	かわいくて強い巫女さんとか、俺を <u>萌え殺す</u> 気か？
萌え死ぬ	これは、女性にデートで言われたりしたら、もう <u>萌え死ぬ</u> 言葉でしょ

⁴⁶ 「萌え」とは若者言葉で、「ある物や人に対してもつ、一方的で強い愛着心、情熱、欲望などの気持ち」で「必ずしも恋愛感情を意味するものではない」という(『デジタル大辞泉』)。

⁴⁷ 「萌え上がる」や「萌えたぎる」、「萌え尽きる」のような例はそれぞれ「燃え上がる」、「燃えたぎる」、「燃え尽きる」からのアナロジーによって作られたものと考えられる。

	う。
萌えたぎる	BLで久々に <u>萌えたぎった</u> 。
萌え尽きる	呼び捨てだった事に <u>萌え尽きそう</u> になりました。
萌え禿げる	もう、想像しただけで <u>萌え禿げる</u> 。
萌え悶える	ユチョンに <u>萌え悶える</u> チャンミンに私が <u>萌え悶える</u>
禿げ萌える	でも、自分と会うために3時間も悩んだって言われたら <u>禿げ萌える</u> だ ろ？

また、専門用語に複合動詞が使われている場合もある。例えば、株取引の世界では売り注文が買い注文を上回っていることを「売り越す」といい、その逆を「買い越す」という。

(17) 海外投資家は8月に、日本株を1年ぶりに売り越した。

(複合動詞用例データベース)

(18) 欧州金融不安が後退し、外国人投資家が日本株を買い越すようになってきた。

(複合動詞用例データベース)

加えて、「踏み上げる」という複合動詞があるが、これは株取引において、「踏む」とは、信用取引で売った人が、株価が上昇している状態であるにも関わらず、損を覚悟で買い戻すことを言い、「踏み上げ」とは、この買い戻しにより株価がさらに上昇することを意味するものであるという⁴⁸。

(19) 89円70銭くらいまで一気に踏み上げて、45銭くらいで止めて、今度は91円35銭くらいまで買う。

(複合動詞用例データベース)

また、「買い下がる」という複合動詞は相場が下降している時に、買いの新規注文を繰

⁴⁸ 「東京証券取引所：証券用語解説」 <http://www.tse.or.jp/glossary/gloss_h/hu_humiage.html> (2014/10/8 にアクセス)

り返すことであるという。

(20) 78円くらいまで買い下がる覚悟でいれば安泰。 (複合動詞用例データベース)

そして、「買い上がる」は逆に、相場が上昇している時に、買いの新規注文を繰り返すことである⁴⁹。

(21) ただ、参議院議員選挙を控えた週末ということもあり、積極的に買い上がるような動きもなく上げ幅も限定的となりました。 (複合動詞用例データベース)

これらの複合動詞は株取引という文化に応じて生み出されたものであり、株取引についての知識がないと理解できないものである。

料理用語としての複合動詞も多数存在している。

(22) 最後に、塩・コショウで味を調え、醤油をナベ肌から回し入れる。
(複合動詞用例データベース)

(23) フライパンに油少々をひいて弱火にかけ、卵を静かに割り入れる。
(複合動詞用例データベース)

(24) りんごを小さめの鍋に入れ、水を注ぎ、レモンを絞り入れる。
(複合動詞用例データベース)

(25) 鍋にだし汁と里芋を入れ、里芋がやわらかくなったら小松菜と干しわかめを加え味噌をこし入れる。
(複合動詞用例データベース)

これらの複合動詞は料理以外にも使われるものだと思われるかもしれないが、料理以外の場面では、単に何かを割ったり絞ったりしたあとにどこかに入れるということはあつ

⁴⁹ 「金融用語集」 < <http://www.financial-glossary.jp/> > (2014/10/08 にアクセス)

でも、料理のように何かを入れる「ために」割ったり、絞ったりすることはあまり考えられない。皿を割ってしまった後にゴミ袋に入れることも、雑巾の水を絞ってバケツに入れることもよくあることだが、これらの事象は対象をどこかに入れることを目的とするものではない。あくまでも結果として対象をどこかに入れただけに過ぎないので、因果関係に基づく複合動詞とはなれないのである。「割り入れる」や「絞り入れる」などが存在するのは、料理において卵をボウルなどに入れるための準備事象として卵を割る、そして、レモンなどを味付けとして加えるためにそれを絞る、ということがよく行われており、コミュニケーションにとって重要なものであるからだ。これらの複合動詞は日常的に料理をする人達のコミュニティで共有されている文化的表象に動機付けられて、作り出されたものである。

他にも相撲という世界で用いられている「寄り切る」や「寄り倒す」なども、相撲のルール(土俵から出たり、土俵に足の裏以外の部分がついたりすると負け)や技についての知識がないと理解できないものである。



四つ身になって、身体を密着させ前か横に進みながら相手を土俵の外に出す。
(重心を下げ、差した手のほうに寄るのが定石)

a. 「寄り切る」



四つ身で寄りながら、相手が土俵際残そうとするのを、体を密着させて倒す。
(相手より重心を下げて、相手の腰を浮かせる)

b. 「寄り倒す」

図 5-8 相撲の決まり手(「大相撲決まり手解説図」

<<http://www16.plala.or.jp/mr001/sumou.htm>>

以上のように、異なる社会やコミュニティにおいては、異なる言語表現が用いられ、複合動詞にも同様の現象が観察されることがわかる。

5.3.2.2 文化の変遷に基づく複合動詞の産出と衰退

文化は一定のものではなく、流動的で変化し続けるものである。そして、文化の変遷に応じて、言語表現も変わってくる。本節では複合動詞が文化の変動に応じて変わりうるという現象について検討する。

例えば、現実世界における新しい事象に対応してできた「焼き取る」という複合動詞がある。

(26) シミ取りの施術は、ダイヤモンド・ピーリングというものと、レーザーでシミを焼き取るものとの2種類を同時にやりました。 (複合動詞用例データベース)

V1の「焼く」は<対象に熱を加える>という意味で、V2の「取る」は<対象を除去する>という意味で使われており、共に従来の意味で用いられている。この複合動詞が表すイベント<対象に熱を加える事でそれを除去する>というものは、従来文化的表象としては存在しないものであったと思われる。しかし、近年の美容整形の技術の進歩によって、レーザーでシミやそばかすを照射して熱を加える事でそれを除去する、ということが可能になり、普及し始めているため、文化的表象として確立されつつあると思われる。

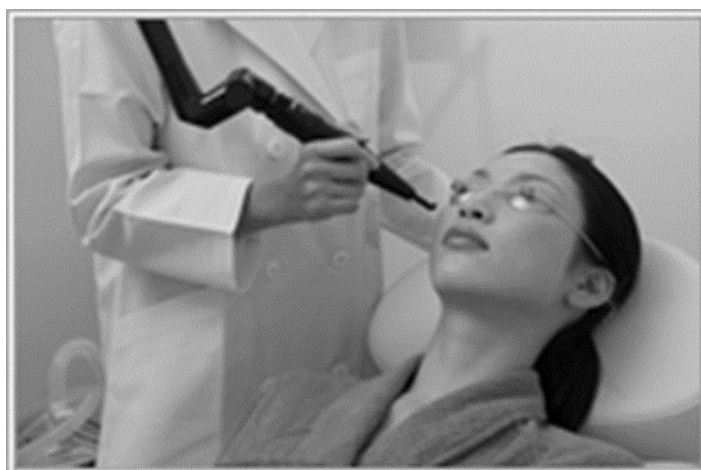


図 5-9 レーザーでシミを「焼き取る」

反対に、文化が衰退することによって、複合動詞が使われなくなったという場合もある。例として、「マイナビウーマン」というインターネットサイトで、昭和生まれの読者416人に、若者に理解してもらえなかった言葉について聞いた調査によると、回答の中に、最近の子に「巻き戻す」ということを理解してもらえない、というものがあつたそう。かつて普及していたカセットテープは実際にテープ巻いて戻していた。しかし、カセットテープが「巻く」という動作を必要としないDVDなどの光ディスク媒体に取って代わられたため、今の若者の中に「巻き戻す」全体の意味は理解できるが、その中で「巻く」がどういう意味的な役割を果たしているのかが理解できないという人が出てきた。このように、ある言語社会における文化の変遷に伴って、複合動詞の分析性が失われることがありうるのだ。

5.3.3 意味形成に関わる事象参与者

本節では、事象参与者というフレーム要素がどのように複合動詞の意味形成に関わるのかを見ていく。従来の複合動詞の先行研究においては、項の同定が重要な関心事であった。影山(1993:107)は複合動詞の結合において、「押し開ける」のように、V1とV2が完全に同じ項構造を持つ場合、V1とV2の外項同士と内項同士が同定(identification)あるいは同一指標化(co-indexation)を受けると主張した(内項と外項についてはWilliams 1981などを参照)。この「項の同定」の問題と関連して、由本(2011)は「泣き落とす」のような自動詞+他動詞の複合動詞について、V1が一つの項(主語)しか取らないため、V2の目的語に当たる項はV1と同定されることなく、そのまま複合語の目的語として受け継がれると述べている。

しかし、複合動詞の意味の正確な記述のためには、単なる項の同定以上の意味的な関係の記述が必要になる。項として実現するとは限らない、事象参与者への言及が必要なのである。では、「泣く」に関わる複合動詞から見ていこう。

まず、「泣き落とす」について考えよう。この複合動詞において、V2の目的語に当たる被動作主の項は、確かにV1の項と同定されないが、一つの意味的な要素として見るとV2の被動作主はV1の事象参与者として理解される必要がある。V2「落とす」の項である被動作主がV1「泣く」という事象に参加していなければ、「泣き落とす」は

意味的に成立できない。誰かに対して泣くことでその人を説得する(落とす)のであって、一人で泣いても誰一人説得できないだろう。〈説得〉という背景フレームを V1「泣く」と V2「落とす」が共有しているために、【説得する相手】という要素は V1「泣く」の「周辺的事象参与者」として見なすことができる。

(27)の「泣き腫らす」も同様に、V2「腫らす」の目的語である「目」は V1「泣く」の項ではないが、周辺的事象参与者として「泣く」という事象に参加する。

(27) 眼をまっ赤に泣き腫らしちゃったわ。 (『銀座春灯』 BCCWJ)

さらに、例文(28)における「泣き濡れる」や「寝静まる」のように、複合動詞における V1 と V2 の主語が一致しなければならないという「主語一致の原則」に反する例がある(松本 1998: 72-74 を参照)。

(28) a. 少女の顔は泣き濡れている。 (BCCWJ 宮部みゆき 『ブレイブ・ストーリー』)

b. 朝の早い長屋は寝静まっている。 (BCCWJ 森村誠一 『虹の刺客』)

これらの複合動詞は主語一致の原則に反するだけでなく、そもそも V1 と V2 には共通する項が存在しない。これは Matsumoto (1996a) で主張されている複合動詞のより一般的な結合制約として考えられる、複合する二つの動詞の表す出来事に共通の参与者(ここでは項を指す)が必要であるという「参与者共有の原則」にも反している。本研究は「泣き濡れる」のような共通する項がない複合動詞が成立するには、【涙】のような隠れている共通の意味的な要素が必要だと考える。第二章で示したように、「泣く」は〈涙を出す〉ことを意味しており、V1「泣く」が表す事象において【涙】は項ではないが必要な参与者であり、これが V2「濡れる」のデ格と一致する。また、「泣く」の主語と「濡れる」の主語とは同一ではないが、後者は前者の一部でなければならない。

同様のことは、「寝静まる」についても言える。「二階の子ども部屋は寝静まっている」における「寝静まる」は V1 の項(子ども)が V2 の事象(子ども部屋が静まる)に参加する必要があるとも考えることができる。子供が一階のリビングで寝ているために、二階の子供部屋が静まっても「二階の子供部屋は寝静まっている」とは言えない。

加えて、(29)における「座り潰す」というような表現がある。

(29) 質問：女性の方で自分のお尻と体重で何かを座り潰した事のある人いますか？

回答：柔らかいものでしたら、パンです。それから…手鏡は二回ほどやっちゃいました(笑) (http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1326379418)

「座る」は二格で表される着点としての場所を項として取るが、「パン」や「手鏡」などの空間性を持たない具体名詞は、「??パンに座る」のように直接「座る」の項とはなれず、「パンの上に座る」といったように、「の上」をつけることで空間化される必要がある。したがって、(29)におけるV2「潰す」の対象である「パン」や「手鏡」などは、Langacker (1991) の行為連鎖(action chain)に基づくと、「座る」が表す事象においては二格で表される着点の場所と言うよりは、「座る」という動作のエネルギーが及ぶ対象として考えることができる。

その上、この場合「パン」や「手鏡」は Dowty (1991) の直接目的語として実現する項である、いわゆる典型的な被動作主(Proto-Patient)の条件の中の「CHANGE OF STATE」,そして「CAUSALLY AFFECTED」に当てはまる⁵⁰。このように、意味的に考えると、V2「潰す」の目的語の【対象】である「パン」や「手鏡」は、V1「座る」という事象においても、【着点】ではなく、【対象】として参与していることを示唆する。

また、[他動詞-他動詞]_vの「見回す」、「見上げる」、「見交わす」、「見返す」、「見渡す」、「見通す」、「見下ろす」、「見据える」において、この場合、「太郎は部屋を見回した」のように、後項動詞は視線の使役移動を表し、その意味上の目的語は複合動詞全体の目的語である「部屋」ではなく、「視線」である(松本 1998: 62-63)。このようなV2の意味上の目的語である「視線」は、「見る」においては周辺的事象参与者として事象に参与する。

⁵⁰ Proto-Patient という概念については 5.4 で改めて説明する。

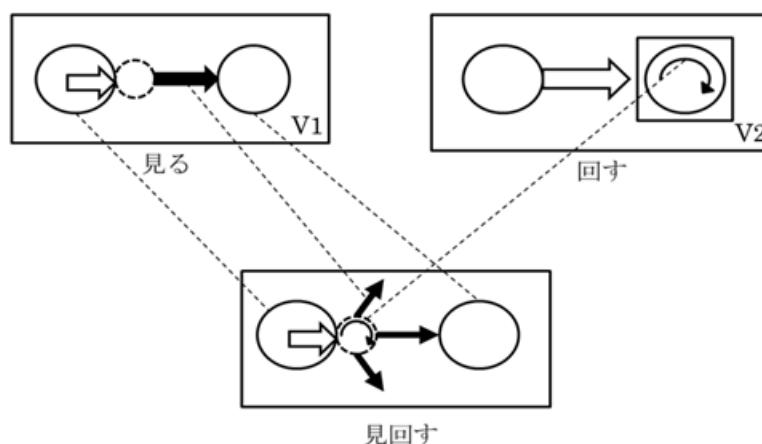


図 5-10 「見回す」のイメージスキーマ

(左の○は認知主体，右の○は対象，白い矢印は使役，黒い矢印は移動の方向，点線の○は抽象的放射物，各要素を繋ぐ点線は対応関係を表している)

松本 (1998: 61-62) で述べているように「照りつける」，「にらみつける」，「怒鳴りつける」などのいわゆる「強意の「つける」」も同様である(姫野 1975 も参照)。これらの複合動詞は何らかの抽象物(光，視線，言語メッセージ)を移動させる事象を表すものであるが，これらの抽象物は目的語としては現れない。このような抽象物も V1「照る」，「にらむ」，「怒鳴る」が表す事象に参加する必要がある。

このように，複合動詞の意味の正確な記述には，項の同定よりもより細かな，事象参与者というフレーム要素への言及が必要である。

5.3.4 V1 と V2 の取る対象が異なる場合の意味形成

次に，関連事象というフレーム要素の必要性を示すために複合動詞の V1 と V2 の対象が異なる場合において全体の意味がどのように形成されるのか，ということについて検討する。

通常の複合動詞は V1 と V2 の主語が一致するだけでなく，目的語も同一である場合が多い。例えば，「ドアを蹴り破る」や「石を持ち上げる」などは V1 と V2 の目的語が同じ対象を指している。しかし，複合動詞の中には，一部 V1 と V2 の指す対象が異なるものが存在する。その例として，「洗い落とす」や「割り入れる」などが挙げられる。

- (30) a. 熱いシャワーが、汗を洗い落とすて行く。(BCCWJ 赤川次郎『愛情物語』)
 b. ボウルに卵を割り入れて泡立て器でほぐし砂糖とラム酒を加えて、砂糖が溶けるまでよく混ぜる。(BCCWJ 舘野鏡子『お菓子作り入門』)

上の例のように、「洗い落とす」や「割り入れる」のような V1 と V2 の対象(「洗い落とす」V1: 体, V2: 汗; 「割り入れる」V1: 卵, V2: 卵の中身)が異なる場合、全体の複合動詞の意味がどのようにして合成されるのかは大きな課題であった(影山 1996, 浅尾 2007, 由本 2011 を参照)。

例えば、影山 (1996) は「卵を割り入れる」について次のように述べている。

- (31) 行為 \longrightarrow 状態変化の産物 \longrightarrow 位置変化
 x CONTROL [y BECOME [[y BE AT-STATE] and [y' BE AT-PLACE]]]

この概念構造で、y を「卵」、y' を「卵の中身」とすると、y と y' は完全に同一物ではないものの、全体と部分の関係にあるという点で、同一物相当と見なすことができ、したがって概念構造で合成されたときに、内項(y と y') の同定が許される。

(影山 1996: 235-236)

また、由本 (2011) によると、このタイプの複合動詞の形成には、目的語の知識のみが関わっているのではない。例えば、「割り入れる」の場合は、「卵」についての知識、すなわち[殻と黄身・白身の中身からなる]という情報だけでは不十分で、それに加えて、「割る」という動詞が卵を目的語とした場合、<殻を壊す>という意味になるという知識があるからこそ、「割る」ことによって「入れる」のは卵の中身であるという解釈が導かれるのであるという。そして、結果として、二つの目的語が同一の物体であるかのごとく同定され、「割り入れる」という複合動詞が容認されると考えられると述べている(由本 2011: 157-158)。

しかし、「割る」という動詞が卵を目的語とした場合に<殻を壊す>という意味になるとしても、「入れる」の対象が殻を含まないものであるという解釈はどのようにして生じるのか、という疑問が残る。

結果構文(resultative constructions)でも同様の問題が項の同定の観点から分析されている。

例えば, Kratzer (2005) は下のドイツ語の例を挙げて分析している。

(32) Die Teekanne leer trinken.

the teapot empty drink

‘To drink the teapot empty’

(32)における *Teekanne* (teapot)は *leer* (empty)の項であるが, *trinken* (drink)の項ではない。このような場合において, 項として結ばれる「ティーポットが空になる」という結果を引き起こすには, 「飲む」の対象が「ティーポット」ではなく, 「ティーポットの中身」でなければならない。このように, *Teekanne* は *trinken* の項ではないが, 因果関係による推論で結果構文として成立できると分析している。

このような因果関係による推論は例文(28a)の「汗を洗い落とす」の意味形成を説明することができる。項として結ばれる「汗を落とす」はこの場合「洗い落とす」という事象における結果事象である。この結果事象を引き起こすには, 「洗う」の対象が「汗」ではなく, 必然的に「汗のついた体」となる。

しかし, 上述の分析は「卵を割り入れる」には適用できない。この場合, 「卵」という名詞句は V1 と V2 両方の項であるため, 項として結ばれるのは「卵を入れる」と「卵を割る」という二つがある。「卵を割る」という表現については, 「卵の殻を割る」という意味を表しているとする。ここで問題になるのは, 「卵を入れる」という表現において, 実際に入れるのは何か, ということである。そのためには, 項として結ばれる「卵を割る」を見る必要がある。「卵を割る」というのは「割り入れる」という事象においては, 結果事象ではなく, 原因となる事象でもない。「卵を割る」という事象は「卵を入れる」という結果事象の準備事象に相当するものである。この場合において, 「卵を割る」という準備事象となる事象が起こったとして, 「入れる」のが卵ではなく卵の中身であるとは導き出せない。なぜなら, これは因果関係に基づく推論によって得られる様々な結果のうちの一つに過ぎないからである。「卵を割る」という準備事象に基づく結果としては, 「入れる」ものは卵全体でもいいし, 卵の殻だけでもいいのである。このように, 「卵を割り入れる」という事象において, 「入れる」のが卵の中身であることは因果関係による推論からでは導き出すことができず, 我々が持っている, 卵を調理する際の

百科事典的知識に基づくものである⁵¹。

本研究ではフレーム意味論的アプローチによってこの問題を解決することができると思う。「割り入れる」の例に入る前に、「割る」という単独動詞の意味フレームを見てみよう。

表 5-14 「割る」の意味フレーム

[waru]v↔[E] 背景フレーム：分解フレーム	
中心 事象	【行為者】が【道具】を用いて、ある【全体的な対象】に力を加えることで【全体の一部】に分解する
事象 参与者	<p>【行為者】：【全体的な対象】を分解するために意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【全体的な対象】：本来はまとまった状態にあるが、【行為者】の働きかけを受けて分解するもの。</p> <p>【全体の一部】：【行為者】の働きかけによって【全体的な対象】が分解されたあとのもの。</p> <p>【道具】：【行為者】が【全体的な対象】を分解するために操作するもの。</p> <p>【接触物】：【行為者】が【全体的な対象】を分解するために利用する【全体的な対象】と接触する固いもの。</p>
関連 事象	<p>目的 (【全体の一部】を利用するため；…)</p> <p>結果 (【全体的な対象】の本来の機能が失われる；…)</p> <p>前提的背景 (【全体的な対象】は一定の硬さのある固体である；…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>

表 5-14 が示すように、「割る」の意味フレームの事象参与者には、「割る」の目的語として具現化する【全体的な対象】だけではなく、分解したあとにできる【全体の一部】というフレーム要素が存在する。

⁵¹ 「卵」が多義であり、中身を指す場合と、全体を指す場合があると考えられる。しかし、「卵」が多義だとしても「(卵)を割り入れる」において「割る」のは「卵」の全体で、「入れる」のは「卵」の中身であるとする理解するには卵を調理する際の百科事典的知識が必要となる。

そして、「割る」がほかの動詞と結合し、複合動詞になると、複合動詞全体の目的語は【全体的な対象】を指す場合と、【全体の一部】を指す場合に別れる。「(木を)割り裂く」という場合では、複合動詞全体の目的語は【全体的な対象】という事象参加者を指している。それに対して、(33)の「割り当てる」においては、複合動詞全体の目的語は【全体的な対象】(全ての機能)ではなく、【全体の一部】(特定の機能)を指している(この場合 V1「割る」は<分解する>という具体的な意味ではなく、抽象的なく分割する>という意味を表している)。

(33) 十字キーとSETボタンに特定の機能を割り当てます。

(BCCWJ デジタル capa, Capa 合同編集『キヤノン EOS Kiss デジタル N キャッチアップ book』)

では、「割る」のフレーム要素に【全体的な対象】と【全体の一部】が含まれているということ踏まえた上で、「割り入れる」という複合動詞について見よう。「割り入れる」において、V2「入れる」の対象が V1「割る」における【全体的な対象】を指すのか、それとも【全体の一部】を指すのかはニュートラルであり、背景フレームの知識によって補完される。

まず、「卵を割り入れる」の場合を考えてみよう。この場合、目的語の「卵」によって、〈卵の調理〉という背景フレームが喚起される。そして、卵の調理についての背景知識によって、V1「割る」の対象が【卵の殻】であること、そして、関連事象の【結果】が(殻が割れ卵の中身が取り出せる状態になる)というものに特定される。

表 5-15 意味フレームに基づく「(卵を)割り入れる」の意味形成

<p>$[wari-ireru]_{v \leftrightarrow} [E_i \text{ IS THE PRE-ACTION OF } E_j]$</p> <p>背景フレーム：〈卵の調理〉フレーム</p>	
中心 事象	<p><u>【行為者】が【卵】に衝撃を加え分解する_{v1} ことを準備段階で行った上で、【行為者】が【卵の中身】を【容器】の中に移動させる_{v2}</u></p>
事象 参加者	<p>【行為者】:【全体的な対象】を分解するために意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。</p> <p>【卵】:主に鶏によって体外に生み出されたもので、【卵の殻】の中に黄身と白身からなる【卵の中身】が含まれている。</p>

	<p>【卵の中身】:【行為者】の働きかけによって【卵】が分解されて取り出されるもの。 【容器】:ある境界を持ち, それにとって内部と外部に分けられるもの。【卵の中身】を入れるために外部から内部へ通る部分が開いている。 【卵の殻】:【卵の中身】を覆って保護している固いもの。 【道具】:【行為者】が【卵の殻】を破壊するために操作するもの。 【接触物】:【行為者】が【卵の殻】を破壊するために利用する【卵の殻】と接触する固いもの。</p>	
関連 事象	<p>結果 (【卵の中身】が【容器】の中に入る; …) 前提的背景 (【卵】に殻が付いている; 【卵】が生である; …) 目的 (【卵】を調理するため; …) :</p>	
	V1「割る」	V2「入れる」
中心 事象	【行為者】 が 【卵】 に衝撃を加え分解する	【行為者】 が 【卵の中身】 を 【容器】 の中に移動させる
事象 参与者	<p>【行為者】:【全体的な対象】を分解するために意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【卵】:主に鶏によって体外に生み出されたもので, 【卵の殻】の中に黄身と白身からなる【卵の中身】が含まれている。 【卵の中身】:【行為者】の働きかけによって【卵】が分解されて取り出されるもの。 【卵の殻】:【卵の中身】を覆って保護している固いもの。 【道具】:【行為者】が【卵の殻】を破壊するために操作するもの。</p>	<p>【行為者】:【卵】を分解するために意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【卵の中身】:【行為者】の働きかけによって【卵】が分解されて取り出されるもの。 【容器】:ある境界を持ち, それにとって内部と外部に分けられるもの。 【卵の中身】を入れるために外部から内部へ通る部分が開いている。</p>

	【接触物】:【行為者】が【卵の殻】を破壊するために利用する【卵の殻】と接触する固いもの。	
関連事象	<p>目的 (【卵の中身】を取り出すため;【卵の中身】を容器に入れるため;…)</p> <p>結果 (【卵】の殻が割れ【卵】の中身が取り出せる状態になる;…)</p> <p>前提的背景 (【卵】に殻が付いている;…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>	<p>前提的背景 (【卵の中身】を移動できる状態にする;…)</p> <p>目的 (【卵】を調理するため;…)</p> <p style="text-align: right;">⋮</p>

そして、V1「割る」の結果により、【卵】が【卵の殻】と【卵の中身】に分割されるという情報が得られる。その上で、卵の調理についての百科事典的知識により、V2「入れる」の対象が【卵の殻】ではなく【卵の中身】となる。

ただし、「(卵を)割り入れる」のV2「入れる」の対象は必ずしも【卵の中身】であるとは限らない。特定の背景知識があれば、【卵の殻】もV2「入れる」の対象となりうる。例えば、卵の殻の内側にある薄膜のことを「卵殻膜」というが、その主成分はタンパク質で、二層の網目状構造を持ち、古くは力士が怪我をした際に傷口に卵殻膜を貼り、傷を早く治したと言われている。そして、卵殻膜を細かくする技術、水に溶けるようにする技術により、食品や化粧品、繊維等、様々な商品に使用されており、水に溶ける卵殻膜には、ヒアルロン酸を産生する繊維芽細胞、肌のハリを保つのに必要なコラーゲンを増やす働きがあると言われている⁵²。このような〈卵殻膜〉フレームの背景知識があると、(34)におけるV2「入れる」の対象が【卵の殻】であると理解することが可能となる。

(34) この工場では卵殻膜を集めるために専用の機械を使って大きな容器の中に卵を割り入れている。

⁵² <http://www.kewpie.co.jp/finechemical/materials/shellmembrane.html>

この例から、「卵を割り入れる」において、実際に入れるのが何であるかを決定するのは、名詞の「卵」の知識だけではなく、〈調理〉や〈卵殻膜〉フレームの知識が必要であることが分かる。

また、「カレーのルーを割り入れる」のような場合は、〈カレーの調理〉フレームの百科事典的知識により、V1「割る」の【結果】が(ルーの【全体】が分割され、いくつかのルーの【部分】ができる)となり、そして、卵の場合とは違い、V2「入れる」の対象がルーの【部分】となる。

本節で示したように、ある動作と関連する関連事象という概念を導入することによって、「割り入れる」のような複合動詞の動的な意味形成を説明することが可能となる。また、同じ語でも背景知識によって意味の解釈が変わってくることを確認した。

5.4 事象参与者と項

「事象参与者」というフレーム要素が複合動詞の意味形成に関わることを見てきたが、本節では事象参与者という概念に基づいて、日本語複合動詞の項形成における問題点を説明する。

5.4.1 先行研究の問題点

第二章で述べたように、複合動詞の形成について、由本 (1996, 2005), Matsumoto (1996a), 松本 (1998) は意味構造で行われると考えているのに対し、影山 (1993) では項構造において行われると主張している。影山 (1993) やその後の Fukushima (2005) などの研究は、複合動詞全体の項構造が V1 と V2 の項構造に基づいて形成される、と考える点で共通している。

本研究は項の代わりに、動詞の意味フレームにおけるフレーム要素である「事象参与者」という粒度の高い意味的要素を分析のツールとして取り入れる必要があると考える。影山 (1993) が項の同定として扱った内容を、本研究では意味フレームにおけるフレーム要素である事象参与者の合成として扱う。複合動詞の意味形成に、項として実現されるとは限らない事象参与者が関わっており、二つの動詞の意味構造が合成されることで、本来項ではなかった意味的要素が複合動詞の意味構造が表す複合事象にとって重要な役割を担うようになり、複合動詞全体の項として実現される場合がある。

5.4.2 事象参加者の合成に基づく一般的な項形成

本節では、V1 と V2 の事象参加者同士が合成されて、各動詞が独立して使われる時と同じ形で項として用いられる場合について見る。

まず、事象参加者の合成がどのようにして行われるのか、ということについて説明する。本研究は V1 と V2 が結合する際には、「意味的整合性の原則(The Semantic Coherence Principle)」に基づいて、意味的に不整合が生じないように V1 と V2 のフレーム要素が合成(fuse or unify, Goldberg 1995, Goldberg & Jackendoff 2004 を参照)される必要があると考える。意味的整合性の原則とは、意味的に適合する意味役割だけが合成できるというもので、意味的に適合するには、一方の意味役割がもう一方の意味役割の事例でなければならぬ。

(35) The Semantic Coherence Principle(Goldberg 1995: 50)

Only roles which are semantically compatible can be fused. Two roles r_1 and r_2 are semantically compatible if either r_1 can be construed as an instance of r_2 , or r_1 can be construed as an instance of r_2 .

このような意味的な適合性は意味フレームに含まれる情報に基づいている。例えば、「叩き壊す」を見てみよう。

表 5-16 「叩き壊す」の意味フレーム

<p>$[tataki_{i-TR}-kowasu_{j-TR}]_{V \leftrightarrow} [E_j \text{ BY } E_i]$ 背景フレーム：〈破壊〉 フレーム</p>	
中心 事象	<p><u>【行為者】が【道具(手)】を用いて【対象】に打撃を与える_{v1} ことによって【対象】の本来持っていた性能を失わせる_{v2}</u></p>
事象 参加者	<p>【行為者】：【対象】の機能を失わせる意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【対象】：機能が失われるもの。 【道具(手)】：【行為者】が【対象】の機能を失わせるために用いる手または</p>

	手に持つもの。 【付随音】:【行為者】が【対象】に働きかける際に発生する音。	
関連事象	目的 (【行為者】の怒りを発散するため;【対象】に入っている内容物を取り出すため;…) 前提的背景 (【対象】は何かの性能を持っている;…) 結果 (【対象】の機能が失われる;破壊に伴う【付随音】が発生する;…) 理由 (【行為者】に何か不満があったから;…) …	
	V1「叩く」	V2「壊す」
中心事象	【行為者】が【道具(手)】を用いて【対象】に打撃を与える	【行為者】が【道具】を用いて【対象】の本来持っていた性能を失わせる
事象参与者	【行為者】:【対象】の機能を失わせる意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【道具(手)】:【行為者】が【対象】の機能を失わせるために用いる手または手に持つもの。 【対象】:機能が失われるもの。 【付随音】:【行為者】が【対象】に働きかける際に発生する音	【行為者】:【対象】の機能を失わせる意図的な行為を行う意思的な主体(通常は人)。 【道具】:【行為者】が【対象】の機能を失わせるために用いるもの。 【対象】:機能が失われるもの。
関連事象	目的 (【対象】を破壊するため;【対象】を変形させるため;音を出すため;…) 結果 (【対象】の機能が失われる)	手段 (【対象】に【道具】で打撃を与えることで;【対象】に圧力を与えることで;…) 結果 (【対象】の機能が失われる)

	理由 (【行為者】に何か不満があったから)	理由 (【行為者】に何か不満があったから)
	⋮	⋮

表 5-16 は「叩き壊す」の意味フレームであるが、その中で事象参加者を繋ぐ点線は意味的に適合する、つまり同一物として合成できるということを表している。どの事象参加者とどの事象参加者が意味的に適合するかは、意味フレームに含まれる情報によって決まる。

なお、このようにして合成された複合動詞の事象参加者は、Dowty (1991) の主語として実現する条件として挙げられた典型的な動作主(Proto-Agent)の性質、及び直接目的語として実現する、いわゆる典型的な被動作主(Proto-Patient)の性質に基づいて、どの参加者が複合動詞の主語、目的語として実現されるのかが決定される。Proto-Agent 及び Proto-Patient の特性は以下のようなものである(Dowty 1991: 572)。

(36) Contributing properties for the Agent Proto-Role:

- a. volitional involvement in the event or state
- b. sentence (and/or perception)
- c. causing an event or change of state in another participant
- d. movement (relative to the position of another participant)
- e. exists independently of the event named by the verb

(37) Contributing properties for the Patient Proto-Role:

- a. undergoes change of state
- b. incremental theme
- c. causally affected by another participant
- d. stationary relative to movement of another participant
- e. does not exist independently of the event, or not at all

より多くの Proto-Agent の特性を持つものが主語として実現し、Proto-Patient の特性を多

く持つものは目的語として実現する。事象参加者がどのような特性を持っているのかは、意味フレームにおける中心事象の **action chain** の順序や関連事象に含まれる情報に基づいていると考えられる。「叩き壊す」の場合は、事象参加者についての情報から、【行為者】が意思的であること、【対象】が影響を受けて状態変化するものであること、そして、中心事象の事象参加者の順序から、【行為者】が力の伝達の源であること、【対象】がその力を直接受けるものであることが分かる。そのため、【行為者】は Proto-Agent として認識され、主語として実現される。一方、【対象】は Proto-Patient として認識され、目的語として実現される。

5.4.3 事象参加者同士が合成されることで、動詞が独立して使われるときよりも項への制約がきつくなる場合

前述のように、本研究は、複合動詞の項が影山 (1993) の主張する受け継ぎによって形成されたものではなく、V1 と V2 の事象参加者の合成によるものであると主張する。この根拠として、複合動詞の項は構成要素の両方の動詞から制約を受ける場合がある。次の例文を見てみよう。

(38) あのバンドは 100 万枚のアルバムを {売り上げた／売った／*上げた}。

(38)において、「売り上げる」の「100 万枚のアルバム」という項は、V1「売る」の項であるが、V2「上げる」の項ではない。この場合、第二章で見たような影山 (1993) の項の受け継ぎという説明では、「売り上げる」における「100 万枚のアルバム」という項は、V1「売る」から直接受け継いだものだということになる。そして、「売る」における「100 万枚のアルバム」という項は売る対象となる【商品】という意味要素を表していると思われる。しかし、「売り上げる」において、(39)のように、【商品】という意味要素はそのままでは「売り上げる」の項にはなれない。

(39) *あのバンドはアルバムを売り上げた。(cf. アルバムを売った)

【商品】という意味要素を表している「アルバム」は、「売る」の項にはなれるが、「売り上げる」の項にはなれないのである。このことから、【商品】という意味要素は「売り上げる」の目的語となる場合には、「100万枚のアルバム」のように、量を持つことが必要とされることが分かる。この事実は複合動詞全体の項構造が、影山 (1993) の主張する構成要素の項構造の受け継ぎによって形成されるのではないことを示している。本研究ではこのような現象を、V1「売る」の【商品】というフレーム要素とV2「上げる」の【量的な対象】というフレーム要素が合成した結果だと考える。

表 5-17 「売り上げる」の意味フレーム

$[uri_{i-TR}-ageru_{j-TR}]_{V\leftrightarrow}[E_j \text{ BY } E_i]$ 背景フレーム：〈商取引〉フレーム；〈量の変動〉フレーム					
中心 事象	<u>【売り手】</u> が繰り返し <u>【商品】</u> の所有権を <u>【買い手】</u> に渡す代わりに <u>【お金】</u> をもらう _{v1} ことによって <u>【売上】</u> を得る _{v2}				
事象 参与者	<p>【売り手】：【商品】の所有権を持ち、【お金】と交換にそれを【買い手】に渡す人または組織。</p> <p>【商品】：【お金】と交換できる量的なもの。</p> <p>【売上】：ある【期間】において、【売り手】が【商品】と引き換えに得るものの合計。</p> <p>【買い手】：【お金】を所有し、【商品】を手に入れたい人または組織。</p> <p>【お金】：【売り手】が【商品】と引き換えに得るもの。</p> <p>【期間】：【売り手】が【商品】を販売する時間</p>				
関連 事象	目的 (【お金】を得るため；…) 前提的背景 (一度限りの取引ではない；…) 結果 (【売り手】が儲かる；…) 様態 (一気に；徐々に；…) …				
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 50%; text-align: center;">V1「売る」</th> <th style="width: 50%; text-align: center;">V2「上げる」</th> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">中心</td> <td style="text-align: center;">中心</td> </tr> </table>	V1「売る」	V2「上げる」	中心	中心
V1「売る」	V2「上げる」				
中心	中心				
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">中心</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">中心</td> </tr> </table>	中心	中心		
中心	中心				

事象	【 い手 】に渡す代わりに【 お金 】をもら う	【 ケール 】を【 値1 】から漸進的に増 加させ、最終的な【 値2 】を得る
事象 参与者	【 売り手 】:【 商品 】の所有権を持ち、 【 お金 】と交換にそれを【 買い手 】に 渡す人または組織。 【 商品 】:【 お金 】と交換できるもの。 【 買い手 】:【 お金 】を所有し、【 商品 】 を手に入れた人または組織。 【 お金 】:【 売り手 】が【 商品 】と引き 換えに得るもの。	【 行為者 】:【 量的な対象 】を増加さ せる人または組織。 【 量的な対象 】:変動する【 スケール 】 を持つもの。 【 スケール 】:【 量的な対象 】が持つ 段階的な性質 【 値1 】:【 量的な対象 】の【 スケール 】 の初期値。 【 値2 】:【 量的な対象 】の【 スケール 】 の終値。
関連 事象	目的 (【 お金 】を得るため； 借金を返済するため； …) 結果 (【 商品 】の所有権が【 買 い手 】に移る；…) 前提的背景 (【 売り手 】が【 商品 】 を所有している；…) ⋮	手段 (【 量的な対象 】を売ること で；…) 結果 (【 行為者 】は【 量的な対象 】 の所有権を失う；…) 前提的背景 (【 行為者 】は【 量的な対象 】 の【 スケール 】を増加させ たいと思っている；…) ⋮

V2「上げる」は、ここでは抽象的な意味で使われているため、〈量の変動 (Cause_change_of_position_on_a_scale)〉という背景フレームを喚起し、【行為者】がある【スケール】を持つ【量的な対象】を【値1】から漸進的に増加させ、最終的な【値2】を得る、という意味を表す。

つまり、「売る」と「上げる」が結合して複合動詞化する際には、本来「売る」が単独動詞として使用される場合の【商品】というフレーム要素は、「上げる」における【量

的対象】と意味的な整合性を保つために【量的な商品】として合成されるのである。

(40)のように、「売り上げる」は商品を直接項として取る場合、副詞的要素で売上数を表す枚数を入れると文の容認度が上がる。

(40) あのバンドはアルバムを100万枚売り上げた。

しかし、この場合も「売り上げる」が取る項は【量的な商品】であり、副詞的な要素によって、「アルバム」というものが【量的な商品】として解釈されると考えられる。加えて、表5-17で示されているように、V1「売る」の【お金】という要素はV2「上げる」の【値2】と合成し、【売上】として理解される。

このように、複合動詞全体の項は、単に主要部のものを引き継いだものではなく、非主要部のV1の制限も受けるため、V1とV2の事象参加者が合成したものであることが分かる。

5.4.4 事象参加者同士が合成されることで、動詞が独立して用いられるときと異なる項が実現する場合

次に、「食べ歩く」と「飲み歩く」について見てみよう。

(41) a. 太郎は全国を {食べ歩いた／*食べた／歩いた}。

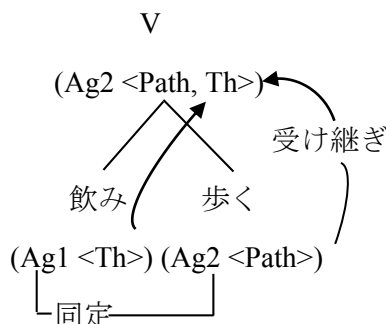
b. 太郎は三宮を {飲み歩いた／*飲んだ／歩いた}。

(42) a. 太郎は美味しいラーメンを {食べ歩いた／食べた／*歩いた}。

b. 太郎は美味しい日本酒を {飲み歩いた／飲んだ／*歩いた}

上の例文が示すように、「食べ歩く」と「飲み歩く」はV1とV2の両方の項を持っている。これに対して、影山(1993: 107-108)は第二章で述べたように、主要部と非主要部の両方から項を受け継ぐものだと考えている。

(43) 主要部と非主要部からの受け継ぎ：「夜の街を酒を飲み歩く」(影山 1993: 107)



そして、V1 と V2 の目的語の意味役割が異なる場合には、二つの意味役割が θ 同定を受けずに、V2 の項構造はそのまま引き継がれ、そこに欠けている情報が V1 から補充される、と述べている⁵³。

しかし、「食べ歩く」や「飲み歩く」において、構成要素の項ではないものが全体の項として現れる現象が見られる。

- (44) a. 太郎は全国のラーメン屋を {食べ歩いた/*食べた/*歩いた}。
 b. 太郎は仲間と三宮のバーを {飲み歩いた/*飲んだ/*歩いた}。

V1 の「食べる」や「飲む」の目的語の項は食べ物であるため、「ラーメン屋」や「バー」は明らかに V1 の項ではない。一方、V2 「歩く」が取る項は、「山道を歩く」における「山道」のように、移動の「経路」として見なされるものである。しかし、(44)の「バーを飲み歩く」における「バー」は、そのままでは「歩く」の「経路」としては認識されない。「バーの中を歩く」は問題ないが、「*バーを歩く」は不自然な表現であるからだ。このような現象は複合動詞化が影山 (1993) の主張しているような項構造の合成では説明できない。と同時に、複合動詞化が二つの動詞の意味構造の合成であるという由本 (1996) や Matsumoto (1996a) の主張を支持するものである。ここで問題となる

⁵³ ただし、一文中における二つ以上の対格(ヲ格)の生起を禁じる制約である二重対格制約 (double-o constraint, Harada 1973)により、V1 と V2 の目的語に当たる項が同時にヲ格で現れることはない。

のは、どのような意味構造を想定することでこのような現象を説明できるのか、ということである。

本研究は項の代わりに、動詞の意味フレームにおける「事象参与者」という粒度の高い意味的要素を分析のツールとして取り入れる必要があると考える。

(44)の「ラーメン屋を{食べ歩いた/*食べた/*歩いた}」や「バーを{飲み歩いた/*飲んだ/*歩いた}」における「ラーメン屋」や「バー」は複数であると解釈され、V1「食べる」、「飲む」が喚起する〈摂食(Ingestion)〉という背景フレームにおける周辺的事象参与者である【飲食の場所】であり、同時にV2「歩く」が喚起する〈主体移動(Self_motion)〉の中心的事象参与者である【経路】の一部を構成する場所でもある。

表 5-18 「食べ歩く」の意味フレーム

$[tabe_i-TR-aruku_j-INT]_{V\leftrightarrow} [E_j-MOTION\ IN\ THE\ MANNER\ OF\ E_i-MANNER]$ 背景フレーム：〈摂食〉フレーム；〈主体移動〉フレーム	
中心 事象	<u>【摂食者】が【足】を使って【複数の飲食の場所=経路】を移動する_{v2}間に【複数の飲食の場所】で【食べ物】を【口】に入れ、【お腹】の中に飲み込む_{v1}</u>
事象 参与者	【摂食者】：【食べ物】を摂取するために移動する人。 【食べ物】：【摂食者】が摂取して消化できる複数のもの。 【複数の飲食の場所=経路】：【摂食者】が【食べ物】を摂取するために複数の【飲食の場所】の間を移動する際に形成される道筋。 【飲食の場所】：【食べ物】がある場所。 【足】：【摂食者】の、胴体から分かれ、歩行に使用する身体部位。 【口】：【摂食者】が【食べ物】を入れて嚙む身体部位。 【お腹】：【摂食者】が【食べ物】を飲み込む身体部位。
関連 事象	目的 (様々な【食べ物】を味わうため；…) 前提的背景 (【摂食者】は【お腹】が空いている；…) 結果 (【摂食者】の【お腹】が一杯になる；…) …

	V1「食べる」	V2「歩く」
中心 事象	【摂食者】が【食べ物】を【口】に入れ、【お腹】の中に飲み込む	【移動主体】が【足】を使って【経路】を移動する
事象 参与者	<p>【摂食者】:【食べ物】を摂取する人。</p> <p>【食べ物】:【摂食者】が摂取して消化できるもの。</p> <p>【飲食の場所】:【食べ物】を出す場所。</p> <p>【足】:【摂食者】の、胴体から分かれ、歩行に使用する身体部位。</p> <p>【口】:【摂食者】が【食べ物】を入れて嚙む身体部位。</p> <p>【お腹】:【摂食者】が【食べ物】を飲み込む身体部位。</p>	<p>【移動主体】: 移動する人。</p> <p>【経路】:【移動主体】が移動する道筋。</p> <p>【足】:【移動主体】の、胴体から分かれ、歩行に使用する身体部位。</p>
関連 事象	<p>目的 (【食べ物】の味を研究するため;【お腹】を満たすため;…)</p> <p>結果 (【摂食者】の【お腹】が満たされる;…)</p> <p>前提的背景 (【摂食者】の【お腹】が空いている;…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>	<p>目的 (【食べ物】の味を研究するため; 運動するため;…)</p> <p>結果 (【移動主体】が疲れる;…)</p> <p>前提的背景 (【移動主体】は【足】に怪我をしていない;…)</p> <p style="text-align: center;">⋮</p>

ではなぜ「ラーメン屋」などの本来経路としては認められないものが V2「歩く」の【経路】として認識されるのかということ、それは「食べ歩く」という複合動詞が様態—移動型のものであり、Matsumoto (1996a), 松本 (1997, 1998) が主張しているように、様態を含む動詞においては、その様態が主要な出来事と同じ期間に継続するものでなければならないという「時間的共起性の条件」があるからだ。「食べ歩く」や「飲み歩く」はこの条件により、繰り返しの解釈を受けるのである。では、なぜ<食べながら歩く>

や<飲みながら歩く>という意味にはならないのか。それは、表 5-18 のように、店をはしごするという意味での「食べ歩く」や「飲み歩く」は、V1 と V2 に共通する目的(【食べ物】の味を研究するため；など)が存在しており、第四章で見たような共通目的様態型として成立できるのに対し、<食べながら歩く><飲みながら歩く>においては、V1 と V2 の間に因果関係に基づく必然的な共起性(共通の原因や目的)がないからだと考えられる。

そして、図 5-11 のように、複数の場所(ラーメン屋など)で飲食するには、一軒の店から次の店へと移動する必要があり、それが結果として移動の経路となるのである。

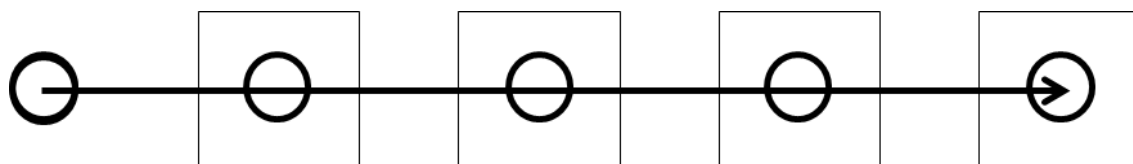


図 5-11 「食べ歩く」, 「飲み歩く」における【経路】⁵⁴

Lakoff(1987) が述べているように、複数の点がある場合、点から点へと移動することで経路として認識されるのである。

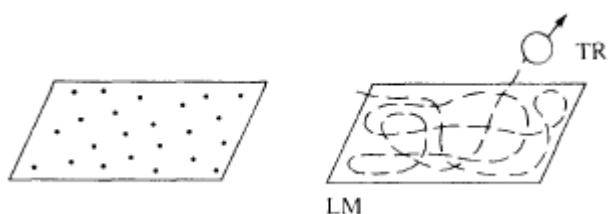


図 5-12 点から経路が形成されるイメージスキーマ (Lakoff 1987: 428-429)

(LM はランドマーク=地, TR はトラジェクター=図)

つまり、複合動詞「食べ歩く」「飲み歩く」において、「ラーメン屋」や「バー」は【複数の飲食の場所=経路】である。

⁵⁴ 図 5-11 の丸は Figure であり、この場合は移動主体である。四角は Ground でこの場合は店を表している。矢印の線が移動及びその方向を表し、太線の部分は焦点化されていることを表す。

また、興味深い現象として、(45)の「飲み歩く」のように、経路上の移動は少なくとも最初から最後まで徒歩でなくてもいいと思われる。

(45) 世界中の地酒を飲み歩く。

その意味で、「食べ歩く」「飲み歩く」におけるV2「歩く」は「回る」に意味が近い。このような意味的な類似性から、複数の場所を経路として見なすような表現は「回る」にも見られる。

(46) a. 全国のラーメン屋を回った。

b. #一軒のラーメン屋を回った。(ラーメン屋の周りをぐるりと回った意味になる)

「回る」が取る目的語は経路として認識されるものでなければならない。「ラーメン屋を回った」のような、店の数を特定する文脈がない場合においては、「ラーメン屋」は複数あるものとして解釈される。これも複数の店の間を移動することによって、経路が形成されるためである。

5.5 複合動詞の適格性

本研究では「複合動詞の適格性」というものが一つの大きな研究課題である。そして、四章と五章で本研究が主張する複合動詞の複層的制約を見てきた後で、本節では、複合動詞の適格性とはどのようなもので、どのように決定されるのか、ということについて考察する。具体的に、従来の文法的な適格性と意味的な適格性に加え、使用頻度に基づく「耳馴染み度」という概念(秋永 1985 なども参照)を取り入れる必要があると主張する。

5.5.1 影山 (1993) における「レキシコンへの登録」説

影山 (1993: 354-355) は、文の許容度(容認度)が文法的か非文法的かという二分法で

判断されるのに対して、語の適格性は (a) 実在する, (b) 実在しないが当該の言語として可能である, (c) 実在せず当該言語でもともと不可能である, という三つの部類に判断されると主張した。そして、語については辞書に登録されているということが実在するということである。また、語彙部門における語形成の派生結果は全て辞書に登録されており、それによって、新しい語が作られたとき、それを耳慣れない語であると判断することができる、と述べている。

上述の三つの部類を詳しく見ていくと、まず(c)の部類についてだが、これは本研究の第四章で見てきたような複合動詞のコンストラクショナルな制約に反するものに相当するものである。「*購買し取る(cf. 買い取る)」や「*削り除去する(cf. 削り落とす)」のような和語単純動詞の組み合わせでないもの、「*叩く壊す(cf. 叩き壊す)」や「*打て上げる(cf. 打ち上げる)」のような V1 が連用形でないもの、「*倒し推す(cf. 押し倒す)」や「*走り転ぶ(cf. 走って転ぶ)」のような V1 と V2 の意味関係が特定の意味関係ではないものは完全に不可能な組み合わせとして判断される。一方、(a)の部類に相当するのは、本研究における三つのレベルの制約を満たした「切り倒す」や「叩き潰す」のようなものである。ここで問題となるのは(b)の部類で、このタイプの複合動詞は均一なものではなく、その適格性には程度差が見られる。例えば、「?投げ壊す」と「??撫で壊す」は共に「複合動詞リスト」に収録されていない語で、多くの日本語話者のメンタルレキシコンには登録されていないものだと考えられる。しかし、個人差はあるが普通は「?投げ壊す」より「??撫で壊す」のほうが容認出来ないと感じられると思われる。また、前述した「??嗅ぎ逃す」という組み合わせも、「香水の発表会」というような背景知識があれば完全には成立できないが容認度が上がる、という場合がある。このことから、(b)のタイプは均一ではなく、程度性があることが伺える。

このような容認度の程度性について、本研究では「耳馴染み度」という概念を取り入れることで説明する。

5.5.2 使用頻度に基づく「耳馴染み度」

本研究の考えでは、ある複合動詞がレキシコンに登録されるには、まず基本条件として、その複合動詞は本章で述べたようなコンストラクションレベルの制限、そして複合

動詞のコンストラクションが要求する、本章で述べたような意味フレームレベルの制限に適合する必要がある。どちらか一方の制限だけ満たしても複合動詞としては成立できない。例えば、本章で見た「*撫で壊す」のようなものは、コンストラクションの制約を満たしているが、意味フレームの制約を満たしていないため、複合動詞として成立できない。反対に、「*押し倒れる」や「*押す倒す」のようなものは、意味的には問題ないのだが、コンストラクションの制約に反するため成立できないのである。

では、コンストラクションと意味フレームの両方の制約を満たせば、レキシコンに登録されるのかというと、そうではない。レキシコンに登録されるには、その複合動詞が一定以上の使用頻度を持っていなければならない。コンストラクションと意味フレームの制限に適合した上で、一定以上の使用頻度がある場合は、その語が「耳馴染み度」の高い語としてレキシコンに登録されるようになると考えられる。

複合動詞の適格性について、本研究はある複合動詞が成立するかどうかということは、0 か 100 かという絶対的な基準ではなく、「コンストラクション的な制約への適合性」、「意味フレームの整合性」、そして「耳馴染み度」という複数の基準に基づいて、0~100 までのような段階的な基準を想定する必要があると主張する。そうすることで、個人差によって判断が異なると思われるが、「*壊れ叩く」「*飛び溶ける」のようなまったく聞かないし使わない完全に容認出来ないもの；「??嗅ぎ逃す」「??撫で壊す」のような聞いたこともなく使ったこともないが、意味的に完全に容認不可能とは言えないもの；「?引き開ける」「?投げ壊す」のように、あまり聞かないし使わないが、人によっては容認できるもの；「切り倒す」「叩き潰す」のように、よく聞くし使う完全に容認できるもの；というふうに、複合動詞の適格性を連続的なものとして考えることが可能となる。

表 5-19 複合動詞の適格性

	コンストラクション的制約	意味フレーム的制約	耳馴染み度	適格性
「*壊れ叩く」 「*飛び溶ける」	×	×	×	容認不可
「*押し倒れる」 「*押す倒す」	×	○	×	容認不可

「??嗅ぎ逃す」 「??撫で壊す」	○	×	×	可能だが存在し ない
「?引き開ける」 「?投げ壊す」	○	○	×	可能だが存在す るかどうか微妙
「切り倒す」 「叩き潰す」	○	○	○	存在する

5.6 まとめ

本章はフレーム意味論に基づき、百科事典的知識を含む意味フレームという意味構造を用いることで、複合動詞の意味形成における諸問題を説明できることを示した。複合動詞という二つの動詞の組み合わせについて分析することによって、複合動詞の結合制限を説明するには動詞が表す事象そのものの情報だけではなく、それと関連する事象という背景的知識も必要であり、動詞の意味には従来考えられていたよりも豊かな知識が含まれていることを明らかにすることができた。加えて、多くの複合動詞の意味を詳細に分析することで、項として現れない周辺の事象参加者が複合動詞の意味形成に関わることを明らかにした。そして、従来問題とされてきた「割り入れる」のように、V1とV2の目的語が異なる場合において、複合動詞の意味が意味フレームに基づいて動的に形成されることを示した。また、V1とV2の項として実現されるとは限らないフレーム要素の合成によって、単独用法とは性質が異なる項が複合動詞の項として現れる場合があることを明らかにした。最後に、複合動詞の適格性について、「コンストラクションの制約」、「意味フレームの制約」、そして、「耳馴染み度」という概念を取り入れることで説明できることを示した。

第6章 主語不一致型複合動詞の 形成メカニズム*

日本語の語彙的複合動詞には前項動詞 V1 と後項動詞 V2 の主語が同一物を指さなければならぬという「主語一致の原則」が存在する (松本 1998: 72)。しかしながら、第四章で見たように、複合動詞には一部 V1 と V2 の主語が一致しない「打ち上がる」や「突き出る」、「舞い上げる」、「譲り受ける」、「寝静まる」などの複合動詞がある (松本 1998)。本研究はこのような V1 と V2 の主語が異なるものがどのようなメカニズムによって形成されたのか、ということについて、認知言語学的なアプローチから検討する。

本研究は『日本語複合動詞リスト』の中から、主語不一致型複合動詞を選び出して考察する。従来の研究では主語不一致型複合動詞の例を、自身で収集したものをを用いて分析していたが、客観的なデータに基づいてどのような主語不一致型複合動詞が存在しているのかを明らかにした研究はなかった。また、どういう基準に基づいてその複合動詞が成立していると言えるのか、ということも問題であった。そこで本研究はコーパスのデータに基づくことで客観的に現代日本語に存在していると考えられる主語不一致型複合動詞を収集し、分析を行う⁵⁵。

結論を先に述べると、主語不一致型複合動詞にも様々なタイプがあり、それぞれ異なる認知的な動機付けによって形成されたと考えられる。具体的に言うと、「打ち上がる」「突き出る」は共に「打ち上げる」「突き出す」に基づいて存在しているが、「打ち上がる」が「プロファイルシフト」という焦点の転移に基づくのに対し、「突き出る」は「痕跡的認知」という要因に基づくものである。一方、「舞い上げる」は「舞い上がる」に基づいて存在しているが、これは松本 (1998) など述べたように、「使役化」によるものである。また、「譲り受ける」は「譲り渡す」からの「アナロジー」によって作られ

* 本章は陳 (2014b) を大幅に加筆修正したものである。

⁵⁵ 「～込む」「～去る」「～出す」については松本 (2009) が述べているように、移動動詞と使役移動動詞の2つの用法があると考え、主語不一致型複合動詞とは見なさない。移動動詞の場合、「太郎は部屋の中へと駆け込んだ」のように、V2の「込む」は<部屋の中へ入る>という「太郎」の主体移動を表す。一方、使役移動動詞の場合、「太郎は石を池の中に投げ込んだ」のように、V2「込む」は<石を池の中へ入れる>という「太郎」の使役事象を表す。このように、「駆け込む」においても、「投げ込む」においても、V1とV2の主語は同一物(太郎)を指している。

たもので、「寝静まる」は「メトニミー」によるものである(松本 1998 を参照)。

以下において、これらの主語不一致型複合動詞をタイプごとに検討し、それぞれがどのような条件において起こるのかを示す。

6.1 自動詞化

「打ち上がる」や「突き出る」は、主語が一致する「打ち上げる」や「突き出す」からの逆形成(影山 1993)または自動詞化(松本 1998)によって作られたものであると言われている。松本 (1998) が述べているように、「焼き付ける」→「焼き付く」などの場合は接辞の削除が行われているゆえ逆成と呼べるかもしれないが、「突き刺す」→「突き刺さる」などの場合は接辞が付加されているため、逆成とは考えられない。本研究もこれらの複合動詞が自動詞化によって形成されたと考えるが、先行研究ではどのような条件でこのような自動詞化が起こるのか、ということについてはまだ明らかにされていない。

本節では『日本語複合動詞リスト』の中から、自動詞化したと考えられる複合動詞全 86 語を対象に考察する。そして、自動詞化した複合動詞が「プロファイルシフト」と「痕跡的認知」という二つの異なる認知メカニズムによって生じたものであると主張し、それが発生する条件を明らかにする。

(1) 自動詞化の主語不一致型複合動詞

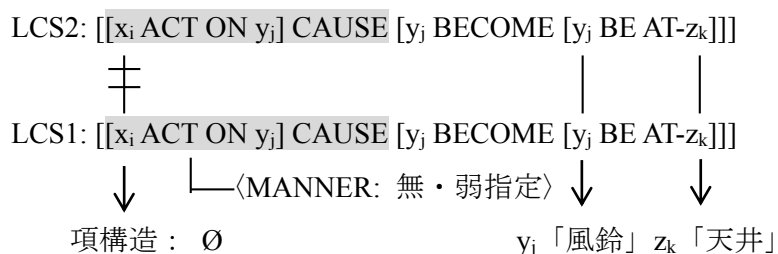
当てはまる、編み上がる、洗い上がる、入れかわる、打ち上がる、打ち当たる、売り上がる、売り切れる、置きかわる、思い浮かぶ、織り上がる、買い上がる、描き上がる、書き上がる、書き換わる、掻き消える、醸し出る、切り替わる、組み上がる、組み合わさる、繰り上がる、繰り下がる、繰り広がる、差し替わる、仕立て上がる、吸い上がる、擦り切れる、擦りむける、染め上がる、炊き上がる、突き上がる、突き刺さる、漬け上がる、付け加わる、煮崩れる、煮立つ、煮詰まる、煮溶ける、縫い上がる、塗り上がる、塗りかわる、練り上がる、乗り代わる、弾き飛ぶ、引き上がる、引き起こる、引き立つ、引きちぎれる、ふき上がる、吹きかかる、吹き散る、吹き飛ぶ、彫り上がる、巻き起こる、巻き戻る、混ぜ合わさる、磨き上がる、見つかる、蒸し上がる、めくり上がる、持ち上がる、焼き上がる、焼き締まる、ゆで上がる、押し上がる、折り重なる、重ね合わさる、着崩れる、突き立つ、突き出る、突き通る、突き抜ける、積み上がる、積み重なる、つり上がる、つり下がる、抜き出る、

抜き出る, ねじ曲がる, はり付く, 引き締まる, 巻き上がる, 巻きつく, 結びつく, 盛り上がる, 焼きつく。

6.1.1 複合動詞の自動詞化についての先行研究

自動詞化について, 陳劼憚 (2010) は(1)のように V1 と V2 の結果の意味が一致する場合にのみ, 複合動詞に自他交替の可能性があると主張している。

(1) 太郎が風鈴を天井に吊り下げる→風鈴が天井に吊り下がる



陳劼憚 (2010: 44)

簡単に説明すると, LCS2 は主要部 V2 「下がる」の LCS で, LCS1 は V1 「吊る」の LCS である。そして, x, y, z は項で, それらを繋ぐ線は同定されることを表している。二つの x(主語として実現する項)が同定されないことを不等号で表している。網掛けの部分は Levin & Rappaport Hovav (1995) における外項に対する抑制を表す。(1)における「吊り下げる」のように, V1 と V2 の LCS の中で結果を表す部分(「風鈴」が「天井」に位置するという状態になる)が一致するため, 自他交替が起こりうるという主張である。

しかし, この主張の問題点として, 「*奪い取れる」や「*切り離れる」などのように, V1 と V2 の結果が一致しても成立できない例が多くある上に, 「打ち上がる」「吹き上がる」「入れかわる」などのような場合において, V1 に V2 の結果が含意されているとは考えにくい。

陳劼憚 (2010) を受けて, 日高 (2012) は意味構造上の動作主を存在量化(非焦点化)する「脱使役化」, そして, 他動詞の使役構造における動作主を目的語と同一視するという「反使役化」という二つの自動詞化のメカニズムがあると主張し, その必要条件として V1 と V2 が使役変化他動詞であることを挙げている。この条件に適合しない「洗い落ちる」や「吹き飛ばす」などは自他の間に対応関係はなく, V1 と V2 が直接結合したも

のだとしている。V1 と V2 が直接結合した根拠として、(2)と(3)のように「洗い落ちる」などの複合動詞は「他動詞／非能格動詞+非対格動詞」の組み合わせの複合動詞と同じ振る舞い(V1 を副詞で修飾できない+否定のスコープが V1 に及ばない)をするからだと言っている。

- (2) a. *健は懸命に走り疲れた。
 b. *シャツの汚れがジャブジャブ洗い落ちた。 (日高 2012: 127)
 (V1 を副詞で修飾できない)
- (3) a. 健は走り疲れなかった。
 b. シャツの汚れが洗い落ちなかった。 (日高 2012: 127-128)
 (否定のスコープが V1 に及ばない)

自動詞化に2つの異なるメカニズムがあるというのは鋭い指摘だが、この主張にはいくつか問題点がある。

まず、(4)と(5)のように、「他動詞／非能格動詞+非対格動詞」の組み合わせであっても全てが同じように振る舞うわけではない。

- (4) a. 美しく {舞う／*落ちる／舞い落ちる}。
 b. わんわん {泣いた／*崩れた／泣き崩れた}。
- (5) a. 彼女は涙をこらえて人前で泣き崩れなかった。 (=泣かなかった)
 b. いつも庭の芝生の上でゴロゴロするポチだが、なぜか今日は寝転ばなかった。
 (=寝なかった)

さらに、重大な問題点として、自動詞化によってできた主語不一致型複合動詞には日高 (2012) が使役変化他動詞ではないとする「洗う」「吹く」などを含むものがあるが、それらの中には V1 を修飾する副詞と共起できるため、例外と見なせないものがある。

- (6) a. 優しく {洗う／*上がる／洗い上がる}。
 b. 強く {吹く／*上がる／吹き上がる}。
 そのため、これらのテストをもって、V1 と V2 が直接結合している証拠とするのに

は問題があるように思われる。上述のような問題点のほかに、「反使役化」と「脱使役化」という観点からでは説明できない問題点も存在している。

「反使役化」と「脱使役化」は影山 (1996) が単純動詞の分析に用いているものである。まず、「反使役化」についてだが、これは他動詞の使役構造における動作主を目的語と同一視するというものである。「反使役化」によって自動詞になった場合、意味構造上独立した動作主が存在しなくなり、もっぱら目的語の性質によって、状態変化ないし位置変化が起こることになるという。

(7) 反使役化 : x CONTROL [y BECOME [y BE AT- z]]

→ $x=y$ CONTROL [y BECOME [y BE AT- z]] (日高 2012: 118)

例えば、「ドアが閉まる」という場合は、「ドアが自らの性質によって閉まる」ということを記述していることになるという(日高 2012: 118)。そして、「反使役化」は定義上、「目的語の性質によって自らそうなる」ことが可能な場合になされるプロセスであるので、目的語にそのような可能性が読み取れない場合は自動詞化できないとしている。

しかし、「本が積み上がっている」や「パンが売り切れている」というような場合において、目的語の「本」や「パン」は自らの性質によって上がったり、なくなったりしているわけではないため、「反使役化」では説明できない。この「反使役化」については、6.1.2.2で本研究の「痕跡的認知」と比較しながら論じる。

次に、「脱使役化」についてだが、日高 (2012: 118) によると、「脱使役化」には意味構造上、独立した動作主が存在する。ただし、存在量化されているため、その動作主は統語構造上には現れないと分析するものであるという。

(8) 脱使役化 : x CONTROL [y BECOME [y BE AT- z]]

↓

∅

さらに、日高 (2012: 121) によると、「脱使役化」は認知的に言えば非焦点化する操作であると考えられるという。複合動詞が脱使役化されるのは、V1の動作主が非焦点化された場合であり、そして非焦点化が可能なのは、基本的には、V1自体が本来的に人間の直接的な関与を前提としていない「吊る」や「吸う」などの動詞の場合であるという。動作主の存在を非焦点化することに対する動機付けの一つが「道具の使用」であり、道

具や機械が直接的な行為を行い、人間はむしろ間接的に関与するとみなされる場合は脱使役化しやすいという(日高 2012: 123)。

本研究においても、動作主の非焦点化というのは必要であると考えますが、それだけでは不十分で、被動作主の焦点化も必要であると主張する。また、日高 (2012) は動作主を非焦点化する認知的な動機付けとして、「道具の使用」という要因を挙げているが、ほかにもいくつかの要因が存在する。これについては、6.1.2.1 で本研究が主張する「プロファイルシフト」の部分で改めて説明する。

6.1.2 プロファイルシフトと痕跡的認知による自動詞化

6.1.2.1 プロファイルシフト

「プロファイルシフト(Langacker 1987, 山梨 2000 など)」とはプロファイル(認知ドメインの中で焦点化されている部分)の転移である。例えば、Langacker (2003) が述べているように、*choose* という動的なプロセスと *chooser, choice* というモノ的な概念の関連性はプロファイルシフトという観点から捉えることができる。

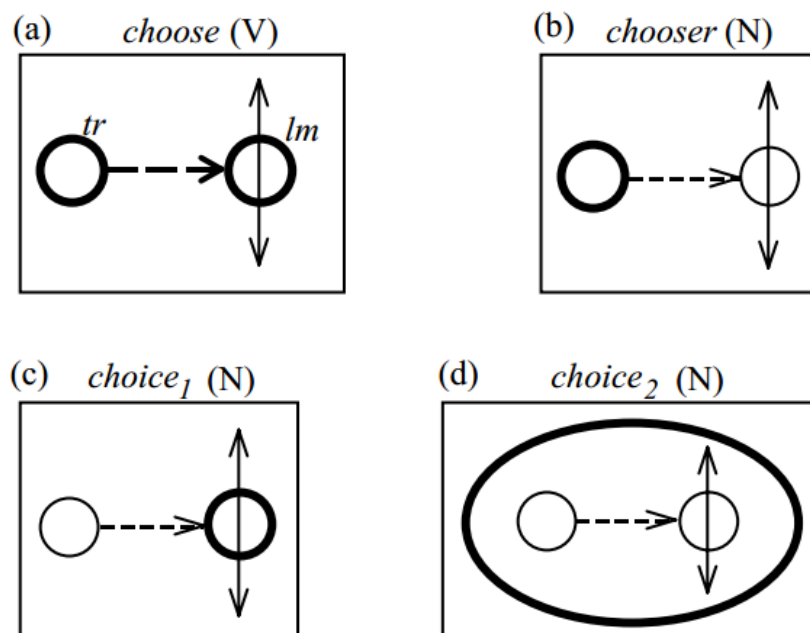


図 6-1 プロセスからモノへのプロファイルシフト (Langacker 2003: 253)

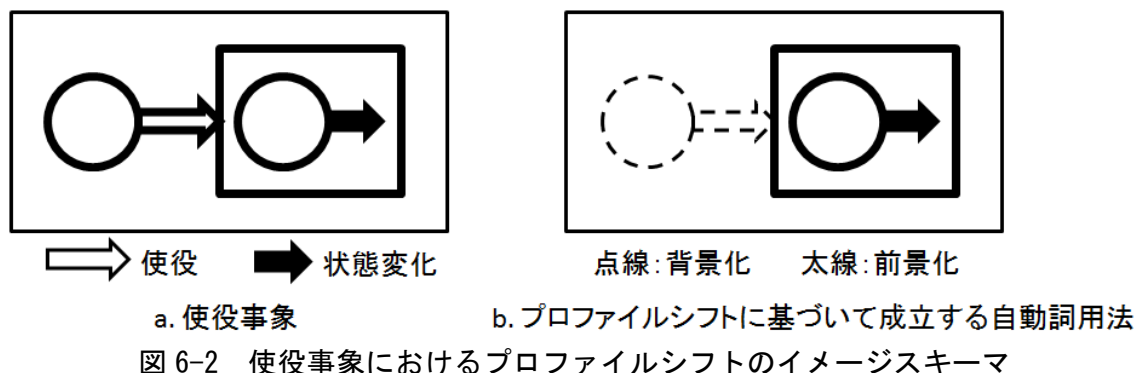
図6-1で太線の部分はプロファイルされていることを表す。*choose*と*chooser, choice*は本質的には同じ認知ドメインを持つが、プロファイルがどこにあるかによって異なる表現となる。

「打ち上がる」「擦りむける」「思い浮かぶ」などは、このプロファイルシフトというメカニズムによって形成された主語不一致型複合動詞と考えられる。

(9) プロファイルシフトによって自動詞化した複合動詞

当てはまる, 編み上がる, 洗い上がる, 入れかわる, 打ち上がる, 打ち当たる, 売り上がる, 売り切れる, 置きかわる, 思い浮かぶ, 織り上がる, 買い上がる, 描き上がる, 書き上がる, 書き換わる, 掻き消える, 醸し出る, 切り替わる, 組み上がる, 組み合わさる, 繰り上がる, 繰り下がる, 繰り広がる, 差し替わる, 仕立て上がる, 吸い上がる, 擦り切れる, 擦りむける, 染め上がる, 炊き上がる, 突き上がる, 突き刺さる, 漬け上がる, 付け加わる, 煮崩れる, 煮立つ, 煮詰まる, 煮溶ける, 縫い上がる, 塗り上がる, 塗りかわる, 練り上がる, 乗り代わる, 弾き飛ぶ, 引き上がる, 引き起こる, 引き立つ, 引きちぎれる, ふき上がる, 吹きかかる, 吹き散る, 吹き飛ぶ, 彫り上がる, 巻き上がる, 巻き起こる, 巻き戻る, 混ぜ合わさる, 磨き上がる, 見つかる, 蒸し上がる, めくり上がる, 持ち上がる, 焼き上がる, 焼き締まる, ゆで上がる。 計 65 語

これらの複合動詞は本来の動的な使役事象から、使役者を背景化し、被使役者を前景化するプロファイルシフトのメカニズムによって、自動詞として成立するものだと考えられる。



プロファイルシフトが成立するには、使役者を背景化することと、被使役者を前景化することが必要である。

使役者を背景化する条件としては、使役者(図 6-2a における左側の○)が被使役者(図 6-2a 右側の○)に対する働きかけが以下のような場合が考えられる。

(10) 使役者を背景化する条件

a. 道具や機械を介する間接的な場合

例：「(花火が)打ち上がる」「(ご飯が)炊き上がる」など

b. 意志的でない場合

例：「擦りむける」「擦り切れる」など

c. 自然の力や思考・認知活動など使役の働きかけが目に見えない場合

例：「(蒸気が)吹き上がる」「思い浮かぶ」「繰り上がる」など

一方、被使役者が前景化されるのは、認知主体の注意が被使役者に向けられている場合で、それは被使役者が以下のような場合が考えられる。

(11) 被使役者が前景化される条件

a. 素早く動くものや、目を引くものである場合

例：「吹き飛ぶ」「打ち上がる」など

b. 新しく出現したもの

例：「組み上がる」「思い浮かぶ」など

c. 突然目の前から消失したもの⁵⁶

例：「掻き消える」

また、使役の働きかけと結果状態の現れが時間的・空間的に離れている場合に、使役者の背景化と被使役者の前景化が同時に起こりうると考えられる (例：「{ボール／花火}が高く打ち上がった」「(ご飯が)炊き上がる」「(壺が)焼き上がる」「(肉まんが)蒸し上がる」など)。

「*握り潰れる」「*噛み砕ける」「*叩き壊れる」「*叩き落ちる」などは使役者の被使役者に対する働きかけが直接的であるため、使役者を背景化できない。また、「*覆い隠

⁵⁶ 被使役者が突然消失した場合において、前景化されるのは、記憶の中の消える寸前の被使役者である。

れる」「*包み隠れる」などは、認知主体が被使役者を(視覚的に)知覚できないため、前景化できない。そのため、これらの例はプロファイルシフトが起こらないと考えられる。

日高 (2012) の脱使役化は使役者を背景化することが条件だが、それだけでは不十分で被使役者を前景化することも必要である。例えば、「見つける」と「見落とす」においては、使役の働きかけが共に目に見えない視覚的な認知行為であるため、共に使役者を背景化できるが、対応する「見つかる」が存在するのに対し、「*見落ちる」は存在しない。プロファイルシフトの観点から考えると、「見つかる」の場合は被使役者(見る対象)が新たに出現したものであるため、前景化する。それに対し、何かを見落とす場合、その被使役者はそもそも認知主体に知覚されておらず、前景化できないためプロファイルシフトが起こらないと説明できる。「*見落ちる」と「掻き消える」の違いは、「掻き消える」において、認知主体が対象を知覚しているのに対し、「*見落ちる」の場合はそもそも対象を知覚していない点にある。

6.1.2.2 痕跡的認知

2つ目の自動詞化のメカニズムである「痕跡的認知」とは、認知主体がある対象の持続的な状態とそれが通常あるべき状態との違いから、対象の持続的な状態をある動作によって引き起こされた状態変化の結果として捉えたものである。例えば、図 6-3 のような形は本質的には一つの五角形であるが、我々はそれを左上の角が「落ちた」四角として認識する(国広 1985)。

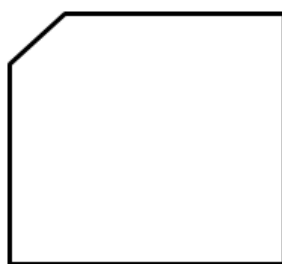


図 6-3 痕跡的認知：角が「落ちた」四角

図 6-3 のような例は、実際には何も動作が起こってないのにも関わらず、あたかもある動作によって今の状態になった、と認知したものである。しかし、図 6-3 のような「虚構の変化」だけではなく、本研究では、実際に動作があったとしても、なかったとしても、ある対象の持続的な状態だけを見て、それを引き起こした動作を推測するのが痕跡

的認知であると考え。例えば、図 6-4 のように、「財布が落ちている」という表現が表しているのは、本質的には財布が床の上にある、という状態ではない。



図 6-4 「財布が落ちている」

しかし、我々は、通常財布というものは床の上にあるものではなく、誰かのポケットやバッグの中にある、という知識がある。そのような背景知識により、図 6-4 の財布が誰かのポケットなどから「落ちた」ものだとして推論し、「財布が落ちている」というような表現を用いるのである。この場合、財布は実際に誰かのポケットなどから落ちた場合もあるし、他の原因によって床の上に位置するようになった可能性もあるが、いずれにしても何かの動作がなければ財布が床の上に位置するという状態にはならない。従って、本研究における痕跡的認知は虚構の変化に限定した国広 (1985) の「痕跡的認知」とは異なる(同様の理由で Matsumoto 1996a の“subjective change”や Talmy 1990 における“fictive change”とも異なる)。

寺村 (1984) は「財布が落ちている」「金魚が死んでいる」「家が倒れている」という表現を取り上げ、これらの表現は、人がその眼前の現象を、ある過去に起こった事象の痕跡と解釈した表現である、と述べており、本研究が想定する痕跡的認知に近い。しかし、寺村 (1984) は虚構の変化を扱っていないという点で本研究と異なる。

この痕跡的認知という認知メカニズムによって自動詞化したものには「(岩が)突き出

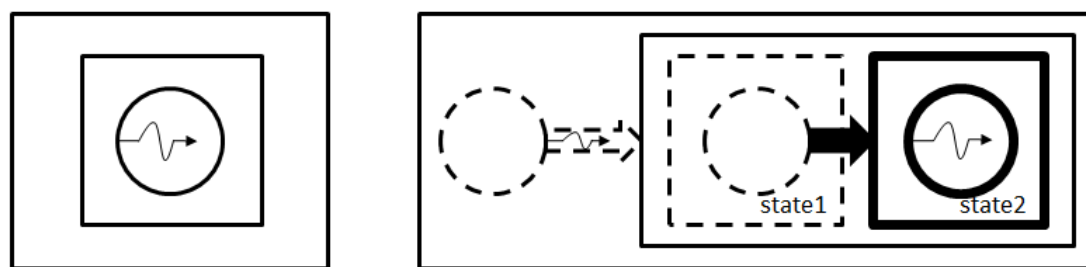
る」「(蔓が)巻き付く」「(目が)吊り上がる」などがある。

(12) 痕跡的認知によって自動詞化した複合動詞

売り切れる, 押し上がる, 折り重なる, 重ね合わさる, 着崩れる, 突き刺さる, 突き立つ, 突き出る, 突き通る, 突き抜ける, 積み上がる, 積み重なる, 吊り上がる, 吊り下がる, 抜き出る, 抜きん出る, ねじ曲がる, はり付く, 引き締まる, 巻き上がる, 巻きつく, 結びつく, めくり上がる, 盛り上がる, 焼きつく。

計 25 語

(12)のような例はある対象の状態を, 推論に基づいて使役事象によって引き起こされた変化の結果だと見なし, その使役事象を「復元」することで作られたものであると考えられる⁵⁷。



a. ある対象の持続的な状態 b. 痕跡的認知による使役状態変化の復元

図 6-5 痕跡的認知に基づいて復元された使役事象のイメージスキーマ⁵⁸

痕跡的認知の場合, V1 は V2 の表すある特徴的な状態変化を引き起こした動作として推論できるものに限られる。従って, 「*奪い取れる」「*突き落ちる」など, V2 が表す状態が V1 の動作を推論できるような特徴的なものではない場合は痕跡的認知として成立できない。すなわち, 痕跡的認知において, 図 6-5 のように, V1 が与える影響は目に見える形で V2 の結果状態に存在する必要がある。

日高 (2012) における反使役化は対象の性質上自らそうなることが可能な場合において自動詞化し, 本質的には動作主が存在しないとしている。しかし, 「本が積み上が

⁵⁷ 対象の状態に着目した表現であるため, 対象の持続的な状態が前景化されるのに対し, 推論に基づく使役や対象の元の状態は背景化される。従って, 痕跡的認知に基づくプロファイルシフトと考えることができる。

⁵⁸ 曲線の矢印はある特徴的な変化, 及びそれをもたらす使役の特徴を表す。

っている」「ナイフが突き刺さっている」「シャンデリアが吊り下がっている」などのような例は本などが自らそうなったのではないため反使役化では説明できず、痕跡的認知の一つとして考えるべきである。

注意が必要な例として、「突き刺さる」「巻き上がる」「めくり上がる」「売り切れる」はプロファイルシフトと痕跡的認知の両方によって自動詞化できると考えられるため、(9)と(12)の両方に含まれている。プロファイルシフトは「落ちたナイフが突き刺さった」「自動で巻き上がるカーテン」「風でスカートがめくり上がった」「チケットが売り切れる」のような場合で、痕跡的認知は「矢が突き刺さっている」「巻き上がった尻尾」「屋根がめくり上がっている」「パンが全部売り切れていた」のような場合である。

図6-5が示すように、痕跡的認知はある対象の持続的な状態変化に基づくものであり、この点において、結果状態の持続という意味を表すことのできるテイル形に近い。『BCCWJ』で検索すると、全用例⁵⁹の中でテイル形が占める比率が、痕跡的認知のグループのほうが平均23%で、プロファイルシフトのグループの平均6.14%よりも相当高いことがわかった。

表6-1 プロファイルシフトと痕跡的認知のグループにおけるテイル形の比率

プロファイルシフト		痕跡的認知	
用例	テイル形の比率 (%)	用例	テイル形の比率 (%)
組み上がる	14.29	突き立つ	44.30
持ち上がる	12.67	つり下がる	41.67
煮詰まる	12.04	突き出る	36.26
巻き起こる	11.11	焼きつく	35.20
置きかわる	10.96	はり付く	31.91
蒸し上がる	8.33	抜きん出る	24.79
入れかわる	8.02	つり上がる	23.73
擦り切れる	7.63	結びつく	23.31
掻き消える	7.54	巻きつく	23.23
繰り上がる	7.14	積み上がる	16.39
吹き上がる	6.73	積み重なる	16.03

⁵⁹ 20例以上あるものを対象とし、プロファイルシフトと痕跡的解釈の両方に跨る「巻き上がる」「突き刺さる」「売り切れる」は除外した。

打ち上がる	6.59	盛り上がる	15.48
引き立つ	6.36	折り重なる	12.90
見つかる	5.26	ねじ曲がる	9.76
吹き飛ぶ	4.36	引き締まる	8.69
煮立つ	4.27	突き抜ける	4.35
焼き上がる	3.47		
炊き上がる	2.22		
当てはまる	0.93		
ゆで上がる	0.70		
思い浮かぶ	0.69		
突き上がる	0		
付け加わる	0		
	平均 6.14%		平均 23.00%

この事実は痕跡的認知によってできたものが本質的にある静的な状態持続を表すための表現であるのに対し、プロファイルシフトのほうは動的な状態変化を表すものであるのを示しており、両者が異なるメカニズムであることを支持している。

6.2 他動詞化

前節の自動詞化とは逆に、「舞い上げる」などは、「舞い上がる」からの「他動詞化」によって形成されたとされる(松本 1998)。このような主語不一致型の複合動詞には次のものがある。

(13) 他動詞化した複合動詞⁶⁰

絡み付ける, 滑り落とす, しみ付ける, 立ち上げる, 跳ね上げる, 舞い上げる, 萌え殺す, 漏れ聞く, 揺れ動かす, 酔い潰す, 沸き上げる, 沸き起こす, 笑い殺す。

計 13 語

これらの複合動詞は本来の自動詞形から「使役化」というメカニズムによって他動詞

⁶⁰ 本研究における他動詞化(自動詞化も同様)は接辞に基づく他動詞化ではないため、「笑い殺す」のようなものは「笑い死ぬ」から他動詞化したものだと考える。

化したものだと考えられる。「舞い上げる」のような使役化によって形成された複合動詞は、本来の自動詞形(「舞い上がる」)の表す事象が、ある使役者によって引き起こされる、ということを表している。言い換えれば、使役化した他動詞は、本来使役者が存在しない自動詞形の事象(「舞い上がる」のような主体移動または「酔い潰れる」のような状態変化)に使役者が付いたものである。

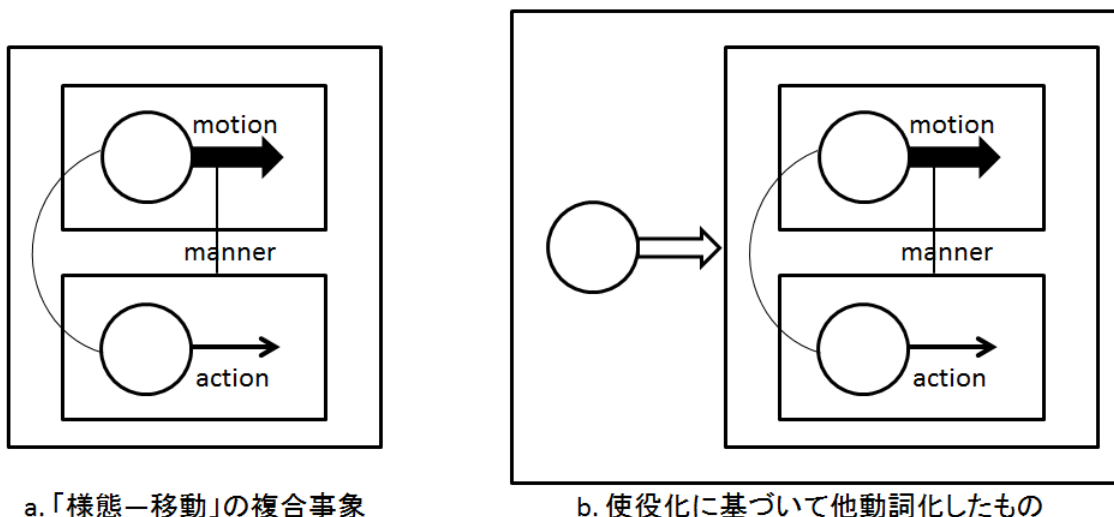


図 6-6 複合動詞における主体移動の使役化のイメージスキーマ

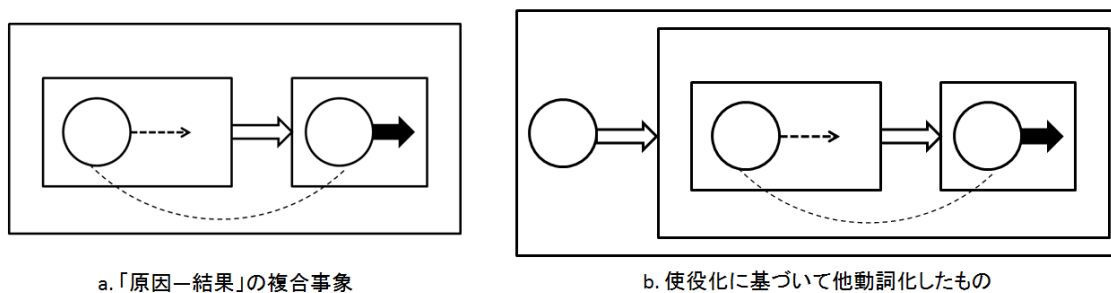


図 6-7 複合動詞における状態変化の使役化のイメージスキーマ

(14) 使役化が可能となる条件

- a. 使役者によって引き起こされる事象は被使役者の意思が介在しない
- b. 被使役者の移動とその際の様態、または被使役者の状態変化は直接使役者によって引き起こされたものである

(14)に挙げた二つの使役化の条件は共に Matsumoto (1996a), 松本 (1997, 1998) におけ

る「決定的使役の条件(Determinative Causation Condition)」に基づくものであると考えられる。

(15) 決定的使役の条件(Determinative Causation Condition) :

語彙的に表現される使役においては、原因となる出来事が、結果となる出来事の発生と進行を完全に決定できるものでなければならない。(松本 1998: 56)

まずは、被使役者の意思が介入しないという一つの条件についてだが、これは被使役者の意思が介入する場合においては、原因となる出来事が結果となる出来事の発生と進行を完全に決定できるとは限らないため、決定的使役の条件に反する。関連して、Hopper & Thompson (1980) によると、他動性の度合いと関連する意味的な素性の一つに「意図性(Volitionality)」というものがある。意図的な動作は他動性が高く、非意図的な動作は他動性が低いとされている。

VOLITIONALITY: The effect on the patient is typically more apparent when the A (Agent) is presented as acting purposefully; contrast *I wrote your name* (volitional) with *I forgot your name* (non-volitional). (Hopper & Thompson 1980: 252)

この考えに基づくと、意図的(意志的)な動作の場合は他動性が高く、既に使役事象に相当するか、あるいはそれに近いものであるため、そこからさらに別の使役者を付加するのは典型的な事象ではない。その証拠として、意志的な動作を表す「食べる」や「歩く」などに使役者を付加する場合は生産的な使役化の手段として「させる」を用いて「食べさせる」「歩かせる」になる。それに対し、非意志的な動作を表す「壊れる」「潰れる」などは他動性低く、使役者を付加する典型的な事象として考えられ、対応する語彙的使役(「壊す」「潰す」など)が存在する場合が多い(生産的使役と語彙的使役については Shibatani 1976 などを参照)。「飛び降りる」や「起き上がる」などは意志的動作であるため、「飛び降りさせる」「起き上がらせる」のように、生産的使役によって使役者を付加することは可能だが、語彙的な手段を用いて使役者を付加できない(*「飛びおろす」,*「起き上げる」)。一方、「舞い上がる」や「滑り落ちる」などの複合動詞は非意志的な動作を表しているため、「舞い上げる」「滑り落とす」のように、対応する語彙的使役を持つことが可能となる(松本 1998: 73 を参照)。

次に、被使役者の移動とその際の様態、または被使役者の状態変化は直接使役者によ

って引き起こされたものである、という二つ目の条件だが、これも決定的使役の条件による制約である。「舞い上げる」において、被使役者の上昇移動とその際のヒラヒラという様態は、直接使役者(風など)によって引き起こされたものであるため、決定的使役の条件に適合する。一方、「*舞い落とす」が存在しないのは、それが表そうとする事象(使役者が被使役者に働きかけて、それをヒラヒラと下降させる)において、下降の際にヒラヒラと舞うのは使役者の働きかけとは関係なく、重力と空気抵抗で起こることだからである⁶¹。このように、使役者の働きかけがなくとも成立すると考えられる移動とその様態を表す事象は、決定的使役の条件に反するため、語彙的な手段で使役化することができない。

日高 (2013) は、V1 の表す事象が、V2 の表す移動の間中に(繰り返し)続く様態として解釈可能ならば他動詞化が可能である、と主張しているが、他動詞化された「酔い潰す」や「笑い殺す」のような場合、V1 は様態ではない。また、「駆け上がる」や「歩き回る」、「舞いおろす」などは V1 が「移動の間中続く様態」として解釈可能であるにもかかわらず、これらに対応する他動詞形の「*駆け上げる」「*歩き回す」「*舞いおろす」は存在しない。これらの例は被使役者の意志が介入するため、決定的使役の条件によって排除される。また、「漂い出る」「舞い落ちる」などは V1 が「移動の間中続く様態」であり、非意志的な動作だが対応する他動詞形「*漂い出す」「*舞い落とす」は存在しない。これらの例は使役者の働きかけが無くとも成立する移動であるため、同様に決定的使役の条件に反するものとして排除される。

6.3 アナロジー

これまで「プロファイルシフト」と「痕跡的認知」、「使役化」という三つのメカニズムによって主語不一致型の複合動詞が形成されることを論じてきたが、これ以外にも「アナロジー」によって形成された主語不一致型の複合動詞がある。

(16) アナロジーによって形成された主語不一致型複合動詞

申し受ける, 譲り受ける, 死に別れる。

計 3 語

これらの複合動詞は松本 (1998) が述べているように、主語が一致する元の形である

⁶¹ 日高 (2013) は「舞い落とす」を存在する組み合わせとして分析しているが、『日本語複合動詞リスト(ver.1.3)』や BCCWJ には存在していない。

「申し渡す」「譲り渡す」「生き別れる」からのアナロジー(類推)によって作られたものだと考えられる。アナロジーに基づく語形成(analogical formation)は既存の語に基づいて新しい語が形成されるプロセスのことで、多くの場合生産性は高くない(Bauer 1983: 96)。加えて、先行研究では言及されていないが、これらの複合動詞は反義語に基づくアナロジーであることも特徴的である(「渡す」↔「受ける」, 「生きる」↔「死ぬ」)。

6.4 メトニミー

最後に、メトニミーによって形成された主語不一致型の複合動詞として、以下の二つがある。

(17) メトニミーによって形成された主語不一致型複合動詞

寝静まる, 泣き濡れる。

計 2 語

Radden & Kövecses (1999) によると、メトニミーとは、同じ概念領域の中の、一つの概念から別の概念にアクセスするという認知プロセスである。つまり、メトニミーとは、単一の概念領域の中で、プロファイルが移行することによって成り立つ捉え方である。例えば、「涙」が「悲しみ」を表す場合、このメトニミーは「感情」という一つの概念領域(理想認知モデル, Idealized Conceptual Model, ICM またはフレームとして考えることができる)内での要素間の関係によって成り立っている。

「寝静まる」の場合、V1の主語は寝る人で、V2の主語は寝る場所であり、V1とV2の主語が異なる。しかし、メトニミーの観点から考えると、寝る人、そして、その人が寝る場所は共に「寝る」の意味フレームに属する要素である。加えて、「寝る」の意味フレームにおいて、関連事象の【結果】として(部屋が静かになる)という情報が含まれている。このような隣接性から、メトニミーによって、V1とV2の主語は同一物として見なすことができ、主語一致の原則に適合することができる。同様に、「泣き濡れる」においても、泣く人、そして涙によって濡れたその人の頬は共に「泣く」の意味フレームに属する要素で、二つは部分と全体の関係にあるのに加え、「泣く」の【結果】として、(泣くと頬が濡れる)という情報があるため、メトニミーによって同一物として見なすことができる。

6.5 まとめ

以上見てきたように、主語が一致しない日本語の語彙的複合動詞には様々なタイプがあるが、それぞれが何らかの認知的、または言語的な動機付けによって形成されたものであると考えられる。

本研究は事態認識のレベルから考えることで、複合動詞だけにしか適用されないアドホックな制限を設けることなく、人間の一般的な認知能力に基づいて、主語不一致型の語彙的複合動詞の形成メカニズム及びその条件を明らかにした。同時に、プロファイルシフトと痕跡的認知がどのような条件で起こるのか、ということについても光を当てることができた。

第7章 中国語複合動詞についてのフレーム・ コンストラクション的考察*

これまで日本語の語彙的複合動詞について考察してきたが、同じようなアプローチは中国語複合動詞の分析にも適用できる。本章では、7.1で、第四章で用いたコンストラクション形態論という理論的枠組を中国語複合動詞の分析に取り入れる。そして、7.2では第五章で用いたフレーム意味論的なアプローチから考察を行う。7.3で本章をまとめる。

7.1 コンストラクション形態論から見た中国語複合動詞

第四章で日本語の語彙的複合動詞について、コンストラクション形態論という理論的枠組を用いて分析を行った。ここでは、コンストラクション形態論が中国語の複合動詞の分析にも適用できることを示す。本節において、まず、中国語複合動詞の全体的スキーマネットワークを示し、その後、中国語複合動詞をコンストラクションとして見なす根拠となる様々な全体的な性質について述べる。

7.1.1 中国語複合動詞の階層的スキーマネットワーク

中国語の複合動詞の全体像は図 7-1 のようなスキーマネットワークで表すことができる。

* 本章の一部は Chen (2012) を加筆修正したものである。

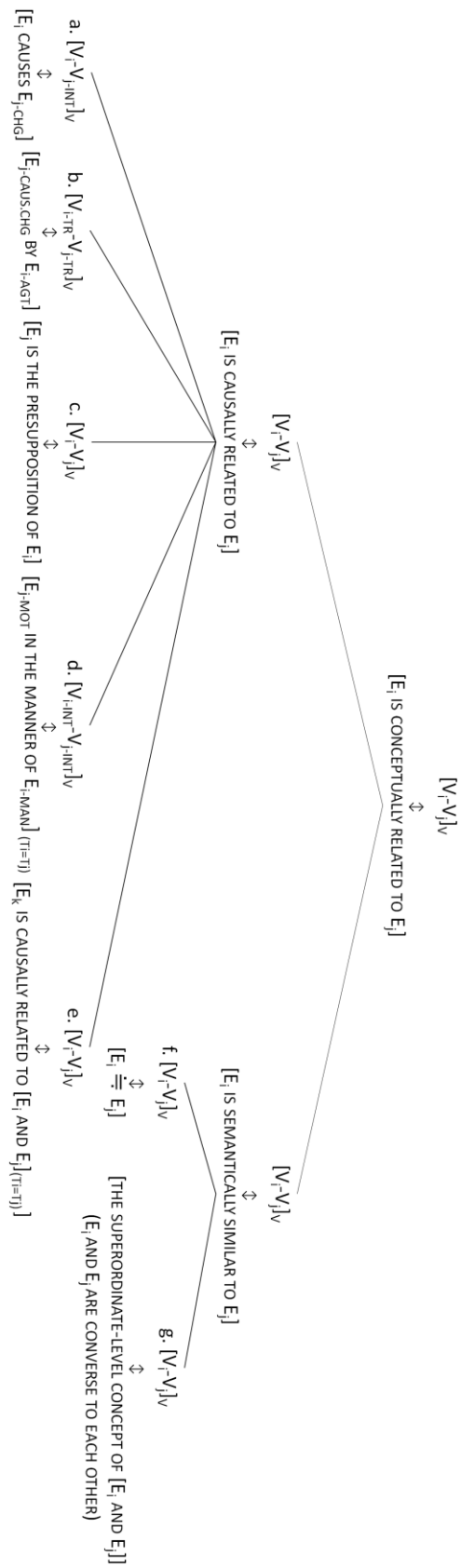


図 7-1 中国語複合動詞の階層的スキーマネットワーク

中国語の複合動詞も日本語と同様、因果関係に基づくタイプと並列関係を表すタイプがある。両者の違いは中国語複合動詞に主語一致の原則がないことで、そのために、中国語は日本語語彙的複合動詞にあるような主語不一致型の下位スキーマが存在しない。また、日本語とは違って、中国語には「買賣 *mǎi-mài* (buy-sale)」、「呼吸 *hū-xī* (breathe.out-breathe.in)」、「伸縮 *shēn-suō* (extend-shrink)」、「往返 *wǎng-fǎn* (go.toward-go.back)」などのような反義語の組み合わせのタイプのものが多く見られる。日本語と中国語の複合動詞の違いは主語一致の原則の有無も含めて、第八章で詳しく検討する。

因果関係のみに基づくタイプとして a. 原因—結果型, b. 手段—目的型, c. 背景—具現型がある。

(1) 中国語の a. 原因—結果型:

崩落 *bēng-luò* (collapse-fall) ‘崩れ落ちる’, 走累 *zǒu-lèi* (walk-get.tired) ‘歩き疲れる’, 刺死 *cì-sǐ* (stab-die) ‘刺し殺す’, 打壞 *dǎ-huài* (hit-be.broken) ‘打ち壊す’, 哭醒 *kū-xǐng* (cry-wake) ‘泣いたため目覚める’ など

(2) 中国語の b. 手段—目的型:

刺殺 *cì-shā* (stab-kill) ‘刺し殺す’, 砍殺 *kǎn-shā* (slash-kill) ‘斬り殺す’, 射殺 *shè-shā* (shoot-kill) ‘撃ち殺す’, 偷取 *tōu-qǔ* (steal-get) ‘盗み取る’, 奪取 *duó-qǔ* (rub-get) ‘奪い取る’, 騙取 *piàn-qǔ* (deceive-get) ‘騙し取る’, 刺穿 *cì-chuān* (stick-pierce) ‘刺し通す’, 打穿 *dǎ-chuān* (hit-pierce) ‘打って穴を開ける’, 戳穿 *chuō-chuān* (pick-pierce) ‘つついて穴を開ける’, 射穿 *shè-chuān* (shoot-pierce) ‘撃って穴を開ける’ など

(3) 中国語の c. 背景—具現型:

聽漏 *tīng-lòu* (hear-leak) ‘聞き漏らす’, 寫漏 *xiě-lòu* (write-leak) ‘書き漏らす’, 賣剩 *mài-shèng* (sell-remain) ‘売れ残る’, 吃剩 *chī-shèng* (eat-remain) ‘食べ残す’, 用剩 *yòng-shèng* (use-remain) ‘使い残す’ など

中国語複合動詞は手段—目的型に属するものが少なく、中国語では使役事象を表す場合は原因—結果型の複合動詞を用いるのが普通である。日本語と中国語が異なるところは、中国語は使役事象を原因—結果型で表すのが一般的であるのに対し、日本語の場合は手段—目的型でしか表すことができない、という点である。この違いは八章で見ると

うに、非意図的な使役事象を複合動詞で表せられるかどうか、ということに繋がる。

次に、因果関係による必然的な共起性のタイプは d. 様態移動型, e. 同時発生型がある。この二つのタイプは日本語と同様、共通原因、または共通目的というサブタイプがある。

まず、様態—移動型についてだが、張 (2003) では中国語の複合動詞を「砍殺 *kǎn-shā* (slash-kill)」のような手段型、「打壞 *dǎ-huài* (hit-be.broken)」のような原因型、「呼吸 *hū-xī* (breathe.out-breathe.in)」のような並列型の三つに分類している。「浮動 *fú-dòng* (float-move)」「舞動 *wǔ-dòng* (dance-move)」「流動 *liú-dòng* (flow-move)」などのように V1 が V2 の様態を表すものと、「推動 *tuī-dòng* (push-move)」「揮動 *huī-dòng* (swing-move)」「跳動 *tiào-dòng* (jump-move)」などのように V1 が V2 の原因を表すものを区別せずに、全ての「～動 *dòng*」をまとめて原因—結果のタイプだと考えている。しかし、この二つは、(4)に示したように、否定を表す「不 *bù*」と可能を表す「得 *de*」の挿入のテストにおいて、異なる振る舞いを見せる。

(4) 中国語複合動詞挿入テスト

様態—移動型:

浮動 *fú-dòng* (float-move) *浮不動, *浮得動

振動 *zhèn-dòng* (shake-move) *振不動, *振得動

原因—結果型:

推動 *tuī-dòng* (push-move) 推不動, 推得動

跳動 *tiào-dòng* (jump-move) 跳不動, 跳得動

このことからわかるように、中国語の「～動 *dòng*」には V1 が V2 の様態を表すものと原因を表すもの、という二つの異なるタイプが存在しており、中国語にも様態—移動型の複合動詞が存在することがわかる。

d. の様態—移動型のものには共通原因様態型と共通目的様態型という二つのサブタイプがある。

(5) 中国語の d1. 共通原因様態型:

浮動 *fú-dòng* (float-move) ‘浮きながら動く’, 振動 *zhèn-dòng* (shake-move) ‘震えながら動く’, 舞動 *wǔ-dòng* (dance-move) ‘舞いながら動く’, 流動 *liú-dòng* (flow-move) ‘流れながら動く’, 滑落 *huá-luò* (slip-fall) ‘滑り落ちる’, 滾落 *gǔn-luò* (roll-fall) ‘転がり落ちる’ など

(6) 中国語の d2. 共通目的様態型:

爬行 *pá-xíng* (crawl-go.forward) ‘這い進む’, 步行 *bù-xíng* (walk-go.forward) ‘歩き進む’, 飛行 *fēi-xíng* (fly-go.forward) ‘飛びながら進む’, 跑上 *pǎo-shàng* (run-go.up) ‘駆け上がる’, 跑下 *pǎo-xià* (run-go.down) ‘駆け下りる’, 走動 *zǒu-dòng* (walk-move) ‘歩きながら動く’, 跑動 *pǎo-dòng* (run-move) ‘走りながら動く’ など

因果関係に基づく必然的な共起性の二つ目のタイプとして, e. 同時発生型がある。このタイプも共通原因事象型と共通目的事象型という二つのサブタイプがある。

(7) 中国語の e1. 共通原因事象型:

哭喊 *kū-hǎn* (cry-yell) ‘泣き喚く’, 哭叫 *kū-jiào* (cry-shout) ‘泣き叫ぶ’, 哭鬧 *kū-nào* (cry-peevisish) ‘泣きながらぐずる’, 啜泣 *chuò-qì* (sob-cry) ‘すすり泣く’, 閃亮 *shǎn-liàng* (glitter-flash) ‘光り輝く’, 哀泣 *āi-qì* (feel.sad-cry) ‘悲しみながら泣く’, 叫罵 *jiào-mà* (shout-abuse) ‘叫びながら罵る’, 怒罵 *nù-mà* (get.angry-abuse) ‘怒りながら罵る’ など

(8) 中国語の e2. 共通目的事象型:

跪拜 *guì-bài* (kneel-bow) ‘跪きながら拝む’, 跪哭 *guì-kū* (kneel-cry) ‘跪きながら泣く’, 跪爬 *guì-pá* (kneel-crawl) ‘跪きながら這う’, 哭唱 *kū-chàng* (cry-sing) ‘泣きながら歌う’, 蒸煮 *zhēng-zhǔ* (steam-stew) ‘蒸しながら煮る’, 煎炒 *jiān-chǎo* (sauté-stir.fry) ‘ソテーしながら炒める’ など (「跪哭」「哭唱」などについては 5.3.2.1.1 を参照)

次に, 並列関係型のものを見てみよう。このタイプは f. 類義関係に基づくものと, 日本語にはない g. 反義関係に基づくものがある。

まず, 類義語の組み合わせの場合は $[V_i-V_j]_{V \leftrightarrow [SEM_i=SEM_j]}$ というコンストラクションで表され, V1 と V2 が表す事象には全般的な類似性が見られる。

(9) 中国語の f. 類義関係型:

拉扯 *lā-chě* (pull-pull), 揉搓 *róu-cuō* (rub-rub), 親吻 *qīn-wěn* (kiss-kiss), 蹦跳 *bèng-tiào* (jump-jump), 踩踏 *cǎi-tà* (step.on-step.on), 購買 *gòu-mǎi* (buy-buy), 議論 *yì-lùn* (discuss-discuss), 幫助 *bāng-zhù* (help-help), 掉落 *diào-luò* (fall-fall) など

並列関係のもう一つのサブタイプは反義語の組み合わせで, $[V_i-V_j]_{V \leftrightarrow [THE \text{ SUPERORDINATE-LEVEL CONCEPT OF } [SEM_i \text{ AND } SEM_j]]}$ (SEMI AND SEMJ ARE CONVERSE TO EACH OTHER) で表すことができ, V1 と V2 は反義関係にあり, 複合動詞全体は V1 と V2 の上位概念を表している。

(10) 中国語の g. 反義関係型:

買賣 *mǎi-mài* (buy-sale) ‘売買する’, 呼吸 *hū-xī* (breathe.out-breathe.in) ‘呼吸する’, 伸縮 *shēn-suō* (extend-shrink) ‘伸縮する’, 往返 *wǎng-fǎn* (go.toward-go.back) ‘往復する’, 進出 *jìn-chū* (enter-exit) ‘出入りする’, など

反義語は一見すると, まったく意味的にかげ離れた二つの語であるように思われるが, 実際にはかなり意味的に類似していなければ反義語とはなれない。例えば, 「買う」の反義語は「売る」であるが, この二つの動詞は共に商取引という背景がある。「買う」と「売る」は同じ背景における逆の関係性を表しているものである。そのため, 「買う」と「売る」は相当な割合において意味的な類似性が見られる。それに対して, 例えば「買う」と「泳ぐ」のような反義語ではないものは意味的にはほとんど類似性が見られない。

以上のように, 中国語複合動詞は基本的に日本語と同じ認知的な動機付けを持っていることが分かる。

7.1.2 中国語複合動詞をコンストラクションとして見なす根拠

本研究では中国語複合動詞はコンストラクションであると主張するが, それ以前に, 中国語複合動詞は一つの語であると考え。中国語の V1-V2 が一つの語かどうかについては長い間論争が続いている問題である。その理由としては Packard (2000) が述べているように, 「語」という定義自体が曖昧だからである。何ををもって一つの語とするのか, ということについては形態的・意味的・音韻的・文法的・心理的など, 様々な観点から見ることができ, 異なる観点によって異なる結論に至る(松本 1996 も参照)。その中で, 望月 (1990) は中国語の V1-V2 を一つの語と見なす根拠として, 以下の4つを挙げている。第一の理由として, 中国語では自動詞+自動詞の組み合わせが他動詞のように目的語を取ることができる。

(11) 自動詞+自動詞=他動詞

小孩 半夜 哭醒了 媽媽。

Xiǎohái bànyè kū-xǐng-le māmā.
 Child midnight cry-wake-PST mother
 (子供が夜中に泣いて母親を起こした)

第二の理由に、統率・束縛理論(GB 理論)における格付与の条件としての「隣接の条件(Adjacency Condition)」の違反を挙げている。中国語の V1-V2 は V1 が他動詞の場合に、V1 の目的語が V1 の直後(V1 と V2 の間)にではなく、V2 の後ろに現れるため、この隣接の条件に反するという。例えば、「吃飽 *chī-bǎo* (eat-get.full)」という複合動詞は目的語「飯 *fàn* (meal)」を取ることができるが、「吃飽飯」という順序はいいのに対し「吃飯飽」とは言えない。このことから、中国語の V1 と V2 は語彙的緊密性が高いことがわかる。

第三の理由は、否定のスコープに関するもので、中国語における否定詞の「没有 *méiyǒu*」などは後続の述語を否定するものであるが、V1-V2 の場合では、直後に置かれる V1 でなく、V2 を否定する。そのため、V1-V2 を一語として見なせる。

(12) 我 没有 走累。
 Wǒ méiyǒu zǒu-lèi
 I NO walk-get.tired.
 (私は歩き疲れなかった)

第四の理由に、被動文において、受身の意味が V1 だけにかかるのではなく、V2 も含まれるということを挙げている。

(13) 李四 被 張三 打倒了。
 Lǐ-sì bèi zhāngsān dǎ-dǎo-le
 Lǐ-sì PASS zhāngsān hit-fall-PST
 (李四は張三に打ち倒された)

望月 (1990) が述べている以上のような性質の他にも、中国語の V1-V2 が(14)の例などのように、構成要素に還元できない意味を持つ場合があるという、意味的に一語化している現象が観察される。

(14) 買斷 *mǎi-duàn* (buy-break) ‘買い占める’

推斷 *tuī-duàn* (push-break) ‘推論する’

拉倒 *lā-dǎo* (pull-fall) ‘やめにする’

走開 *zǒu-kāi* (walk-open) ‘あっち行け’

出走 *chū-zǒu* (go.out-walk) ‘逃れる’

出賣 *chū-mài* (go.out-sell) ‘裏切る’

動搖 *dòng-yáo* (move-shake) ‘動揺する’

中国語複合動詞に見られる以上のような性質は、合成的なアプローチからでは説明できない全体的な性質である。本研究では、中国語複合動詞を一つの語としてだけでなく、一つのコンストラクションとして見なし、このような全体的な性質は[V1-V2]_vという形式が担うものであると考える。加えて、日本語の語彙的複合動詞で検討した意味関係の付加という問題も中国語複合動詞に見られるため、コンストラクションとして見なす必要がある(例:「吃饱 *chī-bǎo* (eat-get.full)」「食べることで満腹になる」における下線部の意味の付加)。そのほかにも、日本語語彙的複合動詞で見られるような拘束形態素は中国語複合動詞においても多く見られ、「蠕動 *rú-dòng* (wiggle-move)」「奔跑 *bēn-pǎo* (run-run)」「哭泣 *kū-qì* (cry-cry)」「興奮 *xīng-fèn* (begin-rouse)」「購買 *gòu-mǎi* (buy-buy)」「步行 *bù-xíng* (walk-walk)」「議論 *yì-lùn* (discuss-discuss)」などのように、これらの下線部の構成要素は単独では使用されないものである。

また、4.3 節で言及した拘束意味という概念も、中国語複合動詞の全体的な性質を示している。例として、中国語複合動詞の「～下」を取り上げて説明しよう。

中国語の「～下 *xià*」の基本義は(15)のように、<下方へ移動する>ことである。

(15) a. 小明 跑下 樓梯。

Xiǎomíng pǎo-xià lóu-tī

Xiaoming run-go.down stair

‘Xiaoming ran down the stairs.’

b. 小明 把 垃圾 丟下 海。

Xiǎomíng bǎ lè-sè diū-xià hǎi

Xiaoming BA garbage throw-go.down sea

‘Xiaoming threw the garbage into the sea.’

そして、「～下 *xià*」はこの基本義を中心に多くの派生義がある。その中で、(16)のような「寫下 *xiě-xià* (write-go.down) ‘write down’」や「拍下 *pāi-xià* (to.photograph-go.down) ‘take a picture’」, 「留下 *liú-xià* (leave-go.down) ‘leave’」などの複合動詞における V2 「～下」が表すくある動作の結果が残る>という意味と、(18)における「停下 *tíng-xià* (stop-go.down) ‘stop’」や「静下 *jìng-xià* (calm-go.down) ‘calm down’」, 「穩下 *wěn-xià* (stable-go.down) ‘become stable’」などにおける「～下 *xià*」の<安定する>という二つの意味は物理的な下降を伴わないもので、基本義からの派生義であり、「下 *xià*」が単独で使用されるときには見られない意味用法である(陳 2009 を参照)。

- (16) 小明 在 紙上 寫下 自己的 名字。
Xiǎomíng zài zhǐ-shàng xiě-xià zìjǐ-de míngzì
Xiaoming at paper-on write-go.down self-GEN name
 ‘Xiaoming wrote down his name on the paper.’

- (17) <ある動作の結果が残る>意味を表す「～下 *xià*」と結合する V1

寫 *xiě* ‘to write’, 畫 *huà* ‘to paint’, 印 *yìn* ‘to print’, 簽 *qiān* ‘to sign’, 錄 *lù* ‘to record’, 記 *jì* ‘to memorize’, 刻 *kè* ‘to carve’, 造 *zào* ‘to make’, 設 *shè* ‘to establish’, 創 *chuàng* ‘to create’, 存 *cún* ‘to keep’, 留 *liú* ‘to reserve’, 拍 *pāi* ‘to photograph’, 鋪 *pū* ‘to pave’, 扣 *kòu* ‘to button’, 挖 *wā* ‘to dig’, など

- (17)の例における V1 は全て、その動作によって何かを生じさせる動詞である。

- (18) 小明 把 車 緩緩 停下。
Xiǎomíng bǎ chē huǎnhuǎn tíng-xià
Xiaoming BA car slowly stop-go.down
 ‘Xiaoming slowly stopped the car’

- (19) <安定する>意味を表す「～下 *xià*」と結合する V1

停 *tíng* ‘to stop’, 攔 *lán* ‘to block’, 定 *dìng* ‘to set’, 靜 *jìng* ‘to be calm’, 穩 *wěn* ‘to be stable’, など

- (19)における V1 は全て、何かを安定させる動作を表す動詞である。

「～下 *xià*」に見られるこのような拘束意味は単独では見られないもので、ある特定のタイプの V1 と結合したときにのみ生じるものである。即ち、「～下 *xià*」の意味拡張はそれと組み合わせる V1 によって動機づけられていると言える。

さらに、中国語複合動詞の全体的な性質は文法的な面においても観察される。例えば、表 7-1 が示すように、V2 「～上 *shàng* ‘go up’」は、他動詞の V1 と組み合わせさせた時に、特定の組み合わせでは目的語を取れなくなる。

表 7-1 中国語「～上 *shàng*」の全体的な文法性質

V1 construction	[V _{i-TR} NP _{j-DO}]VP	[V _{i-TR} <i>shàng</i> NP _{j-DO}]VP
貼 <i>tiē</i> paste	貼 海報 <i>tiē hǎibào</i> paste poster ‘paste a poster’	貼上 海報 <i>tiē-shàng hǎibào</i> paste-go.up poster ‘paste up a poster’
踢 <i>tī</i> kick	踢 罐子 <i>tī guànzǐ</i> kick can ‘kick a can’	*踢上 罐子 * <i>tī-shàng guànzǐ</i> kick-go.up can

「～上 *shàng*」と結合する他動詞の V1 は本来単独で使用される時、後ろに目的語となる名詞句を取ることができる。一方、「上 *shàng*」は単独で使用される時は基本的に自動詞であり、一部「上色 *shàng-sè* (色を付ける)」「上漆 *shàng-qī* (ペンキを塗る)」のように語彙化されているもの以外には目的語を取ることができない。しかし、表 7-1 のように、「貼上 *tiē-shàng*」はその後ろに目的語となる名詞句を取れるのに対し、「踢上 *tī-shàng*」は後ろに目的語を取れない、という非合成的な文法性質が見られる。

本研究は「～上 *shàng*」がその後ろに目的語を取れるかどうかは個々の構成要素の性質ではなく、[V_{i-TR} *shàng* NP_{j-DO}]VP というコンストラクションに基づいて、その目的語が指し示す移動物が着点に留まるかどうかによって判断されると主張する。

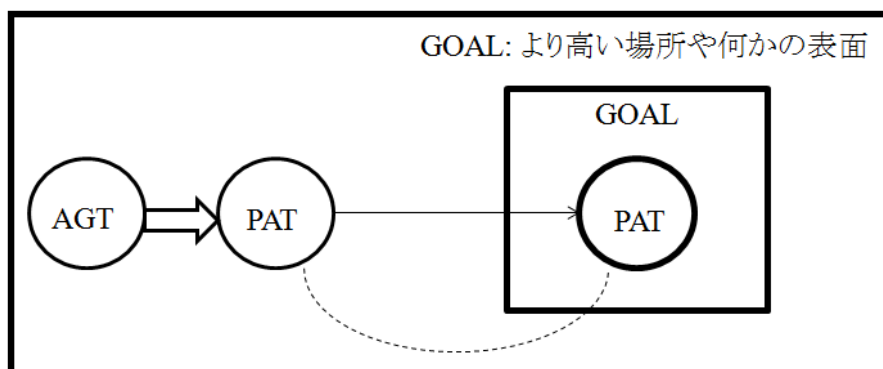


図 7-2 [Vi-TR shàng NPj-DO]VP のイメージスキーマ(点線の繋がりは同一物を指す)

「上 shàng」はその移動の着点に焦点がある動詞で、本来「～上 shàng」の後ろに来る名詞句は着点として解釈されるものである。「～上 shàng」の後ろに来る名詞句は「走上樓梯 zǒu-shàng lóutī (階段を歩いて登る)」のように、一部経路として解釈されるものもあるが、非常に限定的で、経路としても着点としても解釈されうる「牆壁 qiángbì (壁)」のようなものは「爬上牆壁 pá-shàng qiángbì (壁に登った)」のように着点として解釈される。「山下 shānxià (山の麓)」のような起点となるものは「～上 shàng」の後ろには来ることができず、(20)のように「從 cóng (from) ～」という表現を用いる。

- (20) 小明 從 山下 走上 山頂。
 Xiǎomíng cóng shānxià zǒu-shàng shāndǐng
 Xiǎomíng from the.base walk-go.up mountaintop
 ‘Xiǎomíng walked from the base to the mountaintop.’

「～上 shàng」はこのように、移動の着点が焦点となるが、「貼上 tiē-shàng」のように、「貼る」という使役移動の結果その被動作主(移動物)が着点に留まる、という場合には、移動物が目的語として「～上 shàng」の後ろに現れることができる。これは本来焦点がある着点に目的語が留まるために、目的語も焦点化されるという、一種のメトニミー的なメカニズムによるものだと思う。

このように「～上 shàng」は「貼 tiē ‘to paste’」「塗 tú ‘to smear’」「插 chā ‘to stick’」「穿 chuān ‘to wear’」「種 zhòng ‘to plant’」「寫 xiě ‘to write’」などのような付着を表す V1 と結合したときは、動作の結果、着点に被動作主が留まるため、後ろに目的語を取ることができる。対して、接触を表す「踢 tī ‘to kick’」「推 tuī ‘to push’」「敲 qiāo ‘to knock’」「撞 zhuàng ‘to collide’」「拍 pāi ‘to hit lightly’」などと結合したときは、被動作主が着点に留まることは含意せず、そのため後ろ

に移動物としての目的語を取ることができない。

他のタイプの動詞も同様で、例えば「刻 *kē* ‘carve’」や「焼 *shāo* ‘burn’」のような動詞は、その動作の結果として、模様というようなものが着点に生じることがあるため、「刻上圖案」のように、「圖案 *túàn* ‘pattern’」というものを後ろの目的語に取れる。また、「端 *duān* ‘hold and carry carefully’」という動詞は料理を手で運んで、テーブルの上に置くという意味用法があるが、その場合は「菜 *cài* ‘dish’」という移動物が着点のテーブルに留まるため、「端上菜」のように後ろの目的語として現れることができる。

本研究は中国語の[V-V]_vの以上のような全体的な性質に注目して、中国語の[V-V]_vを一つのコンストラクションとして見なす。

7.2 フレーム意味論から見た中国語複合動詞

本節では、第五章において、日本語語彙的複合動詞の分析に用いたフレーム意味論的なアプローチを、中国語複合動詞にも適用できることを示す。具体的にはフレーム意味論に基づくことで、中国語複合動詞の結合制約として「フレーム参与者共有の原則」を設けることができることと、中国語複合動詞に見られる自他交替という現象を説明できるようになることを例として論を進める。

7.2.1 フレーム参与者共有の原則

Matsumoto (1996a) は日本語の複合動詞はその結合の制約として、複合する二つの動詞の表す出来事に共通の参与者がなければならないという「参与者共有の原則」があると主張した(ここでの参与者は項として実現されるものを指す)。しかし、中国語の結果複合動詞は(21)のように、意味的にリンクする項が存在しない複合動詞が多数存在するため、この結合制約が適用されないと分析した⁶²。

⁶² Matsumoto (1996a: 231) は脚注において、「参与者共有の原則」の反例とされる日本語の「髪が寝乱れる」と「頬が泣き濡れる」を例に挙げ、フレームの概念を導入することで【髪】が「寝る」というフレームに、【頬】が「泣く」というフレームに参加している要素として見なすことができるため、この問題点を解決できるかもしれないと述べている。本研究も同様の立場に立つが、後述するように、「頬が泣き濡れる」において【頬】が直接共通成分になるのではなく、隠れている【涙】のようなフレーム要素が共通成分となる場合が多くあると考える。

(21) 他 買空了 錢包

Tā mǎi-kōng-le qiánbāo

He buy-empty-PST wallet

(彼はものを買すぎて財布を空にした)

V1「買 mǎi (買う)」の項: 「他(彼)」, 「商品」

V2「空 kōng (空になる)」の項: 「錢包(財布)」

本研究は項としてではなく、意味フレームにおける事象参与者から見ると「買空 mǎi-kōng (買って空にする)」のような例は【お金(錢 qián)】という共通する意味的参与者を抽出することができ、中国語にも「フレーム参与者共有の原則」という結合制約が適用できると主張する⁶³。

(22) フレーム参与者共有の原則:

語彙的複合動詞において、構成要素 V1 と V2 の意味フレームに、共通する事象参与者がなければならない。

今井 (1985) はこのような一見共通成分がない結果複合動詞を「間接動補」といい、間接的に共通成分を持つと主張している。そして、共通成分のタイプによって以下のように分類している((23)の下線部は共通成分を表している)。

(23) 「間接動補」の分類

- a. 大主語、小主語の中の大主語だけが共通成分になる。

例: 小張 吃壞了 肚子

Xiǎozhāng chī-huài-le dùzi

Xiǎozhāng eat-be.broken-PST stomach

(小張はお腹を壊した)

⇒小張吃+小張肚子壞了

(小張が食べる+小張のお腹が壊れる)

⁶³ この「フレーム参与者の原則」は「打ち上がる」や「突き出る」のような主語不一致型複合動詞にも適用される。

b. 動作の行われる場所を表す語が共通成分になる。

例：胖子 坐塌了 椅子

Pàngzi zuò-tā-le yǐzi

fat.person sit-be.crushed-PST chair

(ふとっちょが座って、椅子が潰れた)

⇒胖子坐在椅子上+椅子塌了

(ふとっちょが椅子に坐る+椅子が潰れる)

c. 行為、現象の影響を受けるものが共通成分になる。

例：大風 颳倒了 小樹

Dà-fēng guā-dǎo-le xiǎo-shù

big-wind blow-fall-PST small-tree

(大きな風が吹いて、小さな木が倒れた)

⇒大風颳(小樹)+小樹倒了

(大きな風が(小さな木に)吹く+小さな木が倒れる)

この分類には幾つかの問題点が挙げられる。例えば、(24)について、今井(1985)は「枕頭 *zhěntóu* (枕)」は「他 *tā* (彼)」の所有物であり、所有物と所有者の関係は分離不可能な関係であるため共通成分として見なすことができると分析している。

(24) 他 哭濕了 枕頭

tā kū-shī-le zhěntóu

he cry-be.wet-PST pillow

(彼は泣いて枕を濡らした)

しかし、他人の枕でも「哭濕 *kū-shī*」といえるため、共通成分は他にあると思われる。本研究は「哭濕 *kū-shī*」という V1V2 全体の意味形成を説明するためには【涙】という「隠れている」共通成分が必要だと考える。「哭濕 *kū-shī*」の V1「哭 *kū* (泣く)」が表す事象において【涙】は項ではないが必要な参与者であり(泣くと涙が出る)、V2「濕 *shī* (濡れる)」という事象において同様である(涙によって濡れる)。涙によって濡れたのでなければ、たとえ大雨の中で泣いて、髪がずぶ濡れになっても「她哭濕了頭髮 *tā kū-shī-le tóufà* (彼女は泣いて髪を濡らした)」とは言えない。また、(23)の「胖子坐塌了椅子 *pàngzi zuò-*

tā-le yǐzi (ふとっちょが座って、椅子が潰れた)における「椅子 *yǐzi*」は V2 の主語だが、V1 の「動作の行われる場所」であると述べている。しかし、(25)において、「玩具 (おもちゃ)」が場所であるというのは難しい。

(25) 坐壞了 玩具

zuò-huài-le wánjù

sit-be.broken-PST toy

(おもちゃに座ったことでそれを壊した)

また、仮に「椅子」が「動作の行われる場所」であっても、椅子に座った状態で手を使っておもちゃを壊しても「坐壞了玩具」とはいえない。さらに、(23)は行為、現象の影響を受けるものが共通成分になるとしているが、このように分類すると、(23)の「小張吃壞了肚子(小張はお腹を壊した)」における「肚子(お腹)」も(23)の「胖子坐塌了椅子」における「椅子」も(23)と同様に行為、現象の影響を受けるものである。

参与者を項としてなく、フレーム要素として考えることで、この「フレーム参与者共有の原則」という複合動詞が成立するための必要条件は、より多くの結合可能な組み合わせを予測することができる。例えば、項に基づく分析では、なぜ同じように共通の項を持たない「喊啞 *hǎn-yǎ* (叫ぶ+嘎れる)」「哭啞 *kū-yǎ* (泣く+嘎れる)」が言えるのに対し、「*走啞 *zǒu-yǎ* (歩く+嘎れる)」「*坐啞 *zuò-yǎ* (坐る+嘎れる)」「*寫啞 *xiě-yǎ* (書く+嘎れる)」等と言えないのかということを説明できない。しかし、フレーム要素を用いて分析することで、共通の項がなくとも、「喊啞 *hǎn-yǎ* (叫ぶ+嘎れる)」「哭啞 *kū-yǎ* (泣く+嘎れる)」は喉や声のような共通参与者を見出すことができるため成立できるのに対し、「*走啞 *zǒu-yǎ* (歩く+嘎れる)」「*坐啞 *zuò-yǎ* (座る+嘎れる)」「*寫啞 *xiě-yǎ* (書く+嘎れる)」は共通成分がないため成立できないと説明できる。

7.2.2 中国語結果複合動詞の自他交替

次に、中国語において、最も数が多く、生産的な「原因—結果」型複合動詞(以下では結果複合動詞)に見られる、(26)のような[自動詞-自動詞]が自動詞になったり、他動詞になったりする現象について、意味フレームの概念を導入することで説明できることを示す。

(26) a. [自動詞-自動詞] → 自動詞

小孩 哭醒了。

Xiǎohái kū-xǐng-le

child cry-wake-PST

(子供が泣いて目覚めた)

b. [自動詞-自動詞] → 他動詞

那嬰兒 哭醒了 媽媽。

Nà-yīngér kū-xǐng-le māmā

that baby cry-wake-PST mother

(あの赤ちゃんが泣いたことでお母さんが目覚めた)

Li (1990: 189) はこの現象を説明するには意味的, 語用論的, さらに慣用的な制約から考える必要があると述べているが, 具体的な制約が何であるのかを説明していない。

ここで特に問題になるのはなぜ他動性を持たない自動詞同士が結合した時に他動性を帯びて複合動詞全体として他動詞になることができるのかということである。山口 (1991) は自動詞+自動詞(及び他動詞+自動詞)が全体として他動詞になるのは, V2 が使動化しており, その使動化の素性が複合動詞全体に引き継がれるからだと主張した。そして, 現代語ではその使動義を殆ど失ったかにみえる自動詞であるが, 実は使動義を表す能力を潜在的に持っており, ある種の前項と結合して動補動詞(結果複合動詞)を形成した場合には, 使動義を顕在化させることができるという。しかし, この主張を裏付ける経験的な証拠は今のところ無いとも述べている。また, この説明ではどのような場合に自動詞の V2 の使動義が顕在化されるのか不明であるため, 複合動詞全体の自他がどのように決まるのかを説明できない。例えば, なぜ同じ V2「死 *sǐ* (死ぬ)」を持つ「坐死 *zuò-sǐ* (sit-die)」と「吃死 *chī-sǐ* (eat-die)」は一方が「坐死兔子 *zuò-sǐ tùzi* (座ることで兔を死なせた)⁶⁴」のように他動詞の用法しかないが, もう一方は「他快吃死了 *tā kuài chī-sǐ-le*(彼は食べ過ぎて死にそうだ)」のように自動詞の用法しかないことを説明できない。石村 (2000) も後項述語は原因となる前項を導入することで使役義を獲得することができるかと主張しているが, 同様に「坐死」と「吃死」の違いを説明できない。

中国語の結果複合動詞には以下の組み合わせが存在している。

⁶⁴ 『活活坐死兔子四川女大學生背後有集團操控』 (www.nownews.com/2010/11/22/91-2666541.htm)

- (27) a. [自動詞-自動詞] → 自動詞
 b. [自動詞-自動詞] → 他動詞
 c. [他動詞-自動詞] → 自動詞
 d. [他動詞-自動詞] → 他動詞

実際に二つの動詞が組み合わさったとき、自動詞となるのか、他動詞となるのかは、フレーム的知識による。「坐」のフレーム要素【結果】には、座ることで自分が死ぬということは含まれていないが、座られた小動物などが死ぬ可能性があるため、「坐死」における V2「死」の項は V1「坐」の動作主ではなく、座られたものとして認識され、複合動詞全体が他動詞として振る舞う。対照して、何かを食べて自分が死ぬ可能性があるため、「吃死」において、V2「死」の項は V1「吃」の動作主として認識され、複合動詞全体が自動詞になる。一方、「哭醒」は泣くことで自分が目覚める場合もあれば、泣くときに発する声で他人を起こす場合もあるため、(26)のように、自動詞と他動詞の両方の用法が可能となる。

「吃死」については、Her (2007) が取り上げた(28)の例のように、それが一見他動詞のように振舞っている場合がある。

- (28) 這種藥 會 吃死 你。
 Zhèzhǒng-yào huì chī-sǐ nǐ
 this.kind-drug will eat-dead you
 ‘Eating this kind of drug will make you dead.’

この場合は、Lee & Ackerman (2011) が主張しているように、「吃死」は使役化(causativization)により、このような変則的な項が形成されるだけで、本質的には自動詞である。Lee & Ackerman (2011) によると、本来は目的語を取れないはずの自動詞が(29)のような使役化というメカニズムによって Causer となる項を取れるようになるという。

(29) Causative formation

[x CAUSE [BECOME pred'(y).....]]

そして、(28)の「這種藥會吃死你」における「藥」は(30)のように、Agent ではなく、Causer であると考えられる、と述べている。

(30) [drug CAUSE [[BECOME dead'(you)] BY [eat'(you)]]]

中国語の使役化という現象は複合動詞だけではなく、単独動詞でも見られるものである。

(31) a. SARS 死了 很多人。
 SARS sǐ-le hěnduō-rén
 SARS dead-PST many.people
 (SARS は多くの人を死なせた)

b. *我 死了 他。
 Wǒ sǐ-le tā
 I dead-PST he
 int (私は彼を死なせた)

(32) a. 垃圾食物 會 壞了 你的健康。
 Lèsè-shíwù huì huài-le nǐ-de-jiànkāng
 Garbage-food will break-PST you-GEN-health
 (ジャンクフードはあなたの健康を損なう)

b. *我 壞了 箱子。
 Wǒ huài-le xiāngzi
 I break-PST box
 int (私が箱を壊した)

(31)と(32)における「死」と「壊」は、本来自動詞的な状態変化の用法しか無いのだが、使役化することによって、目的語に **Causer** となる項を取れるようになる。(31)と(32)において、「我」というのは **Causer** ではなく、**Agent** であるため、使役化することができないのである。

ただし、Lee & Ackerman (2011) は「吃死」が自動詞になるのは、ここでの「吃」が自動詞であり、自動詞+自動詞であるため全体が自動詞となると主張しているが、自動詞+自動詞であっても全体が自動詞になるとは限らない。そのため、本論は「吃死」が自動詞となるのは、「吃」ということによって「死」という結果が起こり得るのは自分だけで、「野狗咬死小雞(野良犬が雛を噛み殺した)」のように咬むことで対象を死なせることはあっても、食べることで何かを死なせることはしないからだと考える。

もう一つの問題点として、他動詞+自動詞が自動詞になったり、他動詞になったりする現象が挙げられる。山口 (1991) や秋山 (1998) において、他動詞+自動詞が全体として自動詞(「喝酔 *hē-zuì* (drink-get.drunk)」や「吃胖 *chī-pang* (eat-gain.weight)」など)になる場合と、他動詞(「打死 *dǎ-sǐ* (hit-die)」や「推倒 *tuī-dǎo* (push-fall)」など)になる場合に分類しているが、どのように複合動詞全体の自他が決定されるのかについては説明していない。

この問題点もフレーム意味論的アプローチによって説明できる。同じ V2 を持つ「吃死 *chī-sǐ* (eat-die)」と「打死 *dǎ-sǐ* (hit-die)」, そして同じ V1 を持つ「吃死 *chī-sǐ* (eat-die)」と「吃垮 *chī-kuǎ* (eat-collapse/go.bankrupt)」を例に説明すると、まず、「吃死 *chī-sǐ* (eat-die)」は前述したように百科事典的知識によって自動詞の用法しか持たないのに対し、「打死 *dǎ-sǐ* (hit-die)」は百科事典的知識に基づいて、何かを打つことで死ぬ可能性があるのは自分ではなく他人であるため、他動詞の用法しかない。次に、「吃垮 *chī-kuǎ* (eat-collapse/go.bankrupt)」において、食べることで「潰れる」可能性があるのはその食べ物を提供している店などであり、自分ではないため、他動詞の用法しかないのである。

このように、複合動詞全体の自他は個別の動詞の性質によって決定されるのではなく、特定の組み合わせにおいて生じる性質であり、我々が現実世界や文化について持っている豊富な百科事典的知識に基づくものである。

7.3 まとめ

本章で見てきたように、日本語語彙的複合動詞に用いたフレーム・コンストラクション的なアプローチは中国語複合動詞の分析にも適用できる。まず、コンストラクション形態論を用いることで、中国語複合動詞の階層的なスキーマネットワークを示した。そして、コンストラクションという概念を用いることで、「～下」に見られる拘束意味、及び、「～上」に見られる全体的な文法性質を説明できることを示した。次に、フレーム意味論というアプローチを用いることにより、中国語の結果複合動詞には意味的な結合制約として、ある動作を表す前項動詞 V1 とその動作の結果を表す後項動詞 V2 の意味フレームにおいて、共通の「事象参与者」が存在しなければならないという、「フレーム参与者共有の原則」があると主張した。そして、V1 と V2 の意味フレームの百科事典的知識に基づいて、複合動詞の意味が形成されると考えることで、複合動詞全体がどのような場合において自動詞として働き、どのような場合に他動詞として働くのか、という大きな問題点を解決できると示した。

第8章 主語一致の原則の有無と

日中両言語の違い

これまでの章で検討してきたように、日本語の語彙的複合動詞は一部の例を除いて「主語一致の原則」という、一般的な結合制約が存在する。それに対して、中国語複合動詞は主語一致の原則が適用されない。この違いはどこから来るのだろうか。本章では日本語と中国語の違いについて、主にこの主語一致の原則をめぐって論じる。

本章において、まず 8.1 において、日本語と中国語の複合動詞の違いについて論じる。8.1.1 では非意図的な使役事象がどのように表現されるのか、そして、複合動詞における意味の曖昧性を中心に議論する。8.1.2 ではなぜ主語一致の原則が日本語複合動詞の制約として存在しているのに対し、中国語複合動詞には適用されないのか、ということについて説明する。8.2 においては、本研究で得た知見に基づいて、Talmy (2000) において提起された、1) 言語にとって単一の統合された事象として働くものと知覚や一般認知における単一の事象との間にどのような関係があるか、2) 言語表現のために二つの事象を一つに概念統合するために欠かせない要因は厳密には何か、3) どのタイプの複合イベントがそのような概念統合を受けられるかについて言語間でどのような違いがあるか、という問題点について、複合動詞という言語現象から検討を行う。最後に 8.3 で本章を総括する。

8.1 日中両言語の違い

これまでに日本語と中国語の複合動詞は「因果関係」、「因果関係による必然的な共起性」、そして「並列関係」という共通した認知的な動機付けがあることを見てきたが、本節では、両言語の複合動詞の違い、及びそれを引き起こした要因について検討する。

8.1.1 非意図的な使役事象と意味の曖昧性

日本語と中国語の複合動詞において、使役事象をどのように表すのか、という点において大きな違いが見られる。例えば、ある対象に打撃を与えることでそれを破壊する、という使役事象を表す場合、日本語は「打ち壊す」というように、[他動詞—他動詞]_vの手段—目的型で表現するのに対し、中国語は「打壞 *dǎ-huài* (hit-be.broken)」というように、[他動詞—自動詞]_vの原因—結果型で表す。これは 8.3.2 で説明するように、日本語の語彙的複合動詞に「主語一致の原則」があるのに対し、中国語複合動詞にはその制約がないからである。前述のように、中国語にも手段—目的型の複合動詞があるが、その生産性は低く、特定の V2 しか許されない。例えば、「打ち壊す」に対応する手段—目的型のものは存在せず、「打壞 *dǎ-huài* (hit-be.broken)」のような原因—結果型でしか表すことができない。一方、日本語の場合は、V1 と V2 の主語を一致させる必要があるため、使役事象を表す場合は、「*打ち壊れる」ではなく「打ち壊す」を用いる必要がある。このような制約から、日本語複合動詞の V2 は使役と状態変化の意味を併せ持つことになる。V2 が状態変化だけではなく使役の意味も持つため、日本語では非意図的な使役事象を複合動詞で表すことができないのである。「うっかり打ち壊した」というように、副詞を加える事で、その使役事象が非意図なものであるのを表すことは可能だが、V2 が表すある状態変化を引き起こす手段として一般的に考えられるものでなければ、複合動詞の V1 になれないのである。

例として、「*撫で壊す」「*触り壊す」「*使い壊す」「*落とし壊す」「*(携帯を)浸かり壊す」「*(椅子を)座り壊す」などのような、複合動詞が本来、ある非意図な使役事象を表すようなものは日本語では成立できない。それに対して、中国語は「摸壞 *mō-huài* (stroke-be.broken) ‘何かを撫でたことでそれが壊れる’」、「碰壞 *pèng-huài* (touch-be.broken) ‘何かを触ったことでそれが壊れる’」、「用壞 *yòng-huài* (use-be.broken) ‘何かを使ったことでそれが壊れる’」、「摔壞 *shuāi-huài* (drop-be.broken) ‘何かを落としたことでそれが壊れる’」、「泡壞 *pào-huài* (soak-be.broken) ‘何かを浸したことでそれが壊れる’」、「坐壞 *zuò-huài* (sit-be.broken) ‘何かに座ったことでそれが壊れる’」のように、使役事象を原因—結果型の複合動詞で表すため、意思的に対象の状態変化を引き起こすものである必要はなく、非意図な使役事象も複合動詞として表すことができる。これは第五章で見たような意味的な一致性が目的—手段型の日本語においては見られないのに対し、原因—結果型の中国語では見られるからである。つまり、「触る(摸 *mō*)」の【目的】に(何かを壊すため)というのは含まれていないが、「触る(摸 *mō*)」の【結果】には(何か壊れる可能性がある)という情報が含まれると考えられるからだ。

また、日本語の複合動詞は V1 と V2 の主語が一致する他動詞－他動詞の組み合わせを取ることによって、使役の一貫性を維持し、意味の曖昧性が生じることを回避することができる。それに対し、中国語は主語を一致させることが必ずしもできない場合があり、その際には意味の曖昧性が生じることがある。例えば、「哭醒 *kū-xǐng* (cry-wake)」という複合動詞は V2 の主語(目覚める人)が V1 の泣くという動作によって影響を受ける対象に当たるが、x が泣いたことで x 自身が目覚める場合もあれば、x が泣いたことで y が目覚める場合もある。そのため、「哭醒 *kū-xǐng* (cry-wake)」は(10)のように自動詞としても他動詞としても成立する。

(10) a. 他哭醒了。

tā kū-xǐng-le

he cry-wake-PST

‘He woke up by crying.’

b. 那嬰兒哭醒了媽媽。

nà yīngér kū-xǐng-le māmā

that baby cry-wake-PST mother

‘That baby cried and made her mother wake up.’

日本語の複合動詞は主語一致の原則によってこのような曖昧性が生じることはないのである。

非意図な使役事象を表すことができるかどうか、そして意味の曖昧性が生じるかどうかは「主語一致の原則」があるかどうか起因するものである。次節より、なぜ日本語語彙的複合動詞には「主語一致の原則」があるのに対し、中国語複合動詞にはそれが適用されないのかを検討する。

8.1.2 主語一致の原則の有無

二章の先行研究の部分で述べたように、日本語には「主語一致の原則」という一般的な結合制約が存在し、それは、二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の

中で最も卓立性の高い参与者(通例, 主語として実現する意味的項)同士が同一物を指さなければならないというものである(松本 1998: 72)。

しかし, 主語一致の原則は普遍的な制約として考えられたものではない。よく知られている例として, 中国語の「結果複合動詞(resultative compound verbs, 本研究における原因—結果型)」は V1 と V2 の主語が一致する必要はない。例を挙げて説明すると, 「叩き壊す」は V1 と V2 の主語が一致するが, それに相当する中国語の複合動詞は「敲壞 *qiāo-huài* (knock-break)」であり, V1 「敲 *qiāo* (knock)」は他動詞で, 原因となる事象を表し, V2 「壊 *huài* (break)」は自動詞で, 結果事象を表す。この場合 V2 の主語は V1 の目的語に当たるものである。では, なぜこのような違いが生じるのかということ, 日本語と中国語の自他対応の違いが関わっていると考えられる。

日本語と中国語の自他対応(被使役・使役の対立)の実態を見るために, 本研究は Haspelmath (1993) で提案された 31 の自他動詞のペアを用いて, 日本語と中国語における単純動詞の自他対応関係を調べてみた⁶⁵。

表 8-1 Haspelmath (1993: 97) における 31 の自他動詞ペア

1. 'wake up (intr.)/(tr.)'	12. 'change (intr.)/(tr.)'	22. 'finish (intr.)/(tr.)'
2. 'break (intr.)/(tr.)'	13. 'melt (intr.)/(tr.)'	23. 'turn (intr.)/(tr.)'
3. 'burn (intr.)/(tr.)'	14. 'be destroyed/destroy'	24. 'roll (intr.)/(tr.)'
4. 'die/kill'	15. 'get lost/lose'	25. 'freeze (intr.)/(tr.)'
5. 'open (intr.)/(tr.)'	16. 'develop (intr.)/(tr.)'	26. 'dissolve (intr.)/(tr.)'
6. 'close (intr.)/(tr.)'	17. 'connect (intr.)/(tr.)'	27. 'fill (intr.)/(tr.)'
7. 'begin (intr.)/(tr.)'	18. 'boil (intr.)/(tr.)'	28. 'improve (intr.)/(tr.)'
8. 'learn/teach'	19. 'rock (intr.)/(tr.)'	29. 'dry (intr.)/(tr.)'
9. 'gather (intr.)/(tr.)'	20. 'go out/put out'	30. 'split (intr.)/(tr.)'
10. 'spread (intr.)/(tr.)'	21. 'rise/raise'	31. 'stop (intr.)/(tr.)'
11. 'sink (intr.)/(tr.)'		

⁶⁵ 日本語語彙的複合動詞は和語単純動詞の組み合わせであり, 中国語複合動詞も単純動詞の組み合わせである。ここでは主語一致の原則について検討するため, 複合動詞に用いられる単純動詞の自他対応を見ている。よって, 表 8-1 に対応する動詞が単純動詞ではない場合(*develop* に対応する「発展する」や「發展 *fāzhǎn*」など)はカウントに入れない。

結果は表 8-2 のようである(網掛けの部分は単純動詞以外の場合を表す)。

表 8-2 日本語と中国語の単純動詞の自他対応

	Haspelmath の 自他動詞ペア	日本語		中国語	
		自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
	動詞	自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
1	wake up	起きる	起こす	起 <i>qǐ</i>	
2	break	折れる	折る	斷 <i>duàn</i>	折 <i>zhé</i>
3	burn	焼ける	焼く	燥 <i>zào</i>	燒 <i>shāo</i>
4	die/kill	死ぬ	殺す	死 <i>sǐ</i>	殺 <i>shā</i>
5	open	開く	開く	開 <i>kāi</i>	開 <i>kāi</i>
6	close	閉まる	閉める	關 <i>guān</i>	關 <i>guān</i>
7	begin	始まる	始める		
8	learn/teach	学ぶ	教える	學 <i>xué</i>	教 <i>jiāo</i>
9	gather	集まる	集める	聚 <i>jù</i>	
10	spread	広がる	広める		
11	sink	沈む	沈める	沉 <i>chén</i>	
12	change	変わる	変える	變 <i>biàn</i>	
13	melt	溶ける	溶かす	化 <i>huà</i>	
14	be destroyed/destroy	壊れる	壊す	毀 <i>huǐ</i>	毀 <i>huǐ</i>
15	get lost/lose	無くなる	無くす	丟 <i>diū</i>	丟 <i>diū</i>
16	develop				
17	connect	繋がる	繋げる	連 <i>lián</i>	接 <i>jiē</i>
18	boil	沸く	沸かす	開 <i>kāi</i>	
19	rock	揺れる	揺らす	搖 <i>yáo</i>	搖 <i>yáo</i>
20	go out/put out	消える	消す	沒 <i>méi</i>	
21	rise/raise	上がる	上げる	升 <i>shēng</i>	
22	finish	終わる	終える	完 <i>wán</i>	

23	turn	回る	回す	轉 <i>zhuǎn</i>	轉 <i>zhuǎn</i>
24	roll	転がる	転がす	滾 <i>gǔn</i>	
25	freeze	凍る	凍らす	凍 <i>dòng</i>	
26	dissolve	溶ける	溶かす	化 <i>huà</i>	
27	fill	満ちる	満たす	滿 <i>mǎn</i>	
28	improve	直る	直す	好 <i>hǎo</i>	
29	dry	乾く	乾かす	乾 <i>gān</i>	
30	split	割れる	割る	裂 <i>liè</i>	撕 <i>sī</i>
31	stop	止まる	止める	停 <i>tíng</i>	停 <i>tíng</i>

この結果をまとめると、表 8-3 のように、日本語では全てのペアに自他の対応があったのに対し、中国語の場合は自他対応があるものは 46.43%しかなく、53.57%のものは自動詞しかなかった。

表 8-3 日本語と中国語の単純動詞の自他対応の比率

言語 \ 自他対応	自他対応あり			自動詞のみ
	形態的対応	異型	同型	
日本語	90%	6.67%	3.33%	0
中国語	0	21.43%	25%	53.57%

このように、日本語の動詞は自動詞と他動詞が対応していることが多く、下の例文にある「閉じる」のように、一部自動詞と他動詞が同じ語形を持つものがあるが、ほとんどが自他動詞ペアの間に形態的な対応関係が見られない「死ぬ」と「殺す」のような異型のタイプに属するものや、「乾く」と「乾かす」のような形態的な対応関係がある語形の異なるものである。

- (11) a. ドアが閉じた。
 b. 太郎がドアを閉じた。

一方、中国語は(12)の「開 *kāi* (open)」のように自他同型のものや、(13)の「殺 *shā* (kill)」と「死 *sǐ* (die)」のように異型の自他動詞ペアはあるが、日本語のような自動詞と他動詞の形態的な対応はない。

(12) a. 他 開了 門。
tā kāi-le mén.
 he open-PST door
 ‘He opened the door.’

b. 門 開了。
mén kāi-le.
 door open-PST
 ‘The door opened.’

(13) a. 他 殺了 小明。
tā shā-le Xiǎomíng
 he kill-PST Xiǎomíng
 ‘He killed Xiǎomíng.’

b. 他 死了。
tā sǐ-le
 he die-PST
 ‘He died.’

このように、ある状態変化の事象を表す場合、中国語は自動詞しか持たないことが多いのに対し、日本語は自動詞だけでなく、それに形態的に対応する他動詞を併せ持つ場合が多い。

では、中国語はどのように使役事象を表すのかというと、複合動詞という言語形式を用いて、使役と状態変化をそれぞれ V1 と V2 で表現するのである。例えば、柱を押して倒す場合、中国語では何かが倒れるという状態変化は自動詞の「倒 *dǎo* (fall)」で表すことができるが、対応する他動詞を持たないため、原因事象を表す V1 と結合して「推

倒 *tuī-dǎo* (push-fall)」のように複合動詞という形で表現しなければならない⁶⁶。

(14) a. 柱子 倒了。

Zhùzi dǎo-le

pillar fall-PST

‘A pillar fell.’

b. 他 推倒了 柱子。

tā tuī-dǎo-le zhùzi

he push-fall-PST pillar

‘He pushed down a pillar.’

以上のように、使役事象を表す際、中国語は対象の状態変化を V2 で表し、使役及び状態変化を引き起こす原因を V1 で表す必要がある。では、なぜ日本語の場合は「*打ち壊れる」のような表現を取らないのだろうか。

これを説明するには Talmy (1991, 2000) における事象統合(event integration)の類型論を紹介する必要がある。Talmy (1991) によると、移動事象は「経路(path)」によって「枠付け」されており、その枠付けが行われるのが節の主要部の動詞であるか、それともその付随要素(satellite)であるかによって、言語を二つの類型に分類できる。経路を動詞に写像する特徴を持つ言語は動詞枠付け言語(verb-framed language, V 言語)と呼び、ロマンス語、日本語などが含まれるという。それに対し、経路を付随要素に写像するのを特徴とする言語は、付随要素枠付け言語(satellite-framed language, S 言語)と呼び、ロマンス語を除くほとんどのインド・ヨーロッパ語、中国語などがあるという。このような類型論は状態変化事象にも適用される。状態変化事象の場合は状態変化が動詞で表されるのか、それとも付随要素で表されるのかによって、その言語が動詞枠付け言語か付随要素枠付け言語かが決まる。

Matsumoto (2003) ではこの定義を再定式化し、Talmy の動詞を動詞句の主要部、付随

⁶⁶ 使役の手段が特定されない場合は「弄 *nòng* (make)」や「打 *dǎ* (hit)」のような軽動詞に相当するものを前項動詞 V1 として自動詞 V2 と複合動詞を作ることによって他動性の使役事象を表現できる。

要素を動詞句の非主要部と解釈しなおした。これによって、言語を主要部枠付け言語と非主要部枠付け言語に分けることができる。何が動詞句の主要部なのか、ということについては様々な考え方が有りうるが、ここでは動詞句全体の項を決定するものが主要部だと考える。

日本語において、ある対象を倒れた状態にするという使役状態変化を表す場合、自他の対応があるため、状態変化と使役を「倒す」という一つの動詞で表すことができる。この場合「倒す」は動詞句全体の項構造(主語と目的語)を決定するものであるため、主要部である。同時に「倒す」は状態変化を表しているため、日本語は主要部枠付け言語であることが確認できる。一方、中国語において、同じようにある対象を倒れた状態にするという使役状態変化を表す場合は、自他対応がないため、前述のように「推倒 *tuī-dǎo* (push-fall)」のように表現する。この場合、状態変化を表している V2「倒 *dǎo* (fall)」は主要部ではない。なぜなら、動詞句全体は主語以外に目的語という項を持つが、これは V1 の「推 *tuī* (push)」によって導入されるものであるからだ。したがって、中国語は非主要部枠付け言語であることがわかる。

一方、日本語において、ある複合事象を表す場合は複合動詞を用いるが、時間順序の規則により、状態変化を表すのは必然的に V2 となる。そして、主要部枠付け言語である日本語は、状態変化を表す V2 が主要部である。よって、V2 は状態変化を表すものであるのと同時に、複合動詞全体の項構造を決定するものでもあるため、「*押し倒れる」のような他動詞+自動詞という主語が一致しない組み合わせではなく、「押し倒す」のように主語一致の組み合わせを取らなければならないのである。

これまでの議論の流れを整理すると、図 8-1 のようになる⁶⁷。

⁶⁷ ただし、実際にどの要因が先にあるかは定かではなく、因果関係的に図 8-1 のような流れであるとは限らない。恐らく各要因が相互に影響しあって、このような全体的な対応関係になったと思われる。

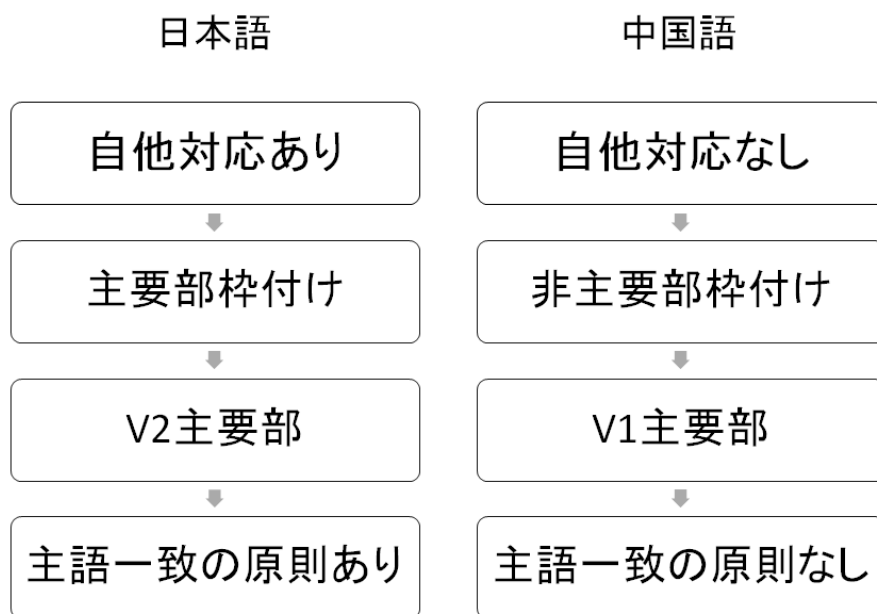


図 8-1 日本語と中国語において「主語一致の原則」の有無を引き起こす要因

以上のように、日本語と中国語は、自他対応があるかどうかという違いから、主要部枠付け言語か非主要部枠付け言語かが決定される。そして、主要部枠付けか非主要部枠付けかによって、V1 と V2 のどちらかが主要部として選ばれ、主語一致の原則が適用されるかどうかが決まる。さらに、主語一致の原則があるかどうかによって、非意図的な使役事象を表せられるか、そして、意味の曖昧性が生じるかどうか、という違いが生まれるのである。

8.2 タルミーの提起した問題に対する答え

本章では日本語と中国語の複合動詞の違いについて検討してきたが、ここで前述の Talmy (2000) で提起した問題点について、本研究で得た知見に基づいて改めて考えてみたい。

- 1) 言語にとって単一の統合された事象として働くものと知覚や一般認知における単一の事象との間にどのような関係があるか
- ⇒ 複合動詞で言うと、言語における単一の統合された事象は必ず知覚・認知における一つの事象でもある。しかし、動詞の表すことができる概念の制限、及びコンストラクショナルな

制限によって、知覚・認知における一つの事象は言語的に統合された事象として表現できるとは限らない。

2) 言語表現のために二つの事象を一つに概念統合するために欠かせない要因は厳密には何か

⇒ 複合動詞として二つの事象を一つに概念統合するためには、二つの事象が何らかの因果関係にあることが共通の条件であり、中にはさらに同時的に知覚されることが必要なものもある。また、複合事象を表す複合動詞として成立するには、二つの事象を表す二つの動詞が、コンストラクションレベルの制約と意味フレームレベルの制約に適合し、そして、ある言語社会において確立された文化的表象である必要がある。

3) どのタイプの複合事象がそのような概念統合を受けられるかについて言語間でどのような違いがあるか

⇒ 日本語と中国語だけで言うと、因果関係に基づくタイプと、因果関係による必然的な共起性に基づくタイプは、共通して複合動詞という形式で表現できるようになる概念統合を受けることができる。並列関係の複合動詞も存在するが、このタイプは本質的に単一の事象を二つの異なる動詞で表しているだけなので、知覚・認知における複合事象とは認められない。そして、日本語と中国語は自他対応があるかどうか、という構造的な違いによって、非意図的な使役事象を複合動詞で表すことができるかどうか、という概念的な違いが生じる。

8.3 まとめ

以上のように、本章では、日本語と中国語の複合動詞の違いについて見てきた。結果として、両言語は「主語一致の原則」があるかどうかということによって、非意図的な使役事象を表せられるかどうか、そして、意味的な曖昧性が生じるかどうか、という違いとして現れる。加えて、「主語一致の原則」がなぜ日本語複合動詞に存在しているのに対し、中国語複合動詞に適用されないのかを明らかにした。

そして、タルミーが提起した問題点について、本研究で得た知見に基づいて回答した。

第9章 結論

9.1 本研究のまとめ

本論文は複合動詞の形成メカニズムを説明するには、コンストラクションのレベル、意味フレームのレベル、慣習化のレベルという三つの異なるレベルで考える必要があると主張し、日本語と中国語の複合動詞は共にこのような複層的な制約が存在することを示した。さらに、本研究は日中両言語における複合動詞が表す複合事象は「因果関係」または「因果関係による必然的な共起性」という共通の認知的な動機付けがあることを示し、「主語一致の原則」を作った要因、及びそれによって「非意図的な使役事象を表せられるかどうか」という違いが生じることを明らかにした。

本論文は第一章において、複合動詞には三つの異なるレベルの制限があると主張し、本研究の研究対象や研究目的、使用するデータ、そして、全体の構成について述べた。

第二章では、「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」という、複合動詞の結合の制約に関する体系的な先行研究を取り上げ、残された問題点を指摘した。そして、先行研究で複合動詞の分析に用いられている意味構造として、影山 (1996) や由本 (2005, 2010) などにおいて用いられている語彙概念構造(LCS)を取り上げ、LCS は背景的情報を含んでいないという問題点があることを指摘した。そして、近年 LCS の代案として挙げられている、百科辞典的知識を取り入れたクオリア構造を取り上げ、本研究で用いる意味フレームという意味構造との違いを明らかにした。

第三章では本研究が主張する三つのレベルにおいて用いる理論的枠組であるコンストラクション形態論とフレーム意味論、そして文化的表象という概念を紹介した。

第四章において、コンストラクション形態論のアプローチから、複合動詞を語レベルのコンストラクションとして考え、日本語の語彙的複合動詞を階層的なスキーマネットワークで示した。日本語複合動詞における一般的な結合制約である主語一致の原則は日本語複合動詞のスーパースキーマに相当し、主語が一致しないものについては、下位スキーマを形成していると説明した。そして、V1 と V2 の意味関係をコンストラクションとして考え、なぜ V1 と V2 が特定の意味関係にある場合にのみ複合動詞として成立するのか、ということについては、複合事象の本質を検討することで見てきた。その結果、複合事象を表す複合動詞は、「因果関係」と「因果関係による必然的な共起性」と

いう認知的な動機付けが存在することを明らかにした。また、複合動詞の非合成的な性質について、用法基盤モデルの観点から検討し、非合成的な複合動詞は高い使用頻度が必要であること、そして、非合成的な複合動詞は V1-V2 全体がひとまとまりとしてレキシコンに登録される必要があることを明らかにした。加えて、合成的なものでも一定以上の頻度があるものは、ひとまとまりとしてレキシコンに登録される必要があることを、語彙の競合という現象を取り上げて説明した。

第五章では、フレーム意味論のアプローチから、語の意味構造にフレームという「百科事典的知識」を含む背景状況の知識構造を結びつけることで、複合動詞の結合制限、意味形成、項形成、自他の交替など、様々な問題点について説明した。具体的に、本研究は FrameNet というフレームのデータベースに基づいて、動詞の意味フレーム、及びそれを構成するフレーム要素を定式化した。そして、動詞の意味構造に背景的な知識を含める必要があることを、「勝つ」及びそれが喚起する〈競技〉フレームを例に示した。背景フレームと文化の関わりについては、異なる社会と異なるコミュニティにおいて、異なる複合動詞が作られることを例に説明した。また、新しい文化の出現に伴って複合動詞が作り出されたり、反対に、文化の衰退と共に複合動詞が廃れたりする場合について述べた。加えて、意味フレームに基づいて、V1 と V2 のフレーム要素に意味的な結びつきがない、あるいはフレーム要素の間で不整合が生じる場合は複合動詞として結合できない、というように複合動詞の意味的な結合制約を意味構造のレベルで具体的な条件として設定した。その事例研究として、前項動詞 V1 と結合することで、ある対象を捉えることに失敗することを表す V2 「～おとす」「～もらす」「～のがす」を取り上げて分析を行った。その結果、意味フレームに含まれる関連事象という情報によって、従来の LCS による分析では説明できなかった「*見漏らす」のような結合不可のパターンを説明できることを明らかにした。また、複合動詞における多義語の意味がどのように決定されるのかを、「～取る」を例に示した。さらに、従来の研究では説明できなかった「ラーメン屋を {食べ歩く / *食べる / *歩く}」などのように、複合動詞全体の項が構成要素の項ではないものについて、フレーム要素を用いることで説明し、項形成の新しい考え方を提示した。最後に、複合動詞の適格性についても従来の定義を検討しなおし、「耳馴染み度」という概念を取り入れることで、適格性を連続的なものとして捉えることができることを示した。

第六章では、日本語の語彙的複合動詞における V1 と V2 の主語が一致しないものは、「プロファイルシフト」や「痕跡的認知」、「使役化」、「アナロジー」、「メトニミー」という様々な認知的な動機付けによって作り出されたものであることを明らかにした。

第七章では、日本語語彙的複合動詞に用いたフレーム・コンストラクション的なアプローチを中国語複合動詞の分析に適用し、考察を行った。まず、コンストラクション形

態論を用いることで、中国語複合動詞の階層的なスキーマネットワークを示した。そして、コンストラクションという概念を用いることで、「～下」に見られる拘束意味、及び、「～上」に見られる全体的な文法性質を説明できることを示した。また、フレーム意味論を用いることで、中国語複合動詞の一般的な結合制約として、「フレーム参与者共有の原則」という結合制約を立てることができる。加えて、自動詞と自動詞の組み合わせが他動詞になったり、自動詞になったりする、自他交替の現象を説明できることを示した。

第八章では、日本語と中国語の複合動詞には、「主語一致の原則」の有無によって、非意図的な使役事象を表せられるかどうかという違いがあることを示した。加えて、「主語一致の原則」がなぜ日本語複合動詞に存在しているのに対し、中国語複合動詞に適用されないのかを明らかにした。

9.2 本研究の意義

本研究は共にスキーマ的な思考方式であるコンストラクションとフレームを取り入れ、さらに両者を組み合わせることで、複合動詞の全体的な形成プロセスとメカニズムを明らかにした。

従来の還元主義的な考えでは、構成体の全体の意味はその構成要素の意味の総合に還元でき、構成要素から全体の意味が予測できると主張されていた。しかし、それではなぜ複合動詞が特定の型において、ある特定の意味が生じるのかということを説明できない。そのため、本研究は形式自体に意味があるというコンストラクションの概念を導入することによって複合動詞における合成的な一面と非合成的な一面を同時に捉えられることを示した。これによって、従来のトップダウン型な *input* から合成的に複合動詞を作るというアプローチではなく、コンストラクション形態論に代表されるボトムアップ型の *output-oriented* なアプローチから分析するというパラダイムシフトが必要であることを証明した。

また、本研究はフレーム意味論に基づき、語の意味構造にフレームという「百科事典的知識」を含む背景状況の知識構造を結びつけることで、複合動詞の意味的な面における様々な問題を解決した。具体的に、本研究は *FrameNet* というフレームのデータベースに基づいて、動詞の意味フレーム及びそれを構成するフレーム要素を定式化した。その上で、V1とV2のフレーム要素に意味的な結びつきがない、あるいはフレーム要素の間で不整合が生じる場合は複合動詞として結合できない、というように複合動詞の意味的な結合制約を意味構造のレベルで具体的な条件として設定した。複合動詞の項形成に関してもフレーム要素を分析に用いることで、認知的妥当性のある新しい考え方を提示した。

それだけではなく、フレーム意味論を用いた分析では意味フレームを具体的に定義・記述したものはほとんどなく、一部それを試みた研究は存在するが、Baker (1999) のように対象を特定の語彙(*see*)に限定したものしかない。その意味で、本研究はフレーム意味論を用いた数少ない具体的かつ包括的な研究として今後のフレーム意味論的アプローチの研究に貢献できると考える。同様に、コンストラクション形態論の具体的な分析例を実践的に示す研究となる。

複合動詞という二つの動詞の組み合わせについて分析することによって、本研究は動詞の意味には従来考えられていたよりも豊かな知識が含まれていることを明らかにすることができた。複合動詞という語形成について研究することは個別の言語現象を明らかにすることだけでなく、最終的に動詞の性質がどのようなものであるのか、そして、人間にとって複合事象とは何か、ということを知ることへと繋がると考える。

9.3 今後の課題

本論文は日本語の複合動詞を中心に分析してきたが、今後は中国語複合動詞をさらに掘り下げること、そして韓国語など、複合動詞という言語形式を有する他の言語についても本稿で主張したことが適用されるかどうかを検証する必要がある。

また、本研究では[V-V]_v型の語彙的複合動詞を研究対象としたが、「話し始める」「書き終わる」のような統語的複合動詞、「立ち読みする」「開け閉めする」のような[[V-V]_Nする]_vのような動詞由来の複合名詞+するというもの、「走って転ぶ」「立って歩く」のようなテ形の複雑述語なども、複合動詞との概念的な違いを考える上で比較の対象として、さらに考察を進める必要があると考える。

最後に、本研究で用いたフレーム・コンストラクション的(frame-constructive)なアプローチは[V-V]_v型の複合動詞のみに適用されるものではなく、「手渡す」や「旅立つ」のような[N-V]_v型の複合動詞、そして複合名詞などにも応用できると考えられるため、複合語全般を視野に入れた研究を将来的に行っていきたい。

参考文献

- 秋永一枝 (1985) 『NHK 日本語アクセント辞典』 東京：日本放送協会.
- Akita, Kimi (2012) Register-specific morphophonological constructions in Japanese. Paper presented at the 38th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, University of California, Berkeley, California. Papers of Berkeley Linguistics Society, Proceedings of the 38th Annual Meeting.
- 秋山淳 (1998) 「語彙概念構造と動補複合動詞」『中国語学』 245: 32-41.
- Alsina, Alex (1996) *The Role of Argument Structure in Grammar: Evidence from Romance*. Stanford: CSLI Publications.
- Anderson, Stephen R. (1992) *A-Morphous Morphology*. New York: Cambridge University Press.
- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Aronoff, Mark (2007) In the beginning was the word. *Language* 83: 803-830.
- Aronoff, Mark (2013) Competition and the lexicon. *Proceedings of the Annual Meeting of La Società di Linguistica Italiana*.
- Aronoff, Mark and Mark Lindsay (2014) Productivity, blocking, and lexicalization. In: S. Lieber and P. Štekauer (eds.) *The Handbook of Derivational Morphology*, 67-83. Oxford: Oxford University Press.
- 浅尾仁彦 (2007) 「意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞」『京都大学言語学研究』 26: 59-75.
- 浅尾仁彦 (2009) 「動詞連続の文法的性質を捉え直す：日韓対照を通じて」関西言語学会第 34 回大会ワークショップ「複雑述語の形式・機能とダイナミズム」. 6 月 6-7 日 (神戸松蔭女子大学)
- Baayen, R. Harald (2003) Probabilistic approaches to morphology. In: R. Bod, J. Hay, and S.

- Jannedy (eds.) *Probabilistic Linguistics*, 229-287. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Baker, Collin F. (1999) *Seeing Clearly: Frame Semantic, Psycholinguistic, and Cross-Linguistic Approaches to the Semantics of the English Verb See*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Barbey, Aronand and Richard Patterson (2011) Architecture of explanatory inference in the human prefrontal cortex. *Frontiers in Psychology* 2011;2: 162.
- Barlow, Michael and Suzanne Kemmer, ed. (2000) *Usage-Based Models of Language*. Stanford: CSLI.
- Baroni, Marco, Silvia Bernardini, Adriano Ferraresi, and Eros Zanchetta (2009) The WaCky wide web: A collection of very large linguistically processed web-crawled corpora. *Language Resources and Evaluation* 43(3): 209-226.
- Barðdal, Johanna (2008) *Productivity. Evidence from Case and Argument Structure in Icelandic*. Amsterdam / Philadelphia: Benjamins.
- Barðdal, Johanna (2011) Lexical vs. structural case: A false dichotomy. *Morphology* 21(3-4): 619-659.
- Barsalou, Lawrence W. (2003) Situated simulation in the human conceptual system. *Language and Cognitive Processes* 18: 513-562.
- Bates, Elizabeth, Sylvia Chen, Ovid Tzeng, Ping Li, and Meiti Opie (1991) The noun-verb problem in Chinese aphasia. *Brain and Language* 41: 203-233.
- Bauer, Laurie (1983) *English Word Formation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford: CSLI Publications.
- Boas, Hans C. (2006) A frame-semantic approach to identifying syntactically relevant elements of meaning. In: P. Steiner, H. C. Boas, and S. Schierholz (eds.) *Contrastive Studies and Valency. Studies in Honor of Hans Ulrich Boas*, 119-149. Frankfurt/New York: Peter Lang.

- Boas, Hans C. (2008) Towards a frame-constructional approach to verb classification. *Revista Canaria de Estudios Ingleses* 57: 17-47.
- Booij, Geert (2009) Phrasal names: A constructionist analysis. *Word Structure* 3: 219-240.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert (2012) Inheritance and Construction Morphology. Paper presented at the workshop on 'Default inheritance', University of Kentucky, Lexington KY, 21 -22 May 2012.
- Booij, Geert (2013) Morphology in Construction Grammar. In: T. Hoffmann and G. Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan (2006) *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, Joan (2006) From usage to grammar: The mind's response to repetition. *Language* 82(4): 711-733.
- Bybee, Joan (2007) *Frequency of Use and the Organization of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan (2013) Usage-based theory and exemplar representations of constructions. In: T. Hoffmann and G. Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 49-69. Oxford: Oxford University Press.
- Caballero, Gabriela and Sharon Inkelas (2013) Word construction: Tracing an optimal path through the lexicon. *Morphology* 23 (2): 103-143.
- Ceccagno, Antonella and Bianca Basciano (2009) Sino-Tibetan: Mandarin Chinese. In: R. Lieber and P. Štekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding*, 478-490. Oxford: Oxford University Press.

- 陳劫憚 (2010) 「語彙的複合動詞の自他交替と語形成」『日本語文法』10 (1): 37-53.
- 陳奕廷 (2009) 「日本語における上下方向を表す複合動詞後項に対する意味分析—中国語における方向補語との比較研究を中心に—」台湾大学日本語文学研究所修士論文.
- 陳奕廷 (2011) 「複合動詞におけるフレームの融合」『国立国語研究所 (NINJAL) 共同研究発表会：日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』, 大阪.
- 陳奕廷 (2012) 「フレームに基づく日本語の V+V 型複合動詞の意味形成」『日本言語学会第 145 回大会予稿集』: 46-51. 日本言語学会.
- Chen, Yi-Ting (2012) The constructional properties of directional verb compounds in Mandarin Chinese. *Book of Abstract of 7th International Conference on Construction Grammar (ICCG7)*: 36-38.
- 陳奕廷 (2013) 「複合動詞における結合制限: 「～おとす」「～もらす」「～のがす」を中心に」『KLS 33: Proceedings of the 37th Annual Meeting of Kansai Linguistic Society』: 145-156. 関西言語学会.
- 陳奕廷 (2014a) 「意味フレームに基づく日本語の語彙的複合動詞の項形成」『KLS 34: Proceedings of the 38th Annual Meeting of Kansai Linguistic Society』: 181-192. 関西言語学会.
- 陳奕廷 (2014b) 「日本語複合動詞の自動詞化のメカニズムについて—プロファイルシフトと痕跡的認知の観点から—」『日本認知言語学会第 15 回大会予稿集』: 149-152. 日本認知言語学会.
- Chen, Yi-Ting (2014) The unification of frame elements and argument realization in Japanese compound verbs. *Book of Abstract of 8th International Conference on Construction Grammar (ICCG8)*: 54-55.
- Chen, Yi-Ting (to appear) A frame-semantic approach to verb-verb compound verbs in Japanese:

A case study of *-toru*. *BLS* 39.

- Cheng, Lisa.-S.L. and Huang, C.-T. James (1994) On the argument structure of resultative compounds, in honor of William S.-Y. Wang. In: M. Chen and O. Tzeng (eds.) *Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, 187-221. Taipei: Pyramid.
- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1970) Remarks on nominalization. In: R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 184-221. Waltham, MA: Blaisdell.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics 1. Cambridge, MA: Dept. of Linguistics and Philosophy, MIT.
- Clancey, William J. (1997) *Situated Cognition: On Human Knowledge and Computer Representations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Eve (1987) The principle of contrast: A constraint on language acquisition. In B. MacWhinney (ed.) *The 20th Annual Carnegie Symposium on Cognition*, 1-33. Hillsdale, NJ: Erlbaum
- Coulson, Seana (2001) *Semantic Leaps: Frame-Shifting and Conceptual Blending in Meaning Construction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coulson, Seana and Todd Oakley (2003) Metonymy and conceptual blending. In: K-U. Panther and L. Thornburg (eds.) *Metonymy and Pragmatic Inferencing*, 51-79. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Coulson, Seana and Todd Oakley (2005) Blending and coded meaning: Literal and figurative meanings in cognitive semantics. *Journal of Pragmatics* 37: 1510-1536.
- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: University of

Chicago Press.

- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William (2003) Lexical rules vs. constructions: A false dichotomy. In: H. Cuyckens, T. Berg, R. Dirven, and K.-U. Panther (eds.) *Motivation in Language: Studies in Honor of Günter Radden*, 49-68. Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, William (2009) Connecting frames and constructions: A case study of eat and feed. *Constructions and Frames* 1(1): 7-28.
- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William, Chiaki Taoka, and Esther J. Wood (2001) Argument linking and the commercial transaction frame in English, Russian and Japanese. *Language Sciences* 23: 579-602.
- D'Andrade, Roy D. (1987) A folk model of the mind. In: D. Holland and N. Quinn (eds.) *Cultural Models in Language and Thought*, 112-148. Cambridge: Cambridge University Press.
- David, Hume (2003[1739]) *A Treatise of Human Nature*. New York: Dover.
- Dennett, Daniel (1984) Cognitive wheels: The frame problem of AI. In: M. Boden (ed.) *The Philosophy of Artificial Intelligence*, 147-170. Oxford: Oxford University Press.
- Di Sciullo, Anna-Maria and Edwin Williams (1987) *On the Definition of Word*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dowty, David (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67: 547-619.
- Enfield, Nick J. (2000) The theory of cultural logic: How individuals combine social intelligence with semiotics to create and maintain cultural meaning. *Cultural Dynamics*, 12(1): 35-64.
- Enfield, Nick J. (2002) Cultural logic and syntactic productivity: Associated posture constructions in Lao. In: N. Enfield (ed.) *Ethnosyntax: Explorations in Culture and Grammar*, 231-258. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, Vyvyan (2009) *How Words Mean: Lexical Concepts, Cognitive Models and Meaning Construction*. Oxford: Oxford University Press.

- Fauconnier, Gilles and Mark Turner (1998) Conceptual integration networks. *Cognitive Science* 22: 133-187.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Federmeier, Kara (2007) Thinking ahead: The role and roots of prediction in language comprehension. *Psychophysiology* 44(4): 491-505.
- Fillmore, Charles J. (1968) The case for case. In: E. Bach and R. T. Harms (eds.) *Universals in Linguistics Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Fillmore, Charles J. (1977) Topics in Lexical Semantics. In: R. Cole (ed.) *Current Issues in Linguistic Theory*, 76-138. Bloomington: Indiana University Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: Linguistics Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin.
- Fillmore, Charles J. (1985a) Frames and semantics of understanding. *Quaderni di Semantica* 6: 222-254.
- Fillmore, Charles J. (1985b) Syntactic intrusions and the notion of grammatical construction. *BLS* 11: 73-86.
- Fillmore, Charles J. (1988) The mechanisms of "Construction Grammar." *BLS* 14: 35-55.
- Fillmore, Charles J. (2009) Frames and Constructions: Putting Them Together. Abstract of FRAMES AND CONSTRUCTIONS: A conference in honor of Charles J. Fillmore, University of California, Berkeley, California.
- Fillmore, Charles J. and József Andor (2010) Discussing frame semantics: The state of the art. An interview with Charles J. Fillmore. In: *Review of Cognitive Linguistics* 8:1, 157-176. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Fillmore, Charles J. and Sue. B. Atkins (1992) Toward a frame-based lexicon: The semantics of

- RISK and its neighbors. In: A. Lehrer and E. Kittay (eds.) *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*, 75-102. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fillmore, Charles J. and Colin Baker (2010) A frames approach to semantic analysis. In: B. Heine and H. Narrog (eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, 313-340. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J. and Christopher R. Johnson and Miriam R.L. Petruck (2003) Background to Framenet. *Int J Lexicography* 16 (3): 235-250.
- Fillmore, Charles J. and Paul Kay (1993) Construction Grammar. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Catherine O'Connor (1988) Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: The case of *let alone*. *Language* 64: 501-538.
- 藤井聖子・小原京子 (2003) 「フレーム意味論とフレームネット」 『英語青年』149. No.6: 373-376, 378.
- Fukushima, Kazuhiko (2005). Lexical V-V compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax. *Language* 81: 568-612.
- Gamerschlag, Thomas (2000) Complex predicate formation and argument structure of Japanese V-V compounds. *Japanese/Korean Linguistics* 10: 532-544.
- Goldberg, Adele E. (1991) A semantic account of resultatives. *Linguistic Analysis* 21(1-2): 66-96.
- Goldberg, Adele E. (1992) The inherent semantics of argument structure: The case of the English ditransitive construction. *Cognitive Linguistics* 3(1): 37-74.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work. The Nature of Generalization in Language*.

- Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (2010) Verbs, constructions and semantic frames. In: M. Rappaport Hovav, E. Doron, and I. Sichel (eds.) *Syntax, Lexical Semantics and Event Structure*, 39-58. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) The English resultative as a family of constructions. *Language* 80: 532-568.
- Grainger, Jonathan and Arthur M. Jacobs (1996) Orthographic processing in visual word recognition: A multiple read-out model. *Psychological Review* 103: 518-565.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT press.
- Halle, Moris (1973) Prolegomena to a theory of word formation. *Linguistic Inquiry* 4.1: 3-16.
- Harada, Shin-Ichi (1973) Counter equi NP deletion. *Annual Bulletin* 7: 113-147. Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, Tokyo: University of Tokyo.
- Harley, Heidi (2007) *English Words: A Linguistic Introduction*. Oxford: Blackwell.
- Hasegawa, Yoko, Kyoko Hirose, Russell Lee-Goldman, and Charles Fillmore (2006) Frame integration, head switching, and translation: RISK in English and Japanese. Paper presented at the 4th International Conference on Construction Grammar, Tokyo, September 1-3, 2006.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: B. Comrie and M. Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87-120. Amsterdam: Benjamins.
- Hay, Jennifer and Harald Baayen (2005) Shifting paradigms: Gradient structure in morphology. *Trends in Cognitive Sciences* 9: 342-348.
- Her, One-Soon (2007) Argument-function mismatches in Mandarin resultatives: A lexical mapping account. *Lingua* 117: 221-246.
- 何志明 (2010) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』
東京：笠間書院.

- 姫野昌子 (1975) 「複合動詞『～つく』と『～つける』」『日本語学校論集』2 東京外国語大学.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房.
- 日高俊夫 (2012) 「語彙的複合動詞における反使役化と脱使役化」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』2(2): 115-130.
- 日高俊夫 (2013) 「語彙的複合動詞における他動詞化・再帰化」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編』3(2): 81-96.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-299.
- 池原 悟・宮崎正弘・白井 諭・横尾昭男・中岩浩巳・小倉健太郎・大山芳史・林 良彦 (編) (1997) 『日本語語彙大系』 東京：岩波書店.
- 今井敬子 (1985) 「「結果を表す動補構造」の統辞法」『中国語学』232：23-32.
- 石井正彦 (1983) 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」『日本語学』2-8: 79-90.
- 石井雅彦 (2007) 「複合語の形成と『意味表示の二重性』—複合語形成論における『くみあわせ性』と『ひとまとまり性』—」『月刊言語』36 (8): 50-58.
- 石村広 (2000) 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」『中国語学』247: 142-157.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1996) Conceptual semantics and cognitive linguistics. *Cognitive Linguistics* 7 (1): 93-129.
- Jackendoff, Ray (2002) *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jackendoff, Ray (2011a) What is the human language faculty? Two views. *Language* 87: 586-

624.

Jackendoff, Ray (2011b) Syntax IN the lexicon. Handout from a lecture at 50 years of Linguistics at MIT.

Julien, Marit (2002) *Syntactic Heads and Word Formation*. Oxford: Oxford University Press.

Kageyama, Taro (1982) Word Formation in Japanese. *Lingua* 57: 215-258.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.

影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 東京：くろしお出版.

影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』: 65-101. 東京：ひつじ書房.

影山太郎 (2012) 「動詞+動詞型複合動詞研究の現状」 『国立国語研究所研究発表会』, 仙台.

影山太郎 (2013) 「レキシコンと文法・意味—複合動詞研究のこれから—」 『KLS 33: *Proceedings of the 37th Annual Meeting of Kansai Linguistic Society*』 : 268-273.

影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 東京：研究社.

Kaufmann, Ingrid (1995) What is an impossible verb? Restrictions on Semantic Form and their consequences for argument structure. *Folia Linguistica* 29: 67-103.

Kaufmann, Ingrid and Dieter Wunderlich (1998) Cross-linguistic patterns of resultatives. *Working Papers SFB 282 Theory of the Lexicon*, #109. University of Düsseldorf.

Kay, Paul (1996) Intra-Speaker Relativity. In: J. Gumperz and S. Levinson (eds.) *Rethinking Linguistic Relativity*, 97-114. Cambridge: Cambridge University Press.

Kemmer, Suzanne and Michael Barlow (2000) Introduction: A usage-based conception of language. In: M. Barlow and S. Kemmer (eds.) *Usage-Based Models of Language*, vii–xxviii. Stanford: CSLI.

- Kiparsky, Paul (2005) Blocking and periphrasis in inflectional paradigms. *Yearbook of Morphology 2004*: 35-113.
- Kratzer, Angelika (2005) Building resultatives. In: C. Maienborn and A. Wöllstein (eds.) *Event Arguments: Foundations and Applications*, 177-212. Tübingen: Niemayer.
- 窪蘭晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』 東京：研究社.
- 国広哲也 (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』 88: 1-19.
- Kurby, Christopher and Jeffrey M. Zacks (2008) Segmentation in the perception and memory of events. *Trends in Cognitive Sciences* 12(2): 72-79.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1, Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2, Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2003) Constructional integration, grammaticization, and serial verb constructions. *Language and Linguistics* 4.2: 251-278.
- Langacker, Ronald W. (2005) Construction Grammars: Cognitive, radical, and less so. In: F. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, 101-159. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Lanneau, Bazile (2014) Of lobsters and men: Blending sensitivity in the interpretation of novel

- noun-noun compounds. *Book of Abstract of 8th International Conference on Construction Grammar (ICCG8)*: 151.
- Lee, Leslie and Farrell Ackerman (2011) Mandarin resultative compounds: A family of lexical constructions. In: M. Butt and T. Holloway King (eds.) *Proceedings of the LFG11 Conference*. Hong Kong: University of Hong Kong.
- Levin, Beth (1985) Lexical Semantics in review: An introduction. In: B. Levin (ed.) *Lexical Semantics in Review*. Lexicon Project Working Papers 1. Cambridge, MA: MIT Center for Cognitive Science.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, Beth and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. *Linguistic Inquiry Monograph 26*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth and M. Rappaport Hovav (2011) Lexical Conceptual Structure. In: C. Maienborn, K. von Heusinger, and P. Portner (eds.) *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning*, Vol. 1, 418-438. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Li, Yafei (1990) On V-V compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 177-207.
- Lieber, Rochelle (1980) *On the Organization of the Lexicon*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Lieber, Rochelle (1992) *Deconstructing Morphology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lieber, Rochelle (2009) A lexical semantic approach to compounding. In: R. Lieber and P. Štekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding*, 78-104. Oxford: Oxford University Press.
- Lindstromberg, Seth (2010) *English Prepositions Explained: Revised edition*.

Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

有元貴文 (2007) 『魚はなぜ群れで泳ぐのか』 東京：大修館書店.

Matsumoto, Yo (1996a) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford: CSLI Publications and Tokyo: Kurosio Publishers.

Matsumoto, Yo (1996b) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: G. Fauconnier and E. Sweetser (eds.) *Spaces, Worlds, and Grammar*, 124-156. Chicago: University of Chicago Press.

松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 田中茂範・松本曜 『空間と移動の表現』 (日英語比較選書 6) : 125-230. 東京：研究社.

松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114 : 37-83.

Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: S. Chiba et al. (eds.) *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403-418. Tokyo: Kaitakusha.

松本曜 (2009) 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 : 175-194. 東京：くろしお出版.

松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」 澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味』 : 23-43. 東京：ひつじ書房.

Matsumoto, Yo (2011) Compound verbs in Japanese: Types and constraints. Presentation given on November 2nd, 2011 at the Faculty of Oriental Studies, University of Oxford.

松本曜 (2011) 「主語一致の原則と主体的移動を伴う事象を表す複合動詞」 『国立国語研究所 (NINJAL) 共同研究発表会：日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』, 大阪.

Matsumoto, Yo (2012) A constructional account of Verb-Verb compound verbs in Japanese. *Book*

- of *Abstract of 7th International Conference on Construction Grammar (ICCG7)*: 117-118.
- McClelland, James L. and David E. Rumelhart (1981) An interactive activation model of context effects in letter perception: Part 1. An account of basic findings. *Psychological Review* 88: 375-407.
- Michaelis, Laura (1993) *Toward a Grammar of Aspect: The Case of the English Perfect Construction*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Mos, Maria (2010) *Complex Lexical Items*. Utrecht: LOT.
- 望月圭子 (1990) 「動補動詞の形成」 『中国語学』 237: 128-137.
- 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」 『日本語講座 4 日本語の語彙と表現』 東京：大修館書店.
- ナロック ハイコ (2007) 「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」 『レキシコンフォーラム』 3: 161-193.
- 野田大志 (2007) 「分析可能性の低い語彙的複合動詞に関する一考察—『落ち着く』の意味分析—」 『日本認知言語学会論文集』 第7巻: 500-510.
- 野田大志 (2009) 「現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチ—」 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.
- 野村雅昭・石井正彦 (1987) 『複合動詞資料集』 科研費特定研究 (1) 「言語データの収集と処理の研究」 研究成果報告書.
- 小原京子 (2012) 「日本語フレームネットにおけるコーパスデータの多義性分析」 『言語処理学会第18回年次大会予稿集』: 787-788.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化—自他動詞の対応—」 『国語学』 70: 46-66.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』 東京：くろしお出版.
- Packard, Jerome L. (2000) *The Morphology of Chinese: A Linguistic and Cognitive Approach*.

- Cambridge: Cambridge University Press,
- Patterson, Richard and Barbey Aron (2011) Causal simulation theory: An integrative cognitive neuroscience framework for causal reasoning. In: J. Grafman and F. Krueger (eds.) *The Neural Representation of Belief Systems*.
- Petruck, Miriam. R. L. (1996) Frame Semantics. In: J. Verschueren, J-O. Östman, J. Blommaert, and C. Bulcaen (eds.) *Handbook of Pragmatics*, 1-13. Philadelphia: John Benjamins.
- Petruck, Miriam. R. L. (2014) The sisterhood of Frame Semantics and Construction Grammar. *Book of Abstract of 8th International Conference on Construction Grammar (ICCG8)*: 201-202.
- Pinker, Steven (1999) *Words and Rules: The Ingredients of Language*. New York: HarperCollins.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pustejovsky, James and Elisabetta Ježek (2008) Semantic coercion in language: Beyond distributional analysis. *Italian Journal of Linguistics* 20 (1): 175-208.
- Radden, Günter and Zoltán Kövecses (1999) Towards a theory of metonymy. In: K-U Panther and G. Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*, 17-59. Amsterdam: John Benjamins..
- Radvansky, Gabriel and Jeffrey M. Zacks (2010) Event perception. *Wiley Interdisciplinary Reviews: Cognitive Science* 2, Issue 6: 608-620.
- Rappaport Hovav, M. and Beth Levin (1998) Building verb meanings. In: M. Butt and W. Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. Stanford: CSLI Publications.
- Reddy, Michael J. (1979) The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In: A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, 284-324. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rinck, Mike and Ulrike Weber (2003) Who when where: An experimental test of the event-

- indexing model. *Memory & Cognition* 31: 1284-1292.
- Ryder, Mary E. (1994) *Ordered Chaos: The Interpretation of English Noun-Noun Compounds*. Berkeley: University of California Press.
- 斎藤倫明 (1992) 『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』 東京：ひつじ書房.
- Schwan, Stephan and Garsoffky Barbel (2008) The role of segmentation in perception and understanding of events. In: T. Shipley and J. Zacks (eds.) *Understanding Events*, 391-414. Oxford: Oxford University Press.
- Selkirk, Elizabeth (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 史春花 (2013) 「コンストラクション形態論から見た日本語の促音便複合動詞」, 『認知言語学会論文集』 13: 272-284.
- 史春花 (2014) 「日本語における促音形／撥音形複合動詞の諸相—コンストラクション形態論からのアプローチ—」 神戸大学人文学研究科博士学位論文.
- Shibatani, Masayoshi (1976) The grammar of causative constructions: A conspectus. In: M. Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics*, Vol. 6, 1-39. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi and Prashant Pardeshi (2002) The causative continuum. In: M. Shibatani (ed.) *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation*, 85-126. Amsterdam: John Benjamins.
- Shipley, Thomas (2008) An invitation to an event. In: T. Shipley and J. Zacks (eds.) *Understanding Events*, 3-30. Oxford: Oxford University Press.
- Simmons, Kyle W., Stephan B. Hamann, Carla L. Harenski, Xiaoping Hu, and Lawrence W. Barsalou (2008) fMRI evidence for word association and situated simulation in conceptual processing. *Journal of Physiology – Paris* 102: 106-119.
- Snell-Hornby, Mary (1983) *Verb-Descriptivity in German and English*. Heidelberg: Winter.

- 杉村泰 (2005) 「コーパスを利用した日本語の複合動詞「一忘れる」、「一落とす」、「一漏らす」の意味分析」『日語教育』 34: 63-79.
- Swallow, Khena and Jeffrey Zacks (2004) Hierarchical grouping of events revealed by eye movements. *Abstracts of the Psychonomic Society* 2004; 9: 81.
- Tagashira, Yoshiko and Jean Hoff (1986) 『日本語複合動詞ハンドブック』 東京：北星堂書店.
- Tai, James H-Y. (1985) Temporal sequence and Chinese word order. In: J. Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 49-72. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 戴浩一 (2006) 「漢語動補結構分析的三個面向—中国語の結果複合動詞をめぐる三つの視点—」 東京外国語大学「魅力ある大学院教育」イニシアチブ特別講演ハンドアウト.
- Talmy, Leonard (1990) Fictive motion and change in language and cognition. Paper presented at the Conference of the International Pragmatics Association, July 1990, Barcelona, Spain.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization: A typology of event conflation. *BLS* 17: 480-519.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Taylor, John R. (1996) On running and jogging. *Cognitive Linguistics* 7 (1): 21-34.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 東京：くろしお出版.
- Tomasello, Michael (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 上田恵介 (1990) 『鳥はなぜ集まる?—群れの行動生態学』 東京：東京化学同人.
- Van Langendonck, Willy (2007) Iconicity. In: D. Geeraerts and H. Cuyckens (eds.) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, 394-418. Oxford: Oxford University Press.
- Verhagen, Arie (2009) The conception of constructions as complex signs. Emergence of structure and reduction to usage. *Constructions and Frames* 1: 119-152.

- Wheeler, Michael (2008) Cognition in context: Phenomenology, situated Robotics and the frame problem. *International Journal of Philosophical Studies*, 16 (3): 323-349.
- Williams, Edwin (1981) Argument structure and morphology. *The Linguistic Review* 1: 81-114.
- Wunderlich, Dieter (1997) Cause and the structure of verbs. *Linguistic Inquiry* 28: 27-68.
- 山口昌也 (2013) 「複合動詞用例データベースの構築と活用」 『国語研プロジェクトレビュー』 Vol.4, No.1: 61-69.
- 山口直人 (1991) 「動補動詞の種類と形成について」 『中国語学』 238: 115-124.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版.
- 楊明 (2009) 「中国語の結果構文における動補構造の研究」 千葉大学博士学位論文.
- Yeh, Wenchi and Lawrence W. Barsalou (2006) The situated nature of concepts. *American Journal of Psychology* 119: 349-384.
- 由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」 奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編) 『言語と文化の諸相』: 105-118. 東京：英宝社.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 東京：ひつじ書房.
- 由本陽子 (2007) 「複雑述語の形成に伴う事象構造の合成と項の実現」 中日理論言語学 研究国際フォーラム報告, 北京.
- 由本陽子 (2008) 「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.4』: 1-30. 東京：ひつじ書房.
- 由本陽子 (2011) 『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』 東京：開拓社.
- 由本陽子 (2012) 「日本語語彙的複合動詞の生産性と二つの動詞の意味関係」 『日本言語学会第 145 回大会予稿集』: 340-345. 日本言語学会.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編)

『複合動詞研究の最前線—謎の解明に向けて—』: 109-142. 東京: ひつじ書房.

Zacks, Jeffrey, Todd Braver, Margaret Sheridan, David Donaldson, Abraham Snyder, John Ollinger, Randy Buckner, and Marcus Raichle (2001) Human brain activity time-locked to perceptual event boundaries. *Nature Neuroscience* 2001;4: 651-655. [PubMed: 11369948]

Zacks, Jeffrey, Nicole Speer, Khena Swallow, Todd Braver, and Jeremy R. Reynolds (2007) Event Perception: A Mind/Brain Perspective. *Psychol Bull.* 133(2): 273-293.

Zacks, Jeffrey, Nicole Speer, and Jeremy Reynolds (2009) Segmentation in reading and film comprehension. *Journal of Experimental Psychology* 138(2): 307-327.

Zacks, Jeffrey and Barbara Tversky (2001) Event structure in perception and conception. *Psychological Bulletin* 127: 3-21.

張麗麗 (2003) 「動詞複合與象似性」『*Language and Linguistics*』 4.1:1-27.

朱德熙 (1982) 『語法講義』 北京: 商務印書館.

Zwaan, Rolf, Gabriel A. Radvansky, Amy E. Hilliard, and Jacqueline M. Curiel (1998) Constructing multidimensional situation models during reading. *Scientific Studies of Reading* 1998;2: 199-220.

Websites

『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』 <<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>>

Berkeley FrameNet. <<http://framenet.icsi.berkeley.edu/>>

国立国語研究所『複合動詞レキシコン』 <<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>>

Web データに基づく複合動詞用例データベース—『日本語複合動詞リスト(ver.1.3)』
<<http://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php/>>

Appendix 日本語語彙的複合動詞リスト

このリストは『日本語複合動詞リスト(ver.1.3)』を基に、一部問題がある例を削除し、『複合動詞用例データベース』の収録方法では拾えなかった複合動詞を加え(序章を参照)、V1とV2の意味関係を併せて示したものである(四章を参照)。

備考欄においては、以下の情報を付与している。

- 非分析的：「取り締まる」のような非分析的な複合動詞を指す(四章を参照)。
- 非合成的：「言い渡す」のような非合成的な複合動詞を指す(四章を参照)。
- 拘束意味：「焼き上げる」における「上げる」のように、本動詞では見られない意味(<何かを完成させる>)を持つものを指す(四章を参照)。
- 拘束形態素：「駆け込む」における「込む」のように、単独では用いられない構成要素を持つ複合動詞を指す(四章を参照)。
- 特殊形態：「飽き足る」のように、もっぱら「飽き足りず」という特殊形態で現れる複合動詞を指す(四章を参照)。
- 主語不一致：「打ち上がる」のような主語不一致型複合動詞を指す(六章を参照)。

複合動詞 (表記)	複合動詞 (読み)	前項 動詞	後項 動詞	用例 数	意味関係	備考
愛し慈しむ	あいしいつくしむ	あいす	いつくしむ	103	e1.共通原因事象	
愛し敬う	あいしうやまう	あいす	うやまう	102	e1.共通原因事象	
愛し育てる	あいしそだてる	あいす	そだてる	108	e2.共通目的事象	
愛し楽しむ	あいしたのしむ	あいす	たのしむ	82	e1.共通原因事象	
愛し守る	あいしまもる	あいす	まもる	192	e1.共通原因事象	
喘ぎ狂う	あえぎくるう	あえぐ	くるう	73	g.比喩的様態	
喘ぎ苦しむ	あえぎくるしむ	あえぐ	くるしむ	95	e1.共通原因事象	
喘ぎ泣く	あえぎなく	あえぐ	なく	55	e1.共通原因事象	
喘ぎ悶える	あえぎもだえる	あえぐ	もだえる	197	e1.共通原因事象	
仰ぎ見る	あおぎみる	あおぐ	みる	1361	b.手段-目的	
煽り返す	あおりかえす	あおる	かえす	844	j.V2 補助動詞	
煽り立てる	あおりたてる	あおる	たてる	1346	b.手段-目的	
崇め称える	あがめたたえる	あがめる	たたえる	134	e1.共通原因事象	
崇め祭る	あがめまつる	あがめる	まつる	131	e1.共通原因事象	
上がり込む	あがりこむ	あがる	こむ	1521	a.原因-結果	拘束形態素

飽き足りる	あきたりる	あきる	たりる	102	a.原因—結果	特殊形態
飽き足る	あきたる	あきる	たる	56	a.原因—結果	特殊形態
呆れ返る	あきれかえる	あきれる	かえる	1289	j.V2 補助動詞	拘束意味
呆れ果てる	あきれはてる	あきれる	はてる	1159	j.V2 補助動詞	
明け行く	あけいく	あける	いく	345	j.V2 補助動詞	特殊形態
明け暮れる	あけくれる	あける	くれる	1528	k.一語	
上げ渋る	あげしぶる	あげる	しぶる	218	h. 事象対象	
挙げ連ねる	あげつらねる	あげる	つらねる	139	b.手段—目的	
開け放す	あけはなす	あける	はなす	742	b.手段—目的	
開け放つ	あけはなつ	あける	はなつ	1471	b.手段—目的	
開け広げる	あけひろげる	あける	ひろげる	187	b.手段—目的	
揚げ焼く	あげやく	あげる	やく	78	f.並列関係	
明け渡す	あけわたす	あける	わたす	1956	b.手段—目的	
明け渡る	あけわたる	あける	わたる	103	j.V2 補助動詞	
与り知る	あずかりしる	あずかる	しる	150	a.原因—結果	
預け入れる	あずけいれる	あずける	いれる	1926	b.手段—目的	
預け置く	あずけおく	あずける	おく	87	b.手段—目的	
預け替える	あずけかえる	あずける	かえる	220	b.手段—目的	
遊び歩く	あそびあるく	あそぶ	あるく	1212	d2.共通目的の様態	
遊び興じる	あそびきょうじる	あそぶ	きょうじる	89	f.並列関係	
遊び暮らす	あそびくらす	あそぶ	くらす	396	e1.共通原因事象	
遊び狂う	あそびくるう	あそぶ	くるう	135	g.比喩の様態	
遊び込む	あそびこむ	あそぶ	こむ	270	j.V2 補助動詞	拘束形態素
遊び戯れる	あそびたわむれる	あそぶ	たわむれる	695	f.並列関係	
遊び疲れる	あそびつかれる	あそぶ	つかれる	164	a.原因—結果	
遊び惚ける	あそびほうける	あそぶ	ほうける	95	a.原因—結果	拘束形態素
遊び回る	あそびまわる	あそぶ	まわる	1198	d2.共通目的の様態	
当たり散らす	あたりちらす	あたる	ちらす	1313	j.V2 補助動詞	拘束意味
当たり負ける	あたりまける	あたる	まける	81	c.背景—具現	
扱いこなす	あつかいこなす	あつかう	こなす	210	j.V2 補助動詞	
集まり住む	あつまりすむ	あつまる	すむ	107	e1.共通原因事象	
当てこする	あてこする	あてる	こする	148	l.逆形成	

当て込む	あてこむ	あてる	こむ	979	b.手段—目的	拘束形態素
当てつける	あてつける	あてる	つける	438	l.逆形成	非合成的
当てはまる	あてはまる	あてる	はまる	2148	a.原因—結果	非合成的, 主語不一致
当てはめる	あてはめる	あてる	はめる	1891	b.手段—目的	
暴き出す	あばき出す	あばく	出す	1191	b.手段—目的	
暴き立てる	あばきたてる	あばく	たてる	437	b.手段—目的	
暴れ狂う	あばれくるう	あばれる	くるう	1162	g.比喩の様態	
暴れ込む	あばれこむ	あばれる	こむ	143	d2.共通目的の様態	拘束形態素
暴れ回る	あばれまわる	あばれる	まわる	1169	d1.共通原因様態	
浴びせかける	あびせかける	あびせる	かける	1424	b.手段—目的	
炙り出す	あぶり出す	あぶる	出す	1632	b.手段—目的	
炙り焼く	あぶりやく	あぶる	やく	117	f.並列関係	
あふれ落ちる	あふれおちる	あふれる	おちる	206	a.原因—結果	
あふれかえる	あふれかえる	あふれる	かえる	1323	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束意味
あふれ出す	あふれ出す	あふれる	出す	89	a.原因—結果	拘束意味
溢れ出る	あふれでる	あふれる	でる	1283	a.原因—結果	
甘えかかる	あまえかかる	あまえる	かかる	215	j.V2 補助動詞	
編み上がる	あみあがる	あむ	あがる	461	a.原因—結果	主語不一致
編み上げる	あみあげる	あむ	あげる	1613	b.手段—目的	拘束意味
編み合わせる	あみあわせる	あむ	あわせる	149	b.手段—目的	
編み入れる	あみいれる	あむ	いれる	280	b.手段—目的	
編みくるむ	あみくるむ	あむ	くるむ	710	b.手段—目的	
編み込む	あみこむ	あむ	こむ	2012	b.手段—目的	拘束形態素
編み出す	あみ出す	あむ	出す	1585	b.手段—目的	
編み立てる	あみたてる	あむ	たてる	123	b.手段—目的	
編みつける	あみつける	あむ	つける	507	b.手段—目的	
編みつなぐ	あみつなぐ	あむ	つなぐ	98	b.手段—目的	
歩み行く	あゆみいく	あゆむ	いく	304	d2.共通目的の様態	
歩み入る	あゆみいる	あゆむ	いる	247	d2.共通目的の様態	拘束形態素
歩み去る	あゆみさる	あゆむ	さる	529	d2.共通目的の様態	
歩み出る	あゆみでる	あゆむ	でる	711	d2.共通目的の様態	
歩み寄る	あゆみよる	あゆむ	よる	1651	a.原因—結果	非合成的

洗い上がる	あらいあがる	あらう	あがる	650	a.原因—結果	主語不一致
洗い上げる	あらいあげる	あらう	あげる	2221	b.手段—目的	拘束意味
洗い落とす	あらいおとす	あらう	おとす	1530	b.手段—目的	
洗い替える	あらいかえる	あらう	かえる	70	b.手段—目的	
洗い清める	あらいきよめる	あらう	きよめる	1197	b.手段—目的	
洗い込む	あらいこむ	あらう	こむ	464	j.V2 補助動詞	拘束形態素
洗い去る	あらいさる	あらう	さる	103	b.手段—目的	拘束意味
洗い出す	あらいだす	あらう	だす	1888	b.手段—目的	
洗い立てる	あらいたてる	あらう	たてる	80	b.手段—目的	
洗い流す	あらいながす	あらう	ながす	2321	b.手段—目的	
荒らし回る	あらしまわる	あらす	まわる	1116	d2.共通目的の様態	
現れ出る	あらわれでる	あらわれ る	でる	1214	a.原因—結果	
有り余る	ありあまる	ある	あまる	1455	j.V2 補助動詞	
あり合わせる	ありあわせる	ある	あわせる	140	j.V2 補助動詞	
ありつく	ありつく	ある	つく	1573	k.一語	非分析的
ありふれる	ありふれる	ある	ふれる	423	k.一語	非分析的
歩き去る	あるきさる	あるく	さる	900	d2.共通目的の様態	
歩き進む	あるきすすむ	あるく	すすむ	327	d2.共通目的の様態	
歩き疲れる	あるきつかれる	あるく	つかれる	455	a.原因—結果	
歩き回る	あるきまわる	あるく	まわる	1828	d2.共通目的の様態	
荒れ狂う	あれくるう	あれる	くるう	1371	g.比喩の様態	
荒れ果てる	あれはてる	あれる	はてる	626	j.V2 補助動詞	
合わせ込む	あわせこむ	あわせる	こむ	703	j.V2 補助動詞	拘束形態素
併せ持つ	あわせもつ	あわせる	もつ	3208	b.手段—目的	
慌てふためく	あわてふためく	あわてる	ふためく	1252	k.一語	非分析的, 拘束形態素
射当てる	いあてる	いる	あてる	107	b.手段—目的	
居合わせる	いあわせる	いる	あわせる	1641	j.V2 補助動詞	
言い当てる	いいあてる	いう	あてる	1590	b.手段—目的	
言い誤る	いいあやまる	いう	あやまる	50	j.V2 補助動詞	
言い争う	いいあらそう	いう	あらそう	1391	b.手段—目的	
言い表す	いいあらわす	いう	あらわす	1719	b.手段—目的	

言い置く	いいおく	いう	おく	257	b.手段一目的	
言い落とす	いいおとす	いう	おとす	76	c.背景一具現	拘束意味
言い及ぶ	いいおよぶ	いう	およぶ	282	b.手段一目的	
言い返す	いいかえす	いう	かえす	1841	b.手段一目的	
言い換える	いいかえる	いう	かえる	1835	b.手段一目的	
言い交わす	いいかわす	いう	かわす	89	b.手段一目的	
言い聞かせる	いいきかせる	いう	きかせる	1625	b.手段一目的	
言い切る	いいきる	いう	きる	2259	j.V2 補助動詞	拘束意味
言いくさる	いいくさる	いう	くさる	243	b.手段一目的	
言いくるめる	いいくるめる	いう	くるめる	1286	b.手段一目的	
言い込める	いいこめる	いう	こめる	69	b.手段一目的	
言いさす	いいさす	いう	さす	73	h. 事象対象	拘束形態素
言い渋る	いいしぶる	いう	しぶる	396	j.V2 補助動詞	
言い捨てる	いいすてる	いう	すてる	1500	b.手段一目的	
言い添える	いいそえる	いう	そえる	327	b.手段一目的	
言い足す	いいたす	いう	たす	160	b.手段一目的	
言い出す	いいだす	いう	だす	2107	j.V2 補助動詞	拘束意味
言い立てる	いいたてる	いう	たてる	1420	j.V2 補助動詞	非合成的
言い散らす	いいちらす	いう	ちらす	235	j.V2 補助動詞	拘束意味
言いつかる	いいつかる	いう	つかる	167	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束形態素
言い繕う	いいつくろう	いう	つくろう	654	b.手段一目的	
言い付ける	いいつける	いう	つける	585	b.手段一目的	非合成的
言い伝える	いいつたえる	いう	つたえる	318	b.手段一目的	
言い募る	いいつのる	いう	つのる	1426	b.手段一目的	
言いなす	いいなす	いう	なす	247	b.手段一目的	
言い習わす	いいならわす	いう	ならわす	130	b.手段一目的	拘束形態素
言い慣れる	いいなれる	いう	なれる	109	j.V2 補助動詞	
言い抜ける	いいぬける	いう	ぬける	112	j.V2 補助動詞	
言い逃れる	いいのがれる	いう	のがれる	647	b.手段一目的	
言いのける	いいのける	いう	のける	464	j.V2 補助動詞	
言い残す	いいのこす	いう	のこす	1552	b.手段一目的	
言い放つ	いいはなつ	いう	はなつ	1729	b.手段一目的	

言い張る	いいはる	いう	はる	1749	b.手段—目的	非分析的
言い含める	いいふくめる	いう	ふくめる	721	b.手段—目的	
言い伏せる	いいふせる	いう	ふせる	121	b.手段—目的	
言いふらす	いいふらす	いう	ふらす	1907	b.手段—目的	拘束形態素
言い負かす	いいまかす	いう	まかす	1423	b.手段—目的	
言い負ける	いいまける	いう	まける	187	c.背景—具現	
言い回す	いいまわす	いう	まわす	167	b.手段—目的	
言い回る	いいまわる	いう	まわる	338	d2.共通目的の様態	
言い淀む	いいよどむ	いう	よどむ	727	j.V2 補助動詞	
言い寄る	いいよる	いう	よる	1522	b.手段—目的	非合成的
言い分ける	いいわける	いう	わける	568	b.手段—目的	
言い渡す	いいわたす	いう	わたす	2014	b.手段—目的	非合成的
射落とす	いおとす	いる	おとす	518	b.手段—目的	
射かける	いかける	いる	かける	311	b.手段—目的	
怒り悲しむ	いかりかなしむ	いかる	かなしむ	93	e1.共通原因事象	
怒り狂う	いかりくるう	いかる	くるう	1105	g.比喩の様態	
怒り散らす	いかりちらす	いかる	ちらす	140	j.V2 補助動詞	拘束意味
行き当たる	いきあたる	いく	あたる	1548	a.原因—結果	
生き急ぐ	いきいそぐ	いきる	いそぐ	956	h. 事象対象	
行き遅れる	いきおくれる	いく	おくれる	746	a.原因—結果	
行き交う	いきかう	いく	かう	1738	j.V2 補助動詞	拘束形態素
生き返る	いきかえる	いきる	かえる	1932	j.V2 補助動詞	
行き通う	いきかよう	いく	かよう	224	f.並列関係	
行き暮れる	いきくれる	いく	くれる	64	a.原因—結果	
行き渋る	いきしぶる	いく	しぶる	111	h. 事象対象	
行き過ぎる	いきすぎる	いく	すぎる	913	a.原因—結果	
行き倒れる	いきたおれる	いく	たおれる	606	a.原因—結果	
行き違う	いきちがう	いく	ちがう	1219	j.V2 補助動詞	
行き着く	いきつく	いく	つく	2040	a.原因—結果	
行き詰まる	いきづまる	いく	つまる	1444	a.原因—結果	
行き届く	いきとどく	いく	とどく	1544	a.原因—結果	
生き長らえる	いきながらえる	いきる	ながらえる	1053	a.原因—結果	拘束形態素

行き悩む	いきなやむ	いく	なやむ	295	j.V2 補助動詞	
生き抜く	いきぬく	いきる	ぬく	2589	j.V2 補助動詞	拘束意味
生き残る	いきのこる	いきる	のこる	2378	a.原因—結果	
生き延びる	いきのびる	いきる	のびる	1743	j.V2 補助動詞	
いきり立つ	いきりたつ	いきる	たつ	1014	j.V2 補助動詞	
生き別れる	いきわかれる	いきる	わかれる	162	a.原因—結果	
行き渡る	いきわたる	いく	わたる	1667	a.原因—結果	
生け込む	いけこむ	いける	こむ	88	b.手段—目的	拘束形態素
生け捕る	いけどる	いける	とる	502	b.手段—目的	
射込む	いこむ	いる	こむ	191	b.手段—目的	拘束形態素
鑄込む	いこむ	いる	こむ	1202	b.手段—目的	拘束形態素
射殺す	いころす	いる	ころす	252	b.手段—目的	
勇み立つ	いさみたつ	いさむ	たつ	156	j.V2 補助動詞	
いじめ返す	いじめかえす	いじめる	かえす	135	b.手段—目的	
いじめ殺す	いじめころす	いじめる	ころす	161	b.手段—目的	
いじり壊す	いじりこわす	いじる	こわす	163	b.手段—目的	
いじり回す	いじりまわす	いじる	まわす	487	b.手段—目的	
射すくめる	いすくめる	いる	すくめる	213	b.手段—目的	
居座る	いすわる	いる	すわる	1805	k.一語	非合成的
射出す	いだす	いる	だす	86	b.手段—目的	
痛み入る	いたみいる	いたむ	いる	272	j.V2 補助動詞	拘束形態素
炒め上げる	いためあげる	いためる	あげる	87	b.手段—目的	拘束意味
炒め合わせる	いためあわせる	いためる	あわせる	1147	b.手段—目的	
痛めつける	いためつける	いためる	つける	1544	b.手段—目的	
炒め煮る	いためにる	いためる	にる	141	e2.共通目的事象	
居着く	いつく	いる	つく	1610	a.原因—結果	
慈しみ育てる	いつくしみそだてる	いつくしむ	そだてる	213	b.手段—目的	
鑄潰す	いつぶす	いる	つぶす	216	b.手段—目的	
射通す	いとおす	いる	とおす	163	b.手段—目的	
挑みかかる	いどみかかる	いどむ	かかる	1090	b.手段—目的	
射止める	いとめる	いる	とめる	1393	b.手段—目的	

居直る	いなおる	いる	なおる	1115	a.原因—結果	非分析的
居並ぶ	いならぶ	いる	ならぶ	1475	a.原因—結果	
射抜く	いぬく	いる	ぬく	2113	b.手段—目的	
居眠る	いねむる	いる	ねむる	513	k.一語	
居残る	いのこる	いる	のこる	1369	a.原因—結果	
祈り願う	いのりねがう	いのる	ねがう	242	e2.共通目的事象	
祈り求める	いのりもとめる	いのる	もとめる	831	e2.共通目的事象	
威張り腐る	いばりくさる	いばる	くさる	295	j.V2 補助動詞	拘束意味
威張り散らす	いばりちらす	いばる	ちらす	976	j.V2 補助動詞	拘束意味
いびり殺す	いびりころす	いびる	ころす	158	b.手段—目的	
いびり出す	いびりだす	いびる	だす	289	b.手段—目的	
燻し出す	いぶしだす	いぶす	だす	325	b.手段—目的	
いぶり出す	いぶりだす	いぶる	だす	435	b.手段—目的	
忌み嫌う	いみきらう	いむ	きらう	1505	e1.共通原因事象	拘束形態素
煎り上げる	いりあげる	いる	あげる	235	b.手段—目的	拘束意味
入り組む	いりくむ	いる	くむ	1452	k.一語	非分析的
煎りつける	いりつける	いる	つける	169	b.手段—目的	
入り浸る	いりびたる	いる	ひたる	1608	a.原因—結果	拘束形態素
入り交じる	いりまじる	いる	まじる	2646	a.原因—結果	拘束形態素
入り乱れる	いりみだれる	いる	みだれる	1462	a.原因—結果	
入れ上げる	いれあげる	いれる	あげる	114	k.一語	非分析的
入れ合わせる	いれあわせる	いれる	あわせる	244	b.手段—目的	
入れ替える	いれかえる	いれる	かえる	2319	j.V2 補助動詞	
入れ替わる	いれかわる	いれる	かわる	3238	a.原因—結果	主語不一致
入れ込む	いれこむ	いれる	こむ	1836	k.一語	拘束形態素
入れ違う	いれちがう	いれる	ちがう	1098	j.V2 補助動詞	
入れ混ぜる	いれまぜる	いれる	まぜる	1293	b1.準備事象—目的	
色めき立つ	いろめきたつ	いろめく	たつ	1176	a.原因—結果	
祝い励ます	いわいはげます	いわう	はげます	171	e2.共通目的事象	
植え替える	うえかえる	うえる	かえる	5186	b.手段—目的	
植え込む	うえこむ	うえる	こむ	1144	b.手段—目的	拘束形態素

植え育てる	うえそだてる	うえる	そだてる	154	b.手段—目的	
植え継ぐ	うえつぐ	うえる	つぐ	211	b.手段—目的	
植え付ける	うえつける	うえる	つける	2218	b.手段—目的	
植え戻す	うえもどす	うえる	もどす	108	b.手段—目的	
窺い知る	うかがいしる	うかがう	しる	1360	b.手段—目的	
窺い知れる	うかがいしれる	うかがう	しれる	1345	a.原因—結果	
窺い見る	うかがいみる	うかがう	みる	160	b.手段—目的	
浮かび上がる	うかびあがる	うかぶ	あがる	1945	a.原因—結果	
浮かび出す	うかびだす	うかぶ	だす	129	a.原因—結果	拘束意味
浮かび出る	うかびでる	うかぶ	でる	494	a.原因—結果	
浮かれ歩く	うかれあるく	うかれる	あるく	68	d1.共通原因様態	
浮かれ騒ぐ	うかれさわぐ	うかれる	さわぐ	292	e1.共通原因事象	
浮かれ出る	うかれでる	うかれる	でる	152	k.一語	
浮き上がる	うきあがる	うく	あがる	1726	a.原因—結果	
浮き立つ	うきたつ	うく	たつ	1449	j.V2 補助動詞	
浮き出る	うきでる	うく	でる	1906	a.原因—結果	
請け合う	うけあう	うける	あう	508	k.一語	
受け入れる	うけいれる	うける	いれる	4893	b.手段—目的	
請け負う	うけおう	うける	おう	2138	b.手段—目的	
受け答える	うけこたえる	うける	こたえる	505	b.手段—目的	
受け継ぐ	うけつぐ	うける	つぐ	2505	b.手段—目的	
受け付ける	うけつける	うける	つける	3038	b.手段—目的	
受け伝える	うけつたえる	うける	つたえる	107	b.手段—目的	
受け止める	うけとめる	うける	とめる	2783	b.手段—目的	
受け取る	うけとる	うける	とる	3829	b.手段—目的	
受け流す	うけながす	うける	ながす	1672	b.手段—目的	
受け持つ	うけもつ	うける	もつ	1863	b.手段—目的	
受け渡す	うけわたす	うける	わたす	1743	c.背景—具現	
動き回る	うごきまわる	うごく	まわる	1945	d2.共通目的様態	
薄れ行く	うすれいく	うすれる	いく	1279	j.V2 補助動詞	
歌い上げる	うたいあげる	うたう	あげる	1742	b.手段—目的	拘束意味
歌い歩く	うたいあるく	うたう	あるく	110	d2.共通目的様態	

歌い踊る	うたいおどる	うたう	おどる	1185	e2.共通目的事象	
歌い交わす	うたいかわす	うたう	かわす	104	b.手段一目的	
歌いこなす	うたいこなす	うたう	こなす	1494	j.V2 補助動詞	
歌い込む	うたいこむ	うたう	こむ	663	j.V2 補助動詞	拘束形態素
歌い叫ぶ	うたいさけぶ	うたう	さけぶ	149	e2.共通目的事象	
歌い継ぐ	うたいつぐ	うたう	つぐ	1280	b.手段一目的	
歌い分ける	うたいわける	うたう	わける	417	b.手段一目的	
打ち上がる	うちあがる	うつ	あがる	2089	a.原因一結果	主語不一致
打ちあぐむ	うちあぐむ	うつ	あぐむ	203	j.V2 補助動詞	拘束形態素
打ち明ける	うちあける	うつ	あける	1998	i.V1 接頭辞化	
打ち上げる	うちあげる	うつ	あげる	3479	b.手段一目的	
打ち当たる	うちあたる	うつ	あたる	305	a.原因一結果	主語不一致
打ち合わす	うちあわす	うつ	あわす	240	b.手段一目的	
打ち合わせる	うちあわせる	うつ	あわせる	1456	b.手段一目的	
打ち急ぐ	うちいそぐ	うつ	いそぐ	148	h. 事象対象	
討ち入る	うちいる	うつ	いる	578	b.手段一目的	拘束形態素
打ち落とす	うちおとす	うつ	おとす	3447	b.手段一目的	
打ち下ろす	うちおろす	うつ	おろす	1580	b.手段一目的	
打ち返す	うちかえす	うつ	かえす	2747	b.手段一目的	
打ち替える	うちかえる	うつ	かえる	1736	b.手段一目的	
打ちかかる	うちかかる	うつ	かかる	227	a.原因一結果	
打ちかける	うちかける	うつ	かける	327	j.V2 補助動詞	
打ち固める	うちかためる	うつ	かためる	208	b.手段一目的	
打ち勝つ	うちかつ	うつ	かつ	1714	b.手段一目的	
打ち興じる	うちきょうじる	うつ	きょうじる	303	b.手段一目的	
打ち切る	うちきる	うつ	きる	2472	i.V1 接頭辞化	非合成的
打ち崩す	うちくずす	うつ	くずす	1632	b.手段一目的	
打ち砕く	うちくだく	うつ	くだく	1782	b.手段一目的	
打ち比べる	うちくらべる	うつ	くらべる	378	b.手段一目的	
打ち消す	うちけす	うつ	けす	1859	i.V1 接頭辞化	非合成的
打ち込む	うちこむ	うつ	こむ	5154	b.手段一目的	拘束形態素
打ち殺す	うちころす	うつ	ころす	2403	b.手段一目的	

打ち壊す	うちこわす	うつ	こわす	1354	b.手段一目的	
打ち沈む	うちしずむ	うつ	しずむ	240	i.V1 接頭辞化	非分析的
打ち据える	うちすえる	うつ	すえる	1184	b.手段一目的	
打ち捨てる	うちすてる	うつ	すてる	262	i.V1 接頭辞化	
打ち揃う	うちそろう	うつ	そろう	90	i.V1 接頭辞化	
打ち倒す	うちたおす	うつ	たおす	2139	b.手段一目的	
打ち出す	うちだす	うつ	だす	4387	b.手段一目的	
打ち叩く	うちたたく	うつ	たたく	176	f.並列関係	
打ち立てる	うちたてる	うつ	たてる	1514	b.手段一目的	
打ち継ぐ	うちつぐ	うつ	つぐ	379	b.手段一目的	
打ち付ける	うちつける	うつ	つける	1881	b.手段一目的	
打ち続く	うちつづく	うつ	つづく	728	i.V1 接頭辞化	
打ち解ける	うちとける	うつ	とける	1483	k.一語	非分析的
打ち飛ばす	うちとばす	うつ	とばす	239	b.手段一目的	
打ち止める	うちとめる	うつ	とめる	142	l.逆形成	
討ち取る	うちとる	うつ	とる	2119	b.手段一目的	
打ち取る	うちとる	うつ	とる	2740	b.手段一目的	
打ち鳴らす	うちならす	うつ	ならす	1551	b.手段一目的	
打ち貫く	うちぬく	うつ	ぬく	600	b.手段一目的	
打ち抜く	うちぬく	うつ	ぬく	3520	b.手段一目的	
打ち延ばす	うちのばす	うつ	のばす	151	b.手段一目的	
打ちのめす	うちのめす	うつ	のめす	1295	b.手段一目的	拘束形態素
討ち果たす	うちはたす	うつ	はたす	946	b.手段一目的	
打ち放つ	うちはなつ	うつ	はなつ	996	b.手段一目的	
打ち払う	うちはらう	うつ	はらう	1488	b.手段一目的	
打ちひしぐ	うちひしぐ	うつ	ひしぐ	137	b.手段一目的	拘束形態素
打ち開く	うちひらく	うつ	ひらく	127	b.手段一目的	
打ち振る	うちふる	うつ	ふる	347	i.V1 接頭辞化	
打ち震える	うちふるえる	うつ	ふるえる	1317	i.V1 接頭辞化	非分析的
打ち滅ぼす	うちほろぼす	うつ	ほろぼす	875	b.手段一目的	
打ち負かす	うちまかす	うつ	まかす	1529	b.手段一目的	
打ち負ける	うちまける	うつ	まける	3051	c.背景一具現	

打ち見る	うちみる	うつ	みる	61	i.V1 接頭辞化	
打ち漏らす	うちもらす	うつ	もらす	408	c.背景—具現	
打ち破る	うちやぶる	うつ	やぶる	2293	b.手段—目的	
打ち寄せる	うちよせる	うつ	よせる	1471	b.手段—目的	
打ち分ける	うちわける	うつ	わける	1838	b.手段—目的	
打ち割る	うちわる	うつ	わる	89	b.手段—目的	
移し入れる	うつしいれる	うつす	いれる	346	b.手段—目的	
移し植える	うつしうえる	うつす	うえる	233	b.手段—目的	
移し替える	うつしかえる	うつす	かえる	4112	b.手段—目的	
写し込む	うつしこむ	うつす	こむ	1688	b.手段—目的	拘束形態素
写し出す	うつしだす	うつす	だす	1498	b.手段—目的	
写し止める	うつしとめる	うつす	とめる	283	b.手段—目的	
移し取る	うつしとる	うつす	とる	276	b.手段—目的	
写し撮る	うつしとる	うつす	とる	701	b.手段—目的	
写し取る	うつしとる	うつす	とる	1785	b.手段—目的	
訴えかける	うったえかける	うったえる	かける	1683	j.V2 補助動詞	
訴え出る	うったえでる	うったえる	でる	1435	b.手段—目的	
うつちやる	うつちやる	うつ	やる	80	k.一語	拘束形態素
移り行く	うつりいく	うつる	いく	1333	a.原因—結果	
移り変わる	うつりかわる	うつる	かわる	1444	a.原因—結果	
写り込む	うつりこむ	うつる	こむ	1912	a.原因—結果	拘束形態素
移り住む	うつりすむ	うつる	すむ	1732	c.背景—具現	
移ろい行く	うつろいいく	うつろう	いく	716	j.V2 補助動詞	
奪い返す	うばいかえす	うばう	かえす	1580	b.手段—目的	
奪い去る	うばいさる	うばう	さる	1371	b.手段—目的	拘束意味
奪い取る	うばいとる	うばう	とる	1562	b.手段—目的	
埋まり込む	うまりこむ	うまる	こむ	85	a.原因—結果	拘束形態素
生まれ合わせる	うまれあわせる	うまれる	あわせる	173	j.V2 補助動詞	非分析的
生まれ落ちる	うまれおちる	うまれる	おちる	501	a.原因—結果	

生まれ変わる	うまれかわる	うまれる	かわる	2039	a.原因—結果	
生まれ来る	うまれくる	うまれる	くる	1083	a.原因—結果	
生まれ育つ	うまれそだつ	うまれる	そだつ	1200	e1.共通原因事象	
生まれつく	うまれつく	うまれる	つく	310	a.原因—結果	
生まれ出る	うまれでる	うまれる	でる	1516	a.原因—結果	
生まれ持つ	うまれもつ	うまれる	もつ	611	e1.共通原因事象	
産み落とす	うみおとす	うむ	おとす	1782	b.手段—目的	
産み捨てる	うみすてる	うむ	すてる	122	c.背景—具現	
産み育てる	うみそだてる	うむ	そだてる	2764	b.手段—目的	
産み出す	うみだす	うむ	だす	3777	b.手段—目的	
産みつける	うみつける	うむ	つける	1862	b.手段—目的	
生み育む	うみはぐくむ	うむ	はぐくむ	140	e2.共通目的事象	
産み分ける	うみわける	うむ	わける	1240	b.手段—目的	
埋め合わせる	うめあわす	うめる	あわす	134	b.手段—目的	
埋め合わせる	うめあわせる	うめる	あわせる	1327	b.手段—目的	非合成的
埋め込む	うめこむ	うめる	こむ	1366	b.手段—目的	拘束形態素
埋め殺す	うめころす	うめる	ころす	127	b.手段—目的	
埋め立てる	うめたてる	うめる	たてる	2325	b.手段—目的	
埋め戻す	うめもどす	うめる	もどす	1807	b.手段—目的	
恨み憎む	うらみにくむ	うらむ	にくむ	100	f.並列関係	
売り上がる	うりあがる	うる	あがる	155	a.原因—結果	主語不一致
売り上げる	うりあげる	うる	あげる	2545	b.手段—目的	
売り浴びせる	うりあびせる	うる	あびせる	280	b.手段—目的	
売り歩く	うりあるく	うる	あるく	1373	d2.共通目的様態	
売り急ぐ	うりいそぐ	うる	いそぐ	647	h. 事象対象	
売り惜しむ	うりおしむ	うる	おしむ	190	j.V2 補助動詞	
売り切れる	うりきれる	うる	きれる	1680	a.原因—結果	主語不一致
売り崩す	うりくずす	うる	くずす	322	b.手段—目的	
売り越す	うりこす	うる	こす	178	b.手段—目的	
売り込む	うりこむ	うる	こむ	2140	b.手段—目的	拘束形態素
売りさばく	うりさばく	うる	さばく	1287	b.手段—目的	
売り渋る	うりしぶる	うる	しぶる	81	h. 事象対象	

売り出す	うりだす	うる	だす	1641	b.手段一目的	
売り叩く	うりたたく	うる	たたく	221	b.手段一目的	
売りつける	うりつける	うる	つける	2591	b.手段一目的	
売り飛ばす	うりとばす	うる	とばす	1493	b.手段一目的	
売り逃げる	うりにげる	うる	にげる	668	l.逆形成	
売り抜ける	うりぬける	うる	ぬける	1703	a.原因一結果	
売り逃す	うりのがす	うる	のがす	83	c.背景一具現	
売り払う	うりはらう	うる	はらう	1631	b.手段一目的	
売り回る	うりまわる	うる	まわる	156	d2.共通目的様態	
売り戻す	うりもどす	うる	もどす	275	b.手段一目的	
売り渡す	うりわたす	うる	わたす	1739	b.手段一目的	
売れ残る	うれのこる	うれる	のこる	2116	c.背景一具現	
うろつき回る	うろつきまわる	うろつく	まわる	357	d1.共通原因様態	
描き込む	えがきこむ	えがく	こむ	1983	j.V2 補助動詞	拘束形態素
描き出す	えがきだす	えがく	だす	1575	b.手段一目的	
えぐり込む	えぐりこむ	えぐる	こむ	238	b.手段一目的	拘束形態素
えぐり出す	えぐりだす	えぐる	だす	1203	b.手段一目的	
えぐり取る	えぐりとる	えぐる	とる	624	b.手段一目的	
選び出す	えらびだす	えらぶ	だす	1751	b.手段一目的	
選び取る	えらびとる	えらぶ	とる	1541	b.手段一目的	
選び抜く	えらびぬく	えらぶ	ぬく	1257	b.手段一目的	
選び分ける	えらびわかる	えらぶ	わかる	194	b.手段一目的	
選りすぐる	えりすぐる	える	すぐる	390	l.逆形成	拘束形態素
選り分ける	えりわかる	える	わかる	1330	b.手段一目的	拘束形態素
演じ分ける	えんじわかる	えんずる	わかる	1412	b.手段一目的	
追い上げる	おいあげる	おう	あげる	1770	b.手段一目的	非分析的, 拘束意味
老い行く	おいいく	おいる	いく	151	j.V2 補助動詞	
追い落とす	おいおとす	おう	おとす	1373	b.手段一目的	
追い返す	おいかえす	おう	かえす	1290	b.手段一目的	
追いかける	おいかける	おう	かける	2359	j.V2 補助動詞	非分析的
追い越す	おいこす	おう	こす	2141	b.手段一目的	
老い込む	おいこむ	おいる	こむ	316	j.V2 補助動詞	拘束形態素

追い込む	おいこむ	おう	こむ	2774	j.V2 補助動詞	拘束形態素
生い茂る	おいしげる	おう	しげる	1878	e1.共通原因事象	拘束形態素
追いつがる	おいつがる	おう	すがる	1383	b.手段—目的	
追い迫る	おいせまる	おう	せまる	120	b.手段—目的	
追い出す	おいだす	おう	だす	2629	b.手段—目的	
追い立てる	おいたてる	おう	たてる	1306	b.手段—目的	
追い散らす	おいちらす	おう	ちらす	460	b.手段—目的	
追い使う	おいつかう	おう	つかう	222	b.手段—目的	
追いつく	おいつく	おう	つく	2650	a.原因—結果	
追い詰める	おいつめる	おう	つめる	1827	b.手段—目的	
追い抜く	おいぬく	おう	ぬく	1964	b.手段—目的	
追い祓う	おいはらう	おう	はらう	210	b.手段—目的	
追い払う	おいはらう	おう	はらう	1787	b.手段—目的	
老いぼれる	おいぼれる	おいる	ぼれる	347	a.原因—結果	非分析的, 拘束形態素
追い回す	おいまわす	おう	まわす	1558	b.手段—目的	
追い求める	おいもとめる	おう	もとめる	1614	b.手段—目的	
追いやる	おいやる	おう	やる	1271	b.手段—目的	
覆い隠す	おおいかくす	おおう	かくす	1608	b.手段—目的	
覆い被さる	おおいかぶさる	おおう	かぶさる	1428	a.原因—結果	
覆い被せる	おおいかぶせる	おおう	かぶせる	693	b.手段—目的	
覆い込む	おおいこむ	おおう	こむ	195	b.手段—目的	拘束形態素
覆い包む	おおいつつむ	おおう	つつむ	285	b.手段—目的	
仰せつかる	おおせつかる	おおす	つかる	1499	j.V2 補助動詞	拘束形態素
拌み倒す	おがみたおす	おがむ	たおす	392	j.V2 補助動詞	
起き上がる	おきあがる	おきる	あがる	1728	a.原因—結果	
置き換える	おきかえる	おく	かえる	3738	b.手段—目的	
置き換わる	おきかわる	おく	かわる	2276	a.原因—結果	主語不一致
置き去る	おきさる	おく	さる	277	l.逆形成	
起き出す	おきだす	おきる	だす	1670	j.V2 補助動詞	拘束意味
起き直る	おきなおる	おきる	なおる	218	a.原因—結果	
置き忘れる	おきわすれる	おく	わすれる	2074	c.背景—具現	
送り返す	おくりかえす	おくる	かえす	1566	b.手段—目的	

送り込む	おくりこむ	おくる	こむ	2438	b.手段-目的	拘束形態素
送り出す	おくりだす	おくる	だす	1849	b.手段-目的	
送りつける	おくりつける	おくる	つける	1523	b.手段-目的	
送り届ける	おくりとどける	おくる	とどける	1370	b.手段-目的	
送り戻す	おくりもどす	おくる	もどす	195	b.手段-目的	
驕り高ぶる	おごりたかぶる	おごる	たかぶる	1369	a.原因-結果	
抑え込む	おさえこむ	おさえる	こむ	3267	j.V2 補助動詞	拘束形態素
押さえつける	おさえつける	おさえる	つける	3045	b.手段-目的	
押し上がる	おしあがる	おす	あがる	142	a.原因-結果	主語不一致
押し開ける	おしあける	おす	あける	837	b.手段-目的	
押し上げる	おしあげる	おす	あげる	1756	b.手段-目的	
押し当てる	おしあてる	おす	あてる	1757	b.手段-目的	
押し歩く	おしあるく	おす	あるく	281	d2.共通目的様態	
押し頂く	おしいただく	おす	いただく	225	b.手段-目的	
押し入る	おしいる	おす	いる	1576	a.原因-結果	拘束形態素
押し入れる	おしいれる	おす	いれる	1137	b.手段-目的	
教え込む	おしえこむ	おしえる	こむ	1458	b.手段-目的	拘束形態素
教え授ける	おしえさづける	おしえる	さづける	122	b.手段-目的	
教え諭す	おしえさとす	おしえる	さとす	982	b.手段-目的	
教え示す	おしえしめす	おしえる	しめす	139	b.手段-目的	
教え育てる	おしえそだてる	おしえる	そだてる	380	b.手段-目的	
教え伝える	おしえつたえる	おしえる	つたえる	339	b.手段-目的	
教え育む	おしえはぐくむ	おしえる	はぐくむ	163	b.手段-目的	
教え導く	おしえみちびく	おしえる	みちびく	1173	b.手段-目的	
押し返す	おしかえす	おす	かえす	1584	b.手段-目的	
押しかかる	おしかかる	おす	かかる	344	j.V2 補助動詞	
押し隠す	おしかくす	おす	かくす	721	i.V1 接頭辞化	
押しかける	おしかける	おす	かける	1808	k.一語	非分析的
押し固める	おしかためる	おす	かためる	804	b.手段-目的	
押し勝つ	おしかつ	おす	かつ	253	b.手段-目的	
押し切る	おしきる	おす	きる	1576	j.V2 補助動詞	拘束意味
押し込む	おしこむ	おす	こむ	2296	b.手段-目的	拘束形態素

押し込める	おしこめる	おす	こめる	1550	b.手段一目的	
押し殺す	おしころす	おす	ころす	1538	i.V1 接頭辞化	非合成的
押し下げる	おしさげる	おす	さげる	1987	b.手段一目的	
押し沈める	おししずめる	おす	しずめる	144	b.手段一目的	
押し進める	おしすすめる	おす	すすめる	3024	b.手段一目的	非合成的
押し迫る	おしせまる	おす	せまる	1083	i.V1 接頭辞化	
押し倒す	おしたおす	おす	たおす	1575	b.手段一目的	非合成的
押し出す	おしだす	おす	だす	2087	b.手段一目的	
押し立てる	おしたてる	おす	たてる	388	b.手段一目的	
押し黙る	おしだまる	おす	だまる	1274	i.V1 接頭辞化	非分析的
押し縮める	おしちぢめる	おす	ちぢめる	299	b.手段一目的	
押し付ける	おしつける	おす	つける	2865	b.手段一目的	
押し包む	おしつつむ	おす	つつむ	287	b.手段一目的	
押し潰す	おしつぶす	おす	つぶす	1424	b.手段一目的	
押し詰まる	おしつまる	おす	つまる	97	k.一語	
押し通す	おしとおす	おす	とおす	1528	b.手段一目的	非合成的
押しとどめる	おしとどめる	おす	とどめる	1365	b.手段一目的	
押し飛ばす	おしとばす	おす	とばす	146	b.手段一目的	
押しとめる	おしとめる	おす	とめる	152	b.手段一目的	
押し流す	おしながす	おす	ながす	1369	b.手段一目的	
押しのける	おしのける	おす	のける	1562	b.手段一目的	
押し量る	おしはかる	おす	はかる	1563	b.手段一目的	
押し開く	おしひらく	おす	ひらく	1349	b.手段一目的	
押し広げる	おしひろげる	おす	ひろげる	1462	b.手段一目的	
押し広める	おしひろめる	おす	ひろめる	345	b.手段一目的	
押し負ける	おしまける	おす	まける	1192	c.背景一具現	
押し曲げる	おしまげる	おす	まげる	759	b.手段一目的	
押し回す	おしまわす	おす	まわす	460	b.手段一目的	
押し戻す	おしもどす	おす	もどす	1572	b.手段一目的	
押し破る	おしやぶる	おす	やぶる	162	b.手段一目的	
押しやる	おしやる	おす	やる	1545	b.手段一目的	
押し寄せる	おしよせる	おす	よせる	2052	i.V1 接頭辞化	

押し分ける	おしわける	おす	わける	352	b.手段—目的	
押し渡る	おしわたる	おす	わたる	253	i.V1 接頭辞化	
襲いかかる	おそいかかる	おそう	かかる	1905	a.原因—結果	
襲い来る	おそいくる	おそう	くる	1413	j.V2 補助動詞	
恐れ入る	おそれいる	おそれる	いる	1023	j.V2 補助動詞	拘束形態素
恐れ敬う	おそれうやまう	おそれる	うやまう	210	e1.共通原因事象	
恐れおののく	おそれおののく	おそれる	おののく	1058	f.並列関係	
おだて上げる	おだてあげる	おだてる	あげる	145	b.手段—目的	
落ち合う	おちあう	おちる	あう	1617	k.一語	非合成的
落ち行く	おちいく	おちる	いく	749	j.V2 補助動詞	
落ち入る	おちいる	おちる	いる	1120	j.V2 補助動詞	非合成的, 拘束形態素
落ちかかる	おちかかる	おちる	かかる	1134	j.V2 補助動詞	
落ちこぼれる	おちこぼれる	おちる	こぼれる	1274	k.一語	非合成的
落ち込む	おちこむ	おちる	こむ	3279	k.一語	非合成的, 拘束形態素
落ち着き払う	おちつきはらう	おちつく	はらう	165	j.V2 補助動詞	拘束意味
落ち着く	おちつく	おちる	つく	3063	k.一語	非合成的
落ち着ける	おちつける	おちる	つける	1764	k.一語	非合成的
落ち延びる	おちのびる	おちる	のびる	1484	a.原因—結果	非分析的
落ちぶれる	おちぶれる	おちる	ぶれる	1642	k.一語	非分析的
追っかけ回す	おっかけまわす	おっかける	まわす	385	b.手段—目的	
追っかける	おっかける	おう	かける	1565	j.V2 補助動詞	
おっつける	おっつける	おす	つける	934	k.一語	
脅し上げる	おどしあげる	おどす	あげる	144	j.V2 補助動詞	拘束意味
落とし入れる	おとしいれる	おとす	いれる	1333	b.手段—目的	
落とし込む	おとしこむ	おとす	こむ	2130	b.手段—目的	拘束形態素
落とし込める	おとしこめる	おとす	こめる	1377	b.手段—目的	
脅しつける	おどしつける	おどす	つける	319	b.手段—目的	
脅し取る	おどしとる	おどす	とる	1641	b.手段—目的	
踊り明かす	おどりあかす	おどる	あかす	613	b.手段—目的	
踊り上がる	おどりあがる	おどる	あがる	238	a.原因—結果	
踊り歩く	おどりあるく	おどる	あるく	460	d2.共通目的様態	

躍りかかる	おどりかかる	おどる	かかる	186	a.原因—結果	
躍り狂う	おどりくるう	おどる	くるう	99	g.比喩の様態	
踊り狂う	おどりくるう	おどる	くるう	1196	g.比喩の様態	
躍り込む	おどりこむ	おどる	こむ	144	a.原因—結果	拘束形態素
踊り込む	おどりこむ	おどる	こむ	187	j.V2 補助動詞	拘束形態素
躍り出る	おどりでる	おどる	でる	1485	g.比喩の様態	
踊り跳ねる	おどりはねる	おどる	はねる	114	d1.共通原因様態	
踊り回る	おどりまわる	おどる	まわる	242	d1.共通原因様態	
衰え行く	おとろえいく	おとろえる	いく	173	j.V2 補助動詞	
驚き呆れる	おどろきあきれる	おどろく	あきれる	281	a.原因—結果	
驚き慌てる	おどろきあわてる	おどろく	あわてる	155	e1.共通原因事象	
驚き入る	おどろきいる	おどろく	いる	315	j.V2 補助動詞	拘束形態素
驚き喜ぶ	おどろきよろこぶ	おどろく	よろこぶ	214	e1.共通原因事象	
怯え震える	おびえふるえる	おびえる	ふるえる	111	e1.共通原因事象	
おびき出す	おびきだす	おびく	だす	1488	b.手段—目的	拘束形態素
誘き寄せる	おびきよせる	おびく	よせる	1441	b.手段—目的	拘束形態素
覚え込む	おぼえこむ	おぼえる	こむ	698	b.手段—目的	拘束形態素
思し召す	おぼしめす	おぼす	めす	342	k.一語	非分析的, 拘束形態素
溺れ死ぬ	おぼれしぬ	おぼれる	しぬ	1111	a.原因—結果	
思い上がる	おもいあがる	おもう	あがる	635	k.一語	
思い当たる	おもいあたる	おもう	あたる	1667	b.手段—目的	
思い余る	おもいあまる	おもう	あまる	114	j.V2 補助動詞	特殊形態
思い合わせる	おもいあわせる	おもう	あわせる	819	j.V2 補助動詞	
思い至る	おもいいたる	おもう	いたる	1475	b.手段—目的	
思い入る	おもいいる	おもう	いる	650	j.V2 補助動詞	拘束形態素
思い浮かぶ	おもいうかぶ	おもう	うかぶ	1715	a.原因—結果	主語不一致
思い浮かべる	おもいうかべる	おもう	うかべる	1941	b.手段—目的	
思い描く	おもいえがく	おもう	えがく	1803	b.手段—目的	
思い起こす	おもいおこす	おもう	おこす	1424	b.手段—目的	
思い及ぶ	おもいおよぶ	おもう	およぶ	127	b.手段—目的	
思い返す	おもいかえす	おもう	かえす	1271	j.V2 補助動詞	

思い切る	おもいきる	おもう	きる	943	j.V2 補助動詞	拘束意味
思い焦がれる	おもいこがれる	おもう	こがれる	289	e1.共通原因事象	拘束形態素
思い込む	おもいこむ	おもう	こむ	3303	j.V2 補助動詞	非合成的, 拘束形態素
思い定める	おもいさだめる	おもう	さだめる	879	b.手段—目的	
思い慕う	おもいしたう	おもう	したう	216	e1.共通原因事象	
思い知る	おもいしる	おもう	しる	1870	b.手段—目的	非合成的
思い過ごす	おもいすごす	おもう	すごす	352	b.手段—目的	
思い出す	おもいだす	おもう	だす	3655	b.手段—目的	
思い立つ	おもいたつ	おもう	たつ	1150	j.V2 補助動詞	
思い違える	おもいちがえる	おもう	ちがえる	157	b.手段—目的	拘束形態素
思いつく	おもいつく	おもう	つく	2450	j.V2 補助動詞	
思い詰める	おもいつめる	おもう	つめる	1407	b.手段—目的	非合成的
思いとどまる	おもいとどまる	おもう	とどまる	1166	a.原因—結果	
思いとどめる	おもいとどめる	おもう	とどめる	275	b.手段—目的	
思いなす	おもいなす	おもう	なす	971	j.V2 補助動詞	
思い悩む	おもいなやむ	おもう	なやむ	1419	e1.共通原因事象	
思い残す	おもいのこす	おもう	のこす	1344	c.背景—具現	特殊形態
思い量る	おもいはかる	おもう	はかる	88	b.手段—目的	
思いふける	おもいふける	おもう	ふける	212	j.V2 補助動詞	
思い惑う	おもいまどう	おもう	まどう	533	e1.共通原因事象	
思い迷う	おもいまよう	おもう	まよう	578	e1.共通原因事象	
思い乱れる	おもいみだれる	おもう	みだれる	360	a.原因—結果	
思いやる	おもいやる	おもう	やる	2163	k.一語	非分析的
思いわずらう	おもいわずらう	おもう	わずらう	677	e1.共通原因事象	
泳ぎ込む	およぎこむ	およぐ	こむ	108	j.V2 補助動詞	拘束形態素
泳ぎ去る	およぎさる	およぐ	さる	173	d2.共通目的様態	
泳ぎ着く	およぎつく	およぐ	つく	236	a.原因—結果	
泳ぎ出る	およぎでる	およぐ	でる	130	a.原因—結果	
泳ぎ回る	およぎまわる	およぐ	まわる	1690	d2.共通目的様態	
泳ぎ渡る	およぎわたる	およぐ	わたる	175	d2.共通目的様態	
折り合う	おりあう	おる	あう	1268	k.一語	非分析的
織り上がる	おりあがる	おる	あがる	306	a.原因—結果	主語不一致

織り上げる	おりあげる	おる	あげる	1630	b.手段—目的	拘束意味
折り上げる	おりあげる	おる	あげる	668	b.手段—目的	
織り合わせる	おりあわせる	おる	あわせる	95	b.手段—目的	
折り入る	おりいる	おる	いる	76	k.一語	非分析的, 拘束形態素
折り返す	おりかえす	おる	かえす	2910	b.手段—目的	
折り重なる	おりかさなる	おる	かさなる	1120	a.原因—結果	主語不一致
折り重ねる	おりかさねる	おる	かさねる	625	b.手段—目的	
織り込む	おりこむ	おる	こむ	1837	b.手段—目的	拘束形態素
折り込む	おりこむ	おる	こむ	2095	b.手段—目的	拘束形態素
折り下げる	おりさげる	おる	さげる	109	b.手段—目的	
織り出す	おりだす	おる	だす	1370	b.手段—目的	
折り畳む	おりたたむ	おる	たたむ	2210	b.手段—目的	
降り立つ	おりたつ	おりる	たつ	1744	a.原因—結果	非合成的
折り取る	おりとる	おる	とる	797	b.手段—目的	
織り成す	おりなす	おる	なす	1516	a.原因—結果	
折り曲げる	おりまげる	おる	まげる	1963	b.手段—目的	
織り交ぜる	おりまぜる	おる	まぜる	1492	b.手段—目的	
折れ込む	おれこむ	おれる	こむ	122	a.原因—結果	拘束形態素
折れ曲がる	おれまがる	おれる	まがる	1603	a.原因—結果	
買い上がる	かいあがる	かう	あがる	629	k.一語	主語不一致
買い上げる	かいあげる	かう	あげる	1879	b.手段—目的	
買い漁る	かいあさる	かう	あさる	1452	b.手段—目的	
買い与える	かいあたえる	かう	あたえる	2060	b.手段—目的	
買い集める	かいあつめる	かう	あつめる	1584	b.手段—目的	
買い急ぐ	かいいそぐ	かう	いそぐ	456	h. 事象対象	
買い入れる	かいいれる	かう	いれる	1669	b.手段—目的	
買い受ける	かいうける	かう	うける	1741	b.手段—目的	
買い換える	かいかえる	かう	かえる	6758	b.手段—目的	
買い被る	かいかぶる	かう	かぶる	172	k.一語	非分析的
かいくぐる	かいくぐる	かく	くぐる	1410	k.一語	非分析的
買い越す	かいこす	かう	こす	105	k.一語	
買い込む	かいこむ	かう	こむ	1742	b.手段—目的	拘束形態素

飼い込む	かいこむ	かう	こむ	1107	j.V2 補助動詞	拘束形態素
飼い殺す	かいころす	かう	ころす	509	b.手段一目的	
買い下がる	かいさがる	かう	さがる	581	k.一語	
買い支える	かいささえる	かう	ささえる	1823	b.手段一目的	
買い渋る	かいしぶる	かう	しぶる	239	h. 事象対象	
買い占める	かいしめる	かう	しめる	1937	b.手段一目的	
買い進める	かいすすめる	かう	すすめる	470	b.手段一目的	
買い揃える	かいそろえる	かう	そろえる	1538	b.手段一目的	
買い足す	かいたす	かう	たす	1762	b.手段一目的	
掻い出す	かいだす	かく	だす	186	b.手段一目的	拘束形態素
買い叩く	かいたたく	かう	たたく	1379	j.V2 補助動詞	
買い建てる	かいたてる	かう	たてる	181	b.手段一目的	
買い溜める	かいためる	かう	ためる	307	b.手段一目的	
買い付ける	かいつける	かう	つける	1971	b.手段一目的	非合成的
かいつまむ	かいつまむ	かく	つまむ	495	k.一語	非合成的, 拘束形態素
買い整える	かいととのえる	かう	ととのえる	143	b.手段一目的	
買い取る	かいとる	かう	とる	3635	b.手段一目的	
飼い馴らす	かいならす	かう	ならす	463	b.手段一目的	
買い逃す	かいのがす	かう	のがす	1413	c.背景一具現	
買い控える	かいびかえる	かう	ひかえる	1360	h. 事象対象	
買い負ける	かいまける	かう	まける	111	c.背景一具現	
買い増す	かいます	かう	ます	1954	b.手段一目的	
買い回る	かいまわる	かう	まわる	186	d2.共通目的様態	
買い戻す	かいもどす	かう	もどす	1819	b.手段一目的	
買い求める	かいもとめる	かう	もとめる	1666	b.手段一目的	
買い分ける	かいわける	かう	わける	123	b.手段一目的	
帰り行く	かえりいく	かえる	いく	226	a.原因一結果	
帰り来る	かえりくる	かえる	くる	427	a.原因一結果	
返り咲く	かえりざく	かえる	さく	1396	l.逆形成	非合成的
帰り着く	かえりつく	かえる	つく	1513	a.原因一結果	
薫り立つ	かおりたつ	かおる	たつ	661	a.原因一結果	
抱え上げる	かかえあげる	かかえる	あげる	1976	b.手段一目的	

抱え込む	かかえこむ	かかえる	こむ	1671	b.手段-目的	拘束形態素
抱え出す	かかえだす	かかえる	だす	176	b.手段-目的	
抱え持つ	かかえもつ	かかえる	もつ	378	e1.共通原因事象	
掲げ持つ	かかげもつ	かかげる	もつ	112	e2.共通目的事象	
かがみ込む	かがみこむ	かがむ	こむ	69	a.原因-結果	拘束形態素
輝き出る	かがやきでる	かがやく	でる	600	a.原因-結果	
輝き渡る	かがやきわたる	かがやく	わたる	96	j.V2 補助動詞	
書き上がる	かきあがる	かく	あがる	718	a.原因-結果	主語不一致
書き上げる	かきあげる	かく	あげる	3355	b.手段-目的	拘束意味
掻き上げる	かきあげる	かく	あげる	1890	b.手段-目的	
かき集める	かきあつめる	かく	あつめる	1514	b.手段-目的	
嗅ぎ当てる	かぎあてる	かぐ	あてる	180	b.手段-目的	
書き表す	かきあらわす	かく	あらわす	1934	b.手段-目的	
掻き合わせる	かきあわせる	かく	あわせる	203	b.手段-目的	
掻き抱く	かきいだく	かく	いだく	477	b.手段-目的	
書き入れる	かきいれる	かく	いれる	2313	b.手段-目的	
書き写す	かきうつす	かく	うつす	2443	b.手段-目的	
書き置く	かきおく	かく	おく	432	b.手段-目的	
書き送る	かきおくる	かく	おくる	788	b.手段-目的	
掻き起こす	かきおこす	かく	おこす	101	b.手段-目的	
書き起こす	かきおこす	かく	おこす	2102	b.手段-目的	
書き落とす	かきおとす	かく	おとす	185	b.手段-目的	拘束意味
掻き落とす	かきおとす	かく	おとす	903	b.手段-目的	
書き下ろす	かきおろす	かく	おろす	2422	b.手段-目的	
書き換える	かきかえる	かく	かえる	5839	b.手段-目的	
書き換わる	かきかわる	かく	かわる	1802	a.原因-結果	主語不一致
掻き消える	かききえる	かく	きえる	1174	i.V1 接頭辞化	主語不一致
掻き切る	かききる	かく	きる	475	b.手段-目的	
掻き崩す	かきくずす	かく	くずす	102	b.手段-目的	
書き下す	かきくだす	かく	くだす	1088	b.手段-目的	
掻き口説く	かきくどく	かく	くどく	170	b.手段-目的	
かき曇る	かきくもる	かく	くもる	82	i.V1 接頭辞化	

書き加える	かきくわえる	かく	くわえる	2274	b.手段一目的	
掻き消す	かきけす	かく	けす	1410	b.手段一目的	
掻き込む	かきこむ	かく	こむ	1174	b.手段一目的	拘束形態素
書き込む	かきこむ	かく	こむ	7555	b.手段一目的	拘束形態素
書き記す	かきしるす	かく	しるす	1370	b.手段一目的	
書き進む	かきすすむ	かく	すすむ	383	j.V2 補助動詞	
書き進める	かきすすめる	かく	すすめる	1762	j.V2 補助動詞	
書き捨てる	かきすてる	かく	すてる	456	c.背景一具現	
書き添える	かきそえる	かく	そえる	1330	b.手段一目的	
書き足す	かきたす	かく	たす	2574	b.手段一目的	
掻き出す	かきだす	かく	だす	1629	b.手段一目的	
書き出す	かきだす	かく	だす	3395	b.手段一目的	
嗅ぎ出す	かぎだす	かぐ	だす	143	b.手段一目的	
書き立てる	かきたてる	かく	たてる	1377	b.手段一目的	
掻き立てる	かきたてる	かく	たてる	1483	b.手段一目的	
書き溜める	かきためる	かく	ためる	1000	b.手段一目的	
書き散らす	かきちらす	かく	ちらす	1196	j.V2 補助動詞	拘束意味
書き継ぐ	かきつぐ	かく	つぐ	322	b.手段一目的	
書きつける	かきつける	かく	つける	949	b.手段一目的	
嗅ぎつける	かぎつける	かぐ	つける	1116	b.手段一目的	
書き綴る	かきつづる	かく	つづる	1014	b.手段一目的	
書き潰す	かきつぶす	かく	つぶす	110	b.手段一目的	
書き連ねる	かきつらねる	かく	つらねる	1174	b.手段一目的	
書きとどめる	かきとどめる	かく	とどめる	364	b.手段一目的	
書き飛ばす	かきとばす	かく	とばす	868	b.手段一目的	
書き留める	かきとめる	かく	とめる	1606	b.手段一目的	
掻き取る	かきとる	かく	とる	1469	b.手段一目的	
書き取る	かきとる	かく	とる	1685	b.手段一目的	
嗅ぎ取る	かぎとる	かぐ	とる	1164	b.手段一目的	
書き流す	かきながす	かく	ながす	544	g.比喩の様態	
書き殴る	かきなぐる	かく	なぐる	1021	g.比喩の様態	
掻き鳴らす	かきならす	かく	ならす	1066	b.手段一目的	

書き並べる	かきならべる	かく	ならべる	1043	b.手段一目的	
書き抜く	かきぬく	かく	ぬく	705	j.V2 補助動詞	拘束意味
書き残す	かきのこす	かく	のこす	1547	b.手段一目的	
かき混ぜる	かきまぜる	かく	まぜる	1980	b.手段一目的	
かき回す	かきまわす	かく	まわす	1275	b.手段一目的	
嗅ぎ回る	かぎまわる	かぐ	まわる	680	d2.共通目的様態	
掻き乱す	かきみだす	かく	みだす	1308	b.手段一目的	
掻きむしる	かきむしる	かく	むしる	1448	b.手段一目的	
書き戻す	かきもどす	かく	もどす	2328	b.手段一目的	
書き漏らす	かきもらす	かく	もらす	116	c.背景一具現	
掻き寄せる	かきよせる	かく	よせる	299	b.手段一目的	
掻き分ける	かきわける	かく	わける	1568	b.手段一目的	
書き分ける	かきわける	かく	わける	2655	b.手段一目的	
嗅ぎ分ける	かぎわける	かぐ	わける	1412	b.手段一目的	
隠しおおせる	かくしおおせる	かくす	おおせる	337	k.一語	非分析的, 拘束形態素
隠し込む	かくしこむ	かくす	こむ	151	b.手段一目的	拘束形態素
隠し持つ	かくしもつ	かくす	もつ	1305	e2.共通目的事象	
隠れ住む	かくれすむ	かくれる	すむ	1339	e1.共通原因事象	
隠れ潜む	かくれひそむ	かくれる	ひそむ	326	f.並列関係	
駆け上がる	かけあがる	かける	あがる	1605	d2.共通目的様態	
掛け合わす	かけあわす	かける	あわす	331	b.手段一目的	
掛け合わせる	かけあわせる	かける	あわせる	1893	b.手段一目的	
駆け入る	かけいる	かける	いる	132	a.原因一結果	拘束形態素
駆け下りる	かけおりる	かける	おりる	2462	d2.共通目的様態	
掛け替える	かけかえる	かける	かえる	1063	b.手段一目的	
駆け下る	かけくだる	かける	くだる	1090	d2.共通目的様態	
駆け込む	かけこむ	かける	こむ	2096	a.原因一結果	拘束形態素
掛け込む	かけこむ	かける	こむ	123	j.V2 補助動詞	拘束形態素
駆け去る	かけさる	かける	さる	231	d2.共通目的様態	
掛け捨てる	かけすてる	かける	すてる	108	b.手段一目的	
駆けずり回る	かけずりまわる	かけずる	まわる	1110	d2.共通目的様態	拘束形態素
駆け出す	かけだす	かける	だす	1324	j.V2 補助動詞	拘束意味

掛け違う	かけちがう	かける	ちがう	118	j.V2 補助動詞	
掛け違える	かけちがえる	かける	ちがえる	246	j.V2 補助動詞	拘束形態素
駆けつける	かけつける	かける	つける	2819	b.手段一目的	
掛け流す	かけながす	かける	ながす	525	b.手段一目的	
駆け抜ける	かけぬける	かける	ぬける	1952	a.原因一結果	
駆け上る	かけのぼる	かける	のぼる	2636	d2.共通目的様態	
かけ離れる	かけはなれる	かける	はなれる	1347	i.V1 接頭辞化	非分析的
かけ回す	かけまわす	かける	まわす	264	e2.共通目的事象	
駆け回る	かけまわる	かける	まわる	1461	d2.共通目的様態	
駆け巡る	かけめぐる	かける	めぐる	1464	d2.共通目的様態	
掛け持つ	かけもつ	かける	もつ	874	i.V1 接頭辞化	非分析的
駆け戻る	かけもどる	かける	もどる	562	d2.共通目的様態	
駆け寄る	かけよる	かける	よる	1484	d2.共通目的様態	
掛け渡す	かけわたす	かける	わたす	637	b.手段一目的	
囲い込む	かこいこむ	かこう	こむ	1521	b.手段一目的	拘束形態素
囲み込む	かこみこむ	かこむ	こむ	87	b.手段一目的	拘束形態素
重ね合わせる	かさねあわせる	かさねる	あわせる	230	a.原因一結果	主語不一致
重ね合わせる	かさねあわす	かさねる	あわす	455	b.手段一目的	
重ね合わせる	かさねあわせる	かさねる	あわせる	1805	b.手段一目的	
重ね着る	かさねきる	かさねる	きる	61	b.手段一目的	
重ね塗る	かさねぬる	かさねる	ぬる	191	b.手段一目的	
飾り立てる	かざりたてる	かざる	たてる	1292	b.手段一目的	
飾りつける	かざりつける	かざる	つける	1319	b.手段一目的	
貸し与える	かしあたえる	かす	あたえる	655	b.手段一目的	
貸し切る	かしきる	かす	きる	1685	j.V2 補助動詞	拘束意味
貸し込む	かしこむ	かす	こむ	95	j.V2 補助動詞	拘束形態素
貸し渋る	かししぶる	かす	しぶる	428	h. 事象対象	
貸し倒れる	かしたおれる	かす	たおれる	133	a.原因一結果	
貸し出す	かしだす	かす	だす	2114	b.手段一目的	
貸し付ける	かしつける	かす	つける	2538	b.手段一目的	
貸し剥がす	かしはがす	かす	はがす	50	b.手段一目的	
かじりつく	かじりつく	かじる	つく	1468	a.原因一結果	

かじり取る	かじりとる	かじる	とる	148	b.手段一目的	
貸し渡す	かしわたす	かす	わたす	419	b.手段一目的	
かすめ取る	かすめとる	かすめる	とる	1069	b.手段一目的	
稼ぎ出す	かせぎだす	かせぐ	だす	1611	b.手段一目的	
数え上げる	かぞえあげる	かぞえる	あげる	1259	j.V2 補助動詞	拘束意味
数え入れる	かぞえいれる	かぞえる	いれる	89	b.手段一目的	
数え立てる	かぞえたてる	かぞえる	たてる	100	b.手段一目的	
語り明かす	かたりあかす	かたる	あかす	929	b.手段一目的	
語り下ろす	かたりおろす	かたる	おろす	141	b.手段一目的	
語りかける	かたりかける	かたる	かける	1691	j.V2 補助動詞	
語り継ぐ	かたりつぐ	かたる	つぐ	1875	b.手段一目的	
語り伝える	かたりつたえる	かたる	つたえる	1192	b.手段一目的	
かち合う	かちあう	かつ	あう	1135	k.一語	拘束意味, 拘束形態素
勝ち上がる	かちあがる	かつ	あがる	2260	a.原因一結果	
勝ち得る	かちえる	かつ	える	1513	b.手段一目的	
勝ち越す	かちこす	かつ	こす	2147	b.手段一目的	
勝ち進む	かちすすむ	かつ	すすむ	1619	a.原因一結果	
勝ち取る	かちとる	かつ	とる	2200	b.手段一目的	
勝ち抜く	かちぬく	かつ	ぬく	2121	j.V2 補助動詞	拘束意味
勝ち残る	かちのこる	かつ	のこる	1685	a.原因一結果	
勝ち誇る	かちほこる	かつ	ほこる	1103	b.手段一目的	
担ぎ上げる	かつぎあげる	かつぐ	あげる	1710	b.手段一目的	
担ぎ下ろす	かつぎおろす	かつぐ	おろす	193	b.手段一目的	
担ぎ込む	かつぎこむ	かつぐ	こむ	286	b.手段一目的	拘束形態素
担ぎ出す	かつぎだす	かつぐ	だす	1172	b.手段一目的	
担ぎ回る	かつぎまわる	かつぐ	まわる	88	d2.共通目的様態	
かっぱらう	かっぱらう	かく	はらう	639	k.一語	非分析的, 拘束形態素
かなぐり捨てる	かなぐりすてる	かなぐる	すてる	780	k.一語	非分析的, 拘束形態素
悲しみ嘆く	かなしみなげく	かなしむ	なげく	126	e1.共通原因事象	
兼ね合わせる	かねあわせる	かねる	あわせる	189	b.手段一目的	
兼ね備える	かねそなえる	かねる	そなえる	1624	b.手段一目的	

兼ね持つ	かねもつ	かねる	もつ	128	e1.共通原因事象	
かぶりつく	かぶりつく	かぶる	つく	1519	a.原因—結果	拘束形態素
嘯み合う	かみあう	かむ	あう	2405	k.一語	非合成的
嘯み合わせる	かみあわせる	かむ	あわせる	222	a.原因—結果	
嘯み返す	かみかえす	かむ	かえす	211	j.V2 補助動詞	
嘯み切る	かみきる	かむ	きる	1758	b.手段—目的	
嘯み砕く	かみくだく	かむ	くだく	1431	b.手段—目的	
嘯み込む	かみこむ	かむ	こむ	1669	b.手段—目的	拘束形態素
嘯み殺す	かみころす	かむ	ころす	1431	b.手段—目的	
嘯みしめる	かみしめる	かむ	しめる	1784	b.手段—目的	
嘯み倒す	かみたおす	かむ	たおす	99	b.手段—目的	
嘯みちぎる	かみちぎる	かむ	ちぎる	883	b.手段—目的	
嘯み付く	かみつく	かむ	つく	1992	a.原因—結果	
嘯み潰す	かみつぶす	かむ	つぶす	896	b.手段—目的	
嘯み破る	かみやぶる	かむ	やぶる	103	b.手段—目的	
嘯み分ける	かみわける	かむ	わける	126	b.手段—目的	
醸し出す	かもしだす	かもす	だす	1637	b.手段—目的	
醸し出る	かもしでる	かもす	でる	138	a.原因—結果	主語不一致
通い合わせる	かよいあわせる	かよう	あわせる	797	b.手段—目的	
通い詰める	かよいつめる	かよう	つめる	1290	b.手段—目的	
絡まりつく	からまりつく	からまる	つく	241	a.原因—結果	
絡みつく	からみつく	からむ	つく	1807	a.原因—結果	
絡みつける	からみつける	からむ	つける	255	b.手段—目的	主語不一致
絡め合わせる	からめあわせる	からめる	あわせる	325	b.手段—目的	
絡め捕る	からめとる	からめる	とる	129	b.手段—目的	
絡め取る	からめとる	からめる	とる	1488	b.手段—目的	
借り上げる	かりあげる	かりる	あげる	1594	b.手段—目的	
刈り上げる	かりあげる	かる	あげる	1638	b.手段—目的	
駆り集める	かりあつめる	かる	あつめる	135	b.手段—目的	
刈り入れる	かりいれる	かる	いれる	315	b.手段—目的	
借り入れる	かりいれる	かりる	いれる	1969	b.手段—目的	
借り受ける	かりうける	かりる	うける	1649	b.手段—目的	

刈り落とす	かりおとす	かる	おとす	91	b.手段一目的	
借り換える	かりかえる	かりる	かえる	3281	b.手段一目的	
借り切る	かりきる	かりる	きる	1259	j.V2 補助動詞	拘束意味
刈り込む	かりこむ	かる	こむ	2383	j.V2 補助動詞	拘束形態素
狩り殺す	かりころす	かる	ころす	145	b.手段一目的	
刈り揃える	かりそろえる	かる	そろえる	125	b.手段一目的	
刈り倒す	かりたおす	かる	たおす	173	b.手段一目的	
狩り出す	かりだす	かる	だす	441	b.手段一目的	
駆り出す	かりだす	かる	だす	793	b.手段一目的	
借り出す	かりだす	かりる	だす	1043	b.手段一目的	
駆り立てる	かりたてる	かる	たてる	1454	j.V2 補助動詞	非分析的
狩り取る	かりとる	かる	とる	156	b.手段一目的	
刈り取る	かりとる	かる	とる	2368	b.手段一目的	
刈り払う	かりはらう	かる	はらう	390	b.手段一目的	
枯れ上がる	かれあがる	かれる	あがる	241	a.原因一結果	
枯れ行く	かれいく	かれる	いく	249	j.V2 補助動詞	
枯れ落ちる	かれおちる	かれる	おちる	491	a.原因一結果	
枯れ込む	かれこむ	かれる	こむ	590	j.V2 補助動詞	拘束形態素
枯れ果てる	かれはてる	かれる	はてる	782	a.原因一結果	
変わり行く	かわりいく	かわる	いく	1236	j.V2 補助動詞	
変わり果てる	かわりはてる	かわる	はてる	526	a.原因一結果	
考え合わせる	かんがえあわせる	かんがえる	あわせる	1305	b.手段一目的	
考え及ぶ	かんがえおよぶ	かんがえる	およぶ	96	b.手段一目的	
考え込む	かんがえこむ	かんがえる	こむ	1480	j.V2 補助動詞	拘束形態素
考え出す	かんがえだす	かんがえる	だす	1406	b.手段一目的	
考えつく	かんがえつく	かんがえる	つく	1166	b.手段一目的	
感じ入る	かんじいる	かんじる	いる	1415	j.V2 補助動詞	拘束形態素

感じ取る	かんじとる	かんじる	とる	2358	b.手段—目的	
消え行く	きえいく	きえる	いく	1704	j.V2 補助動詞	
消え入る	きえいる	きえる	いる	1261	j.V2 補助動詞	拘束形態素
消え失せる	きえうせる	きえる	うせる	1324	a.原因—結果	
消え去る	きえさる	きえる	さる	1517	a.原因—結果	
消え残る	きえのこる	きえる	のこる	327	c.背景—具現	
消え果てる	きえはてる	きえる	はてる	93	a.原因—結果	
気負い込む	きおいこむ	きおう	こむ	51	a.原因—結果	拘束形態素
気負い立つ	きおいたつ	きおう	たつ	115	a.原因—結果	
着替える	きがえる	きる	かえる	2839	b.手段—目的	
着飾る	きかざる	きる	かざる	1373	b.手段—目的	
聞き飽きる	ききあきる	きく	あきる	1146	a.原因—結果	
聴き漁る	ききあさる	きく	あさる	159	b.手段—目的	
聞き合わせる	ききあわせる	きく	あわせる	116	b.手段—目的	
聞き入る	ききいる	きく	いる	2926	j.V2 補助動詞	拘束形態素
聞き入れる	ききいれる	きく	いれる	1542	b.手段—目的	
聞き置く	ききおく	きく	おく	655	b.手段—目的	
聞き落とす	ききおとす	きく	おとす	446	c.背景—具現	拘束意味
聞き及ぶ	ききおよぶ	きく	およぶ	1047	b.手段—目的	
聞き返す	ききかえす	きく	かえす	2587	j.V2 補助動詞	
聞きかじる	ききかじる	きく	かじる	146	b.手段—目的	
聞き比べる	ききくらべる	きく	くらべる	3276	b.手段—目的	
聞き込む	ききこむ	きく	こむ	3301	j.V2 補助動詞	拘束形態素
聞き従う	ききしたがう	きく	したがう	1351	b.手段—目的	
聞き知る	ききしる	きく	しる	245	a.原因—結果	
聞き過ごす	ききすごす	きく	すごす	163	j.V2 補助動詞	
聴き進む	ききすすむ	きく	すすむ	322	j.V2 補助動詞	
聴き進める	ききすすめる	きく	すすめる	165	j.V2 補助動詞	
聞き捨てる	ききすてる	きく	すてる	61	c.背景—具現	
聞き出す	ききだす	きく	だす	2010	b.手段—目的	
聞きただす	ききただす	きく	ただす	680	b.手段—目的	
聞き違う	ききちがう	きく	ちがう	76	j.V2 補助動詞	

聞き違える	ききちがえる	きく	ちがえる	523	j.V2 補助動詞	拘束形態素
聴き疲れる	ききつかれる	きく	つかれる	372	a.原因—結果	
聞きつける	ききつける	きく	つける	1249	j.V2 補助動詞	
聞き伝える	ききつたえる	きく	つたえる	161	b.手段—目的	
聞きとがめる	ききとがめる	きく	とがめる	408	b.手段—目的	
聞き届ける	ききとどける	きく	とどける	751	b.手段—目的	
聞き取る	ききとる	きく	とる	4648	b.手段—目的	
聞き流す	ききながす	きく	ながす	1772	g.比喩的様態	
聞きなす	ききなす	きく	なす	169	b.手段—目的	
聞き逃す	ききのがす	きく	のがす	2026	c.背景—具現	
聞き惚れる	ききほれる	きく	ほれる	2046	a.原因—結果	
聞き漏らす	ききもらす	きく	もらす	619	c.背景—具現	
聞き分ける	ききわける	きく	わける	3415	b.手段—目的	
着崩す	きくずす	きる	くずす	1337	b.手段—目的	
着崩れる	きくずれる	きる	くずれる	626	a.原因—結果	主語不一致
着比べる	きくらべる	きる	くらべる	79	b.手段—目的	
聞こえ来る	きこえる	きこえる	くる	158	j.V2 補助動詞	
着こなす	きこなす	きる	こなす	2047	j.V2 補助動詞	
着込む	きこむ	きる	こむ	1842	j.V2 補助動詞	拘束形態素
刻み入れる	きざみいれる	きざむ	いれる	189	b.手段—目的	
刻み込む	きざみこむ	きざむ	こむ	1439	b.手段—目的	拘束形態素
刻み出す	きざみだす	きざむ	だす	513	b.手段—目的	
刻みつける	きざみつける	きざむ	つける	1364	b.手段—目的	
築き上げる	きずきあげる	きづく	あげる	1551	b.手段—目的	拘束意味
着せ替える	きせかえる	きせる	かえる	1536	b.手段—目的	
着せかける	きせかける	きせる	かける	333	b.手段—目的	
着せ付ける	きせつける	きせる	つける	197	b.手段—目的	
鍛え上げる	きたえあげる	きたえる	あげる	1406	b.手段—目的	拘束意味
鍛え込む	きたえこむ	きたえる	こむ	201	j.V2 補助動詞	拘束形態素
着付ける	きつける	きる	つける	2549	k.一語	
着流す	きながす	きる	ながす	196	g.比喩的様態	
着膨れる	きぶくれる	きる	ふくれる	168	a.原因—結果	

着回す	きまわす	きる	まわす	1212	j.V2 補助動詞	
決め込む	きめこむ	きめる	こむ	1608	j.V2 補助動詞	拘束形態素
決めつける	きめつける	きめる	つける	2057	j.V2 補助動詞	非分析的
切り上げる	きりあげる	きる	あげる	3206	j.V2 補助動詞	非分析的
切り落とす	きりおとす	きる	おとす	3132	b.手段一目的	
切り下ろす	きりおろす	きる	おろす	909	b.手段一目的	
切り返す	きりかえす	きる	かえす	1380	j.V2 補助動詞	非分析的
切り替える	きりかえる	きる	かえる	2977	b.手段一目的	
切りかかる	きりかかる	きる	かかる	3379	j.V2 補助動詞	
切り替わる	きりかわる	きる	かわる	4020	a.原因一結果	主語不一致
切り刻む	きりきざむ	きる	きざむ	1824	b.手段一目的	
切り崩す	きりくずす	きる	くずす	1517	b.手段一目的	
切り込む	きりこむ	きる	こむ	3119	b.手段一目的	拘束形態素
切り殺す	きりころす	きる	ころす	2178	b.手段一目的	
切り裂く	きりさく	きる	さく	4067	b.手段一目的	
切り下げる	きりさげる	きる	さげる	1634	b.手段一目的	
切り去る	きりさる	きる	さる	110	b.手段一目的	拘束意味
切り進む	きりすすむ	きる	すすむ	465	b.手段一目的	
切り捨てる	きりすてる	きる	すてる	3887	b.手段一目的	
切り揃える	きりそろえる	きる	そろえる	1620	b.手段一目的	
切り倒す	きりたおす	きる	たおす	2533	b.手段一目的	
切り足す	きりたす	きる	たす	251	b.手段一目的	
切り出す	きりだす	きる	だす	2596	b.手段一目的	
切り立つ	きりたつ	きる	たつ	1589	g.比喩的様態	
切り縮める	きりちぢめる	きる	ちぢめる	159	b.手段一目的	
切り継ぐ	きりつぐ	きる	つぐ	241	b.手段一目的	
切りつける	きりつける	きる	つける	3713	j.V2 補助動詞	
切り詰める	きりつめる	きる	つめる	1972	b.手段一目的	
切り整える	きりととのえる	きる	ととのえる	107	b.手段一目的	
切り飛ばす	きりとばす	きる	とばす	1006	b.手段一目的	
切り撮る	きりとる	きる	とる	562	b.手段一目的	
切り取る	きりとる	きる	とる	2494	b.手段一目的	

切り抜く	きりぬく	きる	ぬく	2378	b.手段一目的	
切り抜ける	きりぬける	きる	ぬける	1862	b.手段一目的	
切り離す	きりはなす	きる	はなす	1955	b.手段一目的	
切り払う	きりはらう	きる	はらう	1520	b.手段一目的	
切り開く	きりひらく	きる	ひらく	2092	b.手段一目的	
切り伏せる	きりふせる	きる	ふせる	1242	b.手段一目的	
切り回す	きりまわす	きる	まわす	492	i.V1 接頭辞化	
切り結ぶ	きりむすぶ	きる	むすぶ	1823	b.手段一目的	
切り戻す	きりもどす	きる	もどす	3138	j.V2 補助動詞	
切り分ける	きりわける	きる	わける	1881	b.手段一目的	
切れ上がる	きれあがる	きれる	あがる	583	a.原因一結果	
切れ落ちる	きれおちる	きれる	おちる	342	a.原因一結果	
切れ込む	きれこむ	きれる	こむ	1876	j.V2 補助動詞	拘束形態素
着分ける	きわける	きる	わける	156	b.手段一目的	
食い飽きる	くいあきる	くう	あきる	150	a.原因一結果	
食い上げる	くいあげる	くう	あげる	179	b.手段一目的	
食い漁る	くいあさる	くう	あさる	591	b.手段一目的	
食い荒らす	くいあらす	くう	あらす	1582	b.手段一目的	
悔い改める	くいあらためる	くいる	あらためる	2057	b.手段一目的	
食い歩く	くいあるく	くう	あるく	99	d2.共通目的様態	
食い入る	くいいる	くう	いる	510	k.一語	非分析的, 特殊形態, 拘束形態素
食い切る	くいきる	くう	きる	929	j.V2 補助動詞	拘束意味
食い込む	くいこむ	くう	こむ	2344	k.一語	非合成的, 拘束形態素
食い殺す	くいころす	くう	ころす	1514	b.手段一目的	
食い下がる	くいさがる	くう	さがる	1337	k.一語	非合成的
食いしばる	くいしばる	くう	しばる	2058	b.手段一目的	
食い渋る	くいしぶる	くう	しぶる	838	h. 事象対象	
食い締める	くいしめる	くう	しめる	264	b.手段一目的	
食い倒す	くいたおす	くう	たおす	541	b.手段一目的	
食い倒れる	くいたおれる	くう	たおれる	154	a.原因一結果	
食い違う	くいちがう	くう	ちがう	1589	k.一語	非分析的

食いちぎる	くいちぎる	くう	ちぎる	1364	b.手段一目的	
食い散らかす	くいちらかす	くう	ちらかす	1295	b.手段一目的	
食い散らす	くいちらす	くう	ちらす	358	b.手段一目的	
食いつく	くいつく	くう	つく	1861	b.手段一目的	
食いつなぐ	くいつなぐ	くう	つなぐ	1221	b.手段一目的	
食い潰す	くいつぶす	くう	つぶす	1418	b.手段一目的	
食い詰める	くいつめる	くう	つめる	250	b.手段一目的	
食いとどめる	くいとどめる	くう	とどめる	231	b.手段一目的	
食い止める	くいとめる	くう	とめる	1804	k.一語	非分析的
食い残す	くいのこす	くう	のこす	185	c.背景一具現	
食い延ばす	くいのばす	くう	のばす	73	b.手段一目的	
食いはぐれる	くいはぐれる	くう	はぐれる	534	j.V2 補助動詞	
食い破る	くいやぶる	くう	やぶる	1307	b.手段一目的	
くぐり入る	くぐりいる	くぐる	いる	106	b.手段一目的	拘束形態素
くぐり出す	くぐり出す	くぐる	出す	140	b.手段一目的	
くぐりつける	くぐりつける	くぐる	つける	1730	b.手段一目的	
くぐり抜ける	くぐりぬける	くぐる	ぬける	1574	b.手段一目的	
腐り行く	くさりいく	くさる	いく	180	j.V2 補助動詞	
腐り落ちる	くさりおちる	くさる	おちる	487	a.原因一結果	
腐り果てる	くさりはてる	くさる	はてる	182	j.V2 補助動詞	
崩れ行く	くずれいく	くずれる	いく	702	j.V2 補助動詞	
崩れ落ちる	くずれおちる	くずれる	おちる	1592	a.原因一結果	
崩れ折れる	くずれおれる	くずれる	おれる	108	a.原因一結果	
崩れかかる	くずれかかる	くずれる	かかる	558	j.V2 補助動詞	
崩れ込む	くずれこむ	くずれる	こむ	219	a.原因一結果	拘束形態素
崩れ去る	くずれさる	くずれる	さる	1314	a.原因一結果	
砕き割る	くだきわる	くだく	わる	75	b.手段一目的	
砕け落ちる	くだけおちる	くだける	おちる	147	a.原因一結果	
砕け散る	くだけちる	くだける	ちる	1354	a.原因一結果	
朽ち行く	くちいく	くちる	いく	170	j.V2 補助動詞	
朽ち果てる	くちはてる	くちる	はてる	1080	j.V2 補助動詞	
くつつく	くつつく	くう	つく	4155	k.一語	拘束形態素

くっつける	くっつける	くう	つける	2213	k.一語	拘束形態素
口説き落とす	くどきおとす	くどく	おとす	1759	b.手段-目的	
配り歩く	くばりあるく	くばる	あるく	607	d2.共通目的様態	
組み上がる	くみあがる	くむ	あがる	1549	a.原因-結果	主語不一致
組み上げる	くみあげる	くむ	あげる	610	b.手段-目的	
汲み上げる	くみあげる	くむ	あげる	2010	b.手段-目的	
組み合わさる	くみあわせる	くむ	あわせる	1407	a.原因-結果	主語不一致
組み合わす	くみあわす	くむ	あわす	1056	b.手段-目的	
組み合わせる	くみあわせる	くむ	あわせる	3080	b.手段-目的	
汲み入れる	くみいれる	くむ	いれる	168	b.手段-目的	
組み入れる	くみいれる	くむ	いれる	1763	b.手段-目的	
汲み置く	くみおく	くむ	おく	194	j.V2 補助動詞	
組み替える	くみかえる	くむ	かえる	3585	b.手段-目的	
酌み交わす	くみかわす	くむ	かわす	1532	b.手段-目的	
汲み込む	くみこむ	くむ	こむ	137	b.手段-目的	拘束形態素
組み込む	くみこむ	くむ	こむ	2560	b.手段-目的	拘束形態素
組み敷く	くみしく	くむ	しく	934	b.手段-目的	
汲み出す	くみだす	くむ	だす	1447	b.手段-目的	
組み立てる	くみたてる	くむ	たてる	1774	b.手段-目的	
組み付く	くみつく	くむ	つく	1947	a.原因-結果	
組み付ける	くみつける	くむ	つける	2596	b.手段-目的	
汲み取る	くみとる	くむ	とる	1904	b.手段-目的	
組み伏せる	くみふせる	くむ	ふせる	631	b.手段-目的	
汲み干す	くみほす	くむ	ほす	67	b.手段-目的	
組み戻す	くみもどす	くむ	もどす	145	b.手段-目的	
組み分ける	くみわける	くむ	わける	105	b.手段-目的	
食らい込む	くらいこむ	くろう	こむ	144	j.V2 補助動詞	拘束形態素
食らいつく	くらいつく	くろう	つく	1382	a.原因-結果	
繰り上がる	くりあがる	くる	あがる	2134	a.原因-結果	主語不一致, 拘束形態素
繰り上げる	くりあげる	くる	あげる	2051	b.手段-目的	拘束形態素
繰り合わせる	くりあわせる	くる	あわせる	59	b.手段-目的	拘束形態素

繰り入れる	くりいれる	くる	いれる	2084	b.手段一目的	拘束形態素
繰り返す	くりかえず	くる	かえず	2919	k.一語	非分析的, 拘束形態素
繰り替える	くりかえる	くる	かえる	144	b.手段一目的	拘束形態素
繰り越す	くりこす	くる	こす	1808	b.手段一目的	拘束形態素
繰り込む	くりこむ	くる	こむ	535	b.手段一目的	拘束形態素
繰り下がる	くりさがる	くる	さがる	851	a.原因一結果	主語不一致, 拘束形態素
繰り下げる	くりさげる	くる	さげる	1729	b.手段一目的	拘束形態素
繰り出す	くりだす	くる	だす	2584	b.手段一目的	拘束形態素
くり抜く	くりぬく	くる	ぬく	2140	b.手段一目的	拘束形態素
繰り延べる	くりのべる	くる	のべる	1430	k.一語	拘束形態素
繰り広がる	くりひろがる	くる	ひろがる	175	a.原因一結果	主語不一致, 拘束形態素
繰り広げる	くりひろげる	くる	ひろげる	1729	b.手段一目的	非合成的, 拘束形態素
繰り回す	くりまわす	くる	まわす	920	b.手段一目的	拘束形態素
繰り戻す	くりもどす	くる	もどす	151	b.手段一目的	拘束形態素
狂い咲く	くるいざく	くるう	さく	588	g.比喩的様態	
狂い死ぬ	くるいしぬ	くるう	しぬ	287	a.原因一結果	
狂い泣く	くるいなく	くるう	なく	148	g.比喩的様態	
苦しみ悩む	くるしみなやむ	くるしむ	なやむ	607	e1.共通原因事象	
苦しみもがく	くるしみもがく	くるしむ	もがく	587	e1.共通原因事象	
苦しみ悶える	くるしみもだえる	くるしむ	もだえる	345	e1.共通原因事象	
くるみ込む	くるみこむ	くるむ	こむ	210	b.手段一目的	拘束形態素
暮れ行く	くれいく	くれる	いく	1263	j.V2 補助動詞	
暮れ残る	くれのこる	くれる	のこる	478	c.背景一具現	
加え合わせる	くわえあわせる	くわえる	あわせる	371	b.手段一目的	
加え入れる	くわえいれる	くわえる	いれる	160	b.手段一目的	
くわえ込む	くわえこむ	くわえる	こむ	1093	b.手段一目的	拘束形態素
蹴落とす	けおとす	ける	おとす	2049	b.手段一目的	
消し込む	けしこむ	けす	こむ	1791	j.V2 補助動詞	拘束形態素
消し去る	けしさる	けす	さる	1823	b.手段一目的	拘束意味
消し飛ぶ	けしとぶ	けす	とぶ	1446	a.原因一結果	

消し止める	けしとめる	けす	とめる	522	b.手段一目的	
削り上げる	けずりあげる	けずる	あげる	121	b.手段一目的	
削り落とす	けずりおとす	けずる	おとす	1718	b.手段一目的	
削り切る	けずりきる	けずる	きる	595	b.手段一目的	
削り込む	けずりこむ	けずる	こむ	1404	b.手段一目的	拘束形態素
削り殺す	けずりころす	けずる	ころす	368	b.手段一目的	
削り出す	けずりだす	けずる	だす	1845	b.手段一目的	
削り飛ばす	けずりとばす	けずる	とばす	94	b.手段一目的	
削り取る	けずりとる	けずる	とる	1931	b.手段一目的	
蹴散らかす	けちらかす	ける	ちらかす	485	b.手段一目的	
蹴散らす	けちらす	ける	ちらす	1615	b.手段一目的	
蹴飛ばす	けとばす	ける	とばす	1352	b.手段一目的	
蹴破る	けやぶる	ける	やぶる	1260	b.手段一目的	
蹴り開ける	けりあける	ける	あける	189	b.手段一目的	
蹴り上げる	けりあげる	ける	あげる	773	b.手段一目的	
蹴り入れる	けりいれる	ける	いれる	1074	b.手段一目的	
蹴り落とす	けりおとす	ける	おとす	1017	b.手段一目的	
蹴り下ろす	けりおろす	ける	おろす	101	b.手段一目的	
蹴り返す	けりかえす	ける	かえす	846	j.V2 補助動詞	
蹴りかかる	けりかかる	ける	かかる	367	j.V2 補助動詞	
蹴り砕く	けりくだく	ける	くだく	114	b.手段一目的	
蹴り込む	けりこむ	ける	こむ	1965	b.手段一目的	拘束形態素
蹴り転がす	けりころがす	ける	ころがす	200	b.手段一目的	
蹴り殺す	けりころす	ける	ころす	744	b.手段一目的	
蹴り壊す	けりこわす	ける	こわす	168	b.手段一目的	
蹴り倒す	けりたおす	ける	たおす	1172	b.手段一目的	
蹴り出す	けりだす	ける	だす	1588	b.手段一目的	
蹴りつける	けりつける	ける	つける	1220	b.手段一目的	
蹴り潰す	けりつぶす	ける	つぶす	113	b.手段一目的	
蹴り飛ばす	けりとばす	ける	とばす	1692	b.手段一目的	
蹴り破る	けりやぶる	ける	やぶる	204	b.手段一目的	
蹴り分ける	けりわける	ける	わける	102	b.手段一目的	

恋い焦がれる	こいこがれる	こう	こがれる	953	a.原因—結果	拘束形態素
恋い慕う	こいしたう	こう	したう	952	e1.共通原因事象	
請い願う	こいねがう	こう	ねがう	250	b.手段—目的	
乞い願う	こいねがう	こう	ねがう	333	b.手段—目的	
請い求める	こいもとめる	こう	もとめる	139	b.手段—目的	
肥え太る	こえふとる	こえる	ふとる	816	f.並列関係	
凍りつく	こおりつく	こおる	つく	1841	j.V2 補助動詞	
漕ぎ上がる	こぎあがる	こぐ	あがる	77	a.原因—結果	
漕ぎ行く	こぎいく	こぐ	いく	123	d2.共通目的の様態	
こき下ろす	こきおろす	こく	おろす	1479	b.手段—目的	非合成的
漕ぎ下る	こぎくだる	こぐ	くだる	95	d2.共通目的の様態	
漕ぎ進む	こぎすすむ	こぐ	すすむ	463	d2.共通目的の様態	
漕ぎ出す	こぎだす	こぐ	だす	1657	b.手段—目的	
こき使う	こきつかう	こく	つかう	1340	b.手段—目的	非合成的
漕ぎ着ける	こぎつける	こぐ	つける	1397	a.原因—結果	
漕ぎ出る	こぎでる	こぐ	でる	63	d2.共通目的の様態	
漕ぎ渡る	こぎわたる	こぐ	わたる	108	d2.共通目的の様態	
焦げつく	こげつく	こげる	つく	591	a.原因—結果	
凍え死ぬ	こごえしぬ	こごえる	しぬ	549	a.原因—結果	
凍えつく	こごえつく	こごえる	つく	82	a.原因—結果	
こじ開ける	こじあける	こず	あける	1520	b.手段—目的	拘束形態素
こし入れる	こしいれる	こす	いれる	120	b.手段—目的	
こし出す	こしだす	こす	だす	76	b.手段—目的	
こじつける	こじつける		つける	1401	k.一語	非分析的
こし取る	こしとる	こす	とる	560	b.手段—目的	
こすり上げる	こすりあげる	こする	あげる	530	b.手段—目的	
こすり洗う	こすりあらう	こする	あらう	98	b.手段—目的	
こすり合わせる	こすりあわせる	こする	あわせる	1348	b.手段—目的	
こすり落とす	こすりおとす	こする	おとす	1288	b.手段—目的	
こすり付ける	こすりつける	こする	つける	1400	b.手段—目的	
こすり取る	こすりとる	こする	とる	641	b.手段—目的	

小突き回す	こづきまわす	こづく	まわす	127	b.手段一目的	
こね上げる	こねあげる	こねる	あげる	118	b.手段一目的	
こね合わせる	こねあわせる	こねる	あわせる	130	b.手段一目的	
こねくる	こねくる	こねる	くる	385	k.一語	非分析的
こね回す	こねまわす	こねる	まわす	1212	j.V2 補助動詞	
こびへつらう	こびへつらう	こびる	へつらう	750	b.手段一目的	
こびりつく	こびりつく	こびる	つく	1970	a.原因一結果	拘束形態素
こぼれ落ちる	こぼれおちる	こぼれる	おちる	1442	a.原因一結果	
こぼれ出る	こぼれでる	こぼれる	でる	1190	a.原因一結果	
困り抜く	こまりぬく	こまる	ぬく	58	j.V2 補助動詞	拘束意味
困り果てる	こまりはてる	こまる	はてる	1269	j.V2 補助動詞	
混み合う	こみあう	こむ	あう	1683	k.一語	拘束意味
込み上げる	こみあげる	こむ	あげる	2004	k.一語	非分析的
込み入る	こみいる	こむ	いる	192	j.V2 補助動詞	拘束形態素
凝り固まる	こりかたまる	こる	かたまる	1170	a.原因一結果	
転がり落ちる	ころがりおちる	ころがる	おちる	1446	d1.共通原因様態	
転がり込む	ころがりこむ	ころがる	こむ	1607	a.原因一結果	拘束形態素
転がり出る	ころがりでる	ころがる	でる	536	a.原因一結果	
転がり回る	ころがりまわる	ころがる	まわる	339	d1.共通原因様態	
転げ落ちる	ころげおちる	ころげる	おちる	1577	d1.共通原因様態	
転げ込む	ころげこむ	ころげる	こむ	150	a.原因一結果	拘束形態素
転げ出る	ころげでる	ころげる	でる	87	a.原因一結果	
転げ回る	ころげまわる	ころげる	まわる	1236	d1.共通原因様態	
壊れ行く	こわれいく	こわれる	いく	237	j.V2 補助動詞	
冴え返る	さえかえる	さえる	かえる	456	j.V2 補助動詞	拘束意味
冴え渡る	さえわたる	さえる	わたる	1417	j.V2 補助動詞	
騒ぎ立つ	さがぎたつ	さわぐ	たつ	480	j.V2 補助動詞	
探し当てる	さがしあてる	さがす	あてる	1469	b.手段一目的	
探し歩く	さがしあるく	さがす	あるく	1746	d2.共通目的様態	
探し出す	さがしだす	さがす	だす	3246	b.手段一目的	
探し回る	さがしまわる	さがす	まわる	1512	d2.共通目的様態	
探し求める	さがしもとめる	さがす	もとめる	2933	e2.共通目的事象	

咲き上がる	さきあがる	さく	あがる	164	j.V2 補助動詞	拘束意味
咲き薫る	さきかおる	さく	かおる	104	a.原因—結果	
咲き競う	さききそう	さく	きそう	1378	g.比喩的様態	
咲きこぼれる	さきこぼれる	さく	こぼれる	906	g.比喩的様態	
咲き進む	さきすすむ	さく	すすむ	1218	j.V2 補助動詞	
咲き揃う	さきそろう	さく	そろう	1143	a.原因—結果	
咲き散る	さきちる	さく	ちる	241	c.背景—具現	
咲き継ぐ	さきつぐ	さく	つぐ	116	b.手段—目的	
咲き出る	さきでる	さく	でる	226	a.原因—結果	
咲き並ぶ	さきならぶ	さく	ならぶ	168	a.原因—結果	
咲き匂う	さきにおう	さく	におう	357	a.原因—結果	
咲き残る	さきのこる	さく	のこる	816	e1.共通原因事象	
咲き開く	さきひらく	さく	ひらく	121	a.原因—結果	
咲き広がる	さきひろがる	さく	ひろがる	156	a.原因—結果	
咲き誇る	さきほこる	さく	ほこる	1932	g.比喩的様態	
咲き乱れる	さきみだれる	さく	みだれる	1699	g.比喩的様態	
咲き分ける	さきわける	さく	わける	343	b.手段—目的	
探り当てる	さぐりあてる	さぐる	あてる	1400	b.手段—目的	
探り歩く	さぐりあるく	さぐる	あるく	292	d2.共通目的様態	
探り入れる	さぐりいれる	さぐる	いれる	228	b.手段—目的	
探り出す	さぐりだす	さぐる	だす	1465	b.手段—目的	
探り回る	さぐりまわる	さぐる	まわる	114	d2.共通目的様態	
下げ渋る	さげしぶる	さげる	しぶる	1404	h. 事象対象	
下げ止まる	さげどまる	さげる	とまる	1788	l.逆形成	
叫び返す	さけびかえす	さけぶ	かえす	409	j.V2 補助動詞	
叫び狂う	さけびくるう	さけぶ	くるう	175	g.比喩的様態	
叫び散らす	さけびちらす	さけぶ	ちらす	197	j.V2 補助動詞	拘束意味
叫び回る	さけびまわる	さけぶ	まわる	109	d2.共通目的様態	
下げ渡す	さげわたす	さげる	わたす	746	b.手段—目的	
支え上げる	ささえあげる	ささえる	あげる	113	b.手段—目的	
支え励ます	ささえはげます	ささえる	はげます	115	e2.共通目的事象	
ささくれ立つ	ささくれだつ	ささくれ	たつ	1090	j.V2 補助動詞	

		る				
捧げ持つ	ささげもつ	ささげる	もつ	706	e2.共通目的事象	
囁きかける	ささやきかける	ささやく	かける	1450	j.V2 補助動詞	
刺さり込む	ささりこむ	ささる	こむ	102	a.原因—結果	拘束形態素
差し上げる	さしあげる	さす	あげる	1852	i.V1 接頭辞化	
差し当たる	さしあたる	さす	あたる	78	a.原因—結果	
差し入る	さしいる	さす	いる	274	a.原因—結果	拘束形態素
差し入れる	さしいれる	さす	いれる	1200	b.手段—目的	非合成的
刺し穿つ	さしうがっ	さす	うがっ	242	b.手段—目的	
差し置く	さしおく	さす	おく	683	k.一語	
差し押さえる	さしおさえる	さす	おさえる	683	i.V1 接頭辞化	非分析的
刺し返す	さしかえす	さす	かえす	115	j.V2 補助動詞	
差し替える	さしかえる	さす	かえる	4075	i.V1 接頭辞化	
差し掛かる	さしかかる	さす	かかる	1735	j.V2 補助動詞	
差しかける	さしかける	さす	かける	422	b.手段—目的	
差し替わる	さしかわる	さす	かわる	660	a.原因—結果	主語不一致
差し切る	さしきる	さす	きる	1421	j.V2 補助動詞	拘束意味
差し込む	さしこむ	さす	こむ	5989	a.原因—結果	拘束形態素
刺し殺す	さしころす	さす	ころす	1337	b.手段—目的	
差し障る	さしさわる	さす	さわる	1434	i.V1 接頭辞化	非分析的
指し示す	さししめす	さす	しめす	2008	b.手段—目的	
差し迫る	さしせまる	さす	せまる	1142	i.V1 接頭辞化	
差し出す	さしだす	さす	だす	2338	b.手段—目的	
差し立てる	さしたてる	さす	たてる	262	b.手段—目的	
差し違える	さしちがえる	さす	ちがえる	1529	j.V2 補助動詞	拘束形態素
差し支える	さしつかえる	さす	つかえる	1484	k.一語	拘束形態素
差し遣わす	さしつかわす	さす	つかわす	76	i.V1 接頭辞化	
刺し貫く	さしつらぬく	さす	つらぬく	1082	b.手段—目的	
差し出る	さしでる	さす	でる	71	k.一語	非分析的
刺し通す	さしとおす	さす	とおす	337	b.手段—目的	
差し届く	さしとどく	さす	とどく	148	a.原因—結果	
差し止める	さしとめる	さす	とめる	1524	i.V1 接頭辞化	

差し伸ばす	さしのばす	さす	のばす	218	b.手段一目的	
差し伸べる	さしのべる	さす	のべる	1699	b.手段一目的	
差し昇る	さしのぼる	さす	のぼる	149	d1.共通原因様態	
差し挟む	さしはさむ	さす	はさむ	1300	b.手段一目的	
差し控える	さしひかえる	さす	ひかえる	1510	i.V1 接頭辞化	非分析的
差し引く	さしひく	さす	ひく	2401	i.V1 接頭辞化	非分析的
差し招く	さしまねく	さす	まねく	105	i.V1 接頭辞化	
差し回す	さしまわす	さす	まわす	83	i.V1 接頭辞化	
差し向ける	さしむける	さす	むける	1517	b.手段一目的	非合成的
差し戻す	さしもどす	さす	もどす	1841	j.V2 補助動詞	
差し渡す	さしわたす	さす	わたす	430	i.V1 接頭辞化	
さすり上げる	さすりあげる	さする	あげる	289	b.手段一目的	
誘い入れる	さそい入れる	さそう	いれる	768	b.手段一目的	
誘い返す	さそいかえす	さそう	かえす	97	j.V2 補助動詞	
誘いかける	さそいかける	さそう	かける	1109	j.V2 補助動詞	
誘い込む	さそいこむ	さそう	こむ	1513	b.手段一目的	拘束形態素
誘い出す	さそいだす	さそう	だす	1545	b.手段一目的	
錆びつく	さびつく	さびる	つく	271	a.原因一結果	
寂れ行く	さびれいく	さびれる	いく	137	j.V2 補助動詞	
さまよい歩く	さまよいあるく	さまよう	あるく	989	d1.共通原因様態	
さまよい出る	さまよいでる	さまよう	でる	134	a.原因一結果	
さらけ出す	さらけだす	さらける	だす	1647	b.手段一目的	拘束形態素
晒し上げる	さらしあげる	さらす	あげる	1293	b.手段一目的	
晒し出す	さらしだす	さらす	だす	251	b.手段一目的	
去り行く	さりいく	さる	いく	1443	a.原因一結果	
騒ぎ立てる	さわぎたてる	さわぐ	たてる	1406	b.手段一目的	
騒ぎ回る	さわぎまわる	さわぐ	まわる	122	d1.共通原因様態	
ざわめき立つ	ざわめきたつ	ざわめく	たつ	685	j.V2 補助動詞	
仕上がる	しあがる		あがる	2068	k.一語	非分析的, 拘束形態素
仕上げる	しあげる	する	あげる	2533	k.一語	非分析的, 拘束形態素
仕掛ける	しかける	する	かける	2966	k.一語	非分析的, 拘束形態素
しがみつく	しがみつく		つく	2486	a.原因一結果	拘束形態素

叱りつける	しかりつける	しかる	つける	1388	j.V2 補助動詞	
叱り飛ばす	しかりとばす	しかる	とばす	1051	b.手段一目的	
敷き込む	しきこむ	しく	こむ	1962	j.V2 補助動詞	拘束形態素
敷き詰める	しきつめる	しく	つめる	2352	b.手段一目的	
敷き並べる	しきならべる	しく	ならべる	613	b.手段一目的	
しけこむ	しけこむ		こむ	507	k.一語	非分析的, 拘束形態素
しごき上げる	しごきあげる	しごく	あげる	488	b.手段一目的	
しごき出す	しごきだす	しごく	だす	605	b.手段一目的	
仕込む	しこむ	する	こむ	2575	k.一語	非分析的, 拘束形態素
静まり返る	しずまりかえる	しずまる	かえる	1276	j.V2 補助動詞	拘束意味
沈み行く	しずみいく	しずむ	いく	1589	a.原因一結果	
沈み込む	しずみこむ	しずむ	こむ	2272	a.原因一結果	拘束形態素
沈め込む	しずめこむ	しずめる	こむ	106	b.手段一目的	拘束形態素
仕損じる	しそんじる		そんじる	1086	j.V2 補助動詞	拘束形態素
慕い求める	したいもとめる	したう	もとめる	332	e1.共通原因事象	
慕い寄る	したいよる	したう	よる	172	b.手段一目的	
滴り落ちる	したたりおちる	したたる	おちる	1376	a.原因一結果	
仕立て上がる	したてあがる	したてる	あがる	545	a.原因一結果	主語不一致
仕立て上げる	したてあげる	したてる	あげる	1631	b.手段一目的	拘束意味
仕立てる	したてる		たてる	2107	k.一語	非分析的, 拘束形態素
し遂げる	しとげる	する	とげる	77	b.手段一目的	
仕留める	しとめる	する	とめる	2082	k.一語	非分析的, 拘束形態素
死に行く	しにいく	しぬ	いく	2403	j.V2 補助動詞	
死に急ぐ	しにいそぐ	しぬ	いそぐ	634	h. 事象対象	
死に遅れる	しにおくれる	しぬ	おくれる	53	h. 事象対象	
死に絶える	しにたえる	しぬ	たえる	1339	a.原因一結果	
死に別れる	しにわかれる	しぬ	わかれる	536	a.原因一結果	
忍び会う	しのびあう	しのぶ	あう	84	e1.共通原因事象	
忍び入る	しのびいる	しのぶ	いる	244	d2.共通目的様態	拘束形態素
忍び込む	しのびこむ	しのぶ	こむ	1722	d2.共通目的様態	拘束形態素
忍び出る	しのびでる	しのぶ	でる	152	k.一語	
忍び泣く	しのびなく	しのぶ	なく	92	e1.共通原因事象	

忍び寄る	しのびよる	しのぶ	よる	1468	d2.共通目的様態	
支払う	しはらう		はらう	4414	k.一語	非分析的, 拘束形態素
縛り上げる	しばりあげる	しばる	あげる	1519	j.V2 補助動詞	拘束意味
縛り付ける	しばりつける	しばる	つける	1601	b.手段一目的	
絞り上げる	しぼりあげる	しぼる	あげる	1046	j.V2 補助動詞	
絞り入れる	しぼりいれる	しぼる	いれる	410	b.手段一目的	
絞り込む	しぼりこむ	しぼる	こむ	1759	b.手段一目的	拘束形態素
絞り出す	しぼりだす	しぼる	だす	1544	b.手段一目的	
搾り取る	しぼりとる	しぼる	とる	2296	b.手段一目的	
仕舞い込む	しまいこむ	しまう	こむ	1127	b.手段一目的	拘束形態素
染み入る	しみいる	しむ	いる	1246	j.V2 補助動詞	拘束形態素
染み込む	しみこむ	しみる	こむ	1617	a.原因一結果	拘束形態素
染み出す	しみだす	しむ	だす	719	a.原因一結果	
染み付く	しみつく	しみる	つく	1454	a.原因一結果	
染み付ける	しみつける	しむ	つける	238	b.手段一目的	主語不一致
染み出る	しみでる	しむ	でる	1181	a.原因一結果	
染みとおる	しみとおる	しむ	とおる	301	a.原因一結果	
染み渡る	しみわたる	しむ	わたる	749	j.V2 補助動詞	
仕向ける	しむける		むける	1247	k.一語	非分析的, 拘束形態素
締め上げる	しめあげる	しめる	あげる	2531	j.V2 補助動詞	拘束意味
絞め落とす	しめおとす	しめる	おとす	583	b.手段一目的	
締め固める	しめかためる	しめる	かためる	1431	b.手段一目的	
締め切る	しめきる	しめる	きる	2589	j.V2 補助動詞	非合成的, 拘束意味
締めくくる	しめくくる	しめる	くくる	1717	b.手段一目的	
締め込む	しめこむ	しめる	こむ	2192	b.手段一目的	拘束形態素
絞め殺す	しめころす	しめる	ころす	1310	b.手段一目的	
示し合わす	しめしあわす	しめす	あわす	65	b.手段一目的	
示し合わせる	しめしあわせる	しめす	あわせる	127	b.手段一目的	
締め出す	しめだす	しめる	だす	1540	b.手段一目的	
締め付ける	しめつける	しめる	つける	2138	b.手段一目的	
しゃがみ込む	しゃがみこむ	しゃがむ	こむ	1280	a.原因一結果	拘束形態素
しゃくり上げ	しゃくりあげる	しゃくる	あげる	671	b.手段一目的	拘束形態素

る						
しゃぶり上げる	しゃぶりあげる	しゃぶる	あげる	92	b.手段一目的	
しゃぶりつく	しゃぶりつく	しゃぶる	つく	781	a.原因一結果	
しゃべりかける	しゃべりかける	しゃべる	かける	1222	j.V2 補助動詞	
しゃべり散らす	しゃべりちらす	しゃべる	ちらす	145	j.V2 補助動詞	拘束意味
しゃべり疲れ	しゃべりつかれる	しゃべる	つかれる	77	a.原因一結果	
じゃれかかる	じゃれかかる	じゃれる	かかる	138	j.V2 補助動詞	
洒落込む	しゃれこむ	しゃれる	こむ	1322	j.V2 補助動詞	拘束形態素
じゃれつく	じゃれつく	じゃれる	つく	1287	a.原因一結果	
しょげ返る	しょげかえる	しょげる	かえる	95	j.V2 補助動詞	拘束意味
調べ上げる	しらべあげる	しらべる	あげる	1407	j.V2 補助動詞	拘束意味
調べ出す	しらべだす	しらべる	だす	436	b.手段一目的	
調べ回る	しらべまわる	しらべる	まわる	135	d2.共通目的の形態	
知れ渡る	しれわたる	しれる	わたる	1511	j.V2 補助動詞	拘束形態素
仕分ける	しわける		わける	2556	k.一語	非分析的, 拘束形態素
信じ込む	しんじこむ	しんずる	こむ	1331	j.V2 補助動詞	拘束形態素
吸い上がる	すいあがる	すう	あがる	101	a.原因一結果	主語不一致
吸い上げる	すいあげる	すう	あげる	2011	b.手段一目的	
吸い込む	すいこむ	すう	こむ	2758	b.手段一目的	拘束形態素
吸い殺す	すいころす	すう	ころす	98	b.手段一目的	
吸い出す	すいだす	すう	だす	2070	b.手段一目的	
吸い付く	すいつく	すう	つく	1481	b.手段一目的	
吸い付ける	すいつける	すう	つける	1261	b.手段一目的	
吸い取る	すいとる	すう	とる	2325	b.手段一目的	
吸い寄せる	すいよせる	すう	よせる	1392	b.手段一目的	
据え置く	すえおく	すえる	おく	2097	b.手段一目的	
据え付ける	すえつける	すえる	つける	1944	b.手段一目的	
透かし見る	すかしみる	すかす	みる	517	b.手段一目的	

すがりつく	すがりつく	すがる	つく	1302	a.原因—結果	
過ぎ行く	すぎいく	すぎる	いく	1299	a.原因—結果	
好き好む	好きこのむ	すく	このむ	233	f.並列関係	
過ぎ去る	すぎさる	すぎる	さる	2028	a.原因—結果	
透き通る	すきとおる	すく	とおる	1686	j.V2 補助動詞	拘束形態素
救い上げる	すくいあげる	すくう	あげる	916	b.手段—目的	
すくい上げる	すくいあげる	すくう	あげる	1468	b.手段—目的	
すくい入れる	すくい入れる	すくう	入れる	92	b.手段—目的	
すくい出す	すき出す	すくう	出す	259	b.手段—目的	
救い出す	すき出す	すくう	出す	1650	b.手段—目的	
すくい取る	すきとる	すくう	とる	1401	b.手段—目的	
すくみ上がる	すくみあがる	すくむ	あがる	173	j.V2 補助動詞	拘束意味
すげ替える	すげかえる	すげる	かえる	1114	b.手段—目的	拘束形態素
すげ変わる	すげかわる	すげる	かわる	180	a.原因—結果	拘束形態素
進み行く	すすみいく	すすむ	いく	849	a.原因—結果	
進み入る	すすみいる	すすむ	いる	319	a.原因—結果	拘束形態素
進み出る	すすみでる	すすむ	でる	1804	a.原因—結果	
すすり上げる	すすりあげる	すする	あげる	392	b.手段—目的	
すすり込む	すすりこむ	すする	こむ	248	b.手段—目的	拘束形態素
すすり泣く	すすりなく	すする	なく	1253	e1.共通原因事象	
廃れ行く	すたれいく	すたれる	いく	287	j.V2 補助動詞	
捨て置く	すておく	すてる	おく	1282	j.V2 補助動詞	
捨て去る	すてさる	すてる	さる	1675	b.手段—目的	拘束意味
滑り落ちる	すべりおちる	すべる	おちる	1569	a.原因—結果	
滑り落とす	すべりおとす	すべる	おとす	338	b.手段—目的	主語不一致
滑り下りる	すべりおりる	すべる	おりる	2348	d2.共通目的様態	
滑り込む	すべりこむ	すべる	こむ	1486	a.原因—結果	拘束形態素
滑り出る	すべりでる	すべる	でる	1011	g.比喩の様態	
滑り止まる	すべりどまる	すべる	とまる	116	j.V2 補助動詞	
滑り抜ける	すべりぬける	すべる	ぬける	201	d2.共通目的様態	
住み替える	すみかえる	すむ	かえる	1677	b.手段—目的	
住み替わる	すみかわる	すむ	かわる	72	a.原因—結果	

澄み切る	すみきる	すむ	きる	222	j.V2 補助動詞	拘束意味
住み暮らす	すみくらす	すむ	くらす	267	e1.共通原因事象	
住み込む	すみこむ	すむ	こむ	1202	j.V2 補助動詞	拘束形態素
住み着く	すみつく	すむ	つく	1839	a.原因—結果	
住み継ぐ	すみつぐ	すむ	つぐ	916	b.手段—目的	
住みなす	すみなす	すむ	なす	244	j.V2 補助動詞	
住み分ける	すみわける	すむ	わける	840	b.手段—目的	
澄み渡る	すみわたる	すむ	わたる	1441	j.V2 補助動詞	
刷り上がる	すりあがる	する	あがる	309	a.原因—結果	
ずり上がる	ずりあがる	ずる	あがる	909	a.原因—結果	拘束形態素
刷り上げる	すりあげる	する	あげる	284	b.手段—目的	
擦り上げる	すりあげる	する	あげる	1163	b.手段—目的	
ずり上げる	ずりあげる	ずる	あげる	535	b.手段—目的	拘束形態素
擦り合わせる	すりあわせる	する	あわせる	1368	b.手段—目的	
すり入れる	すりいれる	する	いれる	116	b.手段—目的	
ずり落ちる	ずりおちる	ずる	おちる	1074	a.原因—結果	拘束形態素
擦り落とす	すりおとす	する	おとす	568	b.手段—目的	
擦り下ろす	すりおろす	する	おろす	87	b.手段—目的	
ずり下ろす	ずりおろす	ずる	おろす	263	b.手段—目的	拘束形態素
すり替える	すりかえる	する	かえる	1836	b.手段—目的	
刷り重ねる	すりかさねる	する	かさねる	155	b.手段—目的	
すり替わる	すりかわる	する	かわる	1230	a.原因—結果	
擦り切る	すりきる	する	きる	278	b.手段—目的	
擦り切れる	すりきれる	する	きれる	1395	a.原因—結果	主語不一致
擦り込む	すりこむ	する	こむ	1495	b.手段—目的	拘束形態素
刷り込む	すりこむ	する	こむ	1697	b.手段—目的	拘束形態素
ずり下がる	ずりさがる	ずる	さがる	1218	a.原因—結果	
刷り出す	すりだす	する	だす	279	b.手段—目的	
擦り立てる	すりたてる	する	たてる	110	b.手段—目的	
擦り付ける	すりつける	する	つける	1403	b.手段—目的	
播り潰す	すりつぶす	する	つぶす	185	b.手段—目的	
擦り取る	すりとる	する	とる	700	b.手段—目的	

擦り抜ける	すりぬける	する	ぬける	540	a.原因—結果	非分析的
磨り減らす	すりへらす	する	へらす	401	b.手段—目的	
磨り減る	すりへる	する	へる	2297	a.原因—結果	
すり混ぜる	すりまぜる	する	まぜる	1305	b.手段—目的	
擦りむく	すりむく	する	むく	472	b.手段—目的	
擦りむける	すりむける	する	むける	350	a.原因—結果	主語不一致
すり寄せる	すりよせる	する	よせる	678	b.手段—目的	
擦り寄る	すりよる	する	よる	1501	b.手段—目的	非合成的
ずれ動く	ずれうごく	ずれる	うごく	429	a.原因—結果	
ずれ落ちる	ずれおちる	ずれる	おちる	923	a.原因—結果	
ずれ込む	ずれこむ	ずれる	こむ	1558	a.原因—結果	拘束形態素
擦れ違う	すれちがう	する	ちがう	1554	j.V2 補助動詞	非分析的
座り比べる	すわりくらべる	すわる	くらべる	74	b.手段—目的	
座り込む	すわりこむ	すわる	こむ	1636	a.原因—結果	拘束形態素
背負い込む	せおいこむ	せおう	こむ	1511	j.V2 補助動詞	拘束形態素
急き込む	せきこむ	せく	こむ	179	j.V2 補助動詞	拘束形態素
咳き込む	せきこむ	せく	こむ	1846	j.V2 補助動詞	拘束形態素
急き立てる	せきたてる	せく	たてる	568	b.手段—目的	拘束形態素
せき止める	せきとめる	せく	とめる	1615	b.手段—目的	拘束形態素
せつつく	せつつく	せむ	つく	1081	k.一語	非分析的, 拘束形態素
せびり取る	せびりとる	せびる	とる	220	b.手段—目的	
迫り来る	せまりくる	せまる	くる	1561	j.V2 補助動詞	
攻め上がる	せめあがる	せめる	あがる	1529	d2.共通目的様態	
攻めあぐむ	せめあぐむ	せめる	あぐむ	706	j.V2 補助動詞	拘束形態素
責め上げる	せめあげる	せめる	あげる	219	j.V2 補助動詞	拘束意味
攻め急ぐ	せめいそぐ	せめる	いそぐ	135	j.V2 補助動詞	
攻め入る	せめいる	せめる	いる	1680	b.手段—目的	拘束形態素
責め落とす	せめおとす	せめる	おとす	80	b.手段—目的	
攻め落とす	せめおとす	せめる	おとす	1727	b.手段—目的	
攻め返す	せめかえす	せめる	かえす	170	j.V2 補助動詞	
攻めかかる	せめかかる	せめる	かかる	615	j.V2 補助動詞	
攻めかける	せめかける	せめる	かける	112	j.V2 補助動詞	

攻め勝つ	せめかつ	せめる	かつ	160	b.手段一目的	
攻め崩す	せめくずす	せめる	くずす	90	b.手段一目的	
攻め下る	せめくだる	せめる	くだる	143	d2.共通目的様態	
攻め来る	せめくる	せめる	くる	315	j.V2 補助動詞	
攻め込む	せめこむ	せめる	こむ	2152	b.手段一目的	拘束形態素
責め殺す	せめころす	せめる	ころす	80	b.手段一目的	
攻め殺す	せめころす	せめる	ころす	111	b.手段一目的	
責めさいなむ	せめさいなむ	せめる	さいなむ	839	f.並列関係	
責め倒す	せめたおす	せめる	たおす	71	b.手段一目的	
攻め倒す	せめたおす	せめる	たおす	142	b.手段一目的	
責め立てる	せめたてる	せめる	たてる	1351	j.V2 補助動詞	
攻め立てる	せめたてる	せめる	たてる	1442	j.V2 補助動詞	
責めつける	せめつける	せめる	つける	169	j.V2 補助動詞	
攻め潰す	せめつぶす	せめる	つぶす	100	b.手段一目的	
攻め取る	せめとる	せめる	とる	781	b.手段一目的	
攻め抜く	せめぬく	せめる	ぬく	778	j.V2 補助動詞	拘束意味
攻め上る	せめのぼる	せめる	のぼる	642	d2.共通目的様態	
攻め滅ぼす	せめほろぼす	せめる	ほろぼす	797	b.手段一目的	
攻め寄せる	せめよせる	せめる	よせる	1338	b.手段一目的	
攻め寄る	せめよる	せめる	よる	242	d2.共通目的様態	
競り上がる	せりあがる	せる	あがる	396	a.原因一結果	
迫り上がる	せりあがる	せる	あがる	587	a.原因一結果	
競り上げる	せりあげる	せる	あげる	87	b.手段一目的	
迫り上げる	せりあげる	せる	あげる	153	b.手段一目的	
競り落とす	せりおとす	せる	おとす	1593	b.手段一目的	
競り勝つ	せりかつ	せる	かつ	1452	c.背景一具現	
せり出す	せりだす	せる	だす	2953	b.手段一目的	
競り負ける	せりまける	せる	まける	1035	c.背景一具現	
煎じ出す	せんじだす	せんじる	だす	137	b.手段一目的	
煎じ詰める	せんじつめる	せんじる	つめる	454	b.手段一目的	
添い遂げる	そいとげる	そう	とげる	1327	b.手段一目的	
そぎ落とす	そぎおとす	そぐ	おとす	1477	b.手段一目的	

そぎ切る	そぎきる	そぐ	きる	116	b.手段-目的	
そぎ取る	そぎとる	そぐ	とる	852	b.手段-目的	
注ぎ入れる	そそぎいれる	そそぐ	いれる	1654	b.手段-目的	
注ぎかける	そそぎかける	そそぐ	かける	839	b.手段-目的	
注ぎ込む	そそぎこむ	そそぐ	こむ	1696	b.手段-目的	拘束形態素
注ぎ足す	そそぎたす	そそぐ	たす	1439	b.手段-目的	
注ぎ出す	そそぎだす	そそぐ	だす	525	b.手段-目的	
注ぎ分ける	そそぎわける	そそぐ	わける	475	b.手段-目的	
そそり立つ	そそりたつ	そそる	たつ	1252	e1.共通原因事象	
育ち行く	そだちいく	そだつ	いく	147	j.V2 補助動詞	
育て上げる	そだてあげる	そだてる	あげる	1564	b.手段-目的	拘束意味
反っくり返る	そっくりかえる		かえる	204	j.V2 補助動詞	拘束意味, 拘束形態素
備え置く	そなえおく	そなえる	おく	1596	b.手段-目的	
備え付ける	そなえつける	そなえる	つける	2660	b.手段-目的	
備え持つ	そなえもつ	そなえる	もつ	935	b.手段-目的	
そびえ建つ	そびえたつ	そびえる	たつ	856	e1.共通原因事象	
そびえ立つ	そびえたつ	そびえる	たつ	1591	e1.共通原因事象	
背き去る	そむきさる	そむく	さる	125	a.原因-結果	
染め上がる	そめあがる	そめる	あがる	649	a.原因-結果	主語不一致
染め上げる	そめあげる	そめる	あげる	1637	b.手段-目的	拘束意味
染め重ねる	そめかさねる	そめる	かさねる	120	b.手段-目的	
染め出す	そめだす	そめる	だす	596	b.手段-目的	
染め付ける	そめつける	そめる	つける	452	b.手段-目的	
染め抜く	そめぬく	そめる	ぬく	79	j.V2 補助動詞	拘束意味
染め分ける	そめわける	そめる	わける	413	b.手段-目的	
反り上がる	そりあがる	そる	あがる	371	a.原因-結果	
反り上げる	そりあげる	そる	あげる	187	b.手段-目的	
剃り上げる	そりあげる	そる	あげる	547	b.手段-目的	
剃り落とす	そりおとす	そる	おとす	649	b.手段-目的	
振り返す	そりかえす	そる	かえす	110	j.V2 補助動詞	
振り返る	そりかえる	そる	かえる	1648	a.原因-結果	
剃り込む	そりこむ	そる	こむ	109	b.手段-目的	拘束形態素

反り立つ	そりたつ	そる	たつ	366	a.原因—結果	
反り投げる	そりなげる	そる	なげる	181	b.手段—目的	
存じ上げる	ぞんじあげる	ぞんじる	あげる	756	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束意味
絶え入る	たえいる	たえる	いる	98	j.V2 補助動詞	拘束形態素
耐え凌ぐ	たえしのぐ	たえる	しのぐ	375	b.手段—目的	
耐え忍ぶ	たえしのぶ	たえる	しのぶ	1278	a.原因—結果	
絶え果てる	たえはてる	たえる	はてる	160	a.原因—結果	
倒し込む	たおしこむ	たおす	こむ	705	b.手段—目的	拘束形態素
倒れ行く	たおれいく	たおれる	いく	359	j.V2 補助動詞	
倒れ落ちる	たおれおちる	たおれる	おちる	109	a.原因—結果	
倒れかかる	たおれかかる	たおれる	かかる	557	j.V2 補助動詞	
倒れ込む	たおれこむ	たおれる	こむ	1526	a.原因—結果	拘束形態素
炊き上がる	たきあがる	たく	あがる	1896	a.原因—結果	主語不一致
炊き上げる	たきあげる	たく	あげる	2062	b.手段—目的	拘束意味
抱き上げる	だきあげる	だく	あげる	1479	b.手段—目的	
炊き合わせる	たきあわせる	たく	あわせる	191	b.手段—目的	
抱き起こす	だきおこす	だく	おこす	1352	b.手段—目的	
抱き下ろす	だきおろす	だく	おろす	170	b.手段—目的	
抱き抱える	だきかかえる	だく	かかえる	1136	f.並列関係	
炊き込む	たきこむ	たく	こむ	2038	b.手段—目的	拘束形態素
抱き込む	だきこむ	だく	こむ	1329	b.手段—目的	拘束形態素
焚き染める	たきしめる	たく	しめる	267	b.手段—目的	
抱きしめる	だきしめる	だく	しめる	2971	b.手段—目的	
抱きすくめる	だきすくめる	だく	すくめる	824	b.手段—目的	
炊き出す	たきだす	たく	だす	257	b.手段—目的	
抱きつく	だきつく	だく	つく	3381	a.原因—結果	
焚きつける	たきつける	たく	つける	1193	b.手段—目的	
抱き包む	だきつつむ	だく	つつむ	187	b.手段—目的	
抱きとめる	だきとめる	だく	とめる	1423	b.手段—目的	
抱き取る	だきとる	だく	とる	353	b.手段—目的	
抱き寄せる	だきよせる	だく	よせる	1732	b.手段—目的	
炊き分ける	たきわける	たく	わける	189	j.V2 補助動詞	

たくし上げる	たくしあげる		あげる	1564	b.手段一目的	拘束形態素
たぐり寄せる	たぐりよせる	たぐる	よせる	1022	b.手段一目的	拘束形態素
猛り立つ	たけりたつ	たける	たつ	104	j.V2 補助動詞	拘束形態素
足し上げる	たしあげる	たす	あげる	134	b.手段一目的	
足し合わせる	たしあわせる	たす	あわせる	1698	b.手段一目的	
出し惜しむ	だしおしむ	だす	おしむ	783	h. 事象対象	
出し渋る	だししぶる	だす	しぶる	1485	h. 事象対象	
出し抜く	だしぬく	だす	ぬく	1508	k.一語	非合成的
助け上げる	たすけあげる	たすける	あげる	138	b.手段一目的	
助け起こす	たすけおこす	たすける	おこす	805	b.手段一目的	
助け出す	たすけだす	たすける	だす	1655	b.手段一目的	
尋ね歩く	たずねあるく	たずねる	あるく	298	d2.共通目的様態	
訪ね歩く	たずねあるく	たずねる	あるく	1358	d2.共通目的様態	
尋ね返す	たずねかえす	たずねる	かえす	469	j.V2 補助動詞	
尋ねかける	たずねかける	たずねる	かける	371	j.V2 補助動詞	
尋ね出す	たずねだす	たずねる	だす	93	b.手段一目的	
尋ね求める	たずねもとめる	たずねる	もとめる	364	e2.共通目的事象	
称え奉る	たたえたてまつる	たたえる	たてまつる	131	b.手段一目的	
戦い取る	たたかいとる	たたかう	とる	105	b.手段一目的	
叩き上げる	たたきあげる	たたく	あげる	431	b.手段一目的	
叩き入れる	たたきいれる	たたく	いれる	233	b.手段一目的	
叩き売る	たたきうる	たたく	うる	942	b.手段一目的	
叩き起こす	たたきおこす	たたく	おこす	1181	b.手段一目的	
叩き落とす	たたきおとす	たたく	おとす	1780	b.手段一目的	
叩き折る	たたきおる	たたく	おる	965	b.手段一目的	
叩き下ろす	たたきおろす	たたく	おろす	118	b.手段一目的	
叩き返す	たたきかえす	たたく	かえす	871	j.V2 補助動詞	
叩き切る	たたききる	たたく	きる	2562	b.手段一目的	
叩き込む	たたきこむ	たたく	こむ	2170	b.手段一目的	拘束形態素
叩き殺す	たたきころす	たたく	ころす	777	b.手段一目的	
叩き壊す	たたきこわす	たたく	こわす	1350	b.手段一目的	
叩き出す	たたきだす	たたく	だす	1684	b.手段一目的	

叩き付ける	たたきつける	たたく	つける	1954	b.手段一目的	
叩き潰す	たたきつぶす	たたく	つぶす	1735	b.手段一目的	
叩き飛ばす	たたきとばす	たたく	とばす	90	b.手段一目的	
叩き直す	たたきなおす	たたく	なおす	1245	b.手段一目的	
叩き抜く	たたきぬく	たたく	ぬく	107	b.手段一目的	
叩き伸ばす	たたきのばす	たたく	のばす	91	b.手段一目的	
叩きのめす	たたきのめす	たたく	のめす	1427	b.手段一目的	拘束形態素
叩き伏せる	たたきふせる	たたく	ふせる	756	b.手段一目的	
叩き分ける	たたきわける	たたく	わける	84	b.手段一目的	
叩き割る	たたきわる	たたく	わる	1557	b.手段一目的	
畳み掛ける	たたみかける	たたむ	かける	1133	j.V2 補助動詞	非合成的
畳み込む	たたみこむ	たたむ	こむ	1251	b1.準備事象一目的	拘束形態素
漂い出る	ただよいでる	ただよう	でる	101	a.原因一結果	
立ち会う	たちあう	たつ	あう	3424	k.一語	非合成的
建ち上がる	たちあがる	たつ	あがる	260	a.原因一結果	
立ち上がる	たちあがる	たつ	あがる	3329	a.原因一結果	
立ち上げる	たちあげる	たつ	あげる	3143	b.手段一目的	非合成的, 主語不一致
立ち現れる	たちあらわれる	たつ	あらわれる	1188	a.原因一結果	
立ち歩く	たちあるく	たつ	あるく	917	d2.共通目的様態	
立ち行く	たちいく	たつ	いく	569	k.一語	
立ち至る	たちいたる	たつ	いたる	324	i.V1 接頭辞化	
立ち入る	たちいる	たつ	いる	2024	i.V1 接頭辞化	拘束形態素
立ち遅れる	たちおくれる	たつ	おくれる	589	j.V2 補助動詞	
裁ち落とす	たちおとす	たつ	おとす	131	b.手段一目的	
立ち返る	たちかえる	たつ	かえる	1719	i.V1 接頭辞化	
立ち枯れる	たちかれる	たつ	かれる	428	i.V1 接頭辞化	
裁ち切る	たちきる	たつ	きる	90	b.手段一目的	
立ち切る	たちきる	たつ	きる	144	b.手段一目的	
断ち斬る	たちきる	たつ	きる	221	b.手段一目的	
断ち切る	たちきる	たつ	きる	2246	b.手段一目的	
立ち込む	たちこむ	たつ	こむ	1439	j.V2 補助動詞	拘束形態素

立ち込める	たちこめる	たつ	こめる	1537	a.原因—結果	
立ち去る	たちさる	たつ	さる	1444	a.原因—結果	
立ち騒ぐ	たちさわぐ	たつ	さわぐ	596	i.V1 接頭辞化	
立ちすくむ	たちすくむ	たつ	すくむ	1093	e1.共通原因事象	
立ち尽くす	たちつくす	たつ	つくす	1519	j.V2 補助動詞	
立ち止まる	たちどまる	たつ	とまる	1584	e1.共通原因事象	
立ち直る	たちなおる	たつ	なおる	1611	j.V2 補助動詞	拘束意味
建ち並ぶ	たちならぶ	たつ	ならぶ	1970	a.原因—結果	
立ち並ぶ	たちならぶ	たつ	ならぶ	1849	i.V1 接頭辞化	
立ち退く	たちのく	たつ	のく	1587	i.V1 接頭辞化	拘束形態素
立ち昇る	たちのぼる	たつ	のぼる	3007	a.原因—結果	
立ちはだかる	たちはだかる	たつ	はだかる	1585	k.一語	拘束形態素
立ち働く	たちはたらく	たつ	はたらく	857	e2.共通目的事象	
立ち塞がる	たちふさがる	たつ	ふさがる	1569	a.原因—結果	
立ち迷う	たちまよう	たつ	まよう	70	g.比喩的様態	
立ち回る	たちまわる	たつ	まわる	892	k.一語	
立ち向かう	たちむかう	たつ	むかう	2122	a.原因—結果	
立ち戻る	たちもどる	たつ	もどる	1459	i.V1 接頭辞化	
立ち寄る	たちよる	たつ	よる	1993	k.一語	非合成的
断ち割る	たちわる	たつ	わる	298	b.手段—目的	
建て上げる	たてあげる	たてる	あげる	595	b.手段—目的	
立て替える	たてかえる	たてる	かえる	1925	b.手段—目的	非合成的
建て替える	たてかえる	たてる	かえる	1953	b.手段—目的	
立て掛ける	たてかける	たてる	かける	1515	b.手段—目的	
建て替わる	たてかわる	たてる	かわる	284	a.原因—結果	
立て切る	たてきる	たてる	きる	90	b.手段—目的	
立て込む	たてこむ	たてる	こむ	1319	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束形態素
建て込む	たてこむ	たてる	こむ	1316	j.V2 補助動詞	拘束形態素
立てこもる	たてこもる	たてる	こもる	1537	i.V1 接頭辞化	
立て通す	たてとおす	たてる	とおす	132	b.手段—目的	
建て直す	たてなおす	たてる	なおす	1534	b.手段—目的	
立て直す	たてなおす	たてる	なおす	1633	b.手段—目的	

建て増す	たてます	たてる	ます	159	b.手段-目的	
立て分ける	たてわける	たてる	わける	143	b.手段-目的	
辿り着く	たどりつく	たどる	つく	1834	b.手段-目的	
頼み込む	たのみこむ	たのむ	こむ	1350	j.V2 補助動詞	拘束形態素
食べ飽きる	たべあきる	たべる	あきる	955	a.原因-結果	
食べ荒らす	たべあらす	たべる	あらす	331	b.手段-目的	
食べ歩く	たべあるく	たべる	あるく	1467	d2.共通目的様態	非合成的
食べ合わせる	たべあわせる	たべる	あわせる	507	b.手段-目的	
食べ比べる	たべくらべる	たべる	くらべる	1530	b.手段-目的	
食べこぼす	たべこぼす	たべる	こぼす	323	c.背景-具現	
食べ込む	たべこむ	たべる	こむ	115	b.手段-目的	拘束形態素
食べ進む	たべすすむ	たべる	すすむ	1295	j.V2 補助動詞	
食べ進める	たべすすめる	たべる	すすめる	1259	j.V2 補助動詞	
食べ散らかす	たべちらかす	たべる	ちらかす	479	c.背景-具現	
食べ逃す	たべのがす	たべる	のがす	130	c.背景-具現	
食べ残す	たべのこす	たべる	のこす	1474	c.背景-具現	
食べ分ける	たべわける	たべる	わける	619	b.手段-目的	
騙し込む	だましこむ	だます	こむ	79	j.V2 補助動詞	拘束形態素
騙し盗る	だましとる	だます	とる	640	b.手段-目的	
騙し取る	だましとる	だます	とる	2830	b.手段-目的	
黙りこくる	だまりこくる	だまる	こくる	547	j.V2 補助動詞	拘束形態素
黙り込む	だまりこむ	だまる	こむ	1193	j.V2 補助動詞	拘束形態素
溜め込む	ためこむ	ためる	こむ	3593	b.手段-目的	拘束形態素
試し打つ	ためしうつ	ためす	うつ	53	l.逆形成	
たらし込む	たらしこむ	たらす	こむ	401	b.手段-目的	拘束形態素
垂れ落ちる	たれおちる	たれる	おちる	1235	a.原因-結果	
垂れかかる	たれかかる	たれる	かかる	1009	j.V2 補助動詞	
垂れ込む	たれこむ	たれる	こむ	743	k.一語	拘束形態素
垂れ込める	たれこめる	たれる	こめる	1300	j.V2 補助動詞	拘束意味
垂れ下がる	たれさがる	たれる	さがる	1654	a.原因-結果	
垂れ流す	たれながす	たれる	ながす	1637	b.手段-目的	
戯れ遊ぶ	たわむれあそぶ	たわむれ	あそぶ	312	f.並列関係	

		る				
ちぎり入れる	ちぎりいれる	ちぎる	いれる	87	b.手段—目的	
ちぎり取る	ちぎりとる	ちぎる	とる	207	b.手段—目的	
ちぎれ落ちる	ちぎれおちる	ちぎれる	おちる	85	a.原因—結果	
ちぎれ飛ぶ	ちぎれとぶ	ちぎれる	とぶ	690	a.原因—結果	
縮み上がる	ちぢみあがる	ちぢむ	あがる	700	a.原因—結果	
散り行く	ちりいく	ちる	いく	1457	j.V2 補助動詞	
散り急ぐ	ちりいそぐ	ちる	いそぐ	307	h. 事象対象	
散り落ちる	ちりおちる	ちる	おちる	177	a.原因—結果	
散り込む	ちりこむ	ちる	こむ	160	j.V2 補助動詞	拘束形態素
散り去る	ちりさる	ちる	さる	185	a.原因—結果	
散り敷く	ちりしく	ちる	しく	565	a.原因—結果	
散り残る	ちりのこる	ちる	のこる	253	c.背景—具現	
散り乱れる	ちりみだれる	ちる	みだれる	124	a.原因—結果	
ついはむ	ついはむ		はむ	1687	k.一語	非分析的, 拘束形態素
使い比べる	つかいくらべる	つかう	くらべる	684	b.手段—目的	
使いこなす	つかいこなす	つかう	こなす	1936	j.V2 補助動詞	
使い込む	つかいこむ	つかう	こむ	2130	j.V2 補助動詞	拘束形態素
使い捨てる	つかいすてる	つかう	すてる	1515	c.背景—具現	
使い潰す	つかいつぶす	つかう	つぶす	1355	b.手段—目的	
使い慣らす	つかいならす	つかう	ならす	140	b.手段—目的	
使い残す	つかいのこす	つかう	のこす	95	c.背景—具現	
使い果たす	つかいはたす	つかう	はたす	1603	j.V2 補助動詞	
使い古す	つかいふるす	つかう	ふるす	143	b.手段—目的	拘束形態素
使い回す	つかいまわす	つかう	まわす	1664	j.V2 補助動詞	非合成的
使い分ける	つかいわける	つかう	わける	1628	j.V2 補助動詞	
掴み上げる	つかみあげる	つかむ	あげる	1075	b.手段—目的	
掴みかかる	つかみかかる	つかむ	かかる	1661	j.V2 補助動詞	
掴み出す	つかみだす	つかむ	だす	293	b.手段—目的	
掴み取る	つかみとる	つかむ	とる	1390	b.手段—目的	
疲れ果てる	つかれはてる	つかれる	はてる	1165	j.V2 補助動詞	
付き合う	つきあう	つく	あう	7408	k.一語	非合成的, 拘束意味

突き上がる	つきあがる	つく	あがる	294	a.原因—結果	主語不一致
突き上げる	つきあげる	つく	あげる	1663	b.手段—目的	
突き当たる	つきあたる	つく	あたる	1605	a.原因—結果	
突き当てる	つきあてる	つく	あてる	608	b.手段—目的	
突き合わせる	つきあわす	つく	あわす	251	b.手段—目的	
突き合わせる	つきあわせる	つく	あわせる	1721	b.手段—目的	
継ぎ合わせる	つぎあわせる	つぐ	あわせる	862	b.手段—目的	
突き入る	つきいる	つく	いる	83	b.手段—目的	拘束形態素
突き入れる	つきいれる	つく	いれる	1754	b.手段—目的	
突き穿つ	つきうがつ	つく	うがつ	178	b.手段—目的	
突き動かす	つきうごかす	つく	うごかす	1473	b.手段—目的	
突き落とす	つきおとす	つく	おとす	2069	b.手段—目的	
突き下ろす	つきおろす	つく	おろす	131	b.手段—目的	
突き返す	つきかえす	つく	かえす	871	b.手段—目的	
突きかかる	つきかかる	つく	かかる	96	j.V2 補助動詞	
突き固める	つきかためる	つく	かためる	783	b.手段—目的	
突き切る	つききる	つく	きる	83	j.V2 補助動詞	拘束意味
突き崩す	つきくずす	つく	くずす	1329	b.手段—目的	
突き込む	つきこむ	つく	こむ	1084	b.手段—目的	拘束形態素
つぎ込む	つぎこむ	つぐ	こむ	1826	b.手段—目的	拘束形態素
突き殺す	つきころす	つく	ころす	456	b.手段—目的	
突き刺さる	つきささる	つく	ささる	1567	a.原因—結果	主語不一致
突き刺す	つきさす	つく	さす	1902	b.手段—目的	
付き従う	つきしたがう	つく	したがう	1556	e1.共通原因事象	
突き進む	つきすすむ	つく	すすむ	1255	g.比喩の様態	
付き添う	つきそう	つく	そう	2018	k.一語	
突き倒す	つきたおす	つく	たおす	508	b.手段—目的	
突き出す	つきだす	つく	だす	2225	b.手段—目的	
継ぎ足す	つぎたす	つぐ	たす	1833	b.手段—目的	
突き立つ	つきたつ	つく	たつ	1039	g.比喩の様態	主語不一致
突き立てる	つきたてる	つく	たてる	1585	b.手段—目的	
突きつける	つきつける	つく	つける	2064	b.手段—目的	非合成的

突き詰める	つきつめる	つく	つめる	1321	b.手段-目的	非合成的
突き出る	つきでる	つく	でる	1838	a.原因-結果	主語不一致
突き通す	つきとおす	つく	とおす	1451	b.手段-目的	
突き通る	つきとおる	つく	とおる	633	a.原因-結果	主語不一致
突き飛ばす	つきとばす	つく	とばす	1539	b.手段-目的	
突き止める	つきとめる	つく	とめる	2039	b.手段-目的	非合成的
突き抜く	つきぬく	つく	ぬく	357	b.手段-目的	
突き抜ける	つきぬける	つく	ぬける	1625	a.原因-結果	主語不一致
突き果てる	つきはてる	つきる	はてる	1233	a.原因-結果	
突き放す	つきはなす	つく	はなす	1622	b.手段-目的	
付きまとう	つきまとう	つく	まとう	1537	e1.共通原因事象	
突き回す	つきまわす	つく	まわす	135	b.手段-目的	
突き戻す	つきもどす	つく	もどす	89	b.手段-目的	
突き破る	つきやぶる	つく	やぶる	1544	b.手段-目的	
突き割る	つきわる	つく	わる	201	b.手段-目的	
作り上げる	つくりあげる	つくる	あげる	5236	b.手段-目的	拘束意味
作り置く	つくりおく	つくる	おく	183	b.手段-目的	
作り替える	つくりかえる	つくる	かえる	4600	b.手段-目的	
作り込む	つくりこむ	つくる	こむ	2532	j.V2 補助動詞	拘束形態素
作り育てる	つくりそだてる	つくる	そだてる	371	b.手段-目的	
作り足す	つくりたす	つくる	たす	202	b.手段-目的	
作り出す	つくりだす	つくる	だす	5591	b.手段-目的	
作りつける	つくりつける	つくる	つける	294	b.手段-目的	
作りなす	つくりなす	つくる	なす	147	b.手段-目的	
作り分ける	つくりわける	つくる	わける	1255	b.手段-目的	
漬け上がる	つけあがる	つける	あがる	142	a.原因-結果	主語不一致
付け上がる	つけあがる	つける	あがる	994	a.原因-結果	
付け合わせる	つけあわせる	つける	あわせる	426	b.手段-目的	
付け入る	つけいる	つける	いる	1506	b.手段-目的	拘束形態素
漬け置く	つけおく	つける	おく	398	b.手段-目的	
付け置く	つけおく	つける	おく	87	j.V2 補助動詞	
付け替える	つけかえる	つける	かえる	2310	b.手段-目的	

付け加える	つけくわえる	つける	くわえる	1684	b.手段一目的	
付け加わる	つけくわわる	つける	くわわる	939	a.原因一結果	主語不一致
着けこなす	つけこなす	つける	こなす	160	j.V2 補助動詞	
漬け込む	つけこむ	つける	こむ	2906	b.手段一目的	拘束形態素
付け込む	つけこむ	つける	こむ	1506	j.V2 補助動詞	拘束形態素
告げ知らせる	つげしらせる	つげる	しらせる	1629	b.手段一目的	
付け足す	つけたす	つける	たす	1610	b.手段一目的	
付け出す	つげだす	つける	だす	260	b.手段一目的	
付け狙う	つけねらう	つける	ねらう	1273	b.手段一目的	
付け外す	つけはずす	つける	はずす	90	l.逆形成	
付け回す	つけまわす	つける	まわす	697	b.手段一目的	
付け回る	つけまわる	つける	まわる	141	d2.共通目的様態	
伝い歩く	つたいあるく	つたう	あるく	292	d2.共通目的様態	
伝い落ちる	つたいおちる	つたう	おちる	1274	d1.共通原因様態	
伝い降りる	つたいおりる	つたう	おりる	177	d2.共通目的様態	
伝い流れる	つたいながれる	つたう	ながれる	429	d1.共通原因様態	
伝え歩く	つたえあるく	つたえる	あるく	60	d2.共通目的様態	
伝え聞く	つたえきく	つたえる	きく	1343	a.原因一結果	
伝え継ぐ	つたえつぐ	つたえる	つぐ	114	b.手段一目的	
伝え残す	つたえのこす	つたえる	のこす	636	b.手段一目的	
伝え広める	つたえひろめる	つたえる	ひろめる	329	b.手段一目的	
伝わり落ちる	つたわりおちる	つたわる	おちる	280	d1.共通原因様態	
突っかかる	つっかかる	つく	かかる	1465	k.一語	非分析的, 拘束形態素
突っかける	つっかける	つく	かける	317	k.一語	非分析的, 拘束形態素
つき出す	つきだす	つく	だす	257	b.手段一目的	
つき回す	つきまわす	つく	まわす	618	b.手段一目的	
突っ切る	つききる	つく	きる	1687	k.一語	拘束形態素
突っ込む	つきこむ	つく	こむ	3773	k.一語	拘束形態素
突っ立つ	つたつ	つく	たつ	359	g.比喩の様態	拘束形態素
突っ走る	つっぱしる	つく	はしる	1322	g.比喩の様態	拘束形態素
突っ撥ねる	つっぱねる	つく	はねる	129	k.一語	拘束形態素
突っ張る	つっぱる	つく	はる	1672	k.一語	拘束形態素

包み隠す	つつみかくす	つつむ	かくす	1098	b.手段—目的	
包み込む	つつみこむ	つつむ	こむ	2268	b.手段—目的	拘束形態素
包み焼く	つつみやく	つつむ	やく	213	b.手段—目的	
綴り合わせる	つづりあわせる	つづる	あわせる	118	b.手段—目的	
集い来る	つどいくる	つどう	くる	152	a.原因—結果	
勤め上げる	つとめあげる	つとめる	あげる	2205	b.手段—目的	拘束意味
努め励む	つとめはげむ	つとめる	はげむ	138	f.並列関係	
つなぎ合わす	つなぎあわす	つなぐ	あわす	218	b.手段—目的	
つなぎ合わせる	つなぎあわせる	つなぐ	あわせる	1642	b.手段—目的	
つなぎ替える	つなぎかえる	つなぐ	かえる	1362	b.手段—目的	
つなぎ込む	つなぎこむ	つなぐ	こむ	227	j.V2 補助動詞	拘束形態素
つなぎ止める	つなぎとめる	つなぐ	とめる	1380	b.手段—目的	
つねり上げる	つねりあげる	つねる	あげる	152	b.手段—目的	
つまみ上げる	つまみあげる	つまむ	あげる	1256	b.手段—目的	
つまみ入れる	つまみいれる	つまむ	いれる	125	b.手段—目的	
摘み出す	つまみだす	つまむ	だす	203	b.手段—目的	
積み上がる	つみあがる	つむ	あがる	1434	a.原因—結果	主語不一致
積み上げる	つみあげる	つむ	あげる	2152	b.手段—目的	
積み入れる	つみいれる	つむ	いれる	94	b.手段—目的	
積み下ろす	つみおろす	つむ	おろす	344	b.手段—目的	
積み替える	つみかえる	つむ	かえる	1789	b.手段—目的	
積み重なる	つみかさなる	つむ	かさなる	1452	a.原因—結果	主語不一致
積み重ねる	つみかさねる	つむ	かさねる	1865	b.手段—目的	
積み込む	つみこむ	つむ	こむ	2289	b.手段—目的	拘束形態素
積み出す	つみだす	つむ	だす	586	b.手段—目的	
積み立てる	つみたてる	つむ	たてる	2225	b.手段—目的	非合成的
積み付ける	つみつける	つむ	つける	554	b.手段—目的	
摘み取る	つみとる	つむ	とる	2082	b.手段—目的	
積み残す	つみのこす	つむ	のこす	272	c.背景—具現	
積み増す	つみます	つむ	ます	1458	b.手段—目的	
紡ぎ上げる	つむぎあげる	つむぐ	あげる	219	b.手段—目的	拘束意味

紡ぎ出す	つむぎ出す	つむぐ	出す	1505	b.手段—目的	
詰め上がる	つめあがる	つめる	あがる	148	a.原因—結果	
詰め合わせる	つめあわせる	つめる	あわせる	852	b.手段—目的	
詰め替える	つめかえる	つめる	かえる	1154	b.手段—目的	
詰めかける	つめかける	つめる	かける	1391	j.V2 補助動詞	非分析的
詰め切る	つめきる	つめる	きる	306	j.V2 補助動詞	拘束意味
詰め込む	つめこむ	つめる	こむ	2358	b.手段—目的	拘束形態素
詰め寄る	つめよる	つめる	よる	1676	a.原因—結果	
貫き通す	つらぬきとおす	つらぬく	とおす	1541	b.手段—目的	非合成的
釣り合う	つりあう	つる	あう	1951	k.一語	拘束意味
吊り上がる	つりあがる	つる	あがる	726	a.原因—結果	主語不一致
釣り上がる	つりあがる	つる	あがる	2433	a.原因—結果	主語不一致
吊り上げる	つりあげる	つる	あげる	2111	b.手段—目的	
釣り上げる	つりあげる	つる	あげる	3017	b.手段—目的	
釣り歩く	つりあるく	つる	あるく	1077	d2.共通目的の様態	
釣り落とす	つりおとす	つる	おとす	103	c.背景—具現	
吊り下ろす	つりおろす	つる	おろす	689	b.手段—目的	
釣り下る	つりくだる	つる	くだる	877	d2.共通目的の様態	
釣り込む	つりこむ	つる	こむ	294	b.手段—目的	拘束形態素
吊り込む	つりこむ	つる	こむ	650	b.手段—目的	拘束形態素
釣り下がる	つりさがる	つる	さがる	339	a.原因—結果	主語不一致
吊り下がる	つりさがる	つる	さがる	438	a.原因—結果	主語不一致
吊り下げる	つりさげる	つる	さげる	1837	b.手段—目的	
吊り出す	つり出す	つる	出す	224	b.手段—目的	
釣り出す	つり出す	つる	出す	396	b.手段—目的	
釣り負ける	つりまける	つる	まける	273	c.背景—具現	
釣り分ける	つりわける	つる	わける	148	b.手段—目的	
吊るし上げる	つるしあげる	つるす	あげる	1217	b.手段—目的	
連れ歩く	つれあるく	つれる	あるく	1471	d2.共通目的の様態	
連れ帰る	つれかえる	つれる	かえる	1627	d2.共通目的の様態	
連れ込む	つれこむ	つれる	こむ	2044	b.手段—目的	非合成的, 拘束形態素
連れ去る	つれさる	つれる	さる	1869	b.手段—目的	

連れ添う	つれそう	つれる	そう	1380	k.一語	非合成的
連れ出す	つれだす	つれる	だす	1808	b.手段一目的	
連れ立つ	つれだつ	つれる	たつ	347	k.一語	
連れ回す	つれまわす	つれる	まわす	1537	b.手段一目的	
連れ回る	つれまわる	つれる	まわる	79	d2.共通目的様態	
連れ戻す	つれもどす	つれる	もどす	1566	b.手段一目的	
出会う	であう	でる	あう	5011	k.一語	非合成的
出歩く	であるく	でる	あるく	1633	k.一語	
出遅れる	でおくれる	でる	おくれる	1311	j.V2 補助動詞	
出かける	でかける	でる	かける	2203	k.一語	非分析的
出来上がる	できあがる	できる	あがる	1765	a.原因一結果	
出くわす	でくわす	でる	くわす	1950	k.一語	非分析的, 拘束形態素
出盛る	でさかる	でる	さかる	86	l.逆形成	拘束形態素
出揃う	でそろう	でる	そろう	1537	a.原因一結果	
でっち上げる	でっちあげる	でちる	あげる	1616	k.一語	非分析的, 拘束形態素
出っ張る	でっばる	でる	はる	1827	k.一語	拘束形態素
出直す	でなおす	でる	なおす	978	k.一語	非合成的
出外れる	ではずれる	でる	はずれる	128	a.原因一結果	
出払う	ではらう	でる	はらう	424	k.一語	
出張る	でばる	でる	はる	1479	k.一語	
出回る	でまわる	でる	まわる	2869	k.一語	非合成的
出迎える	でむかえる	でる	むかえる	1596	b.手段一目的	
出向く	でむく	でる	むく	2574	k.一語	非合成的
出戻る	でもどる	でる	もどる	1936	k.一語	非合成的
照らし合わす	てらしあわす	てらす	あわす	223	b.手段一目的	
照らし合わせる	てらしあわせる	てらす	あわせる	1528	b.手段一目的	非合成的
照らし出す	てらしだす	てらす	だす	1535	b.手段一目的	
照らしつける	てらしつける	てらす	つける	101	b.手段一目的	
照り返す	てりかえす	てる	かえす	1273	j.V2 補助動詞	
照り輝く	てりかがやく	てる	かがやく	883	f.並列関係	
照り込む	てりこむ	てる	こむ	78	a.原因一結果	拘束形態素

照りつける	てりつける	てる	つける	1603	a.原因—結果	
照り映える	てりはえる	てる	はえる	669	a.原因—結果	
問い合わせ	といあわす	とう	あわす	802	j.V2 補助動詞	非分析的
問い合わせる	といあわせる	とう	あわせる	914	j.V2 補助動詞	非分析的
問い返す	といかえす	とう	かえす	1294	j.V2 補助動詞	
問いかける	といかける	とう	かける	1795	j.V2 補助動詞	
問い質す	といただす	とう	ただす	1230	b.手段—目的	
問い詰める	といつめる	とう	つめる	1587	b.手段—目的	
問い求める	といもとめる	とう	もとめる	78	b.手段—目的	
通りかかる	とおりかかる	とおる	かかる	1708	j.V2 補助動詞	
通り越す	とおりこす	とおる	こす	1452	a.原因—結果	
通りすぎる	とおりすぎる	とおる	すぎる	1111	k.一語	非分析的
通り過ぎる	とおりすぎる	とおる	すぎる	1624	a.原因—結果	
通り抜ける	とおりぬける	とおる	ぬける	1808	a.原因—結果	
溶かし入れる	とかし入れる	とかす	入れる	349	b.手段—目的	
溶かし込む	とかしこむ	とかす	こむ	1509	b.手段—目的	拘束形態素
溶かし出す	とかしだす	とかす	だす	1204	b.手段—目的	
咎め立てる	とがめたてる	とがめる	たてる	213	b.手段—目的	
説き明かす	ときあかす	とく	あかす	1239	b.手段—目的	
解き明かす	ときあかす	とく	あかす	1646	b.手段—目的	
研ぎ上げる	とぎあげる	とぐ	あげる	317	b.手段—目的	拘束意味
溶き入れる	とき入れる	とく	入れる	951	b.手段—目的	
説き起こす	ときおこす	とく	おこす	445	b.手段—目的	
説き及ぶ	ときおよぶ	とく	およぶ	225	b.手段—目的	
説き示す	ときしめす	とく	しめす	152	b.手段—目的	
解き進む	ときすすむ	とく	すすむ	128	a.原因—結果	
解き進める	ときすすめる	とく	すすめる	386	b.手段—目的	
研ぎ澄ます	とぎすます	とぐ	すます	1542	b.手段—目的	
説きつける	ときつける	とく	つける	106	b.手段—目的	
解き放す	ときはなす	とく	はなす	425	b.手段—目的	
解き放つ	ときはなつ	とく	はなつ	1540	b.手段—目的	
説き伏せる	ときふせる	とく	ふせる	1296	b.手段—目的	

溶きほぐす	ときほぐす	とく	ほぐす	462	b.手段—目的	
解きほぐす	ときほぐす	とく	ほぐす	1422	b.手段—目的	
解きほどく	ときほどく	とく	ほどく	252	b.手段—目的	
溶き混ぜる	ときまぜる	とく	まぜる	186	b.手段—目的	
溶け行く	とけいく	とける	いく	117	j.V2 補助動詞	
溶け入る	とけいる	とける	いる	178	a.原因—結果	拘束形態素
溶け落ちる	とけおちる	とける	おちる	865	a.原因—結果	
溶け崩れる	とけくずれる	とける	くずれる	143	a.原因—結果	
溶け込む	とけこむ	とける	こむ	2111	a.原因—結果	拘束形態素
溶け去る	とけさる	とける	さる	170	a.原因—結果	
溶け出す	とけだす	とける	だす	1923	a.原因—結果	拘束意味
溶け出る	とけでる	とける	でる	921	a.原因—結果	
溶け残る	とけのこる	とける	のこる	785	c.背景—具現	
綴じ合わせる	とじあわせる	とじる	あわせる	163	b.手段—目的	
閉じ合わせる	とじあわせる	とじる	あわせる	381	b.手段—目的	
綴じ込む	とじこむ	とじる	こむ	586	b.手段—目的	拘束形態素
閉じ込める	とじこめる	とじる	こめる	1758	b.手段—目的	
閉じこもる	とじこもる	とじる	こもる	1689	a.原因—結果	
とじつける	とじつける	とじる	つける	87	b.手段—目的	
届け出る	とどけでる	とどける	でる	3062	b.手段—目的	
とどめ置く	とどめおく	とどめる	おく	441	b.手段—目的	
轟き叫ぶ	とどろきさけぶ	とどろく	さけぶ	546	g.比喩の様態	
轟き渡る	とどろきわたる	とどろく	わたる	327	j.V2 補助動詞	
怒鳴り上げる	どなりあげる	どなる	あげる	114	j.V2 補助動詞	拘束意味
怒鳴り返す	どなりかえす	どなる	かえす	662	j.V2 補助動詞	
怒鳴り込む	どなりこむ	どなる	こむ	1540	d2.共通目的の様態	拘束形態素
怒鳴り立てる	どなりたてる	どなる	たてる	144	j.V2 補助動詞	
怒鳴り散らす	どなりちらす	どなる	ちらす	1292	j.V2 補助動詞	拘束意味
怒鳴りつける	どなりつける	どなる	つける	1434	b.手段—目的	
怒鳴り飛ばす	どなりとばす	どなる	とばす	85	b.手段—目的	
飛び上がる	とびあがる	とぶ	あがる	2916	a.原因—結果	
飛び歩く	とびあるく	とぶ	あるく	295	g.比喩の様態	

飛び入る	とびいる	とぶ	いる	567	a.原因—結果	拘束形態素
飛び移る	とびうつる	とぶ	うつる	2218	a.原因—結果	
飛び起きる	とびおきる	とぶ	おきる	1023	a.原因—結果	
飛び落ちる	とびおちる	とぶ	おちる	105	a.原因—結果	
跳び下りる	とびおりる	とぶ	おりる	246	a.原因—結果	
飛び降りる	とびおりる	とぶ	おりる	2473	a.原因—結果	
飛び交う	とびかう	とぶ	かう	1957	j.V2 補助動詞	拘束形態素
飛びかかる	とびかかる	とぶ	かかる	1842	j.V2 補助動詞	
飛び越える	とびこえる	とぶ	こえる	2130	a.原因—結果	
飛び越す	とびこす	とぶ	こす	2006	a.原因—結果	
飛び込む	とびこむ	とぶ	こむ	4538	a.原因—結果	拘束形態素
飛び下がる	とびさがる	とぶ	さがる	439	a.原因—結果	
飛び去る	とびさる	とぶ	さる	1472	a.原因—結果	
飛び過ぎる	とびすぎる	とぶ	すぎる	443	a.原因—結果	
飛び出す	とびだす	とぶ	だす	3235	a.原因—結果	拘束意味
飛び立つ	とびたつ	とぶ	たつ	2063	a.原因—結果	
飛び違う	とびちがう	とぶ	ちがう	82	j.V2 補助動詞	
飛び散る	とびちる	とぶ	ちる	1624	a.原因—結果	
飛びつく	とびつく	とぶ	つく	2113	a.原因—結果	
飛び出る	とびでる	とぶ	でる	1767	a.原因—結果	
飛び抜ける	とびぬける	とぶ	ぬける	664	a.原因—結果	
飛び退く	とびのく	とぶ	のく	1455	a.原因—結果	拘束形態素
飛び乗る	とびのる	とぶ	のる	1921	a.原因—結果	
飛び離れる	とびはなれる	とぶ	はなれる	306	a.原因—結果	
飛び跳ねる	とびはねる	とぶ	はねる	1766	f.並列関係	
飛び回る	とびまわる	とぶ	まわる	2252	d2.共通目的様態	
飛び渡る	とびわたる	とぶ	わたる	141	a.原因—結果	
泊まり歩く	とまりあるく	とまる	あるく	804	d2.共通目的様態	
泊まり込む	とまりこむ	とまる	こむ	1343	a.原因—結果	拘束形態素
富み栄える	とみさかえる	とむ	さかえる	168	f.並列関係	
留め置く	とめおく	とめる	おく	1142	b.手段—目的	
留めつける	とめつける	とめる	つける	1991	b.手段—目的	

撮り上げる	とりあげる	とる	あげる	126	b.手段一目的	
取り上げる	とりあげる	とる	あげる	6259	b.手段一目的	
取り扱う	とりあつかう	とる	あつかう	3142	i.V1 接頭辞化	
取り集める	とりあつめる	とる	あつめる	126	b.手段一目的	
撮り歩く	とりあるく	とる	あるく	696	d2.共通目的様態	
取り合わせる	とりあわす	とる	あわす	135	b.手段一目的	
取り合わせる	とりあわせる	とる	あわせる	748	b.手段一目的	
取り入る	とりいる	とる	いる	1469	k.一語	拘束形態素
取り入れる	とりいれる	とる	いれる	6181	b.手段一目的	
取り置く	とりおく	とる	おく	588	l.逆形成	
執り行う	とりおこなう	とる	おこなう	2005	i.V1 接頭辞化	
取り押さえる	とりおさえる	とる	おさえる	1848	b.手段一目的	
取り落とす	とりおとす	とる	おとす	1182	c.背景一具現	
撮り下ろす	とりおろす	とる	おろす	538	b.手段一目的	
取り返す	とりかえす	とる	かえす	1945	b.手段一目的	
取り替える	とりかえる	とる	かえる	2267	b.手段一目的	
取り掛かる	とりかかる	とる	かかる	1742	j.V2 補助動詞	非分析的
取り囲む	とりかこむ	とる	かこむ	1749	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り片付ける	とりかたづける	とる	かたづける	85	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り交わす	とりかわす	とる	かわす	1631	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り決める	とりきめる	とる	きめる	1510	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り崩す	とりくずす	とる	くずす	2245	i.V1 接頭辞化	非合成的
取り組む	とりくむ	とる	くむ	4435	k.一語	非分析的
撮り比べる	とりくらべる	とる	くらべる	724	b.手段一目的	
取り消す	とりけす	とる	けす	1967	i.V1 接頭辞化	非分析的
取りこぼす	とりこぼす	とる	こぼす	1674	c.背景一具現	
取り込む	とりこむ	とる	こむ	4133	b.手段一目的	拘束形態素
取り殺す	とりころす	とる	ころす	202	b.手段一目的	
取り壊す	とりこわす	とる	こわす	1959	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り下げる	とりさげる	とる	さげる	2333	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り去る	とりさる	とる	さる	1857	b.手段一目的	拘束意味
取り仕切る	とりしきる	とる	しきる	1612	i.V1 接頭辞化	非分析的

取り鎮める	とりしずめる	とる	しずめる	78	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り締まる	とりしまる	とる	しまる	2201	k.一語	非分析的
取り調べる	とりしらべる	とる	しらべる	1438	i.V1 接頭辞化	非分析的
取りすぎる	とりすぎる	とる	すぎる	339	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り捨てる	とりすてる	とる	すてる	157	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り澄ます	とりすます	とる	すます	146	i.V1 接頭辞化	非分析的, 特殊形態
取り揃える	とりそろえる	とる	そろえる	1635	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り出す	とりだす	とる	だす	4134	b.手段—目的	
取り立てる	とりたてる	とる	たてる	1592	k.一語	非分析的
撮り貯める	とりためる	とる	ためる	292	b.手段—目的	
取り違える	とりちがえる	とる	ちがえる	1646	j.V2 補助動詞	拘束形態素
取り散らかす	とりちらかす	とる	ちらかす	90	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り付く	とりつく	とる	つく	3274	a.原因—結果	
取り次ぐ	とりつぐ	とる	つぐ	1638	k.一語	非分析的
取り繕う	とりつくろう	とる	つくろう	1352	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り付ける	とりつける	とる	つける	5262	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り潰す	とりつぶす	とる	つぶす	460	i.V1 接頭辞化	非分析的
取り留める	とりとめる	とる	とめる	1320	k.一語	非分析的
取り直す	とりなおす	とる	なおす	1756	k.一語	非分析的
取り成す	とりなす	とる	なす	490	k.一語	非分析的
取り逃がす	とりにがす	とる	にがす	1350	c.背景—具現	
撮り逃す	とりのがす	とる	のがす	578	c.背景—具現	
取り逃す	とりのがす	とる	のがす	1394	c.背景—具現	
取りのける	とりのける	とる	のける	188	b.手段—目的	
取り残す	とりのこす	とる	のこす	889	c.背景—具現	
取り除く	とりのぞく	とる	のぞく	2594	b.手段—目的	
取り計らう	とりはからう	とる	はからう	474	i.V1 接頭辞化	
取りはぐれる	とりはぐれる	とる	はぐれる	441	j.V2 補助動詞	
取り運ぶ	とりはこぶ	とる	はこぶ	115	i.V1 接頭辞化	
取り外す	とりはずす	とる	はずす	3461	b.手段—目的	
取り離す	とりはなす	とる	はなす	144	b.手段—目的	
取り省く	とりはぶく	とる	はぶく	138	b.手段—目的	

取り払う	とりはらう	とる	はらう	1576	b.手段一目的	
取り巻く	とりまく	とる	まく	2098	i.V1 接頭辞化	
取り混ぜる	とりまぜる	とる	まぜる	322	i.V1 接頭辞化	
取りまとめる	とりまとめる	とる	まとめる	1642	i.V1 接頭辞化	
取り回す	とりまわす	とる	まわす	1416	i.V1 接頭辞化	
取り乱す	とりみだす	とる	みだす	1149	i.V1 接頭辞化	
取り結ぶ	とりむすぶ	とる	むすぶ	1337	i.V1 接頭辞化	
取り持つ	とりもつ	とる	もつ	1501	k.一語	非分析的
取り戻す	とりもどす	とる	もどす	3000	b.手段一目的	
取り止める	とりやめる	とる	やめる	1587	i.V1 接頭辞化	
取り寄せる	とりよせる	とる	よせる	2018	b.手段一目的	非合成的
取り分ける	とりわける	とる	わける	2044	b.手段一目的	
流し入れる	ながしいれる	ながす	いれる	2199	b.手段一目的	
流し打つ	ながしうつ	ながす	うつ	825	g.比喩的様態	
流し落とす	ながしおとす	ながす	おとす	520	b.手段一目的	
流し込む	ながしこむ	ながす	こむ	2452	b.手段一目的	拘束形態素
流し去る	ながしさる	ながす	さる	662	b.手段一目的	拘束意味
流し捨てる	ながしすてる	ながす	すてる	112	b.手段一目的	
流し出す	ながしだす	ながす	だす	1369	b.手段一目的	
流し見る	ながしみる	ながす	みる	373	g.比喩的様態	
流し読む	ながしよむ	ながす	よむ	309	g.比喩的様態	
眺め入る	ながめいる	ながめる	いる	483	j.V2 補助動詞	拘束形態素
眺め下ろす	ながめおろす	ながめる	おろす	166	j.V2 補助動詞	
眺め暮らす	ながめくらす	ながめる	くらす	115	e1.共通原因事象	
眺め楽しむ	ながめたのしむ	ながめる	たのしむ	103	b.手段一目的	
眺め回す	ながめまわす	ながめる	まわす	605	j.V2 補助動詞	
眺め見る	ながめみる	ながめる	みる	225	f.並列関係	
眺めやる	ながめやる	ながめる	やる	519	j.V2 補助動詞	
眺め渡す	ながめわたす	ながめる	わたす	233	j.V2 補助動詞	
流れ歩く	ながれあるく	ながれる	あるく	423	g.比喩的様態	
流れ行く	ながれいく	ながれる	いく	1095	j.V2 補助動詞	
流れ入る	ながれいる	ながれる	いる	1216	a.原因一結果	拘束形態素

流れ落ちる	ながれおちる	ながれる	おちる	1824	a.原因—結果	
流れ下る	ながれくだる	ながれる	くだる	1462	d1.共通原因様態	
流れ来る	ながれくる	ながれる	くる	1117	a.原因—結果	
流れ込む	ながれこむ	ながれる	こむ	2381	a.原因—結果	拘束形態素
流れ去る	ながれさる	ながれる	さる	1216	d1.共通原因様態	
流れ出す	ながれだす	ながれる	だす	140	a.原因—結果	拘束意味
流れ着く	ながれつく	ながれる	つく	1868	a.原因—結果	
流れ出る	ながれでる	ながれる	でる	1738	a.原因—結果	
流れ寄る	ながれよる	ながれる	よる	216	d1.共通原因様態	
泣き明かす	なきあかす	なく	あかす	87	b.手段—目的	
泣き暴れる	なきあばれる	なく	あばれる	86	e1.共通原因事象	
泣き入る	なきいる	なく	いる	341	j.V2 補助動詞	拘束形態素
泣き落とす	なきおとす	なく	おとす	161	b.手段—目的	
泣き悲しむ	なきかなしむ	なく	かなしむ	284	e1.共通原因事象	
鳴き交わす	なきかわす	なく	かわす	478	b.手段—目的	
泣き崩れる	なきくずれる	なく	くずれる	1376	a.原因—結果	
泣き暮らす	なきくらす	なく	くらす	392	e1.共通原因事象	
泣き狂う	なきくるう	なく	くるう	480	g.比喩の様態	
泣き込む	なきこむ	なく	こむ	102	j.V2 補助動詞	拘束形態素
泣き叫ぶ	なきさけぶ	なく	さけぶ	1714	e1.共通原因事象	
鳴き叫ぶ	なきさけぶ	なく	さけぶ	415	f.並列関係	
鳴き騒ぐ	なきさわぐ	なく	さわぐ	129	e1.共通原因事象	
泣き騒ぐ	なきさわぐ	なく	さわぐ	160	e1.共通原因事象	
泣き沈む	なきしずむ	なく	しずむ	95	a.原因—結果	
泣きじゃくる	なきじゃくる	なく		1273	k.一語	非分析的, 拘束形態素
泣きすぎる	なきすぎる	なく	すぎる	1096	e2.共通目的事象	
なぎ倒す	なぎたおす	なぐ	たおす	1567	b.手段—目的	拘束形態素
鳴き立てる	なきたてる	なく	たてる	164	j.V2 補助動詞	
泣き疲れる	なきつかれる	なく	つかれる	125	a.原因—結果	
泣きつく	なきつく	なく	つく	1862	a.原因—結果	
泣き濡れる	なきぬれる	なく	ぬれる	272	a.原因—結果	
泣き寝入る	なきねいる	なく	ねいる	111	e1.共通原因事象	

なぎ払う	なぎはらう	なぐ	はらう	1702	b.手段-目的	拘束形態素
泣き腫らす	なきはらす	なく	はらす	95	a.原因-結果	
泣き伏す	なきふす	なく	ふす	257	a.原因-結果	
泣き悶える	なきもだえる	なく	もだえる	156	e1.共通原因事象	
鳴き止む	なきやむ	なく	やむ	446	h. 事象対象	
泣き止む	なきやむ	なく	やむ	1793	h. 事象対象	
鳴き渡る	なきわたる	なく	わたる	465	j.V2 補助動詞	
泣きわめく	なきわめく	なく	わめく	1218	e1.共通原因事象	
慰め励ます	なぐさめはげます	なぐさめる	はげます	156	e2.共通目的事象	
殴り返す	なぐりかえす	なぐる	かえす	1166	j.V2 補助動詞	
殴りかかる	なぐりかかる	なぐる	かかる	1409	j.V2 補助動詞	
殴り勝つ	なぐりかつ	なぐる	かつ	685	b.手段-目的	
殴り込む	なぐりこむ	なぐる	こむ	1149	g.比喩の様態	拘束形態素
殴り殺す	なぐりころす	なぐる	ころす	1365	b.手段-目的	
殴り壊す	なぐりこわす	なぐる	こわす	134	b.手段-目的	
殴り倒す	なぐりたおす	なぐる	たおす	1291	b.手段-目的	
殴りつける	なぐりつける	なぐる	つける	1574	j.V2 補助動詞	
殴り飛ばす	なぐりとばす	なぐる	とばす	1634	b.手段-目的	
殴り負ける	なぐりまける	なぐる	まける	331	c.背景-具現	
投げ上げる	なげあげる	なげる	あげる	1691	b.手段-目的	
投げ与える	なげあたえる	なげる	あたえる	407	b.手段-目的	
投げ当てる	なげあてる	なげる	あてる	220	b.手段-目的	
投げ急ぐ	なげいそぐ	なげる	いそぐ	70	h. 事象対象	
投げ入れる	なげいれる	なげる	いれる	1911	b.手段-目的	
投げ打つ	なげうつ	なげる	うつ	1019	g.比喩の様態	
投げ売る	なげうる	なげる	うる	319	g.比喩の様態	
投げ置く	なげおく	なげる	おく	127	b.手段-目的	
投げ落とす	なげおとす	なげる	おとす	1557	b.手段-目的	
投げ下ろす	なげおろす	なげる	おろす	1283	b.手段-目的	
投げ返す	なげかえす	なげる	かえす	1445	b.手段-目的	
投げかける	なげかける	なげる	かける	1698	j.V2 補助動詞	

投げ勝つ	なげかつ	なげる	かつ	545	a.原因—結果	
嘆き悲しむ	なげきかなしむ	なげく	かなしむ	1286	e1.共通原因事象	
嘆き暮らす	なげきくらす	なげく	くらす	59	e1.共通原因事象	
嘆き苦しむ	なげきくるしむ	なげく	くるしむ	152	e1.共通原因事象	
投げ込む	なげこむ	なげる	こむ	2080	b.手段—目的	拘束形態素
投げ殺す	なげころす	なげる	ころす	142	b.手段—目的	
投げ捨てる	なげすてる	なげる	すてる	1748	b.手段—目的	
投げ倒す	なげたおす	なげる	たおす	803	b.手段—目的	
投げ出す	なげだす	なげる	だす	1746	b.手段—目的	
投げつける	なげつける	なげる	つける	2136	b.手段—目的	
投げ飛ばす	なげとばす	なげる	とばす	1573	b.手段—目的	
投げ放つ	なげはなつ	なげる	はなつ	235	b.手段—目的	
投げ分ける	なげわける	なげる	わける	1608	b.手段—目的	
投げ渡す	なげわたす	なげる	わたす	1103	b.手段—目的	
なし崩す	なしくずす	なす	くずす	53	k.一語	非分析的, 特殊形態, 拘束形態素
成し遂げる	なしとげる	なす	とげる	1921	b.手段—目的	
なすりつける	なすりつける	なする	つける	1518	b.手段—目的	
なだめすかす	なだめすかす	なだめる	すかす	449	b.手段—目的	拘束形態素
なだれ落ちる	なだれおちる	なだれる	おちる	235	a.原因—結果	
なだれ込む	なだれこむ	なだれる	こむ	1271	a.原因—結果	拘束形態素
撫で上げる	なであげる	なでる	あげる	1488	b.手段—目的	
撫で下ろす	なでおろす	なでる	おろす	1598	b.手段—目的	
撫でさする	なでさする	なでる	さする	753	b.手段—目的	
撫で擦る	なでする	なでる	する	294	b.手段—目的	
撫でつける	なでつける	なでる	つける	523	b.手段—目的	
撫で回す	なでまわす	なでる	まわす	1507	j.V2 補助動詞	
名乗り出る	なのりでる	なのる	でる	1675	b.手段—目的	
なぶり殺す	なぶりころす	なぶる	ころす	437	b.手段—目的	
並み居る	なみいる	なむ	いる	1368	k.一語	非分析的, 拘束形態素
なめ上げる	なめあげる	なめる	あげる	65	b.手段—目的	
なめ取る	なめとる	なめる	とる	93	b.手段—目的	

なめ回す	なめまわす	なめる	まわす	1142	j.V2 補助動詞	
悩み苦しむ	なやみくるしむ	なやむ	くるしむ	1169	e1.共通原因事象	
悩み込む	なやみこむ	なやむ	こむ	87	j.V2 補助動詞	拘束形態素
悩み迷う	なやみまよう	なやむ	まよう	190	e1.共通原因事象	
習い覚える	ならいおぼえる	ならう	おぼえる	164	b.手段—目的	
鳴らし込む	ならしこむ	ならす	こむ	364	j.V2 補助動詞	拘束形態素
鳴らし分ける	ならしわける	ならす	わける	139	b.手段—目的	
並び替える	ならびかえる	ならぶ	かえる	2033	b.手段—目的	
並び称する	ならびしょうする	ならぶ	しょうする	86	b.手段—目的	
並び建つ	ならびたつ	ならぶ	たつ	185	e1.共通原因事象	
並び立つ	ならびたつ	ならぶ	たつ	1456	e1.共通原因事象	
並べ上げる	ならべあげる	ならべる	あげる	143	b.手段—目的	
並べ入れる	ならべいれる	ならべる	いれる	524	b.手段—目的	
並べ置く	ならべおく	ならべる	おく	97	b.手段—目的	
並べ替える	ならべかえる	ならべる	かえる	2731	b.手段—目的	
並べ立てる	ならべたてる	ならべる	たてる	1414	b.手段—目的	
成り上がる	なりあがる	なる	あがる	1336	a.原因—結果	非合成的
成り代わる	なりかわる	なる	かわる	1385	a.原因—結果	
成り下がる	なりさがる	なる	さがる	1519	a.原因—結果	
成り済ます	なりすます	なる	すます	1833	k.一語	非分析的
成り立つ	なりたつ	なる	たつ	2707	j.V2 補助動詞	
成り果てる	なりはてる	なる	はてる	1471	a.原因—結果	
鳴り響く	なりひびく	なる	ひびく	1782	e1.共通原因事象	
鳴り止む	なりやむ	なる	やむ	1427	j.V2 補助動詞	
鳴り分ける	なりわける	なる	わける	87	b.手段—目的	
鳴り渡る	なりわたる	なる	わたる	982	j.V2 補助動詞	
慣れ親しむ	なれしたしむ	なれる	したしむ	1462	a.原因—結果	
似合う	にあう	にる	あう	9115	k.一語	非合成的, 拘束意味
煮上がる	にあがる	にる	あがる	606	a.原因—結果	
煮上げる	にあげる	にる	あげる	564	b.手段—目的	拘束意味
煮え上がる	にえあがる	にえる	あがる	98	a.原因—結果	
煮え返る	にえかえる	にえる	かえる	288	j.V2 補助動詞	拘束意味

煮え繰り返る	にえくりかえる	にえくる	かえる	609	j.V2 補助動詞	拘束意味, 拘束形態素
煮えたぎる	にえたぎる	にえる	たぎる	1295	f.並列関係	
煮え立つ	にえたつ	にえる	たつ	762	j.V2 補助動詞	
匂い立つ	においたつ	におう	たつ	1298	j.V2 補助動詞	
似通う	にかよう	にる	かよう	1336	j.V2 補助動詞	非分析的
煮絡める	にからめる	にる	からめる	283	b.手段一目的	
握り返す	にぎりかえす	にぎる	かえす	1607	j.V2 補助動詞	
握り替える	にぎりかえる	にぎる	かえる	89	b.手段一目的	
握り込む	にぎりこむ	にぎる	こむ	1535	j.V2 補助動詞	拘束形態素
握りしめる	にぎりしめる	にぎる	しめる	2880	b.手段一目的	
握り潰す	にぎりつぶす	にぎる	つぶす	1196	b.手段一目的	
煮崩れる	にくずれる	にる	くずれる	1024	a.原因一結果	主語不一致
逃げ行く	にげいく	にげる	いく	166	j.V2 補助動詞	
逃げ失せる	にげうせる	にげる	うせる	201	a.原因一結果	
逃げおおせる	にげおおせる	にげる	おおせる	900	a.原因一結果	拘束形態素
逃げ遅れる	にげおくれる	にげる	おくれる	1200	h. 事象対象	
逃げ落ちる	にげおちる	にげる	おちる	95	a.原因一結果	
逃げ帰る	にげかえる	にげる	かえる	1290	a.原因一結果	
逃げ隠れる	にげかくれる	にげる	かくれる	290	a.原因一結果	
逃げ込む	にげこむ	にげる	こむ	1778	a.原因一結果	拘束形態素
逃げ去る	にげさる	にげる	さる	1027	a.原因一結果	
逃げ散る	にげちる	にげる	ちる	160	a.原因一結果	
逃げ出る	にげでる	にげる	でる	240	a.原因一結果	
逃げ粘る	にげねばる	にげる	ねばる	484	e2.共通目的事象	
逃げ延びる	にげのびる	にげる	のびる	945	a.原因一結果	
逃げ惑う	にげまどう	にげる	まどう	1420	e1.共通原因事象	
逃げ回る	にげまわる	にげる	まわる	1415	d1.共通原因様態	
逃げ戻る	にげもどる	にげる	もどる	254	a.原因一結果	
煮込む	にこむ	にる	こむ	3853	j.V2 補助動詞	拘束形態素
煮殺す	にころす	にる	ころす	98	b.手段一目的	
にじみ出す	にじみだす	にじむ	だす	187	a.原因一結果	拘束意味
滲み出る	にじみでる	にじむ	でる	1467	a.原因一結果	

煮染める	にしめる	にる	しめる	95	b.手段一目的	拘束形態素
にじり寄る	にじりよる	にじる	よる	1156	k.一語	非分析的, 拘束形態素
煮出す	にだす	にる	だす	2506	b.手段一目的	
煮立つ	にたつ	にる	たつ	1350	a.原因一結果	主語不一致
煮立てる	にたてる	にる	たてる	1260	b.手段一目的	
似つく	につく	にる	つく	116	j.V2 補助動詞	特殊形態
煮つける	につける	にる	つける	397	b.手段一目的	
煮詰まる	につまる	にる	つまる	1323	a.原因一結果	主語不一致
煮詰める	につめる	にる	つめる	2035	b.手段一目的	
煮溶かす	にとかす	にる	とかす	1422	b.手段一目的	
煮溶ける	にとける	にる	とける	96	a.原因一結果	主語不一致
担い立つ	にないたつ	になう	たつ	107	j.V2 補助動詞	
煮含める	にふくめる	にる	ふくめる	1128	b.手段一目的	
睨み上げる	にらみあげる	にらむ	あげる	370	j.V2 補助動詞	拘束意味
睨み下ろす	にらみおろす	にらむ	おろす	114	j.V2 補助動詞	
睨み返す	にらみかえす	にらむ	かえす	1285	j.V2 補助動詞	
睨み据える	にらみすえる	にらむ	すえる	455	j.V2 補助動詞	
睨みつける	にらみつける	にらむ	つける	1917	j.V2 補助動詞	
縫い上がる	ぬいあがる	ぬう	あがる	207	a.原因一結果	主語不一致
縫い上げる	ぬいあげる	ぬう	あげる	1256	b.手段一目的	拘束意味
縫い合わす	ぬいあわす	ぬう	あわす	427	b.手段一目的	
縫い合わせる	ぬいあわせる	ぬう	あわせる	2218	b.手段一目的	
縫い込む	ぬいこむ	ぬう	こむ	747	j.V2 補助動詞	拘束形態素
縫い進む	ぬいすすむ	ぬう	すすむ	129	b.手段一目的	
縫い進める	ぬいすすめる	ぬう	すすめる	202	j.V2 補助動詞	
縫い縮める	ぬいちぢめる	ぬう	ちぢめる	776	b.手段一目的	
縫い付ける	ぬいつける	ぬう	つける	2660	b.手段一目的	
縫い閉じる	ぬいとじる	ぬう	とじる	164	b.手段一目的	
縫い止める	ぬいとめる	ぬう	とめる	814	b.手段一目的	
縫い取る	ぬいとる	ぬう	とる	121	b.手段一目的	
抜き上げる	ぬきあげる	ぬく	あげる	1697	b.手段一目的	
抜き合わせる	ぬきあわせる	ぬく	あわせる	105	b.手段一目的	

抜き返す	ぬきかえす	ぬく	かえす	1492	j.V2 補助動詞	
抜き去る	ぬきさる	ぬく	さる	1633	b.手段-目的	拘束意味
脱ぎ去る	ぬぎさる	ぬぐ	さる	739	b.手段-目的	拘束意味
脱ぎ捨てる	ぬぎすてる	ぬぐ	すてる	1783	b.手段-目的	
抜き出す	ぬきだす	ぬく	だす	2462	b.手段-目的	
脱ぎ散らかす	ぬぎちらかす	ぬぐ	ちらかす	362	b.手段-目的	
脱ぎ散らす	ぬぎちらす	ぬぐ	ちらす	119	b.手段-目的	
抜き付ける	ぬきつける	ぬく	つける	174	b.手段-目的	
抜き出る	ぬきでる	ぬく	でる	449	a.原因-結果	主語不一致
抜き取る	ぬきとる	ぬく	とる	1948	b.手段-目的	
抜き放つ	ぬきはなつ	ぬく	はなつ	1268	b.手段-目的	
抜きん出る	ぬきんでる		でる	1260	a.原因-結果	主語不一致, 拘束形態素
拭い去る	ぬぐいさる	ぬぐう	さる	1350	b.手段-目的	拘束意味
拭い取る	ぬぐいとる	ぬぐう	とる	870	b.手段-目的	
抜け上がる	ぬけあがる	ぬける	あがる	130	a.原因-結果	
抜け落ちる	ぬけおちる	ぬける	おちる	1860	a.原因-結果	
脱げ落ちる	ぬげおちる	ぬげる	おちる	414	a.原因-結果	
抜け替わる	ぬけかわる	ぬける	かわる	638	a.原因-結果	
抜け出す	ぬけだす	ぬける	だす	2330	a.原因-結果	拘束意味
抜け出る	ぬけでる	ぬける	でる	1566	a.原因-結果	
盗み返す	ぬすみかえす	ぬすむ	かえす	148	b.手段-目的	
盗み聞く	ぬすみきく	ぬすむ	きく	367	g.比喩的様態	
盗み去る	ぬすみさる	ぬすむ	さる	91	b.手段-目的	拘束意味
盗み出す	ぬすみだす	ぬすむ	だす	1881	b.手段-目的	
盗み取る	ぬすみとる	ぬすむ	とる	1333	b.手段-目的	
盗み撮る	ぬすみとる	ぬすむ	とる	88	g.比喩的様態	
盗み見る	ぬすみみる	ぬすむ	みる	1491	g.比喩的様態	
盗み読む	ぬすみよむ	ぬすむ	よむ	181	g.比喩的様態	
塗り上がる	ぬりあがる	ぬる	あがる	119	a.原因-結果	主語不一致
塗り上げる	ぬりあげる	ぬる	あげる	427	b.手段-目的	拘束意味
塗り替える	ぬりかえる	ぬる	かえる	2724	b.手段-目的	

塗り隠す	ぬりかくす	ぬる	かくす	396	b.手段—目的	
塗り重ねる	ぬりかさねる	ぬる	かさねる	1850	b.手段—目的	
塗り固める	ぬりかためる	ぬる	かためる	1302	b.手段—目的	
塗り替わる	ぬりかわる	ぬる	かわる	885	a.原因—結果	主語不一致
塗り込む	ぬりこむ	ぬる	こむ	1766	b.手段—目的	拘束形態素
塗り込める	ぬりこめる	ぬる	こめる	1205	b.手段—目的	
塗り足す	ぬりたす	ぬる	たす	310	b.手段—目的	
塗り立てる	ぬりたてる	ぬる	たてる	59	b.手段—目的	
塗り付ける	ぬりつける	ぬる	つける	1505	b.手段—目的	
塗り潰す	ぬりつぶす	ぬる	つぶす	1873	b.手段—目的	
塗り伸ばす	ぬりのばす	ぬる	のばす	607	b.手段—目的	
塗り広げる	ぬりひろげる	ぬる	ひろげる	1436	b.手段—目的	
塗り分ける	ぬりわける	ぬる	わける	2030	b.手段—目的	
濡れ輝く	ぬれかがやく	ぬれる	かがやく	63	a.原因—結果	
濡れ光る	ぬれひかる	ぬれる	ひかる	690	a.原因—結果	
濡れ広がる	ぬれひろがる	ぬれる	ひろがる	95	a.原因—結果	
寝入る	ねいる	ねる	いる	1051	j.V2 補助動詞	拘束形態素
寝落ちる	ねおちる	ねる	おちる	346	a.原因—結果	
願い上げる	ねがいあげる	ねがう	あげる	109	j.V2 補助動詞	拘束意味
願い祈る	ねがいのる	ねがう	いのる	258	f.並列関係	
願い下げる	ねがいさげる	ねがう	さげる	211	j.V2 補助動詞	拘束意味
願い出る	ねがいでる	ねがう	でる	1974	a.原因—結果	
願い求める	ねがいもとめる	ねがう	もとめる	746	e2.共通目的事象	
寝返る	ねがえる	ねる	かえる	1683	k.一語	非合成的
寝かし込む	ねかしこむ	ねかす	こむ	238	j.V2 補助動詞	拘束形態素
寝かしつける	ねかしつける	ねかす	つける	2053	j.V2 補助動詞	
寝腐る	ねくさる	ねる	くさる	224	j.V2 補助動詞	拘束意味
寝ぐずる	ねぐずる	ねる	ぐずる	71	e1.共通原因事象	
寝込む	ねこむ	ねる	こむ	1629	j.V2 補助動詞	非合成的, 拘束形態素
寝転がる	ねころがる	ねる	ころがる	1417	d2.共通目的様態	
寝転ぶ	ねころぶ	ねる	ころぶ	1360	d2.共通目的様態	
寝静まる	ねしずまる	ねる	しずまる	1392	a.原因—結果	

ねじ伏せる	ねじふせる	ねじる	ふせる	1436	b.手段—目的	拘束形態素
ねじ曲がる	ねじまがる	ねじる	まがる	1132	a.原因—結果	主語不一致, 拘束形態素
ねじ曲げる	ねじまげる	ねじる	まげる	1311	b.手段—目的	拘束形態素
ねじり上げる	ねじりあげる	ねじる	あげる	839	b.手段—目的	
ねじり合わせる	ねじりあわせる	ねじる	あわせる	108	b.手段—目的	
ねじり切る	ねじりきる	ねじる	きる	223	b.手段—目的	
ねじり込む	ねじりこむ	ねじる	こむ	835	b.手段—目的	拘束形態素
ねじり戻す	ねじりもどす	ねじる	もどす	142	b.手段—目的	
寝過ごす	ねすごす	ねる	すごす	1567	a.原因—結果	
寝そべる	ねそべる	ねる	そべる	1457	k.一語	非分析的, 拘束形態素
寝違える	ねちがえる	ねる	ちがえる	1498	a.原因—結果	非合成的, 拘束形態素
寝つく	ねつく	ねる	つく	1107	j.V2 補助動詞	
寝取る	ねとる	ねる	とる	2128	b.手段—目的	
粘つく	ねばつく		つく	1180	a.原因—結果	
粘り勝つ	ねばりかつ	ねばる	かつ	95	b.手段—目的	
粘り込む	ねばりこむ	ねばる	こむ	258	j.V2 補助動詞	拘束形態素
粘りつく	ねばりつく	ねばる	つく	1087	k.一語	
粘り抜く	ねばりぬく	ねばる	ぬく	361	j.V2 補助動詞	拘束意味
寝ぼける	ねぼける	ねる	ぼける	1033	a.原因—結果	
眠りこける	ねむりこける	ねむる	こける	1044	j.V2 補助動詞	拘束形態素
眠り込む	ねむりこむ	ねむる	こむ	891	j.V2 補助動詞	拘束形態素
狙い撃つ	ねらいうつ	ねらう	うつ	2571	b1.準備事象—目的	
狙い定める	ねらいさだめる	ねらう	さだめる	301	b.手段—目的	
狙い澄ます	ねらいすます	ねらう	すます	182	j.V2 補助動詞	
練り上がる	ねりあがる	ねる	あがる	147	a.原因—結果	主語不一致
練り上げる	ねりあげる	ねる	あげる	1488	b.手段—目的	拘束意味
練り歩く	ねりあるく	ねる	あるく	1851	d2.共通目的の形態	
練り合わせる	ねりあわせる	ねる	あわせる	83	b.手段—目的	
練り合わせる	ねりあわせる	ねる	あわせる	1236	b.手段—目的	

練り固める	ねりかためる	ねる	かためる	153	b.手段—目的	
練り込む	ねりこむ	ねる	こむ	1954	b.手段—目的	拘束形態素
練り出す	ねりだす	ねる	だす	163	b.手段—目的	
練り混ぜる	ねりまぜる	ねる	まぜる	1281	b.手段—目的	
練り回る	ねりまわる	ねる	まわる	156	d2.共通目的様態	
逃れ去る	のがれさる	のがれる	さる	100	a.原因—結果	
逃れ出る	のがれでる	のがれる	でる	222	a.原因—結果	
のけ反る	のけぞる		そる	816	k.一語	非分析的, 拘束形態素
のし上がる	のしあがる	のす	あがる	1325	k.一語	非分析的, 拘束形態素
のし上げる	のしあげる	のす	あげる	162	k.一語	非分析的, 拘束形態素
のし歩く	のしあるく	のす	あるく	385	k.一語	非分析的, 拘束形態素
のしかかる	のしかかる	のす	かかる	1433	k.一語	非分析的, 拘束形態素
載せ換える	のせかえる	のせる	かえる	7734	b.手段—目的	
覗き込む	のぞきこむ	のぞく	こむ	2494	j.V2 補助動詞	拘束形態素
除き去る	のぞきさる	のぞく	さる	367	b.手段—目的	拘束意味
覗き見る	のぞきみる	のぞく	みる	1420	e2.共通目的事象	
のた打ち回る	のたうちまわる	のたうつ	まわる	1246	d1.共通原因様態	
乗っ取る	のっとる	のる	とる	2393	k.一語	非合成的
伸び上がる	のびあがる	のびる	あがる	1493	a.原因—結果	
伸び行く	のびいく	のびる	いく	679	j.V2 補助動詞	
伸び出る	のびでる	のびる	でる	140	a.原因—結果	
伸び悩む	のびなやむ	のびる	なやむ	1718	j.V2 補助動詞	拘束意味
伸び広がる	のびひろがる	のびる	ひろがる	207	a.原因—結果	
述べ立てる	のべたてる	のべる	たてる	409	b.手段—目的	
述べ伝える	のべつたえる	のべる	つたえる	427	b.手段—目的	
のぼせ上がる	のぼせあがる	のぼせる	あがる	386	a.原因—結果	
昇り行く	のぼりいく	のぼる	いく	203	a.原因—結果	
登り返す	のぼりかえす	のぼる	かえす	2409	j.V2 補助動詞	
昇り来る	のぼりくる	のぼる	くる	188	a.原因—結果	
昇り立つ	のぼりたつ	のぼる	たつ	168	a.原因—結果	
登り着く	のぼりつく	のぼる	つく	667	a.原因—結果	
上り詰める	のぼりつめる	のぼる	つめる	3771	a.原因—結果	

飲み明かす	のみあかす	のむ	あかす	1270	b.手段-目的	
飲み飽きる	のみあきる	のむ	あきる	275	a.原因-結果	
飲み歩く	のみあるく	のむ	あるく	1351	d2.共通目的様態	非合成的
飲み合わせる	のみあわせる	のむ	あわせる	206	b.手段-目的	
飲み交わす	のみかわす	のむ	かわす	1096	b.手段-目的	
飲み下す	のみくだす	のむ	くだす	1229	b.手段-目的	拘束意味
飲み比べる	のみくらべる	のむ	くらべる	1672	b.手段-目的	
飲み込む	のみこむ	のむ	こむ	2293	b.手段-目的	拘束形態素
飲み騒ぐ	のみさわぐ	のむ	さわぐ	334	e2.共通目的事象	
飲み倒す	のみたおす	のむ	たおす	224	c.背景-具現	
飲み疲れる	のみつかれる	のむ	つかれる	65	a.原因-結果	
飲み潰れる	のみつぶれる	のむ	つぶれる	268	a.原因-結果	
飲み残す	のみのかす	のむ	のかす	238	c.背景-具現	
飲み干す	のみほす	のむ	ほす	1719	b.手段-目的	
飲み回す	のみまわす	のむ	まわす	159	e2.共通目的事象	
飲み分ける	のみわける	のむ	わける	340	b.手段-目的	
のめり込む	のめりこむ	のめる	こむ	1229	a.原因-結果	拘束形態素
乗り上げる	のりあげる	のる	あげる	1944	b.手段-目的	
乗り歩く	のりあるく	のる	あるく	133	d2.共通目的様態	
乗り合わせる	のりあわす	のる	あわす	275	j.V2 補助動詞	
乗り合わせる	のりあわせる	のる	あわせる	1561	j.V2 補助動詞	
乗り入る	のりいる	のる	いる	116	a.原因-結果	拘束形態素
乗り入れる	のりいれる	のる	いれる	1993	b.手段-目的	
乗り移る	のりうつる	のる	うつる	2092	a.原因-結果	
乗り遅れる	のりおくれる	のる	おくれる	1523	j.V2 補助動詞	
乗り換える	のりかえる	のる	かえる	6710	c.背景-具現	
乗りかかる	のりかかる	のる	かかる	1114	j.V2 補助動詞	
乗り替わる	のりかわる	のる	かわる	651	a.原因-結果	主語不一致
乗り切る	のりきる	のる	きる	2226	j.V2 補助動詞	拘束意味
乗り組む	のりくむ	のる	くむ	1844	j.V2 補助動詞	
乗り比べる	のりくらべる	のる	くらべる	1646	b.手段-目的	
乗り越える	のりこえる	のる	こえる	2397	a.原因-結果	

乗り越す	のりこす	のる	こす	1739	a.原因—結果	
乗り越なす	のりこなす	のる	こなす	1747	j.V2 補助動詞	
乗り込む	のりこむ	のる	こむ	2205	a.原因—結果	拘束形態素
乗り過ごす	のりすごす	のる	すごす	1515	c.背景—具現	
乗り進める	のりすすめる	のる	すすめる	144	a.原因—結果	
乗り捨てる	のりすてる	のる	すてる	1264	c.背景—具現	
乗り出す	のりだす	のる	だす	2221	a.原因—結果	拘束意味
乗り継ぐ	のりつぐ	のる	つぐ	3518	b.手段—目的	
乗り付ける	のりつける	のる	つける	1617	b.手段—目的	
乗り潰す	のりつぶす	のる	つぶす	1482	b.手段—目的	
乗り逃す	のりのがす	のる	のがす	98	c.背景—具現	
乗り回す	のりまわす	のる	まわす	2002	j.V2 補助動詞	
乗り回る	のりまわる	のる	まわる	145	d2.共通目的様態	
乗り分ける	のりわける	のる	わける	219	b.手段—目的	
呪い殺す	のろいころす	のろう	ころす	1436	b.手段—目的	
這い上がる	はいあがる	はう	あがる	1674	d2.共通目的様態	
這い入る	はいいる	はう	いる	87	d2.共通目的様態	拘束形態素
這い降りる	はいおりる	はう	おりる	119	d2.共通目的様態	
這い込む	はいこむ	はう	こむ	150	d2.共通目的様態	拘束形態素
這い進む	はいすすむ	はう	すすむ	267	d2.共通目的様態	
這いずる	はいずる	はう	ずる	1258	k.一語	非分析的
這い出す	はいだす	はう	だす	1368	a.原因—結果	拘束意味
這い蹲る	はいつくばる	はう	つくばる	918	k.一語	非分析的, 拘束形態素
這い出る	はいでる	はう	でる	1383	d2.共通目的様態	
這い登る	はいのぼる	はう	のぼる	617	d2.共通目的様態	
這い回る	はいまわる	はう	まわる	1496	d2.共通目的様態	
這い寄る	はいよる	はう	よる	1251	d2.共通目的様態	
入り込む	はいりこむ	はいる	こむ	1992	a.原因—結果	拘束形態素
生え替わる	はえかわる	はえる	かわる	3452	a.原因—結果	
生え茂る	はえしげる	はえる	しげる	272	a.原因—結果	
生え揃う	はえそろう	はえる	そろう	1911	a.原因—結果	
生え出る	はえでる	はえる	でる	199	a.原因—結果	

剥がし取る	はがしとる	はがす	とる	486	b.手段一目的	
量り入れる	はかりいれる	はかる	いれる	99	b.手段一目的	
計り知る	はかりしる	はかる	しる	815	a.原因一結果	特殊形態
量り取る	はかりとる	はかる	とる	569	b.手段一目的	
剥がれ落ちる	はがれおちる	はがれる	おちる	1490	a.原因一結果	
掃き集める	はきあつめる	はく	あつめる	268	b.手段一目的	
はぎ合わせる	はぎあわせる	はぐ	あわせる	377	b.手段一目的	
掃き入れる	はきいれる	はく	いれる	137	b.手段一目的	
剥ぎ落とす	はぎおとす	はぐ	おとす	89	b.手段一目的	
履き下ろす	はきおろす	はく	おろす	163	b.手段一目的	
履き替える	はきかえる	はく	かえる	2462	b.手段一目的	
吐きかける	はきかける	はく	かける	1506	b.手段一目的	
掃き清める	はききよめる	はく	きよめる	431	b.手段一目的	
履き比べる	はきくらべる	はく	くらべる	325	b.手段一目的	
履きこなす	はきこなす	はく	こなす	1509	j.V2 補助動詞	
掃き込む	はきこむ	はく	こむ	75	b.手段一目的	拘束形態素
履き込む	はきこむ	はく	こむ	1791	j.V2 補助動詞	拘束形態素
掃き捨てる	はきすてる	はく	すてる	208	b.手段一目的	
履き捨てる	はきすてる	はく	すてる	440	b.手段一目的	
吐き捨てる	はきすてる	はく	すてる	1744	b.手段一目的	
掃き出す	はきだす	はく	だす	870	b.手段一目的	
吐き出す	はきだす	はく	だす	2251	b.手段一目的	
履き違える	はきちがえる	はく	ちがえる	1449	j.V2 補助動詞	拘束形態素
吐き散らかす	はきちらかす	はく	ちらかす	208	b.手段一目的	
吐き散らす	はきちらす	はく	ちらす	1132	b.手段一目的	
吐きつける	はきつける	はく	つける	296	b.手段一目的	
履き潰す	はきつぶす	はく	つぶす	1150	b.手段一目的	
掃き取る	はきとる	はく	とる	220	b.手段一目的	
剥ぎ取る	はぎとる	はぐ	とる	1984	b.手段一目的	
履き慣らす	はきならす	はく	ならす	676	b.手段一目的	
吐き戻す	はきもどす	はく	もどす	1054	b.手段一目的	
掃き寄せる	はきよせる	はく	よせる	85	b.手段一目的	

履き分ける	はきわける	はく	わける	168	b.手段—目的	
禿げ上がる	はげあがる	はげる	あがる	1128	a.原因—結果	
剥げ落ちる	はげおちる	はげる	おちる	1183	a.原因—結果	
禿げ散らかす	はげちらかす	はげる	ちらかす	260	b.手段—目的	
禿げ萌える	はげもえる	はげる	もえる	318	g.比喩の様態	
運び上げる	はこびあげる	はこぶ	あげる	1135	b.手段—目的	
運び入れる	はこびいれる	はこぶ	いれる	1501	b.手段—目的	
運び下ろす	はこびおろす	はこぶ	おろす	181	b.手段—目的	
運び込む	はこびこむ	はこぶ	こむ	1649	b.手段—目的	拘束形態素
運び去る	はこびさる	はこぶ	さる	984	b.手段—目的	
運び出す	はこびだす	はこぶ	だす	1612	b.手段—目的	
挟み上げる	はさみあげる	はさむ	あげる	115	b.手段—目的	
挟み入れる	はさみいれる	はさむ	いれる	83	b.手段—目的	
挟み切る	はさみきる	はさむ	きる	165	b.手段—目的	
挟み込む	はさみこむ	はさむ	こむ	1927	b.手段—目的	拘束形態素
挟みつける	はさみつける	はさむ	つける	459	b.手段—目的	
挟み潰す	はさみつぶす	はさむ	つぶす	111	b.手段—目的	
恥じる	はじいる	はじる	いる	1101	j.V2 補助動詞	拘束形態素
弾き落とす	はじきおとす	はじく	おとす	128	b.手段—目的	
弾き返す	はじきかえす	はじく	かえす	1636	b.手段—目的	
弾き出す	はじきだす	はじく	だす	1382	b.手段—目的	
弾き飛ばす	はじきとばす	はじく	とばす	1728	b.手段—目的	
弾き飛ぶ	はじきとぶ	はじく	とぶ	94	a.原因—結果	主語不一致
弾け散る	はじけちる	はじける	ちる	124	a.原因—結果	
弾け出る	はじけでる	はじける	でる	121	a.原因—結果	
弾け飛ぶ	はじけとぶ	はじける	とぶ	1341	a.原因—結果	
はしゃぎ回る	はしゃぎまわる	はしゃぐ	まわる	842	d1.共通原因様態	
走り降りる	はしりおりる	はしる	おりる	249	d2.共通目的様態	
走り勝つ	はしりかつ	はしる	かつ	355	b.手段—目的	
走り下る	はしりくだる	はしる	くだる	103	d2.共通目的様態	
走り来る	はしりくる	はしる	くる	264	j.V2 補助動詞	
走り込む	はしりこむ	はしる	こむ	2417	a.原因—結果	拘束形態素

走り去る	はしりさる	はしる	さる	1394	a.原因—結果	
走り過ぎる	はしりすぎる	はしる	すぎる	1111	d2.共通目的様態	
走り出る	はしりでる	はしる	でる	532	d2.共通目的様態	
走り抜く	はしりぬく	はしる	ぬく	1311	j.V2 補助動詞	拘束意味
走り抜ける	はしりぬける	はしる	ぬける	1891	j.V2 補助動詞	
走り回る	はしりまわる	はしる	まわる	2102	d2.共通目的様態	
走り寄る	はしりよる	はしる	よる	1411	d2.共通目的様態	
外れ落ちる	はずれおちる	はずれる	おちる	159	a.原因—結果	
馳せ参じる	はせさんじる	はせる	さんじる	277	a.原因—結果	
はたき落とす	はたきおとす	はたく	おとす	376	b.手段—目的	
はたき込む	はたきこむ	はたく	こむ	107	b.手段—目的	拘束形態素
働きかける	はたらきかける	はたらく	かける	1778	j.V2 補助動詞	
話しかける	はなしかける	はなす	かける	8884	j.V2 補助動詞	
話し込む	はなしこむ	はなす	こむ	1386	j.V2 補助動詞	拘束形態素
放ち出す	はなちだす	はなつ	だす	147	b.手段—目的	
離れ行く	はなれいく	はなれる	いく	341	a.原因—結果	
離れ落ちる	はなれおちる	はなれる	おちる	178	a.原因—結果	
離れ去る	はなれさる	はなれる	さる	275	a.原因—結果	
跳ね上がる	はねあがる	はねる	あがる	1724	a.原因—結果	
跳ね上げる	はねあげる	はねる	あげる	2040	b.手段—目的	主語不一致
跳ね起きる	はねおきる	はねる	おきる	815	a.原因—結果	
跳ね踊る	はねおどる	はねる	おどる	134	e1.共通原因事象	
跳ね返す	はねかえす	はねる	かえす	2228	b.手段—目的	
跳ね返る	はねかえる	はねる	かえる	1681	a.原因—結果	
跳ね出す	はねだす	はねる	だす	226	b.手段—目的	
撥ね付ける	はねつける	はねる	つける	381	b.手段—目的	
跳ね飛ばす	はねとばす	はねる	とばす	1365	b.手段—目的	
跳ね飛ぶ	はねとぶ	はねる	とぶ	253	a.原因—結果	
はねのける	はねのける	はねる	のける	1325	b.手段—目的	
跳ね回る	はねまわる	はねる	まわる	1374	d1.共通原因様態	
はまり込む	はまりこむ	はまる	こむ	1464	a.原因—結果	拘束形態素
はみ出す	はみだす	はむ	だす	2087	a.原因—結果	拘束意味, 拘束形態素

はみ出る	はみでる	はむ	でる	1856	a.原因—結果	拘束形態素
はめ込む	はめこむ	はめる	こむ	2107	b.手段—目的	拘束形態素
はめ殺す	はめころす	はめる	ころす	73	b.手段—目的	
はやし立てる	はやしたてる	はやす	たてる	1272	b.手段—目的	拘束形態素
払い上げる	はらいあげる	はらう	あげる	206	b.手段—目的	
払い打つ	はらいうつ	はらう	うつ	351	b.手段—目的	
払い落とす	はらいおとす	はらう	おとす	1546	b.手段—目的	
祓い清める	はらいきよめる	はらう	きよめる	1296	b.手段—目的	
払い込む	はらいこむ	はらう	こむ	2208	b.手段—目的	拘束形態素
払い下げる	はらいさげる	はらう	さげる	1051	b.手段—目的	
払い渋る	はらいしぶる	はらう	しぶる	246	h. 事象対象	
払い出す	はらいだす	はらう	だす	2538	b.手段—目的	
払いのける	はらいのける	はらう	のける	1306	b.手段—目的	
払い戻す	はらいもどす	はらう	もどす	1983	b.手段—目的	
払い渡す	はらいわたす	はらう	わたす	336	b.手段—目的	
張り上げる	はりあげる	はる	あげる	1830	b.手段—目的	
貼り合わす	はりあわす	はる	あわす	155	b.手段—目的	
貼り合わせる	はりあわせる	はる	あわせる	2276	b.手段—目的	
貼り返す	はりかえす	はる	かえす	126	j.V2 補助動詞	
張り替える	はりかえる	はる	かえる	5793	b.手段—目的	
貼り重ねる	はりかさねる	はる	かさねる	303	b.手段—目的	
張り切る	はりきる	はる	きる	1731	k.一語	非合成的
貼り込む	はりこむ	はる	こむ	2321	b.手段—目的	拘束形態素
張り込む	はりこむ	はる	こむ	1761	j.V2 補助動詞	拘束形態素
張り裂ける	はりさける	はる	さける	1004	a.原因—結果	
張り倒す	はりたおす	はる	たおす	1138	b.手段—目的	
貼り足す	はりたす	はる	たす	125	b.手段—目的	
張り出す	はりだす	はる	だす	3282	b.手段—目的	
貼り付く	はりつく	はる	つく	1620	a.原因—結果	主語不一致
張り付く	はりつく	はる	つく	2553	a.原因—結果	主語不一致
張り付ける	はりつける	はる	つける	1822	b.手段—目的	
張り詰める	はりつめる	はる	つめる	1578	b.手段—目的	

張り飛ばす	はり飛ばす	はる	とばす	327	b.手段-目的	
張り回す	はりまわす	はる	まわす	82	b.手段-目的	
張り巡らす	はりめぐらす	はる	めぐらす	1417	b.手段-目的	拘束形態素
張り巡らせる	はりめぐらせる	はる	めぐらせる	1498	b.手段-目的	
貼り分ける	はりわける	はる	わける	287	b.手段-目的	
張り渡す	はりわたす	はる	わたす	348	b.手段-目的	
晴れ上がる	はれあがる	はれる	あがる	638	j.V2 補助動詞	拘束意味
腫れ上がる	はれあがる	はれる	あがる	1379	a.原因-結果	
晴れ渡る	はれわたる	はれる	わたる	1350	j.V2 補助動詞	
干上がる	ひあがる	ひる	あがる	1304	a.原因-結果	拘束形態素
冷え固まる	ひえかたまる	ひえる	かたまる	333	a.原因-結果	
冷え込む	ひえこむ	ひえる	こむ	2153	j.V2 補助動詞	拘束形態素
光り輝く	ひかりかがやく	ひかる	かがやく	1624	e1.共通原因事象	
引き上がる	ひきあがる	ひく	あがる	1000	a.原因-結果	主語不一致
弾き上げる	ひきあげる	ひく	あげる	143	b.手段-目的	
引き上げる	ひきあげる	ひく	あげる	3557	b.手段-目的	
引き当てる	ひきあてる	ひく	あてる	2150	b.手段-目的	
引き合わす	ひきあわす	ひく	あわす	130	b.手段-目的	
引き合わせる	ひきあわせる	ひく	あわせる	1515	b.手段-目的	非合成的
引き入れる	ひきいれる	ひく	いれる	1589	b.手段-目的	
引き受ける	ひきうける	ひく	うける	2754	b.手段-目的	
引き写す	ひきうつす	ひく	うつす	313	b.手段-目的	
引き起こす	ひきおこす	ひく	おこす	2860	b.手段-目的	非合成的
引き起こる	ひきおこる	ひく	おこる	807	a.原因-結果	主語不一致
引き落とす	ひきおとす	ひく	おとす	1811	b.手段-目的	
引き下ろす	ひきおろす	ひく	おろす	1924	b.手段-目的	
引き返す	ひきかえす	ひく	かえす	1735	i.V1 接頭辞化	
引き換える	ひきかえる	ひく	かえる	1721	b.手段-目的	
弾き語る	ひきがたる	ひく	かたる	1360	e2.共通目的事象	
引き切る	ひききる	ひく	きる	532	b.手段-目的	
引き比べる	ひきくらべる	ひく	くらべる	310	b.手段-目的	
弾き比べる	ひきくらべる	ひく	くらべる	889	b.手段-目的	

弾きこなす	ひきこなす	ひく	こなす	1512	j.V2 補助動詞	
引き込む	ひきこむ	ひく	こむ	2209	b.手段-目的	拘束形態素
弾き込む	ひきこむ	ひく	こむ	1590	j.V2 補助動詞	拘束形態素
引き込める	ひきこめる	ひく	こめる	1524	b.手段-目的	
引きこもる	ひきこもる	ひく	こもる	2649	a.原因-結果	
ひき殺す	ひきころす	ひく	ころす	1624	b.手段-目的	
引き下がる	ひきさがる	ひく	さがる	1215	a.原因-結果	
引き裂く	ひきさく	ひく	さく	1649	b.手段-目的	
引き下げる	ひきさげる	ひく	さげる	2404	b.手段-目的	
引き去る	ひきさる	ひく	さる	362	b.手段-目的	
引き絞る	ひきしぼる	ひく	しぼる	1583	b.手段-目的	
引き締まる	ひきしまる	ひく	しまる	995	a.原因-結果	主語不一致
引きしめる	ひきしめる	ひく	しめる	1103	b.手段-目的	
引き退く	ひきしりぞく	ひく	しりぞく	132	a.原因-結果	
引き据える	ひきすえる	ひく	すえる	68	b.手段-目的	
引きずり上げる	ひきずりあげる	ひきずる	あげる	1067	b.手段-目的	
引きずり落とす	ひきずりおとす	ひきずる	おとす	912	b.手段-目的	
引きずり降ろす	ひきずりおろす	ひきずる	おろす	1001	b.手段-目的	
引きずり込む	ひきずりこむ	ひきずる	こむ	1573	b.手段-目的	拘束形態素
引きずり出す	ひきずりだす	ひきずる	だす	1394	b.手段-目的	
引きずり回す	ひきずりまわす	ひきずる	まわす	810	b.手段-目的	
引きずり戻す	ひきずりもどす	ひきずる	もどす	138	b.手段-目的	
引きずる	ひきずる	ひく	ずる	2183	k.一語	非分析的
引き倒す	ひきたおす	ひく	たおす	1281	b.手段-目的	
引き出す	ひきだす	ひく	だす	2868	b.手段-目的	非合成的
引き立つ	ひきたつ	ひく	たつ	1616	a.原因-結果	主語不一致
引き立てる	ひきたてる	ひく	たてる	1781	b.手段-目的	非合成的
引きちぎる	ひきちぎる	ひく	ちぎる	1349	b.手段-目的	
引きちぎれる	ひきちぎれる	ひく	ちぎれる	1317	a.原因-結果	主語不一致

引き継ぐ	ひきつぐ	ひく	つぐ	3023	b.手段一目的	
引きつける	ひきつける	ひく	つける	1905	b.手段一目的	
引き続く	ひきつづく	ひく	つづく	2553	i.VI 接頭辞化	特殊形態
引き詰める	ひきつめる	ひく	つめる	289	b.手段一目的	
引きつる	ひきつる	ひく	つる	1464	a.原因一結果	
引き連れる	ひきつれる	ひく	つれる	1622	d2.共通目的様態	特殊形態, 拘束形態素
引き出る	ひきでる	ひく	でる	100	a.原因一結果	
引きとどめる	ひきとどめる	ひく	とどめる	284	b.手段一目的	
引き留める	ひきとめる	ひく	とめる	1490	b.手段一目的	
引き取る	ひきとる	ひく	とる	3540	b.手段一目的	非合成的
弾き鳴らす	ひきならず	ひく	ならず	136	b.手段一目的	
引き抜く	ひきぬく	ひく	ぬく	2358	b.手段一目的	
引き延ばす	ひきのばす	ひく	のばす	1513	b.手段一目的	
引き入る	ひきはいる	ひく	はいる	207	b.手段一目的	
引き剥がす	ひきはがす	ひく	はがす	1767	b.手段一目的	
引き剥ぐ	ひきはぐ	ひく	はぐ	93	b.手段一目的	
引き外す	ひきははずす	ひく	はずす	583	b.手段一目的	
引き離す	ひきはなす	ひく	はなす	1782	b.手段一目的	
引き払う	ひきはらう	ひく	はらう	1659	k.一語	
引き回す	ひきまわす	ひく	まわす	1680	b.手段一目的	
引きむしる	ひきむしる	ひく	むしる	110	b.手段一目的	
引き結ぶ	ひきむすぶ	ひく	むすぶ	353	b.手段一目的	
引き戻す	ひきもどす	ひく	もどす	1582	b.手段一目的	
引き破る	ひきやぶる	ひく	やぶる	323	b.手段一目的	
引き寄せる	ひきよせる	ひく	よせる	1971	b.手段一目的	
引き分ける	ひきわける	ひく	わける	1920	k.一語	非合成的
弾き分ける	ひきわける	ひく	わける	564	b.手段一目的	
引き渡す	ひきわたす	ひく	わたす	2303	b.手段一目的	非合成的
挽き割る	ひきわる	ひく	わる	200	b.手段一目的	
浸り込む	ひたりこむ	ひたる	こむ	258	a.原因一結果	拘束形態素
引っかかる	ひっかかる	ひく	かかる	2144	k.一語	非分析的, 拘束形態素
引っ掻き回す	ひっかきまわす	ひっかく	まわす	1417	b.手段一目的	

引っ掻く	ひっかく	ひく	かく	1552	b.手段一目的	拘束形態素
引っかける	ひっかける	ひく	かける	1757	k.一語	非分析的, 拘束形態素
引っ被る	ひっかぶる	ひく	かぶる	102	i.VI 接頭辞化	拘束形態素
ひっくり返す	ひっくりかえす		かえす	2252	k.一語	非分析的, 拘束形態素
ひっくり返る	ひっくりかえる		かえる	2119	k.一語	非分析的, 拘束形態素
ひっくるめる	ひっくるめる	ひく	くるめる	330	k.一語	非分析的, 拘束形態素
引っ越す	ひっこす	ひく	こす	5041	k.一語	非分析的, 拘束形態素
引っこ抜く	ひっこぬく	ひく	ぬく	1699	b.手段一目的	拘束形態素
引っ込む	ひっこむ	ひく	こむ	1749	k.一語	拘束形態素
引っ込める	ひっこめる	ひく	こめる	1937	k.一語	拘束形態素
引っさげる	ひっさげる	ひく	さげる	262	k.一語	特殊形態, 拘束形態素
ひったくる	ひったくる	ひく	たくる	2063	k.一語	非分析的, 拘束形態素
ひつつく	ひつつく	ひく	つく	1243	k.一語	非分析的, 拘束形態素
ひっぱたく	ひっぱたく	ひく	はたく	1447	k.一語	非分析的, 拘束形態素
引っ張り上げる	ひっぱりあげる	ひっぱり	あげる	1291	b.手段一目的	
引っ張り下ろす	ひっぱりおろす	ひっぱり	おろす	236	b.手段一目的	
引っ張り込む	ひっぱりこむ	ひっぱり	こむ	1372	b.手段一目的	拘束形態素
引っ張り出す	ひっぱりだす	ひっぱり	だす	1576	b.手段一目的	
引っ張り回す	ひっぱりまわす	ひっぱり	まわす	487	b.手段一目的	
引っ張る	ひっぱり	ひく	はる	2534	k.一語	拘束形態素
ひねくり回す	ひねくりまわす	ひねくる	まわす	282	b.手段一目的	拘束形態素
ひねり入れる	ひねりいれる	ひねる	いれる	97	b.手段一目的	
ひねり上げる	ひねりくあげる	ひねる	あげる	662	b.手段一目的	
ひねり込む	ひねりこむ	ひねる	こむ	152	b.手段一目的	拘束形態素
ひねり殺す	ひねりころす	ひねる	ころす	167	b.手段一目的	
ひねり倒す	ひねりたおす	ひねる	たおす	201	b.手段一目的	
ひねり出す	ひねりだす	ひねる	だす	1488	b.手段一目的	
ひねり潰す	ひねりつぶす	ひねる	つぶす	935	b.手段一目的	
ひねり回す	ひねりまわす	ひねる	まわす	103	b.手段一目的	
ひねり戻す	ひねりもどす	ひねる	もどす	70	b.手段一目的	

響き渡る	ひびきわたる	ひびく	わたる	1847	j.V2 補助動詞	
冷やし固める	ひやしかためる	ひやす	かためる	1537	b.手段一目的	
開き直る	ひらきなおる	ひらく	なおる	1552	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束意味
ひれ伏す	ひれふす		ふす	1421	k.一語	非分析的, 拘束形態素
拾い上げる	ひろいあげる	ひろう	あげる	1794	b.手段一目的	
拾い集める	ひろいあつめる	ひろう	あつめる	1515	b.手段一目的	
拾い歩く	ひろいあるく	ひろう	あるく	133	d2.共通目的の形態	
拾い出す	ひろいだす	ひろう	だす	1567	b.手段一目的	
拾い読む	ひろいよむ	ひろう	よむ	144	b.手段一目的	
広がり行く	ひろがりいく	ひろがる	いく	160	j.V2 補助動詞	
封じ込む	ふうじこむ	ふうじる	こむ	924	b.手段一目的	拘束形態素
封じ込める	ふうじこめる	ふうじる	こめる	403	b.手段一目的	
深まり行く	ふかまりいく	ふかまる	いく	225	j.V2 補助動詞	
吹き上がる	ふきあがる	ふく	あがる	2827	a.原因一結果	主語不一致
吹き上げる	ふきあげる	ふく	あげる	2948	b.手段一目的	
吹き荒れる	ふきあれる	ふく	あれる	983	a.原因一結果	
吹き入る	ふきいる	ふく	いる	313	a.原因一結果	拘束形態素
吹き入れる	ふきいれる	ふく	いれる	455	b.手段一目的	
吹き起こす	ふきおこす	ふく	おこす	104	b.手段一目的	
吹き落とす	ふきおとす	ふく	おとす	113	b.手段一目的	
吹き降りる	ふきおりる	ふく	おりる	159	a.原因一結果	
吹き下ろす	ふきおろす	ふく	おろす	2297	b.手段一目的	
吹き返す	ふきかえす	ふく	かえす	1559	j.V2 補助動詞	
吹き替える	ふきかえる	ふく	かえる	2340	b.手段一目的	
吹きかかる	ふきかかる	ふく	かかる	518	j.V2 補助動詞	主語不一致
噴きかける	ふきかける	ふく	かける	341	b.手段一目的	
吹き掛ける	ふきかける	ふく	かける	1244	b.手段一目的	
吹き重ねる	ふきかさねる	ふく	かさねる	166	b.手段一目的	
拭き清める	ふききよめる	ふく	きよめる	243	b.手段一目的	
吹き比べる	ふきくらべる	ふく	くらべる	419	b.手段一目的	
吹き消す	ふきけす	ふく	けす	1713	b.手段一目的	
吹きこぼす	ふきこぼす	ふく	こぼす	276	b.手段一目的	

吹きこぼれる	ふきこぼれる	ふく	こぼれる	1709	a.原因—結果	
吹き込む	ふきこむ	ふく	こむ	2018	b.手段—目的	拘束形態素
拭き込む	ふきこむ	ふく	こむ	112	j.V2 補助動詞	拘束形態素
吹きさらす	ふきさらす	ふく	さらす	195	b.手段—目的	
吹きすさぶ	ふきすさぶ	ふく	すさぶ	1486	b.手段—目的	拘束形態素
吹き倒す	ふきたおす	ふく	たおす	97	b.手段—目的	
吹き出す	ふきだす	ふく	だす	3161	b.手段—目的	
吹き溜まる	ふきたまる	ふく	たまる	427	a.原因—結果	
吹き散らす	ふきちらす	ふく	ちらす	427	b.手段—目的	
吹き散る	ふきちる	ふく	ちる	101	a.原因—結果	主語不一致
吹き付ける	ふきつける	ふく	つける	1534	b.手段—目的	
吹き募る	ふきつゐる	ふく	つゐる	144	a.原因—結果	
吹き出る	ふきでる	ふく	でる	2931	a.原因—結果	
吹き通す	ふきとおす	ふく	とおす	259	b.手段—目的	
吹き飛ばす	ふきとばす	ふく	とばす	2353	b.手段—目的	
吹き飛ぶ	ふきとぶ	ふく	とぶ	1679	a.原因—結果	主語不一致
拭き取る	ふきとる	ふく	とる	2479	b.手段—目的	
吹き鳴らす	ふきならす	ふく	ならす	1391	b.手段—目的	
吹き抜ける	ふきぬける	ふく	ぬける	1502	a.原因—結果	
吹き放つ	ふきはなつ	ふく	はなつ	71	b.手段—目的	
吹き払う	ふきはらう	ふく	はらう	815	b.手段—目的	
吹き戻す	ふきもどす	ふく	もどす	237	b.手段—目的	
吹き止む	ふきやむ	ふく	やむ	94	j.V2 補助動詞	
吹き寄せる	ふきよせる	ふく	よせる	604	b.手段—目的	
吹き分ける	ふきわける	ふく	わける	362	b.手段—目的	
吹き渡る	ふきわたる	ふく	わたる	1460	j.V2 補助動詞	
含み込む	ふくみこむ	ふくむ	こむ	144	b.手段—目的	拘束形態素
含み笑う	ふくみわらう	ふくむ	わらう	95	g.比喩の様態	
膨れ上がる	ふくれあがる	ふくれる	あがる	1598	a.原因—結果	
老け込む	ふけこむ	ふける	こむ	1306	j.V2 補助動詞	拘束形態素
塞ぎ込む	ふさぎこむ	ふさぐ	こむ	552	j.V2 補助動詞	拘束形態素
伏し拝む	ふしおがむ	ふす	おがむ	161	e2.共通目的事象	

防ぎ止める	ふせぎとめる	ふせぐ	とめる	185	b.手段—目的	
伏せ込む	ふせこむ	ふせる	こむ	273	a.原因—結果	拘束形態素
ぶち上げる	ぶちあげる	ぶつ	あげる	1374	b.手段—目的	
ぶち当たる	ぶちあたる	うつ	あたる	1582	a.原因—結果	
ぶち壊す	ぶちこわす	うつ	こわす	1600	b.手段—目的	
ぶちまける	ぶちまける	うつ	まける	1539	b.手段—目的	非分析的, 拘束形態素
吹っかける	ふっかける	ふく	かける	1541	b.手段—目的	非合成的, 拘束形態素
吹っ切れる	ふっきれる	ふく	きる	1550	k.一語	非分析的, 拘束形態素
吹っ飛ば	ふっとぶ	ふく	とぶ	1712	a.原因—結果	拘束形態素
踏み上げる	ふみあげる	ふむ	あげる	222	k.一語	
踏み誤る	ふみあやまる	ふむ	あやまる	140	j.V2 補助動詞	
踏み荒らす	ふみあらす	ふむ	あらす	924	b.手段—目的	
踏み歩く	ふみあるく	ふむ	あるく	197	d2.共通目的様態	
踏み入る	ふみいる	ふむ	いる	1436	a.原因—結果	拘束形態素
踏み入れる	ふみいれる	ふむ	いれる	1719	b.手段—目的	
踏み下ろす	ふみおろす	ふむ	おろす	646	b.手段—目的	
踏み替える	ふみかえる	ふむ	かえる	901	b.手段—目的	
踏み固める	ふみかためる	ふむ	かためる	1024	b.手段—目的	
踏み切る	ふみきる	ふむ	きる	2554	j.V2 補助動詞	非合成的, 拘束意味
踏み砕く	ふみくだく	ふむ	くだく	373	b.手段—目的	
踏み消す	ふみけす	ふむ	けす	135	b.手段—目的	
踏み越える	ふみこえる	ふむ	こえる	1403	b.手段—目的	
踏みこたえる	ふみこたえる	ふむ	こたえる	125	b.手段—目的	
踏み込む	ふみこむ	ふむ	こむ	2262	a.原因—結果	拘束形態素
踏み込める	ふみこめる	ふむ	こめる	1464	a.原因—結果	
踏み殺す	ふみころす	ふむ	ころす	374	b.手段—目的	
踏み壊す	ふみこわす	ふむ	こわす	290	b.手段—目的	
踏みしめる	ふみしめる	ふむ	しめる	1888	b.手段—目的	
踏み倒す	ふみたおす	ふむ	たおす	1993	b.手段—目的	
踏み足す	ふみたす	ふむ	たす	166	b.手段—目的	
踏み出す	ふみだす	ふむ	だす	2282	b.手段—目的	
踏み違える	ふみちがえる	ふむ	ちがえる	130	j.V2 補助動詞	拘束形態素

踏み散らす	ふみちらす	ふむ	ちらす	202	b.手段—目的	
踏みつける	ふみつける	ふむ	つける	1779	b.手段—目的	
踏み潰す	ふみつぶす	ふむ	つぶす	1611	b.手段—目的	
踏み出る	ふみでる	ふむ	でる	127	a.原因—結果	
踏み止まる	ふみとどまる	ふむ	とどまる	885	a.原因—結果	
踏みとどめる	ふみとどめる	ふむ	とどめる	150	b.手段—目的	
踏みならす	ふみならす	ふむ	ならす	467	b.手段—目的	
踏み鳴らす	ふみならす	ふむ	ならす	1192	b.手段—目的	
踏み躪る	ふみにじる	ふむ	にじる	1195	k.一語	非分析的, 拘束形態素
踏み抜く	ふみぬく	ふむ	ぬく	1828	b.手段—目的	
踏み外す	ふみはずす	ふむ	はずす	1521	c.背景—具現	
踏み増す	ふみます	ふむ	ます	256	b.手段—目的	
踏み迷う	ふみまよう	ふむ	まよう	123	e1.共通原因事象	
踏み破る	ふみやぶる	ふむ	やぶる	115	b.手段—目的	
踏み分ける	ふみわける	ふむ	わける	309	b.手段—目的	
踏み割る	ふみわる	ふむ	わる	106	b.手段—目的	
振り仰ぐ	ふりあおぐ	ふる	あおぐ	711	i.V1 接頭辞化	
振り上げる	ふりあげる	ふる	あげる	1125	b.手段—目的	
振り当てる	ふりあてる	ふる	あてる	1056	b.手段—目的	非合成的
振り入れる	ふりいれる	ふる	いれる	997	b.手段—目的	
振り動かす	ふりうごかす	ふる	うごかす	382	b.手段—目的	
振り遅れる	ふりおくれる	ふる	おくれる	1428	h. 事象対象	
振り起こす	ふりおこす	ふる	おこす	78	b.手段—目的	
降り落ちる	ふりおちる	ふる	おちる	307	a.原因—結果	
振り落とす	ふりおとす	ふる	おとす	1310	b.手段—目的	
振り下ろす	ふりおろす	ふる	おろす	1841	b.手段—目的	
振り返す	ふりかえす	ふる	かえす	1459	j.V2 補助動詞	
ぶり返す	ぶりがえす		かえす	1342	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束形態素
振り替える	ふりかえる	ふる	かえる	1986	b.手段—目的	
振り返る	ふりかえる	ふる	かえる	3314	k.一語	
降りかかる	ふりかかる	ふる	かかる	1614	a.原因—結果	
振りかける	ふりかける	ふる	かける	1319	b.手段—目的	

振りかざす	ふりかざす	ふる	かざす	1289	b.手段—目的	
振りかぶる	ふりかぶる	ふる	かぶる	2139	b.手段—目的	
振り替わる	ふりかわる	ふる	かわる	142	a.原因—結果	
振り切る	ふりきる	ふる	きる	1779	j.V2 補助動詞	拘束意味
塗り消す	ふりけす	ぬる	けす	159	b.手段—目的	
降り込む	ふりこむ	ふる	こむ	1346	j.V2 補助動詞	拘束形態素
降り込む	ふりこむ	ふる	こむ	3384	b.手段—目的	非合成的, 拘束形態素
降りしきる	ふりしきる	ふる	しきる	1586	j.V2 補助動詞	拘束形態素
降り敷く	ふりしく	ふる	しく	200	a.原因—結果	
振り絞る	ふりしぼる	ふる	しぼる	1457	b.手段—目的	非合成的
振り捨てる	ふりすてる	ふる	すてる	292	b.手段—目的	
降り注ぐ	ふりそそぐ	ふる	そそぐ	1849	a.原因—結果	
振り出す	ふりだす	ふる	だす	2271	b.手段—目的	
振り立てる	ふりたてる	ふる	たてる	718	b.手段—目的	
振り付ける	ふりつける	ふる	つける	556	b.手段—目的	非合成的
降り積む	ふりつむ	ふる	つむ	1144	a.原因—結果	
降り積もる	ふりつもる	ふる	つもる	1587	a.原因—結果	
振り飛ばす	ふりとばす	ふる	とばす	703	b.手段—目的	
振り抜く	ふりぬく	ふる	ぬく	2364	j.V2 補助動詞	拘束意味
振り放す	ふりはなす	ふる	はなす	130	b.手段—目的	
振り払う	ふりはらう	ふる	はらう	1052	b.手段—目的	
振りほどく	ふりほどく	ふる	ほどく	1431	b.手段—目的	
振りまく	ふりまく	ふる	まく	1403	b.手段—目的	
振り混ぜる	ふりまぜる	ふる	まぜる	1824	b.手段—目的	
振り回す	ふりまわす	ふる	まわす	1975	b.手段—目的	
振り乱す	ふりみだす	ふる	みだす	1523	b.手段—目的	
振り向く	ふりむく	ふる	むく	2086	a.原因—結果	
振り向ける	ふりむける	ふる	むける	1477	b.手段—目的	
降り止む	ふりやむ	ふる	やむ	696	j.V2 補助動詞	
振り分ける	ふりわける	ふる	わける	1334	b.手段—目的	
振るい入れる	ふるいいれる	ふるう	いれる	168	b.手段—目的	
奮い起こす	ふるいおこす	ふるう	おこす	745	b.手段—目的	

振るい落とす	ふるいおとす	ふるう	おとす	432	b.手段一目的	
ふるいかける	ふるいかける	ふるう	かける	165	b.手段一目的	
奮い立つ	ふるいたつ	ふるう	たつ	1109	a.原因一結果	
篩い分ける	ふるいわける	ふるう	わける	537	b.手段一目的	
震え上がる	ふるえあがる	ふるえる	あがる	1087	j.V2 補助動詞	拘束意味
震えおののく	ふるえおののく	ふるえる	おののく	96	e1.共通原因事象	
振る舞う	ふるまう	ふる	まう	1690	k.一語	非分析的, 拘束形態素
触れ歩く	ふれあるく	ふれる	あるく	114	d2.共通目的様態	
触れ込む	ふれこむ	ふれる	こむ	340	k.一語	拘束形態素
触れ親しむ	ふれしたしむ	ふれる	したしむ	144	b.手段一目的	
触れ回る	ふれまわる	ふれる	まわる	1184	d2.共通目的様態	非合成的
ふんぞり返る	ふんぞりかえる	ふんぞる	かえる	1167	j.V2 補助動詞	拘束意味, 拘束形態素
ふんだくる	ふんだくる	ふむ	たくる	353	k.一語	非分析的, 拘束形態素
踏んづける	ふんづける	ふむ	つける	1146	b.手段一目的	
踏ん張る	ふんばる	ふむ	はる	1826	k.一語	
へし折る	へしおる		おる	1928	b.手段一目的	非分析的, 拘束形態素
へたり込む	へたりこむ	へたる	こむ	1313	a.原因一結果	拘束形態素
へばりつく	へばりつく	へばる	つく	1515	a.原因一結果	拘束形態素
経巡る	へめぐる	へる	めぐる	672	k.一語	非分析的
減り行く	へりいく	へる	いく	158	j.V2 補助動詞	
葬り去る	ほうむりさる	ほうむる	さる	1388	b.手段一目的	拘束意味
放り上げる	ほうりあげる	ほうる	あげる	533	b.手段一目的	
放り落とす	ほうりおとす	ほうる	おとす	106	b.手段一目的	
放り込む	ほうりこむ	ほうる	こむ	1876	b.手段一目的	拘束形態素
放り捨てる	ほうりすてる	ほうる	すてる	507	b.手段一目的	
放り出す	ほうりだす	ほうる	だす	1327	b.手段一目的	
放り投げる	ほうりなげる	ほうる	なげる	1522	b.手段一目的	
吠え返す	ほえかえす	ほえる	かえす	103	j.V2 補助動詞	
吠えかかる	ほえかかる	ほえる	かかる	435	j.V2 補助動詞	
吠え立てる	ほえたてる	ほえる	たてる	571	b.手段一目的	
吠えつく	ほえつく	ほえる	つく	118	j.V2 補助動詞	
吠え止む	ほえやむ	ほえる	やむ	81	j.V2 補助動詞	

誇り高ぶる	ほこりたかぶる	ほこる	たかぶる	135	e1.共通原因事象	
ほじくり返す	ほじくりかえす	ほじくる	かえす	1333	j.V2 補助動詞	
ほじくり出す	ほじくりだす	ほじくる	だす	793	b.手段-目的	
ぼったくる	ぼったくる	ぼる	たくる	223	k.一語	非分析的, 拘束形態素
ほとぼしり出る	ほとぼしりです	ほとぼしる	です	651	a.原因-結果	
微笑み返す	ほほえみかえす	ほほえむ	かえす	1010	j.V2 補助動詞	
微笑みかける	ほほえみかける	ほほえむ	かける	1375	b.手段-目的	
褒め上げる	ほめあげる	ほめる	あげる	782	b.手段-目的	
褒め殺す	ほめころす	ほめる	ころす	732	b.手段-目的	
褒めそやす	ほめそやす	ほめる	そやす	1410	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束形態素
褒め称える	ほめたたえる	ほめる	たたえる	1513	b.手段-目的	
褒めちぎる	ほめちぎる	ほめる	ちぎる	1898	j.V2 補助動詞	拘束意味
彫り上がる	ほりあがる	ほる	あがる	90	a.原因-結果	主語不一致
彫り上げる	ほりあげる	ほる	あげる	620	b.手段-目的	拘束意味
掘り上げる	ほりあげる	ほる	あげる	1991	b.手段-目的	
掘り当てる	ほりあてる	ほる	あてる	1607	b.手段-目的	
彫り入れる	ほりいれる	ほる	いれる	127	b.手段-目的	
掘り起こす	ほりおこす	ほる	おこす	1774	b.手段-目的	
掘り返す	ほりかえす	ほる	かえす	1716	b.手段-目的	
掘り崩す	ほりくずす	ほる	くずす	522	b.手段-目的	
掘り込む	ほりこむ	ほる	こむ	1389	b.手段-目的	拘束形態素
彫り込む	ほりこむ	ほる	こむ	1845	b.手段-目的	拘束形態素
掘り下げる	ほりさげる	ほる	さげる	2070	b.手段-目的	
彫り進む	ほりすすむ	ほる	すすむ	92	b.手段-目的	
掘り進む	ほりすすむ	ほる	すすむ	1743	b.手段-目的	
彫り進める	ほりすすめる	ほる	すすめる	168	b.手段-目的	
掘り進める	ほりすすめる	ほる	すすめる	1438	b.手段-目的	
掘り倒す	ほりたおす	ほる	たおす	79	b.手段-目的	
彫り出す	ほりだす	ほる	だす	446	b.手段-目的	
掘り出す	ほりだす	ほる	だす	1960	b.手段-目的	
彫りつける	ほりつける	ほる	つける	118	b.手段-目的	

掘り取る	ほりとる	ほる	とる	782	b.手段-目的	
掘り抜く	ほりぬく	ほる	ぬく	215	b.手段-目的	
惚れ込む	ほれこむ	ほれる	こむ	1535	j.V2 補助動詞	拘束形態素
滅び逝く	ほろびいく	ほろぶ	いく	113	a.原因-結果	
滅び行く	ほろびいく	ほろぶ	いく	1204	j.V2 補助動詞	
滅び去る	ほろびさる	ほろぶ	さる	618	a.原因-結果	
舞い上がる	まいあがる	まう	あがる	1677	d1.共通原因様態	
舞い上げる	まいあげる	まう	あげる	1386	b.手段-目的	主語不一致
舞い納める	まいおさめる	まう	おさめる	189	b.手段-目的	
舞い落ちる	まいおちる	まう	おちる	1420	d1.共通原因様態	
舞い踊る	まいおどる	まう	おどる	1214	f.並列関係	
舞い降りる	まいおりる	まう	おりる	1474	g.比喩の様態	
舞い狂う	まいくるう	まう	くるう	182	g.比喩の様態	
舞い込む	まいこむ	まう	こむ	1622	d1.共通原因様態	拘束形態素
舞い立つ	まいたつ	まう	たつ	289	d1.共通原因様態	
舞い散る	まいちる	まう	ちる	1911	d1.共通原因様態	
舞い出る	まいでる	まう	でる	124	a.原因-結果	
舞い飛ぶ	まいとぶ	まう	とぶ	1077	d1.共通原因様態	
舞い上る	まいのぼる	まう	のぼる	278	d1.共通原因様態	
舞い戻る	まいもどる	まう	もどる	1275	g.比喩の様態	非分析的
曲がり落ちる	まがりおちる	まがる	おちる	171	d1.共通原因様態	
曲がりくねる	まがりくねる	まがる	くねる	678	a.原因-結果	
曲がり込む	まがりこむ	まがる	こむ	254	a.原因-結果	拘束形態素
まかり通る	まかりとおる	まかる	とおる	1660	k.一語	非分析的, 拘束形態素
巻き上がる	まきあがる	まく	あがる	1488	a.原因-結果	主語不一致
巻き揚げる	まきあげる	まく	あげる	74	b.手段-目的	
巻き上げる	まきあげる	まく	あげる	2002	b.手段-目的	
巻き起こす	まきおこす	まく	おこす	1712	b.手段-目的	
巻き起こる	まきおこる	まく	おこる	1568	a.原因-結果	主語不一致
巻き返す	まきかえす	まく	かえす	1103	j.V2 補助動詞	
巻き換える	まきかえる	まく	かえる	99	b.手段-目的	
巻き込む	まきこむ	まく	こむ	2747	b.手段-目的	拘束形態素

巻き締める	まきしめる	まく	しめる	273	b.手段—目的	
撒き散らす	まきちらす	まく	ちらす	1753	b.手段—目的	
巻きつく	まきつく	まく	つく	2213	a.原因—結果	主語不一致
巻きつける	まきつける	まく	つける	2193	b.手段—目的	
巻き留める	まきとめる	まく	とめる	109	b.手段—目的	
巻き取る	まきとる	まく	とる	2715	b.手段—目的	
巻き戻す	まきもどす	まく	もどす	1746	b.手段—目的	
巻き戻る	まきもどる	まく	もどる	1970	a.原因—結果	主語不一致
紛れ込む	まぎれこむ	まぎれる	こむ	1613	a.原因—結果	拘束形態素
捲くし立てる	まくしたてる		たてる	899	b.手段—目的	非分析的, 拘束形態素
まくり上げる	まくりあげる	まくる	あげる	931	b.手段—目的	
まくれ上がる	まくれあがる	まくれる	あがる	701	a.原因—結果	
負け越す	まけこす	まける	こす	2758	a.原因—結果	
負け込む	まけこむ	まける	こむ	166	j.V2 補助動詞	拘束形態素
曲げ込む	まげこむ	まげる	こむ	90	b.手段—目的	拘束形態素
曲げ伸ばす	まげのばす	まげる	のばす	172	b.手段—目的	
混ざり込む	まざりこむ	まざる	こむ	273	a.原因—結果	拘束形態素
増し加わる	ましくわわる	ます	くわわる	355	a.原因—結果	
混じり込む	まじりこむ	まじる	こむ	179	a.原因—結果	拘束形態素
混ぜ合わせる	まぜあわせる	まぜる	あわせる	160	a.原因—結果	主語不一致
混ぜ合わす	まぜあわす	まぜる	あわす	1207	b.手段—目的	
混ぜ合わせる	まぜあわせる	まぜる	あわせる	2386	b.手段—目的	
混ぜ入れる	まぜいれる	まぜる	いれる	689	b1.準備事象—目的	
混ぜ返す	まぜかえす	まぜる	かえす	1100	j.V2 補助動詞	
混ぜこねる	まぜこねる	まぜる	こねる	89	e2.共通目的事象	
混ぜ込む	まぜこむ	まぜる	こむ	2062	b.手段—目的	拘束形態素
待ち合わす	まちあわす	まつ	あわす	101	b.手段—目的	
待ち合わせる	まちあわせる	まつ	あわせる	1972	b.手段—目的	
待ち受ける	まちうける	まつ	うける	1682	b.手段—目的	
待ち構える	まちかまえる	まつ	かまえる	1601	b.手段—目的	
待ちくたびれ	まちくたびれる	まつ	くたびれる	458	a.原因—結果	

る						
待ち暮らす	まちくらす	まつ	くらす	57	e2.共通目的事象	
待ち焦がれる	まちこがれる	まつ	こがれる	1372	a.原因—結果	拘束形態素
待ち望む	まちのぞむ	まつ	のぞむ	1798	e1.共通原因事象	
待ち伏せる	まちふせる	まつ	ふせる	1197	e2.共通目的事象	
待ち設ける	まちもうける	まつ	もうける	69	b.手段—目的	
待ち侘びる	まちわびる	まつ	わびる	556	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束形態素
祭り上げる	まつりあげる	まつる	あげる	1173	b.手段—目的	
まつり付ける	まつりつける	まつる	つける	107	b.手段—目的	
まつわりつく	まつわりつく	まつわる	つく	1124	a.原因—結果	
まといつく	まといつく	まとう	つく	506	a.原因—結果	
まとめ上げる	まとめあげる	まとめる	あげる	1409	b.手段—目的	
まとめ読む	まとめよむ	まとめる	よむ	121	b1.準備事象—目的	
まとわりつく	まとわりつく	まとわる	つく	1729	a.原因—結果	拘束形態素
学び育つ	まなびそだつ	まなぶ	そだつ	313	a.原因—結果	
学び取る	まなびとる	まなぶ	とる	1453	b.手段—目的	
招き入れる	まねきいれる	まねく	いれる	1489	b.手段—目的	
招き込む	まねきこむ	まねく	こむ	102	b.手段—目的	拘束形態素
招き寄せる	まねきよせる	まねく	よせる	1189	b.手段—目的	
まぶしつける	まぶしつける	まぶす	つける	1342	b.手段—目的	
守り生かす	まもりいかす	まもる	いかす	498	b.手段—目的	
守り勝つ	まもりかつ	まもる	かつ	1101	b.手段—目的	
守り支える	まもりささえる	まもる	ささえる	259	b.手段—目的	
守り育てる	まもりそだてる	まもる	そだてる	1427	b.手段—目的	
守り継ぐ	まもりつぐ	まもる	つぐ	399	b.手段—目的	
守り伝える	まもりつたえる	まもる	つたえる	1047	b.手段—目的	
守り育む	まもりはぐくむ	まもる	はぐくむ	610	b.手段—目的	
守り導く	まもりみちびく	まもる	みちびく	197	b.手段—目的	
迷い苦しむ	まよいくるしむ	まよう	くるしむ	184	a.原因—結果	
迷い込む	まよいこむ	まよう	こむ	1795	a.原因—結果	拘束形態素
迷い出る	まよいでる	まよう	でる	184	a.原因—結果	

迷い悩む	まよいなやむ	まよう	なやむ	344	e1.共通原因事象	
丸め込む	まるめこむ	まるめる	こむ	1580	b1.準備事象—目的	拘束形態素
回し入れる	まわしいれる	まわす	いれる	1275	e2.共通目的事象	
回し込む	まわしこむ	まわす	こむ	398	b.手段—目的	拘束形態素
回し飲む	まわしのむ	まわす	のむ	85	e2.共通目的事象	
回り込む	まわりこむ	まわる	こむ	2000	a.原因—結果	拘束形態素
見合う	みあう	みる	あう	2023	k.一語	非合成的
見飽きる	みあきる	みる	あきる	1224	a.原因—結果	
見上げる	みあげる	みる	あげる	2740	j.V2 補助動詞	
見当たる	みあたる	みる	あたる	1846	b.手段—目的	
見誤る	みあやまる	みる	あやまる	1499	j.V2 補助動詞	
見合わす	みあわす	みる	あわす	444	b.手段—目的	
見合わせる	みあわせる	みる	あわせる	2235	k.一語	非分析的
見いだす	みいだす	みる	いだす	2010	b.手段—目的	
見入る	みいる	みる	いる	1515	j.V2 補助動詞	拘束形態素
見受ける	みうける	みる	うける	1281	k.一語	
見失う	みうしなう	みる	うしなう	1786	c.背景—具現	
見え透く	みえすく	みえる	すく	129	a.原因—結果	拘束形態素
見送る	みおくる	みる	おくる	2633	k.一語	
見落とす	みおとす	みる	おとす	1470	c.背景—具現	拘束意味
見下ろす	みおろす	みる	おろす	3175	j.V2 補助動詞	
見返す	みかえす	みる	かえす	1927	j.V2 補助動詞	
見返る	みかえる	みる	かえる	675	j.V2 補助動詞	
磨き上がる	みがきあがる	みがく	あがる	93	a.原因—結果	主語不一致
磨き上げる	みがきあげる	みがく	あげる	1554	b.手段—目的	拘束意味
磨き落とす	みがきおとす	みがく	おとす	216	b.手段—目的	
磨き込む	みがきこむ	みがく	こむ	633	j.V2 補助動詞	拘束形態素
磨き高める	みがきたかめる	みがく	たかめる	256	b.手段—目的	
磨き立てる	みがきたてる	みがく	たてる	51	b.手段—目的	
見限る	みかぎる	みる	かぎる	1510	b.手段—目的	非分析的
見かける	みかける	みる	かける	2544	j.V2 補助動詞	非合成的

見かねる	みかねる	みる	かねる	385	j.V2 補助動詞	拘束意味
見交わす	みかわす	みる	かわす	298	b.手段一目的	
見切る	みきる	みる	きる	2406	k.一語	非分析的
見極める	みきわめる	みる	きわめる	2097	b.手段一目的	
見下す	みくだす	みる	くだす	2758	b.手段一目的	
見くびる	みくびる	みる	くびる	1101	k.一語	非分析的, 拘束形態素
見比べる	みくらべる	みる	くらべる	1328	b.手段一目的	
見越す	みこす	みる	こす	1471	k.一語	
見込む	みこむ	みる	こむ	4682	k.一語	拘束形態素
見下げる	みさげる	みる	さげる	1245	b.手段一目的	
見定める	みさだめる	みる	さだめる	1504	b.手段一目的	
見知る	みしる	みる	しる	518	b.手段一目的	
見据える	みすえる	みる	すえる	1730	k.一語	
見透かす	みすかす	みる	すかす	1349	b.手段一目的	
見過ごす	みすごす	みる	すごす	1167	j.V2 補助動詞	
見捨てる	みすてる	みる	すてる	1821	c.背景一具現	
見澄ます	みすます	みる	すます	85	b.手段一目的	
見せかける	みせかける	みせる	かける	1941	k.一語	非分析的
見せつける	みせつける	みせる	つける	1954	b.手段一目的	
見せびらかす	みせびらかす	みせる		1367	k.一語	非分析的, 拘束形態素
見損なう	みそこなう	みる	そこなう	638	j.V2 補助動詞	
見初める	みそめる	みる	そめる	459	b.手段一目的	拘束形態素
見立てる	みたてる	みる	たてる	1826	k.一語	非分析的
乱れ打つ	みだれうつ	みだれる	うつ	529	g.比喩の様態	
乱れ狂う	みだれくるう	みだれる	くるう	573	g.比喩の様態	
乱れ咲く	みだれさく	みだれる	さく	724	g.比喩の様態	
乱れ散る	みだれちる	みだれる	ちる	157	d1.共通原因様態	
乱れ飛ぶ	みだれとぶ	みだれる	とぶ	1199	d1.共通原因様態	
乱れ舞う	みだれまう	みだれる	まう	345	g.比喩の様態	
満ちあふれる	みちあふれる	みちる	あふれる	1475	a.原因一結果	
見違える	みちがえる	みる	ちがえる	1320	c.背景一具現	拘束形態素
満ち足りる	みちたりる	みちる	たりる	1075	a.原因一結果	

導き入れる	みちびきいれる	みちびく	いれる	893	b.手段一目的	
導き出す	みちびきだす	みちびく	だす	1899	b.手段一目的	
満ち満ちる	みちみちる	みちる	みちる	276	f.並列関係	
見つかる	みつかる	みる	つかる	3888	k.一語	非分析的, 主語不一致, 拘束形態素
見繕う	みつくろう	みる	つくろう	1175	b.手段一目的	
見つけ出す	みつけだす	みつける	だす	1848	b.手段一目的	
みつける	みつける	みる	つける	4322	k.一語	非分析的
見つめる	みつめる	みる	つめる	2413	k.一語	非分析的
見積もる	みつもる	みる	つもる	2635	k.一語	非分析的
見通す	みとおす	みる	とおす	1891	b.手段一目的	
見答める	みとがめる	みる	とがめる	500	b.手段一目的	
見届ける	みとどける	みる	とどける	1668	b.手段一目的	
看取る	みとる	みる	とる	4609	b.手段一目的	
見とれる	みとれる	みる	とれる	1401	a.原因一結果	拘束形態素
見直す	みなおす	みる	なおす	3112	k.一語	
みなす	みなす	みる	なす	3272	k.一語	非分析的
見習う	みならう	みる	ならう	2332	b.手段一目的	
見慣れる	みなれる	みる	なれる	1195	a.原因一結果	
見抜く	みぬく	みる	ぬく	2387	b.手段一目的	
見逃す	みのがす	みる	のがす	1277	c.背景一具現	
見残す	みのこす	みる	のこす	107	c.背景一具現	
見計らう	みはからう	みる	はからう	1498	b.手段一目的	
見計る	みはかる	みる	はかる	111	b.手段一目的	
見果てる	みはてる	みる	はてる	68	j.V2 補助動詞	
見放す	みはなす	みる	はなす	1418	k.一語	
見晴らす	みはらす	みる	はらす	1350	b.手段一目的	
見張る	みはる	みる	はる	1738	b.手段一目的	
見開く	みひらく	みる	ひらく	4156	k.一語	
見惚れる	みほれる	みる	ほれる	1386	a.原因一結果	
見舞う	みまう	みる	まう	2776	k.一語	非分析的
見紛う	みまがう	みる	まがう	1482	j.V2 補助動詞	拘束形態素

見守る	みまもる	みる	まもる	2260	b.手段一目的	
見回す	みまわす	みる	まわす	2485	j.V2 補助動詞	
見回る	みまわる	みる	まわる	1641	d2.共通目的様態	
見向く	みむく	みる	むく	173	l.逆形成	
見破る	みやぶる	みる	やぶる	2139	b.手段一目的	
見やる	みやる	みる	やる	2308	k.一語	非分析的
見分ける	みわける	みる	わける	2502	b.手段一目的	
見渡す	みわたす	みる	わたす	1838	j.V2 補助動詞	
迎え入れる	むかえ入れる	むかえる	いれる	1517	b.手段一目的	
迎え撃つ	むかえうつ	むかえる	うつ	2351	b.手段一目的	
迎え取る	むかえとる	むかえる	とる	126	b.手段一目的	
向き合う	むきあう	むく	あう	2789	k.一語	非合成的, 拘束意味
向き直る	むきなおる	むく	なおる	2658	j.V2 補助動詞	拘束意味
貪り食う	むさぼりくう	むさぼる	くう	1192	f.並列関係	
貪り食らう	むさぼりくらう	むさぼる	くらう	175	f.並列関係	
貪りつく	むさぼりつく	むさぼる	つく	312	j.V2 補助動詞	
貪り取る	むさぼりとる	むさぼる	とる	103	b.手段一目的	
貪り読む	むさぼりよむ	むさぼる	よむ	133	g.比喩の様態	
蒸し上がる	むしあがる	むす	あがる	529	a.原因一結果	主語不一致
蒸し揚げる	むしあげる	むす	あげる	97	b.手段一目的	拘束意味
蒸し上げる	むしあげる	むす	あげる	1303	b.手段一目的	拘束意味
蒸し返す	むしかえす	むす	かえす	1410	j.V2 補助動詞	
蒸し殺す	むしころす	むす	ころす	184	b.手段一目的	
むしゃぶりつく	むしゃぶりつく		つく	870	a.原因一結果	非分析的, 拘束形態素
むしり取る	むしりとる	むしる	とる	1481	b.手段一目的	
結び合わす	むすびあわす	むすぶ	あわす	134	b.手段一目的	
結び合わせる	むすびあわせる	むすぶ	あわせる	909	b.手段一目的	
結びつく	むすびつく	むすぶ	つく	2404	a.原因一結果	主語不一致
結びつける	むすびつける	むすぶ	つける	2008	b.手段一目的	
むせ返る	むせかえる	むせる	かえる	1046	j.V2 補助動詞	拘束意味
むせ込む	むせこむ	むせる	こむ	90	j.V2 補助動詞	拘束形態素

むせび泣く	むせびなく	むせぶ	なく	1061	e1.共通原因事象	拘束形態素
群がり集まる	むらがりあつまる	むらがる	あつまる	96	a.原因—結果	
群がり咲く	むらがりさく	むらがる	さく	92	e1.共通原因事象	
群れ遊ぶ	むれあそぶ	むれる	あそぶ	322	e2.共通目的事象	
群れ集まる	むれあつまる	むれる	あつまる	136	a.原因—結果	
群れ泳ぐ	むれおよぐ	むれる	およぐ	261	d1.共通原因様態	
群れ咲く	むれさく	むれる	さく	437	e1.共通原因事象	
群れ立つ	むれだつ	むれる	たつ	212	d1.共通原因様態	
群れ集う	むれつどう	むれる	つどう	376	a.原因—結果	
群れ飛ぶ	むれとぶ	むれる	とぶ	784	d1.共通原因様態	
群れ成す	むれなす	むれる	なす	84	a.原因—結果	
滅入る	めいる		いる	1653	k.一語	非分析的, 拘束形態素
めかし込む	めかしこむ	めかす	こむ	145	j.V2 補助動詞	拘束形態素
巡り会う	めぐりあう	めぐる	あう	1470	a.原因—結果	
めくり上がる	めくりあがる	めくる	あがる	136	a.原因—結果	主語不一致
めくり上げる	めくりあげる	めくる	あげる	1055	b.手段—目的	
巡り歩く	めぐりあるく	めぐる	あるく	909	d2.共通目的様態	
めくり返す	めくりかえす	めくる	かえす	111	b.手段—目的	
巡り来る	めぐりくる	めぐる	くる	814	a.原因—結果	
巡り回る	めぐりまわる	めぐる	まわる	224	f.並列関係	
めくれ上がる	めくれあがる	めくれる	あがる	1265	a.原因—結果	
召し上がる	めしあがる	めす	あがる	1642	j.V2 補助動詞	拘束意味, 拘束形態素
召し上げる	めしあげる	めす	あげる	818	j.V2 補助動詞	拘束意味, 拘束形態素
召し抱える	めしかかえる	めす	かかえる	349	b.手段—目的	拘束形態素
召し出す	めしだす	めす	だす	193	b.手段—目的	拘束形態素
召し使う	めしつかう	めす	つかう	113	b.手段—目的	拘束形態素
召し捕る	めしとる	めす	とる	95	b.手段—目的	拘束形態素
召し取る	めしとる	めす	とる	202	b.手段—目的	拘束形態素
召し寄せる	めしよせる	めす	よせる	54	b.手段—目的	拘束形態素
めり込む	めりこむ		こむ	1779	a.原因—結果	非分析的, 拘束形態素
申し上げる	もうしあげる	もうす	あげる	5672	b.手段—目的	
申し合わせる	もうしあわせる	もうす	あわせる	588	b.手段—目的	

申し入れる	もうしいれる	もうす	いれる	1840	b.手段—目的	
申し受ける	もうしうける	もうす	うける	1701	a.原因—結果	
申し送る	もうしおくる	もうす	おくる	719	b.手段—目的	
申し越す	もうしこす	もうす	こす	63	b.手段—目的	
申し込む	もうしこむ	もうす	こむ	5039	b.手段—目的	非合成的, 拘束形態素
申し添える	もうしそえる	もうす	そえる	1204	b.手段—目的	
申し立てる	もうしたてる	もうす	たてる	1237	b.手段—目的	
申し付ける	もうしつける	もうす	つける	1056	b.手段—目的	
申し出る	もうしでる	もうす	でる	1523	b.手段—目的	
申し述べる	もうしのべる	もうす	のべる	1320	b.手段—目的	
申し渡す	もうしわたす	もうす	わたす	1089	b.手段—目的	
萌え上がる	もえあがる	もえる	あがる	330	a.原因—結果	
燃え上がる	もえあがる	もえる	あがる	1618	a.原因—結果	
燃え移る	もえうつる	もえる	うつる	1583	d1.共通原因様態	
燃え落ちる	もえおちる	もえる	おちる	429	a.原因—結果	
燃え狂う	もえくるう	もえる	くるう	99	g.比喩の様態	
萌え狂う	もえくるう	もえる	くるう	346	g.比喩の様態	
萌え転がる	もえころがる	もえる	ころがる	466	d1.共通原因様態	
萌え殺す	もえころす	もえる	ころす	981	b.手段—目的	主語不一致
燃え盛る	もえさかる	もえる	さかる	1571	a.原因—結果	拘束形態素
燃え死ぬ	もえしぬ	もえる	しぬ	94	a.原因—結果	
萌え死ぬ	もえしぬ	もえる	しぬ	363	a.原因—結果	
燃え進む	もえすすむ	もえる	すすむ	94	d1.共通原因様態	
萌えたぎる	もえたぎる	もえる	たぎる	300	a.原因—結果	
燃えたぎる	もえたぎる	もえる	たぎる	1204	a.原因—結果	
萌え出す	もえだす	もえる	だす	250	a.原因—結果	拘束意味
萌え立つ	もえたつ	もえる	たつ	219	a.原因—結果	
燃え立つ	もえたつ	もえる	たつ	1244	a.原因—結果	
萌え尽きる	もえつきる	もえる	つきる	228	a.原因—結果	
燃え尽きる	もえつきる	もえる	つきる	1600	a.原因—結果	
燃えつく	もえつく	もえる	つく	157	a.原因—結果	
萌え出る	もえでる	もえる	でる	598	a.原因—結果	

燃え残る	もえのこる	もえる	のこる	545	c.背景—具現	
萌え禿げる	もえはげる	もえる	はげる	187	a.原因—結果	
燃え広がる	もえひろがる	もえる	ひろがる	1352	e1.共通原因事象	
萌え悶える	もえもだえる	もえる	もだえる	91	e1.共通原因事象	
もがき苦しむ	もがきくるしむ	もがく	くるしむ	1211	e1.共通原因事象	
もぎ取る	もぎとる	もぐ	とる	1533	b.手段—目的	拘束形態素
潜り込む	もぐりこむ	もぐる	こむ	1686	a.原因—結果	拘束形態素
悶え喘ぐ	もだえあえぐ	もだえる	あえぐ	204	e1.共通原因事象	
悶え狂う	もだえくるう	もだえる	くるう	738	g.比喩の様態	
悶え苦しむ	もだえくるしむ	もだえる	くるしむ	1139	e1.共通原因事象	
悶え泣く	もだえなく	もだえる	なく	142	e1.共通原因事象	
持ち上がる	もちあがる	もつ	あがる	1803	a.原因—結果	非合成的, 主語不一致
持ち上げる	もちあげる	もつ	あげる	2800	b.手段—目的	
持ち歩く	もちあるく	もつ	あるく	2799	d2.共通目的の様態	
持ち合わせる	もちあわす	もつ	あわす	1036	j.V2 補助動詞	
持ち合わせる	もちあわせる	もつ	あわせる	1657	j.V2 補助動詞	
持ち替える	もちかえる	もつ	かえる	4378	b.手段—目的	
持ち帰る	もちかえる	もつ	かえる	2343	d2.共通目的の様態	
持ちかける	もちかける	もつ	かける	1841	j.V2 補助動詞	非合成的
持ち崩す	もちくずす	もつ	くずす	1047	k.一語	
持ち越す	もちこす	もつ	こす	1672	e1.共通原因事象	
持ちこたえる	もちこたえる	もつ	こたえる	1300	e1.共通原因事象	
持ち込む	もちこむ	もつ	こむ	3094	b.手段—目的	拘束形態素
持ち去る	もちさる	もつ	さる	1767	b.手段—目的	
持ち出す	もちだす	もつ	だす	2721	b.手段—目的	
持ち直す	もちなおす	もつ	なおす	1591	k.一語	
持ち運ぶ	もちはこぶ	もつ	はこぶ	1195	d2.共通目的の様態	
持ち回る	もちまわる	もつ	まわる	555	d2.共通目的の様態	
持ち寄る	もちよる	もつ	よる	1687	d2.共通目的の様態	非合成的
もつれ込む	もつれこむ	もつれる	こむ	51	a.原因—結果	拘束形態素
持て余す	もてあます	もつ	あます	1660	j.V2 補助動詞	拘束形態素
持てなす	もてなす	もてる	なす	130	k.一語	非分析的, 拘束形態素

持て囃す	もてはやす	もてる	はやす	1169	i.V1 接頭辞化	非分析的, 拘束形態素
戻し入れる	もどしいれる	もどす	いれる	956	b.手段-目的	
求め行く	もとめいく	もとめる	いく	241	j.V2 補助動詞	
揉み上げる	もみあげる	もむ	あげる	470	b.手段-目的	
揉み消す	もみけす	もむ	けす	1192	b.手段-目的	
揉み込む	もみこむ	もむ	こむ	1415	b.手段-目的	拘束形態素
揉み出す	もみだす	もむ	だす	458	b.手段-目的	
揉み潰す	もみつぶす	もむ	つぶす	169	b.手段-目的	
揉みほぐす	もみほぐす	もむ	ほぐす	1483	b.手段-目的	
揉み回す	もみまわす	もむ	まわす	170	b.手段-目的	
貰い受ける	もらいうける	もらう	うける	1337	b.手段-目的	
盛り上がる	もりあがる	もる	あがる	4118	a.原因-結果	主語不一致
盛り上げる	もりあげる	もる	あげる	2395	b.手段-目的	非合成的
盛り合わせる	もりあわせる	もる	あわせる	1219	b.手段-目的	
盛り返す	もりかえす	もる	かえす	1442	j.V2 補助動詞	非合成的
盛り込む	もりこむ	もる	こむ	3153	b.手段-目的	拘束形態素
盛り下がる	もりさがる	もる	さがる	1530	a.原因-結果	
盛り下げる	もりさげる	もる	さげる	1074	b.手段-目的	
守り立てる	もりたてる	もる	たてる	337	b.手段-目的	拘束形態素
盛り付ける	もりつける	もる	つける	1406	b.手段-目的	
漏れ落ちる	もれおちる	もれる	おちる	160	a.原因-結果	
漏れ聞く	もれきく	もれる	きく	888	a.原因-結果	主語不一致
漏れ聞こえる	もれきこえる	もれる	きこえる	1263	a.原因-結果	
漏れ込む	もれこむ	もれる	こむ	196	a.原因-結果	拘束形態素
漏れ出す	もれだす	もれる	だす	1686	a.原因-結果	拘束意味
漏れ伝わる	もれつたわる	もれる	つたわる	549	a.原因-結果	
漏れ出る	もれでる	もれる	でる	1638	a.原因-結果	
焼き上がる	やきあがる	やく	あがる	717	a.原因-結果	主語不一致
焼き上げる	やきあげる	やく	あげる	2065	b.手段-目的	拘束意味
焼き揚げる	やきあげる	やく	あげる	165	e2.共通目的事象	
焼き落とす	やきおとす	やく	おとす	121	b.手段-目的	
焼き固める	やきかためる	やく	かためる	1008	b.手段-目的	

焼き切る	やききる	やく	きる	1510	b.手段—目的	
焼き焦がす	やきこがす	やく	こがす	436	b.手段—目的	
焼き込む	やきこむ	やく	こむ	1627	b.手段—目的	拘束形態素
焼き殺す	やきころす	やく	ころす	1363	b.手段—目的	
焼き締まる	やしまる	やく	しまる	114	a.原因—結果	主語不一致
焼き締める	やしめる	やく	しめる	280	b.手段—目的	
焼き捨てる	やすてる	やく	すてる	642	b.手段—目的	
焼きつく	やきつく	やく	つく	1959	a.原因—結果	主語不一致
焼き付ける	やきつける	やく	つける	943	b.手段—目的	
焼き取る	やきとる	やく	とる	145	b.手段—目的	
焼きなます	やきなます	やく	なます	224	b.手段—目的	拘束形態素
焼き払う	やしはらう	やく	はらう	1552	b.手段—目的	
焼き滅ぼす	やしほろぼす	やく	ほろぼす	224	b.手段—目的	
焼き戻す	やきもどす	やく	もどす	558	b.手段—目的	
焼け落ちる	やけおちる	やける	おちる	1140	a.原因—結果	
焼け焦げる	やけこげる	やける	こげる	953	a.原因—結果	
焼け死ぬ	やしぬ	やける	しぬ	1263	a.原因—結果	
焼け爛れる	やけただれる	やける	ただれる	745	a.原因—結果	
焼けつく	やけつく	やける	つく	1220	a.原因—結果	
焼け残る	やけのこる	やける	のこる	304	c.背景—具現	
焼け太る	やけふとる	やける	ふとる	224	a.原因—結果	
養い育てる	やしないそだてる	やしなう	そだてる	559	e2.共通目的事象	
痩せ衰える	やせおとろえる	やせる	おとろえる	88	a.原因—結果	
痩せこける	やせこける	やせる	こける	129	a.原因—結果	
痩せ細る	やせほそる	やせる	ほそる	524	a.原因—結果	
やっつける	やっつける	やる	つける	2113	k.一語	非分析的
雇い入れる	やとい入れる	やとう	いれる	2097	b.手段—目的	
破り捨てる	やぶりすてる	やぶる	すてる	1352	b.手段—目的	
破り取る	やぶりとる	やぶる	とる	170	b.手段—目的	
敗れ去る	やぶれさる	やぶれる	さる	1336	a.原因—結果	
病みつく	やみつく	やむ	つく	215	k.一語	
やり上げる	やりあげる	やる	あげる	139	b.手段—目的	

やりおおせる	やりおおせる	やる	おおせる	114	j.V2 補助動詞	拘束形態素
やり返す	やりかえす	やる	かえす	1198	j.V2 補助動詞	
やりこなす	やりこなす	やる	こなす	487	j.V2 補助動詞	
やり込む	やりこむ	やる	こむ	1885	j.V2 補助動詞	拘束形態素
やり込める	やりこめる	やる	こめる	1834	k.一語	非分析的
やり過ごす	やりすごす	やる	すごす	1407	k.一語	非分析的
やりつける	やりつける	やる	つける	56	j.V2 補助動詞	
やり遂げる	やりとげる	やる	とげる	1639	b.手段—目的	
やり残す	やりのこす	やる	のこす	590	c.背景—具現	
結い上げる	ゆいあげる	ゆう	あげる	915	b.手段—目的	
行き止まる	ゆきどまる	いく	とまる	834	a.原因—結果	
揺さ振る	ゆさぶる		ふる	673	k.一語	拘束形態素
揺すぶる	ゆすぶる		ふる	1110	k.一語	拘束形態素
揺すり上げる	ゆすりあげる	ゆする	あげる	230	b.手段—目的	
譲り受ける	ゆずりうける	ゆずる	うける	2091	a.原因—結果	
揺すり起こす	ゆすりおこす	ゆする	おこす	296	b.手段—目的	
ゆすり取る	ゆすりとる	ゆする	とる	503	b.手段—目的	
譲り渡す	ゆずりわたす	ゆずる	わたす	1743	b.手段—目的	
茹で上がる	ゆであがる	ゆでる	あがる	1915	a.原因—結果	主語不一致
茹で上げる	ゆであげる	ゆでる	あげる	1465	b.手段—目的	拘束意味
茹でこぼす	ゆでこぼす	ゆでる	こぼす	982	b.手段—目的	
揺り動かす	ゆりうごかす	ゆる	うごかす	1356	b.手段—目的	拘束形態素
揺り起こす	ゆりおこす	ゆる	おこす	605	b.手段—目的	拘束形態素
揺れ動かす	ゆれうごかす	ゆれる	うごかす	347	b.手段—目的	主語不一致
揺れ動く	ゆれうごく	ゆれる	うごく	1588	a.原因—結果	
結わえ付ける	ゆわえつける	ゆわえる	つける	131	b.手段—目的	
酔いしれる	よいしれる	よう	しれる	1409	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束形態素
酔い潰す	よいつぶす	よう	つぶす	613	b.手段—目的	主語不一致
酔い潰れる	よいつぶれる	よう	つぶれる	579	a.原因—結果	
よこす	よこす		こす	1436	k.一語	非分析的, 拘束形態素
よじ登る	よじのぼる	よじる	のぼる	1669	b.手段—目的	
寄せ上げる	よせあげる	よせる	あげる	178	b.手段—目的	

寄せ集める	よせあつめる	よせる	あつめる	1249	b.手段一目的	
寄せかける	よせかける	よせる	かける	80	j.V2 補助動詞	
寄せ来る	よせくる	よせる	くる	988	j.V2 補助動詞	
寄せ付ける	よせつける	よせる	つける	1521	b.手段一目的	
酔っ払う	よっぱらう	よう	はらう	1245	k.一語	非分析的
呼び上げる	よびあげる	よぶ	あげる	310	j.V2 補助動詞	拘束意味
呼び集める	よびあつめる	よぶ	あつめる	1115	b.手段一目的	
呼び入れる	よびいれる	よぶ	いれる	570	b.手段一目的	
呼び起こす	よびおこす	よぶ	おこす	1503	b.手段一目的	
呼び返す	よびかえす	よぶ	かえす	425	j.V2 補助動詞	
呼びかける	よびかける	よぶ	かける	3246	j.V2 補助動詞	非合成的
呼び交わす	よびかわす	よぶ	かわす	165	b.手段一目的	
呼び込む	よびこむ	よぶ	こむ	2137	b.手段一目的	非合成的, 拘束形態素
呼び覚ます	よびさます	よぶ	さます	1444	b.手段一目的	
呼び慕う	よびしたう	よぶ	したう	452	b.手段一目的	
呼び捨てる	よびすてる	よぶ	すてる	813	l.逆形成	
呼び出す	よびだす	よぶ	だす	3218	b.手段一目的	
呼び立てる	よびたてる	よぶ	たてる	80	b.手段一目的	
呼びつける	よびつける	よぶ	つける	1557	b.手段一目的	
呼び止める	よびとめる	よぶ	とめる	1423	b.手段一目的	
呼び回る	よびまわる	よぶ	まわる	74	d2.共通目的様態	
呼び戻す	よびもどす	よぶ	もどす	1552	b.手段一目的	
呼び求める	よびもとめる	よぶ	もとめる	903	b.手段一目的	
呼び寄せる	よびよせる	よぶ	よせる	1886	b.手段一目的	
呼び分ける	よびわける	よぶ	わける	1120	b.手段一目的	
読み飽きる	よみあきる	よむ	あきる	96	a.原因一結果	
読み上げる	よみあげる	よむ	あげる	2634	j.V2 補助動詞	拘束意味
読み漁る	よみあさる	よむ	あさる	1608	b.手段一目的	
読み味わう	よみあじわう	よむ	あじわう	239	b.手段一目的	
読み誤る	よみあやまる	よむ	あやまる	390	j.V2 補助動詞	
読み合わせる	よみあわせる	よむ	あわせる	378	b.手段一目的	
読み落とす	よみおとす	よむ	おとす	271	c.背景一具現	拘束意味

読み替える	よみかえる	よむ	かえる	3156	b.手段—目的	
読み勝つ	よみかつ	よむ	かつ	246	b.手段—目的	
読み聞かせる	よみきかせる	よむ	きかせる	1962	b.手段—目的	
読み砕く	よみくだく	よむ	くだく	96	b.手段—目的	
読み下す	よみくだす	よむ	くだす	853	b.手段—目的	
読み比べる	よみくらべる	よむ	くらべる	1338	b.手段—目的	
読みこなす	よみこなす	よむ	こなす	1432	j.V2 補助動詞	
読み込む	よみこむ	よむ	こむ	4093	j.V2 補助動詞	拘束形態素
読みさす	よみさす	よむ	さす	91	h. 事象対象	拘束形態素
読み過ごす	よみすごす	よむ	すごす	346	j.V2 補助動詞	
読み進む	よみすすむ	よむ	すすむ	1552	j.V2 補助動詞	
読み進める	よみすすめる	よむ	すすめる	1611	b.手段—目的	
読み捨てる	よみすてる	よむ	すてる	428	c.背景—具現	
読み出す	よみだす	よむ	だす	2731	b.手段—目的	
読み違う	よみちがう	よむ	ちがう	129	j.V2 補助動詞	
読み違える	よみちがえる	よむ	ちがえる	1338	j.V2 補助動詞	拘束形態素
読み散らす	よみちらす	よむ	ちらす	110	j.V2 補助動詞	拘束意味
読み疲れる	よみつかれる	よむ	つかれる	111	a.原因—結果	
読み継ぐ	よみつぐ	よむ	つぐ	196	b.手段—目的	
読み説く	よみとく	よむ	とく	299	b.手段—目的	
読み解く	よみとく	よむ	とく	2192	b.手段—目的	
読み飛ばす	よみとばす	よむ	とばす	471	b.手段—目的	
読み取る	よみとる	よむ	とる	2413	b.手段—目的	
読み流す	よみながす	よむ	ながす	1279	g.比喩的様態	
読み逃す	よみのがす	よむ	のがす	213	c.背景—具現	
読みふける	よみふける	よむ	ふける	1418	j.V2 補助動詞	
読み破る	よみやぶる	よむ	やぶる	82	b.手段—目的	
読み分ける	よみわける	よむ	わける	371	b.手段—目的	
寄り集まる	よりあつまる	よる	あつまる	796	a.原因—結果	
寄りかかる	よしかかる	よる	かかる	1563	j.V2 補助動詞	
寄り切る	よききる	よる	きる	468	b.手段—目的	
寄り来る	よりくる	よる	くる	374	a.原因—結果	

寄りすぎる	よりすぎる	よる	すぎる	330	a.原因—結果	
寄り添う	よりそう	よる	そう	2132	a.原因—結果	
寄り倒す	よりたおす	よる	たおす	144	b.手段—目的	
選り出す	よりだす	よる	だす	148	b.手段—目的	拘束形態素
寄り付く	よりつく	よる	つく	2351	a.原因—結果	
寄り集う	よりつどう	よる	つどう	128	a.原因—結果	
選り抜く	よりぬく	よる	ぬく	252	b.手段—目的	拘束形態素
喜び勇む	よろこびいさむ	よろこぶ	いさむ	500	e1.共通原因事象	
喜び祝う	よろこびいわう	よろこぶ	いわう	392	e1.共通原因事象	
喜び楽しむ	よろこびたのしむ	よろこぶ	たのしむ	345	e1.共通原因事象	
分かち与える	わかちあたえる	わかち	あたえる	219	b.手段—目的	拘束形態素
分かち持つ	わかちもつ	わかち	もつ	265	b.手段—目的	拘束形態素
別れ行く	わかれいく	わかれる	いく	227	a.原因—結果	
湧き上がる	わきあがる	わく	あがる	3070	a.原因—結果	
沸き上げる	わきあげる	わく	あげる	526	b.手段—目的	主語不一致
沸き起こす	わきおこす	わく	おこす	120	b.手段—目的	主語不一致
湧き起こる	わきおこる	わく	おこる	3298	a.原因—結果	
沸き返る	わきかえる	わく	かえる	847	j.V2 補助動詞	拘束意味
沸き出す	わきだす	わく	だす	523	a.原因—結果	拘束意味
沸き立つ	わきたつ	わく	たつ	2809	a.原因—結果	
湧き出る	わきでる	わく	でる	2322	a.原因—結果	
分け与える	わけあたえる	わける	あたえる	1808	b.手段—目的	
分け入る	わけいる	わける	いる	1420	a.原因—結果	拘束形態素
分け隔てる	わけへだてる	わける	へだてる	738	b.手段—目的	
忘れ去る	わすれさる	わすれる	さる	1115	b.手段—目的	
渡り合う	わたりあう	わたる	あう	1513	k.一語	非合成的, 拘束意味
渡り歩く	わたりあるく	わたる	あるく	1599	d2.共通目的様態	
渡り行く	わたりいく	わたる	いく	179	j.V2 補助動詞	
渡り返す	わたりかえす	わたる	かえす	354	j.V2 補助動詞	
渡り来る	わたりくる	わたる	くる	167	a.原因—結果	
詫び入る	わびいる	わびる	いる	68	j.V2 補助動詞	拘束形態素
わめき叫ぶ	わめきさけぶ	わめく	さけぶ	93	e1.共通原因事象	

わめき立てる	わめきたてる	わめく	たてる	485	j.V2 補助動詞	
わめき散らす	わめきちらす	わめく	ちらす	1294	j.V2 補助動詞	拘束意味
笑い返す	わらいかえす	わらう	かえす	865	j.V2 補助動詞	
笑いかける	わらいかける	わらう	かける	1643	j.V2 補助動詞	
笑い崩れる	わらいくずれる	わらう	くずれる	821	a.原因—結果	
笑い狂う	わらいくるう	わらう	くるう	246	g.比喩の様態	
笑いこける	わらいこける	わらう	こける	155	k.一語	拘束形態素
笑い転げる	わらいころげる	わらう	ころげる	1172	e1.共通原因事象	
笑い殺す	わらいころす	わらう	ころす	799	b.手段—目的	主語不一致
笑い死ぬ	わらいしぬ	わらう	しぬ	920	a.原因—結果	
笑い飛ばす	わらいとばす	わらう	とばす	1327	b.手段—目的	
笑い悶える	わらいもだえる	わらう	もだえる	305	e1.共通原因事象	
割り当てる	わりあてる	わる	あてる	3884	b.手段—目的	
割り入る	わりいる	わる	いる	183	b.手段—目的	拘束形態素
割り入れる	わりいれる	わる	いれる	1138	b1.準備事象—目的	
割り返す	わりかえす	わる	かえす	210	b.手段—目的	
割り切る	わりきる	わる	きる	1645	j.V2 補助動詞	非分析的, 拘束意味
割り込む	わりこむ	わる	こむ	1588	a.原因—結果	非合成的, 拘束形態素
割り裂く	わりさく	わる	さく	160	b.手段—目的	
割り出す	わりだす	わる	だす	2042	b.手段—目的	非合成的
割り付ける	わりつける	わる	つける	2408	b1.準備事象—目的	
割り引く	わりびく	わる	ひく	1997	k.一語	非分析的
割り開く	わりひらく	わる	ひらく	631	b.手段—目的	
割り振る	わりふる	わる	ふる	2289	b.手段—目的	
割りほぐす	わりほぐす	わる	ほぐす	300	b.手段—目的	
割り戻す	わりもどす	わる	もどす	404	b.手段—目的	